

東 総 用 水

高部宮ノ前遺跡・今郡カチ内遺跡

小座ふちき遺跡・青馬前畑遺跡

1 9 8 4

水資源開発公団東総用水建設所

財団法人 千葉県文化財センター

東 総 用 水

高部宮ノ前遺跡・今郡カチ内遺跡

小座ふちき遺跡・青馬前畑遺跡

1 9 8 4

水資源開発公団東総用水建設所

財団法人 千葉県文化財センター

序 文

利根川下流域の台地は、自然条件に恵まれ、先土器時代から歴史時代に至る数多くの遺跡が存在することで知られております。

近年、社会・経済の進展にともない農業用水、生活用水の整備が必要となり、水資源開発公団は、東総用水を計画しました。

そこで千葉県教育委員会では、事業地内に所在する埋蔵文化財の取扱いについて、水資源開発公団をはじめ関係諸機関と協議を重ねた結果、事業の性格上、計画変更の困難性が認められるため、止むを得ず発掘調査による記録保存の措置を講ずることになりました。

発掘調査は、当時千葉県文化財センターが当たることとなり、千葉県教育委員会の指導のもとに関係諸機関と詳細な打合せを行い、昭和56年10月から昭和57年8月にかけて実施しました。

その結果、先土器時代、縄文時代の生活跡、弥生時代、古墳時代、歴史時代の集落跡が検出され、特に縄文時代早期、弥生時代から古墳時代においては、地域性のある土器など貴重な資料を得ることができました。今回、その成果を報告書として刊行する運びとなりました。

本書が学術資料としてはもとより、郷土を知る教育資料として、文化財保護普及のため広く活用されることを望んでやみません。

終りに、発掘調査から整理に至るまで多大な御協力、御支援をいただきました水資源開発公団、千葉県教育庁文化課、東庄町教育委員会をはじめ関係諸機関に感謝の意を表すとともに、酷暑、酷暑の中で調査に協力された調査補助員の皆様に心からお礼を申し上げます。

昭和59年12月

財団法人 千葉県文化財センター
理事長 今 井 正

例 言

1. 本書は、千葉県香取郡東庄町に所在する高部宮ノ前遺跡(349-001)、今郡カチ内遺跡(349-002)、小座ふちき遺跡(349-003)、青馬前畑遺跡(349-004)の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は、水資源開発公社の委託を受け、千葉県教育委員会の指導のもとに財団法人千葉県文化財センターが実施した。
3. 発掘調査は、昭和56年10月1日から昭和57年8月7日まで実施した。
4. 発掘調査および報告書作成作業の担当職員は、以下のとおりである。
 - (1) 発掘調査(昭和56年度)
調査部長 白石竹雄 部長補佐 天野努 班長 古内茂 調査研究員 小宮孟 田井知二
 - (2) 発掘調査および報告書作成(昭和57年度)
調査部長 白石竹雄 部長補佐 岡川宏道 班長 高橋賢一 調査研究員 小宮孟 田井知二(9月30日まで)
 - (3) 報告書作成(昭和58年度)
調査部長 白石竹雄 部長補佐 岡川宏道 班長 高橋賢一 主任調査研究員 小宮孟
5. 本書の執筆は、第1章第1節を除いて小宮孟が担当し、白石竹雄、岡川宏道の助言のもとに高橋賢一が加筆補正した。なお、今郡カチ内遺跡出土の先土器時代の石器実測とトレースおよびその記載については、調査研究員田村隆が分担し、それにかかわる資料の計測は、田村の教示を得て小宮が行なった。鉄製品と鉄滓、高部宮ノ前遺跡出土の金床石の実測は、調査研究員(当時)山口直樹が行ない、資料記載は山口の教示を得て小宮が行なった。また、石質鑑定については、調査研究員沢野弘から教示を得た。
6. 写真撮影は、現場を小宮孟、田井知二が担当し、整理に伴う遺物撮影は小宮が担当した。

凡 例

1. 本書における遺構番号のうち、括弧内に示したものは発掘調査現場で使用した遺構番号で、実測原図や出土遺物の注記等にはこの番号が付されている。
2. 本書の遺構実測図に使用した記号は右図に示すとおりであるが、右図以外のものは該当する挿図もしくは表中に説明した。
3. 壁高は、遺構確認面からの深さを計測し、壁下部の傾斜角は、床面に接する壁下部と床面とがつくる平均的な角度を図上延長して計測した。
4. 本書に掲載した土器実測図の縮尺は4分の1、拓影は原則として3分の1を用いて示した。

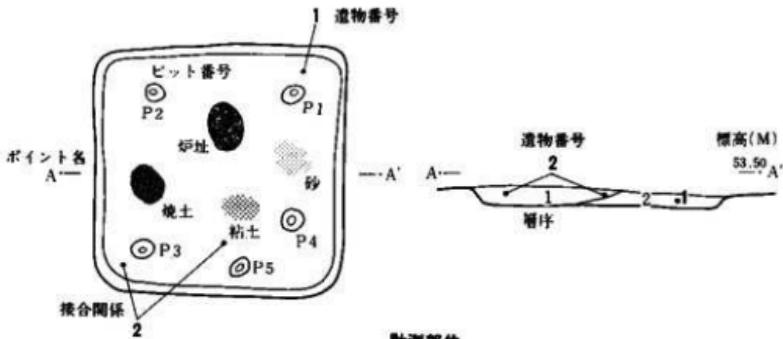
土製品、石器、鉄製品は3分の1もしくは2分の1の縮尺率を採用した。

5. 遺物の主な特徴や計測値等は、原則として観察表に一括して記載した。

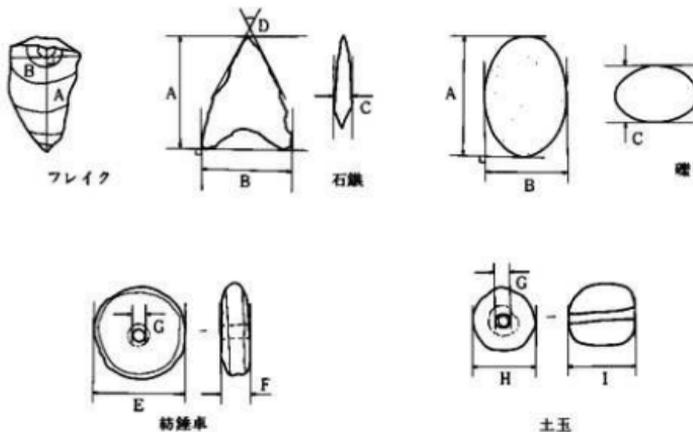
6. 出土資料の計測法は以下のとおりである。土器は、口径、器高、底径を計測したが、破損等によって計測が困難なものは、方眼紙上に器形を推定復原したのちに行なった。推定復原による計測値は括弧内に示した。土器容量の計量は、内のりに密着して垂直に重なる高さ1cmの円筒を想定し、方眼紙上に描いた実測図から得られるこれらの円筒の総体積を近似計算してその結果を示した。石器および礫、フリイク、土製品の計測は下図に示す部位について行なった。

7. 石器の計測と計量は、1/10mm副尺付きスモールノギス、タニタ製レタースケール皿皿秤、東亜計機製作所製皿天秤を用いて行なった。

挿図記号



計測部位



A: 最大長 B: 最大幅 C: 厚さ D: 先端角度 E: 直径 F: 厚さ G: 孔径 H: 横径 I: 縦径

本文目次

序文	
例言	
凡例	
第1章 調査の経緯と環境	1
第1節 発掘調査に至る経緯	1
第2節 遺跡とその環境	1
第2章 高部宮ノ前遺跡	5
第1節 遺跡の概要と調査方法	5
第2節 層序	9
第3節 遺構と遺物	9
1 竪穴住居跡	10
2 溝	107
3 土壇	117
第4節 包含層出土の遺物	119
1 石器	119
2 土器	120
3 土製品	127
4 その他	135
第5節 小結	136
第3章 今郡カチ内遺跡	138
第1節 遺跡の概要と調査方法	138
第2節 層序	138
第3節 遺構と遺物	140
1 竪穴住居跡	142
2 溝	143
3 土壇	149
第4節 包含層出土の遺物	153
1 先土器時代	153
2 縄文時代	169
3 歴史時代	193
第5節 小結	194

第4章 小座ふちき遺跡	196
第1節 遺跡の概要と調査方法	196
第2節 層序	198
第3節 遺構と遺物	198
1 竪穴住居跡	198
2 溝	220
3 土塚	233
第4節 包含層出土の遺物	234
1 石器	234
2 土器	234
第5節 小結	237
第5章 青馬前畑遺跡	238
第1節 遺跡の概要と調査方法	238
第2節 層序	241
第3節 遺構と遺物	241
1 竪穴住居跡	242
2 溝	254
3 土塚	269
第4節 包含層出土の遺物	275
第5節 小結	275
第6章 まとめ	277
第1節 高部宮ノ前遺跡の遺構について	277
第2節 高部宮ノ前遺跡の土器について	281
第3節 今郡カチ内遺跡出土の縄文土器について	287
第4節 小座ふちき遺跡および青馬前畑遺跡の遺構について	292
文献	299

挿 図 目 次

第1図 遺跡周辺図	2
——高部宮ノ前遺跡——	
第2図 高部宮ノ前遺跡周辺地形図	6

第 3 図	高部宮ノ前遺跡地形図	7
第 4 図	高部宮ノ前遺跡遺構分布図	9
第 5 図	1 (006)号跡実測図	10
第 6 図	1 (006)号跡出土遺物	11
第 7 図	2 (002)号跡実測図	15
第 8 図	2 (002)号跡出土遺物(1)	17
第 9 図	2 (002)号跡出土遺物(2)	18
第 10 図	2 (002)号跡出土遺物(3)	19
第 11 図	3 (004)号跡実測図	24
第 12 図	3 (004)号跡出土遺物	25
第 13 図	4 (007)号跡実測図	27
第 14 図	5 (009)号跡実測図(1)	29
第 15 図	5 (009)号跡実測図(2)	32
第 16 図	5 (009)号跡出土遺物(1)	33
第 17 図	5 (009)号跡出土遺物(2)	34
第 18 図	5 (009)号跡出土遺物(3)	35
第 19 図	5 (009)号跡出土遺物(4)	36
第 20 図	6 (010)号跡実測図	41
第 21 図	6 (010)号跡出土遺物(1)	43
第 22 図	6 (010)号跡出土遺物(2)	44
第 23 図	6 (010)号跡出土遺物(3)	45
第 24 図	7 (017)号跡実測図	50
第 25 図	8 (018)号跡実測図	53
第 26 図	8 (018)号跡出土遺物(1)	55
第 27 図	8 (018)号跡出土遺物(2)	57
第 28 図	9 (016)号跡実測図	60
第 29 図	9 (016)号跡出土遺物	61
第 30 図	10(031)号跡実測図	64
第 31 図	11(026)号跡実測図	65
第 32 図	11(026)号跡出土遺物	65
第 33 図	12(022)号跡実測図	67
第 34 図	12(022)号跡出土遺物	67
第 35 図	13(019)号跡実測図	68

第 36 図	13(019)号跡出土遺物	69
第 37 図	14(030)号跡実測図	71
第 38 図	15(020)号跡実測図	72
第 39 図	15(020)号跡出土遺物	73
第 40 図	16(014)号跡実測図	75
第 41 図	16(014)号跡出土遺物	75
第 42 図	17(023)号跡実測図	77
第 43 図	17(023)号跡出土遺物	78
第 44 図	18(021)号跡実測図	81
第 45 図	19(025)号跡実測図	83
第 46 図	19(025)号跡出土遺物(1)	84
第 47 図	19(025)号跡出土遺物(2)	85
第 48 図	20(024)号跡実測図	88
第 49 図	20(024)号跡出土遺物	89
第 50 図	21(027)号跡実測図	91
第 51 図	21(027)号跡出土遺物(1)	92
第 52 図	21(027)号跡出土遺物(2)	94
第 53 図	22(029)号跡実測図	95
第 54 図	22(029)号跡出土遺物	98
第 55 図	23(032)号跡実測図	101
第 56 図	24(028)号跡実測図	102
第 57 図	24(028)号跡出土遺物(1)	103
第 58 図	24(028)号跡出土遺物(2)	104
第 59 図	25(001), 26(003), 27(008)号跡実測図	108
第 60 図	26(003), 27(008)号跡出土遺物	109
第 61 図	28(011)号跡実測図	111
第 62 図	28(011)号跡出土遺物(1)	112
第 63 図	28(011)号跡出土遺物(2)	113
第 64 図	29(015)号跡実測図	116
第 65 図	29(015)号跡出土遺物	117
第 66 図	30(005), 31(013)号跡実測図	118
第 67 図	31(013)号跡出土遺物	118
第 68 図	グリット名称	120

第69図	包含層出土石器(1).....	121
第70図	包含層出土石器(2).....	122
第71図	縄文時代の土器.....	123
第72図	弥生時代の土器(1).....	124
第73図	弥生時代の土器(2).....	125
第74図	包含層出土遺物(1).....	128
第75図	包含層出土遺物(2).....	129
第76図	包含層出土遺物(3).....	134
第77図	包含層出土遺物(4).....	135
——今郡カチ内遺跡——		
第78図	今郡カチ内遺跡周辺地形図.....	139
第79図	今郡カチ内遺跡層序.....	140
第80図	今郡カチ内遺跡遺構分布およびグリッド名称.....	141
第81図	1(005)号跡実測図.....	142
第82図	2(004)号跡実測図.....	144
第83図	1(005), 2(004)号跡出土遺物.....	144
第84図	3(002)号跡実測図.....	145
第85図	4(001)号跡実測図.....	146
第86図	5(009)号跡実測図.....	147
第87図	6(010)号跡実測図.....	148
第88図	7(003), 10(007), 11(008), 8(006), 9(011)号跡実測図.....	150
第89図	先土器時代遺物出土分布図.....	155
第90図	石器実測図(1).....	158
第91図	石器実測図(2).....	160
第92図	石器実測図(3).....	162
第93図	縄文土器出土分布図.....	170
第98図	縄文土器第Ⅰ群第1類.....	172
第95図	縄文土器第Ⅰ群第2類, 第3類, 第4類.....	174
第96図	縄文土器第Ⅱ群第5類, 第6類, 第7類, 第8類, 第9類.....	178
第97図	縄文土器第Ⅱ群第1類.....	181
第98図	縄文土器第Ⅱ群第2類, 第3類.....	183
第99図	縄文土器第Ⅱ群第4類, 第5類, 第6類.....	185
第100図	縄文土器第Ⅲ群.....	187

第101図	縄文土器底部	189
第102図	包含層出土の石器および礫の平面分布(A)と縄文土器の平面分布(B)の比較	190
第103図	包含層出土の石器(1)	191
第104図	包含層出土の石器(2)	194
——小座ふちき遺跡——		
第105図	小座ふちき遺跡および青馬前畑遺跡周辺地形図	197
第106図	小座ふちき遺跡層序	198
第107図	小座ふちき遺跡遺構配置図	199
第108図	1(005)号跡実測図	201
第109図	1(005)号跡出土遺物	201
第110図	2(009), 3(004)号跡実測図	202
第111図	2(009)号跡出土遺物	203
第112図	3(004)号跡出土遺物	204
第113図	4(012B)号跡実測図	205
第114図	4(012B)号跡出土遺物	206
第115図	5(013A)号跡出土遺物	207
第116図	5(013A)号跡出土遺物	208
第117図	6(015)号跡実測図	209
第118図	7(016A)号跡実測図	210
第119図	7(016A)号跡出土遺物(1)	211
第120図	7(016A)号跡出土遺物(2)	212
第121図	8(017)号跡実測図	215
第122図	8(017)号跡出土遺物	215
第123図	9(019)号跡実測図	216
第124図	9(019)号跡出土遺物	217
第125図	10(020B), 11(020A)号跡実測図	219
第126図	10(020B), 11(020A)号跡出土遺物	219
第127図	12(003), 13(001), 14(008), 15(010)号跡実測図	221
第128図	15(010)号跡出土遺物	222
第129図	16(011)号跡実測図	223
第130図	16(011)号跡出土遺物	223
第131図	17(012A)号跡実測図(A), 遺物分布図(B)	224
第132図	17(012A)号跡出土遺物(1)	225

第133图	17(012A)号跡出土遺物(2)	225
第134图	17(012A)号跡出土遺物(3)	226
第135图	18(013B), 19(014), 20(016B)号跡実測図	231
第136图	21(018)号跡実測図	232
第137图	21(018)号跡出土遺物	232
第138图	22(002), 23(006)号跡実測図	234
第139图	包含層出土遺物(1)	235
第140图	包含層出土遺物(2)	236
——青馬前畑遺跡——		
第141图	青馬前畑遺跡遺構配置図	239
第142图	層序	241
第143图	1(001A)号跡実測図	242
第144图	1(001A)号跡出土遺物	242
第145图	2(002A), 3(002C)号跡実測図	244
第146图	2(002A)号跡出土遺物	244
第147图	4(012A)号跡実測図	246
第148图	4(012A)号跡出土遺物	247
第149图	5(011C)号跡実測図	248
第150图	5(011C)号跡出土遺物	249
第151图	6(023)号跡実測図	250
第152图	7(026)号跡実測図	251
第153图	7(026)号跡出土遺物(1)	252
第154图	7(026)号跡出土遺物(2)	253
第155图	8(001B), 9(002B), 10(004), 11(005), 12(006)号跡実測図	255
第156图	9(002B), 10(004), 12(006)号跡出土遺物	257
第157图	13(007), 14(008), 15(009), 16(012C), 17(012B), 18(013), 19(011A)号跡実測図	260
第158图	20(014), 21(015), 22(016A), 13(016B)号跡実測図	263
第159图	24(017)号跡実測図	264
第160图	25(019)号跡実測図	265
第161图	26(020)号跡実測図	266
第162图	26(020)号跡出土遺物	266
第163图	27(022), 28(025A), 29(025B)号跡実測図	267

第164図	30(027), 31(030), 32(031), 33(032B), 34(032A)号跡実測図	268
第165図	35(003), 36(010)号跡実測図	270
第166図	36(010)号跡出土遺物	270
第167図	37(011B), 38(018), 39(021)号跡実測図	272
第168図	40(024), 41(028), 42(029), 43(033)号跡実測図	274
第169図	包含層出土遺物	275
第170図	高部宮ノ前遺跡における住居跡の時期別分布	278
第171図	高部宮ノ前遺跡出土土器器種分類図	283
第172図	高部宮ノ前遺跡出土弥生土器縄文拓影図	285
第173図	今郡カチ内遺跡出土第I群第2類土器推定復原実測図	288

表 目 次

——高部宮ノ前遺跡——

第1表	1号跡出土遺物観察表	12
第2表	2号跡出土遺物観察表	20
第3表	3号跡出土遺物観察表	26
第4表	5号跡出土遺物観察表	37
第5表	6号跡出土遺物観察表	45
第6表	8号跡出土遺物観察表	58
第7表	9号跡出土遺物観察表(1)	62
第8表	9号跡出土遺物観察表(2)	63
第9表	9号跡出土遺物観察表(3)	63
第10表	11号跡出土遺物観察表	66
第11表	12号跡出土遺物観察表	67
第12表	13号跡出土遺物観察表	70
第13表	15号跡出土遺物観察表	73
第14表	16号跡出土遺物観察表	76
第15表	17号跡出土遺物観察表	80
第16表	19号跡出土遺物観察表	85
第17表	20号跡出土遺物観察表	89
第18表	21号跡出土遺物観察表	93

第 19 表	22号跡出土遺物観察表	99
第 20 表	24号跡出土遺物観察表	105
第 21 表	27号跡, 26号跡出土遺物観察表	109
第 22 表	28号跡出土遺物観察表	114
第 23 表	29号跡出土遺物観察表	117
第 24 表	31号跡出土遺物観察表	118
第 25 表	包含層出土石器観察表	122
第 26 表	弥生時代の土器観察表	125
第 27 表	包含層出土遺物観察表	129
第 28 表	包含層出土古銭観察表	136
——今郡カチ内遺跡——		
第 29 表	1号跡, 2号跡出土遺物観察表	144
第 30 表	先土器時代のフレイクおよび石器計測値一覧	164
第 31 表	先土器時代のフレイクおよび石器の石質別組成	168
第 32 表	包含層出土の石器観察表	191
第 33 表	縄文時代礫組成表	192
第 34 表	縄文時代礫最大長の計測値分布	193
第 35 表	縄文時代礫の重量分布	193
——小座ふちき遺跡——		
第 36 表	1号跡出土遺物観察表	201
第 37 表	2号跡出土遺物観察表	203
第 38 表	3号跡出土遺物観察表	204
第 39 表	4号跡出土遺物観察表	206
第 40 表	5号跡出土遺物観察表	208
第 41 表	7号跡出土遺物観察表	213
第 42 表	8号跡出土遺物観察表	215
第 43 表	9号跡出土遺物観察表	217
第 44 表	10号跡, 11号跡出土遺物観察表	220
第 45 表	15号跡出土遺物観察表	222
第 46 表	16号跡出土遺物観察表	223
第 47 表	17号跡出土遺物観察表	227
第 48 表	21号跡出土遺物観察表	232
第 49 表	包含層出土石鏃観察表	234

第50表	包含層出土遺物観察表	236
——青馬前畑遺跡——		
第51表	1号跡出土遺物観察表	243
第52表	2号跡出土遺物観察表	245
第53表	4号跡出土遺物観察表	247
第54表	5号跡出土遺物観察表	249
第55表	7号跡出土遺物観察表	252
第56表	7号跡出土遺物観察表	253
第57表	9号跡, 10号跡, 12号跡出土遺物観察表	258
第58表	26号跡出土遺物観察表	266
第59表	包含層出土遺物観察表	275
第60表	高部宮ノ前遺跡の住居跡主軸方向別一覧	279
第61表	高部宮ノ前遺跡出土土器の容積別個体分布	286
第62表	小座ふちき遺跡および青馬前畑遺跡の住居跡主軸方向別一覧	298

図版目次

——高部宮ノ前遺跡——

図版1	遺跡遠景／調査前近景	図版9	13(019)号跡／15(020)号跡遺物出土状態
図版2	2(002)号跡／2(002)号跡遺物出土状態	図版10	18(021)号跡／17(023)号跡
図版3	3(004)号跡／3(004)号跡遺物出土状態	図版11	20(024)号跡／19(025)号跡
図版4	1(006)号跡／4(007)号跡, 27(008)号跡	図版12	21(027)号跡／21(027)号跡遺物出土状態
図版5	5(009)号跡／5(009)号跡遺物出土状態	図版13	24(028)号跡／24(028)号跡遺物出土状態／24(028)号跡主柱穴
図版6	6(010)号跡／6(010)号跡かまど近景・6(010)号跡遺物出土状態	図版14	28(011)号跡(東から)／28(011)号跡(西端部付近)
図版7	16(014)号跡／9(016)号跡	図版15	25(001)号跡／26(003)号跡／31(013)号跡
図版8	8(018)号跡／8(018)号跡遺物出土状態	図版16	2(002)号跡出土土器
		図版17	3(004), 1(006)号跡出土土器

- 図版18 5 (009)号跡出土土器
- 図版19 6 (010)号跡出土土器
- 図版20 16(014), 9 (016), 8 (018)号跡出土土器
- 図版21 8 (018), 13(019)号跡出土土器
- 図版22 15(020), 12(022), 17(023)号跡出土土器
- 図版23 17(023), 20(024)号跡出土土器
- 図版24 19(025)号跡出土土器
- 図版25 19(025), 21(027)号跡出土土器
- 図版26 21(027), 24(028)号跡出土土器
- 図版27 22(029)号跡出土土器
- 図版28 28(011)号跡, 包含層出土土器(1)
- 図版29 包含層出土土器(2)
- 図版30 紡錘車, 帳底部/土玉
- 図版31 石器, 炉壁
- 図版32 石器, 鉄製品, 勾玉, 古銭
- 今郡カチ内遺跡——
- 図版33 遺跡遠景/土層断面
- 図版34 先土器時代石器出土状態
- 図版35 1 (005)号跡/1 (005)号跡遺物出土状態
- 図版36 2 (004)号跡/2 (004)号跡近景
- 図版37 5 (009), 6 (010)号跡/4 (001)号跡/5 (009)号跡
- 図版38 7 (003)号跡/10(007)号跡/9 (011)号跡/8 (006)号跡
- 図版39 先土器時代石器(1)
- 図版40 先土器時代石器(2)
- 図版41 先土器時代石器(3)
- 図版42 先土器時代石器(4)
- 図版43 先土器時代石器(5)
- 図版44 縄文時代土器(1)
- 図版45 縄文時代土器(2)
- 図版46 縄文時代土器(3)
- 図版47 縄文時代土器(4)
- 図版48 縄文時代土器(5)
- 図版49 縄文時代土器(6)
- 図版50 縄文時代土器(7)
- 図版51 縄文時代土器(8)
- 図版52 縄文時代礫/石鏃/1 (005)号跡出土土器/砥石/鉄滓
- 小座ふちき遺跡——
- 図版53 調査前近景/3 (004)号跡/3 (004)号跡断面土器出土状態
- 図版54 2 (009)号跡/2 (009)号跡遺物出土状態
- 図版55 4 (012B)号跡/4 (012B), 17(012A)号跡/17(012A)号跡遺物出土状態
- 図版56 5 (013A), 18(013B)号跡/5 (013A)号跡遺物出土状態/6 (015)号跡
- 図版57 7 (016A), 20(016B)号跡/7 (016A)号跡遺物出土状態/7 (016A)号跡かまど袖除去後の壁部/8 (017)号跡
- 図版58 9 (019)号跡/10(020B), 11(020A)号跡/11(020A)号跡P 3 検出状態, 完掘状態
- 図版59 12(003), 13(001)号跡/14(008)号跡/15(010)号跡/16(011)号跡/21(008)号跡
- 図版60 3 (004), 1 (005), 2 (009), 5 (013A)号跡出土遺物
- 図版61 7 (016A), 9 (019)号跡出土遺物
- 図版62 8 (017), 11(020A)号跡出土遺物,

- 包含層出土石鏃／包含層出土縄文土器
- 図版63 17(012A)号跡出土土器
- 青馬前畑遺跡——
- 図版64 調査前近景(道路部, 畑地部)
- 図版65 1(001A)号跡／2(002A)号跡遺物出土状態／5(011C)号跡
- 図版66 4(012A)号跡／同かまど袖除去後／6(023)号跡／7(026)号跡
- 図版67 8(001B)号跡／9(002B)号跡／10(004)号跡／10(004)号跡土器出土状態／11(005), 12(006)号跡／13(007)号跡
- 図版68 16(012C), 17(012B)号跡／20(014), 21(015)号跡／22(016A), 23(016B)号跡／24(017)号跡／28(025A)号跡／30(027)号跡
- 図版69 31(030)号跡／32(031), 42(029)号跡／33(032B), 34(032A)号跡／36(010)号跡／38(018)号跡／43(033)号跡
- 図版70 1(001A), 2(002A), 10(004), 36(010)号跡および包含層出土遺物
- 図版71 土器近接写真(高部宮ノ前遺跡, 小座ふちき遺跡, 青馬前畑遺跡出土土器)

第1章 調査の経緯と環境

第1節 発掘調査に至る経緯

東総用水事業は、千葉県東端に位置する東総台地に広がる、2市3町（銚子市・旭市・飯岡町・海上町・東庄町）の畑地帯及び水田地帯における農業経営の近代化を図るために計画された。2,804 haの農地に対し、畑地かんがい及び水田の用水補給を行うための農業用水と、2市4町（銚子市・旭市・飯岡町・海上町・東庄町・干潟町）の水道用水を併せて確保するため、利根川及び黒部川に水源を求めるものである。

小見川町一之分目地先に一之分目揚排水機場を設け、小堀川を改修（県営黒部川総合開発事業との共同事業）し、さらに開発される黒部川（県営単独事業）を、自然流下させ、東庄町笹川地先に取水口を設置。取水し、共同区間（農水上下）である東庄揚水機場まで導水するものであり、農業用水は、受益地である高台に揚水幹線水路、支線水路及びファームpond等を通して配水し、水道用水は、東庄揚水機場に隣接する浄水場（東総公域水道企業団事業）へ送水する基幹施設の建設を行うものである。

本事業は、昭和49年3月に基本計画の閣議決定がなされ、53年3月に実施計画が認可された。工事にあたっては、水資源開発公団が実施することとなり、60年完成を旨とすることとなった。

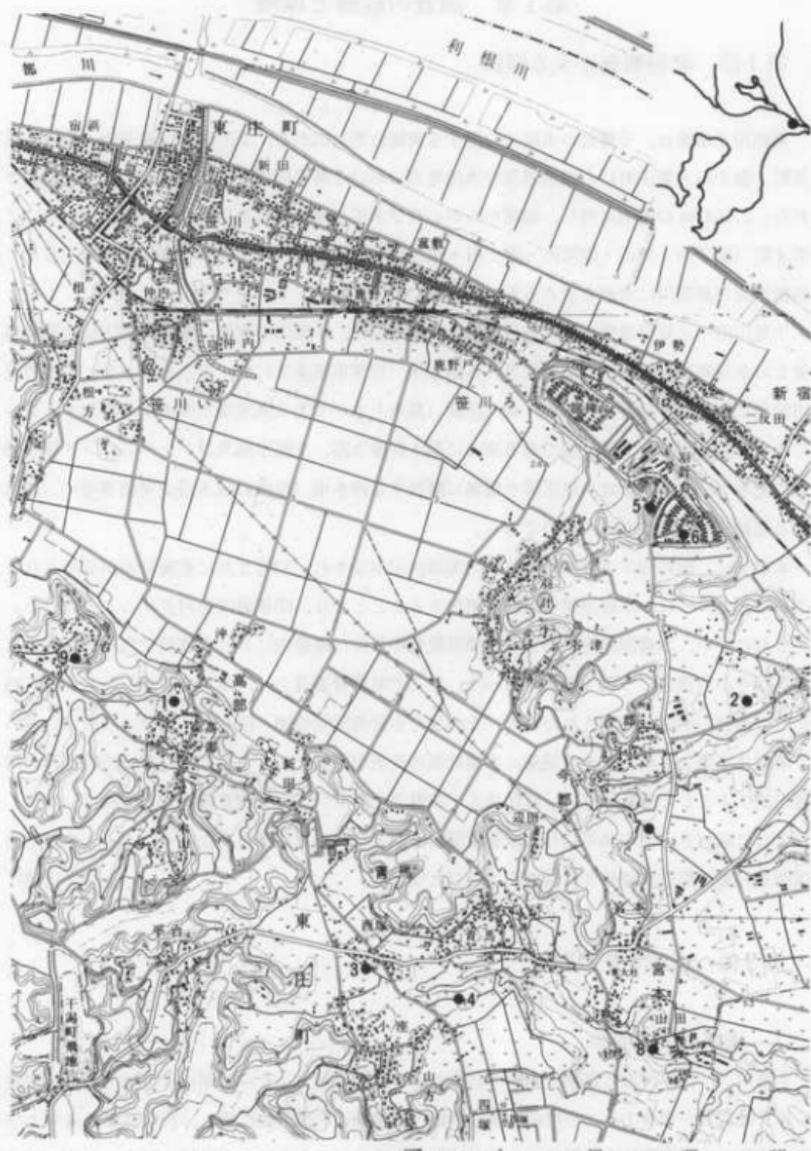
これに伴い、水資源開発公団より千葉県教育委員会へ路線内における埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについて照会があった。そこで県教育委員会は、現地を踏査したところ、19か所の遺跡の所在が確認されたため、その旨を水資源開発公団へ回答し、遺跡の取扱いについて慎重に協議を重ねた。その結果、事業計画の変更が困難ということでやむなく記録保存の措置を講ずることで協議が整い、財団法人千葉県文化財センターを調査機関として指定した。

これに基づき、昭和56年10月に水資源開発公団と財団法人千葉県文化財センターとの間で発掘調査の委託契約が締結され調査のはこびとなった。 (文化課)

第2節 遺跡とその環境

1 遺跡周辺の地形

千葉県は、茂原付近と富津市上総湊付近と結ぶ線を境として、その北側には台地地形が、南側には丘陵地形が発達する。台地の北側は利根川下流域の沖積低地に接し、西側は東京湾および東京低地、また東側は太平洋にそれぞれ接し、全体として大きな三角形形状を呈す。この台地は下総台地とよばれ、表層に関東ローム層をのせた平坦な地形になるが、中小の河川や湧水によって開析された谷が発達して台地上を樹枝状に刻み、その景観や植生等に变化を与えている。



- 1.高部宮ノ前遺跡 2.今部カキ内遺跡 3.小塚ふちき遺跡 4.青馬前畑遺跡 5.羽計婆聖古墳 6.羽計扶喰古墳 7.今部東ノ台遺跡 8.宮本別部遺跡 9.寺古墳

第1図 遺跡周辺図 (国土地理院 1:25,000 神栖, 小南を縮小合成)

今回調査を行なった高部宮ノ前遺跡、今郡カチ内遺跡、小座ふちき遺跡、青馬前畑遺跡は、千葉県香取郡東庄町に所在し、いずれもこの台地上に位置している。下総台地の中央部はふところの深い台地地形を呈するが、東進するにつれて南北間距離が漸減する傾向にある。その東端部にあたる東庄町では、下総台地は利根川方面から穹入する沖積低地と干潟町方面から穹入する沖積低地によって、その南北間距離が著しく狭められ、太平洋に長く突出する鏡子半島とは回應状につながる。

周辺の河川には、利根川、黒部川、阿玉川、桁沼川、小平川、新川などがあるが、このうち南流して太平洋に注ぐ新川とその支流を除くと、いずれも台地を北流もしくは東流して利根川に注ぐ。今回調査した4遺跡は、これらの河川の水源となる湧水の近くに立地する傾向がある。

ところで、利根川下流域の沖積低地は、ヴィルム氷期以降の海進によって海水におおわれたものと考えられており、現在は霞ヶ浦、与田浦などの海跡湖を残すが、縄文時代以降の古環境がどのような変遷をたどったかについてはいまのところまだ定説をみない(江坂 1954、和島ほか 1968、遠藤 1979、遠藤ほか 1983)。しかし、『常陸風土記』によると、利根川下流域の低地には砂州の発達した流海が存在していたことが記されている。縄文時代以降、この地域で著しい海退がみられた可能性はないので、『常陸風土記』の記載が事実だとすると、今回調査した4遺跡が形成された当時、利根川下流域の沖積低地一帯は少なくとも太平洋に開口する海湾の一部を形成していたものと考えられる。このような環境条件は、時代は異なるとしても4遺跡の形成と性格に何らかの影響を与えていたものと思われる。

2 周辺の遺跡

利根川下流域は、さまざまな研究者による発掘調査が比較的早くから着手された地域で、これまでに縄文時代以降の各時期に属する遺跡が数多く発見されている。

東庄町に存在する縄文時代の遺跡は、早期から後晩期に至る各時期が知られているが、そのほとんどは散布地を確認するにとどまっている。東庄町教育委員会が作成した縄文遺跡分布図(未発表)にもとづいて各時期別にその分布傾向をみると、早期の散布地は利根川に面した羽計地区に、また中期と後晩期は小見川町に隣接する小貝野地区にそれぞれ比較的高い分布をする。利根川下流域の早期遺跡としては、神崎町西之城貝塚(西村ほか 1955)、佐原市鴉崎貝塚(西村、金子 1960)、小見川町城之台貝塚(吉田 1955)、茨城県伏見遺跡(伏見遺跡調査団編 1979)などが知られている。ところで、東庄町に隣接して利根川に臨む小見川町と鏡子市には、木之内明神貝塚(西村 1969)、白井大宮台貝塚(西村 1954)、阿玉台貝塚(西村 1970)、良文貝塚(大山ほか 1929)、余山貝塚(酒詰 1963)、八祖遺跡(岡崎ほか 1978)など中期から後晩期の遺跡が分布し、大規模な貝塚をとまなうものが多い。東庄町の地理的な位置や地形等をみるかぎりでは、隣接するこれらの地域との間で遺跡の立地条件に顕著な差違をみとめにくい、いまの

ところ集落址や貝塚が確認されておらず、それらの空白地帯となっている。中期から後晩期の散布地の分布密度が相対的に濃い小貝野地区は、阿玉台貝塚、良文貝塚ときわめて至近な距離にある。もしも、上記のような散布地の分布傾向が、かかる時期の集落址の存在を示唆するものだとすれば、この地域における縄文集落の形成を考えるうえで貴重な情報を提供するものと思われる。

弥生時代から古墳時代にかけての遺跡は、小見川町阿玉台北遺跡(千葉県都市公社 1975)、同東小学校遺跡(小見川町教育委員会 1982)、銚子市佐野原遺跡(国学院大学考古学第1研究室 1974)などが存在する。東庄町には、東今泉、羽計、東庄中学校周辺、高部、八木山、平山、窪野谷地区など利根川沿いの台地上に弥生時代後期の散布地が分布する。また、古墳時代、歴史時代の散布地は、東庄町の台地上の広い範囲にわたって分布する。古墳は羽計、青馬、高部、東和田などの各地区に分布しているが、調査の行なわれた古墳は羽計^{うはな}婆里古墳、羽計^{うはな}扶^{たけ}古墳(大木ほか編 1972)、寺台古墳(金子 1956)などがある。

なお、これまでに東庄町で確認された古墳時代集落址としては、前山土師遺跡(丸子 1967)があり、また、歴史時代の集落址としては今郡東ノ台遺跡(東庄町教育委員会 1982)がある(第1図)。

第2章 高部宮ノ前遺跡

第1節 遺跡の概要と調査方法

1 遺跡の概要

高部宮ノ前遺跡は、国鉄成田線笹川駅から南へ約2.5kmの台地上に位置し、千葉県香取郡東庄町高部字宮ノ前171他に所在する。利根川に沿って東西にのびる東庄町の台地西部は小見川町と境を接し、半島状に北へのびて黒部川、利根川にせまるが、寺台、高部、青馬の各集落の存在する台地は、東西約2.5km、南北約2.8kmほどの大きく湾入した沖積低地をはさんで利根川に臨む。

遺跡は高部の集落が存在する台地の北端部に位置している(第2図、第3図)。遺跡の北側は比高差約50mの急勾配の斜面となり、台地上からは上記の沖積低地をへだてて利根川とその対岸方面が遠望される。この斜面には3本の尾根が北走し、東西に見通しの悪い地形となるが、最も東寄りの尾根を登り切った台地上には稲荷神社があり、その境内に古墳が存在する。

遺跡のある台地は標高約53mの平坦な地形で、現在は畑地、果樹園などに利用されている。なお、調査以前の遺跡の土地利用は畑地である。台地の南側は海上町方面へ開口する谷に東西から開析されて狭まり、尾根状になった台地づたいに前山遺跡のある八木山の集落に至る。

2 調査方法

発掘調査は、当遺跡に建設される神代ファームpondの建設予定地内面積2,372m²を対象に行なった。当地は、調査開始以前にブルドーザー等による整地作業が一部着手されていたので、攪乱が包含層上部まで及んでいた。

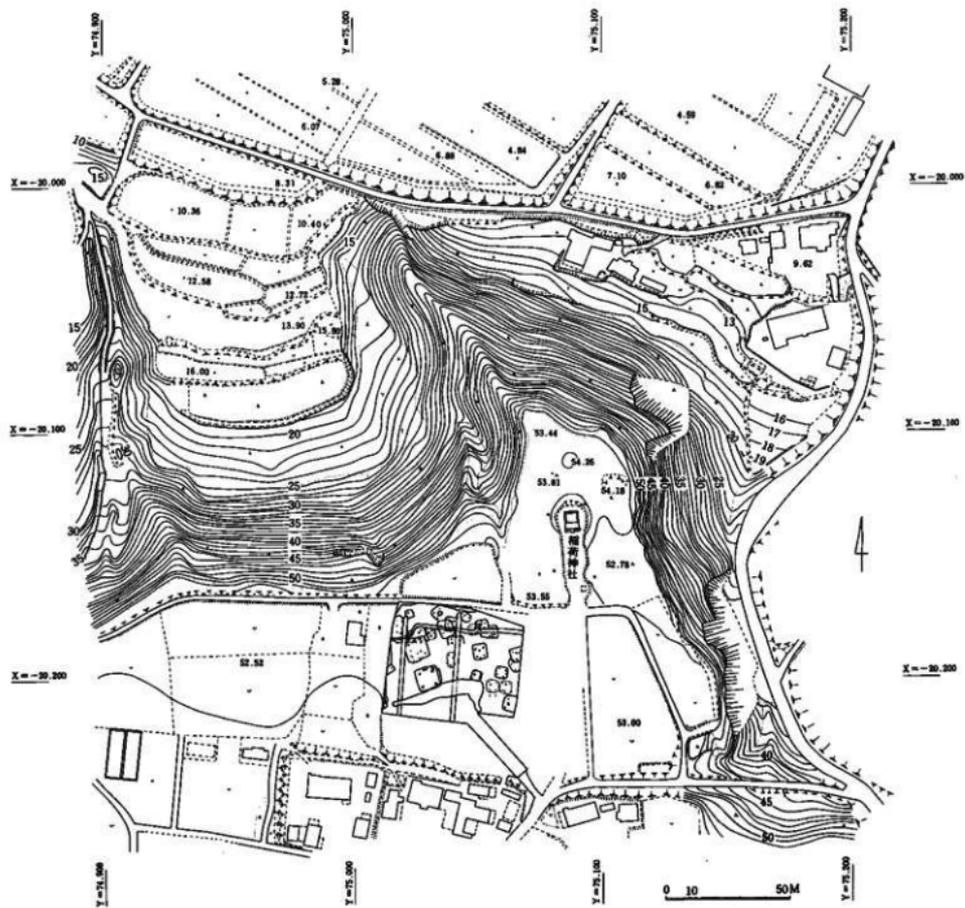
包含層出土の遺物の採集は、調査予定地内に設定した4m×4mを単位とする方眼に従って行った。グリッドの設定は予め方位にあわせて行なうのが妥当であるが、調査手順の関係上、ファームpond建設用の測量原点を利用して調査区域の南北軸とおおよそ平行するように設定した。その結果、方眼の南北軸はN-9°-Eを指した(第68図)。

グリッドの各称は、西から東へアラビア数字の0, 1, 2, 3…また北から南へアルファベット順にA, B, C…の各称をふり、個々のグリッド名は、当該アルファベットとアラビア数字を組み合わせた表現とした。なお、0列とA列は、調査区域の内外にまたがったため、この列の各グリッド面積は他より狭まった。

表土の除去は、北西隅のA0～A2グリッド付近から南側へL0～L2グリッドまで進めたのち、再び北端のA3～A4グリッド付近にもどってこれを南側に掘り進めた。この作業を順次東側へ移動しながら繰り返した。表土除去には人力と専用バケットを使用したバックホウを併用した。遺構番号はプランの確認順に付けたので、番号の流れはおおよそ西側から東側へ移動する。



第2図 高部宮ノ前遺跡周辺地形図



第3圖 高家園/前遺跡地形圖

第2節 層序

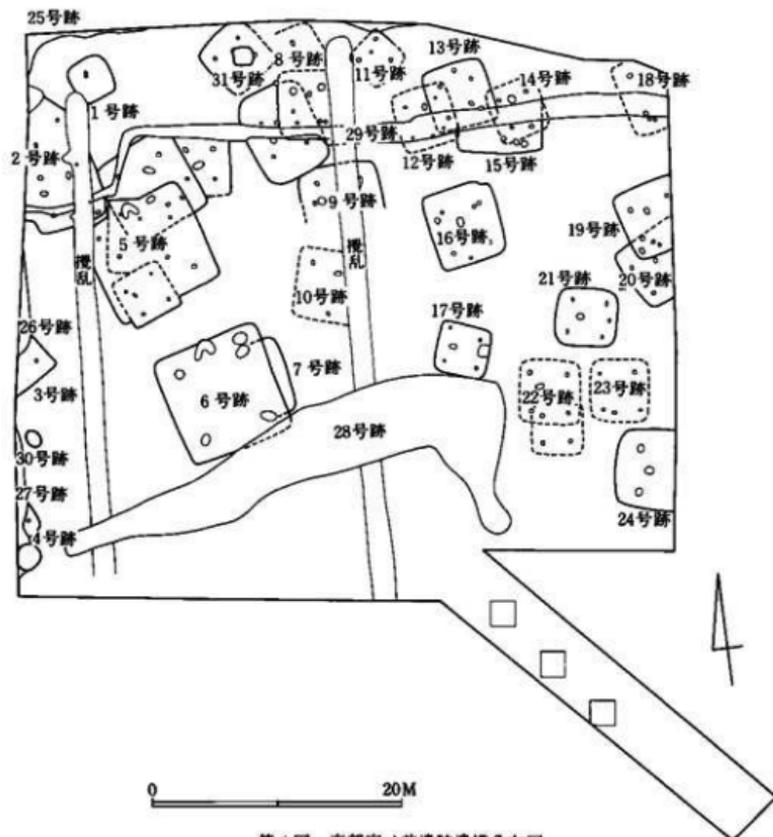
高部宮ノ前遺跡の層序は、第I層～第III層に分けられた。

第I層は表土層である。遺跡は畑地として利用されていたため、耕作や灌漑用工事等による攪乱の影響が大きい。色調は黒褐色を呈し、軟質である。層厚約30cmほどで第II層と接する。

第II層は暗褐色土とローム粒が混入する暗褐色土層である。堆積物の粒子は細かく、緻密でよくしまる。層厚は約25～30cmである。縄文時代～古墳時代の遺物包含層であるが、分層は困難である。第III層との境界は標高約52.5m付近に存在するが、漸移的で起伏にとむ。

第III層は立川ローム層軟質部で、色調は明るい黄褐色を呈し、粘性をもつ。

第3節 遺構と遺物



第4図 高部宮ノ前遺跡遺構分布図

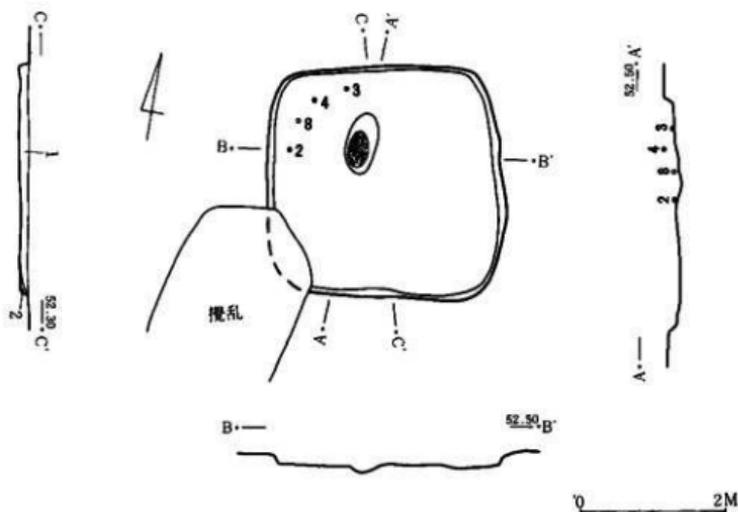
今回の調査で確認できた遺構は、竪穴住居跡37軒(1号跡～24号跡)、溝5条(25号跡～29号跡)、土壇2基(30、31号跡)である(第4図)。住居跡は台地の縁につづく調査区の北側と東側に多く分布する傾向にある。溝はおおむね東西方向に走るもの(25、28、29号跡)と南北方向に走るもの(26、27号跡)がある。25、26、27号跡は調査区の北と西の境界を巡るよう走行する。28号跡は深い大溝であるが、これより南側からは遺構を確認できなかった。2基の土壇は調査区の西側で検出した。

遺物は、整理箱にして60箱分が得られた。その主体は古墳時代の土器片で、その他に弥生時代の土器片と各時代にまたがる石器、古銭等が存在する。これらの遺物は、28号跡より北側の地域と調査区域の東側にあたる地域で出土する頻度が高いが、28号跡の南側からはほとんど発見できなかった。すでに述べたように28号跡の南からは遺構は確認されていないので、集落址は台地の縁に沿うようにつくられていた可能性がある。しかし、このような問題を扱うには発掘面積の大きさはかならずしも十分でなく、検討すべき点が多く残されている。

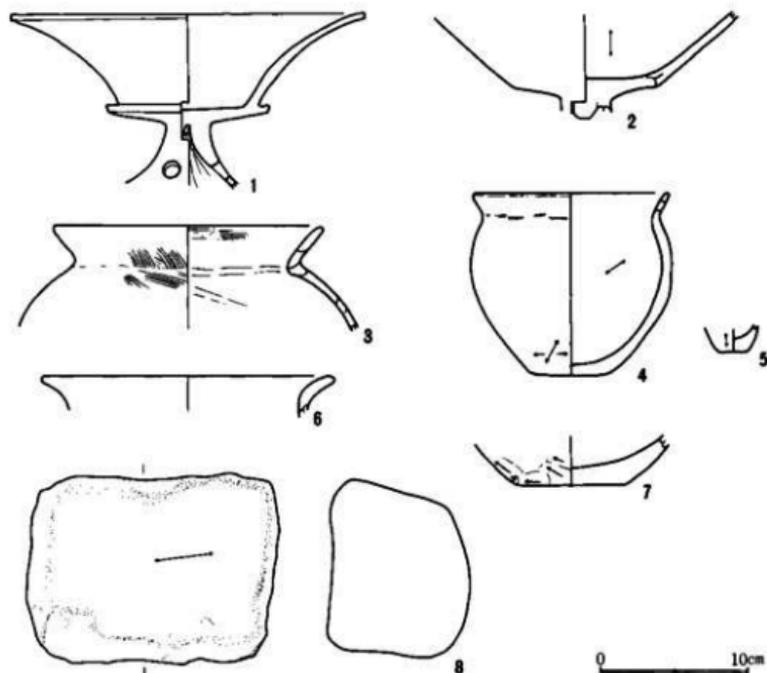
1 竪穴住居跡

1 (006)号跡 (第5図、図版4)

台地北端に地階調査区北西隅にある住居跡で、B1～B2グリッドに位置する。表土除去後に土器片がまとめて出土したので、住居跡の存在は予想されたが、プランはII層とIII層の境界付近まで掘り下げたのちに確認された。



第5図 1 (006)号跡実測図



第6図 1(006)号跡出土遺物

プランは、南西コーナー付近がハードロームを深く掘り込む擾乱溝によって切られ消滅しているが、推定約3.2m×3.3mの大きさで、東西に約10cm長い。東壁と南東コーナーが外側にやや張り出す。確認された各コーナーは丸味を帯び、プラン全体は隅丸正方形を呈す。主軸方向はN-13°-Wを指す。

壁面は軟質で、やや不明瞭である。壁高はバラつきが大きく、北壁高は約8cm、南壁高は約22cmで北-西側が低く、南-東側が高い傾向にある。壁下部は約60°~80°の傾斜角で立ち上がる。ピットは床面を除去した後も確認できなかった。床面はハードロームを浅く掘り込み、暗褐色土とローム土の混合土で整えられるが、全体に軟質で、いくぶん起伏がある。炉はプランの中央部からやや北西に寄った位置に設けられている。床への掘り込みは、約80cm×45cmの長楕円形で、ハードロームを約15cm掘り込む。焼土、炭化材、炭化粒、暗褐色土とローム土の混合土が厚く堆積する。掘り込み底面のハードロームは被熱のため広い範囲にわたって赤化し、粘性を失う。炉の主軸方向はN-2°-Eで、ほぼ真北を指し、プランの主軸方向とは約15°のずれがある。C-C'における断面観察では、覆土は以下の2層に区分された。1. 暗褐色土層。ロー

ム粒を混える。2. 褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む、1層よりもよくしまる。

遺物は土器片と石器が発見された。そのうち、高坏2点、壺4点、器種不明の小形土器1点、砥石1点の合計8点の復原実測が可能である(第6図、第1表、図版17, 31)。これらの資料のうち、(2~3)、(5)、(8)は炉址の北西部から発見された。出土地点の標高は床面レベルにほぼ等しい。(8)は一面のみが平滑で、中央部に縦位の擦痕がある。重量感があり、置き砥石と考えられる。なお、擦痕のある中央部は周縁部に比してよく凹み、使用頻度が高かったものと推定される。石質は砂岩で、重量は1,175gを計る。

第1表 1号跡出土遺物観察表

神岡 番号	器種	層位	注 量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	高坏	床直	24.5 — —	外—口縁：内外面ヨコナテ 坏部：縦位のミガキ、坏 底部：縦位のミガキ、脚 部：横位のミガキ、接合 部：横位のミガキ 内—坏部：縦位のミガキ 脚：しぼり？脚下部： 横位のナテ	砂粒多 細砂粒	良	外 } 黒褐色 内 }	ほぼ 完存	3孔
2	高坏	床直	— — —	外—坏部：縦位のミガキ 坏底部：ミガキ 内—坏部：縦位のミガキ 坏表面：ミガキ	砂粒多 細砂粒	良	外 } 褐色 内 }	欠	
3	壺	覆土	(19.5) — —	外—口縁：斜位のハケのち横 位のナテ、体部：斜位の ハケのちナテ 内—口縁：横位のハケのち横 位のナテ、頸部：横位の ナテ、体部：斜位のナテ	細砂粒多 コリ7	良	外 } 暗褐色 内 }	上半部 のみ欠	
4	壺	覆土	13.3 12.2 4.5	外—口縁：内外面横位のナテ 体上部：整形不明、体下 部：雑なナテ 内—体上部：雑なナテ、体下 部：ていねいなナテ	砂粒多 コリ7	良	外 } 褐色 内 }	ほぼ 完存	V=18
5	—	覆土	— — 1.8	外—ナテ 内—ナテ	砂粒多	良	外 } 暗褐色 内 }	—	
6	壺	覆土	(20) — —	外—横位のナテ 内—横位のナテ	砂粒多	良	外—黒褐色 内—褐色	—	
7	壺	覆土	— — 7.4	外—ケズリ 内—ナテ	砂粒多	良	外—褐色 内—橙褐色	底部 のみ	
8	砥石			本文参照					

2 (002)号住居跡群 (第7図, 図版12)

台地が浅く弯入する谷につづく調査区北西隅で検出した住居跡群で、C0~C1, D0~D1, E0~E1グリッドに位置する。覆土に焼土粒と多量の土器片が存在しており、住居跡の存在は容易に知られたが、調査区の内外にまたがって複数の住居が重複していること、灌漑用溝やイモ穴による擾乱が著しいことなどによって、切り合う各住居跡のプランの確認は困難をきわめた。

覆土堆積物は暗褐色土、ローム土、焼土粒、炭化粒、炭化材などによって構成され、全体にやや軟質であるが、粒子は細かい。A-A', B-B', C-C'における断面観察では以下の13層に分層された。1. 明褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを混える。2. 明褐色土層。ローム粒が多く混じる。3. 褐色土層。焼土粒を含む。4. 黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。5. 黒褐色土層。軟質で粘性がない。6. 暗褐色土層。硬質で炉址をおおう貼り床と考えられる。7. 暗褐色土層。ローム粒と焼土粒を含む。8. 褐色土層。ローム粒を含む。同層下位に層厚の薄いローム粒主体の明褐色土層がある。9. 褐色土層。ローム粒と焼土粒を含む。10. 褐色土層。ローム粒を混じえ7層に似るが、炭化粒を含まない。11. 暗褐色土層。ローム粒を混じえ、粘性に乏しい。12. 褐色土層。直径約1cmのハードロームを混じえる。13. 暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。

これらの堆積物と堆積状態と発見されたピット(P1~P7)および炉址の位置関係等を考慮すると、本住居跡群は少なくとも4軒以上の住居跡(2A~2D号跡)の重複と推定される。これら各住居跡の構築時期の新旧関係は、2D号跡→2C号跡→2B号跡と考えられるが、2B, 2C, 2D号跡と2A号跡との新旧関係は明らかでない。なお、後述のとおり、2A号跡は2軒以上の住居跡が重複している可能性はあるが、今回の調査ではその可否を確認することはできなかった。以下では、2A~2D号の各住居跡別に、その概要と出土遺物について記す。

2号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	24	15	37
P 2	30	8	53
P 3	42	22	83
P 4	60	16	95
P 5	24	14	40
P 6	20	9	38
P 7	48	20	70
P 8	72×34以上	—	38以上

2 A (002A)号跡

本号跡は2号跡群の最も北側にある住居跡で、C0~C1グリッドに位置する。プランの西側は調査区外に存在する。東側は擾乱溝に切られ、南側は2C号跡と隣接する。本号跡と2C号跡との床面レベルの標高はほぼ等しく、また、床面の硬度や色調にも明瞭な差がみとめられなかったので、本号跡のプラン確認はかなり手間だった。

壁は北壁のみが確認された。壁面は明瞭堅固で、壁高は約50cmと深い。壁下部はハードロームを掘り込み、約80°前後の傾斜角で立ち上がる。北壁の走行方向はN-48°-Wを指す。壁溝は

ない。ピットは2本確認された(P1~P2)。P1~P2間距離は約2.8mで、両ピット間を結ぶ線分の走行方向はN-56°-Eを指す。床面はローム土と暗褐色土で平坦に整えられるが、若干軟質である。しかし、プラン西側寄りには漸移的に黒褐色土を主体とする硬質な面に変化する。この面は貼床で、下位からは炉址が発見された。炉址は一部分が調査区外に存在するため完掘できなかったが、南北約50cm、東西約46cm以上の楕円形を呈し、焼土粒が多量に堆積する。床への掘り込みはハードロームに達し、底面にあるハードロームは広範囲にわたってレンガ化する。炉址の主軸方向は、N-80°-W前後でほぼ西を指すが、検出した北壁やP1~P2間を結ぶ線分の走行方向と一致しない。この炉址周縁部は、比較的硬質で、後述のように土器片が発見されたが、炉址から離れるにしたがって硬度が失われる。この炉址が住居跡にともなうものだとすると、本号跡と炉址との関係については、以下のような2通りの解釈が可能である。第1は、何らかの理由で炉の移設が行なわれ、旧炉上を貼床した可能性である。第2は、既に構築されていた住居の炉址上を貼床して、本号住居が新たに構築された可能性である。前者の場合、存在する住居跡は1軒でもよいが、後者の場合は2軒の重複である。

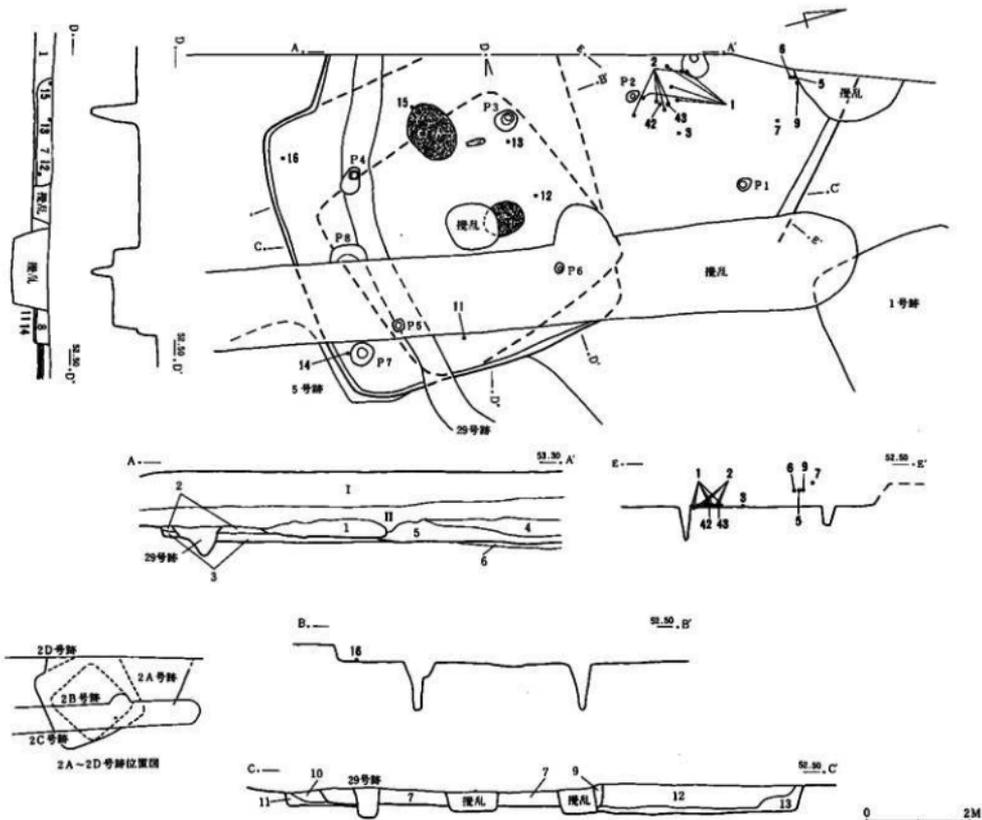
遺物は、土器片と土製品が多量に出土した。そのうち復原実測が可能な資料は、壺8点、浅鉢1点、土製紡錘車1点の合計10点である(第8図、第2表1~10、図版16)。このうち(1~3)は、炉址の南東部から出土したもので、(4~9)に示す土器とは明らかに器形、施文具、施文法などの性質が異なる。(9)は、壺もしくは壺の底部の可能性があるが、口縁部と口唇部に摩滅痕をみとめることができるので、浅鉢の機能をもつ土器として長期間使用されたものと考えられる。

2 B (002 B)号跡

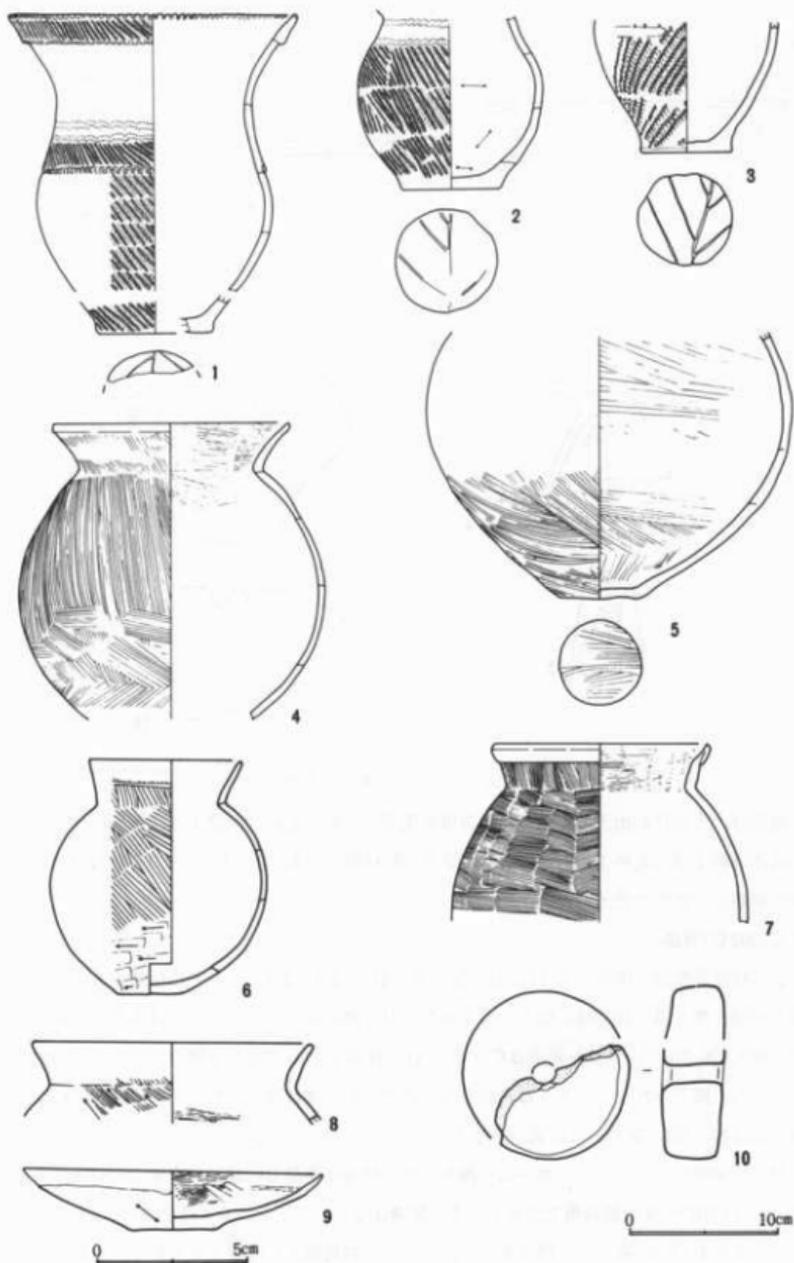
2号住居跡群の中央南寄りにある住居跡で、D1、E1グリッドに位置する。プランの東側を攪乱溝が縦断し、南側は29号跡に切られるが、本号跡全体がC号跡と重複し、これを切る。

プランは、C-C'およびD-D'で確認した7層および炭化粒の分布状態から図上復原されたもので、推定約4.5m×4.4mの正方形を呈す。また、推定主軸方向はN-20°-W前後である。

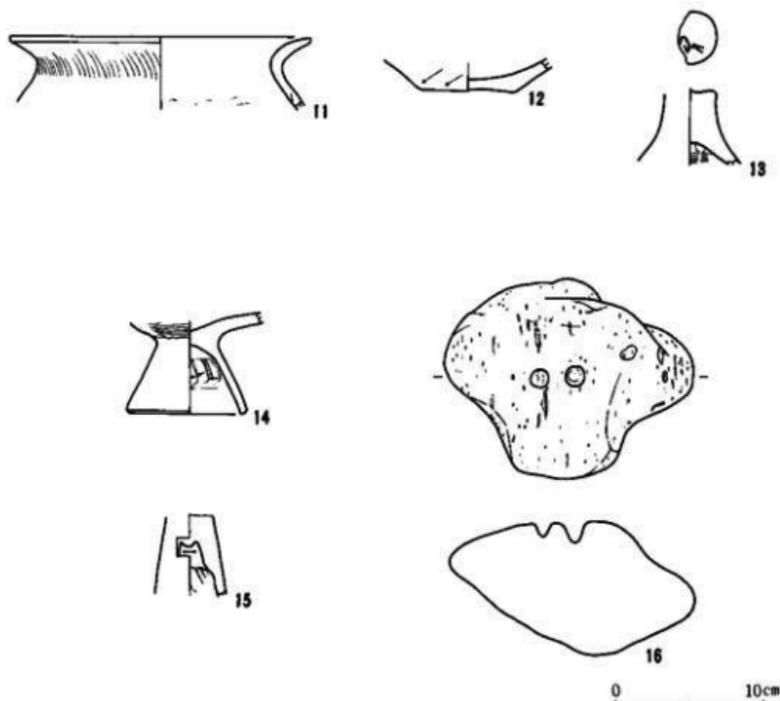
平面的な発掘調査では、壁面および壁溝を確認できなかったが、もし、C-C'、D-D'における7層の立ち上がりを本号跡の壁と考えてよいとすると、壁高は約30cmと推定され壁溝はない。また、壁下部は約80°前後の傾斜角で立ち上がる。壁面は軟質で、とくに固められた形痕はみとめられなかった。床面は、ローム土と暗褐色土の混合土を平坦に整えた貼床で、全体に軟弱である。炉址は、推定プランの中央部北寄りに位置し、南側を攪乱によって破壊されるが、推定約80cm×60cmの楕円形を呈す。床への掘り込みはハードロームを約20cm掘り込み、ローム土と暗褐色土、焼土粒が多量に堆積する。床掘り込み底面のハードロームは粘性を失なって赤化する。炉址の主軸方向はN-13°-Wを指す。住居跡床面および炉址上面には、炭化粒、炭化材、焼土粒が分布しており、焼失住居の可能性が高い。



第7图 2 (002) 号坑平面图



第8图 2(002)号跡出土遺物(1) (10:× $\frac{1}{2}$)



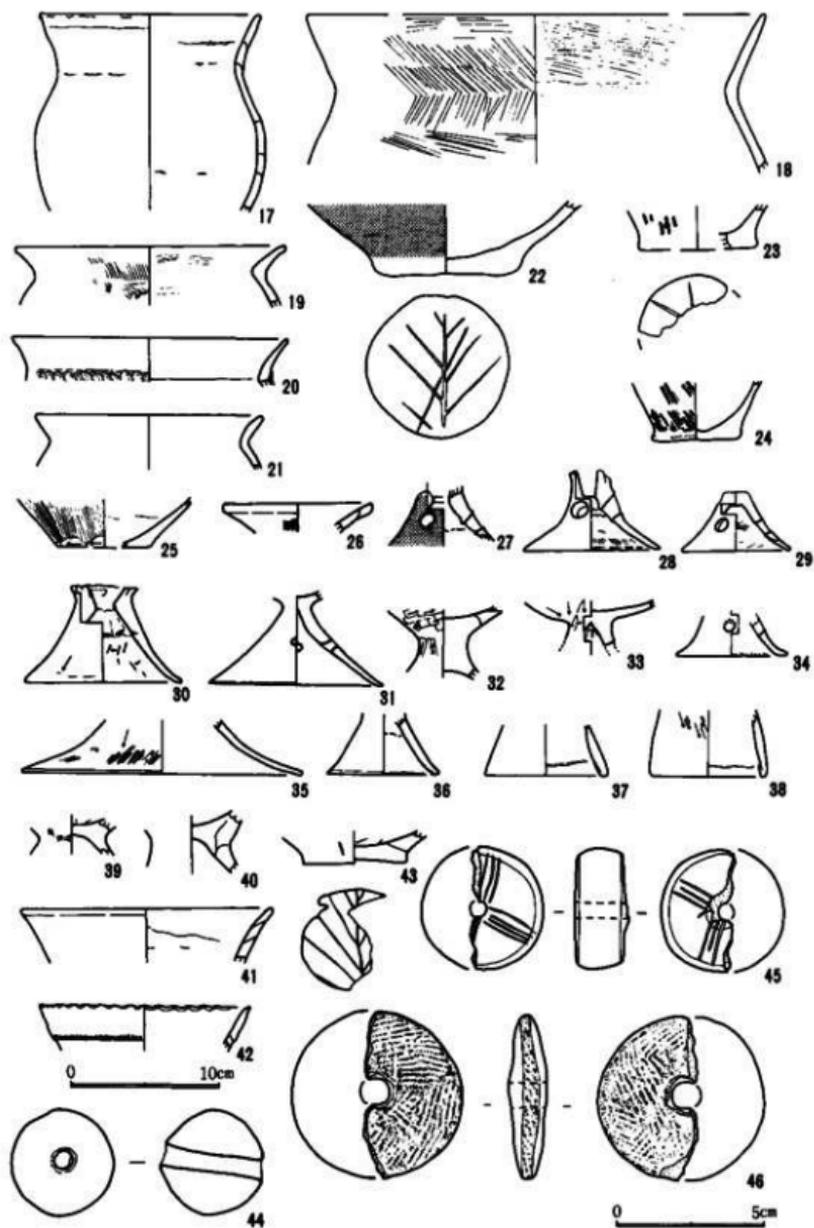
第9図 2(002)号跡出土遺物(2)

遺物は、土器片が出土した。そのうち復原実測の可能なものは、壺1点、器形のうちがえない底部資料1点と高坏1点の合計3点である(第9図11~13, 第2表)。このうち(11)だけが床面に密着した状態で出土した。

2 C(002C)号跡

2号跡住居跡群の南側にある住居跡で、D0~D1, E0~E1グリッドに位置する。プラン東側と南側を攪乱溝と19号跡に切られ、中央部をB号跡に切られる。プランは東西が約6m, 南北は推定約6.2mで、プラン北限はC-C'とD-D'における1層と9層の立ち上がり位置から復原した。確認されたコーナーは丸味を帯び、プラン全体は隅丸方形を呈すと考えられる。主軸方向はN-93°-Wで、ほぼ真西を指す。

壁面は明瞭堅固で、ハードロームを掘り込む。壁高は南壁で約30cm, 東壁で約38cmである。壁下部は約70°~75°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットは6本確認された(P3~P8)。このうちP3~P6は直立した棒状を呈し、プランの対角線上に位置するもので、支柱穴と考えられる。P7およびP8は、性格不明のピットである。P3-P4間, P4-P5間の距離はそれぞれ



第10图 2(002)号跡出土遺物(3) (44~46: $\times \frac{1}{2}$)

第2表 2号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	床直	19.4 (21.5) 7.9	外一口唇: 刻目、口縁: 付加条のち刻目、体部: ナテのち4条結節状文、付加条、刺突 内一体部: 上部、横位のヘラナテ 中部、掌ナテ 下部、横位のヘラケズリ	砂粒多 細砂粒	普	外一暗褐色 内一黄褐色	1/2	分割成形? 木蓋底 V=2.5L
2	甕	床直	(15-18) 8.8	外一ナテのち4段結節状文、付加条、底縁部: 横位のナテ 内一横位を主としたヘラ(?) ミガキ	細砂粒多	普	外一褐色 内一黄褐色	1/2	木蓋底
3	甕	床直	— — 3.1	外一付加条、下部横位のナテ 内一中部、横位のナテ 下部、縦位のナテ	砂粒少	普	外一暗褐色 内一黒褐色	1/2	木蓋底
4	甕	覆土	16.0 — —	外一口唇部: ナテ、口縁: ハケのちヨコナテ、体部: 上部、縦位のハケ 下部、施な斜位+横位ハケ 内一口縁: 横位の広いハケ 肩部: 横位のハケ、体部: ナテ	細砂粒多	良	外一暗褐色 内一赤褐色	1/2	V=4.3L
5	甕	覆土	— — 5.5	外一体部: 中部以上ハケのちナテ 下部ハケ、底面ハケ 内一ハケ+ナテ	砂粒少	良	外一赤褐色 内一明褐色	1/2	
6	甕	覆土	10.2 15.6 4.3	外一口唇部: ハケのち横位のユビナテ、口縁下部体部上半部ハケ、体部下部横位の施なケズリ、底面: 施なヘラケズリ 内一口縁: 横位のユビナテ 体部: 横位のナテ、底面: 施なケズリ	細砂粒少	普	外} 淡黄土色 内}	1/2	V=1.8L 口縁部に沈澱が混る。
7	甕	覆土	14.7 — —	外一口縁: 折り返えしのち横位のユビナテ、頸部: 縦位のハケ、体部: 横位のハケ 内一口縁: 横位のハケ、体部: 横位の掌ナテ?	細砂粒少	普	外一明褐色 内一黒褐色	1/2	
8	甕	覆土	(19) — —	外一口縁: 横位のナテ、体部: 斜位のハケ+ナテ 内一ハケのちナテ、体部に若干ハケが残る	細砂粒少	良	外} 褐色 内}	口縁部 1/2	
9	鉢	覆土	20.4 4.2 6.0	外一口縁: 内外面一部割離 体部: ミガキ、底面: ケズリ鑿形 内一ハケのちナテ、底面: 割離	砂粒多	普	外} 赤褐色 内}	ほぼ 完存	口縁及び口唇部に摩滅痕あり。
10	初輪草	覆土		直径(18cm)、厚2cm、孔径0.6cm、現存重量34g、表裏側面とも無文	砂粒多	普	灰褐色	1/2	焼成前穿孔

神区 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
11	甕	床直	(20.5) — —	外—口唇：内外面ヨコナデ 頸部：ハケのちナデ、体 部：横位の寬いナデ 内—体部：上部横位のナデ、 下部横位の寬いナデ	砂粒多	良	外—黒褐色 内—褐色	口縁の み $\frac{1}{2}$	
12	—	覆土	— — 6.3	外—ヘラケズリのちナデ？ 内—剥離のため不明	砂粒少	普	外—褐色 内—黒褐色	底部の み完存	
13	高坏	覆土	— — —	外—整形不明 内—上面指痕旺盛、下部：横 位のハケ	細砂粒含	普	外 } 暗褐色 内 }	脚上部 のみ	
14	甕	P7内	— — 8.1	外—裏底部：横位のハケ、脚 ：ナデ、脚裾：内外面てい おいなナデ 内—裏部剥離、脚部上部：横 位のヘラケズリ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—明褐色	台部の み完存	
15	高坏	覆土	— — —	外—縦位のヘラナデ 内—上端：なでまわし 下部：ヘラケズリ	砂粒多	普	外 } 橙色 内 }	—	
16	軽石 製品	床直		本文参照				完存	
17	甕	覆土	(15) — —	外—口唇のみヨコナデ、頸部・ 体部：横位のナデ 内—横位のナデ	細砂粒少 スコリア多	良	外 } 黄褐色 内 }	$\frac{1}{2}$	V=2.2t
18	甕	覆土	(31) — —	外—寬いハケのちナデ 内—口縁・頸部：横位の寬いハ ケのちナデ、体部：ナデ	砂粒多	普	外 } 黄褐色 内 }	$\frac{1}{2}$ 未満	異様なハ ケ目をも った大型 甕である。 口縁上部 のものは タタキの 可能性も ある。木 材にタタ キのように 溝を彫刻 して使用 した可 能性がある。
19	甕	覆土	(18.5) — —	外—口縁内外ハケのちヨコナ デ、頸部・体部：ハケ 内—体部：ナデ	砂粒多	良	外 } 褐色 内 }	$\frac{1}{2}$ 未満	
20	甕	覆土	(19) — —	口縁内外ヨコナデ	砂粒多	良	外—黒色 内—褐色	口縁 $\frac{1}{2}$	頸部粘土 帯押捺
21	甕	覆土	(15.5) — —	外—横位のナデもしくはヨコ ナデ 内—口縁：ハケのちナデ 体 部：横位のナデ	砂粒多	普	外 } 褐色 内 }	$\frac{1}{2}$	
22	—	覆土	— — 10.0	外—体部：ミガキ 内—剥離	砂粒多 スコリア多	普	外 } 乳白色 内 }	$\frac{1}{2}$	木葉底 赤彩

押込番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
23	甕	覆土	— — (8)	外—横位のナデのち縄文 内—広いミガキ	砂粒多	良	外—黒褐色 内—黒色	1/2未満	縄文は付 加乗か? 木炭底
24	甕	覆土	— — (6)	外—体部:付加乗?+ナデ 底面:整形不明 内—体部:ナデもしくはナデ ツケ、底面:縄文ナデ	砂粒多	普	外—赤褐色 内—黄褐色	1/2	
25	—	覆土	— — (6.5)	外—体部:縦位のハケ、底縁: 横位のケズリ、底面: ケズリ 内—ナデ	砂粒多	良	外—黒褐色 内—乳白褐色	底部1/2	底部中央 部が薄く なる。
26	器台	覆土	(10) — —	外—口唇部内外面ヨコナデ、 口縁:細い縦位のハケの ち広いナデ 内—ナデ	砂粒多	良	外 内} 黄褐色	1/2未満	
27	器台	覆土	— — —	外—ていねいなナデ 内—穴上半は広いナデ、穴下 半部より下は比較的てい ねいなナデ	細砂粒 } 多 スコリア }	良	外 内} 橙色	脚上部 のみ	3孔 赤形
28	器台	覆土	— — (9.5)	外—上部:縦位のミガキ、裾 部:横位のミガキ 内—ハケのち弱いナデ	砂粒多	良	外 内} 赤褐色	脚部1/2	3孔
29	器台?	覆土	— — (7.5)	外—ナデのちミガキ 内—ハケのち横位のナデ	細砂粒多	不良	外 内} 橙色	1/2	3孔
30	器台	覆土	— — 10.6	外—脚上部:ナデ、ヘラあて痕 あり、脚部:横位ナデ? 内—上半部:広いナデ輪痕 あり、下半部:ヘラナデ ? 裾:横位のナデ	砂粒多	普	外 内} 橙色	1/2	穴貫通成 形のまま
31	高坏	覆土	— — 6	外—脚部:ナデ、接合部:粘 土をつけたのちユビナデ 内—脚上部:ヘラ状工具によ るシボリ、脚下部:横位 ナデ	砂粒多	普	外—明褐色 内—赤褐色	脚部1/2	2孔
32	高坏?	覆土	— — —	外—坏底部:ていねいなケズ リ調整、接合部:ナデナ ケズリ調整、脚:ナデ 内—坏底部:ミガキ、脚:ナ デ	砂粒多	普	外—赤褐色 内—黄褐色	1/2	
33	高坏?	覆土	— — —	外—坏及び脚:縦位のミガキ 内—坏部:ミガキ一部剝離	細砂粒多	良	外—橙色 内—黒褐色	—	3孔
34	高坏?	覆土	— — (7.5)	外—ミガキ 内—ナデ	砂粒 } 多 細砂粒 }	良	外 内} 乳褐色	1/2	4孔
35	高坏	覆土	(19) — —	外—脚上部:縦位のナデ、裾 :ハケのち縦位のナデ 内—ナデ	砂粒多	良	外 内} 褐色	1/2未満	

神団 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
36	甕	覆土	— — (9.5)	外一ナデのち縦位のミガキ 内一上半部：成形のまま、下 半部：横位のナデ	砂粒 スコリア } 多	普	外一橙色 内一黒灰色	1/5	
37	甕	覆土	— — (8.5)	外一ミガキもしくははいねい なナデ 内一指によるナデ	砂粒多	良	外 } 褐色 内 }	1/5	裾内側に 折り返し、 ユビナデ
38	甕	覆土	— — (8)	外一整形不明、ハケあり 内一整形不明	砂粒多	普	外 } 黄褐色 内 }	1/5未満	裾内折り 返し
39	甕	覆土	— — —	外一ナデ+ハケ 内一ナデ	砂粒多	普	外 } 褐色 内 }	—	
40	甕	覆土	— — —	外一ナデ 内一体部：ていねいなナデ 脚部：ナデ	砂粒多	良	外一褐色 内一橙色	底部	
41	甕	覆土	(17) — —	外一口縁内外コナデ、体部 ：刺離により整形不明 内一口縁下部：横位のナデ	砂粒少	普	外一黒褐色 内一暗褐色	口縁部 1/5	
42	甕	覆土	(14.5) — —	外一口縁内外ていねいな横位 のナデ、口縁下端：刺突 による割み 内一口唇：棒状工具による内 側からの押捺	細砂粒少	普	外一暗灰褐色 内一淡灰褐色	口縁部 1/5	
43	—	覆土	— — (7)	外一ヘラケズリのち横位のナ デ 内一ていねいなヘラナデ	細砂粒多	普	外一暗褐色 内一明褐色	底部1/5	木蓋底
44	土玉	覆土	— — —	縦径3.5cm、横径3.5cm、孔径 0.6cm、重量 42g	細砂粒含	良	暗褐色	ほぼ完 存	
45	紡錘車	覆土	— — —	直径4.2cm、厚1.8cm、孔径0.5 cm、現存重量21g、表裏面：3 本単位の筒目状沈線が放射状 に施される、側面：無文	細砂粒含	良	黒褐色～褐色	1/5	焼成前穿 孔
46	紡錘車	覆土	— — —	直径5.5cm、厚1.3cm、孔径0.9 cm、現存重量21g、表裏面と 側面に無筋しの織文	砂粒含	良	明褐色	1/5	焼成前穿 孔

れ約3.2mと3mを測る。床面は、ローム土と暗褐色土の混合土を平坦に整えたもので、やや軟質である。炉址は約1.2m×0.8mの楕円形を呈し、ハードロームを約15cm掘り込む。炭化粒と焼土粒が多量に堆積し、床掘り込み底面のハードロームは赤化して粘性を失なう。

遺物は、土器片と軽石が出土した。復原実測の可能なものは台付甕1点、高坏1点、軽石1点の合計3点である(第9図14～16、第2表、図版31)。(14)の甕は、P7内に落ち込む状態で発見されたものである。(16)は南壁近くの床面上に密着した状態で発見された軽石で、約17cm×13cm×9cm大の不定形である。直径約1cmの小孔が約1.5cm間隔で2箇所に穿たれるが、深さは約1cm前後でとどまり、貫通しない。軽石表面にはこれ以外にも、幅約4mm、長さ約4cmのT字状に交わるスリットが2本刻まれる。稜線は丸味を帯び、全体に滑らかである。

2 D (002 D)号跡

E0グリッドに位置する住居跡で、2C号跡と29号跡に切られる。プランの大部分は調査区外に存在すると考えられ、調査区内に出現した部分から全体のプランを推定するのは困難である。

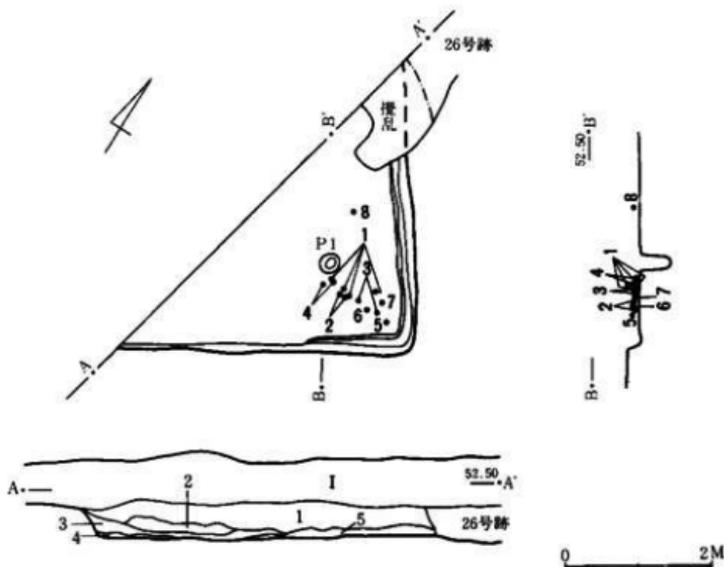
調査区内にわずかに出現した壁面は明瞭であるが、やや軟質である。壁高は約20cmを測り、壁下部は約60°の傾斜角で立ち上がる。壁の走行方向はN-60°-Wを指す。壁溝およびピットは確認できなかった。床面は起伏に富み、軟弱である。遺物は発見できなかった。

2 (002)号跡群出土の一括遺物

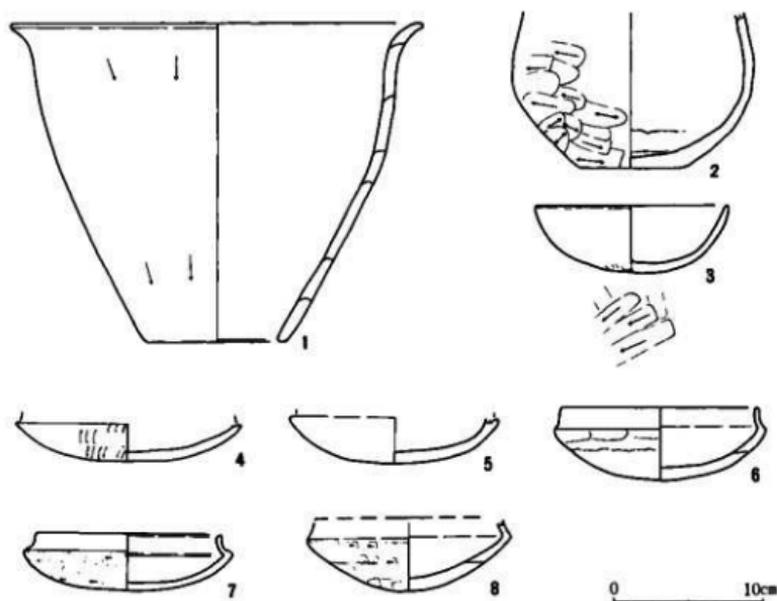
本住居跡群からは、多量の土器片と土製品が出土したが、出土地点の明らかでないいわゆる一括資料の占める割合が比較的高い。これらのうち、壺14点、器形のうかがえない底部資料3点、高坏5点、器台5点、土玉1点、土製紡錘車2点の合計30点が復原実測が可能である(第10図、第3表、図版16、30)。

3 (004)号跡(第11図、図版3)

台地北端中央部につづく調査区の西隅中央にあつて、H0~H1グリッドに位置する住居跡である。覆土に焼土粒を含み、プランの確認は容易であつたが、その半分は調査区外に存在する。また、一部を26号跡に切られる。調査区内で検出した部分はプラン全体の南東部と推定され、コーナーは直角に近い。東壁は調査区の境界付近で攪乱のため消滅するが、図上延長して求め



第11図 3 (004)号跡実測図



第12図 3(004)号跡出土遺物

た東壁の走行方向はN-30°-W前後で、本号跡の主軸方向はこれに近い値を指すものと推定される。

壁は明瞭堅固で、壁高は東壁で約22cm、南壁の中央部で約35cmである。壁下部はハードロームに達し、約70°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝は、東壁下と南東コーナーで明瞭であるが、同コーナーを南壁側にまわると浅く不明瞭になる。壁溝幅は平均して約12cm、最小幅は約6cm、深さは平均約7cmである。ピットは1本確認された(P1)。直径約30cm、底径約15cm、深さ約43cmを測り、断面は直立した棒状を呈す。支柱穴の1つと推定される。床面は、ハードロームを掘り込み、ローム土と暗褐色土の混合土を固めて平坦堅緻に整える。

覆土には暗褐色土、ソフトローム、ハードロームブロック焼土粒、炭化粒、炭化材などが堆積し、全体に軟質である。A-A'における断面観察では以下の5層に区分された。1. 暗褐色土層。焼土粒、ハードロームブロックが少量混入する。2. 褐色土層。1層よりもソフトローム粒を多く混じえる。3. 暗褐色土層。2層と酷似し、ロームブロックと焼土粒を少量含む。4. 黄褐色土層。ソフトロームを大量に含み、炭化粒を混える。5. 褐色土層。焼土粒、ソフトローム粒、炭化粒が比較的多く含まれる。なお床面上には短い炭化材が数本みとめられたが、

第3表 3号跡出土遺物観察表

検出 番号	器種	層位	法 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	瓶	覆土	28.0 21.7 9.4	外一口縁：ヨコナデ、体部： 縦位のナデ、中部横位ナ デ、下部縦位のケズリ 内一横位のナデ	砂粒多	不良	外 内 } 黄色土	ほぼ完 存	内部黒斑
2	甕	床直	— — 7.2	外一横位のケズリ、底面ケズ リ 内一ナデ	砂粒 } スコリア } 多	普	外 内 } 淡茶褐色	体下半 部のみ %	内面剝離 痕
3	環	床直	(13) 4.5 —	外一口縁内外面ヨコナデ、体 部・底面ヘラケズリ 内一摩耗。	細砂粒多	普	外 内 } 暗褐色	%	
4	環	床直	— — —	外一タタキ(?)のちミガキ 内一横位のミガキ、底面：暗 文状のミガキ	細砂粒多	良	外 内 } 灰褐色	1/2	
5	環	床直	— — —	外一ヘラケズリのちナデ 内一ていねいな横位ナデ、底 面ヘラミガキ	細砂粒 スコリア 含	普	外 内 } 淡褐色	体部の み1/2	
6	環	床直	13.2 4.8 —	外一口縁：ヨコナデ、体部ヘ ラケズリ、底面ヘラナデ 内一横位のナデ	細砂粒多	不良	外一黄褐色 内一灰褐色	%	
7	環	床直	12.4 3.9 —	外一口縁：内外面ヨコナデ、 体部：短いケズリのち短 かいヘラケズリ 内一体部：横位ナデ	細砂粒多	不良	外 内 } 黒色	完存	
8	環	床直	(13) (15) —	外一口縁：内外面ヨコナデ、 体部短いケズリ、底部雑 なケズリ 内一暗文状ミガキ	細砂粒少	普	外一褐色 内一黄土色	%	

精査の段階で消滅し、記録することができなかった。

遺物は、覆土中と床面から出土した。そのうち復原実測可能な資料は、瓶1点、甕1点、環6点の計8点である(第12図、第3表、図版17)。(1~7)は検出したコーナーからP1の方向へ崩れ落ちたようにまとまって出土し、(8)はP1の北側から出土した。なお遺物はいずれも床面に密着した状態で発見された。

4 (007)号跡(第13図、図版4)

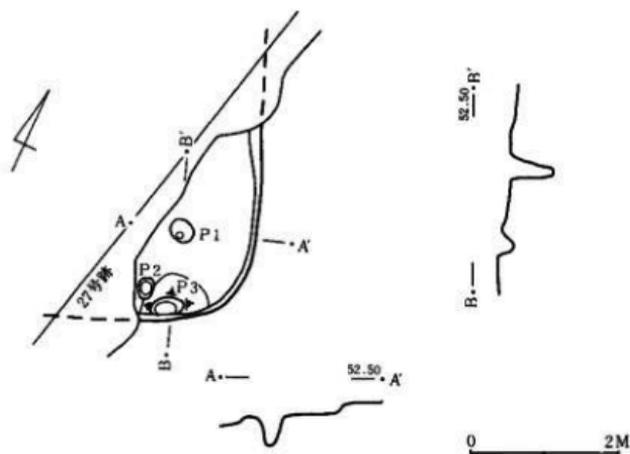
台地中央部につづく調査区の南西隅から検出した住居跡で、K0グリッドに位置する。プランの大部分が調査区外に存在し、調査区内の覆土上面は27号跡の覆土に被われていたため、本号跡の存在は27号跡の発掘中に確認された。調査区内で検出したのは南東コーナーと推定される部分で、コーナーは丸味を帯びる。確認された東壁を図上延長して求めた走行方向はN-20°-W前後であるが、本号跡の主軸方向もこれに近い方向を指す可能性が高い。調査区の境界付近では27号跡に切られ、壁と床面が消滅する。

壁高は平均約10cmと浅いが、比較的明瞭である。壁下部はハードロームを掘り込み、約55°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝はない。ピットは3本確認された(P1~P3)。主な計測値は別表のとおりである。P3の周縁

4号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	30	10	58
P 2	25	15	38
P 3	45×20	25×15	—

はローム土と暗褐色土の混合土で固められてわずかに隆起する。この周堤状の上面と床面との比高差は約10cm、また、P3底面との比高差は約14cmであるので、床面とP3底面との比高差は小さい。P1は支柱穴の1つと考えられるが、P2、P3は性格不明である。床面は、ローム土と暗褐色土の混合土で平坦堅緻に整えられる。覆土は暗褐色土を主体とする堆積物であるが、土層断面は実測できなかった。遺物は発見できなかった。



第13図 4(007)号跡実測図

5(009)号跡群 (第14図、図版5)

調査区中央部北西寄りで検出した住居跡群で、D2~D4、E2~E3、F2~F4、G2~G3グリッドに位置する。本号跡群北側の覆土は、焼土粒、炭化材が堆積しており、住居跡の存在は表土を除去した段階で、容易に知れたが、重複する住居跡のプラン確認はかなり手間どった。29号跡が、住居跡群北部を横切る。ピットは非常に多く、36本が確認された(P1~P36、別表)。覆土はB-B'、D-D'、E-E'における断面観察で以下の13層に分けられた。1. 暗褐色土層。ローム粒を含む。2. 明褐色土層。ローム粒を多く含み、直径約0.5cmのハードロームブロックが混入する。3. 暗褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが混じる。焼土粒、炭化粒、炭化材を含む。4. 褐色土層。ローム粒を多く混える。5. 明褐色土層。ローム粒を含む、若

少量の焼土粒が混じる。7. 褐色土層。ローム土を多く含む。8. 茶褐色土層。ローム粒、焼土粒を多く混える。粘性に乏しい。9. 褐色土層。ソフトローム粒と直径約2cmのハードロームブロックを含む。10. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む。11. 褐色土層。ローム粒を多く混える。12. 黒褐色土層。13. 黄褐色土層。ハードロームブロックが多い。

覆土堆積物の堆積状態やビットの位置関係等の観察にもとづくと、本住居跡群は、少なくとも5軒以上の住居跡(5A~5E号跡)が重複するものと考えられる。各住居跡の構築時期の新旧関係は、5A号跡→5B号跡→5C号跡→5D号跡、5E号跡→5D号跡であるが、5C号跡と5E号跡の新旧関係は不明である。以下に各住居跡別にその概要と出土遺物を記す。

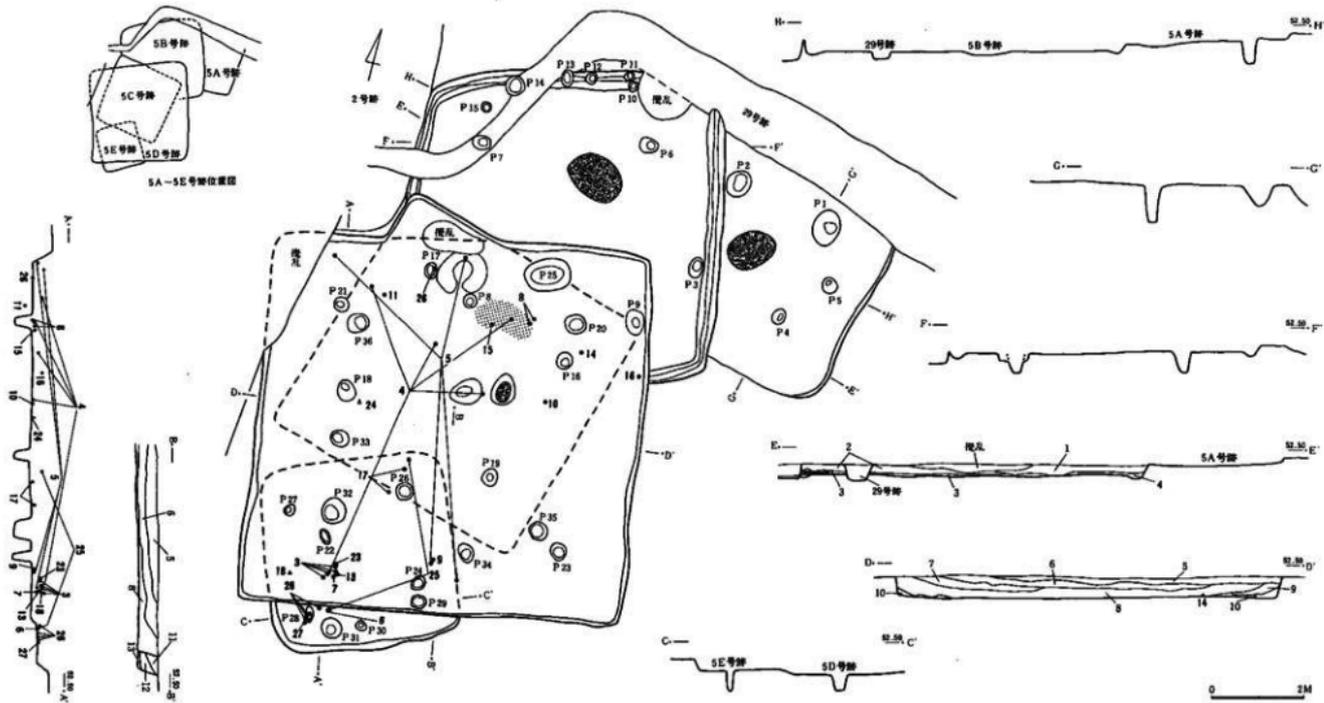
5A(009A)号跡

5号跡群の北東隅にあつて、D3~D4グリッドに位置する。攪乱が著しく、覆土と南壁は殆んど残存していない。北側を29号跡、西側を5B号跡にそれぞれ切られる。しかし、東壁と南東コーナーがわずかに残存しており、プラン全体の推定平面形態は隅丸方形と考えられる。

壁高は東壁で約10cmである。壁下部は約50°~60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ビットは5本確認され、これらは主柱穴と考えられる(P1~P5)。P1~P2間とP1~P4間距離はともに約2.3mで、ほぼ等長である。P1~P2間を結ぶ線の走行方向は、N-78°-Wで、プランの主軸方向もこれに近い方向を指すものと推定される。床面は、ローム土と

5号跡群ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	85	16	51
P 2	96	25	58
P 3	35	16	51
P 4	80	21	86
P 5	34	12	54
P 6	41	10	43
P 7	30	18	43
P 8	33	18	35
P 9	54	26	32
P10	27	11	35
P11	24	9	28
P12	32	14	38
P13	30	24	33
P14	36	24	30
P15	20	12	15
P16	36	18	43
P17	26	22	65
P18	45	18	60
P19	35	14	73
P20	45	30	43
P21	32	18	36
P22	32	28	40
P23	37	21	60
P24	32	20	20
P25	100×68	56×34	38
P26	36	28	34
P27	24	12	48
P28	30	18	55
P29	31	26	49
P30	22	15	25
P31	31	17	21
P32	48	19	38
P33	39	22	38
P34	42	23	36
P35	38	27	35
P36	37	29	36



第14图 S (009)号坑平面图(1)

暗褐色土の混合土で平坦に整えられ、硬質堅固である。炉はプラン中央やや西寄りに設けられる。長径約1.1m、短径約0.8mの楕円形で、主軸方向はN-50°-Eを指す。床への掘り込みは約10cmで、多量の焼土粒と焼土ブロックが堆積し、掘り込み底のハードロームは被熱のため広い範囲にわたって粘性を失なう。

なお、復原実測の可能な遺物はない。

5B (009B)号跡

5号跡群の北部にある住居跡で、D2~3グリッドに位置する。5A号跡を切るが、南東部を5C、5D号跡に切られる。また29号跡が北側を横切る。コーナーは北西部と南東部が残存しており、プランの平面形態は南北約7m、東西約7.1mの隅丸方形になるものと考えられる。主軸方向はN-10°-Wを指す。

壁面は明瞭堅固で、壁高は北壁で平均約25cm、南壁で平均約35cmと深い。東壁は5A号跡床面と平均約18cmの比高差をもつ。壁溝は確認された壁下に存在しており、すべての壁下を全周していたものと推定される。壁溝幅は、約30~50cmで、深さは約8~12cmである。溝底はいくぶん凹凸があり、北壁中央部下の壁溝からは5本のピットが確認された(P10~P14)。ところで、検出したピットのうちP6~P9はプラン対角線上に位置しており、主柱穴と考えられる。P15は性格不明である。床面はハードロームを平坦堅緻に整える。炉址はプラン中央部やや北寄りに設けられている。床への掘り込みは約12cmで、粘性のない暗褐色土と多量の焼土粒が堆積する。本号跡の床面のレベルから約5cm浮いた位置に炭化材と多量の焼土粒が堆積しており、本号跡は焼失住居である可能性が高い。

遺物は土器片と土製品が出土したが、復原実測の可能な資料は紡錘車2点にとどまった(第16図1~2、第4表、図版30)。

5C (009C)号跡

5号跡群の中央部にある住居跡で、E2グリッドに位置する。5B号跡を切るが、5D号跡に切れ、北側コーナーを除くプランのほぼ全部が破壊される。残存するコーナーは直角に近い。推定される平面形態は、一辺約6m程度の方形である。

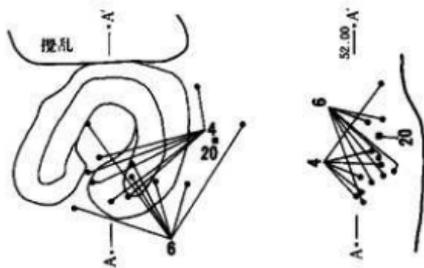
壁面は明瞭堅固である。壁高は約40cmで、壁下部は約60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。5D号跡プラン内から発見されたP16~P19が主柱穴と推定される。P16-P17間とP17-P18間距離は、いずれも約3.7mである。P17-P18間およびP16-P19間を結ぶ線の走行方向はほぼ平行で、N-17°-E前後を指す。本号跡の主軸方向も、これに近い方向をとるものと考えられる。床面はローム土と暗褐色土の混合土を平坦に整えたものでやや硬質である。炉址は5D号跡床面の除去後に出現した。推定プランの中央部東寄りに設けられる。長径約70cm、短径約50cmの楕円形で、主軸方向はN-5°-Eのほぼ真北を指す。本号跡にともなう遺物は発見されなかった。

5D(009D)号跡

5号跡群の中央部にある住居跡で、E2～E3、F2～F3、G2～G3グリッドに位置する。5B、5C、5D号跡を切るが、プラン北側は耕作による攪乱の影響が強い。プランは南北約8.5m、東西約8.6mで、東西方向が約10cm長い。北西コーナーを攪乱で破壊されるが、残存するコーナーは直角に近く、平面形態はほぼ正方形を呈す。主軸方向はN-9°-Wで、ほぼ真北を指す。

壁面は明瞭堅固で、壁高は約30～40cmと高く、壁下部はハードロームを掘り込み、約75°～80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットは多数発見されたが、P20～P24は主柱穴と考えられる。かまどの東側にある長径約1m、短径約70cmの楕円形ピット(P25)は、貯蔵穴の可能性が高い。床面は、ローム土と暗褐色土の混合土を貼床状に整えたもので、平坦堅緻に固められる。かまどは、北壁中央部に設置される。床掘り込みは、約12cm×70cmの楕円形でローム土と暗褐色土の混合土をうめ戻して火床とする。壁掘り込みは攪乱によって破壊される。袖は山砂を主体とし、暗褐色土、炭化繊維等を含むが、攪乱と自然破壊が著しく、全容を復原するのは困難である。燃焼部には、焼土が、密に堆積する。かまどの南東側の床面上からは、粘土塊が発見された。粘土塊の大きさは、長径約1.3m、短径約70cmの楕円形であるが、厚さは最も厚い部分で約4～5cmにとどまった。

遺物は多量の土器片、土製品破片、鉄器、石器、軽石等が出土した。そのうち復原実測が可能なのは、壺9点、高坏2点、器台1点、坏1点、手捏1点、器形のうちかえらない底部資料1点と土玉2点、鉄器2点、磁石1点、軽石1点、石鏃1点の合計22点である(第17図、第18図18～24、第4表図版18、30、31、32)。このうち(8～10)、(15)、(17)は、床面直上から出土した。また、(4～5)はかまど内と床面直上にまたがった状態で出土した。(20)は刀子であるが、(21)は種類不明である。(24)はいわゆるアメリカ式石鏃で、先端と基部を一部欠損する。これは混入品と思われる。



第15図 5(009)号跡実測図(2)
(1/40)

5E (009E)号跡

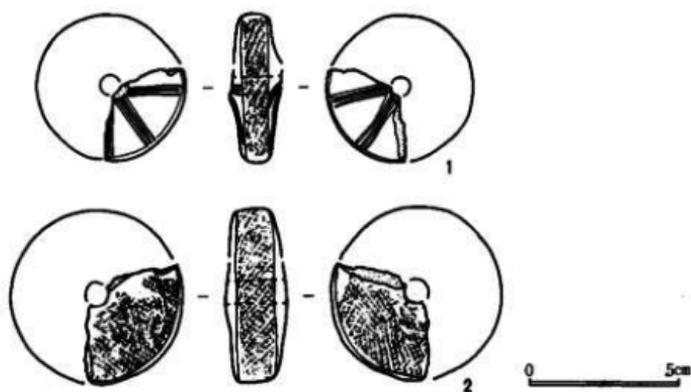
5号跡群の最も南側で検出した住居跡で、G2-G3グリッドに位置する。プランの大部分は、5D号跡に切られる。確認できた部分は南壁と南西、南東コーナーの一部分で、コーナーは丸味を帯びる。プランの平面形態は、一辺約4.2m前後の隅丸正方形になるものと推定される。

壁面は軟弱で不明瞭である。壁高は平均約50cmで、壁下部は約60°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝はない。ピットは7本確認された(P26~P32)。P26~P30は主柱穴と考えられ、P26~P29はプランの対角線上に位置する。P31~P32は性格不明である。P26-P27間とP27-P28間距離はそれぞれ約2.6mと約2.4mで、推定される主柱穴間距離は東西方向が約20cmほど長い。P26-P29とP27-P28間を結ぶ線はほぼ平行で、走行方向はN-24°-W前後を指すが、本号跡の主軸方向もこれに近い値をとるものと推定される。床面は、ハードロームを平坦に整えたものであるが、やや軟質である。かまど、もしくは炉址はおそらく5D号住居の構築に際して破壊されたものと推定される。

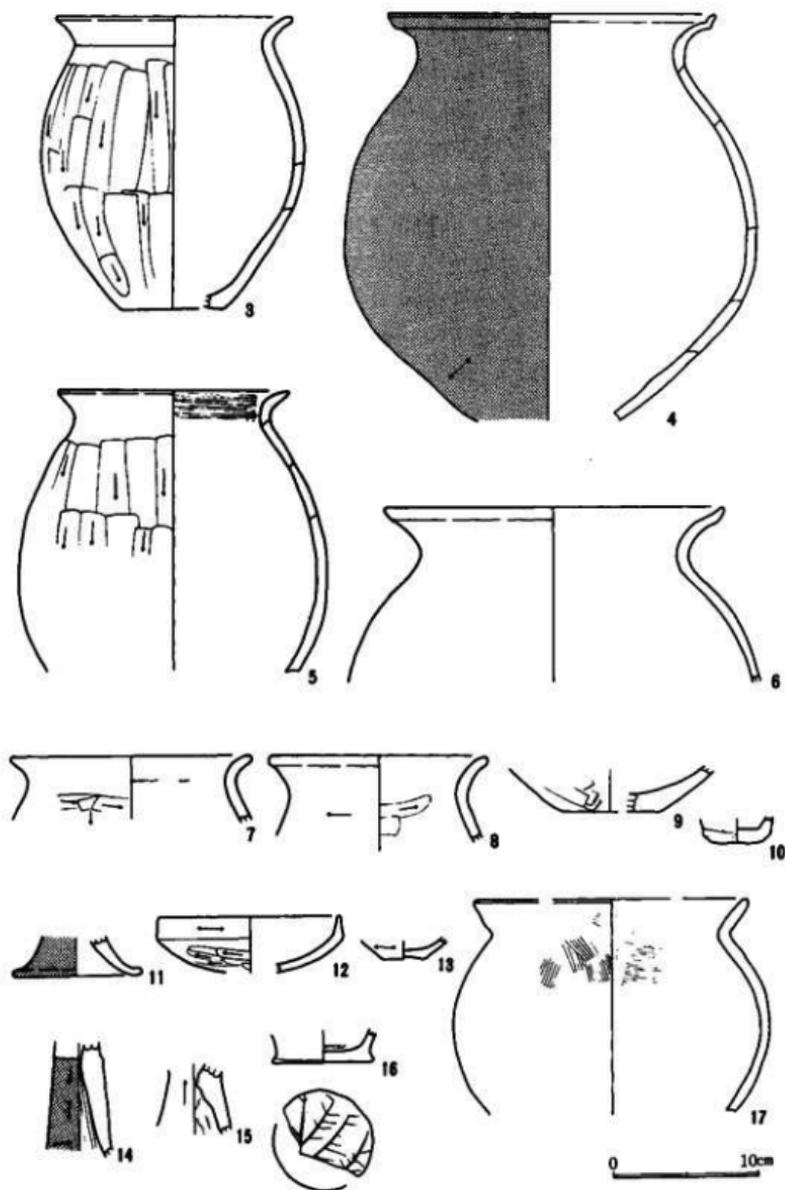
遺物は土器片と石器が出土した。残存部分の面積は狭いが、壺1点、埴1点、磨石1点の合計3点が実測可能である(第18図25~27、第4表、図版18)。そのうち(26~27)は床面に密着した状態で発見された資料である。

5 (009)号跡群出土の一括遺物

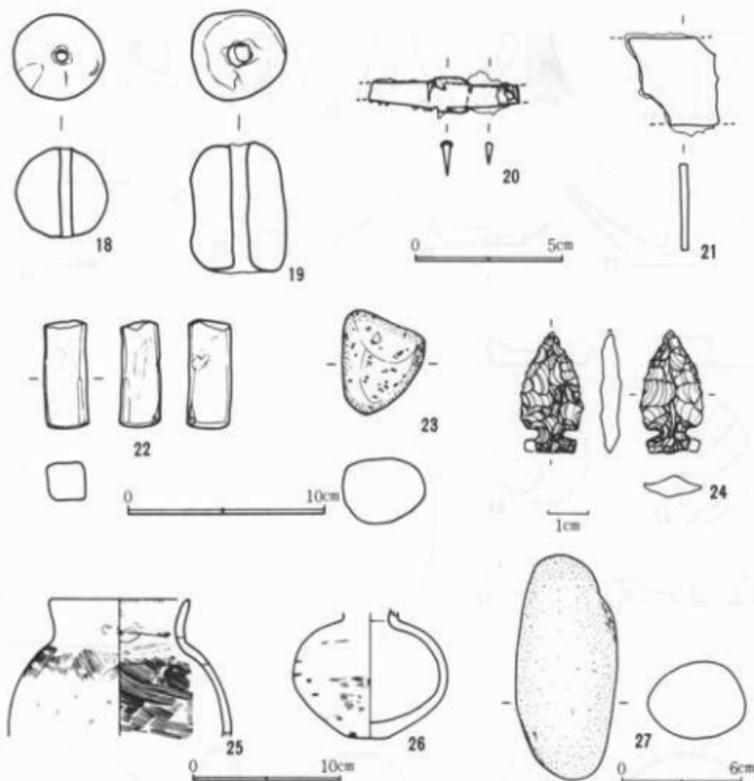
本住居跡群の覆土の中層以上から出土したもので、本住居跡群を構成する5A~5E号跡のうち、どの遺構に伴うものか明らかでない。資料は土器片、土製品などであるが、復原実測の可能なものは壺2点、壺2点、鉢1点、高坏2点、器台1点、手捏1点、器形のうかがえない底部資料10点、土製紡錘車2点、土玉1点の合計22点である(第19図28~49、第4表、図版18、30)。



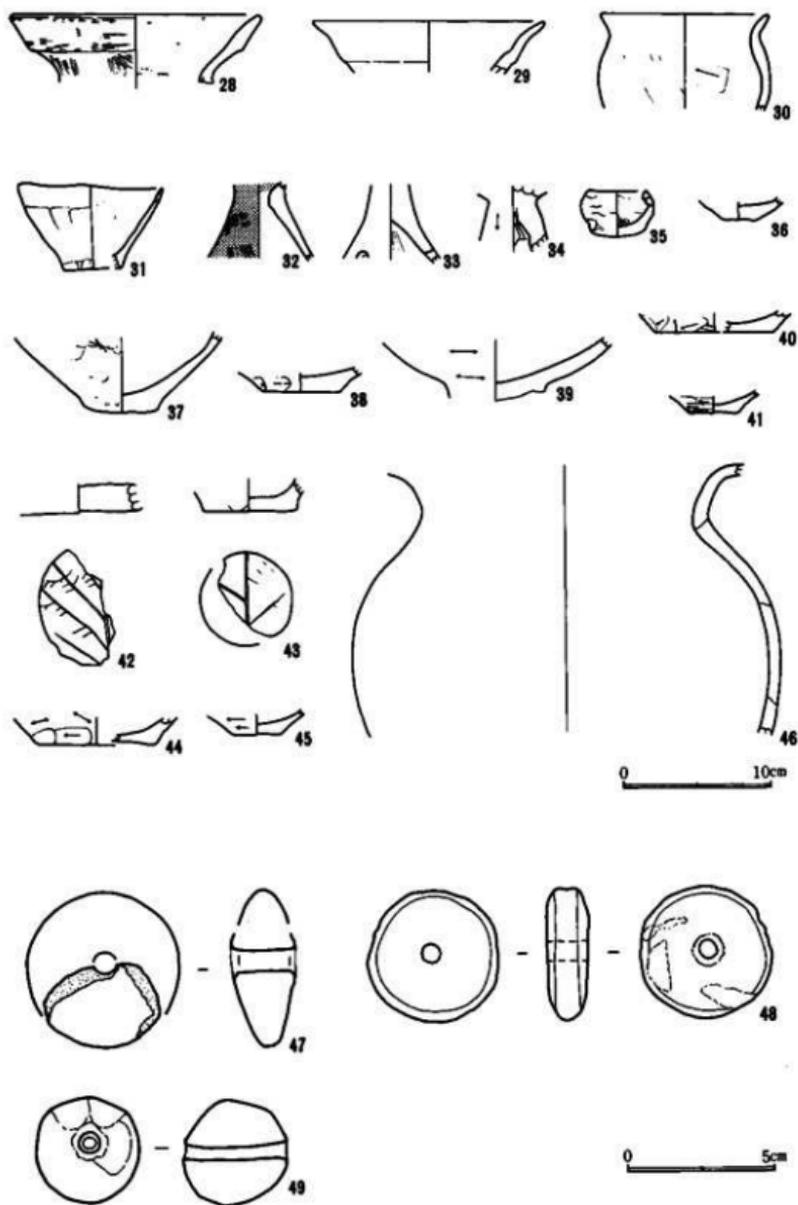
第16図 5 (009)号跡出土遺物(1)



第17图 5(009)号跨出土遗物(2)



第18图 5(009号跡出土遺物(3)) (18~21: $\times \frac{1}{2}$, 22~23: $\times \frac{1}{3}$, 24: $\times \frac{1}{5}$, 27: $\times \frac{1}{3}$)



第19图 5(009)号出土遺物(4)

第4表 5号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法 量 口徑(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 要 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
1	紡錘車	覆土		直径(5cm),厚さ1.8cm,孔径(0.8cm),現存重量12g 表裏面:3本単位の柵目状沈線が放射状に施される。側面:縄文光燬	砂粒多	普	明褐色	1/4	焼成前穿孔
2	紡錘車	覆土		直径(6cm),厚さ(2cm強),孔径(0.8cm),現存重量25g,全面に縄文光燬(付加条か?)	砂粒含	不良	明褐色	1/4	焼成前穿孔,表面磨滅
3	甕	覆土	16.0 20.5 (7)	外—口縁:回転ナデ,体部:縦位のヘラケズリ 内—横位のナデ	砂粒多	良	外—黄褐色 内—赤褐色	1/4	
4	甕	覆土	22.4 (29.5) —	外—口縁—頸部:横位のナデ 内—口縁—肩部:横位のナデ	細砂粒少	普	外} 灰褐色 内}	ほぼ完 存	底部かむける,赤彩
5	甕	覆土	15.8 — —	外—口縁:回転ナデ,体部:縦位のヘラケズリ 内—口縁:横位のハケ,体部:ナデ	砂粒多 細砂粒	普	外} 灰褐色	1/4	
6	甕	かまど	23.6 — —	外—口縁内外面ヨコナデ,体部:ナデ 内—横位のナデ	砂粒多	普	外} 黄褐色 内}	口縁部	
7	甕	覆土	(16.5) — —	外—口縁部:ヨコナデ,体部:ヘラケズリのちナデ 内—口縁部:ヨコナデ?体部:ナデ	砂粒多 スコリア	普	外} 暗褐色 内}	口縁部 1/4	
8	甕	床直	(15.5) — —	外—口縁内外面ヨコナデ,体部:横位のヘラケズリのちていおいなナデ 内—口縁:ヨコナデ,体部:横位のヘラケズリのちナデ	砂粒多 スコリア	普	外} 暗褐色 内}	口縁部 1/4	
9	甕	床直	— — (6.5)	外—ヘラケズリのちナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外} 灰褐色 内}	底部1/4	
10	手捏	床直	— — 3.7	外—ヘラケズリ 内—ヘラケズリ+あらいナデ	砂粒含	普	外} 淡灰褐色 内}	体下部のみ	
11	高坏	床直	— — (9)	外—ヘラケズリのち横位のナデ 内—ナデ	砂粒含	普	外} 暗褐色 内}	脚部部 1/4	赤彩
12	坏	床直	(12.5) — —	外—口縁:ヘラミギキ,底部:ヘラケズリ 内—ヘラミギキ	砂粒含 スコリア	普	外} 黒褐色 内}	1/4	
13	—	覆土	— — 3	外—ヘラケズリのち横位のナデ 内—ナデ	砂粒含 スコリア	普	外} 淡灰褐色 内}	底部のみ	
14	高坏	床直	— — —	外—ナデ 内—しぼり	砂粒多	普	外—灰褐色 内—黒褐色	脚部のみ	赤彩

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
15	器台	床直	— — —	外—ていねいな縦位のナデ 内—しぼり	砂粒 } 多 スコリア }	普	外 } 淡褐色 内 }	胴上部 のみ	
16	甕	覆土	— — (7)	外—横位のナデ 内—横位のナデ	砂粒多	普	外—内褐色 内—暗褐色	底部 $\frac{1}{2}$	木蓋底
17	甕	床直	(18.5) — —	外—口縁：ハケのちていねいな 縦位ナデ、体部：上部ハケの ちナデ、下部ナデ(刀) 内—口縁・体上部：横位のハケ のちナデ	砂粒 } 多 細砂粒 }	普	外—暗褐色 内—灰褐色	体部 $\frac{1}{2}$	
18	土玉	覆土		直径3.1cm, 横径3.0cm, 孔径 0.3cm, 重量26g, ヘラズリ 痕、孔縁やや磨滅	細砂粒含	普	暗灰褐色	完存	焼成前穿 孔
19	土玉	覆土		縦径4.4cm, 横径3.2cm, 孔径 0.5cm, 重量50g	砂粒含	普	暗褐色	完存	焼成前穿 孔
20	鉄製 刀子	覆土		両端部を欠損する。割れ口は 新しい。一部に木部を残す。					破損
21	鉄製品	覆土		割れ口は古い。					破損
22	礫石	覆土		4面使用、縦位の擦痕あり。 石質：砂岩					
23	礫石	覆土		約5×4.2×3cm, 表面磨滅					
24	石錘	覆土		全長3cm, 最大幅1.6cm, 厚0.5 cm, 重量1.9g, 先端角度：75° 石質：石英				基部一 部欠損	いわゆる アメリカ 式石錘
25	甕	覆土	(9.5) — —	外—口縁：右上のハケのち ナデ、体部：左上りのハケの ちナデ 内—ハケ、口縁のみハケのち ナデ	細砂粒 } 含 スコリア }	普	外 } 淡灰褐色 内 }	体上部 $\frac{1}{2}$	
26	埴	床直	— — 2.8	外—頸部：ナデ、体部：横位 のハケのちナデ消し 内—体上部：ナデ、体下部： ヘラズリ	砂粒 } 多 スコリア }	普	外 } ベージュ 内 }	体部以 下 $\frac{1}{2}$	V=0.3ℓ
27	磨石	床直		全長11.3cm, 最大幅5.2cm, 石 質：硬質砂岩、一端に打撃痕				完存	
28	壺	表土	17 — —	外—口縁：横位のハケのち横 位のナデ、頸部：ハケの ち縦位のナデ 内—横位のハケのち縦位のヘ ラミガキ	砂粒含	普	外 } 明灰褐色 内 }	口縁部 $\frac{1}{2}$	
29	壺	覆土	(16) — —	外—ヨコナデ 内—横位のナデ, ヨコナデ	砂粒多	良	外—黄褐色 内—黒褐色	$\frac{1}{2}$ 未満	

持込 番号	器種	層位	法電 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
30	甕	覆土	(11.5) — —	外—口縁：ヨコナデ、体部： ヘラケズリのち横位のナ デ 内—口縁：ヨコナデ、体部： ヘラケズリのち横位のナ デ	砂粒 スコリア	普	外—淡褐色 内—暗褐色	体上部 1/2	
31	鉢	覆土	10 6 4	外—口縁：横位のナデ（ヘラ ?）、体下部：縦位のナデ （ヘラ?）、底部：横位の ヘラナデ? 底面：ヘラ ナデ 内—一部横位のハケ	砂粒多	良	外—淡赤褐色 内—黄褐色	1/2	
32	器台	覆土	— — —	外—脚：斜位のハケ目のち縦 位のていねいなナデ 内—脚上部：横位のハケ、脚 下部：斜位のハケのちナ デ消し	砂粒多	普	外—赤褐色 内—黒褐色	脚上部	赤彩
33	高坏	覆土	— — —	外—縦位のナデ? 内—しぼり	砂粒多	不良	外 内 } 淡褐色	脚上部	3孔
34	高坏	覆土	— — —	外—ヘラケズリのち縦位のナ デ 内—しぼり	砂粒含	普	外 内 } 暗褐色	脚部1/2	
35	手捏	床直	(4) 3.2 3.6	外—指頭圧痕 内—ヘラケズリ	砂粒含	普	外 内 } 暗褐色	1/2	
36	—	覆土	— — 2	外—横位のナデ 内—ヘラケズリのちナデ	砂粒含	普	外—暗褐色 内—淡茶褐色	底部	
37	—	覆土	— — 5.4	外—ヘラナデ 内—ナデ	細砂粒含	普	外—明橙褐色 内—淡褐色	底部完 存	
38	—	覆土	— — 5.2	外—ヘラケズリのち縦位のナ デ 内—ナデ	砂粒含	普	外—暗褐色 内—淡褐色	底部ほ ぼ完存	
39	—	覆土	— — —	外—横位のナデ 内—ていねいなミガキ	砂粒多	普	外—茶褐色 内—黒色		
40	—	覆土	— — (8)	外—横位のヘラケズリ 内—弱いハケ	砂粒含	普	外 内 } 暗褐色	底部1/2	
41	—	床下	— — 3.3	外—ヘラケズリ 内—ていねいなナデ	砂粒 スコリア	多 普	外 内 } 暗褐色	底部	
42	—	覆土	— — (9)	外—不明 内—あらいナデ 指頭圧痕	砂粒多	不良	外—淡褐色 内—明茶褐色	底部1/2	木炭底
43	—	覆土	— — (6.4)	外—ナデのち底部周縁のみ横 位のナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外 内 } 暗褐色	底部1/2	木炭底
44	—	覆土	— — (8)	外—ヘラケズリのちナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外 内 } 暗茶褐色	底部1/2	

神国 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
45	—	覆土	— — 3.3	外—ヘラケズリのち横位のナ デ 内—ナデ、剥離	砂粒多	普	外—茶褐色 内—暗褐色	底部	
46	甕	覆土	— — —	外—口縁・頸部：横位のナデ 体部：縦位を基本とする ヘラナデ 内—自由方向の掌ナデ	砂粒極多	普	外—灰褐色 内—褐色	—	口縁外反
47	紡輪車	覆土		直径(5.2cm)、厚(2cm+)、孔 径(0.6cm)、現存重量18g 全面：指ナデのち片面ミガキ	砂粒多	普	黒色	1/5	焼成前穿 孔
48	紡輪車	覆土		直径4.5cm、厚1.4cm、孔径0.6 cm、重量32g、無文、孔縁磨 耗、片面に傷状の擦痕あり	砂粒多	普	淡褐色	完存	焼成前穿 孔
49	土玉	覆土		縦径3.4cm、横径3.6cm、孔径 0.4cm、重量42g、ヘラケズリ +ていねいなナデ	砂粒含	普	褐色	完存	焼成前穿 孔

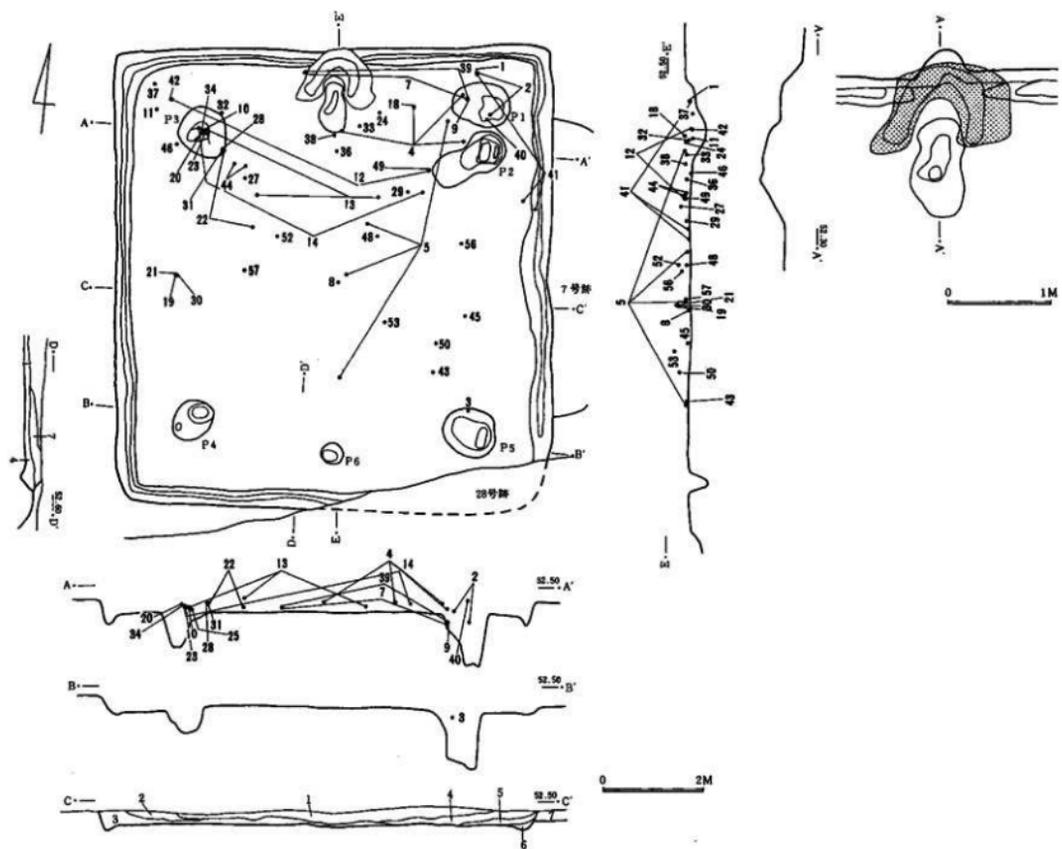
6 (010)号跡(第20図 図版6)

調査区の中央部からやや南西側寄りで検出した住居跡で、H3~H5、I3~I5グリッドに位置する。覆土上層には黒褐色土が堆積するので、プランは表土層を除去した段階で容易に確認された。プランは南北約8.8m、東西約8.6mの規模をもち南北方向に約20cm長い。南東コーナーは28号跡によって切られる。コーナーは直角に近く、プランの平面形態はほぼ正方形を呈す。主軸方向はN-7-Wを指し、東側は7号跡を切る。

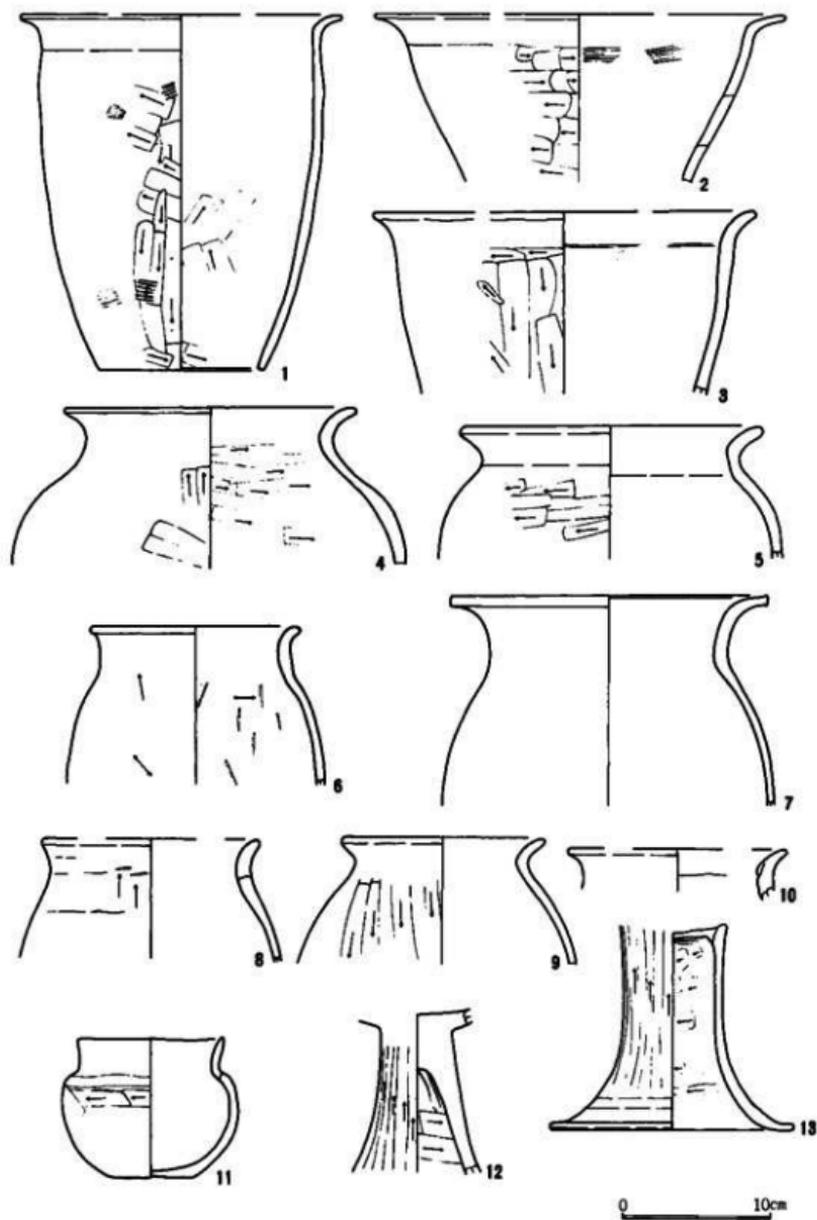
壁面は明瞭堅固である。壁高は平均約30cmを測り、壁下部は約75°~80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は南東コーナーで浅くなるが、かまどの存在する北壁中央部をのぞく壁下を全周する。溝幅は平均約20cmであるが、北東部では約10cmほどに狭まり、東壁で広がる。深さは平均約10cmである。ピットは6本確認された(P1~P6)。主な計測値は下表のとおりである。P2~P5の各ピットは、P4が他のピットの約半分程度の深さであることを除くとほぼ同規模であり、これらは主柱穴と考えられる。P2-P3間距離とP2-P5間距離はそれぞれ約5.8mと約5.7mである。P1は貯蔵穴と思われる。床面はハードロームを掘り込み平坦に整えられる。7号跡を切る

6号跡ピット計測値

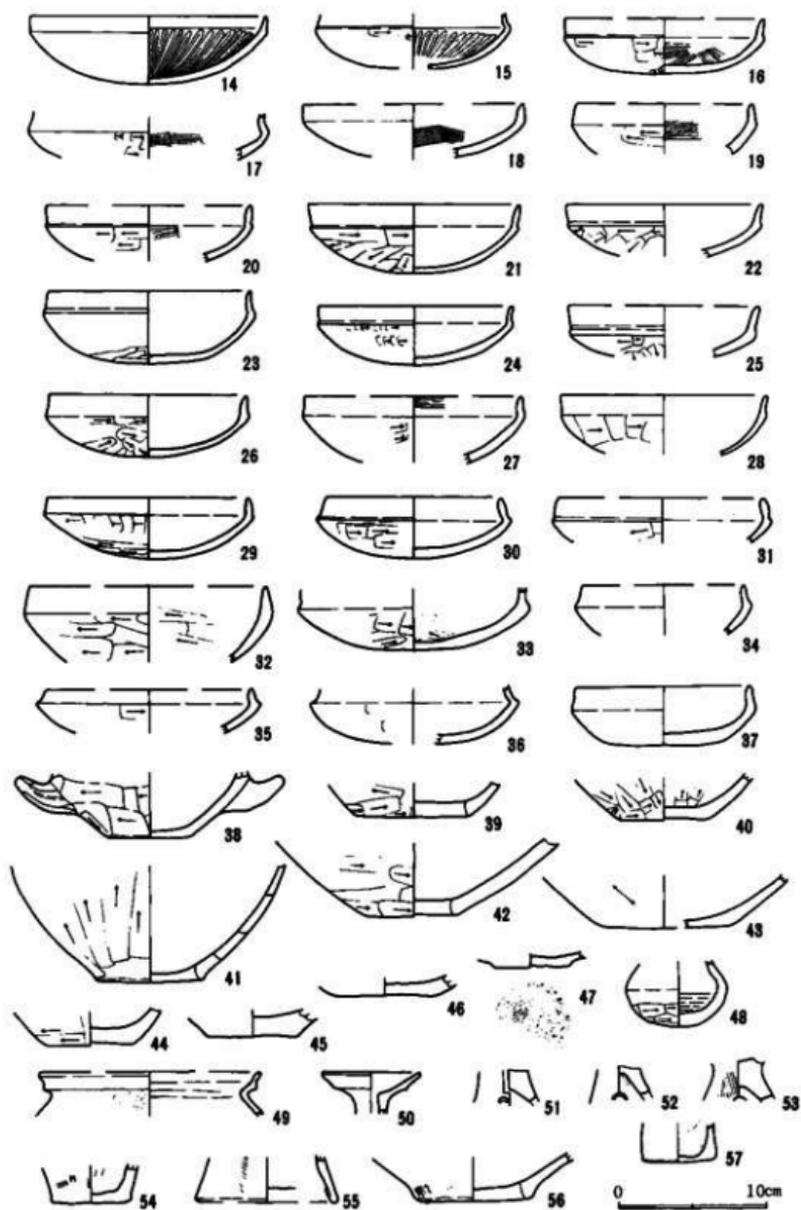
ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	120×80	30	40
P 2	150×80	40	90
P 3	100	30	70
P 4	100×80	40	50
P 5	100	60	100
P 6	40	25	40



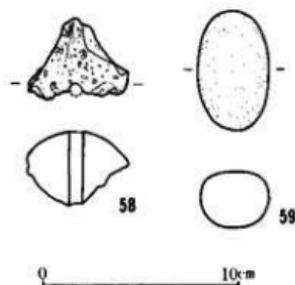
第20图 6(010)号肺炎菌图



第21图 6(010)号跡出土遺物(1)



第22図 6(010)号跡出土遺物(2)



第23図 6(010)号跡出土遺物(3)

第5表 6号跡出土遺物観察表

神田 番号	器 種	層位	注 量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 な 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
1	瓶	床直	21.8 25.6 —	外—タタキのちヘラケズリ、 口縁内外面ヨコナデ 内—体上部：ナデ、体下部： ヘラケズリ	細砂粒少	良	外— 内— } 小褐色	1/4	
2	瓶	P 1	28.8 — —	外—横位のヘラケズリ、口縁 内外面ヨコナデ 内—横位のハケナナデ	砂粒多	普	外—黄土色 内—黒色	1/4	内面に炭 素付着
3	瓶	P 5	(16) — —	外—縦位のケズリ、口縁：内 外面ヨコナデ 内—ナデ	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—灰褐色	1/4	
4	甕	覆土 P 2	(19.5) — —	外—口縁：ヘラミガキ、体部 ：ヘラケズリのちナデ 内—口縁：ヨコナデ、体部：横 位のケズリ	砂粒少	普	外— 内— } 赤褐色	1/4	
5	甕	覆土	20.4 — —	外—横位のケズリ、口縁：内 外面ヨコナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外—赤褐色 内—灰褐色	1/4	
6	甕	覆土	(14) — —	外—縦位もしくは左上りのナ デ、口縁：内外面ヨコナデ 内—横位のていねいなヘラナ デ	砂 粒 } スコリア } 多	普	外— 内— } 暗茶褐色	1/4	上半部 のみ1/4
7	甕	かま ど	21.4 — —	外—ナデ、口縁：内外面ヨコナ デ 内—ナデ	砂粒多	普	外— 内— } 黄褐色	1/4	
8	甕	床直	(14.5) — —	外—ヘラケズリのちナデ、口 縁：内外面ヨコナデ 内—ナデ	砂 粒 } スコリア } 多	普	外—暗褐色 内—暗褐色	1/4	口縁部 のみ1/4
9	甕	P 1	13.8 — —	外—体部：縦位のヘラケズリ 口縁：内外面ヨコナデ 内—横位のナデ	細砂粒多	普	外— 内— } 褐色	1/4	口縁部 のみ完 存

神田 番号	器種	層位	法量 口徑(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
10	甕	P 3	(15) — —	外—ナデ、口縁：内外面ヨコ ナデ 内—ヘラケズリのちナデ	砂粒 スコリア } 多	普	外—暗褐色 内—黒褐色	口縁部 破片	
11	小形甕	床直	(10.0) 9.6 5.5	外—口縁：内外面ヨコナデ 体部・頸部：あらいケズリ 内—ナデ	砂粒多	良	外 } 褐色 内 }	口縁部 一部欠損	
12	高坏	覆土	— — —	外—縦位のケズリ、頸部：内 外面横位のナデ 内—ケズリ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—灰褐色	脚部の み%	
13	高坏	床直	— — —	外—縦位のケズリ、頸部：内 外面横位のていねいなナデ 内—横位のヘラナデ	砂粒少	良	外 } 赤褐色 内 }	脚部の み%	
14	坏	P 3	16.0 4.8 —	外—みじかいケズリのちナデ 口縁：内外面ヨコナデ 内—ヘラミガキ	細砂粒少	良	外 } 茶褐色 内 }	ほぼ完 存	暗文(放射状)
15	坏	覆土	— — —	外—口縁：内外面横位のミガ キ、体部：一部ヘラケズリ のちナデ消し 内—ヘラミガキ	細砂粒少	良	外—黒褐色 内—黒色	1/4	暗文(放射状)
16	坏	覆土	(13.5) 3.9 —	外—口縁：内外面横位のミガ キ、体部：横位のヘラケ ズリ、底面：ヘラケズリ 内—ヘラミガキ	細砂粒少	良	外 } 灰褐色 内 }	1/4	
17	坏	覆土	(15.5) — —	外—横位のみじかいヘラケズ リ、口縁：内外面ヨコナデ 内—ヘラミガキ、光沢あり	砂粒少	普	外—黒褐色 内—褐色	1/6	
18	坏	床直	— — 15.2	外—口縁：内外面横位のミガ キ、体部：横位のミガキ 内—体部：多角形状のヘラミ ガキ	細砂粒少	普	外 } 褐色 内 }	1/4	
19	坏	覆土	(12) — —	外—横位のあらいケズリ、口 縁：内外面横位のヘラミ ガキ 内—横位のヘラミガキ	細砂粒少	普	外—赤褐色 内—褐色	1/6	
20	坏	P 3	(14) — —	外—横位のケズリ、口縁：横 位のミガキ、光沢あり 内—ヘラミガキ	細砂粒少	良	外—黒色 内—褐色	1/6	
21	坏	床直	14.6 4.8 —	外—口縁：ミガキ？ 体部： 全面ヘラケズリ 内—横位のミガキを中心とす るが、中央部は不定のミ ガキが入る	細砂粒少	普	外 } 褐色 内 }	1/6	
22	坏	覆土	(13.5) — —	外—口唇：内外面ヨコナデ、 体部：ヘラケズリ 内—体部：ていねいなナデ	砂粒含	良	外 } 暗褐色 内 }	1/6	
23	坏	P 3	13.6 4.9 —	外—口唇部内外面ヨコナデ、体 部：ヘラケズリのちナデ、 底面を中心にヘラケズリ 内—横位のナデ	砂粒少	普	外 } 黄褐色 内 }	1/6	

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
24	坏	床直	13.4 3.9 —	外—口縁：内外面ヘラミガキ、 体部：横位のケズリのち ナデ 内—横位のヘラミガキ	砂粒少	良	外—褐色 内—赤褐色	⅓	
25	坏	床直	(13) — —	外—ヘラケズリ、口縁：内外 面横位のミガキ 内—横位のミガキ	細砂粒少	良	外 内} 褐色	⅓	巻き上げ 成彩、接 合痕が残 存
26	坏	覆土	13.5 4.3 —	外—底面を中心と同心円状 のケズリ、口縁：内外面 ヨコナデ 内—横位のミガキ	細砂粒多	普	外 内} 茶褐色	⅓	
27	坏	覆土	(15) — —	外—浅い横位のケズリ、口縁 ：ミガキ 内—ミガキ、口縁：一部横ハ ケのちミガキ	砂粒少	普	外 内} 褐色	⅓	
28	坏	床直	14.0 — —	外—横位の連続ヘラけずり 口縁：内外面ヨコナデ 内—横位のミガキ	細砂粒少	良	外 内} 褐色	⅓	底部部厚 うすい、 蓋か？
29	坏	床直	13.8 4.3 —	外—口縁：横位のミガキ 体部：横位の短いケズリ 底部：横位の長いケズリ 内—横位のミガキ	細砂粒少	普	外 内} 褐色	⅓	
30	坏	床直	12.0 4.2 —	外—横位のヘラけずり、口縁 ：内外面横位のミガキ 内—ミガキ	細砂粒少	良	外 内} 褐色	⅓	
31	坏	床直	(14) — —	外—横位のケズリ、口縁：内 外面横位のミガキ 内—横位のミガキ	細砂粒少	良	外 内} 黒褐色	⅓	いぶし焼 による黒 色化
32	坏	床直	(16) — —	外—横位のケズリ、口縁：内 外面横位のミガキ 内—ケズリのち横位のミガキ	砂粒多 細砂粒	良	外 内} 赤褐色	⅓	
33	坏	床直	(15) (4.5) —	外—底部：同心円状のヘラケ ズリ、体部：横位のヘラ ケズリ、口縁：内外面ヨ コナデ 内—ヘラケズリ	細砂粒少	普	外—灰褐色 内—赤褐色	⅓	土師質
34	坏	P3	(11) — —	外—浅いヘラケズリ、口縁： 内外面横位のミガキ、光 沢あり 内—横位のミガキ	細砂粒多	普	外—黒褐色 内—褐色	⅓	いぶし焼 による黒 色化
35	坏	覆土	(14) — —	外—横位のケズリのちナデ、 口縁：内外面横位のミガ キ、光沢あり 内—横位のミガキ	砂粒含	良	外—黒褐色 内—褐色	⅓	

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
36	坏	床直	(12.5) (4.5) —	外—浅いヘラけずり、口縁内 外面ヨコナデ 内—横位のミガキ	細砂粒少	普	外—灰褐色 内—黒色	1/2	いぶし焼 による黒 色化
37	坏	床直	12.0 4.0 —	外—浅いヘラケズリ、口縁内 外面：ヨコナデ 内—横位のナデ	砂粒多	普	外 内} 赤褐色	1/2	焼成は変 形土器に 似る。
38	甕	床直	— — 5.6	外—ヘラケズリ、把手：ケズ リ調整 内—ヘラミガキ	細砂粒少	良	外 内} 褐色	1/2	牛角状把 手を持つ (おそら く2つ)。
39	甕	P1 かま ど	— — 7.6	外—横位のケズリ、底面：一 定方向への浅いケズリ 内—ナデ、底面：ケズリ	砂粒多	普	外 内} 赤褐色	底部の み	
40	甕	P1	— — 6.0	外—ヘラケズリ、底面：一定 方向のケズリ 内—ヘラナデ+ナデ	細砂粒少	良	外—茶褐色 内—赤褐色	底部の み	
41	甕	床直	— — 7.2	外—縦位のケズリ、底面：一 定方向へのケズリ 内—ナデ	砂粒少	普	外—赤褐色 内—褐色	底部の み1/2	
42	甕	覆土	— — 6.4	外—横位のケズリ、底面：同 心円状のケズリ 内—ナデ	細砂粒多	良	外—赤褐色 内—褐色	底部の み	
43	甕	覆土	— — 9.0	外—斜位のミガキ、底面：不 明 内—不定位のナデ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—黄灰色	底部の み	
44	—	覆土	— — 5.8	外—横位のケズリ、底面—不 明 内—ナデ	細砂粒少	普	外 内} 赤褐色	底部の み	
45	—	床直	— — 6.0	外—ヘラナデ、底面—ヘラナ デ 内—ヘラナデ	砂粒多	普	外 内} 茶褐色	底部の み	
46	—	床直	— — 7.0	外—ナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外—黒褐色 内—茶褐色	底部の み1/2	底面内側 に付着物 痕、ヒビ 割れ著し い、剥離
47	—	覆土	— — 5.2	外—ナデ、底面—糸切り底 内—ナデ、底面内—薄金剛	細砂粒含	普	外 内} ベージュ	底部の み1/2	回転糸切 り、混入
48	須恵器 壺	床直	— — —	外—底面—体下部に静止ヘラ ラケズリ 内—底面—体下部下にシクロ 右回転によるうず巻状の ミゾあり	白色粒子多	良	外 内} 青灰色	1/2	種の可能 性有
49	甕	床直	(15) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ヘラミガキ、ハケ目 内—ナデ	砂粒少	良	外 内} 肌色	口縁部 のみ1/2	受け口状 口縁に近 似、混入

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
50	器台	覆土	6.6 — —	外—縦位のナデ、口縁内外面 ：ヨコナデ 内—横位のナデ、穿孔のち回り 転じし穿孔方向不明	細砂粒多 黒雲母少	良	外 } 赤褐色 内 }	片	混入
51	器台	覆土	— — —	外—縦位のミガキ 内—横位のミガキ、穿孔方向 下から上	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—はだ色	脚部中 位若干	孔有(個 数不明) 混入
52	高坏	覆土	— — —	外—縦位のミガキ 内—横位のケズリ	スコリア少	普	外 } 黄灰色 内 }	脚部上 位のみ	3孔 混入
53	高坏	覆土	— — —	外—縦位のハケ 内—脚部指頭圧痕	砂粒多	良	外 } 黄白色 内 }	脚部上 位のみ	3孔 混入
54	甕	覆土	— — 5.4	外—ナデのち懸糸、表面：ヘ ラナデ 内—ヘラナデ	砂粒多	普	外—暗灰褐色 内—黒褐色	底部の みよ	混入
55	甕	覆土	— — (10)	外—斜位の短かいハケ+ナデ 内—ナデ、折り返し部は指ナ デか?	砂粒含	普	外 } 淡褐色 内 }	脚部脚 破片	脚部破折 り返し、 混入
56	—	覆土	— — 8.0	外—一部ハケ目、ナデ、底面 ：浅いケズリ(一定方向) 内—ナデ	砂粒多	普	外 } 黄灰色 内 }	底部の みよ	混入
57	—	覆土	— — —	外—ユビナデ、底面：ユビナ デ 内—指頭圧及びユビナデ	細砂粒多	普	外 } 暗褐色 内 }	底部の みよ	手捏? 混入
58	転石	覆土		本文参照					破損品 割れ口は 古い。
59	甕	覆土		全長6.2cm、最大幅3.6cm、厚3 cm、重量88g、表面平滑、両端 部に打撃痕、石質：安山岩					完存

東壁付近は貼床でやや軟質であるが、それ以外はほぼ均質に堅緻である。かまどは北壁中央に設置される。保存状態は良好で、袖は大量の山砂を主体とし、炭化繊維、ローム粒によって構築される。北壁の壁溝は、かまど袖下で立ち上がり連続しない。床掘り込みは約1m×50cm、深さ約20cmで、暗褐色土とローム土を埋め戻して火床とする。壁掘り込みは、約40°の傾斜で半円形に約30cm掘り込み、煙道とする。焚き口から煙道にかけては、粘性のない暗赤褐色土と山砂、焼土粒、炭化粒が密に堆積する。かまど袖内面および床掘り込み面は広い範囲にわたって被熱のために赤化する。覆土は暗褐色土、ローム土と若干量の炭化粒、焼土粒が堆積する。粒子は細かく、全体に密でよくしまる。C-C'における断面観察では以下の6層に分層された。

1. 黒褐色土層。粘性はない。
2. 暗褐色土層。ローム粒が少量混入する。
3. 暗褐色土層。2層と酷似する。粘性はない。
4. 茶褐色土層。ローム粒が混じる。
5. 黒褐色土層。焼土粒が少量混じる。
6. 暗褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックが混入する。
7. 暗褐

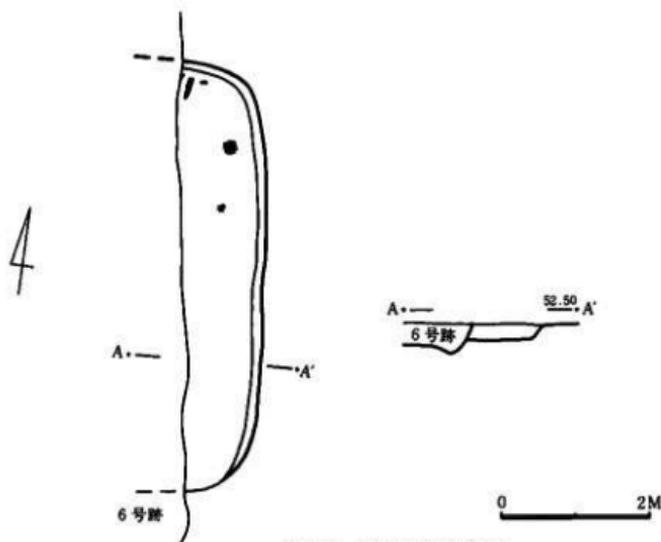
色土層。

遺物は土器片と石器が出土した。遺物量は多く、そのうち、復原実測が可能な資料は壺11点、壺3点、鉢1点、甔3点、坏24点、高坏4点、器台2点、甗1点、器形のうかがえないもの6点、台付壺台部1点、手捏1点、軽石1点、磨石1点の合計59点である(第21図、第22図、第23図、第5表、図版19、31)。遺物はプランの北半から多く発見される傾向にあつて、とくにP1~P3周辺の床面とその上面を被う覆土から出土する頻度が高い。床面に密着した状態で発見された資料は(1)、(8)、(11)、(13)、(18)、(21)、(25)、(28~33)、(36~38)、(41)、(45~46)、(48~49)である。(2)、(7)、(9)、(39)はP1内から出土したが、いずれもピット底からは浮いた位置で発見された。(58)は穿孔のある軽石であるが、破損のため5cm×4cm×4cm程度の小破片となる。現存する原表面は、丸味を帯び平滑である。穿孔は丸く成形された面から垂直方向にいてねいにあげられている。穿孔部は破損し半載されているが、穿孔の直径は少なくとも6mm前後あったものと推定される。割れ口は古いが、稜線は鋭く磨滅しない。

7 (017)号跡(第24図)

調査区の中央部西寄りで確認した住居跡でH5グリッドに位置する。プランの大部分が6号跡に切られて消滅し、出現した部分は東壁と北東コーナーである。

確認された東壁長は約5.5mで、北東コーナーは丸味を帯びる。東壁の走行方向はN-6°-Wであるので、本号跡の主軸方向はこれに近い値を指すか、これより90°西に振ったN-95°-W前



第24図 7 (017)号跡実測図

後を指すものと推定される。壁面は軟質だが明瞭である。壁高は平均約15cmで、壁下部はハードロームを掘り込み、約50°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝とピットは認められない。床面はハードロームを掘り込み、ローム土と暗褐色土の混合土で平坦に整えられるが、軟弱である。覆土には炭化粒、焼土を混じえた暗褐色土が堆積する。層厚は薄く分層は困難である。床面には多量の炭化粒と焼土ブロック、炭化材が密着しており、焼失住居の可能性がある。

遺物は、数点の土器片が床面に密着した状態で出土したが、いずれも復元実測は不可能である。なお第72図11に比較的保存状態の良好な資料の拓影を示した。

8 (018)号跡群(第25図 図版8)

調査区の北側中央部で検出した住居跡群で、A4~6, B4~6C5~6, D5~6各グリッドに位置する。覆土は、暗褐色に直径1cmのハードローム、焼土粒などを混じえた土壌で、住居跡の存在は表土を除いた段階で容易に知れた。しかし調査区の北側を東西に走る農道に近く、イモ穴等の攪乱が著しいこと、掘削工事の影響によって残存する覆土の層厚が薄いことなどの理由により、重複する住居跡プランの確認は手間だった。29号跡と9号跡に切られ、また東側は攪乱溝のために破壊され消滅する。ピットは18本確認された(P1~P18)。

覆土堆積物は暗褐色土、ローム土、炭化材、焼土等である。全体によくしまるがやや軟質である。C-C'における断面観察では以下の7層に分けられた。1. 褐色土層。炭化粒、炭化材、焼土粒を多く含む。2. 褐色土層。直径約0.5~3cmのハードロームブロックを多量に含む。3. 褐色土層。直径約0.5~1cmのハードロームブロックを多量に含む。4. 褐色土層。直径約0.5~4cmのハードロームブロックを多く含む、焼土粒、焼土ブロックが多く混じる。5. 暗褐色土層。直径約1~4cmのハードロームブロックが多い。6. 褐色土層。直径約1~2cmのハードロームブロックを含む。焼土粒はほとんどみられない。7. 暗褐色土層。直径約2~3cmのハードロームブロックを含む。

覆土の堆積状態とピットおよび炉址の位置関係等にもとづくと、本号跡群内に重複する住居跡は少なくとも4軒(8A~8D号跡)以

8号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	22	10	46
P 2	22	12	50
P 3	30	15	50
P 4	24	18	40
P 5	40	24	30
P 6	32	18	48
P 7	38	14	54
P 8	45	19	47
P 9	28	13	35
P10	52	13	56
P11	40	18	51
P12	68	12	72
P13	70	18	60
P14	70	48	55
P15	67	33	66
P16	68	23	49
P17	42×28	22×10	62
P18	32	20	32
P19	50	22	40

上で、他にもう1軒(8E号跡)の住居跡が存在した可能性がある。各住居の構築時期の新旧関係は、8E号→8A号→8B号であるが、8C号跡と8D号跡、8B号跡と8C号跡の新旧関係は不明である。

8A(018A)号跡

8号跡群の南側にある住居跡で、C5~6, D5~6 グリッドに位置する。中央部を29号跡が縦断し、東側を8B号跡、南壁の一部を9号跡にそれぞれ切られるが、西~南壁がよく残存しており、プランの確認は比較的容易であった。プランは南北約7.7m、東西は推定約6.4mで、南北方向に約1.3m長い。南北壁は外方へ張り出し、東西壁は直線状である。コーナーは丸味を帯び、平面形態は小判形に近い隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-93°-Wでほぼ真西を指す。

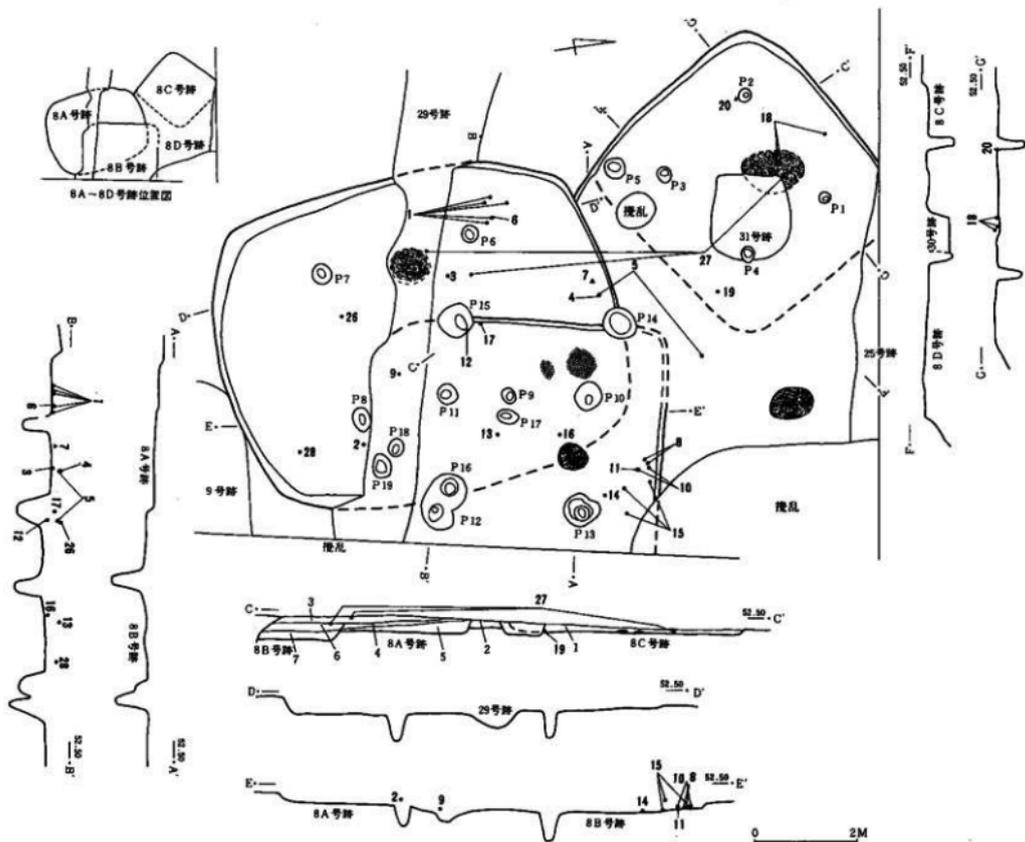
壁面は明瞭で、壁高は南壁で約35cm、西壁で約30cmと比較的高い。壁下部はハードロームを掘り込み、約60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は存在しない。本号跡にともなうピットは4本確認されている(P6~P9)。これらはプランの対角線上に位置しており、いずれも支柱穴と推定される。P6-P7間、P7-P8間距離はそれぞれ約2.9mと約3mで、南北壁と東西壁の壁長差にかかわらず支柱穴間はほぼ等長である。床面はハードロームを掘り込み、平坦堅緻に整える。炉址は29号跡に切られて原形を失なうが、焼土粒と赤化したハードロームが溝壁にわずかに残存し、その位置を推定することができる。それによると、本号跡の炉はP6-P7の中間よりやや東に寄ったところに設けられ、床への掘り込みは約10cm程度と推定される。

遺物は土器片と土製品が出土した。そのうち復原実測の可能な資料は壺5点、埴1点、土玉1点の合計7点である(第26図1~7, 第6表, 図版21, 30)。このうち(1~2)と(5)は床面に密着した状態で発見された。なお、第25図の(26~28)は、第72図に拓影を示した弥生土器の出土地点を表している。

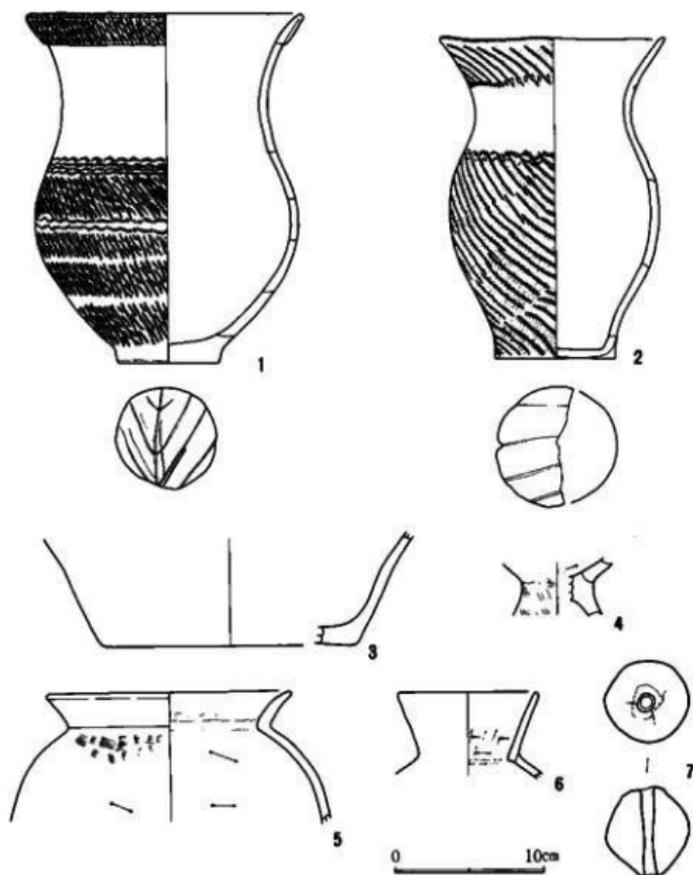
8B(018B)号跡

8号跡群の東側にある住居跡で、C5-C6グリッドに位置する。8A号跡を切るが、南側と東側を29号跡と攪乱溝に切られる。南壁および東壁と各コーナーは消滅しており、プランの復原は困難である。西壁の走行方向はN-11°-Eを指す。本号跡の主軸方向もこれに近似するものと思われる。

壁高は西壁が約13cm、北壁が約7cmで全体に低い。壁下部は約55°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットはP10~P13が推定されるプランの対角線上に位置しており、支柱穴と考えられる。P13-P10間とP10-P11間距離はそれぞれ約2.2mと約2.8mで、南北方向の支柱穴間距離が約60cm長い。床面はローム土と暗褐色土で平坦に整えるが、脆く軟弱である。炉址はP10-P13間の中央やや南寄りに設置され、約65cm×60cmの楕円形を呈す。床への掘り込みは約10cmで、粘性の失われた直径2~3cmのハードロームブロックと暗褐色土、焼土が堆積する。掘り込み底のハードロームは、被熱の影響でレンガ化している。



第25图 8 (018)号桩实测图



第26図 8(018)号跡出土遺物(1) (7:× $\frac{1}{2}$)

遺物は土器片と礫が出土した。そのうち復原実測の可能な資料は、壺3点、壺1点、器形のうかがえない底部資料2点、高坏2点、埴(?)1点、礫(?)1点の合計10点である(第27図8~17, 第6表, 図版21)。

8C(018C)号跡

8号跡群の北西にある住居跡で、A4~A5, B4~B5グリッドに位置する。25号跡, 31号跡に切れ、全体に耕作の影響が強く、東壁, 南東コーナー, 南壁は消滅する。北西コーナーは丸味を帯び、プラン全体は一辺約5m程度の隅丸正方形になる可能性が高い。西壁の走行方向はN-38°-Wで、本号跡の主軸方向もこれに近い値を指すものと考えられる。

壁面の保存状態は不良で、やや軟質である。壁高は平均約9cmで全体に低い。壁下部は約50°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットは5本確認されており(P1~P5)、いずれも主柱穴と考えられる。P1~P4は推定されるプランの対角線上にある。P1-P2間、P2-P3間距離はそれぞれ約2.6mと約2.2mで、東西方向の柱穴間距離が約40cm長い。床面はハードブロックと暗褐色土の混合土で平坦に整えられるが、脆弱である。炉址は31号跡と耕作によって破壊され原形を保たない。残存部に焼土粒を認めるが、床への掘り込みはほとんど確認できない。炭化材、焼土ブロックが床面に密着して広く分布しており、焼失住居の可能性がある。

遺物は土器片と石器が出土した。復原実測の可能な資料は、甕1点、鉢1点、石鏃1点の合計3点である(第27図18~20、第6表、図版20、32)。

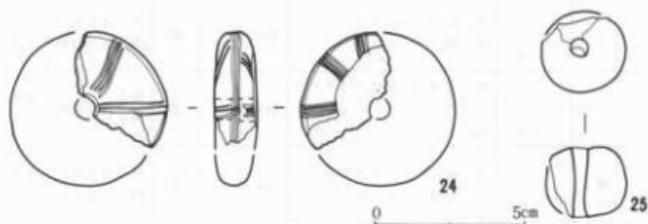
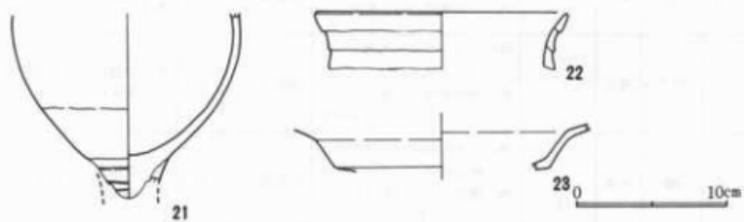
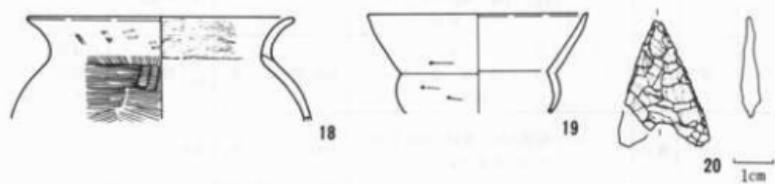
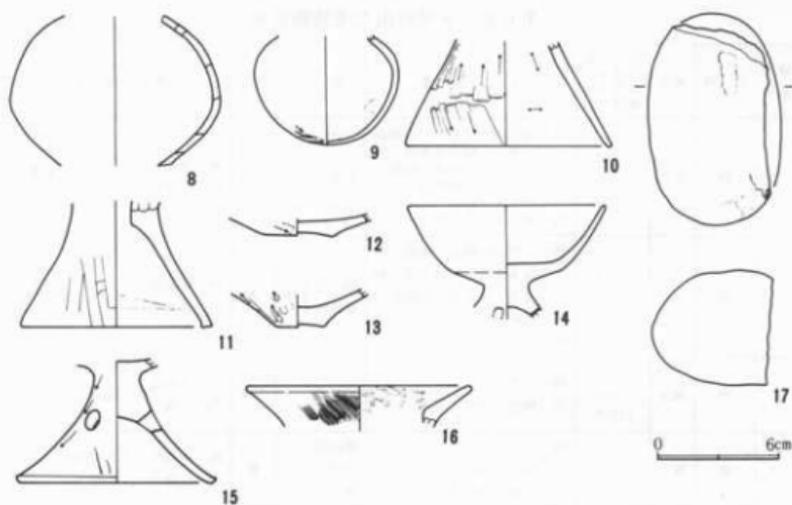
8D(018D)号跡

8号住居跡群の最も北側に位置する住居跡で、A5~A6、B5~B6グリッドに位置する。25号跡に切られる。壁面、壁溝、柱穴等は発見できなかったが、後述のように床面が一部に残存すること、炉址があること、炉址周辺部から土器片が発見されることなどから、本号跡は竪穴住居跡と考えられる。

床面はローム土と暗褐色土の混合土を平坦に整えたもので、全体に軟弱である。西側に隣接する8C号跡の床面とはほぼ同レベルで、両者の間に段差や硬度差をみとめることはできなかった。炉址は、長径約85cm、短径60cmの楕円形である。床への掘り込みは約5cmで、暗褐色土とローム粒、焼土粒が堆積し、掘り込み底にあるハードローム面は広い範囲にわたって赤化し、粘性を失なう。炉の主軸方向はN-2°-Eのほぼ真北を指す。なお、炉址周辺から少数の土器片が得られたが、復原実測の可能なものはなかった。

8E(018E)号跡

本号跡は、8B号跡西壁の精査中に確認された2本のピット(P14~P15)と8B号跡床面を精査中に発見した2本のピット(P12~P13)の合計4本のピットである。壁面、壁溝、床面、炉址等は検出されていないが、これらの4本のピットは、いずれも直立した棒状を呈し、直径、深さも8号跡群内で発見されたピットの中では最大規模をもつこと(別表)、P12、P13、P14、P15を結ぶ線は長方形に近いこと、P12とP14、P13とP15を結ぶ線は互いに両者をほぼ2等分することなどから、竪穴住居跡の主柱穴である可能性がある。なお、P14-P15間距離は約3.1m、両ピットを結ぶ線の走行方向はN-9°-Eを指し、真北に近い。またP13-P14間距離は約3.8mで、前者よりも約70cm長い。すでに述べたように8A号跡と8B号跡は、本号跡との重複部分で壁面と床面を確認することができる。したがって、もし本号跡が竪穴住居跡だとすれば、その構築時期は8A号住居、8B号住居に先行することが明らかで、8B号住居は本号住居跡の4本の主柱穴のうちの2本を再利用して構築した可能性がある。なお、本号跡にともなう遺物は発見されなかった。



第27图 8(018)号踏出土遗物(2) (17: $\times \frac{1}{2}$, 20: $\times \frac{1}{2}$, 24~25: $\times \frac{1}{2}$)

第6表 8号跡出土遺物観察表

神田 番号	器 種	層位	法 量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 な 特 徴	胎 土	焼 成	色 調	残 存 度	備 考
1	甕	床直	18.4 23.6 6.6	外—縦位のヘラナデ、口縁部・体部：付加糸充填 体中部：2段6条の結節状文、下段の結節状文は途中で消える。 内—横位のヘラナデ	砂粒少	良	外—赤褐色 内—赤褐色	1/2	掘り戻し、木重底 V=2.5ℓ
2	甕	床直	15.1 21.6 8.1	外—ナデ、口縁部・体部：付加糸充填、口縁下部：刺突文、体上部：不明な結節状文 内—ヘラナデ	砂粒多 細砂粒	良	外—暗褐色 内—茶褐色	1/2	木重底 V=1.9ℓ
3	甕	覆土	— — (17.5)	外—ナデ 内—横位のナデ	砂粒多	不良	外—淡褐色 内—明褐色	底部1/2	
4	甕	覆土	— — —	外—ハケ 内—棒状工具によるケズリと一部ヘラケズリ	細砂粒 スコリア少 含	普	外—明褐色 内—灰褐色	台付接 合部1/2	
5	甕	覆土	(16.5) — —	外—口縁：ヨコナデ、体部：斜位のハケのちナデ消し 内—口縁：横位のハケのちヨコナデ 体部：ナデ	砂粒少	普	外—暗橙褐色 内—橙褐色	上半部 1/2	
6	埴	床直	9.5 — —	外—ヘラミガキ 内—口縁下部：横位のヘラナデ、横位のナデ	砂粒多	普	外 内 } 橙褐色	口縁部・ 肩部 のみ	
7	土玉	覆土	— — —	縦径3.0cm、横径2.8cm、孔径0.3cm、重量19g	砂粒含	普	褐色	完存	
8	壺	床直	— — —	外—縦位のミガキ 内—一部横位のヘラナデ	砂粒多	良	外 内 } 赤褐色	体部 のみ1/2	
9	埴?	覆土	— — —	外—ヘラケズリのち麗なヘラナデ、底部ヘラケズリ 内—底面指頭圧、体部には一部ヘラケズリをみとめる	砂粒多	良	外—黄褐色 内—黄灰色	胴部 のみ1/2	
10	甕	床直	— — 14	外—上半部縦位のヘラケズリ、胴部斜位のヘラケズリ 内—横位もしくは斜位のヘラケズリ(?)	砂粒多	普	外—茶褐色 内—暗褐色	台部1/2	
11	甕?	床直	— — 12.8	外—縦位のヘラナデ 内—横位のヘラナデ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—淡赤褐色	台付部 のみ	穿孔あり (焼成前)
12	—	P15	— — 4.8	外—底縁部：横位のヘラケズリのちナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外 内 } 黒灰褐色	底部 のみ	
13	—	覆土	— — 3.4	外—縦位のヘラケズリ 内—ヘラケズリのちナデ	砂粒含	普	外—暗灰褐色 内—明褐色	底部 のみ	

埴器 番号	器種	部位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	新土	焼成	色調	残存度	備考
14	高坏	床直	13.4 — —	外一環：縦位のナデ、脚：縦位のヘラナデ 内一環位のナデ	細砂粒少	良	外} 淡い赤橙内} 色	%	3孔
15	高坏	床直	— — (13)	外一脚：縦位のヘラミガキ 縮線：内外面ヨコナデ 内一ナデ	砂粒多	善	外一褐色 内一橙褐色	脚部%	3孔
16	甕	覆土	(15) — —	外一口縁ハケ 内一ハケのちナデ	スコリア含	善	外一灰橙褐色 内一暗褐色	口縁部 1/4~1/2	
17	甕			全長13cm, 最大幅5.6cm, 厚さ5.8cm, 石質：流紋岩、赤熱表面にスス付着、割れ口は古く、割れ口面も赤熱				%	
18	甕	覆土	17.8 — —	外一口縁：縦位のハケのち縮線ヘラナデ、頸部：縦位のハケ、体部：横位のハケ 内一横位のナデ、口縁：横位のハケ	細砂粒 スコリア } 少	不良	外一灰褐色 内一黄褐色	口縁部のみ1/2	回転台使用
19	鉢	床直	(14.5) — —	外一横位、斜位のていねいなナデ 内一横位のナデ、割離著しい	砂粒 小石多し	善	外一褐色 内一暗灰褐色	口縁及び体上部1/2	
20	石鏡			全長3.2cm, 最大幅2.3cm, 厚0.5cm, 重量1.75g, 先端角度47°, 石質：安山岩				基部欠損	
21	?	覆土	— — —	外一縦位のミガキ 内一横位のケズリ	砂粒少 白石粒子少	良	外} 赤褐色内} 色	坏部のみ1/2	高坏もしくは台付甕か(?) ホゾによる推定
22	甕	覆土	(17) — —	外一横位のナデ 内一横位のていねいなナデ	砂粒含	善	外一暗褐色 内一淡灰褐色	口縁部破片	3段以上の輪破成
23	高坏	覆土	— — —	外一横位のナデ 内一横位のナデ	砂粒少	善	外一黄白色 内一黒色	坏部1/2	内面炭素吸着
24	紡錘車	覆土		直径(5cm+), 厚(1.5cm), 孔径(0.6cm±), 現存重量10.3g, 裏裏面：4単位の罫目文が放射状に施される、側面：2単位罫目文一帯	砂粒含	良	茶褐色	1/2	焼成前穿孔
25	土玉	覆土		縦径2.4cm, 横径2.7cm, 孔径0.5cm, 現存重量14g 孔縁磨減なし	砂粒多	不良	淡褐色	一部破損	焼成前穿孔

8 (018)号跡群出土の一括遺物

8号跡群覆土の上層から出土したもので、帰属の明らかでない遺物が多量にある。そのうち復原実測の可能な資料は、甕1点、高坏1点、台付甕もしくは高坏の脚部と推定される資料1点、土製紡錘車1点、土玉1点の合計5点である(第27図21~25, 第6表, 図版21, 30)。

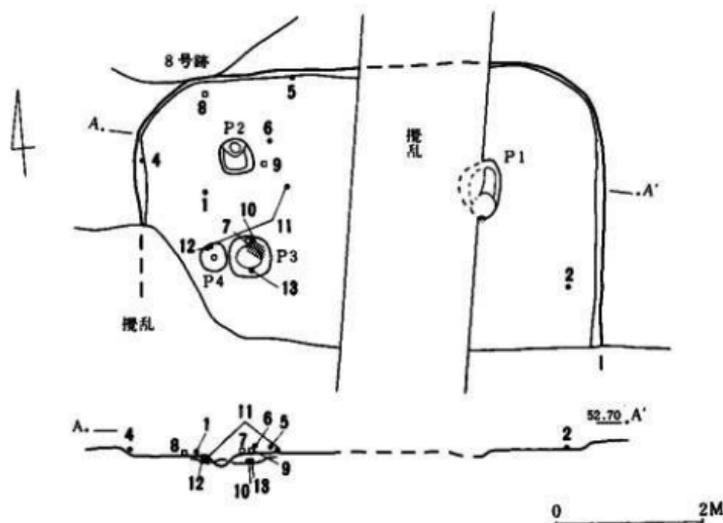
9 (016)号跡(第28図, 図版7)

調査区域のほぼ中央付近に検出した住居跡で、D6～D7グリッドに位置する。当該グリッド付近は、ブルドーザー等による攪乱の影響が最も強く、プランの確認はかなりおくれた。プランの南半は、削平作業によって破壊されたもようで、ソフトローム上面にキャタピラーの痕跡が残されている(図版7)。また、プランの中央を幅約1.7mの灌漑用トレンチが南北に縦走する。確認したプランの大きさは東西約6.5m、南北約4mであるが、南北方向にはさらにのびていた可能性が高い。検出された2つのコーナーは丸味を帯びており、プランの平面形態は隅丸方形に近いものと推定される。なお、東西両壁を図上延長した線が、本号跡の主軸方向と平行関係にあるとすれば、主軸方向はN-6°-Eを指す。

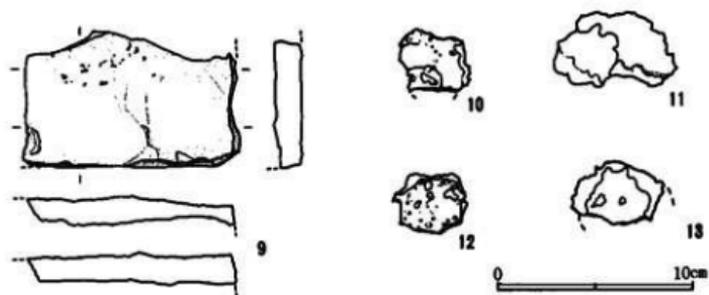
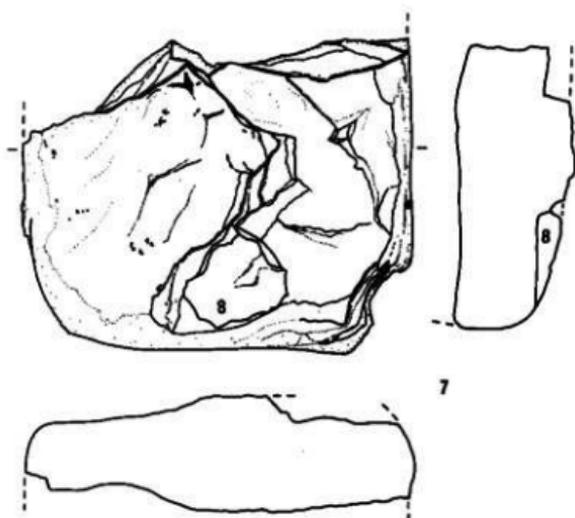
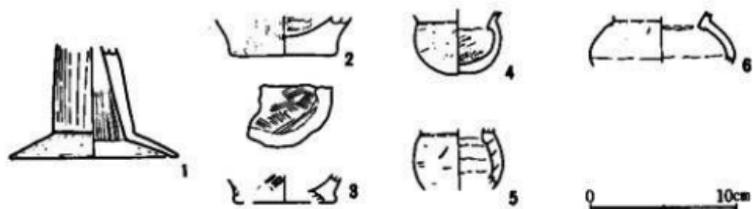
壁高は、最も高いところでも平均約10cmと低く、壁面はやや不明瞭である。壁下部は、約40°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝はみとめられない。ピットは4本確認された(P1～P4)。これらの計測値等は右表に示すとおりで、いずれも開口部直径の大きさの割に深度はきわめて浅い。P3とP4内には多量の炭化粒と焼土粒が堆積しており、P3底面には、焼土ブロックが密着する。また、このP3内からは、後述のように鉄滓と金床石と推定される石片

9号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	80×30以上	—	8
P 2	45	12	18
P 3	55	35	8
P 4	35	8	5



第28図 9(016)号跡実測図



第29图 9(016)号跡出土遺物

第7表 9号跡出土遺物観察表(1)

神区 番号	器種	層位	法 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	量	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	高坪	覆土	— — 11.4	—	外一脚：ヘラケズリ、崕：ナデ 内一脚：ヘラケズリ、崕：横位 のナデ	細砂粒 スコリア	少 青	外一灰暗褐色 内一黒褐色	脚底部 破片	
2	—	覆土	— — (7.5)	—	外一ハケのち弱いナデ、底面 ：弱いハケ 内一ヘラケズリ	砂粒多	青	外 内} 明褐色	底面写	
3	甕	覆土	— — (7)	—	外一ナデのち斜行縄文 内一ナデ、底縁：指頭圧痕	砂粒 スコリア	多 青	外 内} 茶褐色	底部写	
4	埴	覆土	— — 2.5	—	外一ヘラケズリのちミガキ 内一ヘラケズリ、ナデ	砂粒 スコリア	多 青	外一淡褐色 内一灰褐色	口縁部 を除いては 完存	ミニチュ ア土器
5	埴	覆土	— — —	—	外一ヘラケズリのちていぬい なナデ 内一ナデ、輪ツミ痕残す	砂粒 スコリア	多 青	外一灰暗褐色 内一暗褐色	胴部破 片	
6	埴	覆土	— — —	—	外一ヘラケズリのちていぬい なナデ、指紋が残る 内一ナデ、口縁：ヨコナデ	砂粒少	青	外一褐色 内一橙褐色	胴部約 半分	

が出土したが、P3周辺部にもこれらが存在する。床面は、保存状態が悪く、全体に軟弱で不明瞭である。なお、本号跡の覆土は粒子の細かい暗褐色土であるが、層厚が薄いため分層は困難で、断面実測は行わなかった。

遺物量は残存する覆土体積が小さい割には比較的多く、土器片、石器、鉄滓が出土した。そのうち、復原実測の可能な土器は、甕1点、埴3点、高坪1点の合計5点と、金床石1点およびその破片と鉄滓である(第29図、第7～9表、図版20, 31)。これらの資料の多くは、プランの西側から発見され、P2～P4の周辺部に集中する傾向にある。(7～13)は、床面上もしくはピット底から出土したもののだが、他の資料は、床面レベルから約7～8cm浮いた状態で発見された。(7～9)は、安山岩質凝灰岩を利用したもので、金床石と推定される。表面の色調はくすんだ茶褐色を呈し、重量感がある。表面に鉄と思われる金属性の黒色付着物がある(図中の黒斑部)。(7)は、多数の剥片とともにP3内壁面に寄りかかるように出土したもので、本号跡から出土した金床石の中では最大である。側面は、3面に粗い調整が施され丸味を帯びるが、残りの1面は破損面で凹凸がある。破損面の割れ口は古い。背腹面の片面はほぼ平坦であるが(以下ではこの面を腹面)、他面(以下ではこの面を背面)は凹凸が著しく、平坦な面はほとんどみられない。金属性の付着物は、背腹両面に存在するので、両面が使用されたものと推定されるが、量的には腹面の方に多くの付着物が存在する。おそらくこれは、両面の使用頻度の相対的な差にもとづくものと思われる。(8)は、(7)の背面と接合する破片資料である。しかし、(8)と

第8表 9号跡出土遺物観察表(2)

押図番号	種類	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)	備 考
7	金床石	20.1	15.8	6.3	2,650	鉄肉面付着、茶褐色
8	金床石	5.4	5.3	1.3	32	片面茶褐色
9	金床石	11	7	1.4	182	両面鉄付着、茶褐色
—	金床石	5.2	4.7	1	27	両面茶褐色
—	金床石	5	5	0.8	26	片面鉄付着、両面茶褐色
—	金床石	4.4	3.2	1	23	片面鉄付着、茶褐色
—	金床石	5	3.7	0.5	17	両面茶褐色
—	金床石	4	3.7	0.4	9	片面鉄付着、茶褐色
—	金床石	5.7	2.2	0.8	9	側面破片、片面鉄付着、両面茶褐色
—	金床石	5	2.4	0.8	8	片面鉄付着、両面茶褐色
—	金床石	5.3	1.7	0.6	7	鉄片面付着、茶褐色

第9表 9号跡出土遺物観察表(3)

押図番号	主 な 特 徴	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	重量(g)
10	比重は軽く、錆の浮出しはほとんどない。表面、破損面には多量の気孔がある。裏面に砂粒が付着する。欠損あり。	3.7	2.8	1.4	8.7
11	比重は軽く、気孔が多い。錆の浮出しはほとんどみられない。裏面には砂の付着が著しい。二段重ねになっている。完存。	6.3	3.9	2.1	18.9
12	比重は小さく、錆の浮出しはほとんどない。気孔が多量にある。裏面には砂粒の付着が著しい。欠損あり。	3.6	2.8	1.5	7.1
13	比重は比較的大きく、錆の浮出しが部分的にみられる。表面は比較的少ない。破損面には直径3～5mmの気孔が多い。欠損あり。	4.5	3.1	1.6	27.3

接合する(7)の剝離面にも、上記と同質の金属性の付着物が存在するので、(7)は(8)が剝離したのちもひきつづき使用されていたものと考えられる。なお、本号跡からは、図示した以外にも板状に剝離した石片が多く発見されている(第8表)。これらは(7)、(8)と同じ石質であること、P3およびP4を中心とする比較的狭い範囲から出土すること、(7)の表面には板状の石片が剝離したために生じたと思われる剝離痕が多くみられること、また(8)のように(7)と接合する剝離資料が発見されることなどから、いずれも(7)と同一個体に由来する可能性が高い。(9)は、これらの剝片資料の中では最も大きく、実測にたえうるものである。金属性の付着物は片面だけにみとめられる。(10～13)は、鉄滓で、主な特徴と計測値は第9表に示すとおりである。

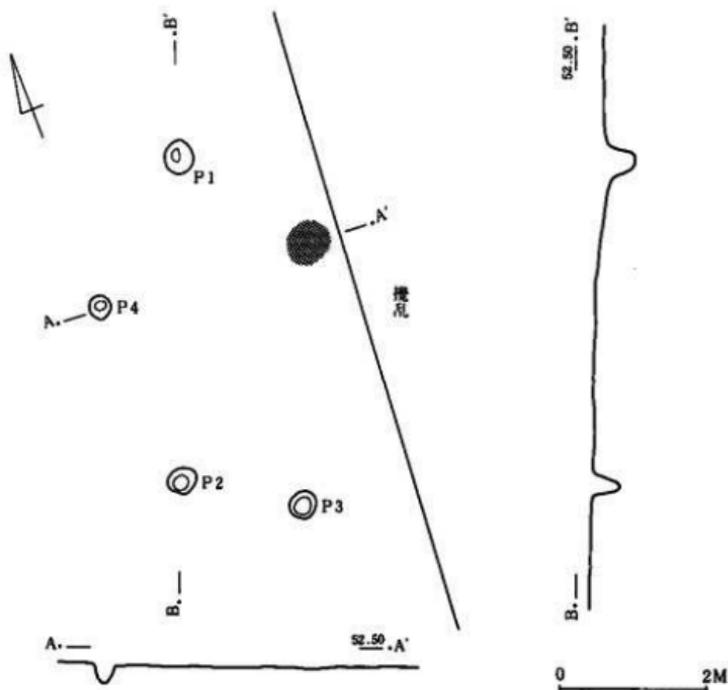
10(031)号跡 (第30図)

調査区のほぼ中央部に検出した遺構で、F6、G6グリッドに位置する。当グリッド付近は、調査開始以前に表土層と包含層の大部分が除去され、ソフトローム層との漸移層が露出していた。本号跡は、この面上で確認された焼土ブロックとその周辺のビット(P1~P4)から構成されるもので、壁面、壁溝等の存在は、確認できなかったが、一応竪穴住居跡としておく。本号跡東側は攪乱溝によって消滅する。

ビットはいずれも直立した棒状を呈し、全体の形状は互によく似る。P1の南東には、直径約60cm、深さ約5cmの範囲で、ソフトロームの赤化した部分があり、焼土粒がブロック状に混在する。これを炉址と考えてよいとすれば、P1~P3は支柱穴の可能性ある。P1-P2間を結ぶ線の走行方向は、N-21°-Eを指す。床面および遺物は検出できなかった。

10号跡ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	40	10	35
P 2	35	20	36
P 3	40	20	49
P 4	30	15	23

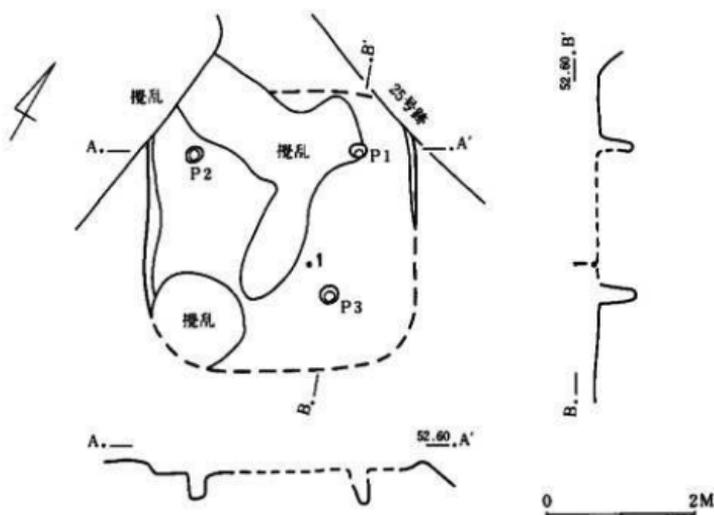


第30図 10(031)号跡実測図

11(026)号跡 (第31図)

調査区北端中央部で検出した住居跡で、B7グリッドに位置する。ハードルームを掘り込む深い攪乱溝とイモ穴等による攪乱が著しく、プランの全容は明らかでない。わずかに確認された東壁と西壁間距離は約3.6mであるが、南北壁は確認できなかった。西壁の走行方向は、N-30°-Wを指し、壁高は約17cmである。東壁高は約13cmで、壁下部は約60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットは3本確認された(P1~P3)。いずれも支柱穴と考えられる。P1-P2間、P1-P3間距離はそれぞれ約2.2mと2mである。床面は攪乱が著しく、ほぼ全面が破壊される。おそらく炉も攪乱によって消滅したものと思われる。覆土もどの程度プライマリーな堆積が保存されているか明らかでないが、B-B'における断面観察では褐色土を主体としハードルームブロックが不均質に混在する単層である。

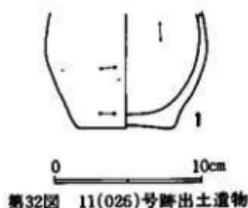
遺物はP3周辺部の覆土中から土器片が出土した。そのうち復元実測が可能なものは、壺と思



第31図 11(026)号跡実測図

11号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	22	10	31
P 2	20	14	36
P 3	25	14	49



第32図 11(026)号跡出土遺物

第10表 11号跡出土遺物観察表

検出 番号	群植	層位	法量 口徑(cm) 口高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
1	—	覆土	— — 6.5	外—ヘラズリのち斜位の粗 いナデ 内—斜位のナデ	砂粒多	普通	外—暗褐色 内—赤褐色	胴下半 部欠	底面内面に 付着物 痕

われる底部資料1点である(第32図, 第10表)。

12(022)号跡 (第33図)

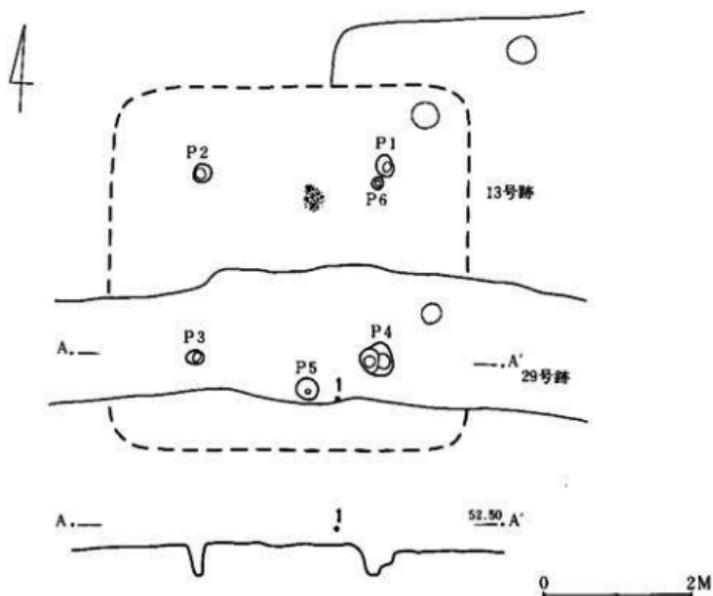
調査区の北隅中央部付近で検出した住居跡で, C8グリッドに位置する。13号跡と29号跡に切られる。攪乱が著しく, 本号跡の存在はIII層で確認された。

壁面, 壁溝は発見できなかったが, 少なくとも壁下部の掘り込みはハードルームまで達していない。ピットは6本確認された(P1~P6)。P1~P5は主柱穴と考えられる。P3とP4は, 他のものに比して深度が浅いが(別表), これは29号跡に上部を切られたためで, P1~P5の各ピット底の標高はほぼ同レベルである。P1-P2間とP2-P3間の各距離は, それぞれ約2.5mである。またP2とP3を結ぶ線の走行方向はN-2°-Wで, ほぼ真北を指す。本号跡のプランは明らかでないが主軸方向はこれに近い値をとる可能性が高い。床面は, 全体に軟弱でローム土と暗褐色土の混合土で整えられている。炉址は西側がトレンチャーで破壊されるが, 約60cm×40cm以上の楕円形と推定され, 主軸方向も真北に近い方向を指すものと考えられる。床への掘り込みは約14cmで, ハードルーム層に達する。焼土粒が密に堆積し, 炉底のハードルームは被熱のため広い範囲が赤化し, 粘性を失なう。覆土は暗褐色土が堆積するが, 層厚はうすく, 断面実測は行わなかった。

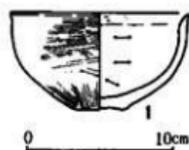
12号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	30	15	52
P 2	25	15	32
P 3	20	15	42
P 4	36	15	36
P 5	30	10	47
P 6	15	10	36

遺物は, 土器片が少量出土した。復原実測の可能なものは, 塊1点のみである(第34図, 第11表, 図版22)。しかし, この資料は, 本号跡を切る29号跡の覆土との境界付近で出土したもので, 確実に本号跡にともなうものかどうかの確認は得られない。



第33図 12(022)号跡実測図



第34図 12(022)号跡出土遺物

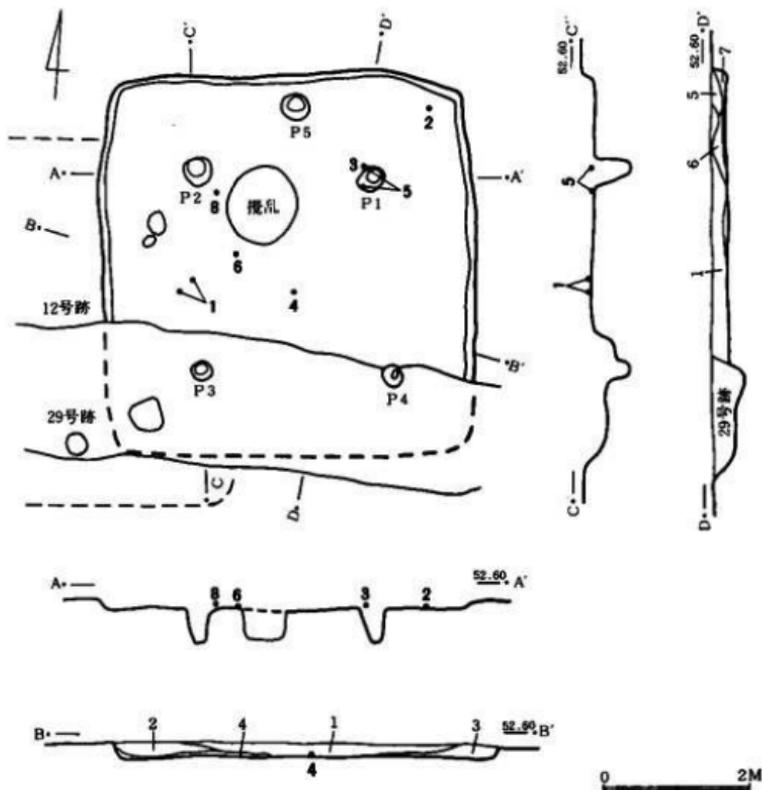
第11表 12号跡出土遺物観察表

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	鉢	床直	(12) 6.5 3.5	外ハハケ、底縁：縦位のハケ 内ハラケズリのらていおいなナデ 口縁横位のハケのちナデ	細砂粒多	管	外一淡褐色 内一ベージュ	1/2	

13(019)号跡 (第35図, 図版9)

台地北端の稲荷神社につづく調査区北側で検出した住居跡で、B9, C9グリッドに位置する。覆土上面を暗褐色土が広く覆っているので、プランの確認は容易であった。西側で12号跡を切るが、南側は29号跡に切られる。29号跡の南側では壁面を確認できなかったので、南壁は29号跡によって破壊されたものと考えられる。コーナーは2ヶ所が保存されており、いずれも若干丸味を帯びるが直角に近い。プランは、東西が約5mであるが、南北は約4.5m～5m前後と考えられ、復原される平面形態は正方形に近いものと推定される。主軸方向はN-5°-Wで、ほぼ真北を指す。

壁面は軟弱であるが、明瞭で、壁高は平均約20cmを測る。壁下部はハードロームを掘り込み、平均約70°～80°の傾斜角で立ち上がるが、東壁側は約60°前後のゆるい傾斜になる。壁溝はみとめ



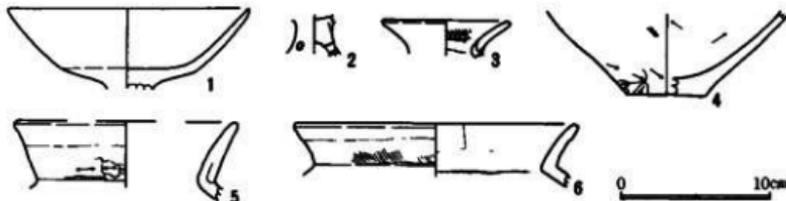
第35図 13(019)号跡実測図

13号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	35	18	46
P 2	40	25	47
P 3	30	15	30
P 4	30	10	26
P 5	36	20	33

られない。ピットは5本確認された(P1~P5)。いずれも直立した棒状を呈す。P3とP4は29号跡に切られた分だけ浅い(上表)。いずれも主柱穴と考えられ、P1~P4はプランの対角線上に位置している。P1-P2間とP2-P3間距離は、それぞれ約2.5mと約2.7mで、後者が約20cmほど長い。床面は、耕作による攪乱が著しく、保存状態は不良である。床面残存部は、ローム土に暗褐色土を混合して平坦に整えたもので、全体に堅緻である。炉址は検出できなかった。しかし、P1とP2のほぼ中間には、イモ穴と推定される深い攪乱がある。ローム層を掘り込むこの攪乱壁には一部焼土の残滓をみとめることができるので、炉址はこの攪乱によって消滅した可能性が高い。B-B'とD-D'における断面観察では覆土堆積物は以下の7層に分けられる。1. 黒褐色土層。直径5mmのハードロームブロックを含む。2. 褐色土層。3. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを含む。4. 褐色土層。3層と類似する。5. 暗褐色土層。ローム土が混入する。6. 暗褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが含まれる。7. 褐色土層。ローム粒を多く含む。

出土遺物は土器片と軽石片で、そのうち復原実測の可能な資料は、甕2点、小形壺(?)1点、高坏2点、器形のがええない底部資料1点の合計6点である(第36図、第12表、図版21)。(3)はP1覆土から若干浮いた状態で発見されたものだが、これを除くと図示した資料は、いずれも床面に密着した状態で発見された。



第36図 13(019)号跡出土遺物

第12表 13号跡出土遺物観察表

挿入 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	高杯	床直	16.3 — —	外一横位のナデ 内一ヘラナデ及び横位のい おいなナデ	細砂粒少	昔	外 内} 淡い黄土色	坏部完 存	
2	高杯	床直	— — —	外一脚：縦位のヘラミカキ 内一環：ナデ、駒ヘラケズリ	砂粒多	昔	外 内} 淡褐色	脚上部	3孔
3	埴	覆土	(9) — —	外一口縁：ヨコナデ 胴部：横位のヘラナデ 内一口縁：ヨコナデのち斜位懸糸 頸部：横位のハケ+縦位のナデ	砂粒 } 多 スコリア }	昔	外 内} 淡灰褐色	口縁部 %	
4	—	床直	— — (5.5)	外一ハケのちナデ消し、底縁： ケズリ、底面：ケズリ 内一ナデ	砂粒多	昔	外一暗茶褐色 内一暗褐色	底部%	
5	甕	床直	(15) — —	外一口縁内外面：ヨコナデ、口 縁下部：ナデ、体部：ナデ 内一横位のナデ	砂粒 } 多 スコリア }	昔	外一汚淡褐色 内一淡褐色	口縁部	口縁内側に スポット状の剥 離あり
6	甕	床直	(19.5) — —	外一口縁内外面：ヨコナデ、 口縁下部：縦位のハケ、 体部：ナデ 内一横位のナデ	砂粒多	昔	外 内} ベージュ	口縁部 %	

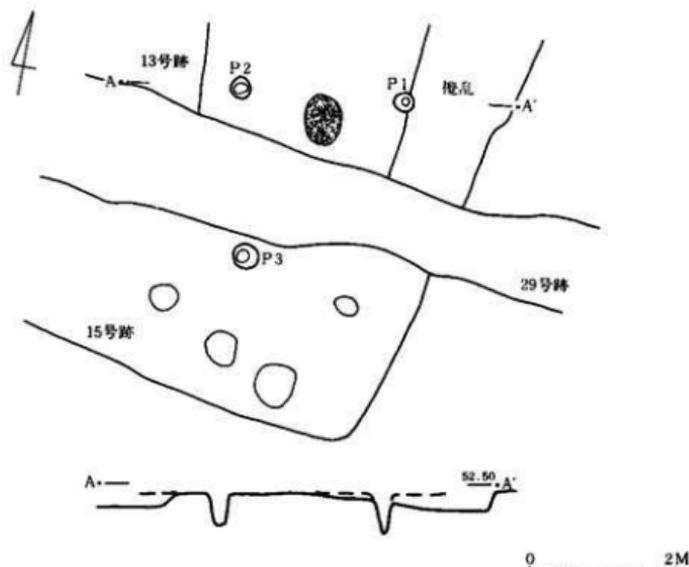
14(030)号跡 (第37図)

本号跡は、調査区北側で検出した遺構で、C10～B10グリッドに位置する。15号跡の北半部を精査中に検出したもので、1基の炉址と3本のピット(P1～P3)で構成される。プランの北側と東側は、建設工事に伴って掘られた深い攪乱と耕作によって消滅する。壁面および床面は発見できなかった。3本のピットはほぼ同規模である(下表)。ピットの平面配置は直角二等辺

14号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P1	30	10	43
P2	26	18	42
P3	38	16	38

三角形に並んでおり、P1～P2間とP2～P3間距離はいずれも約2.3mである。炉址はP1～P2間の中間地点から若干南側に寄った位置にある。炉址表面は攪乱によって削除されているが、確認時の大きさは約70cm×50cmの楕円形を呈す。床への掘り込みはハードルームに達する。焼土粒が密につまり、底面のハードルームは広い範囲にわたって赤化し、粘性を失なう。炉址の主軸方向はN-5°-Wで、ほぼ真北を指す。なお、本号跡に伴う遺物は発見できなかった。

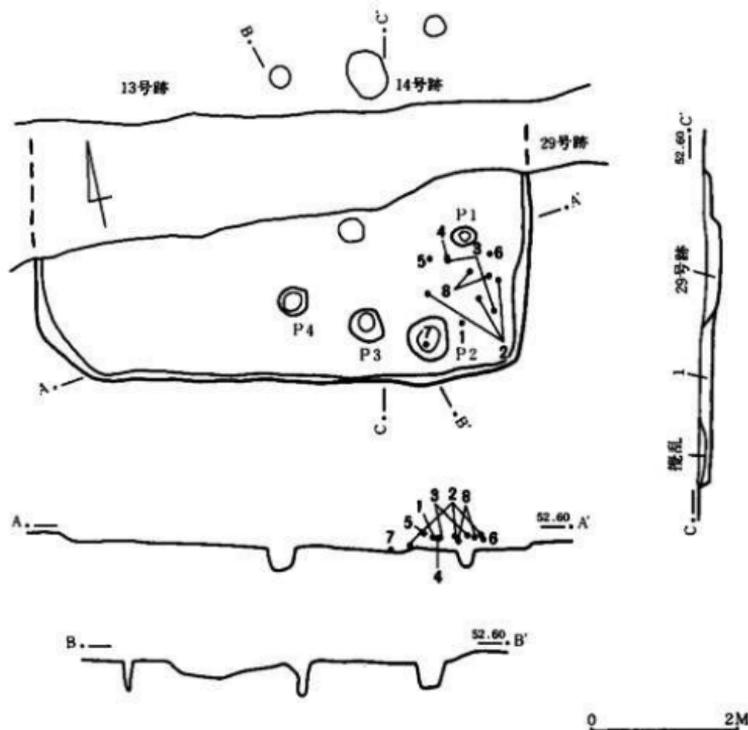


第37図 14(030)号跡実測図

15(020)号跡 (第38図, 図版9)

調査区北部で検出した住居跡で、C9～C10グリッドに位置する。プランの北半は、破壊されて消滅する。中央部を29号跡が斜めに横断し、本号跡を切る。13号跡および14号跡とは重複するが、北側は攪乱が著しく14号跡との新旧関係は明らかでない。しかし、13号跡のプラン内では本号跡の壁面および覆土を確認できなかったため、13号跡が本号跡を切ることは明らかである。本号跡は、表土層除去後に直ちに出現した土器群の存在によって確認された。プランの大きさは、南壁長が約6.5mである。東西壁は約2.7mほどを残存するが、プランの形態は明らかでない。確認されたコーナーの形態は非対称形で、南東コーナーは直角に近いが、南西コーナーは丸味を帯びる。主軸方向はN-13°-Eもしくはそれを90°西へ振ったN-77°-W前後を指すものと思われる。

壁高は南壁が平均約16cm、東壁が平均約10cmと全体に低く、壁面も軟弱であるが、比較的明瞭である。壁下部はハードルーム上面とどまり、約70°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認できなかった。ピットは4本発見された(P1～P4)。各ピットはほぼ同規模のものであるが(別表)、プランの対角線上に存在せず、遺物が集中して発見されたプラン南東部に偏在する。29号跡の底面からもピットは発見できなかった。床面はローム土と暗褐色土の混合土によって平坦に整えられるが、軟弱で若干不明瞭である。覆土は直径約2～3cm前後のハードルームブロックを



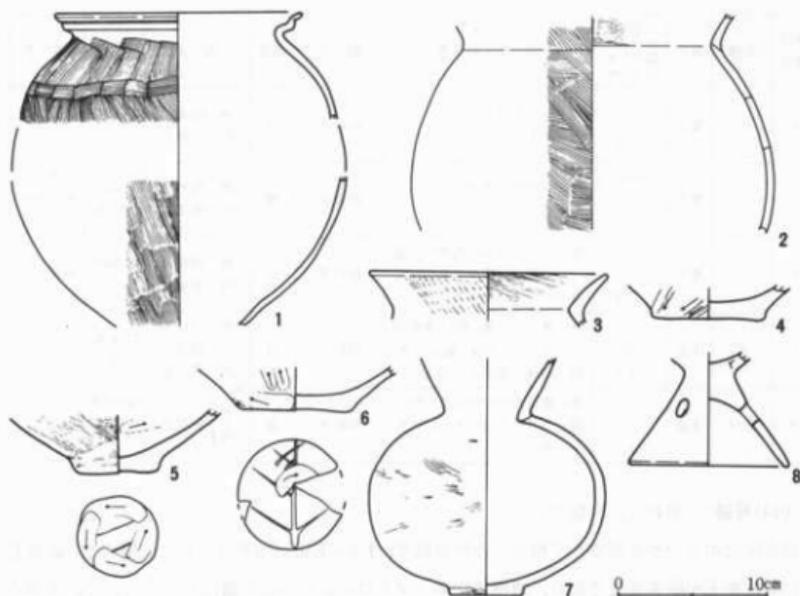
第38図 15(020)号跡実測図

15号跡ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	35×25	10	26
P 2	55	30	40
P 3	45	20	30
P 4	40	25	30

多量に含む黄褐色土が堆積する単層で、分層は困難である。なお、本号跡にともなう炉址は確認できなかった。13号跡の構築もしくは後世の覆乱によって破壊されたか、存在しなかったものと思われる。

遺物は、土器片が出土した。そのうち復原実測の可能なものは、甕3点、壺1点、高坏1点と器形のうかがえない底部資料3点の合計8点である(第39図、第13表、図版22)。なお(1)はいわゆるS字状口縁台付甕で、口縁部を床面にむけた倒立状態で出土したもので、台部は覆土



第39図 15(020)号跡出土遺物

除去中に欠損した可能性があり、おそらく完形状態で存在していたものと思われる。(7)はP1覆土上面から発見されたが、出土地点の標高は床面とほぼ同レベルである。そのほかの資料は(2)を除くといずれも床面から約10cmほど浮いた状態で出土した(図版9)。

第13表 15号跡出土遺物観察表

神宮 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	覆土	16.5 — —	外—口縁内外面：ヨコナデ、 体部：タテハケを全面に 施したのち肩部に短い横 位のハケ 内—横位のナデ、くびれ部横 位のヘラナデ	砂粒多	良	外 内} 黄灰色	口縁— 肩部は は完存 体下部 欠	V=5.2ℓ
2	甕	床直	— — —	外—横位のハケ 内—ナデ 口縁：ハケのちナデ	砂粒多	普	外—黒褐色 内—褐色	胴上半 部欠	
3	甕	覆土	(16.5) — —	外—口縁：斜位のハケのちヨコナデ 内—口縁：ヨコナデのち傾斜 角のゆるい斜位のハケ	砂粒多	普	外 内} 明褐色	口縁部 欠	内外面と も剥離

神岡 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 部高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
4	—	覆土	— — 7.5	外—ヘラケズリ 内—ナデ	砂粒多	昔	外—暗褐色 内—黒褐色	底部のみ	
5	—	覆土	— — 5.4	外—ハケのちナデ 内—ヘラケズリ	砂粒少	昔	外—褐色 内—暗褐色	底部ほぼ 完存	木葉底、 底面磨除を ヘラケズリ
6	—	覆土	— — 7.4	外—ヘラケズリのちナデ、底 面磨除ヘラケズリ 内—ヘラケズリのちナデ	砂粒多	昔	外—橙褐色 内—黒褐色	底部のみ	木葉底
7	壺	床直	— (17) 4.8	外—横位のハケ塗、横位を基本とする ミガキ、口縁：縦位のミガキ 内—口縁：横位のミガキ	砂粒少	良	外—淡い赤 褐色 内—黄灰色	口縁部 一部欠	V=1.3ℓ
8	高坏	床直	— — 11	外—横位のナデのちナデナデ 内—ヘラケズリとあらいナデ、 裾：ナデ	砂粒多	昔	外 内} 明褐色	脚部冲線 牙部底部 のみ	3孔

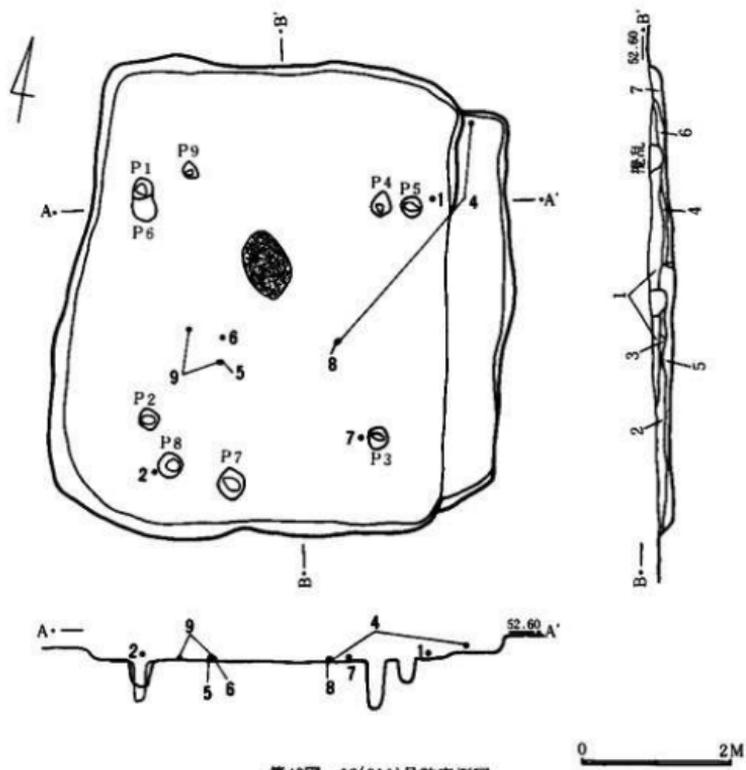
16(014)号跡 (第40図、図版7)

調査区の中央やや北東寄りで検出した住居跡で、E8～E9、F9グリッドに位置する。調査着手以前に表土が除去されており、遺構周辺のソフトロームがかなり露出していたので、遺構の存在は早い時期に知れた。プランは、東西約5m、南北約6.5mで、南北方向に約1.5m長い。各コーナーはいくぶん丸味を帯びる。主軸方向はN-9°-Wを指す。西壁は南半分が外方に膨らみ、東壁には張り出し部がある。張り出し部は、北東および南東コーナーから東側へ延びた約5cm×0.7mのベッド状を呈すが、張り出し部南東コーナー付近は削平されて消滅する。

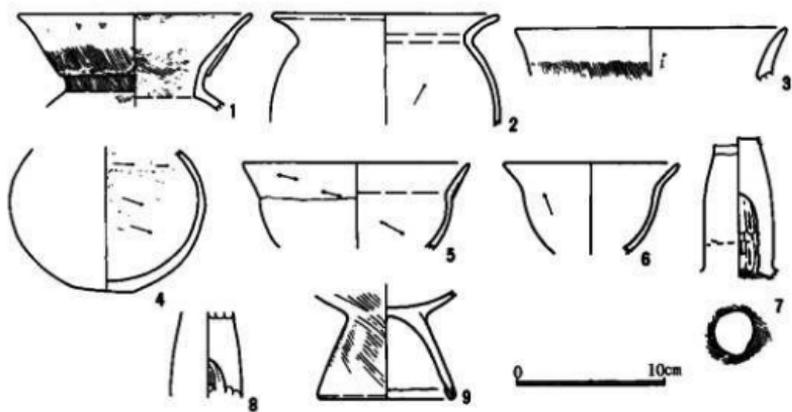
壁面は軟弱不明瞭で、東壁の立ち上がりはほとんど確認できなかった。壁高は、北壁で平均約20cm、南壁で約15cm、西壁で約7cmを測る。壁下部はハードロームを掘り込み約55°～60°の傾

16号跡ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	30	15	60
P 2	26	18	57
P 3	26	18	63
P 4	28	10	64
P 5	28	18	32
P 6	32	18	37
P 7	38	26	38
P 8	32	18	10
P 9	20	10	15



第40图 16(014)号跡実測图



第41图 16(014)号跡出土遺物

第14表 16号跡出土遺物観察表

挿入 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	壺	覆土	16.0 — —	外—縦位のハケ、口縁内外面・ ・材部：ナデ消し 内—横位ナメのハケのちナデ	細砂粒多	良	外—淡い灰褐色 内—淡い黄褐色	口縁部 1/2	折り返し し口縁
2	甕	覆土	15.6 — —	外—ナデ、口縁内外面：ヨコ ナデ 内—ヘラケズリ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—黒褐色	口縁部 と胴上 部半壊	
3	甕	覆土	(18.5) — —	外—口縁上部：斜位のハケのち ヨコナデ、口縁下部：ハケ 内—口縁：横位のハケのちヨ コナデ	砂粒少	普	外—黒褐色 内—黒色	口縁部 1/2	
4	壺	床直	— — 4	外—全面でいねいなミガキ 底面周縁のミガキはやや 粗い 内—横位のヘラケズリ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—灰暗褐色	胴部は 完全 無以上 なし	
5	鉢	覆土	(15.5) — —	外—斜位のヘラミガキ 口縁：斜位のいねいな ミガキ 内—ナデ	細砂粒少	普	外—黒褐色 内—褐色	体上部 1/2	
6	鉢	床直	(12) — —	外—縦位のいねいなナデ、 口縁内外面：ヨコナデ 内—ヘラケズリのちいねい な横位のナデ	砂粒少	普	外—茶褐色 内—黒褐色	体上部 1/2	諏訪原に 類似あり
7	高坏	覆土	— — —	外—ナデ 内—ヘラケズリ、脚底面：ハ ケ	砂粒少	普	外—暗褐色 内—暗褐色	脚部基 部のみ 完全	
8	高坏	床直	— — —	外—ナデのちミガキ 内—ヘラケズリ	砂粒多	普	外—灰明褐色 内—暗褐色	脚部基 部の一 部	
9	甕	床直	— — 4.7	外—肩：ハケのちナデ 甕：ハケ 内—肩：ナデ、甕：ヘラケズリ	スコリア少	普	外—灰褐色 内—明褐色	脚部 のみ(1/2 は半壊)	底縁に折 り返しあ り

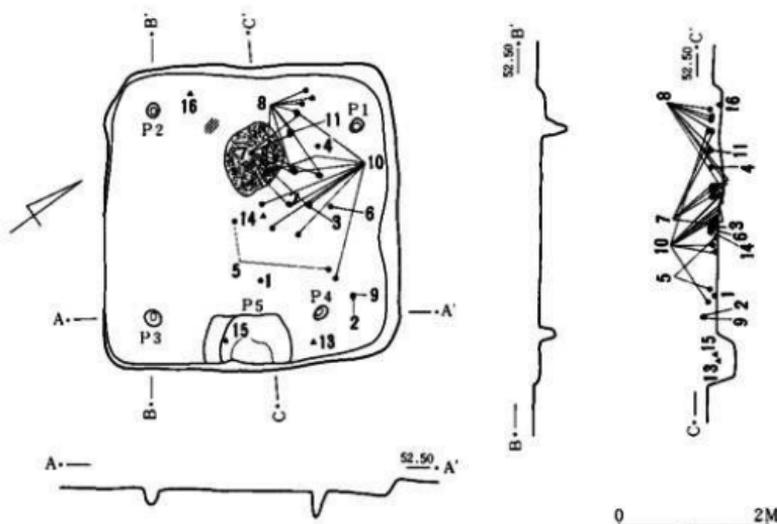
斜角でゆるく立ち上がる。なお、張り出し部東壁の壁高は平均約12cmを測り、壁下部は約65°~70°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認されなかった。ピットは9本発見された(P1~P9)。P9を除くと8本のピットの直径、底径はほぼ等しいが、深さのちがいで約60cm前後のもの(P1~P4)、約35cm前後のもの(P5~P7)、10cm程度のもの(P8~P9)の3つに分けられる。このうちP1~P4は、その位置関係や規模などから主柱穴と推定される。P1-P2間とP3-P4間、P1-P4間とP2-P3間距離は、それぞれ約3.1mと約3.3mを測る。床面はハードロームを掘り込み、暗褐色土との混合土で整えられるが、軟質で起伏がある。プラン東側にある張り出し部も軟質で、弱い起伏がある。住居跡床面とは明瞭な段差を生じない。炉はプラン中央やや北寄りに位置する。約90cm×60cmの楕円形で、深さ約20cmほど掘り込み、底面のハードロームは

被熱のため赤化し、粘性を欠く。炉の主軸方向はN-19°-Wを指す。B-B'における覆土堆積物は以下の6層に分けられる。1. 暗褐色土層。直径約4mmのハードロームブロックを含む。2. 茶褐色土層。焼土粒、炭化粒、ローム土が混入する。3. 褐色土層。炭化粒が混入する。4. 赤褐色土層。焼土粒が密につまる。5. 褐色土層。直径1cmのハードロームブロック、炭化粒を含む。6. 茶褐色土層。焼土粒、ローム粒が混じる。7. 褐色土層。ローム粒が多く含まれる。なお、東壁張り出し部に堆積する覆土はきわめて薄く、本号跡と張り出し部との新旧関係を確認することはできなかった。検出したピットの配列等を考慮すると、2軒の住居跡が重複したものか、もしくはベット状の張り出し部をともなうものかのいずれかの可能性が考えられる。

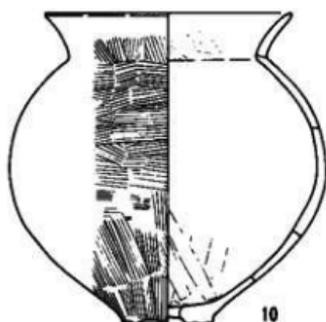
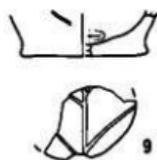
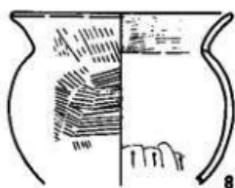
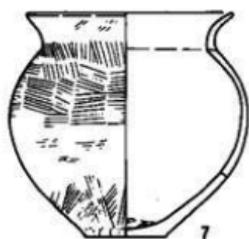
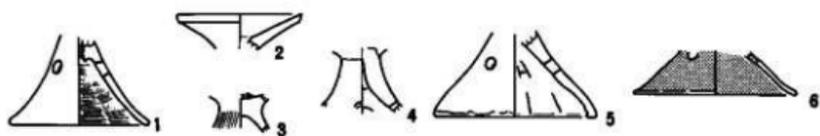
遺物はプランのほぼ全域から土器片が出土した。そのうち復原実測が可能な資料は、甕3点、壺2点、鉢2点、高坏2点の合計9点である(第41図、第14表、図版20)。(4)、(6)、(8~9)は、床面に密着した状態で出土した。

17(023)号跡 (第42図、図版10)

調査区の中央部南東寄りで検出した住居跡で、G9~H9グリッドに位置する。覆土に多量の焼土粒と炭化粒を含むので、プランは容易に確認された。プランの大きさは東西が約4.1m、南北は約4mで東西方向に約10cm長く、各コーナーはやや丸味を帯びる。本号跡南壁は28号跡の



第42図 17(023)号跡実測図



0 10cm



13



14



15



16

0 5cm

第43图 17(023)号跡出土遺物

壁掘り込みが接し、これを斜めに削るので、プラン南北長は原形よりも短くなっている。したがって、本来の本号跡プランの平面形態は隅丸方形と推定される。主軸方向はN-62°-Wを指す。

17号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	20	10	14
P 2	18	8	32
P 3	20	8	20
P 4	20	10	18

壁面は明瞭であるが、ローム層への掘り込みは全体に浅く、壁面は軟質である。壁高は東壁が平均約9cm、北壁は平均約15cm、西壁は平均約13cmである。南壁は大部分が28号跡に切られ消滅している。壁下部はハードロームをわずかに掘り込み、約60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は存在しない。ピットは5ヶ所で確認された(P1~P5)。このうちP1~P4は直立した棒状を呈し、プランのほぼ対角線上に位置するもので主柱穴と考えられる。P1-P2とP2-P3間距離は、それぞれ約2.8mの等長で、P1~P3はP2を頂点とする直角二等辺三角形をつくるが、P4がプランの対角線上より若干ずれて位置するので、各主柱穴間距離はかならずしも等しくない。P5は西壁中央に接する長径約1.2m、短径約0.6mの隅丸長方形のピットで、ハードロームを深く掘り込む。その南壁に沿って、幅約25cm、深さ約10cmの段が作られている。壁面と底面は明瞭堅固である。底面は平坦に整えられ、約50cm×30cmの角のとれた矩形を呈す。本号跡床面とP5底面との比高差は約25cmである。P5は貯蔵穴の可能性があるが、覆土中からは遺物を発見できなかった。本号跡床面はハードロームを掘り込み、暗褐色土とローム土を混ぜたもので、全体を平坦堅緻に整える。炉址周辺の床面は、とくに硬質である。炉はプラン中央から西壁に寄ったところに設けられ、P1、P2の中位に存在する。大きさは約1m×0.8mの楕円形を呈し、主軸方向はN-50°-Wを指す。床への掘り込みは約15cmで、焼土粒が密に堆積する。掘り込み底のハードロームは広範囲にわたってレンガ化し、粘性を失なう。なお炉址中央にかかる2本の炭化材は、床面レベルから2~3cm浮いて発見されたものである。床面および覆土中には一様に焼土、炭化粒、炭化材が分布している。床面に密着するものが多いが、精査中に崩壊しやすく、図示できたものは少ない。焼失住居と推定される。覆土は、炭化粒、焼土を多量に含んだ黒褐色土が堆積するが、分層は困難である。堆積土の粒子は細かく、軟質で粘性はない。

遺物は、多量の土器片と土玉が出土した。そのうち復原実測が可能なものは、甕3点、甕底部と考えられる資料1点、器形のうかがえない底部資料2点、器台2点、高坏3点、器台もしくは高坏の脚部1点の合計12点と土玉4点である(第43図、第15表、図版22、23、30)。図示した資料は、プランの北~東側に偏って存在しており、とくに炉址周辺部から出土したものが多し。(1)、(3)、(5)、(7~8)、(10~11)、(13)、(16)は床面に密着した状態で出土したものである。

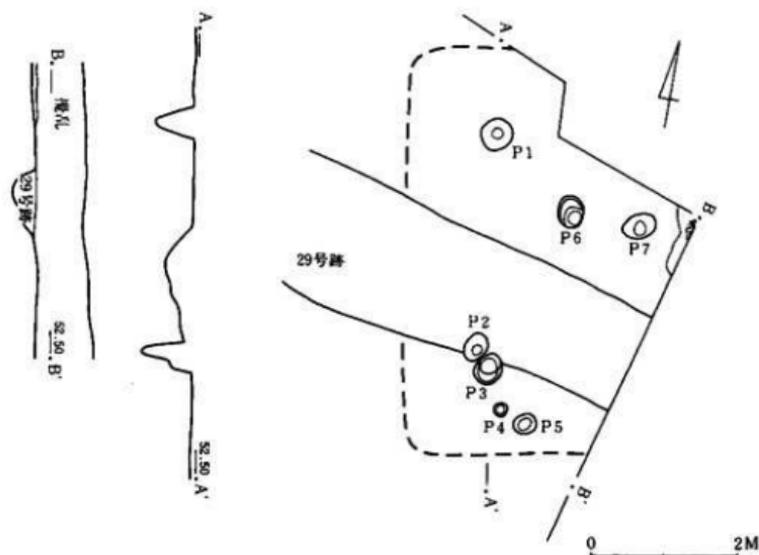
第15表 17号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	注量 □径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考	
1	鉢台	床直	— — 9.4	外—ハケのち縦位へラナデ 内—横位のハケ	砂粒多	普	外—褐色 内—暗褐色	脚部は ば完全	3孔	
2	鉢台	覆土	8.4 — —	外—ヘラミダキ、口縁内外面 ：ヨコナデ 内—ヘラミダキ	細砂粒 スコリア	少 良	外—褐色 内—赤褐色	受け部 3/4	内面割離	
3	高杯	床直	— — —	外—脚：縦位のハケ 内—脚：しほり板、環：ハケ?	砂粒 スコリア	少 普	外 内	暗褐色	脚上部	
4	高杯	覆土	— — —	外—横位のハケのち縦位のナ デ 内—ナデ	細砂粒 スコリア	少 普	外—橙褐色 内—灰暗褐色	脚上部	4孔	
5	高杯	床直	— — 11	外—縦位のヘラケズのちナデ 内—横位のヘラケズリのちナデ	砂粒多	普	外 内	黒褐色	脚部3/4	3孔
6	高杯 器台	覆土	— — (11)	外—横位のていねいなヘラナ デ? 内—横位のナデ	細砂粒 スコリア	多 良	外 内	赤彩	脚下半 分3/4	3孔
7	甕	床直	14.0 15.2 5.4	外—頸部縦位のハケ体上部横 位ハケ下部縦位のハケ体 中部ユビナデ消し、口縁 ハケのちナデ 内—口縁へラナデか? 底部へ ラ杖工具による押し出し 技法?	細砂粒多	良	外—黄褐色 内—淡褐色	3/4	V=1.7ℓ	
8	甕	床直	14.8 (14) —	外—口縁縦位ハケのちナデ消 し体上部横位ハケ体下部 ハケのちナデ消し或いは ケズリ 内—口縁横位ハケのちナデ体 上部ナデ体下部縦位のへ ラケズリ	細砂粒多 スコリア少	普	外—暗褐色 内—淡褐色	3/4	V=1.6ℓ	
9	甕	覆土	— — (8.5)	外—ナデ、燃永? 灰 内—ヘラケズリ?	砂粒多	普	外—暗褐色 内—黒色	底部3/4	木蓋底 底面内部 に付着物 あり	
10	甕	床直	16.8 15.7 6.1	外—口縁：縦位のハケのちナ デ。体上部：横位のハケ 下部：縦位ハケ+ナデ 内—口縁横位ハケのち横位ナ デ消し、体上部横位のへ ラナデ? 下部ヘラケズリ	細砂粒多	普	外—暗褐色 内—淡い黄褐色		木蓋底 V=3.7ℓ	
11	—	床直	— — (3)	外—横位のヘラミダキ、底面 ていねいなナデ 内—ヘラケズリのちていね いなナデ	細砂粒少	普	外 内	淡灰褐色	底部3/4	底面にス ボット状 の割離が 著しい
12	—	覆土	— — (4.5)	外—縦位のナデ 内—割離	砂粒 細砂粒	多 不良	外 内	淡灰褐色	底部3/4	

神田 番号	群種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 要 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
13	土玉	床直		縦径3.0cm, 横径2.8cm, 孔径 0.3cm, 重量22g	砂粒含	香	褐色	完存	焼成前穿 孔
14	土玉	覆土		縦径3.6cm, 横径3.7cm, 孔径 0.7cm, 重量45g, 表面:ヘラ ケズリ, 孔縁破損, 磨滅	砂粒少	良	橙褐色	ほぼ完 存	焼成前穿 孔, 穿孔 修正痕あ り
15	土玉	覆土		縦径3.2cm, 横径3.3cm, 孔径 0.5cm, 現存重量14g, 表面 :ヘラケズリ, 表面に打撃痕 割れ口は古い	砂粒含	香	暗褐色	1/2	焼成前穿 孔
16	土玉	床直		縦径4.2cm, 横径3.2cm, 孔径 0.4cm, 重量40g 表面:ヘ ラケズリ	細砂粒含	香	淡褐色	完存	焼成前穿 孔

18(021)号跡 (第44図, 図版10)

調査区の北西隅B12～B13グリッドで検出した遺構である。プランは調査区の内外にまたがっている。本号跡は炉址と推定される焼土ブロックとピットで構成されるが、壁面、床面は検出できなかった。堅穴住居跡としてよいかどうかは検討の余地を残している。しかし、上記グリッド周辺は削平作業等による攪乱が、ソフトローム上面まで及んでおり、壁面、床面、



第44図 18(021)号跡実測図

遺物等が破壊された可能性がきわめて高いこと、また上記の焼土ブロックを炉址と仮定した場合、主柱穴としてかならずしも不自然でない平面的位置にP1とP3もしくはP5が存在することなどから、ここでは一応本号跡を竪穴住居跡としておく。

炉址の床への掘り込みは、確認面から約5cmである。粒子の細かい焼土粒を主体とする暗赤褐色土が密に堆積する。なお、遺物は発見できなかった。

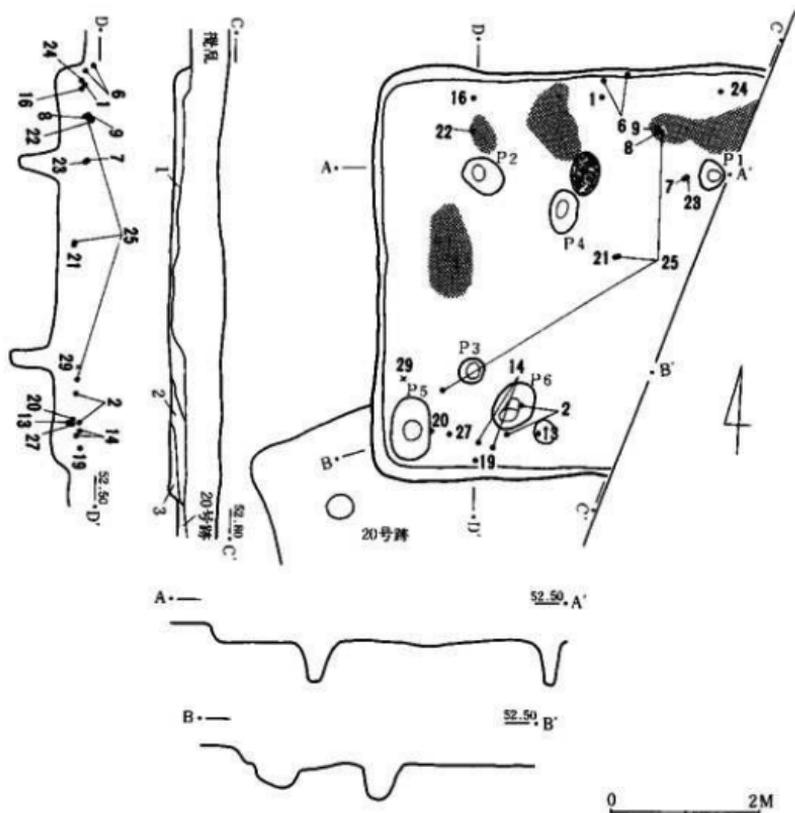
19(025)号跡 (第45図、図版11)

調査区の東端で検出した住居跡で、E12～E13グリッドに位置する。本号跡は調査区の内外にまたがっているが、その大半は調査区内に存在すること、覆土中に多量の焼土と炭化粒を含むこと、表土からの攪乱が深く攪乱層の下位にII層とIII層の漸移層が直接接することなどにより、プランは表土層を除去した段階で容易に確認された。プランは南北が約5.4mで、北西、南西コーナーはいくぶん丸味を帯び、壁は直線状になる。北壁の推定長は約5.5m前後になるので、プラン全体の平面形態は、隅丸方形と推定される。南側で20号跡を切る。主軸方向はN-2°-Wを指す。

壁面は明瞭である。壁高は北壁で平均約35cm、東壁で平均約25cm、南壁は20号跡と重複するためやや低く、平均約19cmである。壁下部はハードロームを掘り込み約65°～70°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はともなわない。ピットは6ヶ所を確認されたが(P1～P6)、P1～P3はいずれも直立した棒状を呈し、推定プランの対角線上にある。これらは主柱穴と考えられる。P1-P2間とP2-P3間距離は、それぞれ約3.2mと約2.7mで、南北方向が約50cm短い。P5は南西コーナーに位置し、開口部は小判状を呈する。その主軸方向は西壁の走行方向と一致する。貯蔵穴の可能性があるが、用途不明としておく。なお、P4とP6も楕円形を呈す用途不明のピットである。床面はハードロームを掘り込み、ローム土と暗褐色土の混合土で平坦に整えるが、若干軟質である。炉址はP1-P2のほぼ中間から少し西方に寄った位置に設けられる。長径約60cm、短径約40cmの楕円形で、主軸方向はN-3°-Eを指す。床への掘り込みは約5cmで、焼土粒と暗褐色土が密に堆積するが、底面のローム土は被熱の影響が弱く、比較的良好に本来の粘性と色調を保っている。C-C'断面における覆土は以下の3層に分けられた。1. 暗褐色土層。焼土粒を含む。2. 褐色土層。3. 褐色土層。ローム粒を多量に含む。覆土には焼土粒が比較的大きなブロックを形成して堆積しており、とくにプラン北半ではその傾向が著しい。焼土ブロックの厚さは平均して約4～5cmを測る。しかし、焼土ブロックと床面との間には厚さ約4

18号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	45	14	53
P 2	30	14	20
P 3	45	20	63
P 4	20	14	15
P 5	30	20	17
P 6	45	20	30
P 7	48×35	16	30



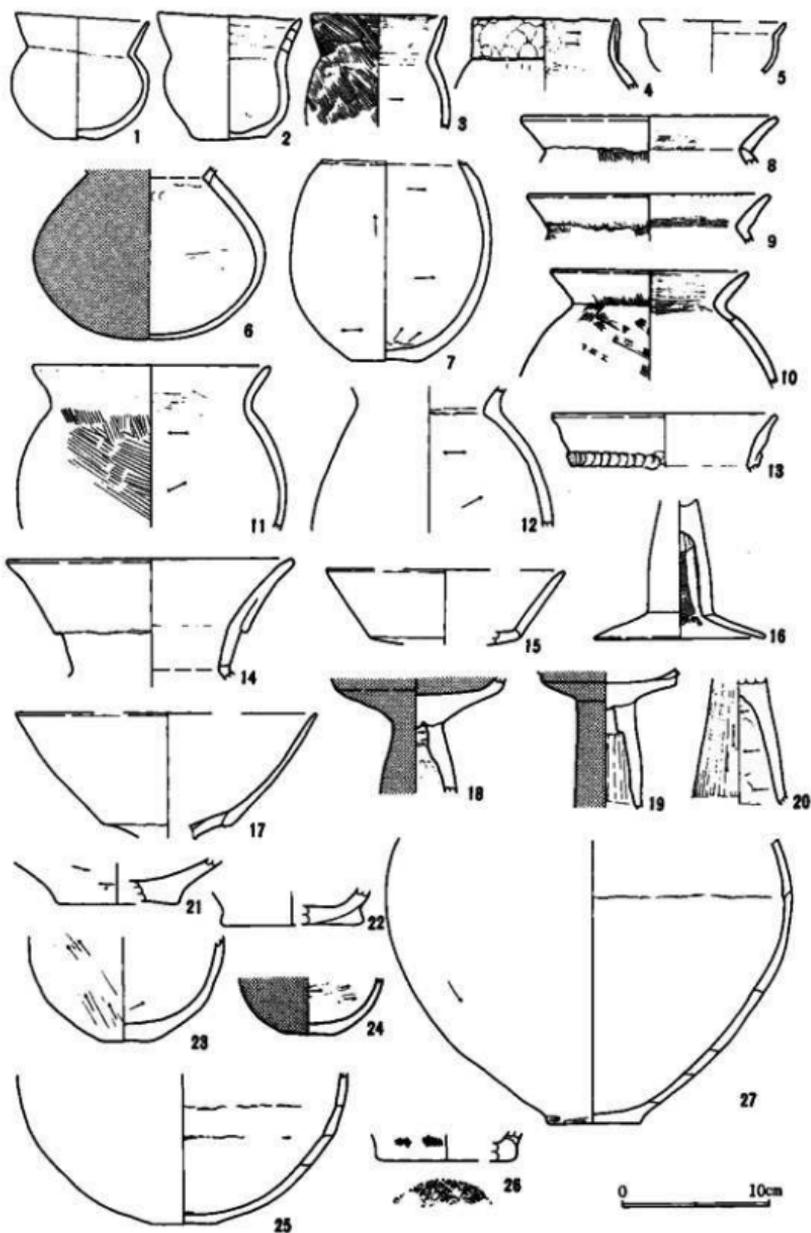
第45図 19(025)号跡実測図

～7cmの黒褐色土が存在すること、また、遺物も床面に密着した資料はなく、大部分が床面から20cmほど浮いた状態で出土していることなどから、本号跡を焼失住居としてよいかどうかは疑問が残る。

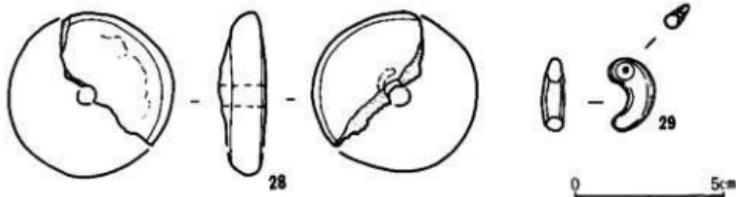
遺物は、土器片と土製品、勾玉、軽石である。そのうち、復原実測の可能なものは壺11点、壺2点、鉢1点、埴3点、高坏6点、器形のうかがえない底部資料4点、紡錘車1点、石製勾

19号跡ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	35	16	84
P 2	35	18	66
P 3	35	18	66
P 4	60×40	25×14	24
P 5	82×50	25	47
P 6	70×50	20	60



第46图 19(025)号跡出土遺物(1)



第47図 19(025)号跡出土遺物(2)

第16表 19号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	現存度	備考
1	埴	覆土	9.1 8.5 3.3	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ヘラケズリのちへ ラナデ 内—ヘラナデ	細砂粒多	普	外—淡灰褐色 内—淡褐色	ほぼ完 存	
2	埴	覆土	9.8 9.7 4.5	外—ナデ 内—口縁：ヨコナデ（輪づみ 痕）。体部：横位のケズ リ+ヘラナデ	砂粒多	普	外 } 赤褐色 内 }	1/2	
3	甕	覆土	(9.5) — —	外—ハケ 内—口縁：ヨコナデのち横位 のハケ目 体部：横位のナデ	砂粒 } 少 スコリア }	普	外 } 明褐色 内 }	上半部 約1/2	混入
4	—	覆土	— — —	外—口縁：折り返しのち指頭 圧。体部：縦位ヘラナデ 内—粗い横位ヘラミガキ	細砂粒多	普	外—淡い褐色 内—褐色	口縁1/2	
5	鉢	覆土	(10) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：不定位ナデ 内—体部：斜位ナデ	砂粒多	普	外 } 淡黄褐色 内 }	口縁1/2	
6	壺	覆土	— — 4.4	外—体部：一部ヘラケズリの ちミガキ。底部：ケズリ 内—頸部：接合部ヨコナデ。 体部：横位ヘラケズリの ち横位ミガキ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—黄土色	体部ほ ぼ完存	赤彩
7	甕	覆土	— — 5	内外ナデ	細砂粒 } 多 スコリア }	普	外—灰褐色 内—明褐色	体部以 下1/2	
8	甕	覆土	(18) — —	外—口縁：ヘラナデ 体部：縦位のハケ目 内—口縁：横位のハケ目のち ナデ消し。下部ハケのち ナデ。体部：ヘラナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—褐色	口縁1/2	

神田 番号	器種	層位	法量 口徑(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
9	甕	覆土	16.9 — —	外—口縁：斜位のハケのちヨコナデ。体部：縦位のハケ 内—口縁：斜位のハケのちヨコナデ、下部：横位のハケ。体部：横位のナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—灰褐色	口縁部 1/2	
10	甕	覆土	(13.5) — —	外—口縁：ハケのちナデ 内—口縁：ヨコナデのち弱いハケ目。体部：ナデ	砂粒多 スコリア	普	外：暗灰褐色 内—黒色	口縁部 1/2	
11	甕	覆土	(16) — —	外—口縁：縦位のハケ目のちヨコナデ 体部：ハケ 内—口縁：横位ハケのちヨコナデ 下部：ハケ。体部：ヘラケズリのちいいな横位のナデ	粗砂粒多 スコリア	普	外—明褐色 内—淡灰褐色	上半部 1/2	
12	甕	覆土	— — —	外—口縁：縦位のナデ+横位のナデ。体部：ていねいなナデ(スポット状の刺痕) 内—口縁：横位のナデ、下部ヘラケズリのちナデ。体部：横位のナデ	砂粒多 スコリア	普	外—暗茶褐色 内—暗褐色	体部上 半部1/2	
13	甕	覆土	(15.5) — —	口縁内外面：ヨコナデ	砂粒多	普	外 内} 暗褐色	口縁部 1/2	粘土帯粘 付1cmき ぞみの指 頭圧
14	壺	覆土	19.5 — —	外—口縁：縦位のヘラナデ 頸部：横位を主としたヘラナデ 内—口縁：ヨコナデ、下部：横位のヘラナデ、基部：横位のヘラナデ	細砂粒多	良	外—茶褐色 内—暗褐色	口縁部 完存	
15	高坏	覆土	(16.5) — —	内外—全面不定位のていねいなナデ	砂粒少	良	外 内} 暗赤色	口縁部 1/2	
16	高坏	覆土	— — 11.6	外—脚部：縦位のヘラミガキ 裾部：斜位のヘラミガキ 内—脚部：ケズリ。裾部：ハケのちナデ消し	緻密	普	外—灰灰色 内—淡い黄土色	脚部ほ ぼ完存	
17	高坏	覆土	20.4 — —	外—口縁：ヨコナデ、環：縦位のナデ、底部：横位ナデ 内—不定位ナデ	細砂粒少	普	外 内} 淡黄土色	坏部1/2	混入?
18	高坏	覆土	— — —	外—環部：横位のていねいなナデ。脚部：縦位のていねいなナデ。 内—環部：横位のていねいなナデ。脚部：縦位のヘラケズリ	砂粒多	普	外 内} 淡灰褐色	坏底部 脚部	赤彩

五1点の合計29点である(第46図、第47図、第16表、図版24、25、30、32)。遺物は北壁と南壁寄りに集中するが、床面に密着して発見された資料はない。(29)は勾玉である。石質はやや硬

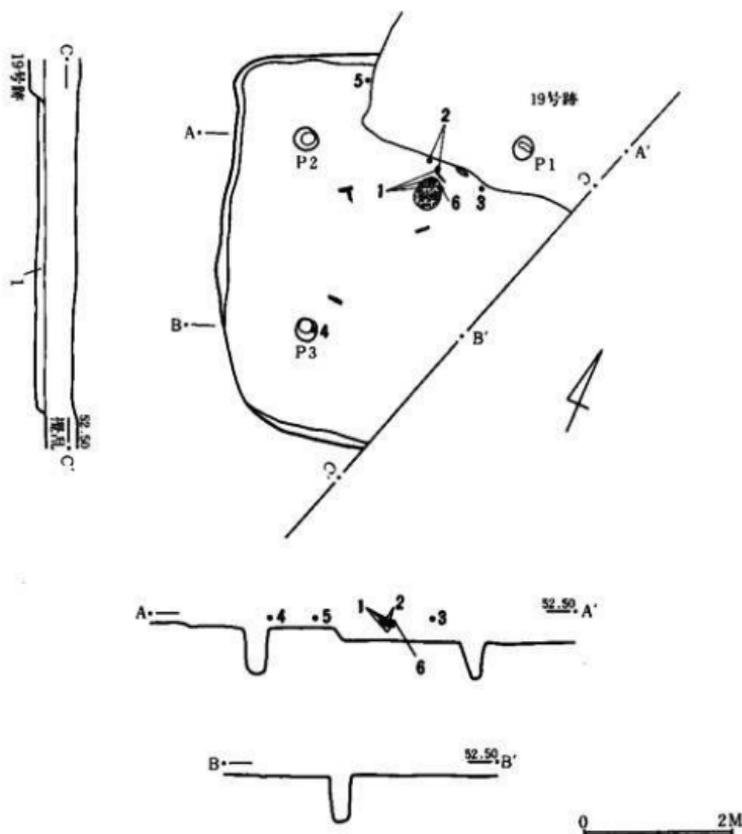
挿入番号	器種	層位	注量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
19	高坏	覆土	— — —	外—環部：横位のミグキ、脚部：縦位のミグキ 内—環部：自由位のミグキ、脚部：棒状工具によるケズリ	細砂粒多	良	外—淡い赤褐色 内—黄土色		脚部及び環下部
20	高坏	覆土	— — —	外—縦方向に下ろすヘラミグキ 内—横位の粗いヘラケズリ、裾部付近はていねいな横位のヘラケズリ	細砂粒 } 多 スコリア	普	外—暗灰褐色 内—淡茶褐色		脚部ほぼ完全
21	—	覆土	— — (8)	外—ヘラケズリのち粗い横位のナデ、底面：ヘラケズリ 内—ヘラケズリのちナデ	砂粒少	普	外—褐色 内—暗褐色		底部%
22	—	覆土	— — 9.6	外—横位のナデ 内—不明	砂粒多	普	外 } 淡黄褐色 内 }		底部半欠 木蓋底
23	壺?	覆土	— — 3	外—ヘラケズリのち粗いナデ(?) 内—体部：横位のヘラケズリ 底面：ヘラケズリのち粗いナデ上げ	砂粒 } 多 スコリア	普	外—黒褐色 内—褐色		胴下半部%
24	埴	覆土	— — 3.2	外—ヘラケズリのちていねいなナデ 内—横位のヘラケズリのちナデ	砂粒多	普	外—赤彩 内—淡褐色		胴下半部 赤彩(底面までおよぶ)
25	甕	覆土	— — 4.3	外—体部：ナデ、底面：ケズリ 内—体部：ヘラケズリのちナデ、底面：ヘラケズリ痕	砂粒多	普	外—明褐色 内—淡褐色		胴下半部% 内面に輪づみ痕あり
26	甕	覆土	— — 9.2	外—ナデのち斜縄文(R.L.) 内—不明	砂粒多	不良	外—黄褐色 内—黄色		底部% 底面布目痕
27	甕	覆土	— — 6.4	外—体部：縦位ヘラナデ 底縁：横位のヘラナデ 底面：ヘラケズリ 内—横位のヘラナデ	細砂粒多	良	外—暗褐色 内—褐色		上部%
28	紡錘車	覆土		直径(5.5cm)、厚1.5cm、孔径(0.5cm)、現存重量24g 全面ていねいなナデ、無文、孔縁磨滅、割れ口は古い	砂粒 } 全 小塵	普	淡灰褐色		% 焼成前穿孔
29	勾玉	覆土		本文参照					完存

質な滑石系統のもので、半透明な灰緑白色の地に緑色を帯びた黒色の斑紋が散る。最大長約2.5cm、最大幅約1.5cm、最大厚0.9cm、重量約3gを計る。表面はよく研磨され、平滑で光沢に秀れ美しい。穿孔は両面からていねいに行われ貫通する。表面孔縁は直径約6mmの範囲が浅く凹こみ、孔径は約2mmを計る。

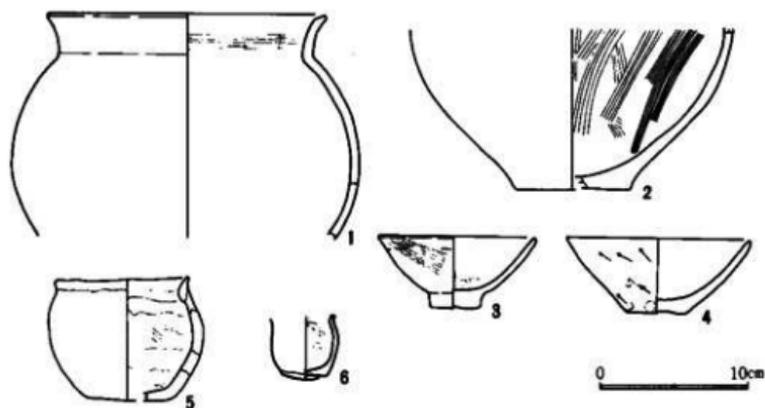
20(024)号跡 (第48図, 図版11)

19号跡の南に隣接する住居跡で、F12～F13グリッドに位置する。19号跡に切られる。本号跡は調査区の内外にまたがって存在するが、覆土に多量の焼土を含むことなどの理由から、表土を除去した直後に住居跡の存在は容易に知れた。しかし、本号跡と切り合う19号跡覆土にも多量の焼土粒が存在し、また堆積土の組成内容がよる似るため、最終的なプラン確認はやゝおくれた。プランの大きさは、南北約5.2mで確認された北壁と西壁は直線状になる。東西の壁間距離は少なくとも4.6m以上あるが、詳細は明らかでない。北西コーナーは丸味を帯びるので、本号跡の平面形態としては、隅丸方形の可能性が高い。主軸方向はN-28°-Wを指す。

壁面は軟弱で、やや不明瞭である。確認面からの掘り込みが相対的に浅いため、確認された



第48図 20(024)号跡実測図



第49図 20(024)号跡出土遺物

第17表 20号跡出土遺物観察表

神図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	床直	16.8 — —	外—横位のヘラナデ、口縁： 横位のナデ 内—ナデ、口縁：ヨコナデ、 下部ハケ	砂粒多 スコリア少	普	外—灰褐色 内—褐色	⅓	
2	甕?	床直	— — (8)	外—ナデ、底面：ケズリ 内—縦位のハケ、底面：ナデ	細砂粒 スコリア	多 普	外—暗褐色 内—黒褐色	胴下半 ⅓	
3	鉢	床直	10.8 4.7 3.5	外—ハケのちナデ、底面黒縁 ：ナデ 底面：不明 内—ナデ、一部ハケ	細砂粒 スコリア	多 普	外—灰暗褐色 内—黒褐色	完存	
4	鉢	P3	12.5 5 4	外—ナデ、口縁：ヨコナデ、底 縁：指頭正底、底面：ケズリ 内—ナデ	細砂粒 スコリア	少 普	外—明褐色 内—灰暗褐色	完存	
5	甕	床直	9.0 8.0 5.6	外—ヘラナデ静止ユビナデ (自由方向) 内—ヘラナデ、口縁：ユビナ デ	砂粒多	不良	外—黄褐色 内—灰褐色	⅓	
6	ミニチ ユア	床直	— — 3	外—地肌、底面に円盤状土塊 を貼付 内—ヘラナデ	砂粒多	良	外 内	暗褐色 ⅓	

壁高は全体に低く、北壁では平均約3cmであるが、その大半は19号跡に切られ消滅する。西壁の壁高は平均約2cmであるが、その両側は壁面を確認できない。南壁は最も深いところで約4cmであるが、その大部分が攪乱の影響を強くうける。各壁とも下部はハードローム上面をわずかに掘り込み、平均約30°の傾斜角でゆるく立ち上がる。壁溝は存在しない。ピットは3本確認された(P1~P3)。いずれも直立した棒状を呈し、同規模で、プランの対角線上に位置する。

これらはいずれも支柱穴と考えられるが、P1は19号跡床面精査中に確認された。P1-P3間とP2-P3間距離は、それぞれ約3mと約2.5mで、P2-P3間距離が約50cm短い。これは19号跡とよく似た性質である。

20号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	30	20×8	50
P 2	35	18	63
P 3	30	18	63

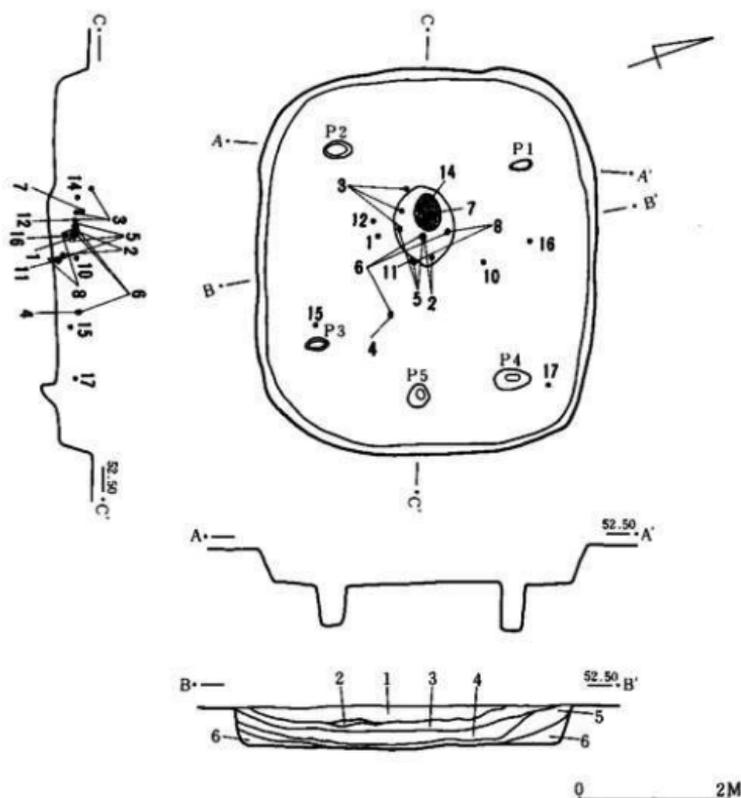
床面は、ハードロームをわざわざ掘り込み、ルーム土と暗褐色土の混合土によって整えたものだが、炉址周辺部を除くと大部分が建設工事に伴う削平作業によって消滅する。炉址周辺部の床面は平坦堅緻であるが、これが床面全体の状態を代表しているかどうかは明らかでない。炉址は約45cm×32cmの楕円形で、主軸方向はN-13°-Wを指す。床への掘り込みは約5cmで、ハードロームを掘り込む。焼土粒が多量に堆積し、掘り込み底のハードロームは、被熱のため広い範囲にわたって赤化し、粘性を失なう。覆土は、焼土粒と炭化粒を多量に含む暗褐色土であるが、C-C'における断面観察では層厚がうすく、分層は困難である。なお、本号跡床面上には炭化材、焼土粒が密着しており、焼失住居である可能性が高い。

遺物は土器片が出土した。そのうち復原実測が可能な資料は、壺2点、壺の体下半部と推定される資料1点、鉢2点、ミニチュア1点の合計6点である(第49図, 第17表, 図版23)。このうち、(4)はP3覆土上面から出土したが、これ以外の土器はいずれも炉址周辺の床面に密着した状態で発見された。

21(027)号跡 (第50図, 図版12)

調査区東部で検出した住居跡で、G11~G12グリッドに位置する。覆土に焼土粒、炭化粒を多く含み、他の遺構との重複もないので、プランの確認は比較的容易であった。プランは南北約4.6m、東西約5.2mで、東西方向に約60cm長い。各コーナーは丸味を帯びる。各壁はいくぶん外側に張り出すが、プラン全体の平面形態は隅丸長方形とみてよいであろう。主軸方向はN-69°-Wを指し、おおそ西方を向く。

壁面は明瞭堅固で、壁高は高く、南壁、北壁で平均約50cm、東西の壁で平均約46cmである。壁下部はハードロームを深く掘り込み、平均約60°の傾斜角で立ち上がる。壁溝はない。ピットは5本確認された(P1~P5)。P1~P4は直立した棒状を呈すが、P5は外傾し、深度は浅い。また、P1~P4の開口部は南北方向に長い楕円形であるが、P5は円形である。P1~P4は、プランのほぼ対角線上に位置し、規模も等しい。これらはいずれも支柱穴と推定される。なお、P1-P2間とP2-P3間距離は、それぞれ約2.5mと約2.7mで、東西方向にいくぶん長い。これは東西方向に長いプランの平面形態と一致する。床面は、ハードロームを掘り込んで平坦に整えたもので、全体に堅緻である。炉址は、プラン中央から少しく西方に寄った位置に設けられ、約1.1m×約0.8mの楕円形を呈す。床への掘り込みは約5cmで、ハードロームを掘り込む。焼土粒が密に堆積し、掘り込み底面のハードロームは被熱のため粘性を失ない、西方寄り



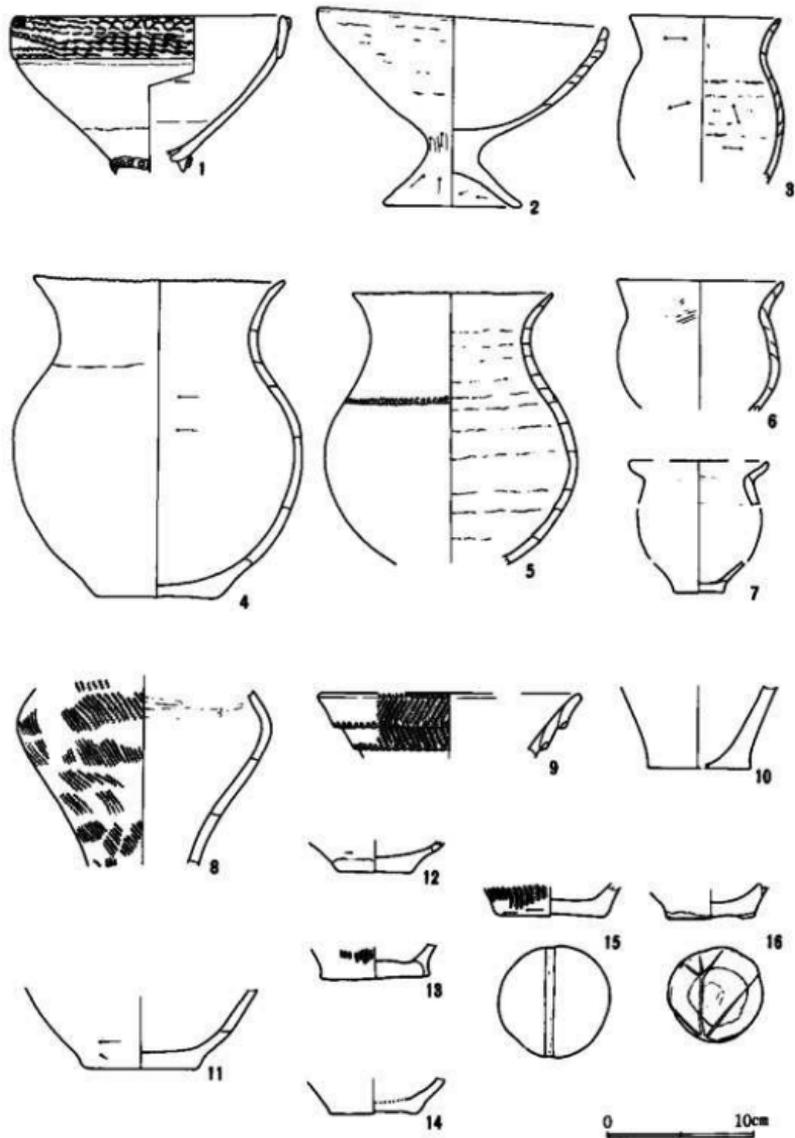
第50図 21(027)号跡実測図

化してレンガ状となる。炉址の主軸方向はN-75°-Wを指す。覆土堆積物は粒子が細かく密であるが、全体に軟質である。B-B'における断面観察では、堆積土は以下の6層に区別される。1. 褐色土層。焼土粒とローム粒を混じえる。2. 暗褐色土層。焼土粒が散在する。3. 褐色土層。炭化材、焼土粒を主体とする。4. 褐色土層。直径約5mm前後のハードロームブロックを含み、焼土粒を混在する。5. 暗褐色土層。直径約5mm前後のハードロームブロックと焼土粒を多量に含む。6. 黄褐色土層。ローム粒を多く含む。

21号跡ビット計測値

ビット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	30×16	25×15	62
P 2	40×25	28×18	55
P 3	30×16	24×10	52
P 4	50×28	20×10	65
P 5	30	10	18

遺物は、大量の土器片と土製品が出土した。これらの遺物は、いずれも床面レベルから約30

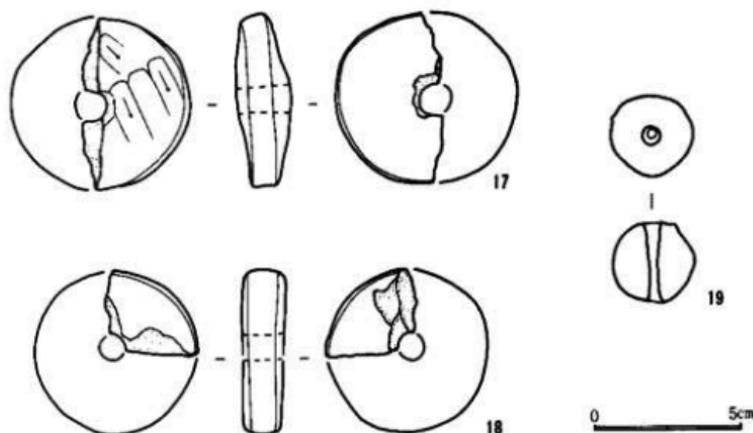


第51图 21(027)号跡出土遺物(1)

第18表 21号跡出土遺物観察表

神国 番号	器種	層位	注量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な仕様	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	高杯	覆土	18.8 10.9 —	外—口縁ナデのち縁部状文+円 形の浮文。扉部粘土着貼 付+円形刺突。体部ナデ 内—横位のハケのちミガキ。 一部刺離	細砂粒多	良	外—赤褐色 内—褐色	ほぼ完 存	口縁部ま めつが著 しい。二次 使用が考 えられる。 V=1.4ℓ
2	高杯	覆土	20.3 13.7 9.5	外—環部ナデのち寛いミガキ。 頸部縦位のナデ、脚縦位 のナデ 内—環部横位のミガキ。底面 刺離。脚部横位のナデ	砂粒多 スコリア多	良	外 } 黄褐色 内 }	ほぼ完 存	V=1.6ℓ
3	甕	覆土	5.2 — —	外—横位の寛いナデ。口縁内 外面：ヨコナデ 内—ナデ	砂粒多	良	外 } 内 } 褐色	1/2	V=0.8ℓ
4	甕	覆土	17.4 21.7 8.4	外—横位のヘラナデ。下部：横 位のミガキ。底面：ていね いなナデ 内—横位のヘラナデ	細砂粒少	普	外—茶褐色 内—灰褐色	1/2	V=3.3ℓ
5	甕	覆土	13.8 (20) —	外—横位のヘラナデ。刺突文 内—横位のヘラナデ	細砂粒多	普	外—茶褐色 内—黄褐色	3/4	V=2.1ℓ 内面輪づ み板
6	甕	覆土	11.5 — —	外—ていねいなナデ。口縁内 外面：横位の荒いなナデ 内—ナデのちミガキ。刺離が 著しい	砂粒多 スコリア多	良	外 } 褐色 内 }	胴下半 以下欠 損	V=0.5ℓ
7	甕	覆土	(9.5) (9) (3.5)	外—口縁：ヨコナデ。体部： 縦位のヘラナデ。底面： ヘラズリ 内—口縁：ヨコナデ。体部：横位の ナデ。底面：横位のヘラナデ	細砂粒多	普	外—明褐色 内—淡い黄土色	1/4	V=0.3ℓ
8	甕	覆土	— — —	外—ナデのち斜縄文(R.L) 内—ヘラケズリ+ヨコナデ	細砂粒多	良	外 } 褐色 内 }	体部の み1/4	
9	甕	覆土	— — —	外—口唇部R.L横。口縁第1段L R横。第2段R.L横。刺突文 内—横位のナデ	砂粒多	普	外—黄土色 内—黄褐色	口縁1/4	
10	甕	覆土	— — 7.0	外—縦位のヘラミガキ。下部： ヨコナデ。底面ヘラナデ 内—縦位のヘラナデ。底面：横 位のヘラナデ	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—褐色	底部1/4	
11	—	覆土	— — 7.5	外—横位のヘラナデ。底面： 不明 内—横位のヘラナデ	砂粒多	普	外—赤褐色 内—黒褐色	底部の み	
12	—	覆土	— — 5.1	外—ヘラケズリのち横位のて いねいなナデ 内—ていねいなナデのち弱い ハケ?	細砂粒多	良	外—暗茶褐色 内—暗褐色	底部	底部内面 スポット 状の刺離 あり
13	—	覆土	— — 7.6	外—ナデのち縄文(R.L縦) 内—不定位のナデ	細砂粒多 スコリア少	良	外 } 淡い黄土色 内 }	底部1/4	木炭底

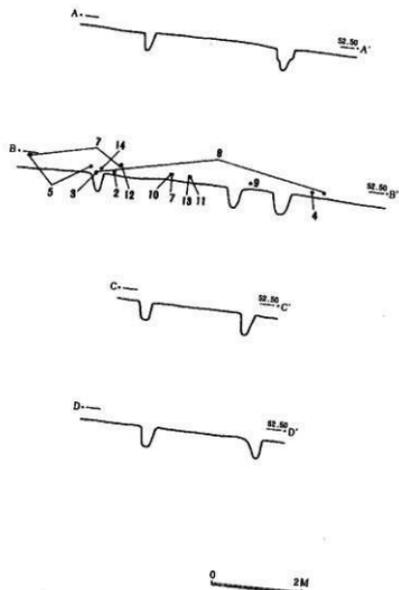
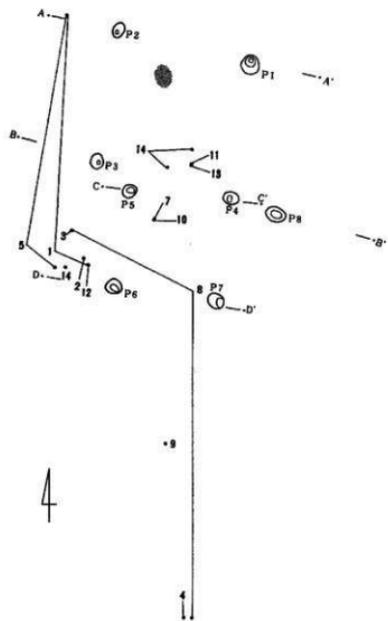
神区 番号	群種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
14	—	覆土	— — 6	外—ヘラケズリのち横位のナ デ。底面：ヘラケズリ 内—ヘラナデ。粘着しい	砂粒 スコリア}少	普	外}淡褐色 内}	底部の み	
15	—	覆土	— — 7.6	外—ナデのち付加糸織文 内—底部周縁：横位のナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—褐色	底部周 縁部完 存	木業底
16	—	覆土	— — 6.2	外—ナデ。底面粘土粒の貼り つけ 内—ナデ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—褐色	底部の み完存	木業底
17	紡錘車	覆土	— — —	直径5.7cm、厚1.8cm、孔径0. 9cm、現存重量32g 片面ヘラケズリ。他面・側 面ナデ。孔縁磨滅	細砂粒多	良	暗褐色	1/2	焼成前穿 孔
18	紡錘車	覆土	— — —	直径(5.5cm)、厚1.4cm、孔径 (0.9cm)、現存重量15g 全面ナデ	砂粒含	普	暗褐色	1/2	焼成前穿 孔
19	土玉	覆土	— — —	縦径2.7cm、横径2.8cm、孔径 0.3cm、重量20g 指頭圧痕	砂粒含	普	褐色	完存	焼成前穿 孔



第52図 21(027)号跡出土遺物(2)

cmほど浮いた状態で出土しており、プラン全体に分散している。出土資料のうち、復原実測の可能なものは壺8点、高坏2点、器形のうかがえない底部資料6点、土製紡錘車2点、土玉1点の合計19点である(第51図、第52図、第18表、図版25、26、30)。

22(029)号跡 (第53図)



第53图 22(029)号测量图

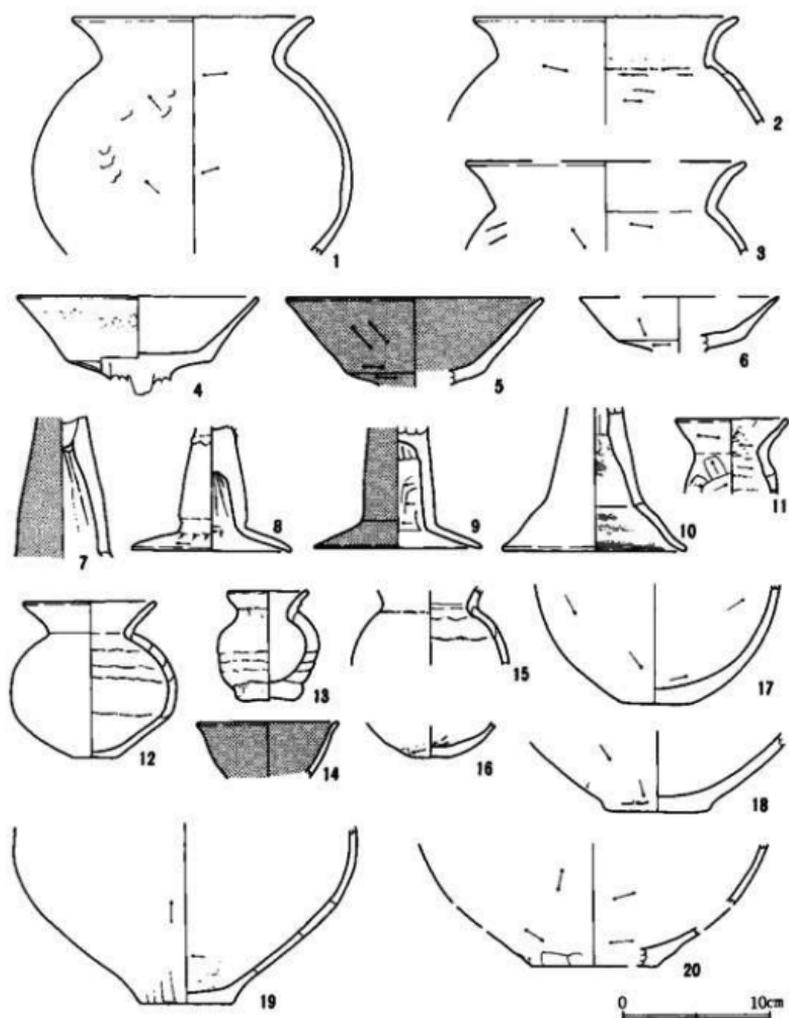
調査区南東部で検出した遺構で、H10～H11、I10～I11グリッドに位置する。本号跡は、規則的に並んだ8本のピット(P1～P8)と炉址と推定される焼土ブロックによって構成される。本号跡を検出した上記グリッド周辺は、いわゆる地山標高が相対的に高いため表土からの攪乱や耕作の影響を強くうけている。掘立の可能性も考えられるが、P1～P4に囲まれた範囲内に焼土と床面と思われる硬質な平坦面がわずかに残されていることから、一応本号跡を竪穴住居跡としておく。遺構の存在は、表土の除去後に出土した多量の土器片と覆土堆積物によって知られた。しかし、遺物の多くがバックホウのバケットに直接もしくは間接的に接触している可能性が高く、どの程度原位置をとどめているか明らかでないこと、検出できた覆土堆積物の層厚はきわめて薄く、その大部分は精査中に消滅したことなどから、プランの復原は不可能である。

壁面および壁溝は確認できなかった。8本発見されたピットは、いずれも直立した棒状を呈す。このうち、P1とP4、P2とP3を結ぶ線およびP1とP2、P3とP4を結ぶ線は平行でほぼ等長になること、P1とP3、P2とP4を結ぶ線は、たがいに相手を2等分することなどから、これらは支柱穴の可能性が高い。なお、P1～P2間とP2～P3間距離は、それぞれ約3.1mと約3.2mで、後者を結ぶ線の走行方向はN-10°-Eを指す。P1～P2間の中央からやや南に寄った位置に炉址と思われる焼土ブロックがある。その大きさは南北約50cm、東西約40cmの楕円形で、焼土粒と暗褐色土が約5cmの厚さに堆積する。床への掘り込みは明瞭でなく、焼土ブロックの下位にあるハードルームには被熱による明瞭な変化をみとめない。主軸方向はN-10°-Eを指す。炉址周辺には、ローム土と暗褐色土の混合土を平坦堅緻に整えた硬質な面が断続的に残存しており、床面の残部である可能性が高い。覆土は暗褐色土を主体とするが、層厚がうすく詳細は不明である。

ところで、P4～P7の4本のピット配列にも既述したP1～P4のピット配列と類似した関係がみとめられるが、P4～P7に囲まれた範囲には、床面もしくは炉址の存在を示唆する遺構を検出できなかった。

22号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	42	12	45
P 2	27	8	39
P 3	26	8	39
P 4	34	12	48
P 5	30	18	35
P 6	37	20	44
P 7	38	20	44
P 8	44	25	48



第54図 22(029)号跡出土遺物

遺物は、多量の土器片と少量の礫片が出土した。これらの多くは、確認面レベルから約10cm前後浮いた状態で発見された。このうち復原実測が可能な資料は、甕4点、壺3点、碗1点、器形のうかがえない底部資料5点、高坏3点、高坏脚部4点、埴1点の合計20点である(第54図、第19表、図版27)。

第19表 22号跡出土遺物観察表

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	覆土	(16.5) — —	外—ヘラナデ、口縁内外面ヨコナデ、第部縦位のヘラナデ 内—横位のヘラナデ	砂粒 } 少 スコリア }	普	外—黒褐色 内—淡褐色	体上部 1/4	内面スポット状の剥離。 V=4.4f
2	甕	覆土	(18) — —	外—横位のヘラケズリのちていねいなナデ、口縁内外面：ヨコナデ 内—横位のヘラナデ、口縁下部斜位のハケのちナデ	砂粒 } 多 スコリア }	良	外 } 暗褐色 内 }	口縁部 1/4	
3	甕	覆土	(19) — —	外—斜位のヘラナデ、口縁内外面：ヨコナデ 内—横位のヘラナデ	細砂粒少	良	外 } 黒褐色 内 }	口縁部 1/4	
4	高坏	覆土	(16.5) — —	外—縦位のヘラミガきのち横位のミガキ、底部：ケズリのちミガキ 内—横位のていねいなナデ、底面剥離いちじるしい	砂粒多	良	外 } 暗褐色 内 }	1/4	
5	高坏	覆土	(17.5) — —	外—ていねいなナデ、口縁：内外面：ヨコナデ 内—横位のナデ、底面剥離いちじるしい	砂粒 } 多 細砂粒 }	普	外 } 赤彩 内 }	1/4	
6	高坏	覆土	(13.5) — —	外—縦位のナデ、口縁内外面：ヨコナデ 内—縦位のナデ	砂粒 } 多 スコリア }	普	外 } 淡褐色 内 }	1/4	全体に剥離いちじるしい。
7	高坏	覆土	— — —	外—不定位のナデ 内—しぼり	細砂粒多	普	外—赤褐色 内—黄褐色	脚部3/4	赤彩
8	高坏	覆土	— — 10.8	外—脚部：縦位のヘラミガキ 裾：ケズリのち横位のミガキ 内—脚部：しぼり、裾：横位のケズリのち踵部ていねいな横位のナデ	砂粒含	良	外 } 橙褐色 内 }	脚部は 1/4定存	モミ痕あり
9	高坏	覆土	— — 11.4	外—脚部：縦位のヘラミガキ、裾：ていねいなナデ 内—ヘラケズリ、裾：横位のナデ、スポット状の剥離あり	砂粒多	普	外—赤彩 内—暗褐色	脚部3/4	
10	高坏	覆土	— — 12.6	外—浅いケズリのち横位のナデ 内—こまかいハケナヘラナデ	細砂粒含	良	外—明褐色 内—褐色	脚部1/4	
11	甕	覆土	(7.5) — —	外—ヘラケズリ、部分的にていねいなナデ、口縁：横位のナデ 内—横位のヘラケズリ、口縁：横位のケズリのちナデ	砂粒僅多	普	外 } 淡茶褐色 内 }	体上部 1/4	輪積み痕あり

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
12	埴	覆土	8.6 10.6 2.0	外—口縁内外面:ヨコナデ,体 部:横位を主としたミガ キ,底部:ケズリ 内—体部:縦位のナデ	白色粒子少	良	外—暗褐色 内—灰褐色	%	輪積み痕 明確 V=0.5L
13	ミニチ ュア (小埴)	覆土	5.6 7.4 3.6	外—ナデ, 指頭圧痕 内—ナデ(不定位)	細砂粒少	良	外 内} 淡褐色	ほぼ完 存	輪積み痕を 検出 二重口縁を 確認 V=0.07L
14	埴	覆土	9.5 — —	外—横位のナデ 内—不定位のナデ	細砂粒少	良	外 内} 淡赤褐色	口縁部 %	赤彩
15	壺	覆土	— — —	外—不定位のナデ 内—ナデ	砂粒少	良	外—褐色 内—灰褐色	%	
16	—	覆土	— — 2.4	外—ケズリのちナデ, 底面ケズリ 内—ケズリのちナデ, 底面: スポット状剥離	細砂粒 スコリア} 含	普	外—汚淡褐色 内—暗淡褐色	底部完 存	底面内面 に放射状 のケズリ 痕
17	—	覆土	— — 4.1	外—ナデ 内—ヘラナデ, スポット状の 剥離	砂粒多	普	外—暗褐色 内—灰褐色	底部は 完存	
18	—	覆土	— — (7.5)	外—ケズリのちナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—黒褐色	底部%	
19	—	覆土	— — 6.2	外—縦位のヘラケズリ, 底面 :ヘラケズリ 内—横位と斜位のケズリ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—黄褐色	底部%	
20	—	覆土	— — (8.5)	外—縦位のナデ, 底部周縁: 横位のヘラケズリ 内—横位のナデ	砂粒含	普	外—黒褐色 内—茶褐色	底部%	

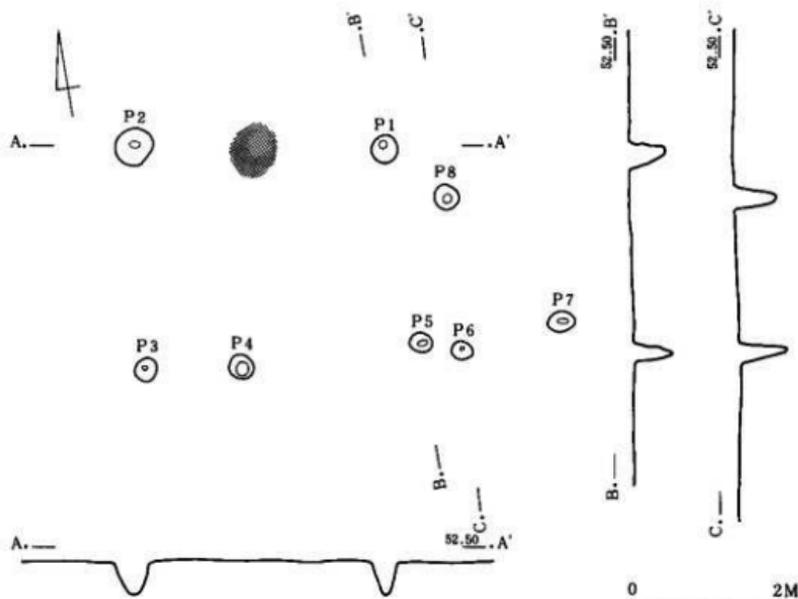
23(032)号跡 (第55図)

22号跡の東隣で検出した遺構で、調査区の南東隅にあたるH12~H13, I12~I13グリッドに位置する。既述のように、上記グリッド付近は攪乱が著しく、攪乱層の直下にII層とIII層の漸移層が存在するので、遺構の確認は困難をきわめた。本号跡は、ピットと焼土ブロックによって構成されるが、壁面および床面は確認できなかった。

ピットは8本確認された(P1~P8)。これらはいずれも直立した棒状を呈すが、P1~P3は、P2を頂点とする直角二等辺三角形形状に並んでおり、P1-P2間のほぼ中間に焼土ブロッ

23号跡ピット計測値

ピット番号	直径(cm)	底径(cm)	深さ(cm)
P 1	35	8	46
P 2	50	14	44
P 3	32	14	35
P 4	33	18	49
P 5	30	15	52
P 6	28	6	62
P 7	40	15	44
P 8	35	12	55



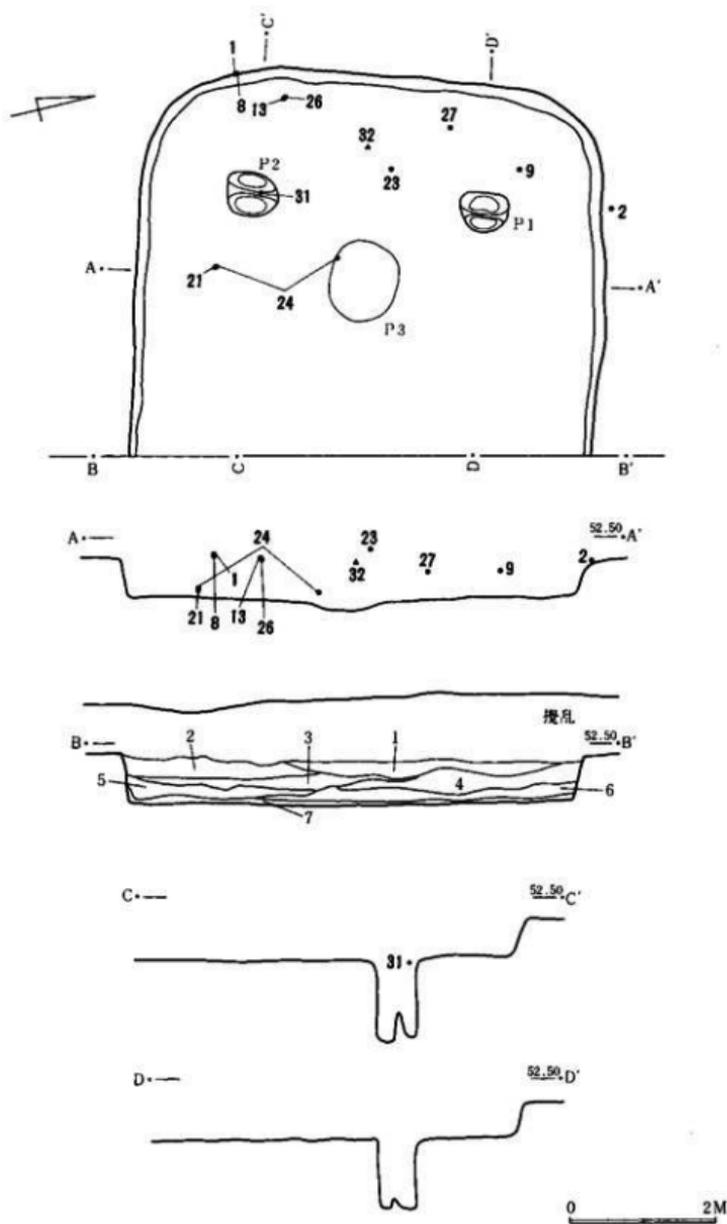
第55図 23(032)号跡実測図

クがある。焼土ブロックの大きさは南北約80cm,東西約60cmの楕円形を呈し、粒子の細かい焼土粒が密につまるが、焼土粒を除去した底面は、やや粘性を欠いたソフトロームで、その下位のハードローム上面は赤化していない。主軸方向はN-16°-Eを指す。もし、これが炉址だとすると、その相対的な位置関係からP1~P3とP5を支柱穴とする竪穴住居跡が存在した可能性があるが、検討の余地を残す。なお、P1-P2間とP2-P3間距離はそれぞれ約3.4mと約3mで、P2-P3間を結ぶ線の走行方向はN-6°-Eを指す。なお、上記のグリッドからは少量の土器片がえられたが、復原実測の可能な資料はなかった。

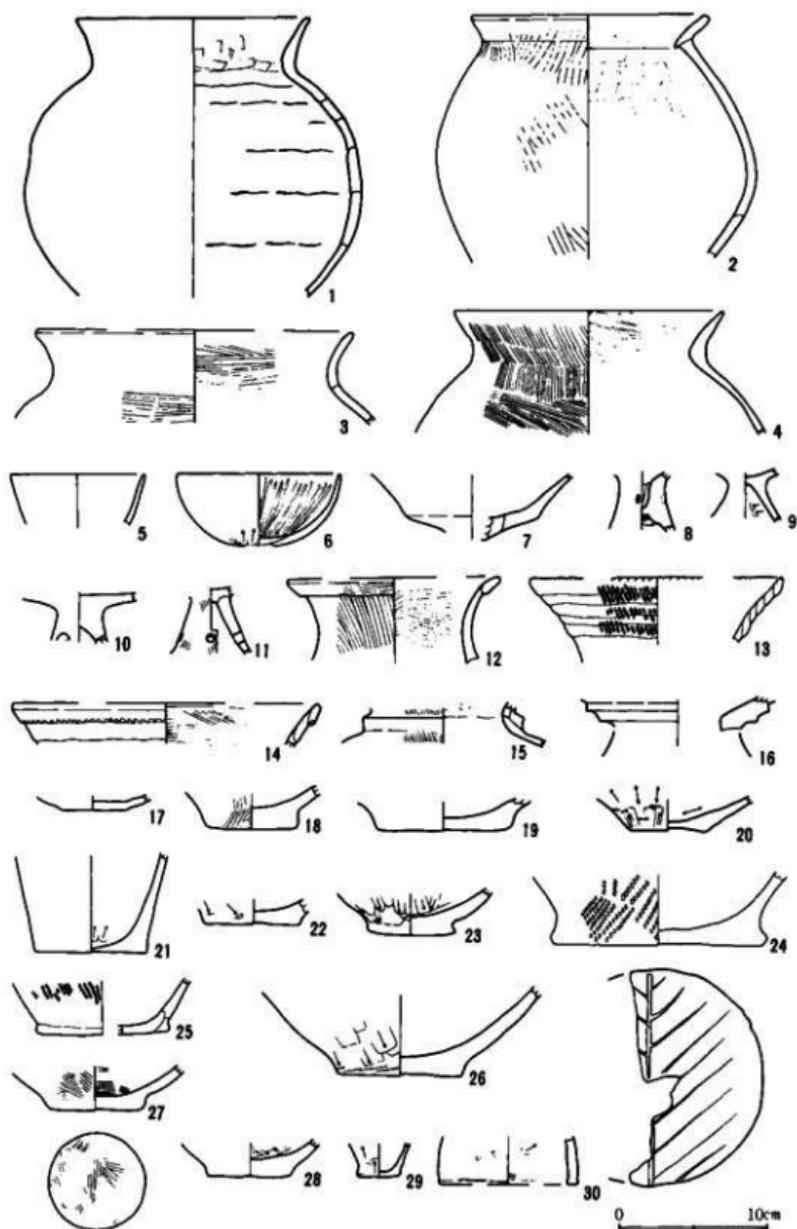
24(028)号跡 (第56図, 図版13)

調査区の南東隅で検出した住居跡で、J12~J13グリッドに位置する。プランの東半分は調査区外に存在するが、覆土上面に黒褐色土が広く堆積すること、他の遺構との切り合いがないことなどにより、プランの確認は容易だった。プランの大きさは、南北約6.4m,東西約5.4m以上である。各壁は直線状のび、コーナーは丸味が強い。本号跡は完掘されていないが、平面形態は隅丸長方形もしくは隅丸方形を呈し、主軸方向はN-71°-W前後を指すものと推定される。

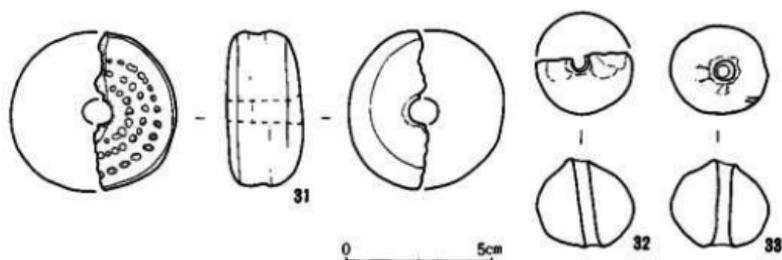
壁面は明瞭である。壁高は平均約50cmと高い。壁下部はハードロームを掘り込み、平均約70°



第56图 24(028)号跡実測図



第57图 24(028)号跡出土遺物(1)



第58図 24(028)号跡出土遺物(2)

～80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は発見されなかった。ピットは3本確認された(P1～P3)。P1は直径約70cm×55cm、深さ約1m、P2は直径約70cm×60cm、深さ約1.1mを測る。両ピットはハードロームを深く掘り込むが、底面に高さ約20～40cm、幅約10～15cmの堅固な隆起帯がある。この隆起帯は本号跡西壁と平行し、P1、P2の底面を約40cm×20cmの楕円形に2分する(図版13)。上記のようにP1とP2は性質や規模が互いに類似しており、予想される本号跡プランの対角線上に位置しているので、支柱穴である可能性が高い。そうだとすると、支柱の立て替えが行なわれたか、1本の柱穴に2本の材を並立させて上部構造を支えていた可能性などが考えられる。なお、P1-P2間距離は約3.2mであるが、P1とP2をそれぞれ起点とする半径3.2mの円内に支柱穴の可能性のあるピットは発見できないので、本号跡の支柱穴間距離は南北方向よりも東西方向に長いものと思われる。ところで、P3はP1とP2の中間から少し東寄りに位置するもので、開口部の大きさは南北約0.9m、東西約1.1m、深さ約30cmを測る。底面はハードロームを掘り込み凹凸が著しく、整形は不十分である。P3はその位置や形態から、炉址の可能性が考えられるが、P3内の堆積物には被熱の影響をみとめることができないので、一応性格不明としておく。床面は、ハードロームを掘り込み、これを平坦に整えたもので、全体に堅緻である。覆土は粒子が細かく密であるが、やや軟質である。B-B'における断面観察では、以下の7層に分けられる。1. 黒色土層。粒子は細かく、ローム土が混在する。2. 黒褐色土層。3. 黒色土層。1層に酷似する。4. 暗褐色土層。ローム粒が多く混じる。5. 黒褐色土層。微細なハードローム粒を混じえる。6. 黒色土層。3層に酷似する。7. 茶褐色土層。ローム粒を多く混じえる。

遺物は土器片と土製品が多量に出土した。復原実測の可能な資料は、壺9点、壺3点、鉢と思われる底部資料1点、埴1点、器台(?)1点、高坏5点、器形のうかがえない底部資料10点、土製紡錘車1点、土玉2点の合計33点である(第57図、第58図、第20表、図版26、30)。このうち、(1～2)、(8)は本号跡プランからやや外れた位置から出土したもので、本号跡にともなわない可能性がある。なお、覆土中から外面にかご目痕のある破片資料が得られている(図版71)。

第20表 24号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	プラン外	15.8 (22) —	外—口縁：ヨコナデ，肩部：ヘラナデ 内—口縁：横位のヘラケズリのちヨ コナデ，頸部：横位のヘラケズ リ，底部：ヘラナデ及びび一重 ヘラケズリ	砂粒多	青	外}暗褐色 内}	底	V=4.4E
2	甕	プラン外	16.4 (21-22) —	外—口縁：横位ユビナデ，体 部：ハケのちナデ消し 内—口縁：横位のハケ，底部 ：ヘラ柄りのち横位の掌 ナデ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—灰褐色	底	スギ村等の 埋蔵地による ハケ目 (器体測定 値3-4cm 高さ7-9 cm) V=4.4E
3	甕	覆土	(21.5) — —	外—口縁：ヨコナデ，底部： 横位ハケ 内—口縁：横位のハケ，底部 ：掌ナデ	細砂粒多	青	外}褐色 内}	口縁1/6	
4	甕	覆土	(21.5) — —	外—口縁：斜位のハケ，口特 部：ヨコナデ，肩部：縦 位のハケ，底部：斜位のハケ 内—口縁：横位のハケのちヨ コナデ，底部：ナデ	砂粒少 スコリア	青	外}明褐色 内}	口縁1/6	
5	埴	覆土	9.4 — —	外—口唇：ヨコナデ，口縁：縦 位のヘラナデ 内—横位のナデ	砂粒多	良	外}黄褐色 内}	口縁部 のみ1/6	
6	高坏	覆土	9.0 — —	外—环上部：縦位のミガキ， 环下部：横位のミガキ， 环底部：ケズリ 内—放射状のミガキ	細砂粒少 スコリア	良	外}淡褐色 内}	坏部3/6	外面に赤 彩の可能性あり
7	高坏	覆土	— — —	外—ナデ 内—ナデ	細砂粒多	不良	外}淡黄土色 内}	坏部1/6	
8	器台?	プラン外	— — —	外—脚部：縦位のナデ 内—受部：ケズリ，脚部：棒 状工具によるケズリ。	細砂粒少	青	外}黄褐色 内}	脚部 のみ1/6	モミ痕あり
9	高坏	覆土	— — —	外—坏部：ナデ？，脚部：縦 位のヘラミガキ 内—坏部：ていおいなナデ， 脚部：横位のヘラケズリ	細砂粒少	青	外—暗褐色 内—灰褐色	脚上部 完存	
10	高坏	覆土	— — —	内外成形不明	細砂粒多 スコリア	不良	外}淡橙褐色 内}	坏底部 と脚上 部	3孔
11	高坏	覆土	— — —	外—縦位のハケのちナデ消し 内—横位のハケのち横位の指 ナデ	砂粒多	良	外—赤褐色 内—褐色	脚上部 3/6	4孔
12	壺	覆土	(14.5) — —	外—口縁：貼付けのち横位の ハケ，頸部：縦位のハケ 内—口縁：ヘラナデ，頸部： ヨコハケ	スコリア多	青	外}肌色 内}	口縁1/6	

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
13	甕	覆土	(17) — —	外—口径：縄文押捺。口径： 縄文RL横 内—横位のナデ	緻密	青	外—褐色 内—灰褐色	口縁部 1/6	輪づみ底 あり
14	甕	覆土	(21) — —	外—口径：1段2段共横位の ナデ。刺突文 内—横位のハケ	細砂粒少	青	外 } 黄白色 内 }	口縁部 1/6	輪づみ底 あり
15	甕	覆土	— — —	外—口径：縄文縦位ハケ。頸 部：不定位のナデ 内—口径：横位ハケ。底部：ナデ	細砂粒少	良	外 } 肌色 内 }	頸部1/6 程度	
16	壺	覆土	— — —	外—横位のナデ 内—粗いナデ	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—黄褐色	—	赤彩?
17	鉢	覆土	— — —	外—ヘラナデ 内—ヘラナデ。剥離	細砂粒多	青	外—暗褐色 内—汚灰色	底部全 面	
18	—	覆土	— — 6.4	外—縦位のハケ。底縁：部分 的に指おさえ。底面：ケズリ 内—ナデ	砂粒多	青	外—橙褐色 内—黒褐色	底部は ほぼ完存	
19	—	覆土	— — (9.5)	外—ナデ 内—成彩不明	砂粒多	青	外—淡褐色 内—褐色	底部1/6	内面は剥 離 木炭底
20	—	覆土	— — 5.3	外—縦位のヘラなどで、横位の ナデ 内—ナデ	砂粒多	青	外—暗褐色 内—黒褐色	底部1/6	
21	—	覆土	— — (8)	外—ていねいな縦位のナデ 内—ていねいなナデ	砂粒 } 多 細砂粒 }	青	外—橙褐色 内—暗褐色	底部1/6	
22	—	覆土	— — 6.6	外—ハケのちナデ消し 内—ヘラケズリ	砂粒少	青	外—暗灰褐色 内—黒色	底部1/6	
23	—	覆土	— — 6	外—縦位のヘラケズリ 内—縦位のヘラケズリ	砂粒少	青	外—淡褐色 内—焦茶色	底部完 存	
24	甕	覆土	— — (14.5)	外—斜行縄文 内—粗いナデ	砂粒多	青	外 } 褐色 内 }	底部1/6	木炭底
25	甕	覆土	— — 9.0	外—地文に縄文(RL) 内—ナデ	細砂粒少	青	外—淡褐色 内—褐色	底部1/6	底面に織 縄痕あり
26	—	覆土	— — (8.5)	外—体部：ヘラケズリ。底面 ：ナデ 内—ナデ	細砂粒多	青	外—明褐色 内—灰褐色	底部1/6	
27	—	覆土	— — 6.8	外—体部：ハケ。底面：ハケ 内—ハケ(スギなど木目の明瞭 なものでおさえ?)	砂粒少	青	外—暗褐色 内—黒褐色	底部完 存	

挿入 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 要 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
28	—	覆土	— — 5.8	外—体部:ナデ, 底面:ケズリ 内—ヘラケズリ	砂粒多	普	外—黒褐色 内—暗褐色	底部完 全	底面木炭 粒一部が 残部残粒 部まで及 ぶ
29	—	覆土	— — 3.0	外—ヘラケズリ 内—ナデ	砂粒少	良	外—赤褐色 内—灰褐色	底部の み	小形の器 ?
30	甕	覆土	— — 9.6	外—ハケのちナデ 内—ケズリのちナデ, 底縁: 横位のハケ	砂粒少	良	外 内 } 淡黄褐色	内部残	
31	紡錘車	I 2		直径5.5cm, 厚2.5cm, 孔径 0.9cm, 現存重量40g 本文参照	砂粒少	良	暗褐色	1/2	焼成前穿 孔
32	土玉	覆土		縦径3cm, 横径3.3cm, 孔径0.5 cm, 重量28g, 表面磨滅, 穿 孔縁増減, 全面砂っぽい	砂粒含	やや 不良	淡褐色	完存	焼成前穿 孔
33	土玉	覆土		縦径3cm, 横径3.4cm, 孔径 0.4cm, 現存重量17g 指痕圧痕, 指紋あり, 摩滅痕なし	細砂含	普	褐色	1/2	焼成前穿 孔

(31)は、原形の1/2を欠損した土製紡錘車で、割れ口は古い。文様は全表面をていねいなナデによって調整したのち、穿孔部を中心として同心円状の列点文を片面に施す。列点の1単位の大きさは直径約1～2mm、深さ約1～2mmで、各列点の底面は中央部がいくぶん盛り上がる。他面は無文で、側面の中央には幅約6mm、深さ約1mmの浅い溝があり、側面を一周する。

2 溝

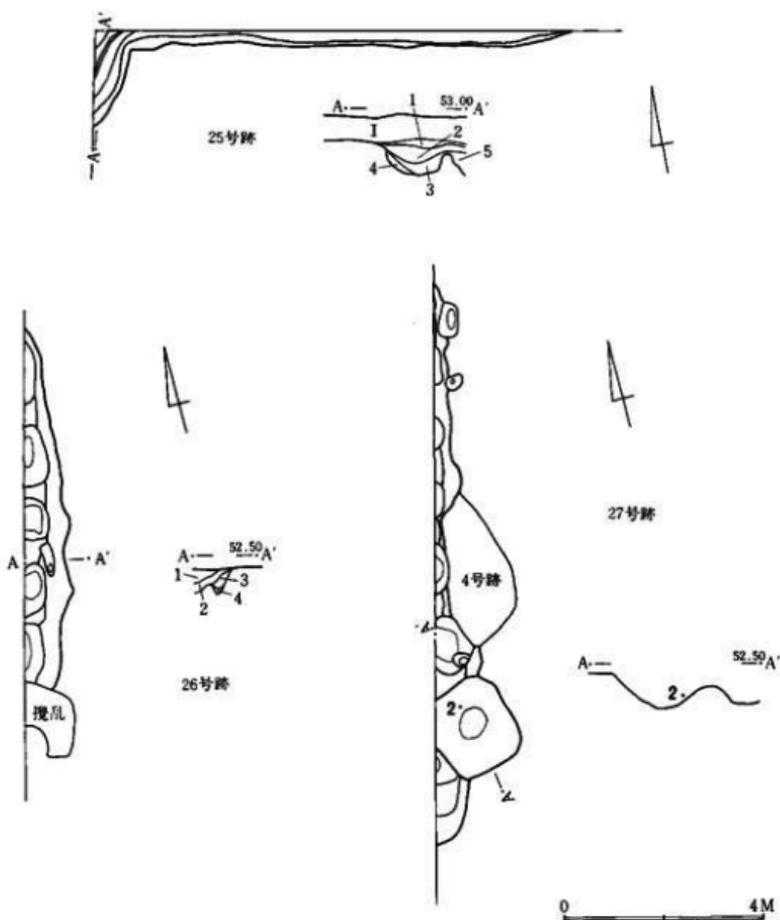
25(001)号跡 (第59図, 図版15)

調査区北西隅にその一部分を検出した溝で、A0～A8, B0グリッドに位置する。本溝は、調査区北西隅の境界線に合せるようにその地点で強く折れ曲がり、両端はまもなく調査区外へへびて消える。本号跡はII層上面で確認されたもので、壁面は明瞭である。壁下部はハードロームを掘り込み、平均約50°の傾斜角で立ち上がる。本号跡の大部分は調査区外に存在するものと思われ、全容は明らかでない。

覆土は、A-A'における断面観察で以下の5層に分けられる。1. 暗褐色土層。ローム粒を含む。2. 暗褐色土層。粘性としまりを欠く。3. 黒褐色土層。木の根が入り込み軟質である。4. 黒褐色土層。ロームブロックを含む。5. 褐色土層。ローム粒を多く含む。

26(003)号跡 (第59図, 図版15)

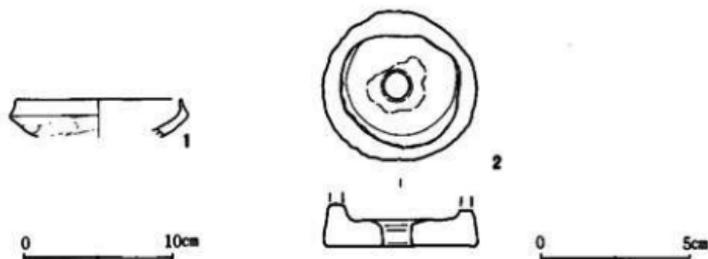
調査区の西端中央部付近で検出した溝で、II層で確認された。調査区の西の境界に沿って南北方向に走行し2号跡を切るが、調査区の内外にまたがって存在し完掘されないで、溝幅や



第59図 25(001), 26(003), 27(008)号跡実測図

規模、走行方向などは明らかでない。

調査区内で確認できた壁面は明瞭で、壁下部はハードロームを掘り込み、平均約45°~50°の傾斜角で立ち上がる。溝底には直径約1m前後のピットが溝の走行と平行して約1.4m間隔で並ぶ。ピット底は平坦である。確認面から調査区内に出現した溝底までの深さは約32cm、溝底とピット底との比高差は最大で約35cm、最小で約10cmである。覆土は全体によくしまり、A-A'における断面観察では以下の4層に分けられる。1. 褐色土層。ローム粒を混える。2. 褐色土層。



第60図 26(003)、27(008)号跡出土遺物

第21表 26号跡、27号跡出土遺物観察表

検出 番号	群種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	坏	覆土	(11) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ、体 部：ヘラケズリ 内—体部：横位ていねいなナ デ	スコリア含	普通	外 } 黒褐色 内 }	1/4	26号跡出 土遺物
2	瓶	覆土	— — 5.2	外—体部：ナデ、底面：木葉 底ナデ消し 内—底面：あらいナデ、刺維	砂粒多	良	外 } 淡褐色 内 }	底部の み	27号跡出 土遺物 焼成前穿 孔。本文 参照

1層に類似するが、ローム粒の混入量が少ない。3. 暗褐色土層。4. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多く含み、粘性がある。

なお、覆土中から坏1点が出土したが(第60図1、第21表)、2号跡から混入した可能性が高い。

27(008)号跡 (第59図、図版4)

調査区の南西隅で検出した溝で、II層で確認された。調査区の西側の境界線とほとんど重なり、本号跡の大部分は調査区外に存在すると考えられるので、溝幅、溝底の状態などは明らかでない。4号跡を切る。しかし、本号跡は調査区の西端を南北に走行すること、壁面は明瞭で、壁下部はハードロームを掘り込み平均約50°の傾斜角で立ち上ること、溝底に直径約1m、深さ約30cmの隅丸長方形のピットが溝の走行と同方向に約1.5m間隔で並ぶこと、確認面から溝底までの深さは平均約35cmを計ることなど、26号跡とよく似た性質がみとめられる。おそらく、本号跡と26号跡は連続する1本の溝になるものと思われる。本号跡の南端には約1.6m×1.8m、深さ約70cmの隅丸方形のピットが存在する。それより南側は深度を急に減じており、遺構を追うことはできない。本号跡は、この地点で消滅するか、西側へ屈曲するものと思われる。

遺物は覆土中から土器片が1点だけ得られた(第60図2、第21表、図版30)。本資料は、当初、

破損した壺形土器の底部中央を穿孔して再利用した紡錘車の可能性を考えたが、底部の穿孔は焼成以前に行なわれたことが明らかであるので、類例は少ないが、一応壺の底部破片として扱うことにした。穿孔径は約1cmを計り、穿孔は外面から内へ向かっていねいに行なわれ、孔壁面は平滑である。

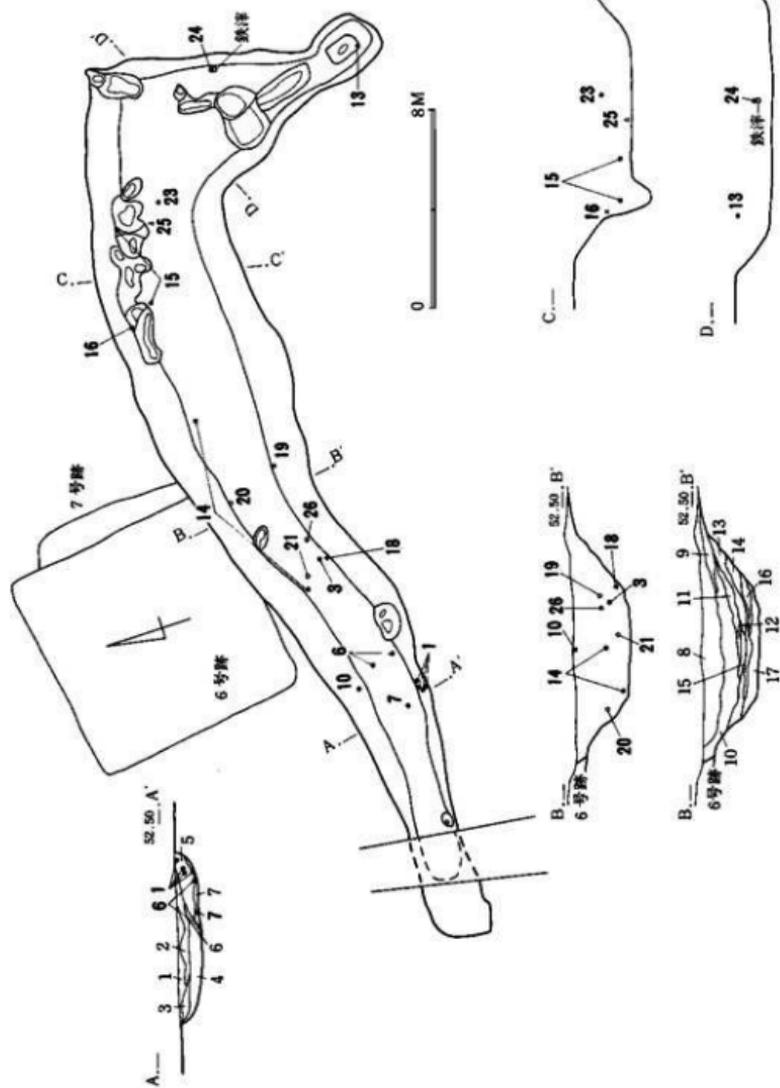
28(011)号跡 (第61図、図版14)

台地中央部につづく調査区中央部南寄りで見出した溝で、K1~K5、J4~J10、I5~I10、H7~H10グリッドに位置する。II層上面で確認された。6、7、17号跡を切る。平面観は東西方向に長くのびた逆L字形を呈し、東側で南に向かってほぼ直角に屈曲する。溝の総延長は約45mに達する。壁面や底面の状態、溝幅、深さ、などは一様でない。すなわち、溝の上端幅は最も狭い両端部で約1.8mであるが、最も広い屈曲部では約7.4mを測る。溝底幅は両端部で約1.4m、屈曲部で約4.2mである。また、確認面からの深さは両端部が約20cmで最も浅く、中央へ向かうほど漸移的に深度を増し、屈曲部付近で平均約90cmに達する。屈曲部から南に折れた南端部付近では深さ約50cmのピットを経て急傾斜で立ち上がるが、西端はゆるく立ち上がる。

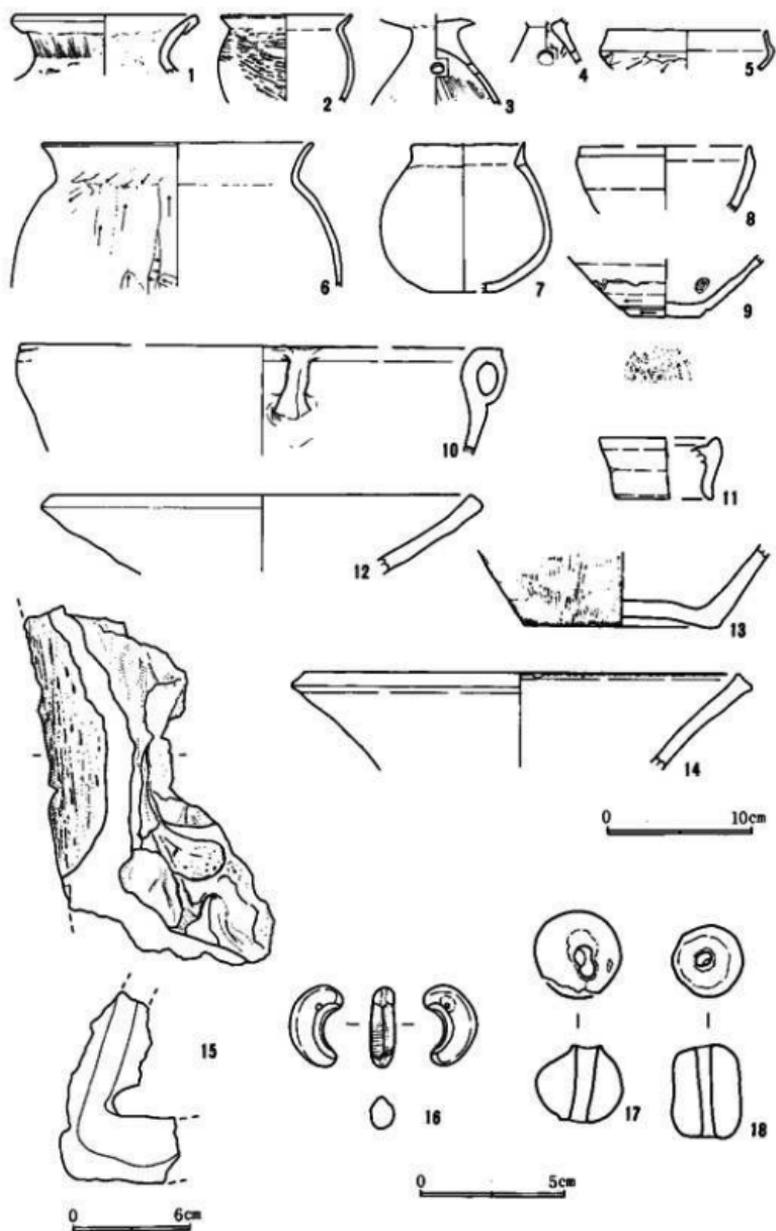
壁面は明瞭だがもろく、崩れやすい。壁下部はハードロームを深く掘り込み、屈曲部付近では平均約45°~50°の傾斜角で立ち上がる。溝底には大小のピットが存在し、とくに東側の屈曲部付近に顕著である。ピットの深さは屈曲部北側に並ぶもので平均約50cm、屈曲部南側の溝底中央部に位置するものでは約60cm前後、最南端のものは約10cmである。溝断面は両端部で浅いU字形を呈すが、中央部に向かうにつれて逆台形に変化する。なお、屈曲部付近の底面は、ローム土を平坦堅緻に固めたもので、硬質な住居跡床面に似ており、断面は幅広の逆台形を呈す。

覆土は、全体に粒子の細かい土壌が密に堆積するが、A-A'とB-B'における断面観察では以下の17層に分層される。1.黒色土層。粒子のこまかい黒色土が密につまる。2.黒褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが混じる。3.黒色土層。1層に酷似する。4.暗褐色土層。ローム粒が混じる。5.黒色土層。6.黒褐色土層。黒色土主体に直径約5mmのハードロームブロックが混入する。7.暗褐色土層。8.暗褐色土層。ローム土が混じる。9.褐色土層。ローム粒を含む。10.暗褐色土層。11.茶褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを含む。12.黒色土層。13.褐色土層。14.黄褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックを多く含む。15.黒褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックが混じる。16.褐色土層。ローム土を多く含む。17.褐色土層。直径約2mmのハードロームブロックを含む。なお、上記の各層の多くは、溝の両側から溝内へ流れ込むように堆積する傾向がある。

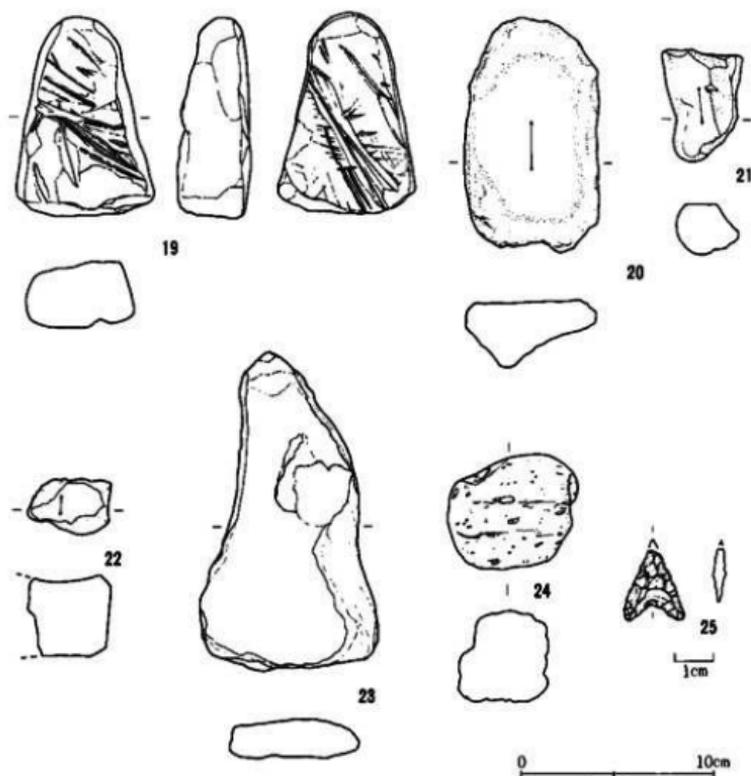
遺物は土器片、陶器片、土製品、石器、自然石等が出土し、遺物量は多く、また種類も豊富である。このうち復原実測の可能な資料は、甕3点、壺1点、坏1点、高坏1点、器台1点、内耳甕1点、常滑甕2点、常滑鉢2点、天目軸のある碗1点、古瀬戸碗1点、炉壁(?)1点、勾玉1点、土玉2点、磁石4点、台石(?)1点、軽石製品1点、石鏃1点の合計25点である(第



第61图 28(011)号踏实测图



第62图 28(011)号跡出土遺物(1) (15: $\times \frac{1}{2}$, 16~18: $\times \frac{1}{4}$)



第63図 28(011)号跡出土遺物(2)

62図、第63図、第22表、図版28、30、31、32)。これらの多くは覆土中から出土したものが、(6～7)は溝底に近いところから出土した。(11～14)に示した4点の資料は常滑焼である。(14)は内面全面が摩耗する。覆土内からは壺もしくは鉢に由来する常滑焼の破片資料が多量に発見されたが、接合状態は悪く図示したもの以外は器形を復原できない。おそらく覆土内に存在する常滑の個体数はかなり多いものと思われる。(15)は炉壁と考えられる破片資料である。たたら炉壁の可能性はあるが、詳細は明らかでない。割れ口は古く、他に接合する資料は発見できなかった。(16)は硬砂岩製の勾玉である。全長2.7cm、最大幅1.75cm、最大厚0.8cm、孔径約1.3mm、重量5.0gを計る。穿孔は貫通するが、片面の孔縁に剝離をみとめる。屈曲部内面に横位の擦痕を残す。それ以外はていねいな面どりで仕上げられ、落ちついた黒い光沢を放つ。(19～22)は磁石で、いずれもよく使いこまれる。(19)は、表裏両面に長袖に対して左あがり斜位の鋭く、深い擦痕がある。(21～22)は破片資料であるが、割れ口は古く、丸味を帯びる。

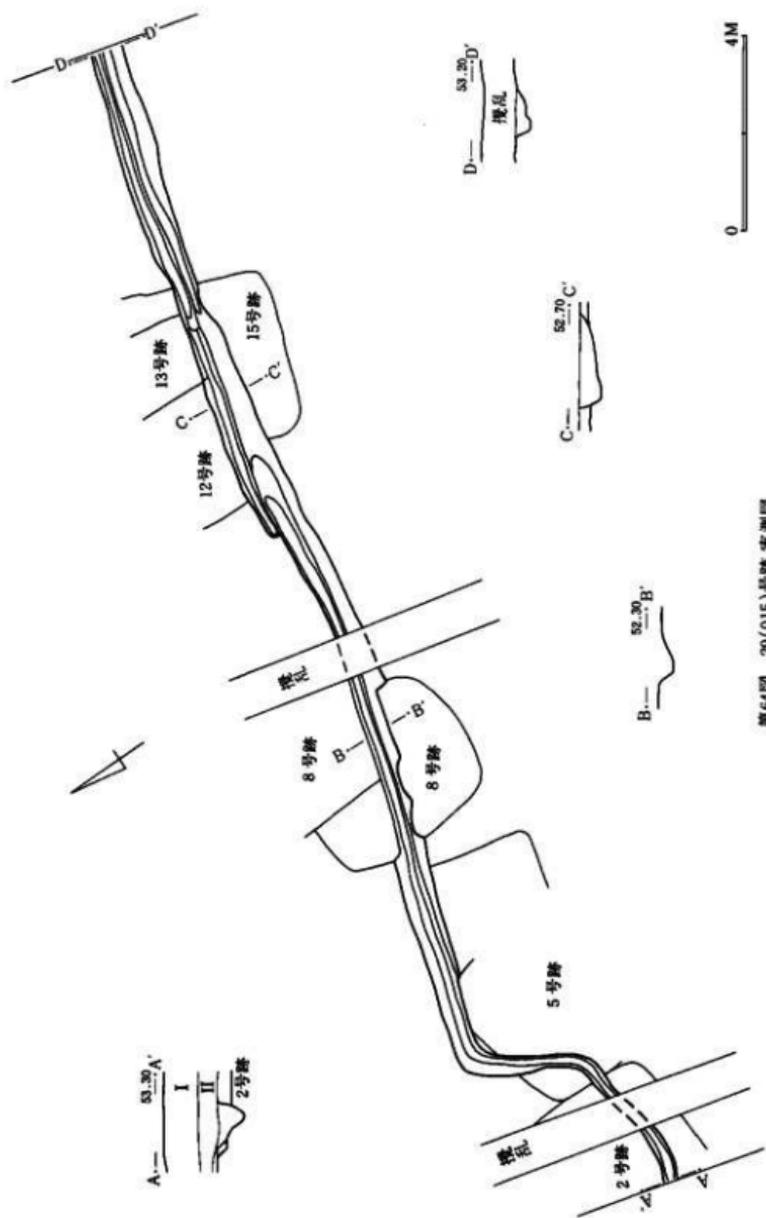
第22表 28号跡出土遺物観察表

押印 番号	器種	層位	注量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 要 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考
1	壺	覆土	13.1 — —	外—口縁内外面：横位のナデ 頸部・体部：縦位のハケ 内—横位のケズリ	細砂粒	普	外 } 淡褐色 内 }	胴を除 きはぼ 完存	内外面と もスポッ ト状の剥 離
2	甕	覆土	(9.5) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ハケ(?) 内—ていねいな横位のナデ	細砂少	良	外 } 淡褐色 内 }	1/2	
3	高杯	覆土	— — —	外—杯：ナデ、脚：縦位のヘ ラミガキ 内—杯：ヘラミガキ、脚：ハケ	砂粒多	不良	外 } 暗褐色 内 }	脚部3/4	杯内面底 部に幅1. 5cm、深さ 1mmの溝 状の凹み がある。 3孔
4	器台	覆土	— — —	外—ミガキ 内—受部：ミガキ、脚：ナデ	細砂粒含	良	外 } 暗褐色 内 }	脚部1/2	3孔
5	杯	覆土	(11.5) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ヘラケズリ 内—ミガキ	砂粒少	良	外 } 暗赤褐色 内 }	1/2	
6	甕	覆土	(19.5) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のヘラケズリ 内—横位のナデ	細砂粒多	普	外 } 淡褐色 内 }	口縁部 破片	
7	甕	覆土	8.0 10.2 4.8	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：自由方向のケズリ 内—横位を基本としたケズリ	スコリア } 赤色粒子 } 多	良	外—黄灰色 内—肌色	1/2	
8	埴	覆土	(12.5) — —	天目釉	淡灰色粘土	良	外 } 黒色 内 }	口縁破 片	
9	埴	覆土	— — (5)	古瀬戸(灰釉) 外—回転ヘラケズリ、釉、底 面回転糸切り 内—不明	淡灰褐色粘土	良	外 } 淡灰褐色 内 }	底部の み1/2	内面に 付着物痕
10	内耳環	覆土	— — —	土師質 外—横位のていねいなナデ 内—横位のていねいなナデ	砂粒、雲母 多	普	外 } 暗赤褐色 内 }	口縁部 破片	
11	甕	覆土	— — —	常滑 外—横位のていねいなナデ 内—横位のていねいなナデ+ 横位のヘラケズリ	砂粒多	普	外 } 暗茶褐色 内 }	口縁部 破片	外面に釉
12	鉢	覆土	(31.5) — —	常滑 外—口縁内外面：ヨコナデ、口 縁部に部分的にハケ、体 部：ナデ 内—ナデ	砂粒多	普	外 } 赤褐色 内 }	口縁部 破片	口唇部に 緑色を帯 びた黄褐 色の釉が かかる。
13	甕	覆土	— — 14	常滑 外—細かいタタキのち一部分 をヘラケズリ 内—ナデ	細砂粒多	普	外 } 暗褐色 内 }	底部の み1/2	底部内面 に自然釉

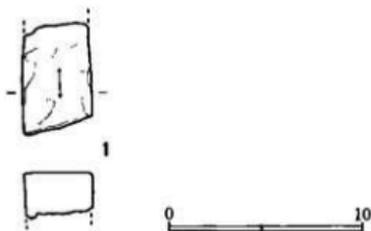
神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
14	鉢	覆土	(32.5) — —	常滑 外一口縁内外面: ヨコナデ 体部: ナデ 内一不明	砂粒多	昔	外 } 暗赤褐色 内 }	口縁部 破片	内面は著 しく摩耗 し、口縁 内面はキ ザリ目状 となる
15	埴壇?	覆土		たたら埴壇か?			暗灰黒色	不明	
16	勾玉	覆土		本文参照			黒色	完存	
17	土玉	覆土		縦径2.7cm、横径3cm、孔径 0.6cm、現存重量19g、ヘラ ケズリ、指頭圧痕、穿孔縁摩 滅、表面平滑	砂粒含	昔	暗褐色	一部欠 損	焼成前穿 孔
18	土玉	覆土		縦径3.1cm、横径2.5cm、孔径 0.4cm、重量22g 表面平滑	細砂含	昔	褐色	完存	焼成前穿 孔
19	磁石	覆土		石質: 砂岩				完存	
20	磁石	覆土		一面のみに縦位の使用痕、重 量約300g、石質: 砂岩				完存	
21	磁石	覆土		一面のみに縦位の擦痕、他は 自然面、石質: 砂岩				完存	
22	磁石	覆土		三面に縦位の擦痕 二次的な赤熱 石質: 砂岩				欠損	
23	白石?	覆土		周縁打撃成形、一面のみに縦 位の擦痕 石質: 硬質砂岩				完存	
24	轉石 製品	覆土		周縁は丸味を帯びる。 5cm×6.5cm×4cm				完存	
25	石鏝	覆土		全長2cm、最大幅1.5cm、厚 さ3mm、重量0.6g、先端角 度48°、石質: 安山岩				先端部 欠損	

29(015)号跡 (第64図)

調査区北側を東西に横切る溝で、2、5、8、12、13、15、14、18号跡を切る。上端幅は、狭いところで約40cm、広いところで約2mを計る。溝底幅は約18~24cmである。溝の走行は2号跡と5号跡の付近で2度屈折し、この間約5mほどが南北方向に走行する以外はすべて東西方向に走る。12号跡付近では走行の連続性が悪く、同方向に走る2本の溝が合体したような掘り方になる。これを境にして西寄りには溝底が平坦で断面は深いU字形を呈し、東寄りの溝底は



第64图 29(015)号跡-实例图



第65図 29(015)号跡出土遺物

第23表 29号跡出土遺物観察表

神国 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	砥石	覆土		ややあらい整形、四面に縦位の 溝痕がある。 石質：凝灰岩				欠損	

ゆるい起伏をもち、断面は浅いW字形を呈す。

壁はハードロームを掘り込み、壁面は明瞭である。壁下部は西寄りの溝では85°の傾斜角でほぼ垂直に立ち上がる。東寄りの溝では北壁が約60°、南壁が約40°の傾斜角で立ち上がる。ピットはみつめられない。覆土は暗褐色土を主体とし、ローム粒を混入する粒子の細かい土壌が密に堆積するが、分層は困難である。

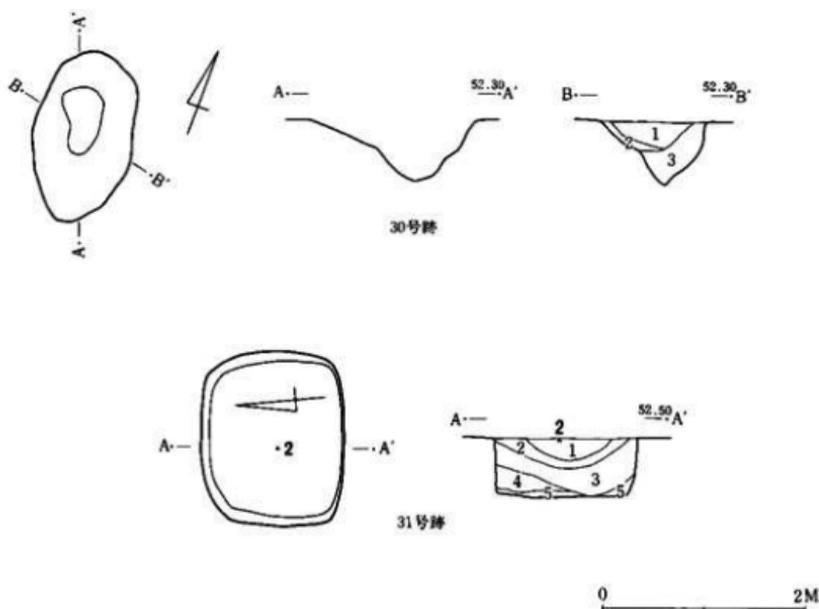
遺物は少量の土器片と砥石が出土した。復原実測の可能性な資料は、砥石1点のみである(第65図、第23表、図版32)。

3 土 坑

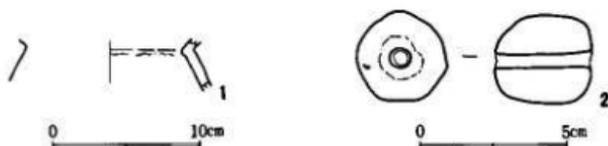
30(005)号跡 (第66図)

調査区西隅の3号跡南側で検出した土坑で、I0グリッドに位置する。プランは、II層で確認された。確認面における開口部の大きさは、長径約1.7m、短径約1mの楕円形で、底面は直径約40cmの歪円形になる。確認面から土坑底までの深さは約60cmである。主軸方向はN-9°-Wを指す。全体の形状はすり鉢状を呈す。

壁下部はハードロームを深く掘り込む。壁面は明瞭で若干の起伏がある。壁は北壁がもっとも急で、平均約60°の傾斜角をなす。南壁の傾斜はゆるやかで、ハードローム部は平均約40°、ソフトロームとの境界より上方は平均約25°の傾斜角をなす。覆土はB-B'における観察では以下の3層に分けられた。1. 褐色土層。ソフトローム粒を含む。2. 暗褐色土層。粘性がある。3. 暗褐色土層。2層より黒色土を多く含む。なお遺物は発見できなかった。



第66図 30(005)、31(013)号跡実測図



第67図 31(013)号跡出土遺物

第24表 31号跡出土遺物観察表

挿図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	竇	覆土	— — —	外一縦位のヘラミガキ 内一ナデ	砂粒多	普	外 } 暗褐色 内 }	頸部破片	
2	土玉	覆土		縦径3.3cm、横径3cm、孔径 0.4cm、重量32g、穿孔縁若 干摩耗、他は摩耗収なし	砂粒含	良	淡褐色	完存	焼成前穿 孔

31(013)号跡 (第66図)

調査区北側中央部で検出した土塚で、B4～B5グリッドに位置する。8C号跡を切る。同グリッド付近は攪乱の影響が著しく、攪乱部分の整地中に確認された。確認面における開口部の大きさは、東西約1.7m、南北約1.5mで東西方向に約20cm長い隅丸方形を呈す。底面は、東西約1.5m、南北約1.25mの大きさで、ほぼ平坦である。確認面からの深さは約57cmである。主軸方向は、N-81°-Wを指す。壁面は凹凸があり明瞭で、ハードロームを深く掘り込む。壁下部は平均約85°前後の傾斜角で立ち上がる。覆土は粘性を欠いた細かい土粒が密につまり、A-A'における断面観察では以下の5層に区分された。1. 暗褐色土層。若干量の焼土粒を含む。2. 茶褐色土層。ローム粒を多く含む。3. 褐色土層。ハードロームブロックを含む。4. 茶褐色土層。2層と酷似する。5. 暗褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックを混じえる。

遺物は、覆土中から少量の土器片と土製品が出土した。復原実測の可能な資料は、壘1点と土玉1点の合計2点である(第67図、第24表、図版30)。

第4節 包含層出土の遺物

当遺跡から採集された遺跡のなかには、所属する遺構の明瞭でない資料が多量に存在する。以下では、そのうち復原実測の可能なものについて石器、土器、土製品、その他の遺物の順に若干の説明を記す。

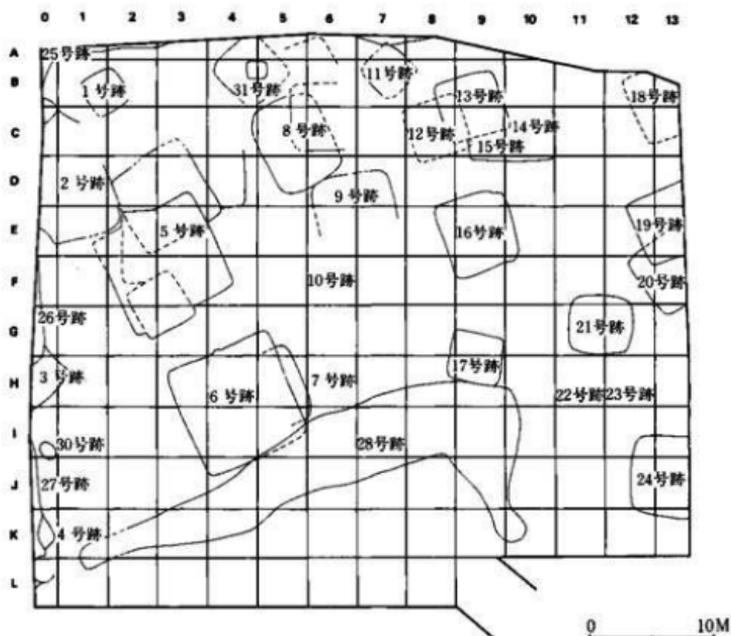
出土地点の明らかなものは、原則としてそのグリッド内の一括採集資料として扱い、出土地点の明らかでないものはすべて表採資料とした。復原実測の可能な資料が最も多いグリッドは、H11、D0、I11、I1グリッドである。グリッドと遺構の配置関係は第68図に示すとうりである。F6～G6グリッドには住居跡と推定される10号跡が存在し、H10～H11とI10～I11グリッドにかけては住居跡と推定される22号跡が存在する。また、H12～H13とI12～I13グリッドにかけては同じく住居跡の可能性のある23号跡が存在する。

1 石器

復原実測の可能な石器およびフレイクは第69図～70図に示す12点である(第25表、図版31、32)。

(1～6)は表面にローム粒が付着しており、先土器時代に属する可能性がある。(5)は釣針型をしたフレイクであるが、弯曲した先端部に使用痕がみとめられる。

(7～10)は、縄文時代後期に属するものと思われる。(8)は拳形をしたもので、頂部に打撃痕がある。表面は平滑で、重量感に富む。ローム粒が付着しており、先土器時代に属する可能性もある。(12)はG2グリッドから出土したものである。全体に丸みを帯び、表面は平滑である。



第68図 グリッド名称

G2グリッドには5号跡が存在するので、本資料の所属時期は古墳時代後期まで下るかもしれない。

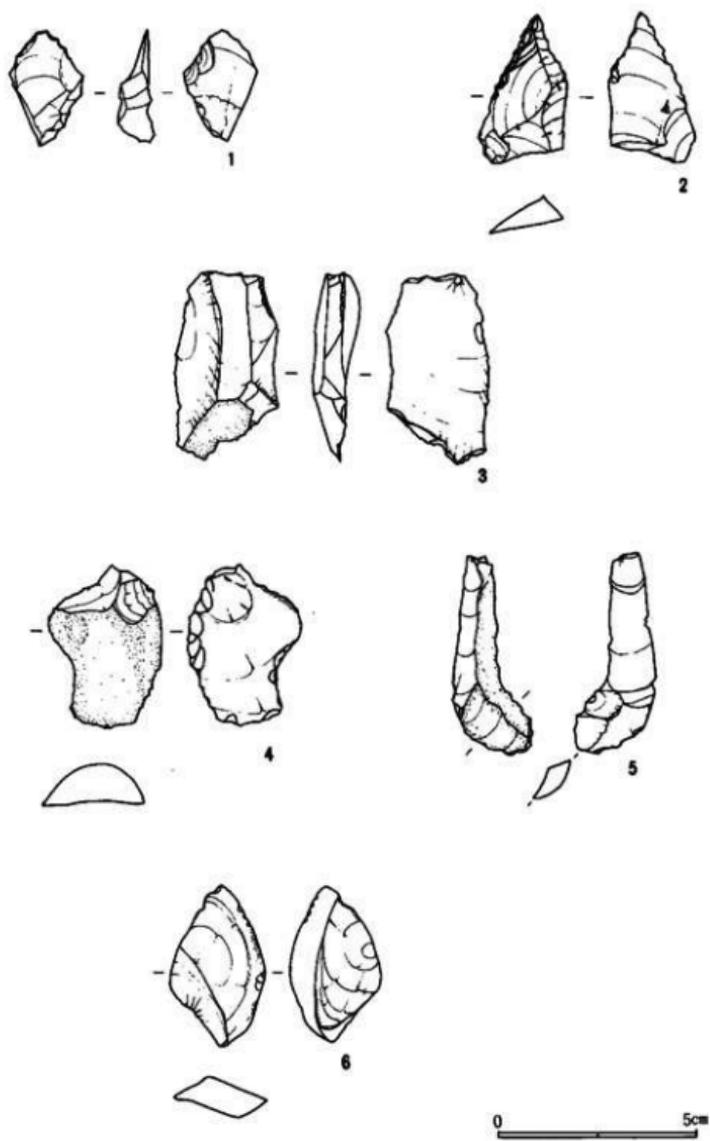
2 土器

(1) 縄文時代の土器 (第71図)

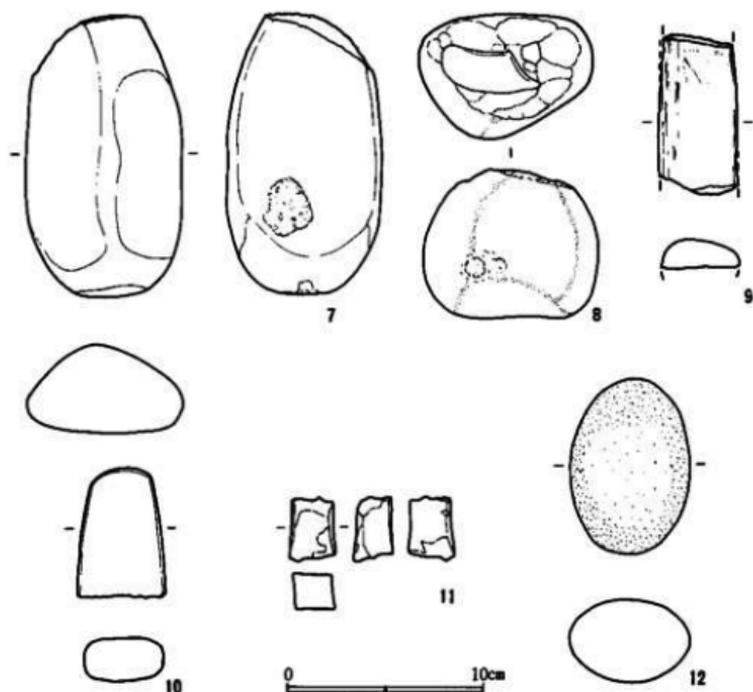
(1)は波状口縁の破片で、内外面ともややあらいナデが施される。波状を呈する部分に直径約4mmの円形の穴があげられる。口縁部に一条の沈線がめぐる。円形の穴の下位には、縄文を施したのち逆U字形の沈線を描く。厚さは約7mmを計り、焼成は良好である。

(2)は胎土に直径約0.3mmの白色不透明砂を多く含み、内面はていねいなナデによって調整される。焼成は良好で、厚みは約7mmを計る。平口縁で口縁上部に2条の沈線がめぐる。沈線間にはシノダケの茎のような細身の中空な棒状工具を粘土面に対して直角に当て、刺突列点文を施す。文様は斜縄文ののち、棒状工具を用いて縦位の沈線文を施す。

(3)は胎土に細砂粒とスコリアを含む。内面外面ともていねいなナデによって平滑に調整される。焼成は良好で色調は黒褐色を呈し、厚さは約8mmである。口唇部には棒状工具を約1cm間



第69图 包含层出土石器(1)



第70図 包含層出土石器(2)

第25表 包含層出土石器観察表

挿図番号	種類	出土地点	長さ(cm)	幅(cm)	厚さ(cm)	石質	備考
第69図 1	ナイフ	表採	2.9	1.9	0.8	チャート	
2	ナイフ	28号跡覆土	3.9	2.2	1	チャート	
3	Rフレイク	表採	4.7	2.5	1.1	頁岩	
4	Rフレイク	D9グリッド	4	2.9	0.9	めのう	
5	フレイク	28号跡覆土	5	1	0.5	めのう	
6	フレイク	B9グリッド	4.1	2.4	1.1	硬質砂岩	
第70図 7	敲石	J11グリッド	14.2	8	4.4	硬質砂岩	
8	敲石	C0グリッド	7.5	9	6.4	玄武岩	重量約650g
9	石棒	G5グリッド	8.3	4	1.4	黑色頁岩	
10	磨製石斧	表採	6.5	4.5	2.1	硬質砂岩	
11	砥石	表採	4.4	2.8	2.3	砂質片岩	
12	磨石	G2グリッド	8.9	6.1	4.2	硬質砂岩	



第71図 縄文時代の土器

隔で押しあてややラフな刻み目をつくる。内面は口縁に1本の隆帯をもうけ、その間に棒状工具による刺突文を施す。

(4)は、平口縁に紐線文が貼付されたもので、胎土に白色不透明砂を多く含む。内面は横位のナデによって調整される。焼成は良好で、色調は茶褐色を呈す。文様は、斜縄文ののちに、棒状工具で不連続な横位の弱い沈線文を施す。内面には口縁にそった1条の沈線がめぐる。

(5)は胎土に直径約0.3mmの白色不透明砂と白濁半透明砂を含み、内面は横位のナデによって調整される。色調は暗茶褐色を呈し、焼成は良好である。平口縁であるが、小突起がつく。文様は縄目のあらい斜縄文を外面全体に施したのち、口縁から約4cmほど下位の部分に棒状工具を用いて格子目条の沈線文を施す。

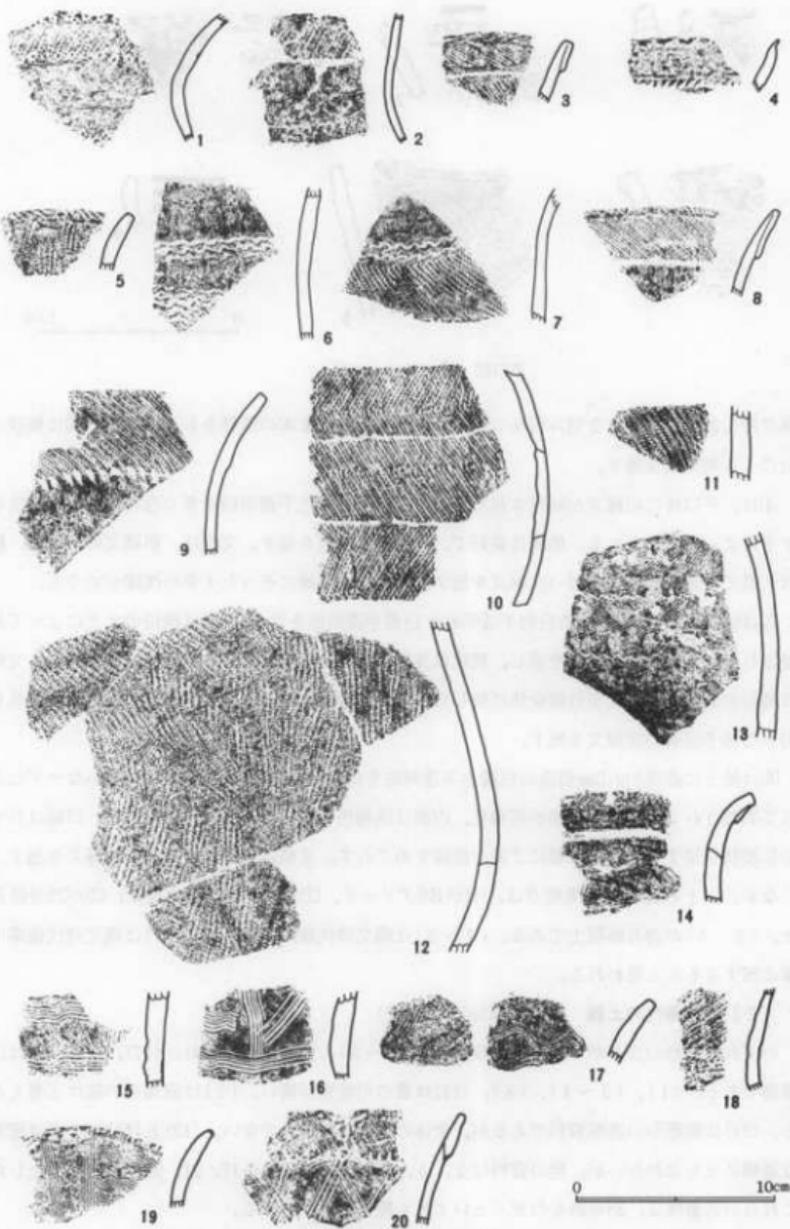
(6)は胎土に直径約0.3mm前後の白濁色半透明砂を含む。器面は内外面ともていねいなナデによって調整される。色調は外面が黒褐色、内面は淡褐色を呈し、焼成は良好である。口縁はわずかに波状を呈する。口縁上部に2条の沈線をめぐらす。文様は斜縄文ののちに沈線文を施す。

なお、以上の資料の採集地点は、(1)がB6グリッド、(2)、(6)が8号跡の覆土、(3)が22号跡覆土、(4～5)が28号跡覆土である。(1～2)は縄文時代後期前葉、(3～6)は縄文時代後期中葉に属するものと思われる。

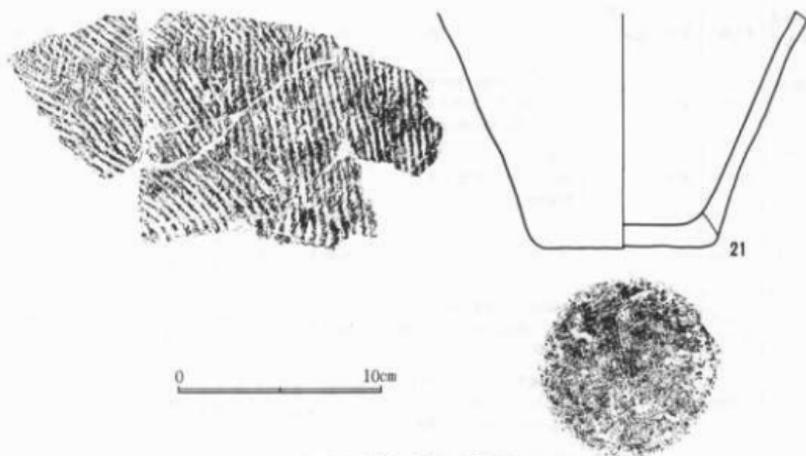
〔2〕弥生時代の土器 (第72～73図、第26表)

いずれも器形のうかがえない破片資料で、(3～5)、(8～9)、(14)、(17)、(19～20)は口縁部である。(1)、(3～4)、(8)、(14)は壺の可能性が高い。(2)は細頸壺の破片と考えらる。(21)は朝顔形の底部資料であるが、全体の器形は明らかでない。(12)と(14)の2点は確実な遺構ともなわれないが、他の資料は2、5、6、7、8、11、17、21、28号跡から出土した。これらの各遺構は、28号跡をのぞくといずれも竪穴住居跡である。

なお、2号跡出土の(1)、(4)の2点と、8号跡出土の(6)、(13)、(19)の3点のみは出土



第72図 弥生時代の土器(1)



第73図 弥生時代の土器(2)

第26表 弥生時代の土器観察表

神田 番号	出土 地点	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第72図 1	2号跡	床直	—	付加条のち竹管による2列の 刺突文。内面：ナデ	砂粒多	普通	外—暗褐色 内—黒褐色	—	第7図42
2	2号跡	覆土	—	細頸壺頸部破片。内面：ナデ	白色砂含	普通	外—橙色 内—灰褐色	—	
3	2号跡	覆土	—	口縁部外面および口唇部に付 加条 内面：ていねいなナデ	細砂粒多	普通	外—黒色 内—淡褐色	—	
4	2号跡	床直	—	口唇部に棒状工具を内側から 押しあてた押圧文列。口縁下 部に刺突文列。内面：ナデ	細砂粒含	普通	外—暗灰褐色 内—淡灰褐色	—	第7図43
5	8号跡	覆土	—	口縁部および口唇部に縦位の 縄文(RL)が断続的ところがる。 内面：ナデ	砂粒多	普通	外—黒褐色 内—暗褐色	—	
6	8号跡	覆土	—	4条+5条(?)の結節状文 内面：横位のヘラナデ	細砂粒含	普通	外—明褐色 内—灰褐色	—	第25図26
7	17号跡	覆土	—	無文帯を区画する2条の結節状 文と斜行縄文(RL) 内面：ナデ。指頭圧痕	砂粒多	普通	外 } 灰黒褐色 内 }	—	混入か?
8	11号跡	覆土	—	口縁部および口唇部に付加条 内面：横位のていねいなナデ	細砂粒多	普通	外—黒色 内—暗褐色	—	混入か?

神田 番号	出土地点	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第72図 9	21号跡	覆土	—	口縁部：付加条，刺突文列に よって無文帯と区画する，外面 にスス付着，内面：横位のヘラナデ	細砂粒含	普	外 } 茶褐色 内 }	—	
10	21号跡	覆土	—	羽状付加条 内面：ナデ，刺離が著しい 付着物痕あり	砂粒多	普	外—明褐色 内—明赤褐色	—	
11	7号跡	床直	—	付加条，内面：ナデ	砂粒多	普	外—汚灰色 内—明褐色	—	
12	F6ア リッド	II層	—	体部破片，縄文(RL) 内面：横位のケズリのみ横位 のナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—暗赤褐色	—	10号跡か ?
13	8号跡	覆土	—	斜行縄文(LR)+2条以上の 結節状文，内面：ヘラケズリ， 器面はザラつきが大きく摩耗する	砂粒多 スコリア含	不良	外 } 淡褐色 内 }	—	第25図27
14	F6ア リッド	II層	—	口唇部：付加条，口縁部：ハケ 整形，沈線文(2条以上)，内面 ：ていびいな横位のヘラナデ	砂粒，スコリア	普	外—黒色 内—暗褐色	—	10号跡か ?
15	5号跡	覆土	—	5本単位の横書き波状文，懸 垂文 内面：横位のナデ	砂粒多 スコリア含	普	外 } 淡褐色 内 }	—	
16	5号跡	覆土	—	5本単位の横書き波状文，懸 垂文および斜行文 内面：横位のナデ	細砂粒多 スコリア含	普	外—淡褐色 内—淡茶褐色	—	
17	6号跡	覆土	—	外面：4本単位の横書き波状 文(2条以上) 内面：横位のナデ+斜行縄文 (LR)	砂粒多	普	外—暗褐色 内—明褐色	—	混入
18	6号跡	床直	—	付加条のうち3本単位の横位の 横書き文 内面：刺離	細砂粒含	普	外 } 淡茶褐色 内 }	—	混入
19	8号跡	床直	—	4本単位の横書き波状文(3 条以上)および懸垂文，口唇 部：ヘラ状工具による刺突文 列，内面：横位のナデ	砂粒多	普	外—暗褐色 内—褐色	—	第25図28
20	28号跡	覆土	—	口縁：付加条+刺突文，頸部 ：ナデのうち3本単位の横書き文 内面：ナデ	細砂粒含	普	外 } 淡褐色 内 }	—	混入
第73図 21	I0ア リッド	II層	—	無筋R，蓋面：布目底 内面：ナデ	砂粒多	不良	外 } 汚灰色 内 }	—	

地点が、明らかで、それぞれ第7図に示した42と43、第25図に示した26、27、28が相当する。第7図から知れるように(1)、(4)は2A号跡の下位に出現した床面に密着した状態で発見されたもので、第8図(1～3)に示す土器と同時期のものと考えられる。また、(6)、(13)、(19)は8A号跡から出土したもので、(19)は床面に密着した状態で発見された。なお、8A号跡か

らは第26図(1~6)に示す土器が出土している。

〔3〕古墳時代以降の土器(第74~76図, 第27表)

資料は量的にはかなりの量に達するが、復原実測の可能なものは、甕22点、壺3点、鉢2点、器形のうちかええない底部資料2点の合計49点である。

(1)は、体部最大径が体上部に位置する甕で、底部周縁をヘラ状工具で縦位に強くけずり、底径をきわめて小さくつくる(図版71)。肩部外面に横位の細く短かいハケ目状条痕がある。体部および頸下部外面に縦位のハケ目を施し、底部周縁部に横位のハケ目を施す。なお、肩部のハケ目状条痕は、粘土面に対してほぼ均質な力で施されており、本資料に施された他のハケ目とは性質の異なる点が多い。タダキの可能性はあるが、検討の余地を残している。口縁は「く」の字形に外反するが、上端部はさほど上方へのびない。口縁部内外面にはヨコナデが施される。体部内面には横位のヘラケズリが施されるが、輪づみ痕を消すまでにいたっていない。体部内面上部には、斜位左上りの弱いハケ目(?)がある。本資料に関する主な計測値等については、第27表に示すとおりである。なお、(32)の底部資料は、底部周縁をヘラ状工具で削ったのちハケ目を施すこと、底径が小さいこと、など(1)と類似するが、内面はていねいなナデによって整えられ、底面中央にはヘラ状工具による短かい放射状の圧痕がある。

(17)はミニチュア土器で、台付甕もしくは高杯を模したものと思われる。

(40~43)は、いわゆるS字状口縁をもった甕の口縁部と肩部である。これらは、いずれも15号跡出土の資料(第39図1)とは明らかに別個体由来のものである。(49)は、壺の底部の可能性はあるが、確証はない。

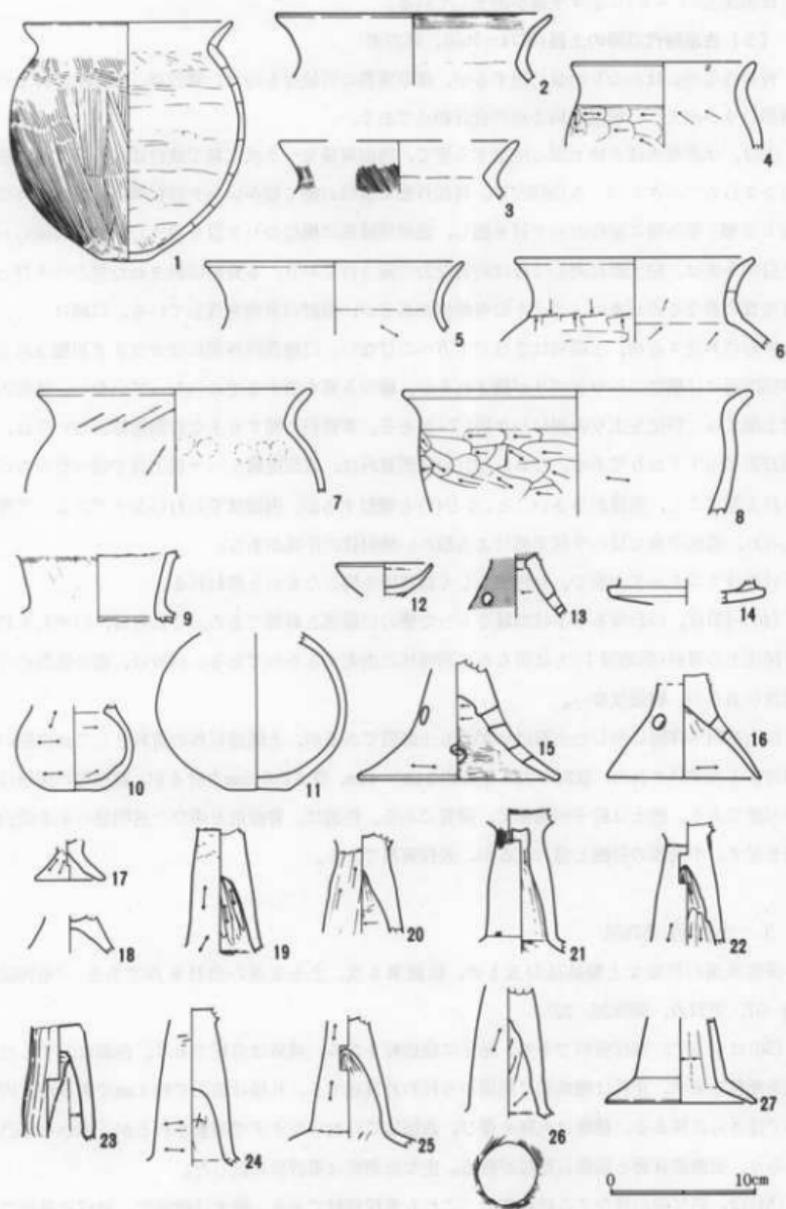
以上第74~76図に示した土器はいずれも土師器であるが、土師器以外の資料としては白磁の破片が1点発見された。資料の大きさは約3cm×4cm、厚さ約6.5mmを計るが、器形等の復原は不可能である。胎土は粒子が緻密で、硬質である。色調は、青緑色を帯びた透明感のある濁白色を呈す。中国製の白磁と思われるが、表探資料である。

3 土製品(第76図)

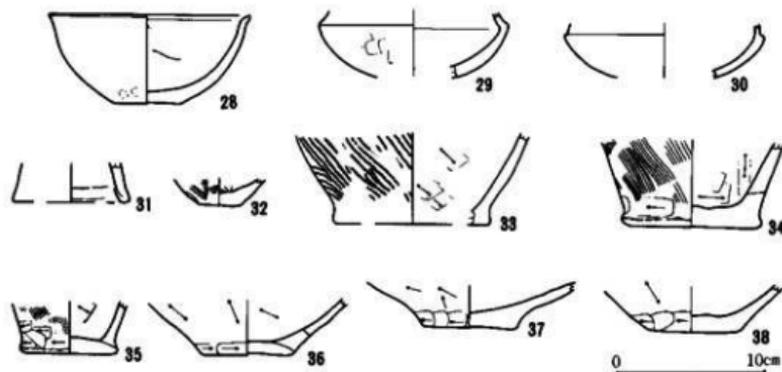
復原実測の可能な土製品は勾玉1点、紡錘車2点、土玉5点の合計8点である。(第76図50~57, 第27表, 図版30, 32)。

(50)は勾玉で、表探資料である。胎土に細砂粒を含み、焼成は良好である。色調はくすんだ淡茶褐色を呈す。穿孔は焼成前に両面から行われ貫通する。孔径は表面で約1mmであるが、内部ではさらに狭まる。稜線は丸味を帯び、表面はていねいなナデで調整されるが、僅かな凹凸があり、屈曲部背面と側面に指紋が残る。主な計測値は第27表に記した。

(51)は、約1/4強が残存する紡錘車で、これも表探資料である。胎土は緻密で、焼成は良好である。色調はくすんだ褐色を呈す。割れ口は古い。図面上に原形を復原したのちに計測した推



第74图 包含层出土遗物(1)



第75図 包含層出土遺物(2)

第27表 包含層出土遺物観察表

神田 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第74図 1	甕	I17 リッド	14.5 16.6 3.0~3.5	外—口縁内外面：ヨコナデ、 体上部：縦位のハケ+ク タキ(?) 体下部：縦位 のハケ、底部ケズリ+ハケ 内—体上部ハケ(?) その他 横位のヘラケズリ 本文参照	砂粒多	良	外 } 黄褐色 内 }	3/4	V=1.8L 燻入?
2	甕	C10 リッド	19.0 — —	外—口縁内外面：ヨコナデ、 体部：ナデ 内—口縁下部：ナデ、体部： ケズリ	砂粒多	普	外—黄褐色 内—黒褐色	口縁部 のみ3/4	
3	甕	B9 リッド	(17) — —	外—右下りのハケ、口縁内外 面：ヨコナデ 内—横位のナデ	砂粒多	普	外—黒褐色 内—暗茶褐色	口縁部 3/4	
4	甕	G4 リッド	(13) — —	外—横位のヘラケズリ、口縁 内外面：弱いヨコナデ 内—ヘラナデ	砂粒極多	普	外—暗褐色 内—褐色	胴部上 半分3/4	口唇内面 積米痕あり
5	甕	I17 リッド	(18) — —	外—ナデ、口縁内外面：ヨコナ デ 内—斜位のナデ	砂粒含	普	外—暗褐色 内—明茶褐色	口縁部 3/4	
6	甕	J11 リッド	(16.5) — —	外—縦位のヘラケズリのち粗 いナデ、口縁内外面：ヨコ ナデ 内—斜位のヘラケズリのちナデ、 口縁下部横位のヘラケズリ のちていねいな横位のナデ	砂粒 スコリア } 多	普	外 } 橙褐色 内 }	口縁部 3/4	口縁部内 外面スポ ット状の 剥離が著 しい。

神田 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第74区 7	甕	K5グ リッド	(19) — —	外—ヘラズリのちナデ、口 縁内外面：ヨコナデ 内—横位のヘラナデ、口縁部 胴部の接合部に指頭圧痕	細砂粒含 小石含	普通	外—暗褐色 内—淡褐色	口縁部 1/2	
8	甕	H4グ リッド	(24.5) — —	外—横位の浅いヘラズリ 口縁内外面：ヨコナデ 内—横位のていねいなナデ	細砂粒多	普通	外— 内—} 淡褐色	1/2	
9	甕	K3グ リッド	— — —	外—縦位のハケのち横位のナデ 消し 内—横位のナデ	砂粒多 スコリア	不良	外—淡褐色 内—灰褐色— 灰黒褐色	胴部1/2	
10	罫	K12グ リッド	— — (3.5)	外—体上部：ていねいなナデ 下部：やや粗いナデ、底 面：ナデ 内—体：粗いナデ、口縁部：ナデ	砂粒多 スコリア	普通	外—褐色 内—暗褐色	体部1/2	口縁部内 面にスポ ット状の 剥離が多 い。
11	壺	J1グ リッド	— — 4.4	外—縦位のていねいなナデ 底面ヘラズリ 内—ヘラナデのちナデ	細砂粒含	良	外—暗茶褐色 内—暗褐色	胴部以 下	底部内面 剥離 V=0.7f
12	器台	D0・ D1グ リッド	(7) — —	外—縦位のヘラミガキ、口縁 部内外面：ヨコナデ 内—ていねいなナデ(?)	細砂粒多 スコリア	普通	外— 内—} 淡褐色	受白部 1/2	
13	器台	E3グ リッド	— — —	外—縦位のヘラミガキ 内—脚上部：横位のヘラナデ 下部：ナデ	細砂粒多	良	外—赤彩 内—淡赤褐色	脚上部 1/2	3孔
14	高坏	C4グ リッド	— — —	外—ナデ 内—剥離	細砂粒含	普通	外— 内—} 黄褐色	—	
15	高坏	I1グ リッド	— — (14)	外—横位のヘラミガキ、脚上 部：縦位のヘラミガキ 内—上部：横位のヘラズリ 下部：横位のハケ	砂粒多	普通	外—明褐色 —暗褐色 内—明褐色	脚部1/2	二段の6 孔
16	高坏	G5グ リッド	— — (11)	外—縦位のヘラミガキ 内—脚上部：ヘラズリ、下部 ：ていねいな横位のナデ	砂粒多 雲母含	普通	外—暗褐色 内—黒褐色	脚部1/2	3孔
17	—	B1グ リッド	— — (5)	外—縦位の粗いヘラズリ 内—成形不明	砂粒多 スコリア	普通	外—暗褐色 内—黒褐色	脚部1/2	ミニチュ ア?
18	高坏	E5グ リッド	— — —	外—斜位のヘラミガキ、厚部： ナデ 内—ヘラナデ	細砂粒含	普通	外— 内—} 淡褐色	脚上部	
19	高坏	D0グ リッド	— — —	外—縦位のヘラズリのち縦 位のナデ 内—基部：棒状工具による整 形、堀：ハケ	細砂粒多	不良	外— 内—} 淡褐色	脚基部	
20	高坏	D8グ リッド	— — —	外—縦位のていねいなヘラズリ 内—しぼり、中部以下：横位 の粗いヘラズリ	細砂粒多 スコリア	不良	外— 内—} 淡褐色	脚上部	

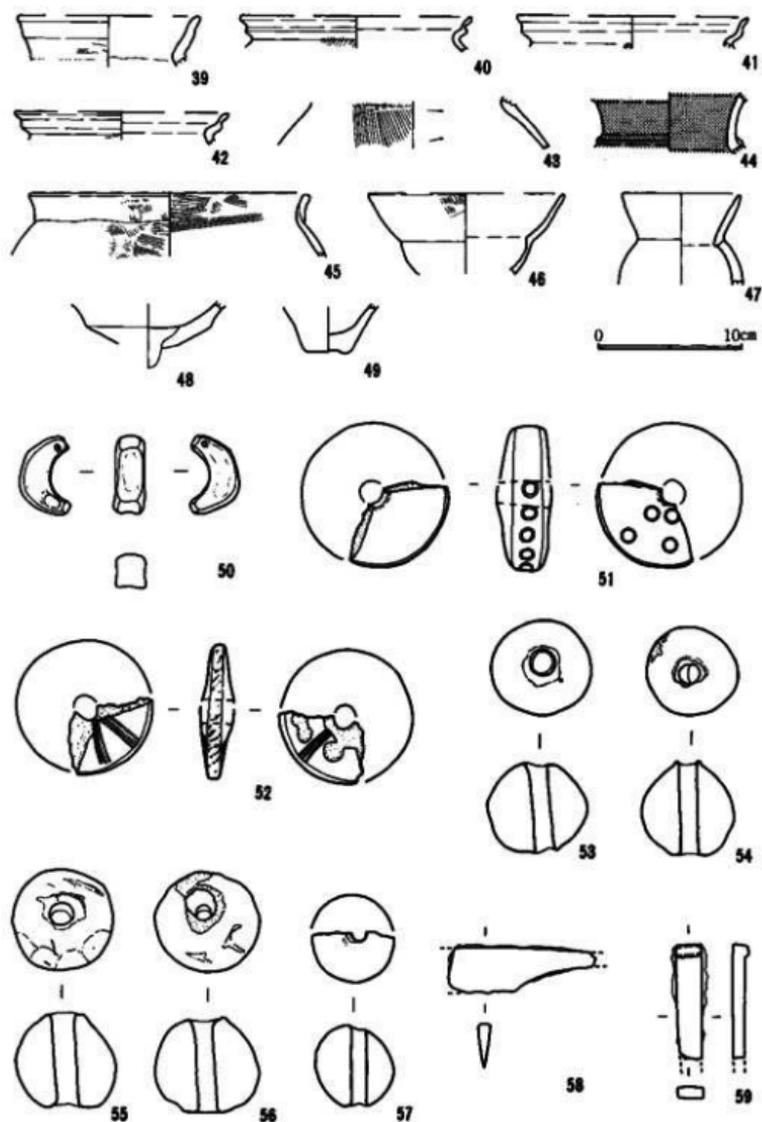
神団 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第74区 21	高坏	B9グ リッド	— — —	外—粗い縦位のヘラミガキ 上部:縦位のハケ, 裾部:横 位のナデ, 平底部:ナデ(?) 内—しぼり, 裾:ハケ, 平底面:ハケ	砂粒多	不良	外} 暗褐色 内}	脚部1/5弱	
22	高坏	15グ リッド	— — —	外—割離, 下部:縦位のナデ (?) 内—棒状工具で縦位のケズリ	砂粒多	不良	外} 暗赤褐色 内}	脚部1/5	
23	高坏	B6グ リッド	— — —	外—縦位の浅いヘラケズリ 内—横位のケズリ	細砂粒多	良	外—やや赤みを もつ褐色 内—褐色	脚部の み1/5	ホゾ接合
24	高坏	D6グ リッド	— — —	外—ヘラケズリのち粗い縦位 のヘラミガキ, 下部:横 位のナデ 内—ヘラケズリ	砂粒多	普	外—暗赤褐色 内—暗淡褐色	脚部	
25	高坏	J11グ リッド	— — —	外—斜位のヘラミガキ, 裾: ナデ(?) 内—しぼり, 裾:ヘラケズリ のち横位のナデ	砂粒 } 多 スコリア }	普	外} 暗褐色 内}	脚基部 1/5	
26	高坏	D0グ リッド	— — —	外—斜位のヘラケズリのち縦 位のヘラミガキ(?) 内—しぼり, 斜位のヘラケズ リ, 裾部:ハケ	細砂粒 } 多 スコリア }	不良	外} 淡褐色 内}	脚部	
27	高坏	H11・ 111グ リッド	— — 10.6	外—縦位のナデ, 裾内外面: 横位のナデ 内—横位のケズリ	細砂粒多	普	外} 淡褐色 内}	脚部1/5	
第75区 28	鉢	L3グ リッド	(13.5) 6.2 4.4	外—横位のていねいなナデ 口唇部内外面:ヨコナデ 底面:ヘラケズリのちナデ 内—ヘラナデのちナデ, 底面: ナデ	砂粒 } 含 スコリア }	普	外—暗褐色 内—暗茶褐色	1/5	底縁部に 弱い指頭 圧痕
29	坏	H2グ リッド	(11) (5) —	外—横位の浅いヘラケズリ, 立ち上り内外面ヨコナデ 内—横位のミガキ(光沢あり)	細砂粒多	普	外} 淡褐色 内}	1/5	
30	坏	H3グ リッド	(12) — —	外—手持ちヘラケズリのちナデ 内—ミガキ(やや光沢あり)	細砂粒 } 少 スコリア }	良	外} 明褐色 内}	1/5	
31	甕	D6グ リッド	— — (8)	外—横位のナデ 内—ナデ	砂粒含	不良	外—淡灰褐色 内—橙褐色	台部破 片	裾折り返 し
32	甕	L1グ リッド	— — 2.8	外—ケズリのちハケ 底面:ヘラケズリ 内—ヘラナデ(底面は放射状 のヘラ圧痕がある)	砂粒 } 含 スコリア }	普	外} 茶褐色 内}	底部	
33	甕	G6グ リッド	— — (10.5)	外—ナデのち燃糸, 底部周縁: 横位のヘラナデ 内—ヘラナデ	砂粒 } 多 スコリア }	普	外} 淡褐色 内}	底部1/5	木蓋底

挿入 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第75区 34	甕	G6ア リッド	— — 9.5	外—縦位のハケ(欄目か?) 底部周縁:横位のヘラナデ 内—ヘラズリのちナデ、底 面:指ナデ(?)	砂粒 粗砂粒}多 スコリア	普通	外—淡褐色 内—レンガ色	底部のみ	木炭底
35	甕	I3ア リッド	— — (6.5)	外—縦位のハケ+ナデ、底部 周縁:横位のヘラナデ 内—横位のヘラズリのちナ デ	砂粒多	普通	外—褐色 内—黒褐色	底部1/4	底面布目 痕
36	甕	K5ア リッド	— — 6.4	外—ヘラナデ 内—ヘラナデ、底面:ナデ	細砂粒含	普通	外—暗褐色 内—黒褐色	底部1/4	木炭底 底面内面 付着物痕
37	甕	D3ア リッド	— — (6.5)	外—ナデ、底部周縁:ヘラズ リ、底面:ナデ 内—ナデ、斑状に剥離	砂粒多	普通	外—暗褐色 内—灰淡褐色	底部1/4	
38	甕	B7ア リッド	— — (7)	外—ヘラズリのちナデ、底 縁部:横位のヘラズリ 底面:ヘラズリのちナデ 内—ナデ	砂粒多	普通	外—暗褐色 内—黒褐色	底部1/4	
第76区 39	甕	表採	(13) — —	外—口縁内外面:ヨコナデ 口縁下部:ヘラナデ 内—横位ナデ	砂粒多	不良	外 内}汚淡褐色	口縁部 破片	
40	甕	表採	(16.5) — —	外—斜位の深く鋭いハケ、口 縁内外面:ヨコナデ 内—横位のナデ	細砂粒含	普通	外 内}灰黒色	口縁部 破片	
41	甕	表採	(16) — —	外—斜位の弱いハケ、口縁内 外面:ヨコナデ 内—横位のナデ	砂粒多	不良	外 内}灰白色	口縁部 破片	
42	甕	表採	(15) — —	外—斜位のハケ、口縁内外面 :ヨコナデ 内—ナデ	砂粒 粗砂粒}多 スコリア	不良	外 内}淡褐色	口縁部 破片	
43	甕	表採	— — —	外—斜位の明瞭なハケ 内—横位のナデ	砂粒多	普通	外—橙褐色 内—淡灰褐色	体肩部 破片	
44	壺	表採	— — —	内外面横位のナデ	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—赤橙褐色	頸部1/4	頸部尖帯 赤彩
45	甕	表採	19.6 — —	外—ハケ、口縁:ハケのちナデ 内—ナデ、口縁:横位ハケ	砂粒多	普通	外—暗褐色 内—淡赤褐色	口縁部 のみ1/4	
46	鉢	表採	13.6 (7) —	外—横位のナデ、口縁部:ハ ケのちナデ消し 内—放射状ミガキ、口縁部:斜 位のミガキ	細砂粒少	良	外—暗褐色 内—黒褐色	1/4	
47	埴	表採	8.4 — —	外—横位のヘラナデのちナデ 口縁部:ヘラナデ 内—ユビナデ(不定位)、口縁 部:ヨコナデ	砂粒極少	普通	外 内}淡い肌色	1/4	

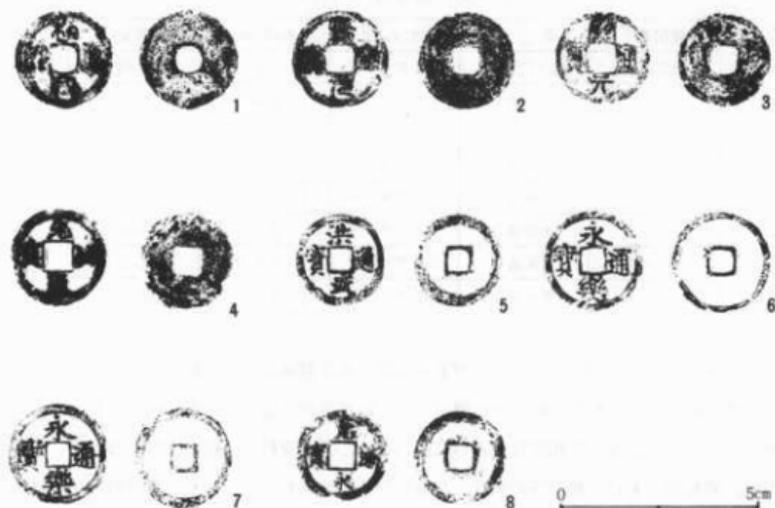
神田 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
第76図 48	高坏	表採	— — —	内外面ナデ	細砂粒少	良	外 内} 赤褐色	坏部下 半迄	ホゾ横白
49	—	表採	— — 3	外—縦位のナデ、底面：不明 内—ヘラナデ+ナデ	砂粒}多 スコリア}少	普	外 内} 明褐色	底部の み完存	
50	土製 勾玉	表採		全長2.7cm、最大幅1.7cm、最 大厚1cm、重量5g、本文参照	本文参照	良	本文参照	完存	
51	紡錘車	表採		本文参照		良			
52	紡錘車	G1グ リッド		本文参照		良			
53	土玉	C8グ リッド		縦径3.1cm、横径3.5cm、孔径 0.6cm、重量30g		良	褐色	完存	焼成前穿 孔
54	土玉	I1グ リッド		縦径3.4cm、横径3.2cm、孔径 0.6cm、重量30g		普	灰暗褐色	完存	焼成前穿 孔
55	土玉	I1グ リッド		縦径3.4cm、横径3.5cm、孔径 0.7cm、重量41g ヘラケズリ、指頭圧痕		良	暗褐色	完存	焼成前穿 孔
56	土玉	I3グ リッド		縦径3.5cm、横径3.5cm、孔径 0.6cm、重量38g 表面にキズ多し、孔縁打撃痕		普	灰淡褐色	完存	焼成前穿 孔
57	土玉	N11グ リッド		縦径2.9cm、横径2.7cm、孔径 0.5cm、現存重量10g 表面 平滑、ツヤがある、指紋あり		良	暗茶褐色	1/2	焼成前穿 孔
58	刀子	表採		現存長5cm					破損
59	釘	表採		現存長3.9cm					先端破 損

定直径は約5cm、穿孔口径は約0.8cmである。現存する最大厚は約1.8cm、現存重量は18gである。穿孔は焼成前に行われる。表面はていねいなナデによって調整され、砂粒はよく沈み平滑である。文様は、直径約5mmの竹管状工具を粘土面に対して直角に押しあてたもので、片面と側面にみられる。側面の竹管は約1cm間隔で規則的に並ぶが、片面の竹管の配置には規則性がみられない。なお、この反対面は無文であるが、竹管文のレイアウトが比較的ルーズであること、欠損部が大きいこと、などから欠損部に竹管文様が施されていた可能性も考えられる。

(52)は約1/2を残存する紡錘車で、G1グリッドで発見された。胎土に直径約1mm前後の白濁色



第76图 包含层出土遗物(3) (50-59: $\times \frac{1}{2}$)



第77図 包含層出土遺物(4)

半透明砂を多く含み、焼成は良好である。色調はくすんだ灰暗褐色を呈し、割れ口は古い。上記の資料と同様の方法によって計測した推定直径は約4.5cm、孔径は約0.7cmである。現存する最大厚は約1.2cm、現存重量は6gである。表面はていねいに調整され、平滑で光沢があるが表面剝離が著しい。文様は、両面とも穿孔部を中心として3条の櫛目状工具を用いて描く放射状の沈線文であるが、側面には斜縄文を施す。なお(53~57)は土玉であるが、主な特徴等は第27表に示した。

4 その他 (第76~77図)

石器、土器、土製品以外の遺物としては鉄製品と古銭が得られた。

鉄製品は第76図(58~59)に示す2点である(図版32)。(58)は刀子で表採資料である。刀身を半ば以上破損する。(59)は釘で同じく表採資料である。先端部を欠損する。

古銭は第77図(1~8)に示す8点が出土した(第28表、図版32)。いずれも銅銭である。

このうち(1)は磨耗と腐食が著しく、銭文はほとんど判読できないが、天の位置に記された文字は「和」かもしれない。もし、そうだとすると、この銅銭の銭銘は「和□□□」となるが、そのような銭銘をもつ公鑄銭で出土例の知られているものは、「和同開珎」と「和開通宝」の2種類である。日本銀行調査局編(1972)によると、和同開珎には和同元年に鑄造された古和同と、和同元年以降に鑄造された新和同の2種類がある。これらはいずれも直径約2.4cm前後、重量約

第28表 包含層古銭観察表

挿図番号	名称	出土区	直径(cm)	現存重量(g)
第77図1	和?□□□	I 4 グリッド	2.5	2.65
2	□元通宝	I 4 グリッド	2.45	3.05
3	開元通宝	I 4 グリッド	2.4	2.65
4	元祐通宝	I 4 グリッド	2.45	3.55
5	洪武通宝	I 4 グリッド	2.3	3.75
6	永楽通宝	I 4 グリッド	2.5	3.65
7	永楽通宝	B 5 グリッド	2.6	3.15
8	寛永通宝	C 5 グリッド	2.3	2.2

3.75gとされており、(1)の直径および重量に関する計測値は、この範囲内に存在する。しかし、①本資料にしるされた「和」字の傍の「口」は正方形に近いが、古和同の「和」字の傍は逆梯形であること、また新和同は長方形に近いこと、②本資料の「和」字の偏は上下に高いが、古和同、新和同ともに「和」字の偏は、左右にひろがりをもつこと、など本資料の字体は和同開珎の字体と符合しない。したがって、天の位置にしるされた文字を「和」と読むかぎりにおいては、和同開珎の擬鑄銭もしくは「和□□□」なる鑄銘をもった私鑄銭などの可能性を検討する必要がある。ところで、江本ほか(1983)は、岩手県北上市で出土した「和布刈宮」銭の存在を報告しているが、同銭の「和」字は左右が反対になった左文字であること、直径は約7.1cm前後、重量は約109gであることなどから、本資料とは明らかに区別される。なお、和開通宝との比較検討は今回は試みなかった。

(2)も磨耗と腐食が著しく、銭文は判読しにくい。銭文は篆書体である。開元通宝である可能性が高いが、疑問の余地を残す。

(3～8)は、それぞれ開元通宝、元祐通宝、洪武通宝、永楽通宝と寛永通宝である。主な計測値等は第28表に示すとうりである。

第5節 小結

今回の調査による成果の概要を時代別にまとめると以下ようになる。

<先土器時代>

ローム層内の調査は、調査区南東部からのびる通路部分を対象に2m×2mのグリッドを3ヶ所に設定して実施したが、遺物等は発見できなかった。しかし、調査区域内の包含層や立川ローム層を深く掘り込む28号跡覆土内からは、層準の明らかでない石器等が発見されるので(第69図)、調査区域に近接する地域に先土器時代の遺物包含層が存在する可能性がある。

<縄文時代>

表採資料と28号跡覆土内から比較的保存状態の良い縄文時代後期前葉～後葉の土器片が得られたが、いずれも遺構にともなうものではない。

<弥生時代>

今回の調査で発見した弥生時代の土器は、広義の久ヶ原式の範疇に入る甕、高坏と、外面に付加条縄文を施す広義の臼井南式もしくは印手式と称される甕である。これらの土器は住居跡にともなって発見されている。久ヶ原式を伴う住居跡は21号跡1軒だけであるが、後者は2A'号跡と8A号跡の2軒である。2A'号跡は完掘されていないが、8A号跡は小判形に近い隅丸長方形を呈し、五領式の範疇に入る甕をともなう。

土器以外の遺物の特徴は、以下のように要約される。

①住居跡から土玉、土製紡錘車が出土する頻度が高い。②アメリカ式石鏃をともなう。③金属器をともなわない。

<古墳時代>

五領式、和泉式、鬼高式の範疇に入る甕、小形甕、壺、埴、鉢、高坏、器台とそれを伴う住居跡が発見された。五領式土器を伴う住居跡は14軒に達し、今回確認した住居跡の大部分を占める。S字状口縁台付甕などの東海系の土器が少数みられるが、この時期の搬入品と推定される。また、古墳時代中葉頃の鍛冶址と思われる遺構が検出されたが、攪乱が著しく時代決定に若干の問題を残している。

第3章 今郡カチ内遺跡

第1節 遺跡の概要と調査方法

1 遺跡の概要

今郡カチ内遺跡は、国鉄成田線下総横駅から西へ約0.6km離れた台地上に位置し、千葉県香取郡東庄町今郡カチ内658の2他に所在する。遺跡の存在する台地上は標高約50mの平坦な地形で、調査以前の遺跡の土地利用は針葉樹林および畑地である。台地の北部から東部に至る縁辺部を利根川が流下し、遺跡の南側には比高差約20mの谷が開析する。この谷は、現在、石出堰として用水池に利用されており、遺跡はこの谷頭から北西へ約200mほどの距離をへだてて位置する(第78図)。

2 調査方法

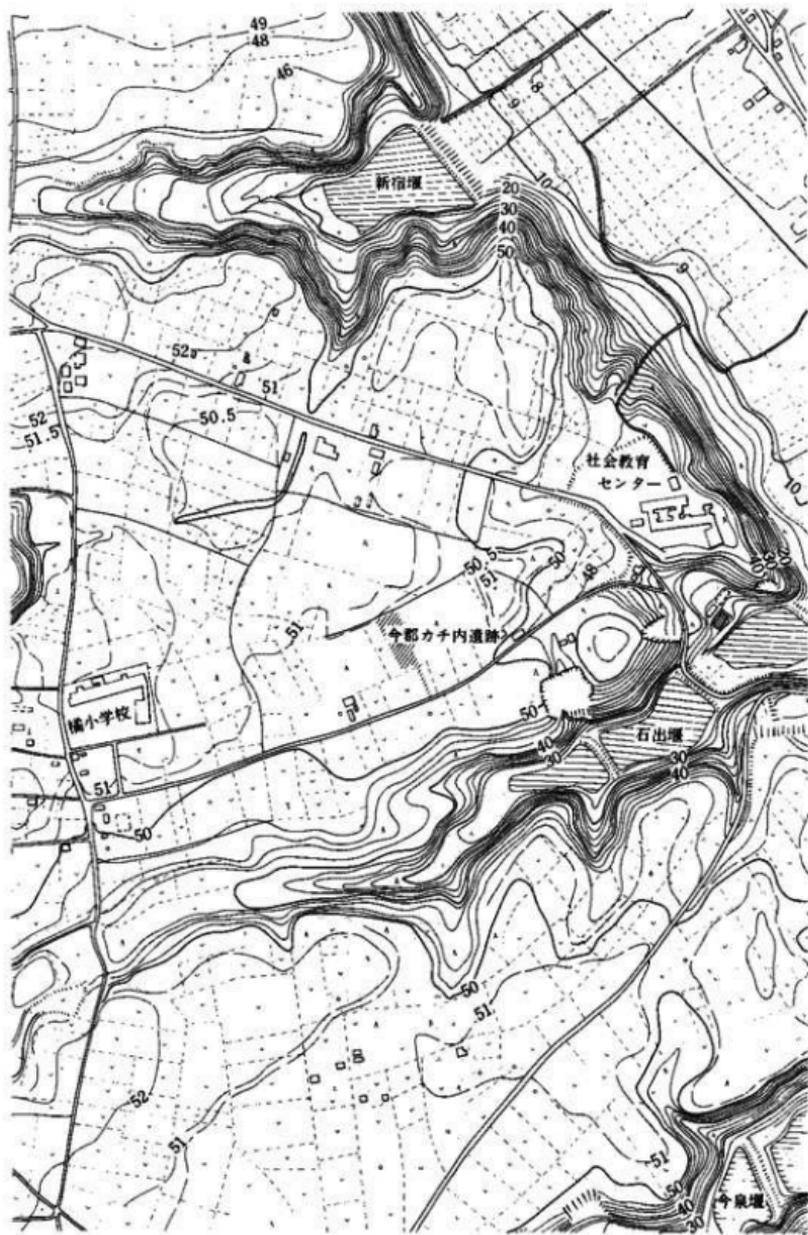
発掘調査は、面積2,480㎡の調査対象地域内の表土を除去したのち、城内全体に4m×4mの大きさのグリッドを単位とする方眼メッシュを組み、このグリッドに従って遺物の採集と遺構の実測を行なった。方眼メッシュの設定は、南北に長い調査区域の長軸方向にあわせて行ない、水資源開発公団がファームポンド建設用に設定した測量杭を原点とした。方眼メッシュの走行方向はN-32°-Eを指す。

グリッドには、西から東側へアルファベット順に、A、B、C…、北から南側にアラビア数字1、2、3…の番号をふりわけ、各グリッドの名称は、交叉する当該アルファベット番号とアラビア数字を組み合わせて表現した(第102図)。なお、I列は図面上設定が可能だが、H列の各グリッドを東側に約50cmほど延長して、これに含めた。したがってH列の各グリッドは、4m×約4.5mの大きさとなった。

表土の除去は、人力と専用バケットをセットしたバックホウを用いて行なった。除去作業は、調査期間の前半に調査区域の北半分を行ない、期間後半に南半分を行なった。調査は、表土除去を追いかけるように、北から南へ進めた。また遺構番号は、プランを確認した順に付した。

第2節 層 序

遺跡の所在する台地一帯は、石出堰のある南側の谷に向かって緩い勾配をもつが、調査の対象となった区域はほぼ平坦で、調査区域北端部と南端部における地表面の比高差は、約10cmにとどまっている。この傾向は、II層以下についても同様で、立川ローム各層も平坦な堆積をす



第78図 今郡カチ内遺跡周辺地形図

0 50 250M

る。第79図に示した土層断面は、E23～E25グリッドでの観察にもとづいて作成したもので、調査区域全体の層序をよく代表しているとみてさしつかえない。

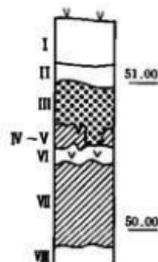
第I層は表土層である。耕作等の攪乱の影響が強い。粒子は細かく、軟質で粘性に乏しい。色調は黒褐色を呈す。草本植物の根がよく侵入する。層厚は約30cm～40cmで、下位にある第II層との境界は比較的明瞭である。

第II層は、暗褐色を呈する土層で、黒褐色土とソフトローム粒が混合する。標高が下るほどソフトローム粒の量が相対的に漸増する。下位にある第III層との境界は漸移的であるが、およそ標高51m付近が境界になる。堆積土の粒子は細かく、よくしまる。粘性は弱く、縄文時代の土器、石器、礫等を含む。層厚は約20cmで、一部にくすんだ錆茶色の間層(層厚約10cm)をみとめるが、これがいわゆる新期テフラかどうかは確認できなかった。

第III層以下は明黄褐色ないし黄褐色を呈す立川ローム層で、第III層は軟質部である。第IV～V層と第VII層は暗色帯で、それぞれ上下に接する層に比して色調が暗く、粘性に富む。

第VI層は、ガラス質の堆積物を含む硬質な層で、黄褐色を呈す。乾燥すると灰白色を呈し、ひび割れを生じる。

第VIII層は立川ロームの最下層で、上位にある第VII層よりも明るく、粘性が強い。

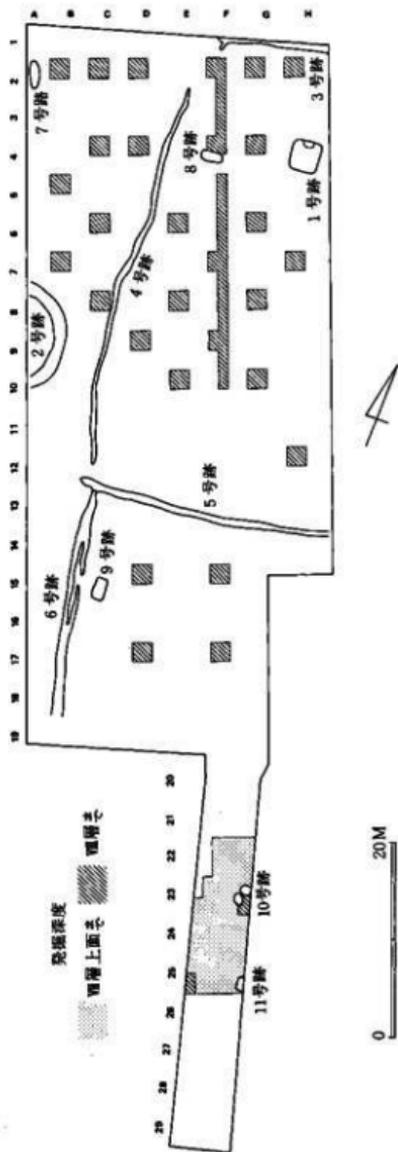


第79図 今郡カチ内遺跡層序

第3節 遺構と遺物

今回の調査で確認できた遺構は、竪穴住居跡1軒(1号跡)、溝5条(2号跡～6号跡)、土坑5基(7号跡～11号跡)の合計11遺構である(第80図)。5条の溝のうち、2号跡は完掘していないが、古墳周濠の一部である可能性が高い。3号跡～6号跡の各溝の走行方向は互いに平行もしくは直交しており、その位置関係には規則性があるようにみえる。また、検出した4基の土坑のうち、7号跡はいわゆる陥し穴状土坑、10号跡はファイアーピットであるが、そのほかのものは性格が明らかでない。

遺物は整理箱にして14箱分が得られた。その主体は、縄文時代早期の沈線文土器、無文土器、押型文土器片と礫、石器である。そのほかには先土器時代の石器、フレイク等が存在する。上記以外には、歴史時代以降の土師器、須恵器破片と砥石、鉄滓などが出土したが、量的にはきわめて少ない。



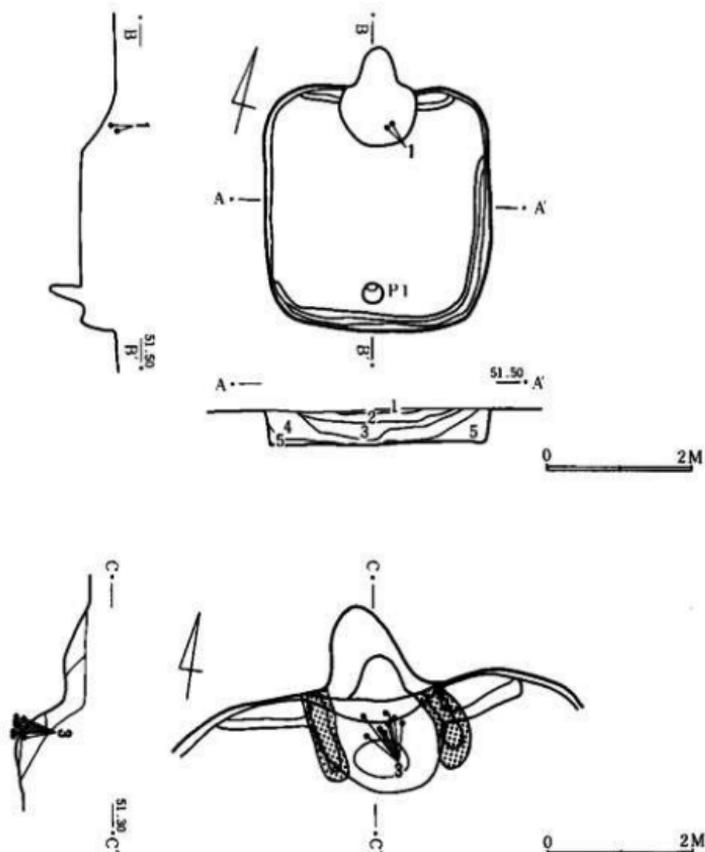
第80図 今郎カチ内遺跡遺構分布およびグリッド名称

1 竪穴住居跡

1 (005)号跡 (第1図, 図版35)

調査区北東隅のH4グリッドに位置する竪穴住居跡である。表土を除去したII層上面で確認したが、他の遺構との切り合いはなく、プランの確認は比較的容易であった。プランは東西約2.9m、南北約3.3mで、南北に約40cm長い。東壁がいくぶん外方に張り出す。コーナーはいずれも丸味を帯び、プランの平面形態は隅丸方形を呈す。主軸方向はN-11°-Wを指す。

壁面は凹凸があるが明瞭堅固である。壁高はもっとも低いところで約40cmを測り、平均は約50cmと比較的高い。壁下部はハードロームを掘り込み、約85°前後の傾斜角で立ち上がる。壁溝は西壁下と北東コーナーで途切れるが、他の壁下を全周する。溝幅は平均約15~20cmであるが、



第81図 1 (005)号跡実測図

北壁でもっとも広く約40～50cmである。深さは平均して約2～3cmで、全体に浅く不明瞭である。ピットは1本だけ確認されたが(P1)、これは床面を除去したのちに発見されたものである。P1は直径約25cm、底径約14cm、深さ約40cmで、主軸は外傾する。床面はハードロームを荒掘りし、ローム土と暗褐色土の混合土で平坦堅固に整える。かまどは北壁中央部に設置され、主軸方向は住居跡の主軸と一致する。床掘り込みは約85cm×50cmの東西に長い楕円形で、中心部を床面レベルから約20cm掘り込んだのち、ローム土と暗褐色土をうめ戻して火床とする。床掘り込み底にあるローム面は被熱のため赤化して、粘性を失なう。壁溝はかまど袖下で止まる。壁掘り込みはハードローム部分が約50°、ソフトローム部分は約45°の傾斜で掘り込み、煙道とする。袖は暗褐色土と山砂の混合物で構築されるが、山砂の混合割合が少なく、崩壊が著しい。かまど燃焼部には山砂、焼土粒、炭化粒、粘性を失なったローム土、暗褐色土が堆積する。覆土はローム土、炭化粒、山砂などを混じえる暗褐色土で全体に粒子は細かく、軟質である。A-A'における断面観察では、以下の5層に分層された。1. 黒褐色土層。ハードロームブロックが若干量混じる。2. 褐色土層。ローム土を混えたしまりのない層。3. 黒褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックを多く含む。炭化粒が多量に存在する。4. 黄褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを非常に多く混える。炭化粒がみられる。5. 褐色土層。ローム土、炭化粒を含む。

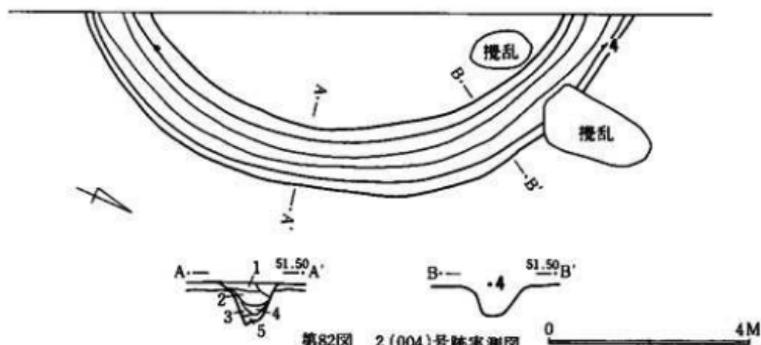
出土した遺物はいずれも土器片で、かまど内とその周辺部に集中している。その多くは小破片で、復原実測が可能な資料は、壺2点、須恵器環1点の合計3点である(第83図1～3、第29表、図版52)。(1)はかまど上位から出土し、(3)はかまど床掘り込みに密着して出土した。

2 溝

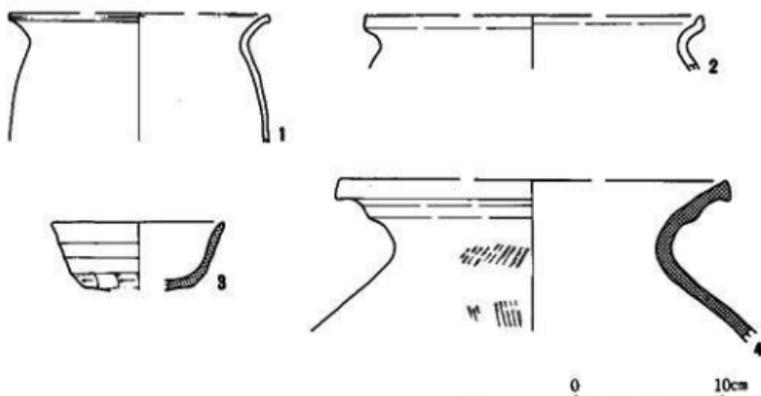
2 (004)号跡 (第82図、図版36)

調査区中央部西隅のA7～A10、B8～B9グリッドに位置する溝で、II層で確認された。調査区の内外にまたがって存在するため、その全容を知ることはできないが、円形に巡る古墳周溝の一部分である可能性が高い。溝はハードロームを掘り込み、壁面は明瞭堅固である。北側の一部に攪乱があるが、確認面における溝の上端幅および溝底幅はそれぞれ約85cm前後と約44cm前後に保たれている。深さは約80cmで、溝底はほぼ平坦である。溝の断面は、逆台形を呈し、壁下部は外周壁が約60°～70°、内周壁が約75°の傾斜角で立ち上がり、内周壁の方が勾配が急である。底面は平坦で、掘り込み等の遺構はみられない。

覆土は全体的に粒子の細かい堆積土でよくしまる。A-A'における断面観察では以下の5層に分層される。1. 黒褐色土層。2. 褐色土層。3. 黄褐色土層。ソフトロームを多く含む。4. 黒褐色土層。ハードロームブロックを含み、しまりがよい。5. 黄褐色土層。直径約3cmのハードロームブロックを多く含む。粘性が強い。



第82図 2(004)号跡実測図



第83図 1(005), 2(004)号跡出土遺物

第29表 1号跡, 2号跡出土遺物観察表

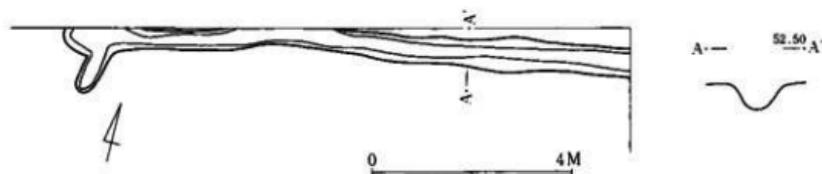
神田 番号	群種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	甕	カマ ド内	(17.8) — —	外—口縁内外面:ヨコナデ, 体部:縦位の浅いケズリ 内—ナデ	細砂多	良	外 内 } 褐色	3/6	
2	甕	覆土	(23) — —	外—口縁:内外ナデ,体部: ナデ 内—ナデ	砂粒多	良	外 内 } 赤褐色	3/6未測	
3	須恵 環	カマ ド内	11.8 4.7 7.2	口縁内外面:ヨコナデ,体部:左 廻りの手持ちヘラケズリ 底面:ケズリ	細砂多	普	外 内 } 明褐色	3/6	ロクロ成 形(?)
4	須恵 大甕	覆土	(26.8) — —	外—口縁内外面:ヨコナデ, 体部:タタキのちナデ 内—ナデ	砂粒多	良好	外 内 } 黒色 —灰色	口縁3/6	自然釉付 着, 2号 跡出土

遺物は縄土器片と須恵器が出土したが、復原実測の可能なものは第83図(4)に示す須恵器大甕1点である(第29表)。この資料は溝覆土上面から発見されたものである。

3 (002)号跡 (第84図)

調査区北端東側で検出した溝で、F1~H1グリッドに位置する。II層で確認された。

調査区内外にまたがって存在するので、全容は明らかでない。確認面における溝の上端幅は約20~30cm、溝底幅は約20cm、確認面からの深さは約20cmである。壁面は弱い起伏がある。壁下部は約55°~60°の傾斜角で立ち上がり、断面は逆台形に近く、底面は平坦である。覆土は軟質で、しまりの悪い黒褐色土の単層である。遺物は発見できなかった。



第84図 3 (002)号跡実測図

4 (001)号跡 (第85図, 図版37)

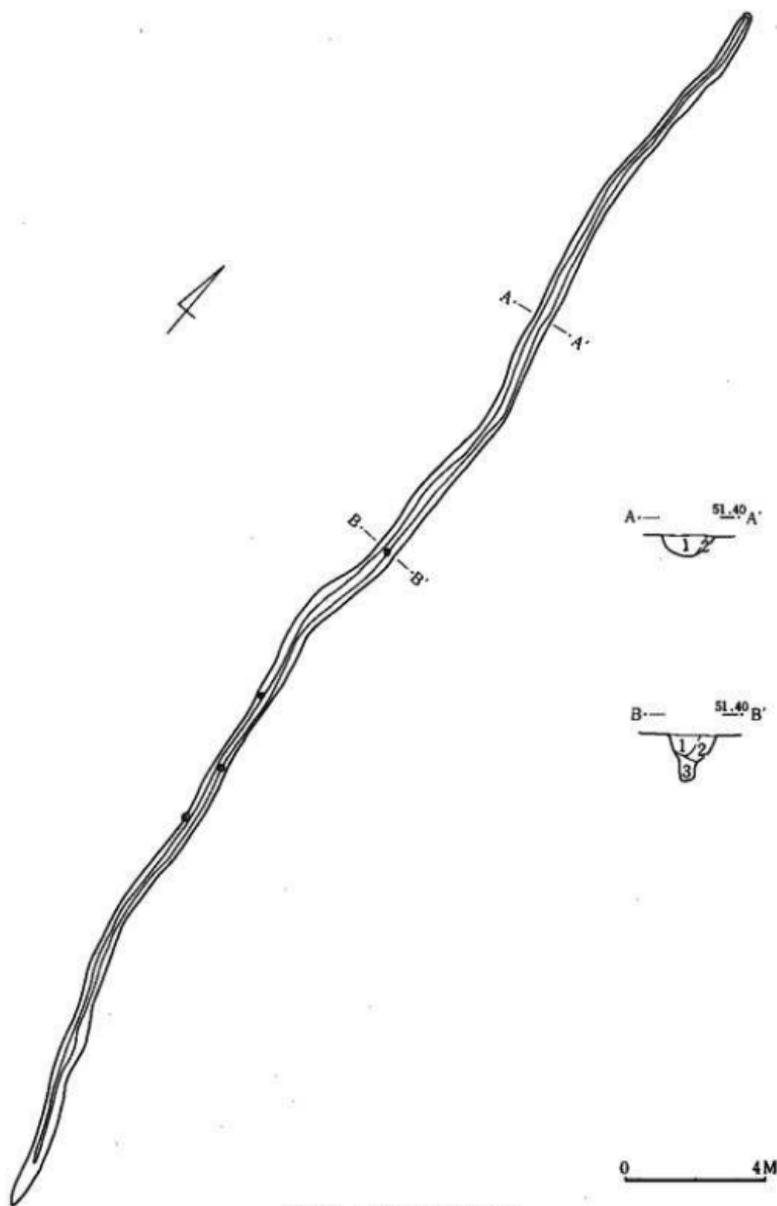
調査区の中央部北西寄りで検出した溝で、II層で確認された。ソフトロームとの漸移層上における平面実測図(第85図)では、本号跡はほぼ南北方向に走行する全長約36mの独立した溝として表現されるが、確認当初はE2グリッドで3号跡とほぼ直角に接触していた。しかし、この部分は確認面からの掘り込みがきわめて浅く、精査中に列点状になって消滅した。確認面における上端幅は広いところで約60cmであるが、平均すると約45cm前後である。溝底幅は約20cmである。確認面からの深さは全体に浅く、約15~20cm程度にとどまる。溝底は起伏にとみ、いくつかの浅いピットがある。溝の南北両端は漸移的に浅くなる。

壁面は凹凸があり、軟弱で不明瞭である。掘り込みはハードロームまで達しない。壁下部は約40°の傾斜角で立ち上がり、断面はU字形を呈す。覆土は全体に軟質で、粒子は細かい。B-B'における観察では、以下の3層に分層される。1. 黒褐色土層。黒色土を多く含む。粘性に乏しい。2. 褐色土層。ローム土を混える。3. 黄褐色土層。2層に比べてハードロームブロックを多く含む。

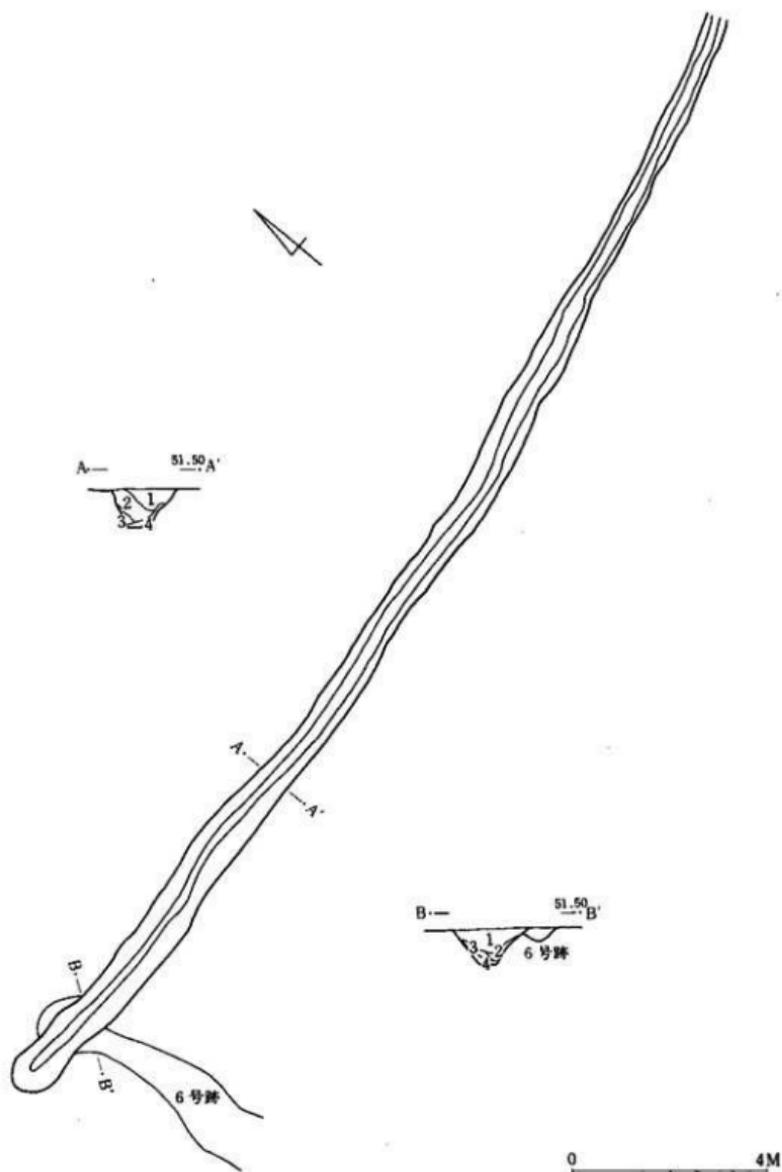
遺物は縄文時代の土器片と土師器の破片が少量出土したが、いずれも周辺の包含層からの流れ込みと考えられる。

5 (009)号跡 (第86図, 図版37)

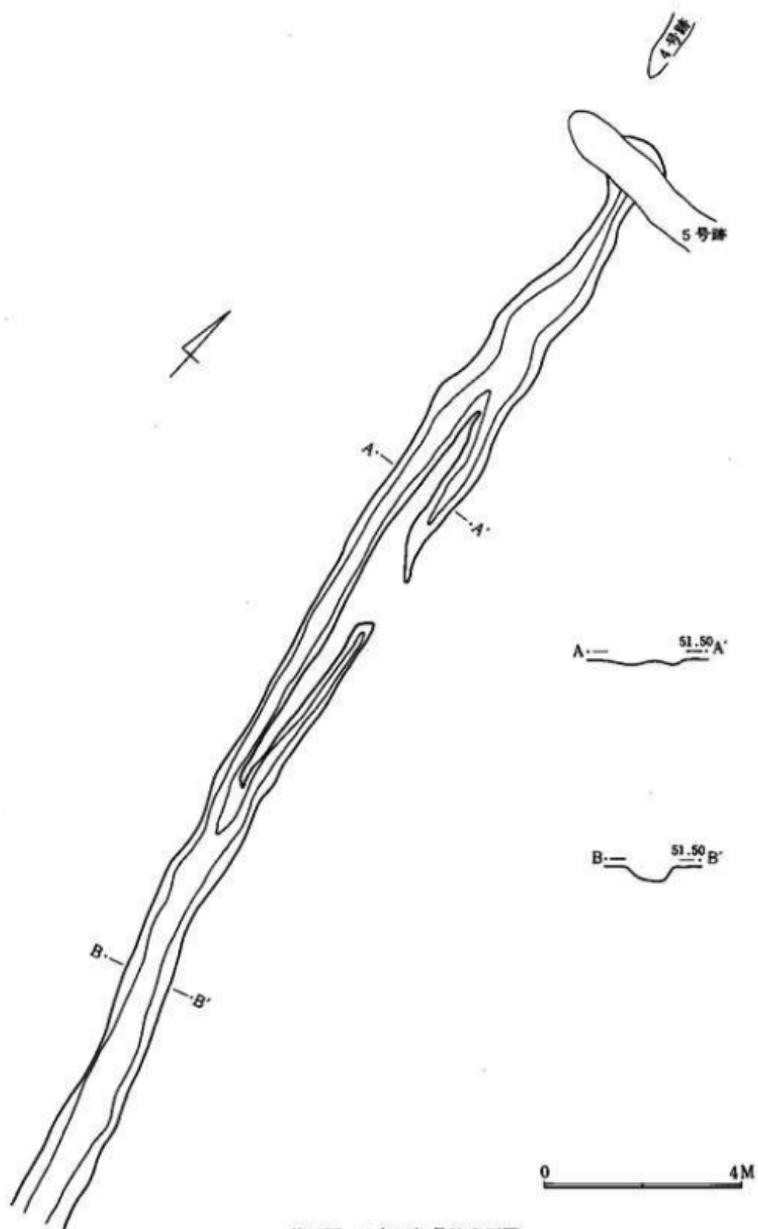
調査区のほぼ中央部を東西に横断する溝で、表土を除去したII層上面で確認された。6号跡



第85图 4(001)号跡实测图



第86图 5(009)号踏实测图



第87图 6(010)号跨实测图

を切るが、本号跡はこの交叉部付近に末端部があり、これより西方へは延びない。なお、溝東端は調査区域外に存在する。

確認面における溝上端幅は約50～70cmで、溝底幅は約20～30cmを測る。また確認面からの深さは約30～40cmである。本号跡は調査区域の内外にまたがって存在するが、調査区内で検出した部分の全長は約26.5mを測り、走行方向はほぼ東西方向を指す。壁面は明瞭で、壁下部はハードロームを掘り込み、約65°の傾斜角で立ち上がる。底面は平坦で、溝断面は逆台形を呈す。覆土は粒子の細かい土壌が堆積し、よくしまる。A-A'における断面観察によると、覆土は以下の4層に区分される。1. 黒褐色土層。黒色土を多く混じえ、粘性が強い。2. 黒褐色土層。ローム粒を含む。3. 黄褐色土層。ソフトロームが多く混じる。4. 褐色土層。

遺物は縄文時代早期の土器片と礫が出土した。しかし、これらはいずれも包含層からの流込みと考えられるので、本号跡の時期を決める直接資料にはならない。

6 (010)号跡 (第87図, 図版37)

調査区の南西部を南北方向に縦走する溝で、II層上面で確認された。5号跡とほぼ直交するように交わり、これに切られる。また、同じく南北方向に走行する4号跡の南端と本号跡の北端は、C12グリッドで接近するが、両者が本来連続する1本の溝であったかどうかは明らかでない。

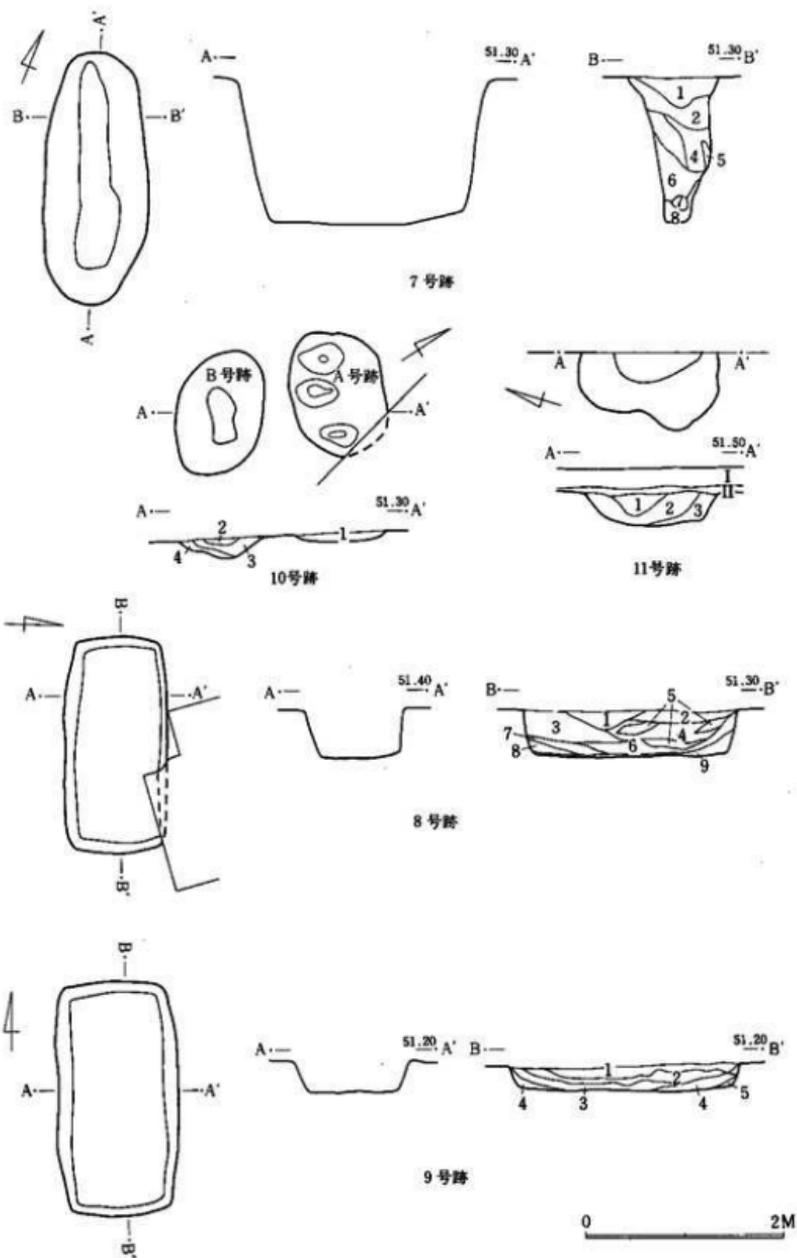
確認面における上端幅は場所によって変動が大きいが、平均すると約1～1.2mで、狭いところで約0.5～0.6mである。溝底幅と確認面からの深さも場所による変動が著しく、それぞれ約20～70cm、約5～40cmを測る。本号跡の走行方向はほぼ真北方向を指すが、途中で分岐し、平行する2条の浅い溝となる。この2条に分れた溝のうち東側の溝の掘り込みは、III層上面に達していない部分がある。第87図は、III層上面における平面図であるので、この部分で溝が不連続になっているようにみえる。壁面は軟弱で、壁下部の掘り込みは大部分がソフトローム内にとどまり、約10°～60°の傾斜角で立ち上がる。底面は起伏がある。溝断面は左右に広がったU字形から逆台形を呈し、一定しない。遺物は発見できなかった。

3 土 塚

7 (003)号跡 (第88図, 図版38)

調査区の北西隅で検出した土塚で、A2グリッドに位置する。II層とIII層との漸移層で確認された。プランは長楕円形を呈す。確認面における開口部は長径約2.8m、短径約1.1m、底面は長径約2.1m、短径約0.4mを測る。主軸方向はN-23°-Wを指す。確認面からの深さは約1.5mで、ハードロームを深く掘り込み、底面にはわずかな起伏がある。

壁面は明瞭堅固で、凹凸が著しい。壁の傾斜はほぼ垂直に近く、南北壁の壁下部は約88°、東西壁の壁下部は約80°～85°の傾斜角でそれぞれ立ち上がる。B-B'における断面観察では、覆



第88图 7(003), 10(007), 11(008), 8(006), 9(011)号跡実測図

土は以下の8層に区分される。1. 暗褐色土層。軟質でソフトロームを含む。2. 褐色土層。ソフトローム粒を多く含む。3. 黄褐色土層。粘性があり、直径約2~4cmのハードロームブロックが混入する。4. 暗い黄褐色土層。軟質で、ハードロームブロックを混じえる。5. ハードロームブロック。壁面の剝離物か？ 6. 黄褐色土層。直径約3~4cmのハードロームブロックを主体とする土層。粘性があるが、ゾクゾクでしまりは悪い。7. 黄褐色土層。直径約1cm前後のハードロームブロックと黒色土粒を主体とする層。土粒の安定が悪く、ポロポロだが、粘性がある。8. 黄褐色土層。直径約5~6cmの大粒のハードロームブロックを主体とする土層。粘性が強い。

なお、本号跡にともなう遺物は発見できなかった。

8 (006)号跡 (第88図, 図版38)

調査区の北側中央部付近で検出した土坑で、E4~F4グリッドに位置する。II層で確認されたが、調査の手順ミスで北壁の一部をプレ調査用のグリッドで破壊した。プランは長方形を呈し、各コーナーは直角に近い。確認面における開口部の長径は約2.2m、短径約1.1mを測り、底面における長径は約2m、短径は約0.9mである。また、確認面からの深さは約50cmで、主軸方向はN-86°-Eを指し、ほぼ東西を向く。

壁面は明瞭堅固で、壁下部はハードロームを掘り込み、東西壁が約70°~75°、南北壁が約80°の傾斜角でそれぞれ立ち上がる。底面は平坦堅固で、断面は逆台形を呈す。覆土に炭化粒と焼土粒を多く含み、全体にしまりはよい。B-B'における断面観察では以下の9層に分層された。1. 黄褐色土層。ローム土を主体とし、炭化粒を多く含む。2. 黒褐色土層。砂粒、炭化粒を含む。3. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを多量に混える。4. 黄褐色土層。5. 黒褐色土層。砂粒を多量に含む。堆積土のしまりが特に良好である。6. 褐色土層。砂粒、焼土粒を含む。しまりが悪く、くずれやすい。7. 黄褐色土層。炭化粒とソフトローム粒を多量に含む。8. 黄褐色土層。炭化粒、焼土粒を混える。9. 黒色土層。炭化粒を主体とする層で、ややくずれやすい。

なお、本号跡の壁面下部は、底面から約30cm上部までの範囲が被熱のため赤化している。この傾向は、とくに西壁に著しい。遺物は発見できなかったが、堆積物の状態などをみるかぎりでは、比較的新しい時期に掘られた可能性が高い。

9 (011)号跡 (第88図, 図版38)

調査区の南西部で検出した土坑で、C15グリッドに位置する。II層で確認された。プランの平面形態は長方形を呈し、各コーナーは直角に近い。確認面における開口部の長径は約2.4m、短径は約1.2m、底面における長径は約2.2m、短径は約0.9mである。また、確認面からの深さは約30cmで、主軸方向はN-3°-Wを指し、ほぼ真北を向く。

壁面は明瞭で、壁下部はハードロームを掘り込み、東西壁が約60°~65°、南北壁が約70°~75°

の傾斜角で立ち上がる。底面は平坦堅固で断面は逆台形を呈す。覆土には炭化粒、焼土粒を含み、比較的よくしまる。B-B'における断面観察では以下の5層に分層された。1. 褐色土層。ローム粒を混える。2. 褐色土層。粘土を混える。3. 褐色土層。ローム粒を含む。くずれやすく、しまりが悪い。5. 暗褐色土層。ソフトローム粒を含む。

遺物は発見できなかったが、壁面には広い範囲にわたって焼土粒が付着する。8号跡と同じ性質の土塚と考えられるが、壁面には被熱の影響を受けた痕跡はみられない。

10(007)号跡 (第88図、図版38)

調査区の南東隅で検出したA、B2つの土塚で、F23グリッドに位置する。II層とソフトロームの漸移層で確認された。2つの土塚はともに楕円形を呈し、約1.2mの距離をおいて並ぶ。覆土上面に焼土粒が堆積するが、焼土粒の確認面における平面分布が明瞭でなく、プランの確認は遅れた。

A号跡は調査区の内外にまたがって存在し、完掘されないが、確認面における開口部の推定長径は約1.2m、短径は約0.9mである。平面プランの大きさに比して確認面からの深さはきわめて浅く、最深部でも10cmに達しない。主軸方向はN-71'-Wを指す。B号跡の確認面における長径は約1.3m、短径は約0.8m、確認面からの深さは約20cmである。主軸方向はN-54'-Wを指す。

両号跡とも壁面はいずれも軟弱でやや不明瞭である。掘り込み底はソフトローム層内にとどまり、ハードロームに達しない。壁下部と底面との境界は不明瞭である。底面は起伏にとみ、軟質である。A号跡の南壁の立ち上がりには直径約40~50cmの楕円形の浅いくぼみが3つ並ぶ。A、B両号跡とも、覆土中に焼土粒をみとめる。覆土は全体によくしまり、A-A'における断面観察では以下の4層に区分され、そのうち第1層がA号跡の覆土に相当する。1. 暗赤褐色土層。暗褐色土とローム粒を主体とする土層で、わずかに焼土粒を混える。2. 褐色土層。焼土粒とソフトローム粒を多く含む。軟質で粘性はない。3. 暗褐色土層。焼土粒を混える暗褐色土層で、ローム粒を含む。4. 黄褐色土層。ソフトロームを主体とし、若干量の焼土粒と暗褐色土がまじる。

なお、遺物は発見できなかったが、本号跡周辺からは多量の縄文土器と礫が出土した。

11(008)号跡 (第88図)

10号跡の南側で検出した土塚で、F25グリッドに位置する。II層で確認されたが、調査区の内外にまたがって存在するので、その全容は明らかでない。調査区内に出現した部分は不定形である。壁面は軟弱である。壁下部は南壁が約60°、北壁は約30°の傾斜角で立ち上がる。底面の掘り込みはソフトローム内にとどまる。

A-A'における断面観察では覆土は、以下の3層に分けられるが、堆積土は全体によくしまる。1. 褐色土層。2. 黒色土層。ローム粒を少量含む。3. 黄褐色土層。暗褐色土を含む。

第4節 包含層出土の遺物

1 先土器時代

〔1〕出土状況

調査に際して、先土器時代の遺物が集中して発見されたのは、F24ポイントを中心とする南北約9mの範囲である。しかし、調査区が著しく限定されていたために、そのひろがり、とくに東西方向へのひろがり把握することはできなかった。また、トレンチが支谷に対して、直交するように設定されたために、この支谷のコンターラインにそった分布状況を確認することは不可能である。遺物の出土状況を示す第89図からは、遺物の出土範囲がさらに東側へひろがる傾向がうかがわれ、より広域に及ぶ分布状況を予想させる。

遺物の産出層準は、第89図から判定されるように、ローム層軟質部下半から硬質部上面に顕著な集中をみせる。この層準が、はたしてどの程度の古さを示すものであるのかは、対比資料の乏しい本地域にあつては、容易に判明しないが、ある程度の推定は可能であろう。

すなわち、本遺跡においては、より下位にあるスコリア質暗色ロームの上に、明褐色硬質ロームの堆積が認められ、これらがそれぞれ下総標準土層のVI層、VII層に比定され、また、すでに再三にわたって指摘されているように、下総台地においては、ふつうIV層の大半が、膨軟化しているという事実を背景とすれば、本地点における石器産出層位は軟質部から硬質部への移行帯でIV層相当の層準と考えられるであろう。この結果は出土石器の様相とも矛盾せず、下総台地東縁部においても、標準的なテフラ降下の認められる事実を知るところともなった。

遺物の平面的なひろがりには、F24グリッドに111点の資料が集中するが、これは全出土資料の約70%に相当する。この集中部分の南側に小規模な集中が2ヶ所認められる。この小規模な集中箇所は南から、E25グリッドを中心とするもの、E24グリッドを中心とするものであり、さらに未掘部にも別な集中の存在が考えられる。

このように、感性的に分節しうる石器群のまとまりをブロックと呼称すれば、今回の調査において、われわれは合計して3ヶ所のブロックに遭遇したことになるが、ここで各ブロックにたいして、次下のごとく仮番号を付しておくことにしたい。

第1ブロック F24グリッドを中心とするもの

第2ブロック E25グリッドを中心とするもの

第3ブロック E24グリッドを中心とするもの

各ブロックの構造に関しては、それに含まれる諸資料の母岩構成、器種組成等の分析を要するため、次項以降にて分析して加えることにしたい。

〔2〕ブロックの状態

遺物の出土状態は第89図に示した。調査区域が狭く、ブロックの展開の全体的状況を知ることではできないが、各ブロックの性格について検討を加えたい。なお、遺物整理の都合によって、各ブロックの器種、母岩構成についての厳密な統計処理が不可能であったことを付言しておく。

第1ブロック F24グリッドを中心としている。遺物のとくに集中するのは、同グリッド内のおよそ3m×1.5mの範囲で、その周辺はたいへんまばらな状態になる。また東壁際にも遺物がみられるから、このブロックの場合、必ずしも全掘されていないのかもしれない。

遺物は約120点で、最も遺物数量の豊富なブロックであるが、母岩の構成は比較的単純で、少量の頁岩B、玄武岩などが含まれているが、約90%が頁岩Aによって占められている。さらに、石器組成の上からも、2点の石核と多量の剥片を中心とするばかりか、6組40点に達する接合資料を含むところから、単一母岩からの剥片生産を基調とするブロックであることは分明であろう。

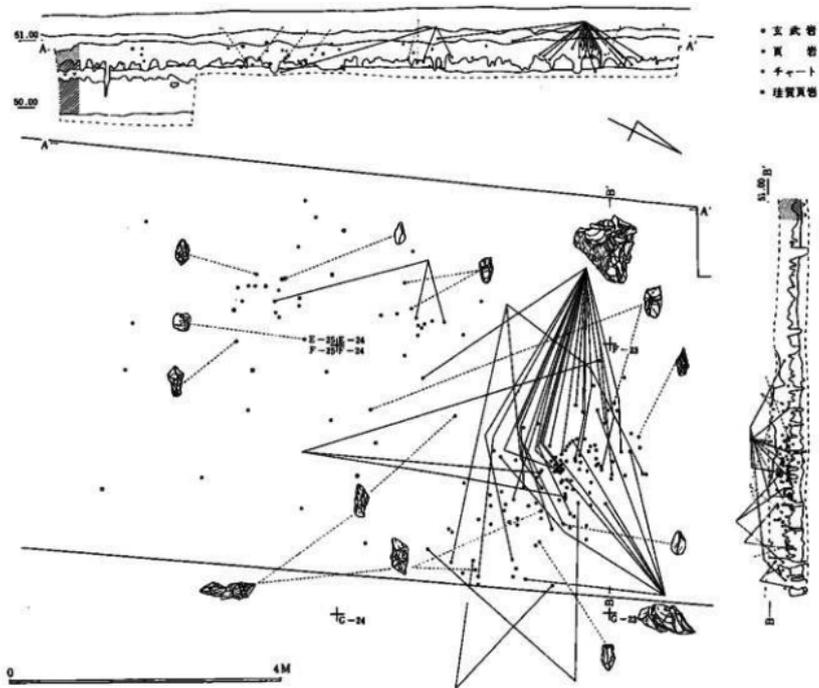
石核と剥片を除外した器種構成をみると、切出形石器2点、ナイフ形石器7点、側削器1点、合計10点となり、一見充実した組成を示すかと思われるが、切出形石器のうち1点は加工途中で、廃棄されたものであり、削器もおそらく同様の命運にあったものと考えられる。また、ナイフ形石器も7点のうち完成品は1点であり、残余は全て破片であることが注意される。このように、破損品の割合が80%にも達するという事実は、本ブロック内における作業が、(1)石器の素材である剥片の作出、(2)素材剥片の二次加工による製品化という、一連の系統的作業であったことを示唆し、本ブロック自体の性格を明確に規程している。

第2ブロック 27点の資料から構成される。遺物がとくに集中するのは、約2.5m×1.5mの狭い範囲で、第1ブロックほどの集中性もない。母岩の構成をみると、頁岩Aが過半を占め、第1ブロックとの同時性を物語っているものの、珪質頁岩、チャート、玄武岩などを数点ずつ含み、多様な母岩構成を呈する点が注意される。

器種的にみると、ナイフ形石器2点、角錐状石器1点が含まれるのであるが、これらは3例ともに完存するばかりか、ナイフ形石器と角錐状石器とがチャート製、残りのナイフ形石器が玄武岩製であり、頁岩Aによる製品を含んでいない。ただし、チャート及び玄武岩を素材とする剥片作出の形跡はなく、別ブロックからの搬入は明らかである。

第3ブロック 第1、第2ブロックの中間ブロックにあり、径約1.5mという小規模なもので、遺物数も14点と少ない。2点1個体のナイフ形石器(類切出形石器)の他は全て剥片であり、頁岩Aを母岩としている。ナイフ形石器を加工段階の破損品と理解すれば、第1ブロックにおける資料のあり方と極めて近似した状況であると評価されよう。

このように、規模の大小はあれ、等質のブロックが並存する状況は、おそらく第1ブロック内における工作者とは別な主体の、石器製作への関与があったのであろう。ここでもうひとつ



第89圖 先土器時代遺物出土分布圖

問題となるのは、第1、第3ブロック内で製作された製品の供給先が、第2ブロック以外であった可能性である。この問題については、狩猟バンドの構成単位のあり方に深く関連するのであるが、今回の調査資料から、これ以上の論議を加えることは不可能であろう。

〔3〕石器の記載

遺物総数186点のうち、2次加工の施されたものは15点、他に石核が4点、剥片が164点ある。今回の報告書においては、資料の呈示が必ずしも十分とは言えないが、図示し得た資料について逐次観察することにしたい。なお、石質は前項における母岩名と一致する。

第90図1 切出形石器。横に長い剥片の打面部と、それに対応する側縁に刃潰しを加えている。打面は完全に除去され、また、打面部への加工はノッチとなっている。刃部とそれに対応する縁辺は未加工のまま残されている。石質は頁岩Aである。

第90図2 切出形石器。素材は前例に等しい特徴を示している。現在上下に割れているが、これは打面と反対側の縁辺加工に際して破損したものとみられる。したがって、この資料は未製品のまま廃棄されたものであろう。完成時には前例の如き形態をもつものとなろう。石質は頁岩Aである。

第90図3 同図1と2とが接合した状態を示している。平坦な節理面を打面として、打点を左右に移動しながら剥片剥離をすすめてゆく状態がうかがわれるが、この過程に関しては、後ほど詳述したい。器種の決定が素材獲得時におこなわれる点が重要である。

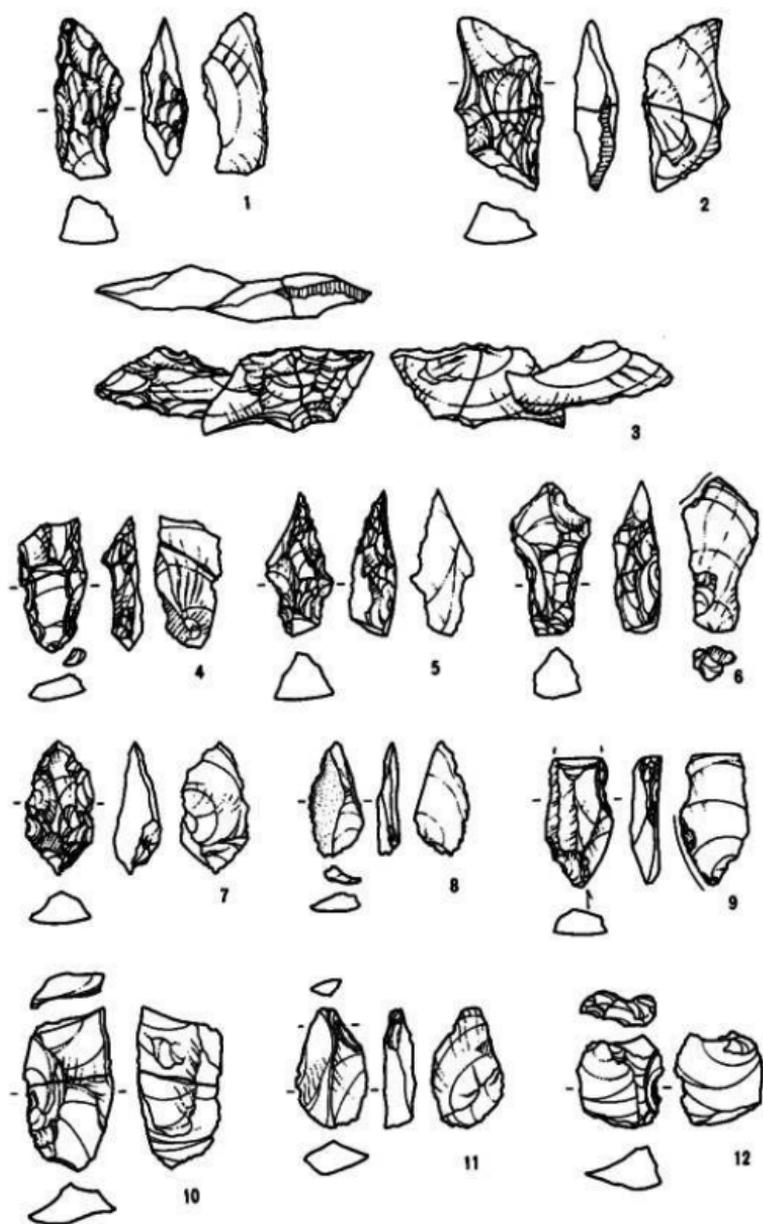
第90図4 類切出形石器。縦に長い剥片を素材とするところが、1、2の切出形石器とちがっているが、打面を残置し、刃潰しを両側縁部に限定して下面に及ぼすことがないなど、明らかに切出形石器の影響を帯びた石器と言えよう。2と同様の欠損状況を呈しており、完成間際に半割して、廃棄されたものと推定される。石質は頁岩Aである。

第90図5 ナイフ形石器。鋭利な尖頭器である。素材である剥片は、切出形石器のそれに一致し、厚みのある横長のものである。刃潰しは、1例同様に打面部とその対応する側縁に限られ、所謂鋸歯縁加工を特徴としている。尖頭部に接する背陵上にも細い陵上加撃が加えられ、このために背面右側縁部上半は、上下からの加工痕が切り合う状態となる。背陵側の剥離が側縁からの剥離に切られている。石質は頁岩Aである。

第90図6 角錐状石器。打面を大きく残す。部厚い縦長剥片が素材に選ばれている。打面に接する両側縁に刃潰しを加えられるとともに、背面尖端部右側縁に大きめの剥離があり、ほぼ左右相称の形態に仕上げられている。体部の横断面は三角形に近い。石質はチャートである。

第90図7 ナイフ形石器。打面を残す横長の剥片が素材となる。二次加工は背面左側縁部に施されているが、通例のナイフ形石器にみられる刃潰しとは異り、刃部との角度は小さく、所謂平坦剥離に近い。6と同一母岩である。

第90図8 ナイフ形石器。縦長の小剥片の打面に接する一側縁に、わずかに刃潰しを加えら



第90图 石器实测图(1)



れているにすぎず、極めて粗製のナイフ形石器と言えよう。石質は玄武岩である。

第90図9 ナイフ形石器かと思われるが、器種はよくわからない。長手の剝片を用いているが、二次加工部位は、打面部を除去する剝離と背面右側縁の刃潰しの2ヶ所で、あるいは、図の上が器体基部となるのかもしれない。打瘤除去を目的とする剝離痕に接して、細い槌状の剝離痕が観察されるが、意識的なものかどうか分らない。腹面左側縁に微小剝離痕が著しい。石質はおそらく頁岩Aであろう。

第90図10 側削器。縦長剝片の背面左側縁に打調があり、一種の削器かと考えられる。素材の打面部を欠き、また、器体中央部から半折しているが、おそらく側縁部への加撃時に破損したのと考えられる。石質は頁岩Bである。

第90図11 不整形の横長剝片の一端に刃潰し様の二次加工痕の認められる石器。器種は不明であり、未製品とも考えられる。頁岩Aである。

第90図12 凹削器。比較的厚手の剝片の背面右側縁にノッチが入れられる。刃部は切り立ち、たいへん頑丈な状態になっている。6、7と同一母岩のチャートである。

第91図1～8 1～7は剝片。8は剝片の接合状態を示してある。これを接合資料1とする。石質はいずれも頁岩Aである。

第91図9 石核と剝片2点が接合した状態で、これを接合資料2とする。石質はいずれも頁岩Aである。

第92図 今回の調査によって得られた、最も良好な接合資料である。石核1点(第92図1)と21点の剝片が接合した。接合資料3とする。石質は頁岩Aである。これら3組みの接合資料に関しては次項にて検討を加えたい。

〔4〕剝片生産技術の検討

すでに触れたように、第1ブロックにおいて、頁岩Aを母岩とする3例の接合資料が得られた。これらの接合資料をつうじて、本遺跡における剝片生産の実態を明らかにし、また、他遺跡の例と比較することによって、下総台地IV層に帰属する剝片生産の諸態様を明らかにしたい。

接合資料1 8点の破片からなるが、大きく4枚の剝片の接合と見るべきである。作出された剝片の形状は、おおむね幅の広い台形状の形態を示し、切出形石器の素材として好適なものであることが指摘しうるであろう。剝片の末端は一例が燂番剝離、他はフェザーエンドになる。打面は節理面とそれを切る1枚の大きめの剝離面から構成される平坦打面である。また、各剝片ともに打面は大きく残置されている。

剝片背面には5枚のネガティブな剝離面が並ぶが、切り合いに規則性がなく、腹面のポジティブな剝離面の対照が著しい。この対照の発生する理由はよく分らないが、あるいは背面の諸面が石核の側面調整に起因するためかもしれない。

一方、ネガティブバルブの分布状況を観察すると、図の矢標に示される順番が認められ、打



第91图 石器实测图(2)

面の一端に発し他端に及ぶ打点の反覆が明らかに看取される。旧剥離面と新剥離面との形成する背腹部を次々に打点にえらぶことにより、このような反覆移動が生じる。

接合資料2 大型で部厚い剥片が素材とされるが、この剥片の腹面を打面にし、側縁に沿うように剥片剥離がおこなわれている。打点の移動に規則性はない。作出される剥片は、石核の大きさに規制を受け、小型のものとなるが、基本的形状は、やはり幅広の台形状のものとなる。

接合資料3 石核(第92図1)に21枚の剥片が接合するが、接合資料1も確実にこの石核から剥離されたものであろう。他に多くの関連する剥片があり、第90図1、2の切出形石器等も本石核から剥離された剥片を素材とした可能性が高い。今、便利のために、実測図の左側をA面、中央をB面、右側をC面、上をD面として以下の観察をすすめたい。

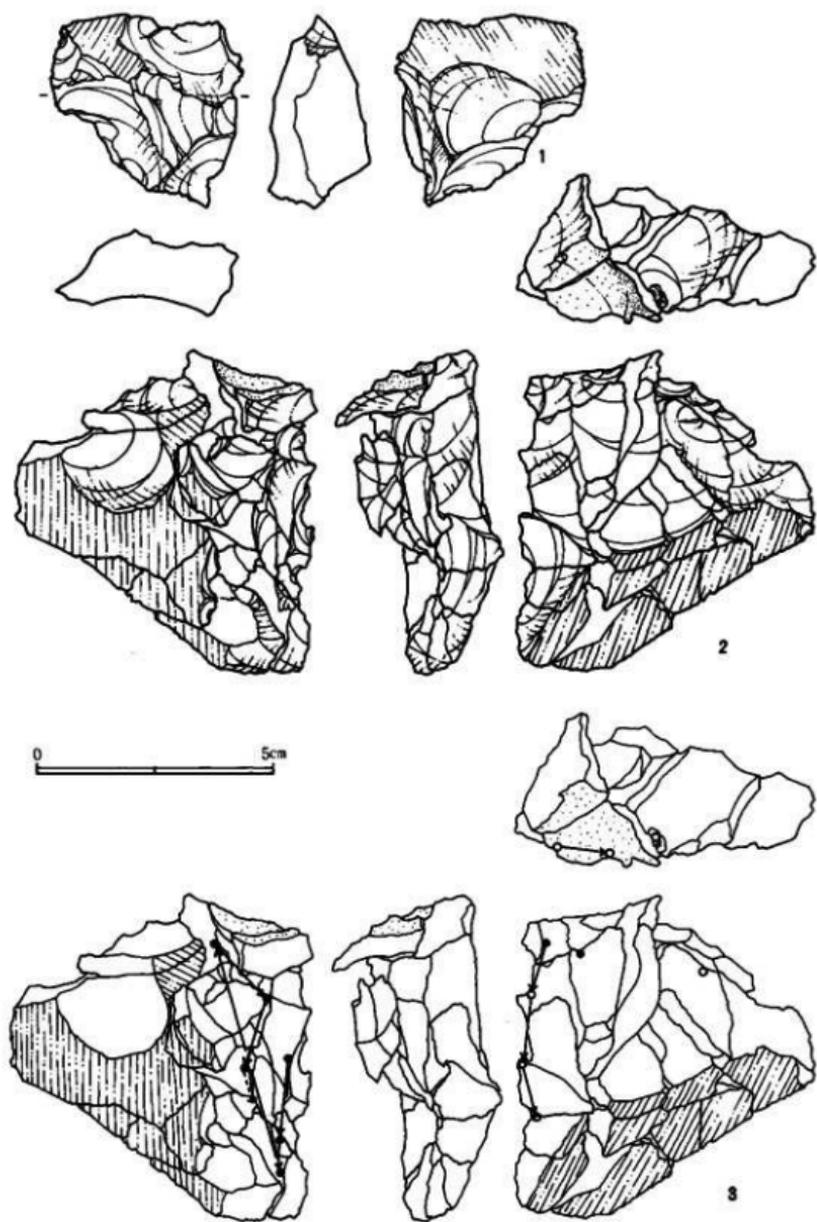
まず、最終的な石核の状態を観察すると、表裏両面にネガティブな剥離面が2枚ずつ認められる。しかもそれらの剥離面には規則性がなく、求心的剥離による盤状石核を思わせる形態を呈しており、以下観察される剥片剥離技法とは著しい垂離を示し、単に石核から所与の技法を想定することがいかに危険であるかを知った。

まず、石核の素材が問題となるが、A面左半分、C面下半分に節理面が大きく残され、またD面には原礫面をとどめる剥片が接合しているから、大型の原石を節理面に沿って分割した板状の剥片であることが想定される。各面への剥片の接合状態と、剥離面の遺存状態から、基本的に4段階にわたる剥片剥離工程が復元される。

段階Ⅰ D面を打面とし、C面上半にある剥離面の形成された段階。C面に残された剥離痕には新旧2期のものが識別されるが、本段階に関連するのはC面左側の2面であり、打面とされるものは、D面左側に接合している原礫面をとどめる剥片である。比較的大形の剥片がおとされているが、直接この段階に発する剥片の接合例がなく、詳細は不明である。

段階Ⅱ 前段階に形成された剥離面を打面とし、A面に残される剥離面の形成された段階である。最終的な打点の移動は、第92図3の矢標によって示されているように、一端から他端に直線的に移動している。

段階Ⅲ 次に石核は表裏反転される。この結果、段階Ⅱにおいて形成された、ネガティブな剥離面が打面に転化することになり、各段階を通じて旧ネガティブ剥離面を新打面に選ぶという原則が貫徹されていることが分る。この打面の剥片の接合数は多く、第92図3に見られるように、1往復の打点の移動が明らかにされた。同図3A面のポジティブバルブの位置とその移動を示す矢標の動きを見ると、一端より他端へ直線的に移動し、石核側縁に接する末端に達すると、もういちど振り出しに戻り、前の工程と同じように直線的移動が繰り返される状態が看取される。これは、先に接合資料1で認められる打点移動と一致している。ここで注目されるのは、この打点移動に伴う打面が、旧ネガティブ剥離面に固定されることで、また、この間



第92图 石器实测图(3)

に打面の修整、再調整は全く行なわれない点である。

この間に生じる剥片は、第91図1～4、6、7などにみられる不整な矩形のものが多く、第90図1、2あるいは第91図1など、長幅比1:2前後のものが石器素材として摘出されている可能性がある。このような素材獲得の目的性は、板状で背の低い剥片や礫片を石核原材として選択するという傾向に、すでに内在していることは明らかであろう。

下総台地における軟質ローム下半から硬質ローム波状帯ぐらいの層準より産出する石器群が、武蔵野台地IV層下半からV層の石器群に対比されることはすでに指摘されている通りである。この期の武蔵野方面には、新橋型と仮称される剥片生産技術が知られ(織笠 1977)、剥片剥離から製品化までの系統的技術体系が想定されているが、本遺跡を含む該期の下総の様相には不明のところが多し。暫定的に、東内野遺跡Z9地点例(篠原 1977)を基準として5類にわたる分類が試みられている(田村 1983)。ここにおける類別は以下の通りであった。

第1類 石核の打面長軸に直交もしくは斜交して剥片剥離がおこなわれる例で、平坦打面をもち、比較的長手の剥片がおとされる。生産される剥片の打面、打角ともに大きい。

第2類 石核の打面長軸に平行して剥片剥離がすすめられる。打面は一般に、一枚の剥離面からなる平坦打面で、打点は左右に直線的に移動もされるが、この際に旧剥離面が新剥離面に必ず切られる。横に長い剥片が作出される。

第3類 打面と剥離面とが入れかわる。置換系打面交代型石核である。打面、打点の移動の実体は前類に一致する。

第4類 直線的に打点の後退するもので、類例は少ない。

第5類 回転系多打面型に近い打面転位のおこなわれるもので、本類の検出例も極めて少ない。

ここで、本遺跡検出の接合例を再検討してみよう。接合資料1は3と同一個体であるから、あとでまとめてみることにする。まず、接合資料2。第2類に相当する。この類の石核には剥片素材のものが多く、したがってまた、背の低いものが多いが、本例もよくこの特徴をしめしている。ただ、打点の移動状況は東内野例に必ずしも一致しない。接合資料1、接合資料3は第3類の典型的な例である。また、この類の良好な接合資料は知られていなかったため、標準標本として重要である。新橋遺跡では、その第3類などが対応すると考えられ、下総では草深六角(古内 1976)、星谷津(大原 1977)、復山谷(鈴木 1978、田村 1982)他に類例があり、広汎な分布状況を示している。

〔5〕石器群の編年的位置

下総における先土器文化の編年的研究は、木珂峠(鈴木 1975)以降の多層位遺跡の調査事例の蓄積と、隣接地域の成果の援用とによって著しく促進された。現在、各自然層の産出石器の検討を基準とし、下総台地の先土器時代は3期に大別され、さらに各期の細分がすすめられて

いる。ここで大別の基準とされたのは、わが国の先土器文化において、最も普遍的な狩猟具としてのナイフ形石器であり、単純化すれば、ナイフ形石器出現をメルクマールとしてⅠ期とⅡ期が、ナイフ形石器消滅をメルクマールにⅡ期とⅢ期が区分される。Ⅱ期はさらに、ATを境界にしてⅡa期とⅡb期に、小型石槍の出現を契機にⅡb期とⅡc期とが細分される。

本遺跡において知られた石器文化の内容は、すでに前項までに詳しい検討を加えてきたが、ナイフ形石器を中軸とする石器文化であり、また、産出層位の上からも下総Ⅱb期に編年されることは明らかであろう。第2類、第3類を基調とする剥片生産技術に立脚して、切出形石器、角錐状石器、部厚い鋸歯状剥離によるナイフ形石器の存在は、該期の石器文化の特質をよく保持し、下総東縁部における、現在までのところ、最も良好な石器組製を提示している。これは、星谷津Ⅳ層、木苺峠Ⅳ層、復山谷Ⅳ層等に対比され、下総Ⅱb期が、南関東隣接地域と等質的な文化内容を示すことへの一証佐として挙げられるものである。しかしながら、ユニットの性格に関しては、さらに将来的な調査をまたねばならないであろう。

第30表 先土器時代フレイクおよび石器の計測値一覧

グリッド名	遺物番号	石 質	最大長(mm)	最大幅(mm)	重 量(g)	備 考
F22	8	頁岩B	10.2	16.0	0.6	
"	14	頁 岩	10.3	9.0	0.5	
"	17	頁 岩	6.0	18.5	0.3	
F23	5	チャート	14.1	17.2	0.7	
"	10	チャート	9.5	13.7	0.2	
"	12	頁 岩	9.6	13.7	0.2	
"	13	頁 岩	15.0	14.8	0.7	
"	14	頁 岩	5.6	11.0	0.1	
"	15	頁 岩	6.3	7.0	0.1	
"	16	頁 岩	6.0	18.1	0.4	
"	17	頁岩B	—	—	1.9	割削部(基90図10)+(F24-13)
"	19	頁 岩	17.0	16.1	1.7	
"	20	頁 岩	19.0	25.2	1.5	
"	21	頁 岩	7.5	16.0	0.5	
"	22	頁 岩	19.5	22.5	4.7	
"	23	頁 岩	10.3	13.1	0.4	
"	24	頁 岩	5.3	11.0	0.1	
"	24	頁 岩	13.1	29.2	2.5	
"	25	頁 岩	—	—	1.0	
"	27	頁 岩	—	—	1.8	ナイフ破片+(F24-74)
"	28	頁 岩	5.4	7.7	0.1	

F23	29	頁岩	6.7	10.9	0.2	
"	30	頁岩	—	—	2.6	ナイフ形石器(第90図5)
F24	3	頁岩	—	—	0.9	ナイフ破片
"	4	頁岩	13.7	15.0	0.6	
"	5	頁岩	6.5	7.4	0.3	
"	6	頁岩	20.0	20.2	3.2	
"	7	頁岩	16.0	23.4	2.4	
"	8	頁岩	19.5	29.0	3.5	
"	9	頁岩	12.3	12.8	0.6	
"	9	頁岩	5.0	12.0	0.1	
"	10	頁岩	18.9	18.4	0.6	
"	11	頁岩	—	—	3.2	切出形石器(第90図1)
"	12	玄武岩	24.8	27.9	4.6	
"	13	頁岩B	—	—	2.2	刮削器(第90図10)
"	14	頁岩	1.8	3.9	0.1	
"	15	頁岩B	15.9	19.3	1.5	
"	16	頁岩	10.6	17.3	6.9	
"	17	頁岩	23.7	15.0	2.1	
"	18	頁岩	20.0	26.5	2.7	
"	19	頁岩	12.7	18.0	2.0	
"	20	頁岩B	14.7	15.4	0.9	
"	21	頁岩	14.5	16.3	0.5	
"	22	頁岩	14.1	24.6	1.4	
"	23	頁岩B	30.6	32.6	10.1	
"	24	頁岩	18.6	18.0	1.6	
"	25	頁岩	7.4	9.2	0.1	
"	26	頁岩	9.2	20.9	0.9	
"	27	頁岩	18.9	27.3	3.4	
"	28	頁岩	7.0	17.0	0.3	
"	29	頁岩B	18.8	10.8	0.2	
"	30	頁岩	—	—	1.4	ナイフ破片
"	31	頁岩	17.0	23.6	1.4	
"	32	頁岩	13.4	13.9	0.4	
"	33	頁岩	13.3	15.6	1.2	
"	34	頁岩B	18.0	17.8	1.4	
"	35	頁岩	18.0	10.7	0.5	
"	37	頁岩	5.3	7.9	0.1	
"	37	頁岩	13.7	8.5	0.2	

F 24	38	頁岩	13.5	9.5	0.2	
"	39	頁岩	7.7	12.0	0.3	
"	40	頁岩	14.3	10.9	0.4	
"	41	頁岩	15.6	12.5	1.0	
"	42	頁岩	—	—	16.5	石核 (第91区9)
"	43	頁岩B	—	—	1.0	
"	44	頁岩	15.4	15.8	1.4	
"	45	頁岩	5.1	9.9	0.1	
"	46	頁岩	5.3	7.0	0.1	
"	47	頁岩	8.4	14.7	0.4	
"	48	頁岩	—	—	2.4	層種不明 (第90区9)
"	50	頁岩	11.8	22.9	1.3	
"	51	頁岩	—	—	0.8	ナイフ破片
"	53	玄武岩	18.0	29.5	3.5	
"	54	頁岩	11.0	10.0	1.0	
"	55	頁岩	—	—	0.1	
"	56	頁岩	9.0	10.0	0.2	
"	57	頁岩	7.5	10.9	0.2	
"	58	頁岩B	12.9	13.5	0.3	
"	59	頁岩	3.4	9.8	0.1	
"	60	頁岩	20.0	21.9	1.8	
"	61	頁岩	16.0	29.0	1.0	
"	62	頁岩	14.3	19.1	1.2	
"	63	頁岩	15.5	17.5	0.6	
"	64	頁岩	19.0	24.8	1.9	
"	65	頁岩	30.3	27.6	4.3	
"	66	頁岩	6.6	6.4	0.1	
"	67	頁岩	14.5	12.2	0.4	
"	68	頁岩	15.0	17.9	0.3	
"	69	頁岩	17.7	21.7	2.2	
"	71	頁岩B	16.0	23.1	2.2	
"	72	頁岩	8.6	10.4	0.3	
"	73	頁岩	5.0	7.5	0.1	
"	75	頁岩	14.1	21.3	1.0	
"	76	頁岩	6.8	14.6	0.4	
"	77	頁岩	7.3	18.5	0.4	
"	78	頁岩	5.9	12.8	0.2	
"	79	頁岩	5.1	6.5	0.1	

F24	80	頁岩	15.1	18.5	0.9	
"	81	頁岩	—	—	1.1	ナイフ破片
"	83	頁岩	12.2	14.7	0.5	
"	84	頁岩	9.0	10.0	0.1	
"	85	頁岩	18.8	16.9	1.7	
"	86	頁岩	8.7	18.6	0.4	
"	87	頁岩	8.6	12.3	0.2	
"	88	頁岩	15.3	11.9	0.5	
"	89	頁岩	36.4	16.3	3.0	
"	90	頁岩	5.1	7.1	0.1	
"	91	頁岩	9.8	23.9	1.3	
"	92	頁岩	16.0	22.2	1.4	
"	93	頁岩	10.3	10.0	0.2	
"	94	頁岩	8.0	9.3	0.1	
"	95	頁岩	4.4	6.0	0.1	
"	96	頁岩	6.3	10.7	0.2	
"	97	頁岩	4.7	9.8	0.1	
"	98	頁岩	20.7	13.8	0.8	
"	99	頁岩	—	—	0.6	
"	100	頁岩	13.0	23.7	2.2	
"	101	頁岩	—	—	1.2	
"	102	頁岩	—	—	5.3	切出形行跡 (第90図2)+(F24-104)
"	105	頁岩	20.5	23.0	1.9	
"	106	頁岩	18.1	23.0	1.2	
"	107	頁岩	18.1	14.1	1.3	
"	108	頁岩	5.0	12.3	0.1	
"	108	頁岩	12.3	9.0	0.3	
"	109	頁岩	8.1	14.6	0.3	
"	110	頁岩	7.9	8.0	0.1	
"	111	頁岩	17.3	35.6	2.8	
"	112	頁岩	11.8	13.5	0.2	
"	113	頁岩	10.6	10.4	0.2	
"	114	頁岩	9.2	9.6	0.1	
"	115	頁岩	—	—	26.6	石核(第92図1)
"	116	頁岩	23.5	16.0	1.3	
"	117	頁岩	11.0	8.5	0.2	
"	118	頁岩	11.0	9.8	0.3	
"	番号なし	頁岩	—	—	2.1	

F24	番号なし	頁岩	—	—	0.3	
F25	11	玄武岩	15.1	26.5	2.5	
"	13	頁岩B	16.0	17.0	1.4	
F27	5	頁岩	25.5	27.9	4.6	
E24	7	頁岩	7.0	11.1	0.1	
"	8	頁岩	11.4	10.6	0.2	
"	9	頁岩	13.6	18.0	3.8	
"	10	頁岩	4.9	9.2	0.1	
"	11	玄武岩	28.5	29.4	9.0	
"	12	頁岩	9.8	23.0	0.8	
"	13	頁岩	—	—	2.3	細切出形石器 (第90図4)+(E24-14)
"	15	頁岩	7.4	8.3	0.2	
"	16	玄武岩	25.3	23.1	4.2	
E25	6	頁岩	13.9	12.4	0.5	
"	7	珪質頁岩	7.9	13.6	0.4	
"	8	頁岩	9.9	8.1	0.2	
"	9	珪質頁岩	11.0	12.6	0.4	
"	11	チャート	—	—	3.1	凹削器(第90図12)
"	12	頁岩	19.0	18.7	1.5	
"	13	頁岩	4.4	11.0	0.1	
"	14	玄武岩	—	—	1.0	ナイフ形石器(第90図8)
"	15	珪質頁岩	15.3	10.6	0.4	
"	16	珪質頁岩	11.2	12.4	0.2	
"	17	チャート	10.3	14.2	0.5	
"	18	頁岩	—	—	5.2	石核
"	19	頁岩	—	—	0.1	
"	20	頁岩	5.4	13.4	0.2	
"	22	頁岩	8.7	8.7	0.2	
"	23	チャート	—	—	2.8	ナイフ形石器(第90図7)
"	24	チャート	—	—	4.1	角錐状石器(第90図6)
"	25	珪質頁岩	7.5	9.2	0.1	

*表中の頁岩は、文中の頁岩Aを示す。 *横線は計測不能および該当外の資料。

第31表 先土器時代フレイクおよび石器の石質別組成

石質	点数	相対割合(%)	重量(g)	重量相対割合(%)
玄武岩	6	3.6	24.8	10.0
頁岩A	137	82.5	186.2	75.2
頁岩B	12	7.2	23.7	9.6
珪質頁岩	5	3.0	1.5	0.6
チャート	6	3.6	11.4	4.6
合計	166*	99.9	247.6	100.0

*接合以前の点数

2 縄文時代

(1) 土器

(1) 出土状況

今回の調査で発見された縄文時代の土器は、いずれも中小の破片資料で、完存の状態で見られたものはない。これらの資料は、文様や形態的な特徴によって、以下の4種類に大別される。

①外面に沈線文の施されたもの(以下では沈線文系土器)

②内外面とも無文のもの(以下では無文系土器)

③外面に押型文の施されたもの(以下では押型文土器)

④底部

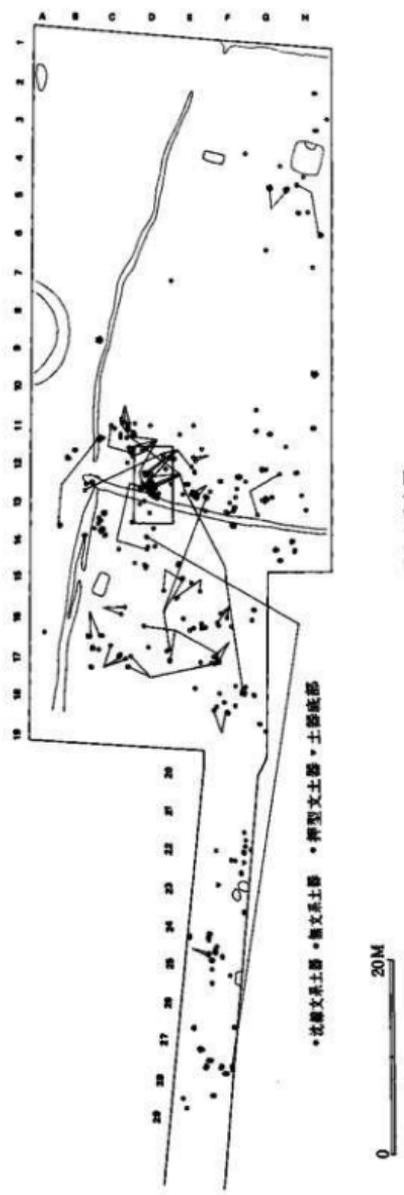
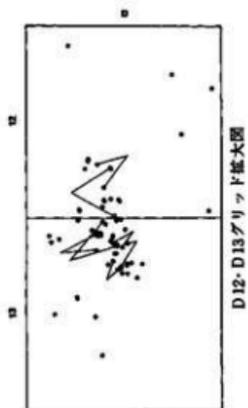
以上のうち底部資料は、いずれも尖底土器底部であるので、破損の度合によっては体部破片との区別が曖昧になるものがある。今回扱った底部資料は、外面の文様の有無にかかわらず尖底尖端部を保存しているものと尖端部にきわめて近いが尖端部を欠損しているものの2種類である。後者は器壁の厚さや全体の形状などから尖底尖端部に近接する部分の破片であることが確実で、なおかつ前者の資料とは明らかに別個体由来すると思われるものである。具体的には第101図を参照のこと。

今回採集した資料点数の内訳を種類別に示すと、沈線文系土器が約150点、無文系土器が約220点、押型文系土器が4点、底部資料が23点である。以上のように、量的には無文系のものが最も高い頻度で発見されたが、その大部分は胴部破片である。

第93図は、今回発見した縄文土器の平面分布を種類別にして示したものである。原則として1つのドットが土器片1点を表わすが、ごく狭い範囲から多量の土器片が集中して出土した場合は、出土量の大小にかかわらず、1つのドットで表わした。したがって、第93図は出土した個々の土器片の分布状況をかならずしもよく代表していないが、土器片は調査区域全体に均質な分布をしないこと、巨視的にはG5～H5グリッド、C11～F18グリッド、F22～F28グリッドの3ヶ所を中心とする範囲に集中して分布する傾向があること、などが読みとれる。

つぎに土器の種類別に、その平面分布を検討してみると、沈線文系土器片と無文系土器片の分布状態はいずれも縄文土器全体の分布状態と相対的に類似する傾向にある。しかし、押型文土器片はF22～F28グリッドを中心とする比較的狭い範囲から発見されており、それ以外の場所からは1点の資料が得られたにとどまった。このような分布の偏りは調査区域内から出土した押型文土器片の絶対量がきわめて少ないためか、押型文土器片の集中箇所が調査区域外に存在するために生じたものと思われる。また、底部資料は、調査区域の南東部に位置する10号跡周辺で多く発見される傾向にある。

今回採集した土器破片どうしの接合状態はあまり良好ではない。接合資料の平面分布図(第93



第93図 縄文土器出土分布図

図)をみると、接合する頻度が相対的に最も高いのは、資料間距離が3m以内の資料どうしで、同一個体由来する破片の分散状態は比較的狭い範囲にとどまっている可能性がある。なお、接合資料間距離で最長のものは約55mで、押型文土器の破片である。

出土資料の垂直分布は、採集した資料全体の約75～80%前後が、標高約51.2～51.5mの範囲に集中している。これは、層準的には第II層中部に相当する。このうち、最も出土地点の標高が低かったものは、押型文土器片で約50.8mである。

(2) 縄文土器の分類

第I群土器

本群は沈線文系土器群である。いずれも平縁で、文様は棒状工具の先端を用いて描いた平行沈線を基本とする。この群は、以下のような特徴によって第1類～第9類に分類できる。

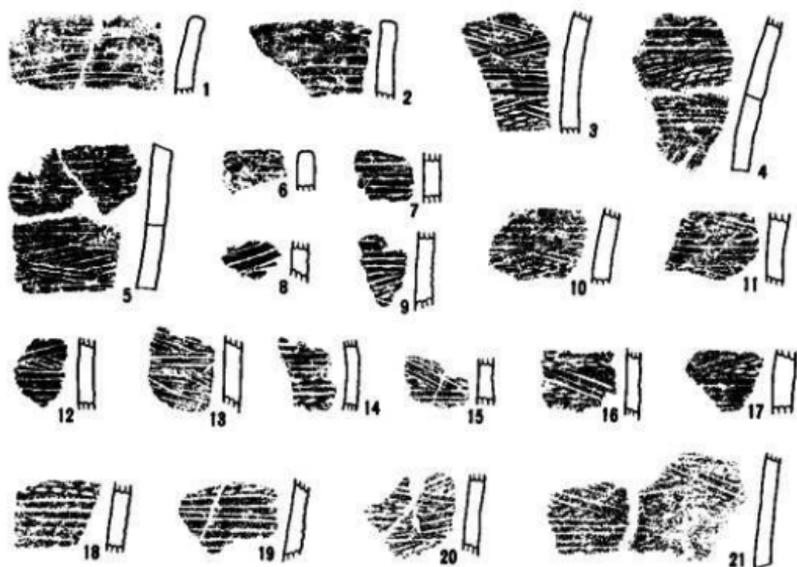
- a. 沈線の幅が細く、精緻な印象をうけるものが多い。
- b. 横位平行沈線が盛行し、それに区画された文様帯がある。
 - c. 文様帯に方向の異なる斜行沈線が充填される。……………第1類
 - c'. 幅の異なる2種類の文様帯があり、斜行沈線を組合せた菱形文と押圧文もしくは刺突文が描かれる。……………第2類
 - c". 文様帯には短い一定方向の斜行平行沈線が施される。……………第3類
 - b'. 斜行沈線が交錯して斜交格子目文をつくる。……………第4類
- a'. 沈線幅は太く、文様効果としては相対的に粗雑な印象をうける。
- d. 沈線は口縁に対して斜行する。……………第5類
- d'. 沈線は水平に重ねられる。
 - e. 沈線は明瞭で口唇上端面にV字状スリットが刻まれる。……………第6類
 - e'. 沈線は明瞭だが、口唇部は刻まれない。各沈線の平行性はルーズで、安定感に欠ける。……………第7類
 - e". 沈線は弱く不明瞭だが、平行性は比較的厳格に守られる。……………第8類
- a". その他……………第9類

第1類土器 (第94図1～21, 図版44)

本類に属す土器片点数は34点である。胎土には直径約0.2～0.3mm前後の白色不透明砂を多く含む。器面調整は内面のナデが外面よりもまさっている。色調は外面が淡い茶褐色で、内面は黒味を帯びた暗褐色ないし茶褐色を呈す。厚さは口縁部で7.5mm前後、胴部で8～9mmである。焼成はあまく、器面調整の不十分な外面は砂粒が剝離しやすい。外面に棒状工具による沈線文が施されるが、文様はやや不鮮明である。

1A 沈線の施された口縁部(1, 2, 6)

(1, 2)は、幅1.5～2mm前後の沈線が口縁と平行に約5～3mm間隔で重層される。(6)も同



第94図 縄文土器第I群第1類



様な資料であるが、口縁から数えて3条目の沈線の下位に刺突様の痕跡がみられる。口唇断面はいずれも上端の平らな角形を示す。

1B 横位の文様帯に菱形文が充填される(5, 12, 13)。

(5, 12, 13)は同一個体である。幅約4.6cmの横位の文様帯に右上りと左下りの斜行平行沈線を組合わせた菱形文が充填される。横位の平行沈線帯幅は少なくとも4.4cmある(5)。

1C 文様帯に斜行平行沈線と刺突文がある(3~4, 9~11, 15~17, 20~21)。

右上りもしくは左下りの平行沈線間に棒状工具の先端部を粘土面に対してななめに突いた刺突文列がある。刺突文の多くは2列であるが、2列と4列の刺突文が同時に施されるものがある(3)。なお、斜行する平行沈線が、1Bのような菱形文の一部分であるかどうか明らかでない。

1D 横位の平行沈線間に刺突文がある(14, 18~19)。

(18~19)の刺突文は少なくとも2列以上であるが、(14)は明らかな文様帯がみとめられず、横位の刺突文は1列である。

以上のA~D種は、焼成、胎土、色調、器厚などがいずれも互いに酷似している。D種は既述した本類の特徴を十分にそなえていないが、上記のような特徴がA~C種とよく一致するので一応本類に含めた。

第2類土器 (第95図1~30, 35 図版44, 45)

本類に属す土器片点数は68点である。

2A 横位の文様帯に押圧文と菱形文が施される(1~10, 12)。

本種は(5)のをぞくと、すべて同一個体由来する。胎土は緻密で、直径約1.5~2mm前後の白色不透明砂を含む。土器全体の砂粒の混入度は一様でなく、上半部に比して底部に近い部分(9, 10)が、砂粒の混入度が高い傾向にある。器面調整は、内面外面ともていねいなナデが行なわれる。色調は外面が暗褐色、内面が淡い暗褐色を呈す。器厚は口縁部、胴部とも7~8.5mm前後である。焼成は良好で、硬質であるが、(10)はややもろく表面にザラつきがある。

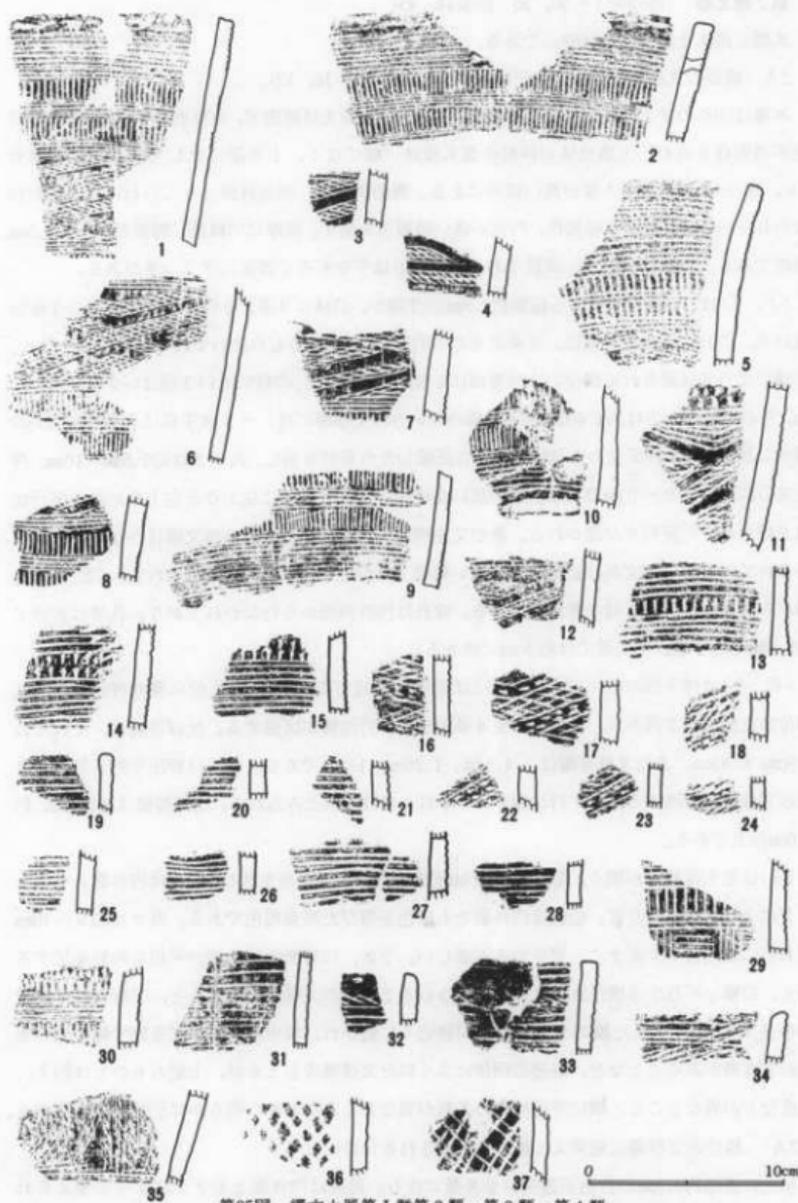
(1, 2)は、口縁と平行する線幅約1.5mmの沈線が、口縁に9条、その下位に4条ずつ3帯施される。これらの沈線帯幅は、9条のものが約2.8cm、4条のものはいずれも約0.85cmを計る。沈線によって区画される横位の文様帯幅にも規則性があり、口縁に近い2段はいずれも約1.25cm、その下位のものは約4.4cmである。幅の狭い方の文様帯には、ヘラ状工具による押圧文列が簾状に施される。押圧文の1単位は上下に圧縮した台形状を呈し、大きさは約1.5mm×10mm、押圧文の間隔は約2~3mmである。幅の広い文様帯には、無文地に左上りと右上りの斜行平行沈線を組合わせた菱形文が描かれる。菱形文を構成する斜行平行沈線の施文順はかならずしも統一されていない。施文具は細身で腰の強い棒状工具が用いられたものと思われる。(2)には口縁から約2cm下位に1対の補修孔がある。穿孔は内外両面から行なわれており、孔径は表面で約9.5mmであるが、中央部では約5mmに狭まる。

(6, 9)は体下部の破片である。(6)は菱形文を施した文様帯の下位に簾状押圧文を施す横位の文様帯が2段あり、その上下を4条の横位平行沈線が区画する。沈線帯幅は、それぞれ0.8cm, 0.85cm, また文様帯幅は、4.5cm, 1.28cm, 1.2cmである。(9)は押圧文列を施した2段の文様帯を区画する横位平行沈線が、4条および11条以上みられる。沈線帯幅は約0.8cm, 約2.6cm以上である。

(5)は胎土の粒子が粗く、直径1.5~2mm前後の白濁半透明砂を含む。器面は内外面とも粗いナデによって調整される。色調は内外面とも灰色を帯びた淡黄褐色である。厚さは約9~10mmである。焼成はややあまく、ザラつきが著しい。なお、口唇断面は上端の平坦な角形を呈すること、口縁と平行する横位沈線によって区画される2種類の文様帯があること、文様帯には簾状の押圧文列が施された幅の狭いものが口縁近くに置かれ、体中部に菱形文を施す幅の広い無地の文様帯があることなど、既述の個体によく似た文様構成をとるが、上記のものとは胎土、焼成などが異なること、横位平行沈線の条数が異なることなどから明らかに別個体由来する。

2A' 横位の文様帯に刺突文と菱形文が施される(11)。

胎土に直径約0.3mmの白色不透明砂を多量を含む。器面は内外面ともナデによって整えられる。焼土は良、色調は外面が淡い暗茶褐色、内面は淡い焦茶色、厚みは8~9mmを計る。3条



第95圖 繩文土器第I群第2類・第3類・第4類

の平行沈線に区画された文様帯にヘラ状工具の角面を粘土面に対して斜めに刺突する。刺突文の輪郭は鋭く、施文に用いたヘラ状工具の切断面もかなり鋭利だったものと思われる。刺突文列は少なくとも2段以上、刺突間隔は約6～7mmである。菱形文は、左上りと右上りの斜行平行沈線の組み合わせによって無文地から浮き上がる。この斜行平行沈線の施文順には画一性がないのはA種と同様であるが、筆跡はやや粗雑である。なお、3条の沈線文帯幅は約0.9cm、刺突文列のある文様帯幅は少くとも1.4cm以上である。

2A” 横位の文様帯に押圧文が施される(13)。

胎土に直径1mm前後の白色不透明砂と直径約1.5mm前後の白濁半透明砂を多量に含む。器面は内外面ともていねいな横位のナデによって整えられる。焼成は良好で、硬質である。色調は外面が淡い黄褐色、内面は黒味を帯びた淡黄褐色を呈す。厚さは約9～10mmを計る。文様は横位の平行沈線を5条以上と6条以上重ね、幅約0.9cmの横位文様帯を区間する。沈線幅は約2mmで、2A種、2A'種のものに比して幅広であるが、深さは浅く、ていねいに引かれる。文様帯には薄いヘラ状工具を粘土面に対してほぼ直角に押しつけた押圧文が施される。押圧文の1単位は約2mm×7mmの短冊形で、約5mm間隔に押圧される。

2B 横位の文様帯に刺突文と斜行沈線交錯文がある(14～28)。

(14～28)はいずれも同一個体由来する。胎土は直径約0.4mmの白色不透明砂を多量に含む。器面は内外面ともていねいなナデによって整えられる。焼成は良好、硬質で重量感がある。色調は淡い暗褐色で、外面よりも内面の方が黒味を帯びる。厚みは8.5～9.5mm前後である。

(19)は口縁で口唇断面は上端の平坦な角形を呈す。棒状工具で描かれた沈線が口縁と平行に7条以上重ねられる。沈線幅は約2mmであるが、不明瞭で弱い。

(14～15)は、横位の平行沈線に区画された幅約1.2cmの文様帯に垂直方向の刺突文がある。刺突文は約6mmの間隔で上下に2段施されている。刺突は、粘土面に対して斜めに行なわれているが、刺突文の1単位は楔形を呈す。

(16～18、22～24)は、左上りと右上りの斜行平行沈線による交錯文を地文とする平行沈線文間に2列の刺突文を施す。刺突は楔形で、刺突列の方向はそれをささむ平行沈線の走行に平行する。

2C 平行沈線と2段の押圧文がある(30)。

胎土は粉っぽいのが、内外両面ともよく調整され、やや硬質である。色調は外面が暗褐色、内面は黄土色を呈す。厚みは9mm前後を計る。5条の横位の平行沈線がある。沈線幅は約1～1.5mmで、沈線帯幅は約1.4cmである。この上下の文様帯には、縦位2段以上の押圧文が約3～4mm間隔で施される。施文工具は、幅が約7cm程度のヘラ状工具の先端部を3ヶ所刻んだもので、これを粘土面に対して斜めに押しつけたものと推定される。

2D 横位と縦位の平行沈線がある(29)。

胎土に直径1mm前後の白濁半透明砂を多量に含む。器面は、内面外面ともていねいなナデによって調整される。焼成は良好で硬質、軽量感がある。厚みは約7mmを計る。文様は横位と縦位の平行沈線文のみでえがかれる。施文順は、まず横位の平行沈線文をえがいて横位の文様帯を区画し、つぎに、この文様帯内文様を充填する。文様帯幅は約1.2cmと1.5cm以上の2種類であるが、前者の文様帯には縦位の短い沈線文を約4.5mm間隔に描き、蕪状文と同様の文様効果を作る。後者の文様帯には縦位の沈線文によって左右を区画した面に横位4条以上の沈線を施す。以上のように本種は、A～C種で刺突もしくは押圧によって施される文様が、棒状工具による沈線文に置換されており、A～C種とは性質を異にする。

2E 平行沈線が重層されるもの(31)。

胎土に直径約0.2～0.3mmの白色不透明砂を多量に含む。器面は内面、外面ともナデによる調整が行なわれる。焼成は良好だが、器面に若干のザラつきがある。色調は、外面が淡い暗茶褐色、内面は焦茶色を呈す。厚さは約6mmを計る。文様は、横位の平行沈線が10条以上重ねられる。沈線幅は約1.5mm、沈線間隔は約5～6mm前後でラフにえがかれる。

2F 横位沈線に区画された文様帯に縦位と斜位の沈線がある(35)。

胎土に直径4mm前後の白色不透明砂を多く含む。器面は、内外面ともていねいなナデによって調整される。内面のナデ方向は縦位である。焼成は良好で、硬質である。色調は内外面とも暗茶褐色を呈し、厚さは6～7mmを計る。底部に近い体下部に由来する資料である。文様は、棒状工具でえがいた横位平行沈線によって文様帯を区画したのち、無地の地文を残して縦位と斜位の平行沈線を約2～3mm間隔にひく。この沈線間を沈線に対して左上りの短線が約3mm間隔で横切る。

以上のようにE種とF種を第2類とするにはかならずしも十分な条件をそなえていないが、文様に関するかぎりでは、後述の第3類以下のどのグループよりも本類に最も多くの共通点をもつので、一応このグループに編入した。

第3類土器 (第95図32～34 図版45)

本類の土器片は第95図(32～34)に示した3点のみである。胎土に細砂粒と直径約0.5mm前後の白色不透明砂を含み、器面は内外面ともナデによって調整されるが、焼成はややあまく表面は粉っぽい。(33, 34)は、内面調整の方が外面よりもまざる。

(32)は口縁と平行する横位沈線が4～5mm間隔でえがかれ、口縁部には2～3mm間隔で右上りと左上りの短い斜行沈線がある。色調は内外面とも明るい橙褐色を呈す。厚みは約6mmで、口唇断面は外ソギ気味である。

(33)は、横位の平行沈線が4mm前後の間隔でえがかれる。上端部から数えて4条目と5条目の沈線間はやや広くその間に右上りと左上りの短い平行沈線の交錯文がくり返される。左上り

の沈線が右上りの沈線を切る。色調は外面が黒味をおびた淡黄褐色、内面は暗茶褐色を呈す。厚みは約7mmを計る。口縁部破片のようにも見えるが、粘土の接合面から破損した胴部資料であろう。

(34)は、口縁と平行する3～4mm間隔の横位沈線を下部の無文帯からのびた右上り4条以上の斜行平行沈線が横切る。斜行沈線は棒状工具によって左下から右上へひかれており、一気にかかれたように見えるが、無文帯と横位の平行沈線帯の境界で、施文具の走行角度が微妙に異なる。また、無文帯を横切る左端の沈線は、横位の平行沈線帯との境界付近でとめられており、平行沈線帯を横切らない。色調は外面が暗褐色、内面は淡い茶褐色を呈す。厚みは約8.5mmを計る。口唇断面は、いくぶん内ソギになる。

第4類土器 (第95図36～37 図版45)

本類は第95図(36～37)に示した2点のみである。文様は、右上りと左上りの斜行平行沈線を交錯した格子目文が施される。

(36)の文様は太く力強い沈線がえがかれているが、(37)の沈線は繊細で筆圧も弱い。胎土には、直径0.1mm前後の白色不透明砂と白濁色半透明砂を多く含む。器面調整は、外面よりも内面が秀れ、縦位のていねいなナデが施される。焼成は良好で、硬質である。(36)も内面調整が外面よりもはるかに秀れ、縦位のていねいなナデが施される。

第5類土器 (第96図1, 図版45)

本類は第96図(1)に示す口縁部資料1点である。

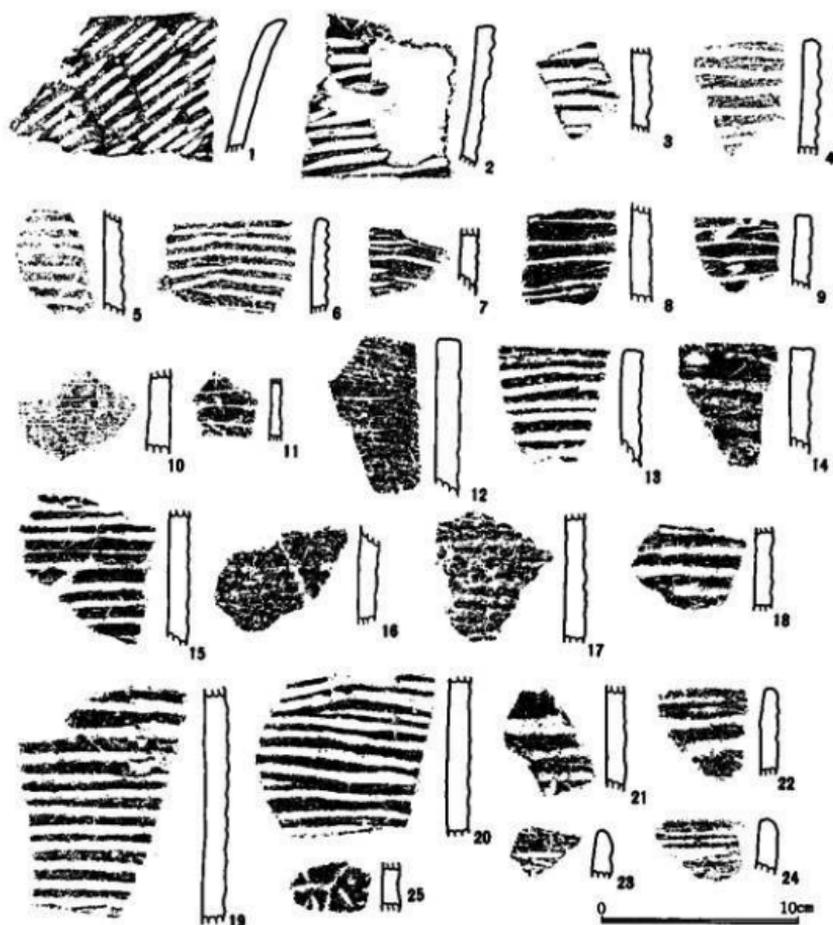
胎土に直径約0.2～0.3mm前後の白色不透明砂を多く含む。器面は、内面外面ともに横位のナデで調整される。焼成はややあまく、器面は粉っぽい。内外面に直径4～8mm前後のスポット状の剥離がある。色調は、外面が黒味を帯びた黄褐色、内面は淡い黄褐色を呈す。厚みは約10mmである。文様は、幅約5mm、長さ3cm前後の右上りの短かい斜行沈線文が施される。各沈線間隔は約8mmである。各沈線列は、沈線長軸に対して縦位よりも横位に整っており、沈線の施文は横方向に行なわれたものと推定される。線底は浅く、砂粒が線軸と平行に移動する。また、各沈線の両端は丸味を帯び、施文具には弾力性のある植物の茎が用いられた可能性がある。口唇断面は内ソギとなる。

第6類土器 (第96図2～3 図版45)

本類に属する土器片は2点である。

胎土は緻密で、直径0.3～0.6mm前後の白色不透明砂、直径1～2mm前後の白濁色半透明砂を多量に含む。器面は内面外面ともていねいなナデで調整される。ナデの方向は内面口縁部が右方向横位、外面は左方向横位のナデのち文様が施される。

(2)は外表面の半分以上が剥離しているが、焼成は良好で、硬質である。色調は内面が淡い黄褐色、外面も同系色であるがやや黒味を帯びる。厚さは約8mmである。文様は、口縁と平行す



第96図 縄文土器第1群第5類・第6類・第7類・第8類・第9類

る横位沈線を力強く重層するが、各沈線は口縁から離れるほど右上り気味で、口縁との平行関係がルーズになる。沈線幅は約5mmと太く、各線底には左方向の砂粒移動痕がある。口唇断面は上端が平坦な角形で、平坦な口唇上端面に山形のスリットが浅く刻まれる。

なお(3)は、(2)と同一個体由来する胴部破片である。

第7類土器 (第96図4～11 図版46)

本類に属す土器片は11点である。

7A 太く明瞭な横位沈線が重層される(4～5)。

胎土に直径0.3~0.4mm前後の白色不透明砂が多量に含まれる。器面は内面がていねいなナデによって調整されるが、外面の調整は粗雑で、(4)の外面には左方向への砂粒移動痕が顕著である。厚さは約9.5mm程度だが、焼成は良好で硬質なもの(4)と、あまく外表面がザラつき摩耗するもの(5)とがある。文様は、幅3.5~4mm程度の横位沈線が6~8mm間隔で重ねられるが、各沈線の走行はスピード感に欠け、フラつきがみられる。(5)の沈線底には左方向の砂粒移動痕がある。

(5)は口縁部資料で口唇断面は角形である。

7A'太く明瞭な横位沈線が重ねられるが、沈線の連続性は悪い(6~7)。

(6)は口縁部資料で、口唇断面は外ソギ気味の角形である。胎土には、直径約2mm前後の白濁色半透明砂と直径0.4mm前後の白色不透明砂を多量に含む。器面は多少ザラつきが、内面は外面よりもていねいに調整される。色調は暗茶褐色を呈し、厚みは9~10mmである。文様は、棒状工具でえがかれた線幅約5mmの横位沈線を口縁と平行に重ねたものだが、口縁から離れるものほど口縁との平行性がルーズになる。沈線底には左方向への砂粒移動痕がある。

(7)の胎土は(6)と類似するが、器面は内外面ともていねいなナデによって調整されている。焼成は良好で硬質である。色調は灰褐色を呈す。厚さは約8.5mmを計る。文様は、棒状工具でえがかれた横位沈線で線幅は約3mmである。線底には左方向への砂粒移動痕がある。

(6)、(7)とも各横位沈線は直線ではなく、途中で折れ曲りや、くいちがいがみられるので、少なくとも2工程でえがかれていること、各工程のつなぎはあまり厳密に守られていないことなどが明らかである。

7B 横位沈線がラフに重ねられている(8~11)。

本種の横位沈線はA種に比して細く不明瞭である。6点の資料が得られた。いずれも胎土に直径約0.2mm前後の白色不透明砂を多く含むが、直径約1.5mmの白濁色半透明砂を含み焼成が良好なもの(8~9)と、細砂粒を多量に含む焼成があまりよい(10~11)とがある。

(9)は口縁資料で、口唇断面は角形である。表面は、内外面とも左向き横位のナデによって調整されるが、外面よりも内面の調整がていねいで、口唇平坦部にもていねいなナデが施される。焼成は良好で、色調は暗褐色を呈し、内面がいくぶん明るい。厚さは約8.5~9mmである。文様は、口縁と平行な横位沈線を7~9mm間隔で重ねる。幅約2.5mmの各沈線はA種と同様にフラつきがみられる。また、各沈線は連続性が悪く、途中でくいちがいを生じている。なお、沈線底には左方向の砂粒移動痕がある。

(8)は内面が縦位のていねいなナデ、外面は左下り斜位のナデで調整されており、内面調整が外面よりも秀れる。色調は暗褐色を呈し、多少粉っぽい。文様は横位沈線を約7~11mm間隔で重ねたものだが、沈線の走行にフラつきや、くいちがいがみられる。沈線底には左方向への砂粒移動痕がある。

(10~11)は横位沈線幅が約1.5mmと細く浅いので、第7類とは別類としてもよい資料である。しかし、沈線間隔は一定せず、沈線走行がフラつくもの(10)や、沈線の平行性が保たれず沈線どおしが合流する(11)などの散漫的な印象から、今回は一応本類に含めた。

第8類土器 (第96図12~24 図版46)

本類に属する土器片は26点である。

8A 器面に砂粒の移動痕がある。(12~21)。

胎土に直径10cm前後の白濁色半透明砂を多量に含み、沈線輪郭の不明瞭なもの(12~14, 16~19, 21)と、胎土の粒子が相対的に細かく、沈線輪郭が比較的明瞭なもの(15, 20)とがある。器面は内面がていねいなナデによって調整されるが、外面はやや粗い横位ナデが施され、左方向への砂粒移動痕が顕著である。

(12~14)は口縁資料で、口唇断面は角形である。焼成は良く、硬質である。色調は淡褐色で、外面は黒味を帯びる。文様は口縁に平行な横位沈線を約1cm間隔で重ねるが、沈線幅は約5~6mmで広い。沈線底に左方向への砂粒移動痕がある。

(16~18, 21)は胎土、器面調整、焼成、色調、厚みなどが互いに類似しており、同一個体である可能性が高い。いずれも幅5~6mmの横位沈線が重なる。なお、(12~14, 16~18, 21)の外表面は、後述の無文系第3類によく似る。

(19)も幅約5~6mmの太い横位沈線が、(16~18, 21)よりも整然と重なるが、器面調整は内外面とも入念さに欠ける。焼成はややあまく粉っぽい。色調は淡黄褐色を呈す。

(15)と(20)は同一個体に由来する。胎土に直径約0.5mmの白色不透明砂を多く含み、スコリア粒が混入する。器面は内外面ともナデで調整されるが、全体に粉っぽい。色調は外面が黒味を帯びた淡黄褐色、内面が淡い暗茶褐色を呈し、直径5~10mm前後のスポット状の剥離がある。文様は幅約4~5mmの浅い横位沈線である。(15)は沈線が整然と重層されるが、(20)には途中で消滅したり、屈曲する沈線があつてやや粗雑な重層沈線となる。器面外面と沈線底には同方向横位の砂粒移動痕がある。口縁資料が発見されていないので、砂粒の向きが左右いずれかを決めかねるが、左方向に移動する可能性が高い。

8B 器面に砂粒移動痕がない(22~24)。

本種には図示した3点の資料が属するが、いずれも口縁である。口唇断面は(22)が角形、(23~24)は外ソギ気味である。胎土に直径0.3mm前後の白色不透明砂を多く混じえる。器面は内外面とも同程度のていねいなナデが施され、焼成は良好で、硬質である。色調はいずれも暗褐色を呈し、厚さは約9~10mmである。文様は、口縁と平行する横位沈線が重ねられる。沈線幅は約7~8mmである。なお、本類の沈線は、弾力性のある棒状工具によって施文されたものと推定される。

第9類土器 (第96図25)

本類は直径1mm前後の白色不透明砂を多量に含む。内外面とも表面がほとんど剥離しており、

器面調整は観察しにくい。厚みは約9mmである。文様は、1本の横位沈線と八字状の沈線文が横位に並ぶ。

第II群土器

本群は無文系土器群である。1点の例外を除くといずれも平縁で、文様はまったくみられないので、口唇断面の形状と器面調整の特徴によって以下に示す第1類～第5類に分類した。

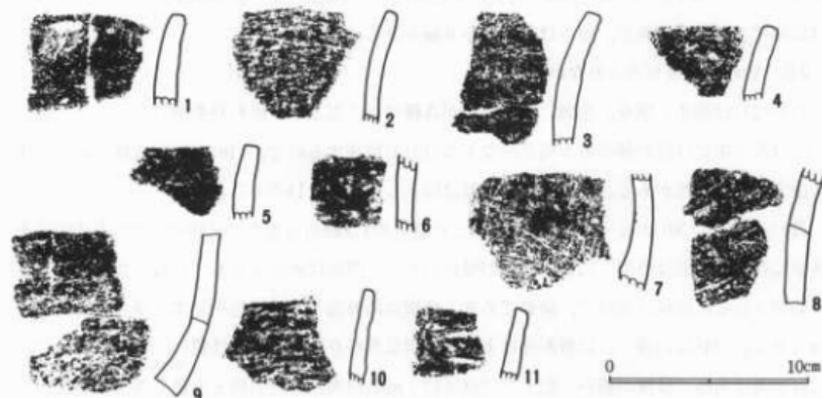
- a. 口縁は平縁である。
- b. 外面は平滑である。
- c. 外面の器面調整が内面より秀れる。……………第1類
- c'. 器面調整は外面より内面の方が良好か内外面の調整が同程度である。
- d. 口唇断面は上端の平坦な角形を呈す。……………第2類
- d'. 口唇断面は丸形か尖形を呈す。……………第3類
- b'. 外面にはヘラ状工具による横位のナデ痕がある。……………第4類
- a'. 口縁資料を伴わない一括資料。……………第5類
- a". 口縁は波状になる。……………第6類

第1類土器 (第97図1～11 図版47)

本類に属す土器片数は11点である。

1A 口唇断面は角形で、口縁はゆるく外反する(1～9)。

胎土に直径約0.8mmの白色不透明砂を多く含む。外面には左方向への砂粒移動痕がある。器面調整は内面よりも外面の方が秀れており、外面にみがかき様の光沢がみられる。焼成は良好で、硬質である。色調は暗茶褐色を呈し、内面は黒味が強い。厚さは8～9mm前後である(1～5)。



第97図 縄文土器第II群第1類

(6~9)は胎土、器面調整、色調が(1~5)と類似しており、(1~5)と同一個体に由来する可能性が高い。なお、(6~9)の外面にはみがき様の光沢はない。厚みは約10mmを計るが、底部付近の資料(9)では約13~14mmである。

1B 口縁は直線状にのびる(10~11)。

本種は図示した2点のみである。

胎土に細砂粒が多く含まれる。外面は横位のナデによって内面よりもていねいに仕上げられているが粉っぽい。口唇断面は角形で、厚みは約6mmと薄い。色調は淡黄褐色を呈し、内面は黒味を帯びた淡褐色である。

第2類土器 (第98図1~31 図版47, 48)

本類には78点の土器片が含まれる。

2A 外面の砂粒移動痕が顕著である。(1~17)。

(1~10)は同一個体に由来する。胎土は緻密で、直径約1.7mmの白濁色半透明砂を多く含み、スコリア粒を混じえる。器面は内外面ともていねいな調整が行なわれており、とくに内面と口唇上端の平坦面の調整が秀れる。また外面には左方向横位の砂粒移動痕が顕著である。焼成は良好で、硬質である。色調は外面が暗褐色、内面は明るい淡茶褐色を呈す。厚みは9~10mm前後である。(1~4)は口縁部で口唇断面は角形となる。

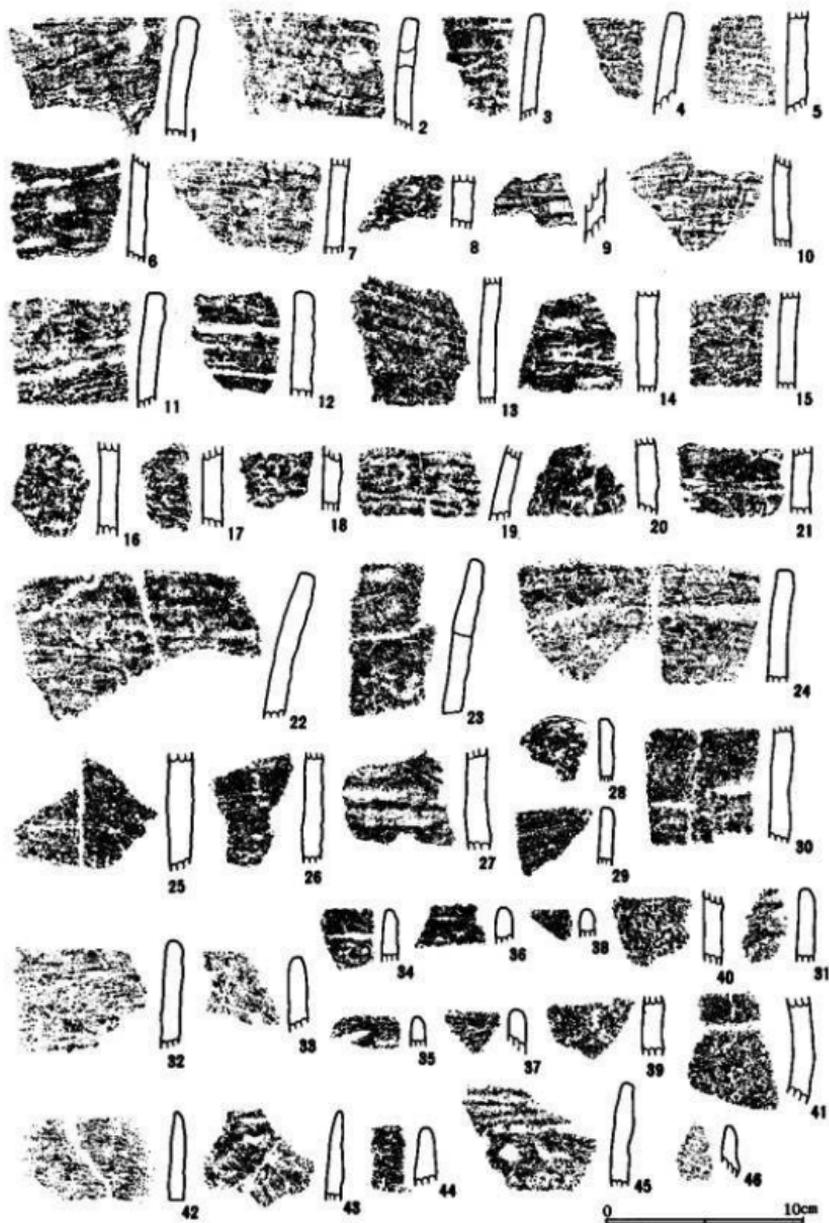
(2)は口縁から約2cm下に補修孔が1つある。穿孔は内外両面から行なわれる。孔径は土器表面で最も大きく約1cmを計り、中央部で最も小さく約6mmを計る。

(11~17)は、胎土に直径約1.5mmの白色不透明砂を多量に含む。(11)と(15)は同一個体である。外面は、左方向横位の砂粒移動痕が顕著である。調整が不十分でザラつきが著しいが、内面はていねいに調整される。色調は、外面が茶色味をおびた淡褐色、内面は黒味をおびる。(11~12)は口縁で口唇断面は角形。厚さは、約7~9mmを計る。

2B 砂粒移動痕がみられない(18~31)。

(18~21)は胎土、焼成、色調、厚さなどがA種によく似るが、砂粒移動痕はない。しかし、(1~17)の中には砂粒移動痕が局部的なもの(13)も存在するので、(18~21)もA種と同一個体に由来する可能性がある。このような資料は図示した以外に14点ある。

(24~25, 27, 30)は同一個体である。胎土に直径約1.2mmの白濁色半透明砂、白色不透明砂を多量に含む。器面は外面と口唇平坦面が横位のナデ、内面は外面よりもていねいなナデによって調整される。焼成は良好で、硬質である。色調は内外面とも暗褐色を呈す。厚さは約10~11mmである。(24)は口縁で、口唇断面は上端が平坦な角形を呈し、稜線は鋭い。(22)も口縁で、口唇断面は角形で稜線が鋭い。胎土には直径約1mmの白濁色半透明砂と白色不透明砂を含む。外面と口唇平坦面は横位のナデによって調整されるが、内面調整はとくに入念で、なめらかである。焼成は良好、硬質である。色調は内面が明るい黄褐色、外面はいくぶん黒味をおびる。



第98図 縄文土器第Ⅱ群第2類・第3類

厚さは約8mmである。

(23, 28, 29, 31)も口縁部で、口唇断面は角形であるが、稜線はいくぶん丸味を帯びる。いずれも内外面が横位のナデで調整されるが、(28)の外面には指頭によるものと推定される調整痕がある。

第3類土器 (第98図32~46 図版49)

本類に属す土器片は34点である。

3A 口唇断面は丸形である(32~41)。

(32~38)は口縁資料で、口唇断面は逆U字形を呈す。

(33, 35~36, 38, 40~41)は同一個体に由来する。胎土に直径約0.4mm前後の白色不透明砂を多量に含む。器面はナデによって調整されるが、外面よりも内面調整が秀れる。焼成はややあまく、砂粒が容易に脱落する。色調は、淡い暗褐色を呈す。厚さは口縁部が約9~10mm、胴部が約11mm前後である。器形は不明だが、底部付近で丸く弯曲するものと推定される(41)。

(32, 34, 37)も同一個体である。直径約0.3mmの白色不透明砂を多く含む。内面調整が外面よりも秀れており、外面には横位のナデ痕がある。焼成は良好で、硬質である。

3B 口唇断面は尖形になる(42~46)。

本類には7点の土器片が属す。いずれも口縁部破片である。(42~43)は別個体であるが、いずれも口唇部が指先きでつまんだように尖る。

(42)は、直径約0.2mmの白色不透明砂を多く含み、外面は横位のナデ痕があるが、内面の調整の方が秀れる。焼成はややあまく、表面はザラつく、色調は淡黄褐色を呈す。

(43)は胎土が緻密で、内面調整が秀れる。外面には斜位の擦痕がみられる。焼成は良好で、硬質である。

(44~45)の口唇断面は、(42~43)ほど顕著な尖形にならない。とくに(44)、は胎土、焼成、色調などの点で(33, 35~36, 38, 40~41)に類似しており、同一個体の可能性がある。

第4類土器 (第99図1~23 図版49, 50)

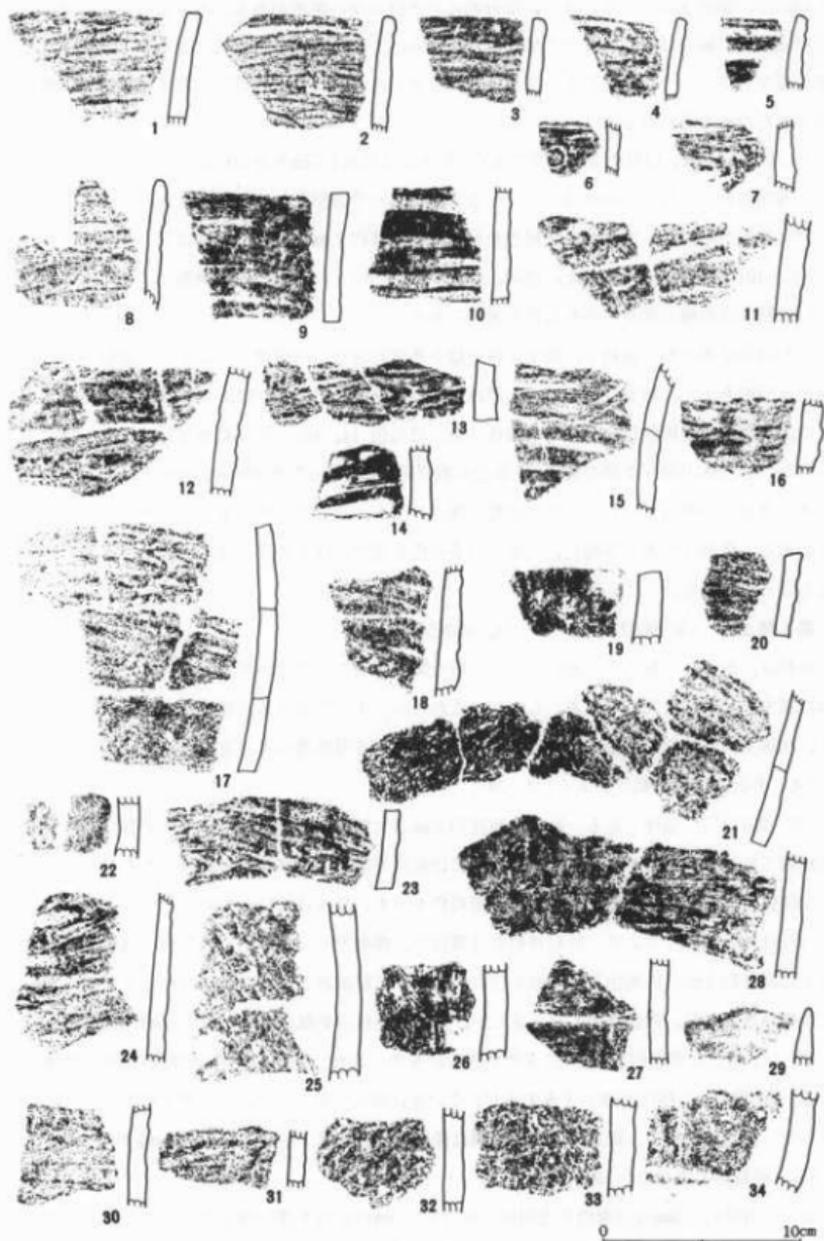
本類に属す土器片は21点である。

4A 外面に幅の狭いヘラ状工具によるナデ痕がある(1~7)。

胎土に直径約0.3mmの白色不透明砂を多く含む。口唇部を除く外面全体に幅約5~6mmのヘラ状工具による横位のナデ痕がみられる。ナデ痕のない口唇部はいくぶん厚みをます。口唇部の厚みは約7mmである。内面はいいないなナデによって調整される。焼成は良好で、硬質である。口唇断面は基本的には角形だが、上端が平坦で稜線の明らかな角形のもの(1, 3~4)、稜線が丸味を帯びた角形のもの(2)、外ソギ気味のもの(5)などがある。

4B 外面に幅広のヘラ状工具によるナデ痕がある(8~23)。

本種の外面全体にヘラ状工具による横位のナデ痕がある。ナデ痕幅は1cm前後で、A種より



第99圖 縄文土器第Ⅱ群第4類・第5類・第6類

も幅広く、繊細さに欠ける。また、部分的にナデ痕のない箇所がある。とくに(17)の下部は、平坦で、広い範囲にわたってナデ痕をみとめない。これは、ヘラ状工具によるナデが体下部まで及ばないか、ヘラ状工具によって外面全体をナデたのちに体下部だけに別工程の器面調整が施されたためと思われる。

(8)は口縁部で、口唇断面は丸型である。胎土に直径約1.5mm前後の白濁色半透明砂を多く含む、器面内面と口唇部上端面はていねいなナデによって調整される。焼成は良好で硬質である。色調は外面が暗褐色、内面が淡黄褐色を呈す。厚みは約7mmを計り、口縁は若干厚みをます。

(9～10)は同一個体で、胎土、色調、焼成などが(8)と似るが、内面調整は、相対的に劣る。(9)は粘土帯の接合部から外れた体部破片である。

(12～14)は体下部の資料で、胎土に細砂粒を多量に含む。内面はナデによって調整される。焼成はややあまく、器面は粉っぽい。厚みは11～12mm前後である。(15～16)は約8mmの厚さをもつ。色調は淡黄褐色(12)、淡い暗褐色(13)、暗褐色(14、16)、暗茶褐色(15)、などを呈す。

(17～23)は体中部～下部の資料で、胎土に直径約0.6mmの白色不透明砂、直径1mm前後の砂粒を多く含む。内面はていねいなナデ調整が施されるが、焼成はややあまく、内外面ともザラつきがある。色調は外面が茶褐色、内面は暗茶褐色を呈す。体下部は、底部付近でゆるく弯曲するものと思われる。

第5類土器 (第99図24～28, 30～34, 図版50)

本類は、既述した無文系土器口縁部との接合関係が明らかでない無文の体部破片である。本類に属す土器片類は70点である。しかし、これらが、すべて無文系土器に由来するとはかぎらず、沈線文系土器や、押型文土器の無文部分に由来する可能性はすてきれない。

5A 外面に砂粒移動痕がある(24～28)。

(25～26)は同一個体である。胎土に直径約2mmの大粒の白濁色半透明砂を多く含む。内面は比較的ていねいな調整が施されるが、外面には斜位方向の砂粒移動痕が顕著である。焼成は良好で硬質である。色調は赤褐色をおびた暗褐色を呈す。厚みは約11mmを計る。

(28)は体下部破片である。砂粒移動痕は横位で、移動方向は左方向と右方向の両者がある。胎土に直径約1mmの白濁色半透明砂を含み、スコリア粒がある。器面はていねいなナデによって調整されており、内面はとくに入念だが、スポット状の剝離がある。厚さは約10mmである。

(27)は、胎土に直径約1.5mmの白濁色半透明砂を多く含む。外面に横位の砂粒移動痕が顕著である。幅約2.5mmの横位沈線が1本あるが、その他は無文であるので、一応無文系土器に含めておいた。焼成は良好で、硬質である。色調は淡い黄褐色を呈す。厚さは約8.5mmを計る。

5B 砂粒移動痕はない(30～34)。

胎土に直径約1.5mmの白濁色半透明砂と直径約0.5mmの白色不透明砂を多量に含むが、器面に砂粒移動痕はみられない。内面はていねいに調整される。

(34)は幅約3mmの浅く不明瞭な横位沈線が1本あるが、沈線文とみとめてよいかどうか判断に迷う。その他は無文である。焼成は良好で硬質だが、多少ザラつく。色調は明るい黄褐色を呈す。

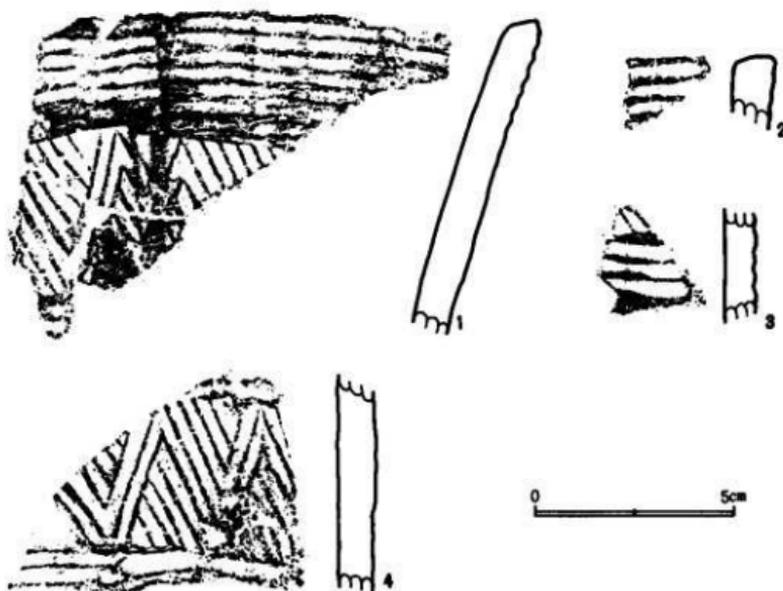
第6類土器 (第99図29)

本類は波状口縁をもつ土器片で、図示した破片資料1点のみが発見された。胎土に砂粒を多く含み、色調は灰色を呈す。器面は、内外面ともいねいに調整されるが、焼成はややあまく、表面にザラつきがある。

第III群土器(第100図1～4 図版51)

本群は押型文土器である。押型文土器は第100図に示す4点(1～4)で、いずれも同一個体由来すると考えられる。

(1～2)は口縁である。口唇断面は内ソギになる。胎土に直径約0.6mmの白色不透明砂を多く含み、直径約2mmの白濁色半透明砂、スコリア粒が混じる。器面は内外面ともいねいなナデによる調整が施され、外面には左方向横位の砂粒移動痕がある。内面は上方向縦位のナデのち、口縁端から幅約4cmの範囲に右方向横位のナデを施す。口唇平坦面にも横位のナデ痕があるが、スリット等の文様はない。焼成は良好で、硬質である。色調は内面が暗褐色を呈し、外



第100図 縄文土器第III群

面は押型文の被圧部が淡い褐色、その他の面は淡いチョコレート色を呈す。厚みは約9.5mmを計る。文様は口縁部に平行線状文を施す。平行線状文は長さ約10.5cm以上、幅約3cmにわたって施されるが、資料の左端から右方へ約1.2cm寄った位置と、そこからさらに右方約2.1cm寄った所で縦ずれがある。これは横に回転する原体の起点と終点の位置ずれによって生じたものと思われる。後者の文様ずれから右方へは約7.2cm以上の長さにわたってずれはみられないが、起点から右方へ約2.4cm→約1.4cm→約1.9cm→の3ヶ所で原体の回転を一時休止したことに起因すると思われる断続痕がある。口縁の平行線状文の下位には幅約3.8cmの文様帯があり、3本の平行線を山形に重ねた基線内に左上りの斜行平行線を充填する。この押型文にも1ヶ所に文様のずれがある。この文様の下位には断片的だが、再び横位の平行線状文が押圧されている。

(3)は、横位の平行線状文と斜行線文の一部が残されている。厚さは約8mmで、(1)よりいくぶん薄い。

(4)は、体下部の資料で、胎土に直径約2～3mmの白濁色半透明砂と直径約0.3mmの白色不透明砂を混入する。器面内面には上方縦位の砂粒移動痕がある。色調は内外面とも淡黄褐色を呈し、厚さは約8.5mmである。文様は山形基線内を左上りの斜行平行線で充填するもので、その上下に平行線状文がみられる。V字状文には文様のずれをみとめないが、下位の平行線状文には、資料左端から右方へ約2.7cm→約1.9cm→の2ヶ所に文様のずれをみとめる。

底部(第101図1～9 図版51)

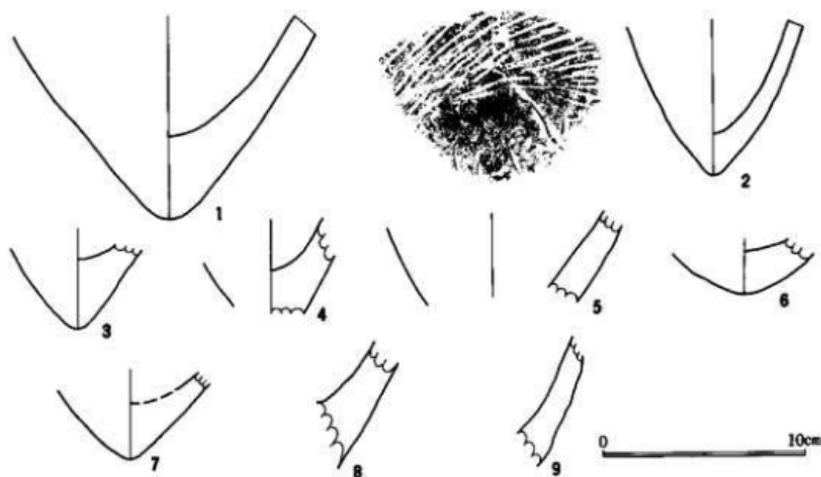
今回発見された底部破片は23点で、少くとも11個体以上に由来することが明らかである。これらはいずれも尖底もしくは丸底で、そのうち第101図には9個体を示した(1～9)。

これらを形態別に分類すると、乳房形を呈するもの(1, 3, 4, 7)、砲弾形を呈するもの(2)、丸底になるもの(6)に分けられるが、(5)、(8)、(9)のように形態の判明しないものも存在する。

(1, 3, 4, 7)は、胎土に直径約1～2mmの白色不透明砂と白濁色半透明砂を多量に含む。内面はていねいに調整されており、ザラつきが著しい(1)を除くといずれも平滑である。外面は(1)が左上り斜位の砂粒移動痕があり、器面のザラつきが著しいが、そのほかはいずれも縦位のナデでていねいに調整されている。焼成は普通で、色調は(1, 7)が内外面とも淡い黄褐色、(3, 4)は外面が茶褐色、内面は黒褐色を呈す。なお(1)の底部先端部から約4.5cmのところには暗茶褐色の付着物痕がある。(7)は内面の剝離が著しい。

(2)は胎土に直径約0.7mm前後の白色不透明砂を含むが、細砂粒の占める割合が高い。内面は縦位ナデによるていねいな調整が施される。外面はナデ調整ののちに幅約2mmの浅い右上りの斜行沈線文が施される。沈線間隔はバラつきが大きく、棒状工具によって施文されたものと考えられる。焼成は良好で、色調は外面が暗い淡褐色、内面は黒褐色を呈す。

(6)は胎土に直径約6mmの白色不透明砂を多量に含む。器面調整は他の底部資料に比すと粗



第101図 縄文土器底部

雑で表面に凹凸があるが、内面は外面よりもいねいに調整される。焼成はあまく、ザラつきが強い。砂粒が容易に剝離する。色調は外面が赤味を帯びた茶褐色、内面が暗褐色を呈す。

(5)は胎土に直径約1mmの白色不透明砂が混入するが、(8)は細砂粒の占める割合が高い。器面は内外面ともナデによる調整が施されており、内面調整がより秀れる。(5)の外面には縦位、左方横位の砂粒移動痕がある。(8～9)には縦位の砂粒移動痕がある。

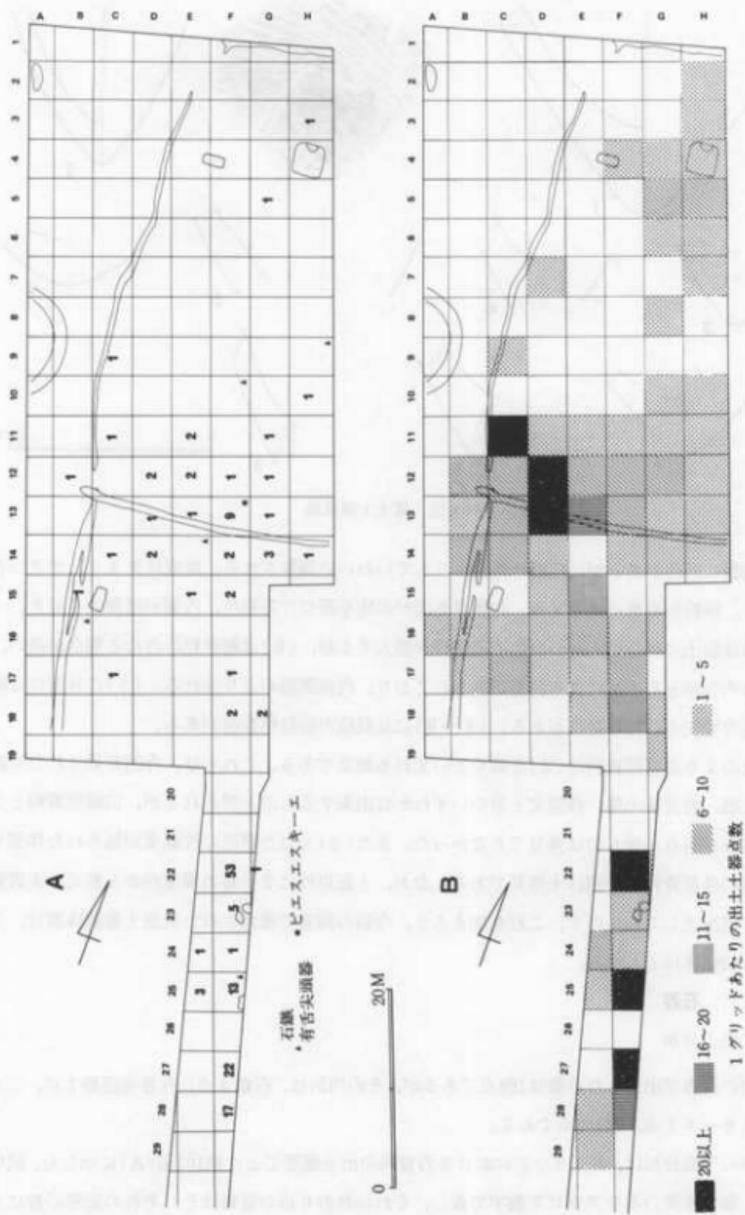
以上のように底部資料は(2)を除くといずれも無文である。これらは、今回発見された沈線文系土器、無文系土器、押型文土器のいずれかに由来するものと思われるが、口縁部資料との接合関係が明らかなのは発見できなかった。また(2)と似た意匠の沈線文が施された体部もしくは口縁部資料も今回は未発見である。なお、上記以外に2号跡の周溝内から無文の尖底資料が1点出土しているので、これを加えると、今回の調査で確認された尖底土器個体数は、少くとも12個体以上となる。

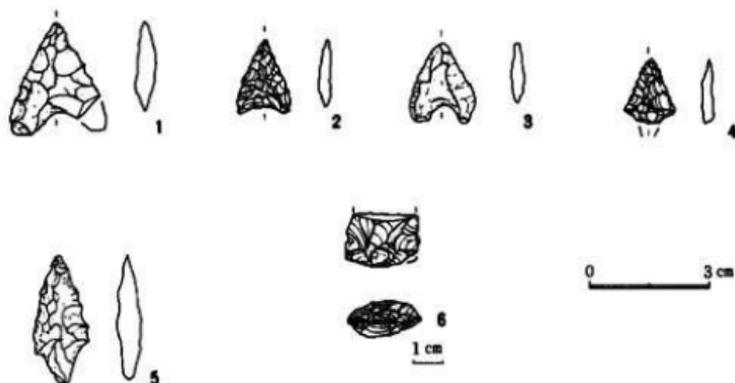
〔2〕 石器

(1) 出土分布

今回の調査で出土した点数は168点であるが、その内訳は、石鏃4点、有舌尖頭器1点、ピエスエスキーエ1点、礫162点である。

資料の平面分布は、各グリッドにおける各資料の出土頻度ごとに第102図(A)に示した。図中には、礫の頻度のみをアラビア数字で表し、それ以外の6点の資料はそれぞれの記号の数によって表した。各資料と記号の関係は図中説明のとおりである。また、実測図と出土地点、主な





第103図 包含層出土の石器(1)

第32表 包含層出土の石器観察表

神図 番号	種 類	出土地点	石 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚 さ (mm)	重 量 (g)	先端角 度(°)	備 考
1	石 鏃	F25グリッド	安山岩	29.2	(24)	4.9	2.4	56	基部欠損
2	石 鏃	E14グリッド	めのう	19.0	13.0	3.2	0.6	50	
3	石 鏃	F10グリッド	安山岩	20.3	16.5	3.3	0.9	55	
4	石 鏃	B16グリッド	頁 岩	現16.8	12.9	3.1	0.5	48	基部欠損
5	有舌尖頭器	H9グリッド	玄武岩	30.3	10.3	5.6	2.2	43	
6	ピエスエスキーエ	G13グリッド	黒曜石	17.4	25.0	12.3	8	—	

計測値等は、第103図、第32表、図版52に示した。

第102図(A)から知れるように、礫をのぞく6点の資料は調査区域の中央部付近に分散した状態で出土しており、ある特定の場所にまとまって発見される傾向はみられない。しかし、資料の絶対量がきわめて少なく、また、調査区域も比較的狭い範囲内に限定されているので、これから遺跡における資料分布を把握するのは困難である。

一方、礫の平面分布は、F13グリッドの周辺とF22～F28グリッドに集中する傾向がみとめられる。調査区北東隅にもわずかにみられるが、とくに10号跡周辺部で出土する頻度が高い。おそらく、10号跡の東側一帯にも多くの礫が存在するものと推定される。このように平面分布の集中が3地点に分れる傾向は、すでにみた縄文土器の平面分布とよく類似している。第102図(B)は、第93図に示した縄文土器の出土分布図をグリッド別の出土分布図に改編したものである。この図には、出土地点間距離が近すぎて第93図に表わせなかった資料についても表現できるので、その総量は第93図よりも多めに示されるが、(A)図と(B)図によって、礫と縄文土器の平面分布の傾向を比較することができる。

つぎに各資料の垂直分布について述べる。礫をのぞく6点の資料は、標高約50.9~51.5mの範囲内から出土した。第103図に示した(1)は6点中で、出土地点の標高が最も低い石礫で、F25グリッドから得られた。一方、出土地点の標高が最も高いのは(2)で、E14グリッドから出土した。また、(6)は標高約51.5mの地点から出土したものである。

礫は、標高約50.8~51.5mの範囲から出土したが、そのうち最も頻度の高いのは標高約51.3~51.4mの範囲である。既述のように礫の平面分布は比較的広い範囲にわたるが、垂直方向の分布範囲はかなり狭い。なお、縄文土器の垂直方向における分布頻度が最も高いのは、標高約51.2~51.5mで、礫が高密度に分布する範囲とほぼ一致する。

以上のように、各資料の出土分布は、縄文土器片の出土分布と相関性があり、とくに礫でその傾向が強い。

(2) 礫

今回出土した礫の石質は、流紋岩、安山岩、軽石、凝灰岩、砂岩、頁岩、チャート、砂質片岩など11種類が確認されている(図版52)。

第33表は、礫の石質別に数量、重量、赤熱の有無などを示したものである。これによると、石質別の出現頻度が最も高いのは流紋岩で、全資料の約37%を占める360点が発見された。これについてチャートと砂岩の出現頻度が高く、この3種類の合計が、礫全体量の約80%を占めている。

この傾向は、礫を重量別に検討した結果でもほぼ同様である。石質別重量が最も大きいのは、総量約2.4kgの流紋岩で、礫の総重量の約43%を占める。流紋岩について砂岩とチャートの重量が大きく、この3種類の重量和は、礫全体の90%以上に達する。

第33表 縄文時代礫組成

石質	点数	%	重量(g)	%	赤熱点数	%	スズ点数	%
流紋岩	60	37.0	2411.2	43.2	13	21.6	1	1.7
安山岩	9	5.6	240	4.3	1	11.1		
軽石	1	0.6	6	0.1				
流紋岩質凝灰岩	7	4.3	158.9	2.8	1	14.3	1	14.3
凝灰岩	6	3.7	15.8	0.3				
砂質凝灰岩	2	1.3	67	1.2				
砂岩	20	12.3	1358.1	24.3	4	20.0	3	15.0
頁岩	2	1.3	10.6	0.2				
チャート	52	32.1	1280.4	22.9	3	5.8		
砂質片岩	2	1.3	38	0.7				
めのう	1	0.6	0.2	0				
合計	162	100.1	5586.2	100.0	22		5	

第34表 礫最大長の計測値分布

計測値(cm)	点数	相対割合(%)
1.0以下	0	0
1.1~2.0	12	7.4
2.1~3.0	43	26.5
3.1~4.0	42	25.9
4.1~5.0	30	18.5
5.1~6.0	13	8.0
6.1~7.0	10	6.2
7.1~8.0	8	4.9
8.1~9.0	2	1.2
9.1以上	2	1.2
合計	162	99.8

第35表 礫の重量分布

計測値(g)	点数	相対割合(%)
15未満	88	54.3
15~30	25	15.4
30~45	17	10.5
45~60	6	3.7
60~75	5	3.1
75~90	3	1.9
90~105	3	1.9
105~120	2	1.2
120~135	2	1.2
135~150	4	2.5
150以上	7	4.3
合計	162	100.0

つぎに第34表と第35表は、今回採集した162点の礫のすべてについて、その最大長と重量を計測し、各階級ごとの出現頻度分布を調べたものである。これから明らかのように、礫全体の約70%の資料が、最大長2.1~5cm、重量30g未満の範囲内に集中しており、全体的に小形である。

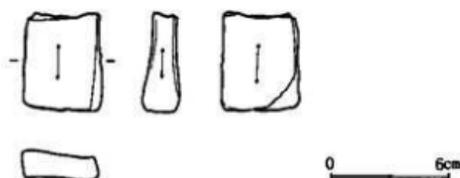
以上のように、今回の調査で得た礫資料の構成内容は比較的単純で、大部分が小形の流紋岩、チャート、砂岩で構成されているとみてほぼ差し支えない。これが、人為的な選択結果にもとづくものか、あるいは供給地における自然の礫組成に制約されたものかについてはいまのところ明らかでない。

なお、出土した礫には破損や亀裂を生じているものが多く、また礫表面にはススもしくはタール様の微かな黒色付着物や被熱に起因すると考えられる赤熱痕が肉眼的にみとめられる(第32表)。黒色付着物と赤熱痕にかざれば、これらの痕跡のいずれかをみとめる礫は、流紋岩、安山岩、凝灰岩、砂岩、チャートの5種類で、その点数は礫全体量の約16%程度を占める。また、これらの資料の占める割合を石質別に検討すると、チャートを除くといずれも約10~20%の範囲内におさまっているので、赤熱もしくは黒色付着物痕は石質のちがいににかかわらず、ほぼ同じ確率で生じていた可能性がある。もし、そうだとすれば、頁岩、砂質片岩、軽石、めのうなどにこのような資料をみとめられないのは、資料点数の少なさに起因するものと思われる。

3 歴史時代

復原実測の可能な資料は第104図に示す磁石1点にとどまった(図版52)。

磁石は約5cm×4cmの大きさで、最大厚約1.5cmの破片資料である。一端を欠損するが、割れ



第104図 包含層出土の石器(2)

口は古い。背腹両面と1側面の合計3面に縦位の擦痕があり、他の3面に比して著しく平滑である。背腹両面はともに中央部分がすり減り、この部分が極端に薄くなる。これは背腹両面の使用頻度が高かったためと考えられる。なお、石質は組織の緻密な凝灰岩が用いられている。

鉄滓は約2.3cm×2cm、最大厚約1.1cmのものと、約2.7cm×2.4cm、最大厚約1.5cm大のものが発見された。いずれも不定形で、表面に多数の気泡が存在し、色調は暗錆茶色を呈す(図版52)。

第5節 小結

今回の調査で、確認した遺構、遺物を時代別にまとめると以下のとおりである。

<先土器時代>

ソフトローム下半部からATの上位にあるハードローム上面にかけての漸移層から石器が出土した。その組成は、切出形石器、ナイフ形石器、角錐状石器、側削器、石核および剥片である。石質は、頁岩A、頁岩B、チャート、玄武岩から成るが、全重量の約90%は頁岩Aが占める。石器の組成内容、剥片生産技術、出土層準などは木苺峠IV層(鈴木 1975)、星谷津IV層(大原 1978)、復山谷IV層(田村 1982)出土の石器群との類似点を多くみとめる。調査区域の制約等によって、ユニットの平面分布や構成等は十分に把握できなかったが、今回の成果は先土器時代の調査例の少ない東総地域における空白部をうめる好資料になるものと考えられる。

<縄文時代>

土器と礫、石器が発見されたが、住居跡は確認できなかった。土器は、沈線文土器、無文系土器、押型文土器で構成され、いずれも早期前葉に属するものと思われる。3種類の土器と礫の水平、垂直分布はたがいに類似した傾向を示し、あまり大きな時間差をもたずに堆積した可能性がある。無文系土器は3種類の土器のうち最も高い頻度で発見されており、数量的には主体的な位置を占めるものと思われる。押型文土器は、日計式押型文であるが、確認できたのは1個体に由来すると考えられる資料のみで、主体的な存在とはなりえない。礫は比較的小形のものが多い。石質は流紋岩、安山岩、砂岩、頁岩、チャートなどであるが、全重量の約90%を流紋岩、砂岩、チャートが占める。礫の石質は先土器時代の石器石質と一部重複するが、石質

組織は後者に比べて緻密性が著しく劣っており、質的なちがいは明瞭である。なお、礫のなかには赤化もしくは黒色付着物の密着したものが含まれており、これらが被熱の影響を受けやすい状況下で使用されていた可能性がある。7号跡の陥し穴状土壇と10号跡は、縄文時代の遺構である可能性が高い。10号跡は、礫および縄文土器片の出現頻度が最も高い調査区南側で検出したものである。

<古墳時代以降>

住居跡(1号跡)1軒と古墳周濠(2号跡)1基が出現した。1号跡は北壁中央にかまどを1基設ける小形の竪穴住居跡で、床面積は約7㎡前後である。土師器甕と須恵器坏などを出土する。これらの土器は、越川、長内(1983)の編年による第II期の特徴とよく一致する。彼等によれば、第II期の実年代は8世紀第2四半期に比定される。この住居跡が集落の中心からさほど遠くない場所にはなれて存在するものか、あるいは全く単独に存在するものかは今回の調査では明らかにしえない。

2号跡は古墳周濠と考えられるが、その約半分が調査区外に存在する。なお、周濠に囲まれた地表面は平坦で、墳丘部は確認されなかった。

第4章 小座ふちき遺跡

第1節 遺跡の概要と調査方法

1 遺跡の概要

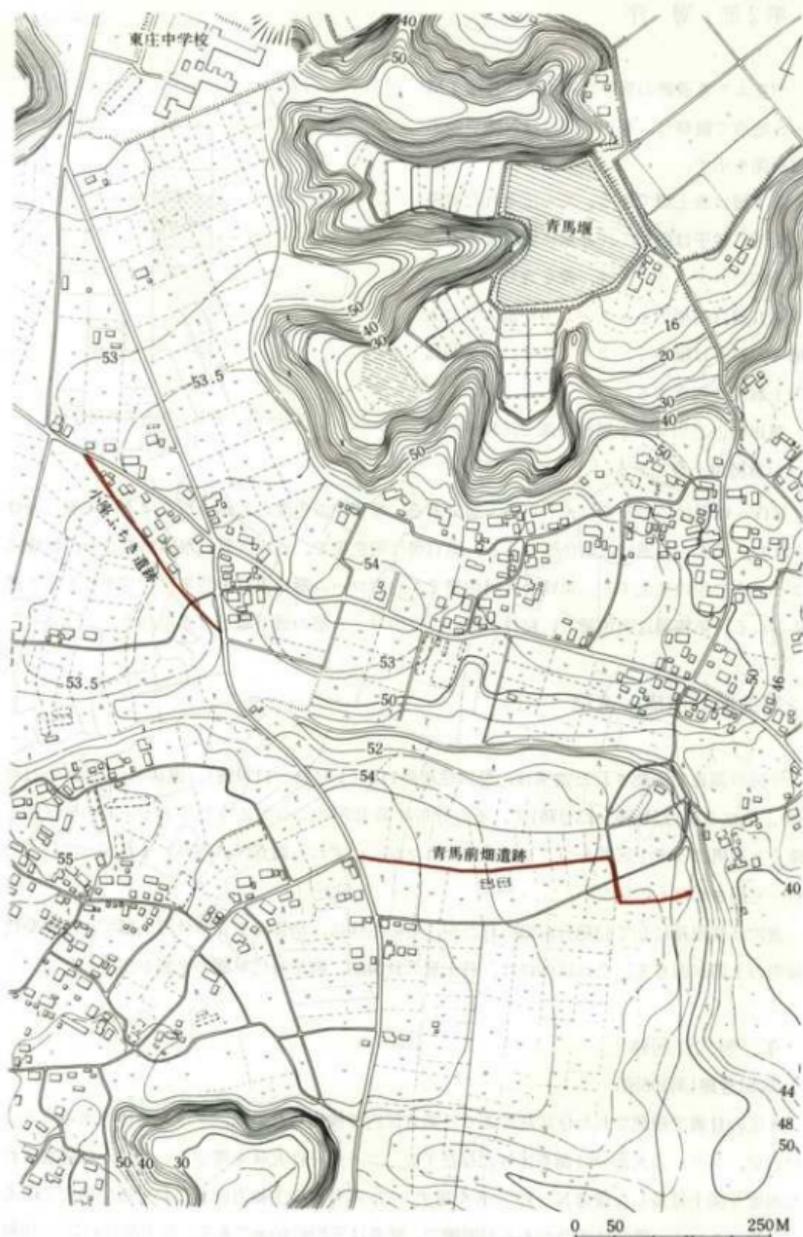
小座ふちき遺跡は、国鉄成田線下総橋駅から南西へ約3km離れた台地上に位置し、千葉県香取郡東庄町小座ふちき219の2他に所在する。遺跡の所在する台地は標高約53mの平坦な地形で、一帯は畑地として利用されているが、利根川から流入する沖積低地と海上町方面に開口する谷によって、台地平坦部の南北幅は最も狭いところで約800mほどに狭まる(第105図)。遺跡の北側は、西塚の集落と東庄中学校をへて利根川に臨み、南側は小座、山方、飯能の集落をへて海上町に至る。

2 調査方法

調査は東総用水の水路が敷設される道路部分のうち幅2m、長さ300m、面積600㎡を対象にして行った。道路は農道をかねた生活道路として利用されている。表土の除去は当初、人力で行なったが、盛土が予想以上に硬質であったため、急傾専用バケットを取り付けたバックホウを用いて、主にこれで行なった。表土除去は、調査予定地の西側から東へ向かって順次行ない、遺構の調査はこれを追うかたちで進行了。遺構番号はプランの確認順に付した。当遺跡の調査にあたってはトレンチ状に長い調査区内を用水建設用の図根点によって区分し、遺物の採集と遺構の位置記録はこれに従って行なった。各区の設定は、用水建設用に設置された図根点(I P 39杭)を起点として各I P杭もしくはNO杭間を結び、起点から4mごとに区切って設定した。各区間の大きさは原則として2m×4mで、各区名は起点から順に1、2、3……のアラビア数字をふった。

なお、I P杭の位置については座標が与えられており、第107図に示したポイント名とI P杭との関係は以下のとおりである。

ポイント名	測点	座 標	
A	I P 39	X = -21438.395	Y = 76001.516
B	I P 38	X = -21469.096	Y = 76056.470
C	I P 36	X = -21556.143	Y = 76202.737
—	I P 35	X = -21578.464	Y = 76265.859



第105図 小塚ふちき遺跡および青馬前畑遺跡周辺地形図

第2節 層序

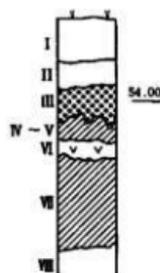
小座ふちき遺跡の層序は第107図に示すM～S地点で観察し、第106図にはN地点の土層断面を示す。

第I層は表土層である。てん圧された道路表面で、粒子は細かく、非常に硬質である。部分的にコンクリート塊、礫を含む。

第II層は暗褐色土とローム土が混入した土層で、粒子は細かく、よくしまる。縄文時代の土器片を包含する。

第III層は立川ローム層軟質部で、粒子の細かい黄褐色土層である。

第IV～VII層はいわゆるハードローム層である。堆積物の色度のちがいが以下に4層に分けられた。第IV～V層は、暗色帯である。第VI層は明色帯で、ガラス質の堆積物を含む、乾燥によって灰白色に変化する。第VII層は暗色帯で、立川ローム層の第II黒色帯に相当するものと考えられる。第VIII層は明色帯で、粘性が強い。立川ローム層の最下層と考えられる。



第106図 小座ふちき遺跡層序 (1/40)

第3節 遺構と遺物

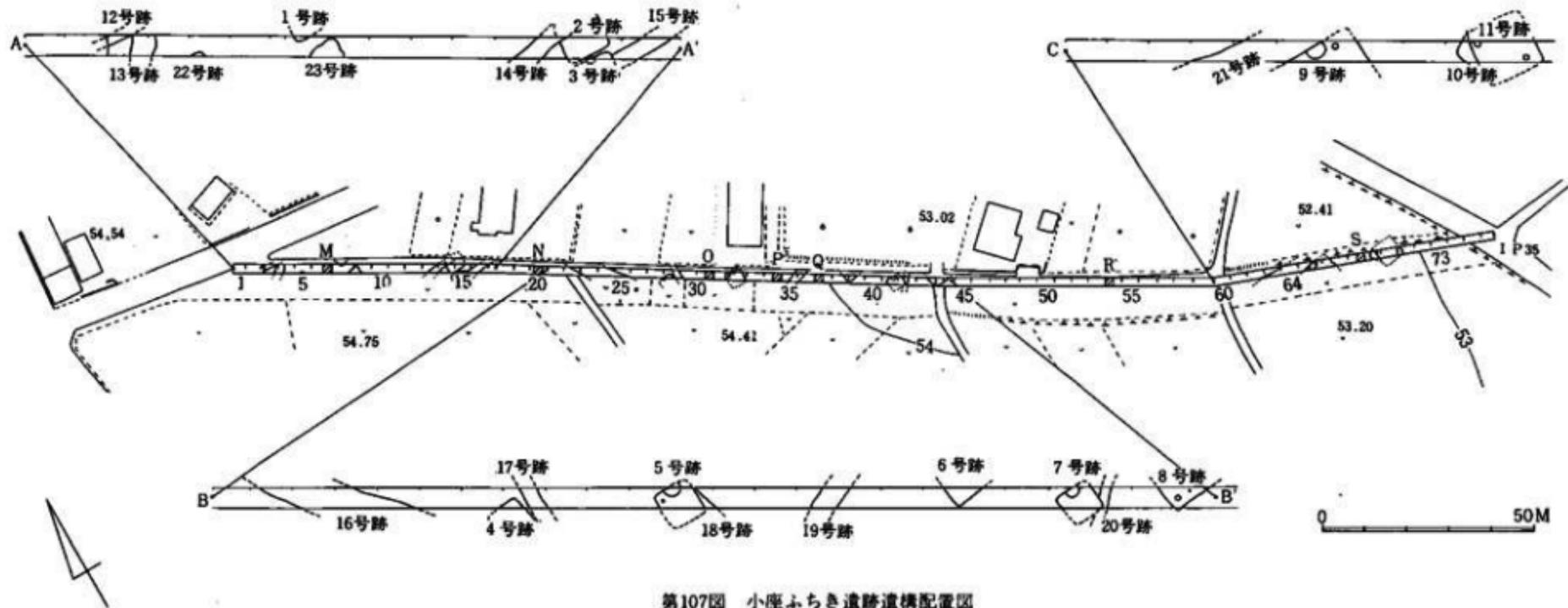
今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡11軒(1号跡～11号跡)、溝10条(12号跡～21号跡)、土坑2基(22号跡～23号跡)で、その分布は第107図に示すとうりである。45～60区間を除くと遺構はほぼ全区間をつうじて検出されたが、いずれも調査区の内外にまたがっているため、完掘されたものはない。

遺物は整理箱にして13箱分が得られたが、その主体は、奈良、平安時代の土器で、古墳時代後期の土器が混じる。それ以外には、若干量の鉄製品、縄文時代早期の土器が出土した。

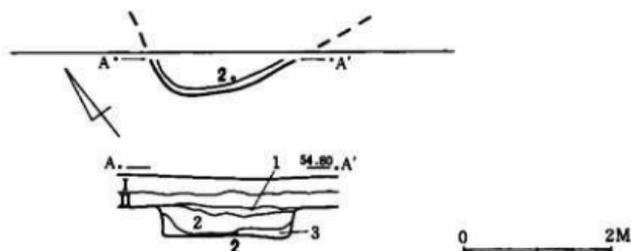
1 竪穴住居跡

1 (005)号跡(第108図)

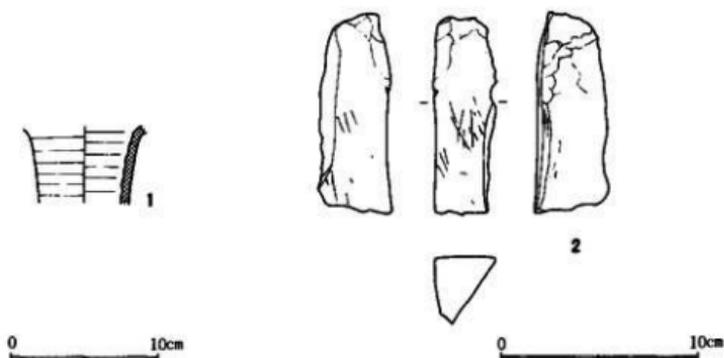
8区のII層で確認された住居跡である。調査区内で検出したのは、プラン全体の南西コーナ付近で、プランの大部分は調査区外に存在する。コーナーは丸味を帯びる。わずかに確認された西壁を図上延長した線はN-15°-Eを指すので、本号跡の主軸方向もこれに近い値をとるものと推定される。壁面は凹凸があるが明瞭で、壁高は平均約40cmである。壁下部は約70°の傾斜



第107図 小座ふちき遺跡遺構配置図



第108図 1(005)号跡実測図



第109図 1(005)号跡出土遺物

第36表 1号跡出土遺物観察表

挿図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎度	地成	色調	残存度	備考
1	須恵(?) 長頸壺	覆土	— — —	ロクロ目が残る	堅緻	良	外内) 灰色	頸部破片	自然軸付着
2	砥石	覆土		全長10.2cm、三面一様に縦位の 推痕、両端は自然面 石質：凝灰石					

角で立ち上がる。壁溝はともなわない。ピットは確認されなかった。床面はハードロームを掘り込み、起伏にとむが堅緻に整えられる。覆土は全体に密でよくしまる。A-A'における断面観察では、以下の3層に分けられる。1. 暗褐色土層。直径1cm以下のハードロームブロックを含む。2. 褐色土層。直径約4cmのハードロームブロックを多量に含む。3. 褐色土層。ソフ

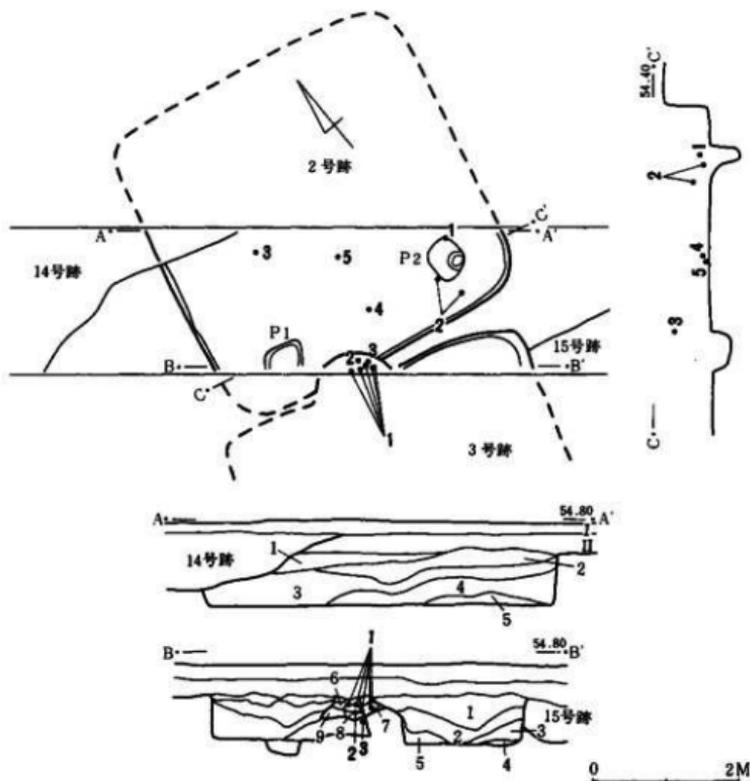
トローム粒の混入量が多い。

遺物は土器片と石器が出土した。復原実測が可能な資料は、須恵器(?)長頸壺1点と砥石1点である(109図, 第36表, 図版60)。砥石は3面と1稜に縦位の使用痕をみとめる。

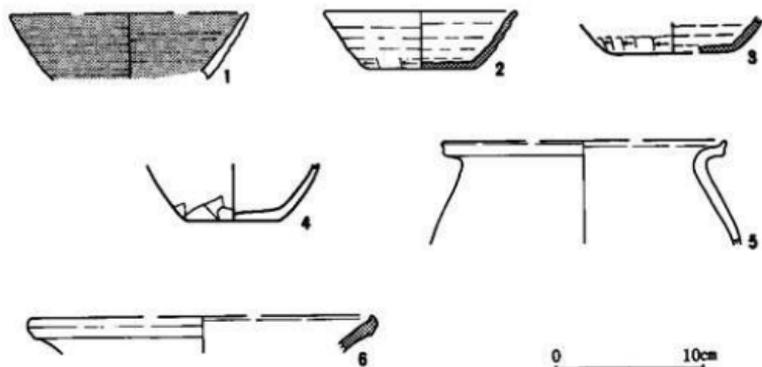
2(009)号跡(第110図, 図版54)

14~15区に位置する住居跡である。14号跡に切られる(A-A')。プランはII層で確認された。調査区内に出現したプランは西壁が約2m, 南壁が約2m, 東壁は約0.7mでコーナーは丸い。検出された東西の壁間距離は約4.3mであるので, 北壁と南壁はこれに近似した長さになると推定される。主軸方向はN-11°-E前後を指すものと思われる。

壁高は東壁約70cm, 西壁は約60cmである。壁下部はハードロームを張り込み, 壁の立ち上りは下部で約85°, 上部で約90°の傾斜角でほぼ垂直である。壁溝は確認できなかった。ピットは2ヶ



第110図 2(009)号跡, 3(004)号跡実測図



第111図 2(009)号跡出土遺物

第37表 2号跡出土遺物観察表

神宮 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師環	覆土	(16) — —	ロクロ整形、赤彩	細砂少	普	外 } 褐色~ 内 } 赤褐色	1/6程度	
2	須恵環	覆土	13.4 4.0 7.1	ミズビキ成形のち体部下端手 持へラケズリ 底面：へラケズリ	砂粒 } 多 雲母 }	普	外 } 灰色 内 }	1/6	
3	須恵環	覆土	— — (8.0)	ミズビキ成形のち、体部下端手 持へラケズリ 底面：へラケズリ	砂粒 } 多 雲母 }	普	外 } 灰色 内 }	1/6	
4	土師壺	覆土	— — 6.2	外一休部：浅い横位のへラケ ズリ、底面：へラケズリ 内一休部：ナデ、底面：指頭 圧痕	砂粒少	良	外 } 灰褐色 内 }	底部の み定存	
5	土師壺	覆土	(19.0) — —	口縁：横位のナデ 体部内外：ナデ	細砂 } スコリア } 少 雲母 }	良	外 } 褐色 内 }	口縁部 破片	
6	須恵壺	覆土	(24) — —	口縁内外面：横位のナデ	細砂 } 多 スコリア }	良	外 } 灰色 内 }	口縁部 破片	

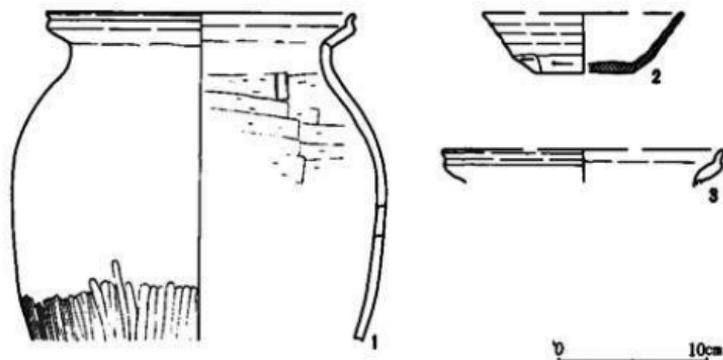
所で検出された(P1~P2)。床面におけるピットの直径と深さはP1が約56cmと約32cm、P2が約50cmと約40cmである。P2は底径約14cmでいくぶん内傾するが、主柱穴の1つと考えられる。P1は断面が棒状にならず逆台形であるが、柱穴部分が調査区外にあって検出されなかった可能性も高いので、これも一応柱穴と考えておく。P1-P2間の距離は約2.8mである。床面はローンを緻密に固めたもので、平坦である。かまどは確認できない。覆土堆積物の粒子

は細かく密であるが、軟質で指頭圧で圧痕が生じる。A-A'における断面観察では、5層に区分された。1. 褐色土層。焼土粒が見られる。2. 暗褐色土層。ローム粒が混じる。3. 明褐色土層。直径約1~2cmのハードロームブロックを多く含む。4. 黒褐色土層。山砂をとどころに含む。5. 暗褐色土層。ローム粒を多く含む。

遺物は覆土中から散乱した状態で発見されたが、そのうち坏3点、甕3点が図示できた(第111図、第37表、図版60)。(4)~(5)の甕は床面にほぼ密着した状態で発見された。他は覆土中で発見され、(6)の須恵器甕は覆土の一括資料である。

3 (004)号跡(第110図、図版53)

15区の南隅に位置する住居跡である。本号跡は2号跡と調査区南壁にはさまれた狭い場所に位置するため、プランの確認がおくれた。プランの大部分は調査区外にあり、調査区内には北東コーナーと推定される部分が約1.5m×約0.6m出現した。北東コーナーはいくぶん丸味を帯びる。2号跡と15号跡を切る(B-B')。プランの全容は明らかでないが、主軸方向はN-15'-



第112図 3 (004)号跡出土遺物

第38表 3号跡出土遺物観察表

検出番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	覆土	20.7 — —	外一休部上位: 椀位のナデ 休部下位: 椀位のヘラミガキ 内一休部: 椀位のヘラケズリ	砂粒多 スコリア少	普通	外一淡褐色 内一暗褐色	底部欠損	体部内面 におこげ 状付着物
2	須恵坏	覆土	(14.0) 3.9 6.6	ミズビキ成形のち休部下端手 持ちヘラケズリ 底面: ヘラケズリ	砂粒多	良	外 } 青灰色 内 }	×	
3	土師甕	覆土	(19.0) — —	口縁内外面: 椀位のナデ	砂粒 } スコリア } 多 雲母 }	普通	外一淡褐色 内一暗褐色	口縁部 破片	

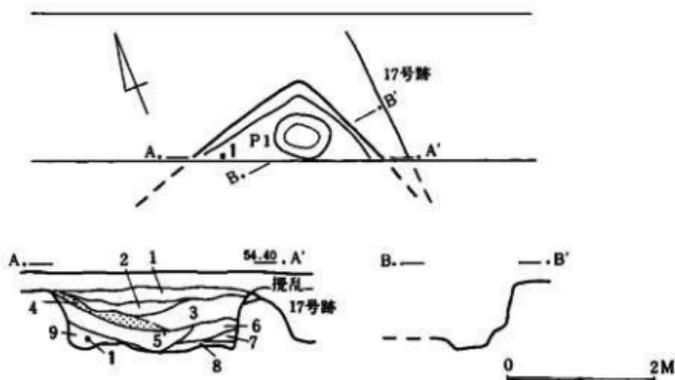
EからN-20°-Eの間におさまるものと推定される。

壁高は約60cmである。壁下部はハードロームを掘り込んでおり、明瞭堅固である。壁下部の立ち上がりの傾斜角は約80°である。壁溝は確認できなかった。床面は起伏にとみ、あまりていねいな構築ではない。これは検出したプランがコーナー部分にかざられたためと考えられる。床面からはピットは確認できなかった。北壁と調査区壁の交叉部分に山砂、黒色土、焼土、炭化粒、炭化材を多量に含む暗灰褐色砂が検出されたが、これはかまどの一部と推定される。覆土はよくしまった褐色土であるが、B-B'における観察では、以下の9層に区分される。1. 褐色土層。ローム土を含む。2. 褐色土層。3. 暗褐色土層。ローム粒を多く含む。4. 黄褐色土層。ローム粒を多く含む。5. 褐色土層。山砂を多量に含む。6. 淡褐色土層。山砂を多量に含む。ローム粒を混入する。7. 灰褐色土層。山砂を多量に含む。かまどの構築材と考えられる。8. 黒褐色土層。山砂を主体とし、焼土粒と炭化粒を多量に含む。粘性はない。9. 淡褐色土層。山砂を少量含む。

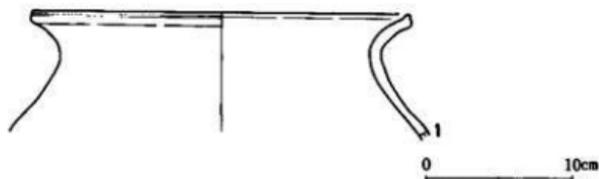
遺物はかまど部分に集中して出土した。そのうち、実測可能なものは壘2点、坏1点の合計3点である(第112図, 第38表, 図版61)。(1)はかまど構築材の堆積物上部から出土し,(2)と(3)はその下部から出土した。床面に密着した資料はない。

4 (012B)号跡(第113図, 図版55)

27~28区に位置する住居跡である。17号跡と隣接するが、土層断面をみるかぎりでは両者の切合い関係は明らかでない(A-A')。プランはII層で確認されたが、調査区内で検出したのはコーナー部分である。検出された北壁は約1.8m, 東壁は約1.5mである。壁高は平均約60cmで、ハードロームを掘り込み、壁下部の立ち上りは約80°の傾斜角をなす。ピットは1ヶ所で確認された(P1)。開口部は長径約74cm, 短径約60cmの楕円形をなす。断面は逆台形で壁は約40°の角



第113図 4 (012B)号跡実測図



第114図 4(012B)号跡出土遺物

第39表 4号跡出土遺物観察表

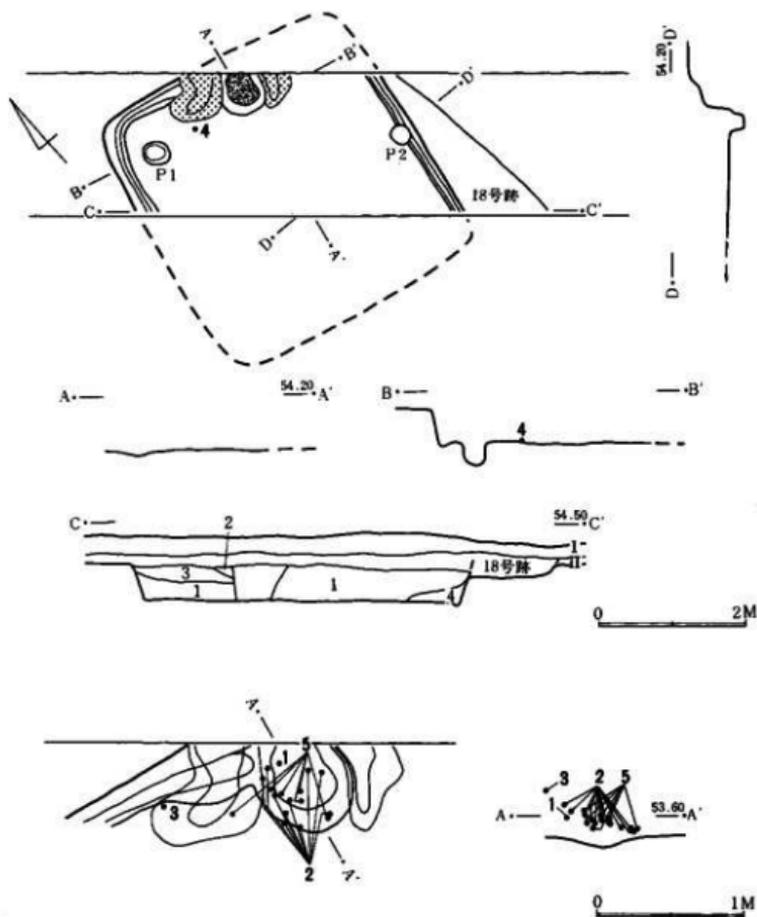
検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	覆土	26.0 — —	内外：横位のナデ	細砂 雲母}少	良	外 内}褐色	口縁の みよ	外面体部 上半に煤

度で立ち上がる、底面における長径と短径はそれぞれ約45cmと約30cmである。P1の堆積土と本号跡覆土との区別は困難で、遺物は発見できなかった。床面は検出部がコーナー部分であること、P1が存在することなどにより、その状態を詳しく検討することができなかった。なお、東壁直下の床面はいくぶん軟質で壁溝が存在した可能性がある。A-A'断面における覆土は以下の9層に区分される。1. 黄褐色土層。ローム土を多く含む。2. 暗褐色土層。3. 褐色土層。直径1cmのハードロームブロックを多く含む。4. 暗褐色土層。山砂、粘土、焼土粒を多量に含む。5. 褐色土層。軟質である。6. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む。7. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多く含む。軟質で黒色土を含む。8. 黄褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックと焼土、粘土を多く含み、粘性が強い。9. 褐色土層。ハードロームブロックと粘土粒を混える。以上のように本号跡のかまどは、北壁と調査区南壁との交叉部に存在する可能性が高く、そうだとすれば本号跡の主軸方向はN-20°-WからN-25°-Wの範囲に入るものと推定される。

遺物は土器片のみが出土した。そのうち壺1点の復元実測が可能である(第114図、第39表)。

5(013A)号跡(第115図、図版56)

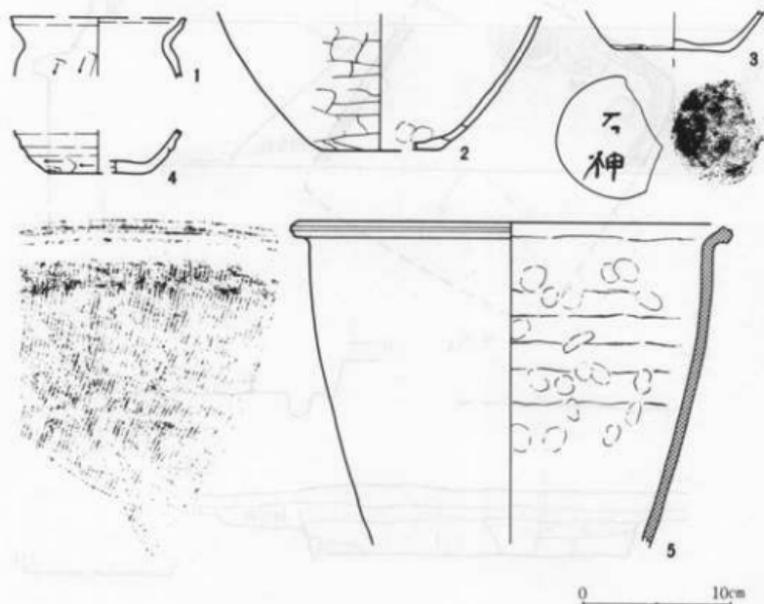
調査区域の中央部付近で検出した住居跡で、28~29区に位置する。プランはII層で確認された。18号跡を切る。調査区内に出現したものはプラン全体の中央部分だけで、北東コーナーと南西部は調査区外に存在すると考えられる。検出された東壁は2.3m、北壁は1.4m、西壁は1.3mでコーナーはいくぶん丸味を帯びる。東西の両壁間距離は約3.9mである。調査区南壁下部を東壁にそうようにボーリング調査したところ調査区南壁面から約0.4m南に本号跡の南壁と考えられる硬質面が存在することが判明した。そうだとすると、本号跡の推定復元プランは一辺



第115図 5 (013A)号跡実測図

約4mの隅丸方形に近い。主軸方向はN-6°-Eを指す。

壁高は平均約40cmで、東壁で最も高く50cmである。壁下部はハードロームを掘り込み、約80°~82°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は検出された壁下を全周する。断面は浅いU字形で、平均幅は約10~15cm、深さは約3~4cmである。底面は起伏にとむ。ピットは2ヶ所で確認された(P1, P2)。P1は直径約35cm、底径約25cm、深さ約30cmを測り、P2は直径約30cm、底径約15cm、深さ約20cmで、断面はいずれも棒状を呈す。P1は柱穴の1つと考えられるがP2は不明である。床面は平坦で、壁溝付近をのぞくと全面堅固である。かまどの位置は北壁中央部と推



第116図 5(013A)号跡出土遺物

第40表 5号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	かまど	(12) — —	口縁内外面：ヨコナナ 内一横位ナデ	細砂多	良	外 内} 赤褐色	口縁部 のみ写	
2	土師甕	かまど	— — 8.2	外一横位のケズリ、底面：ケ ズリ 内一底面付近：指頭圧痕	細砂 } 少 スコリア }	良	外 内} 暗褐色	1/4	
3	土師杯	かまど	— — 7.0	ミスビキ成形のち体部下端手持 ちヘラケズリ、底面回転未切 りのち外周部静止ヘラケズリ	細砂少	普	外 内} 灰褐色	1/4	墨書「石 神」内外 面燻
4	土師杯	床直	— — 6.8	ミスビキ成形、体部下端手持 ちヘラケズリ 底面：回転未切のちケズリ	細砂少	普	外一褐色 内一明褐色	1/4	外面燻
5	須恵甕?	かまど	29.0 — —	外一タタキ 内一ナデ、指頭圧痕	砂粒 } 多 雲母 }	良	外 内} 灰色	1/4	内面にお こげ状付 着物、燻 の可能性 あり

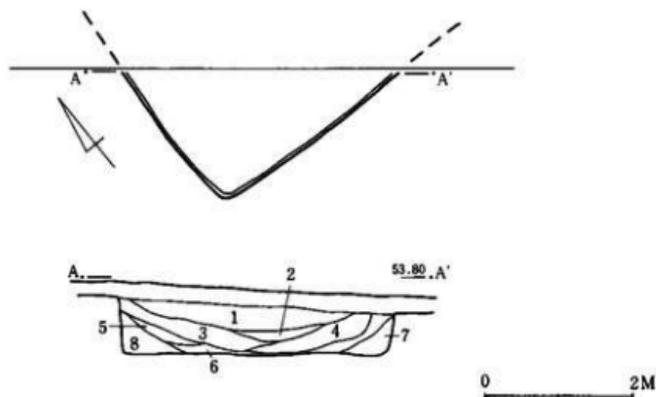
定される。床掘り込みは楕円形で、床面レベルを約5cm掘り込んで火床とする。火床はよく焼
け、レンガ化する。被熱部分の面積は広く、ロームは粘性を欠く。壁掘り込みは不明である。か
まど袖は山砂を多く使用し、ローム粒、炭化繊維、小さな土器破片が混入する。壁溝は袖の下
部にのび、溝幅を序々に増し、かまどの床掘り込みに連続する。覆土は軟質で、指頭圧による
圧痕が容易につく。C-C'断面では以下の4層に分けられた。1. 黄褐色土層。直径約2
cmのハードロームブロックを混える。2. 黒褐色土層。3. 褐色土層。4. 褐色土層。直径約
1cmのハードロームブロックが混じる。

出土遺物は土器片で、その大部分がかまど付近から発見された。復原実測が可能なものは、
甕2点、坏2点、須恵器甕1点の合計5点である(第116図、第40表、図版60)。このうち、床に
密着して発見されたものは(4)の坏だけで、墨書のある坏(3)は、かまど袖脇から、他はいずれも
かまど燃焼部の堆積土上面から出土した。

6 (015)号跡(第117図、図版56)

調査区域のほぼ中央部の35~36区に位置する。第II層で確認され、他遺構との切合いはない。
調査区内に出現したのはプラン全体の南西コーナー部分で、他は調査区外に存在するものと推
定される。検出した西壁は約2.9mである。調査区北壁を本号跡南壁にそってボーリングした
が、東壁の位置は確認できなかった。西壁を図上延長して求めた走行方向はN-4°-Eである
が、本号跡の主軸方向はこれに近い角度か、これを東西いずれかに90°振った方向を指すもの
と思われる。

壁高は平均約60cmと深く、最も深い西壁で約75cmを測る。壁下部はハードロームを掘り込み、
約80°~85°の傾斜角でほぼ垂直に立ち上がる。壁溝およびピットは確認されなかった。床面は堅
固で、ハードロームと暗褐色土の混合土によって平坦に整えられている。A-A'における断面



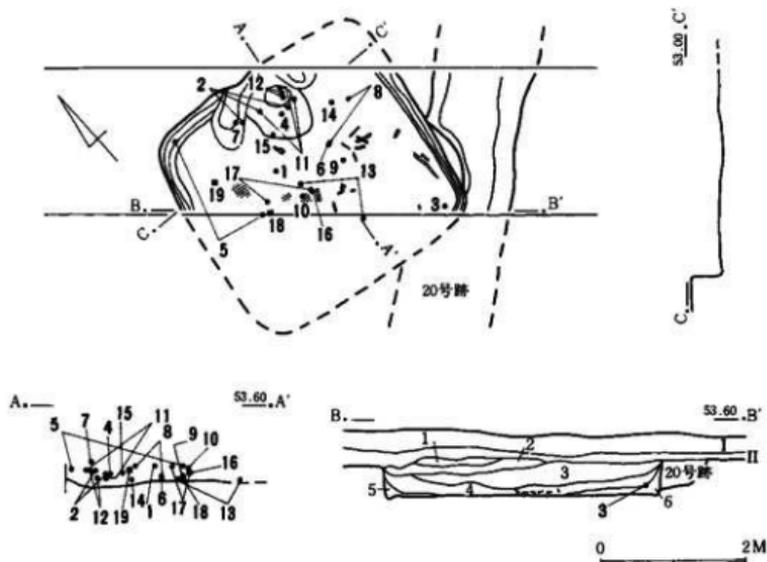
第117図 6 (015)号跡実測図

観察では覆土は以下の8層に分けられる。1. 褐色土層。直径約1~5cmのハードロームブロックを多く含む。よくしまる。2. 暗褐色土層。ハードロームブロックを多く混える。3. 黄褐色土層。直径約5~10cmのハードロームブロックをきわめて多く含む。4. 黄褐色土層。ハードロームブロックを多く含む。5. 暗褐色土層。6. 褐色土層。ハードロームブロックを含む。7. 黄褐色土層。ローム粒を多く含む。8. 褐色土層。ハードロームブロックを多く含み、しまりが悪い。なお、遺物は発見されなかった。

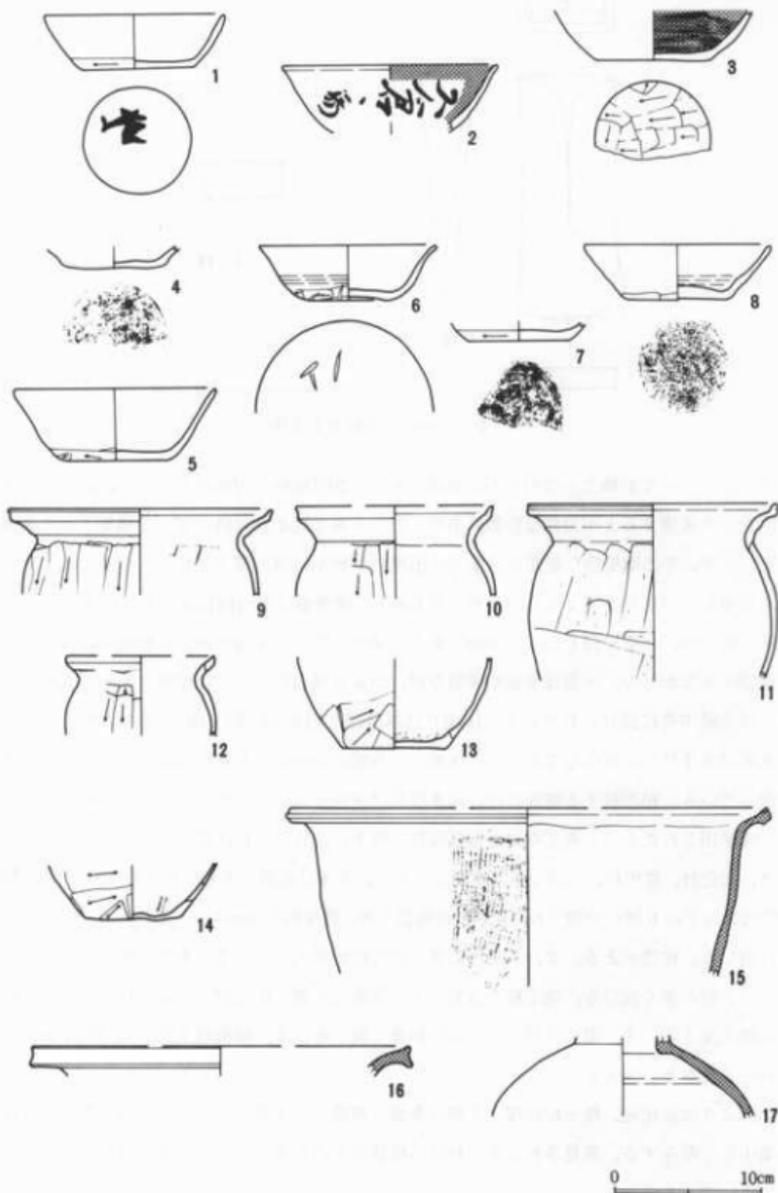
7 (016A)号跡(第118図, 図版57)

調査区の中央部やや東寄りにある38~39区に位置する。プランはII層で確認された。20号跡を切る(B-B')。調査区内にはプランの中央部分が検出され、他の部分は調査区外に存在するものと思われる。確認できた壁長は、西壁が約0.9m, 北壁が約1.7m, 東壁が約2m, また東西両壁間距離は約3.5mである。北壁長はこれに近い値をとるものと推定される。確認した壁から図上復原されたプランは、約3.5m×約3.4mの正方形で、コーナーは丸味を帯びる。主軸方向はN-11'-Eを指す。

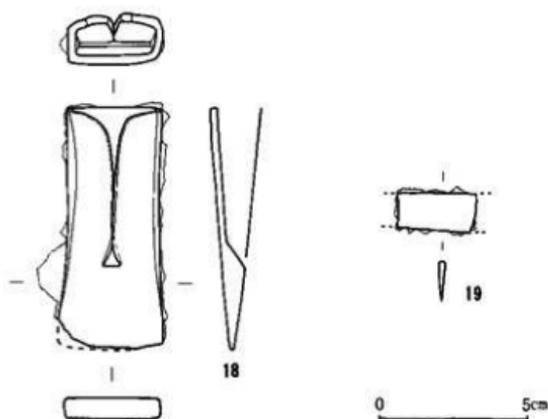
壁高は平均約42cmと深い。壁下部はハードロームを掘り込み、約88°前後の傾斜角で垂直に立ち上がる。東壁が20号跡と重複する部分には、ハードロームを主体とし褐色土を混入する黄褐色土が堆積する。床面とこの堆積土上面との比高差は約20cmである。この堆積土は固くしまる



第118図 7 (016A)号跡実測図



第119図 7 (016A)号跡出土遺物(1)



第120図 7(016A)号跡出土遺物(2)

が、プライマリーな堆積土とは明らかに異質である。20号跡壁の可能性もあるが、20号跡の走行方向などを考慮すると不自然な位置にある。むしろ本号跡が20号跡を切って構築された事実にもとづくと、その構築時に壁面の一部分に出現した軟かい溝の覆土にローム土を主体とする土壌を充填した可能性を考える方が自然と思われる。壁溝幅は平均約15cmであるが、東壁両側で最も狭く約7cm、北壁で最も広く約20cmである。深さは約2～4cmで底部は起伏がある。ピットは確認出来なかった。床面は全面が硬質だが、かまど周辺部はとくに堅緻にかためられる。かまどは北壁中央に設けられている。床掘り込みは深さ約8cm、約1m×0.8mの楕円形である。火床はあまりレンガ化しておらず、床掘り込み底のロームにも粘性がある。袖は山砂を多量に含んでいる。袖が接する壁面には、大きなソフトロームブロックがみとめられ、袖の作りつけとして使用されたものと考えられる(図版57)。覆土にはローム粒、黒色土、ハードロームブロック、炭化材、炭化粒、山砂などが堆積しており、全体に軟質である。B-B'における土層断面では、以下の6層に分層された。1. 黄褐色土層。直径約1.5cmのハードロームブロックが大量に混じる。粘性がある。2. 茶褐色土層。炭化粒が混入する。3. 褐色土層。炭化粒、ハードローム粒が多く混じる。焼土粒を含む。4. 黒褐色土層。炭化材が大量に存在する。山砂、ローム粒を混える。5. 褐色土層。ローム粒が多く混じる。6. 暗褐色土層。直径約1mmのハードローム粒を多く混える。

以上のように炭化粒、焼土粒は覆土下層に多量に堆積し、床面から約2～3cm上部には炭化材が集中して存在する。発見された炭化材は小枝状のものが多かったが、本号跡は焼失住居と考えてよいであろう。

遺物は土器と鉄器が発見された。遺物量は多く、覆土中に散在している。そのうち復元実測

第41表 7号跡出土遺物観察表

押図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主 要 特 徴	胎 土	焼成	色 調	残存度	備 考	
1	土師杯	覆土	12.2 3.8 7.0	外一底部下端：回転ヘラズリ、底面：回転ヘラズリ 内一ナデ	細砂少	良	外 } 赤褐色 内 }	1/2	底面に墨書あり、 解説不能	
2	土師杯	かまど	14.8 — —	コクロ整形、内面に暗文状の ミガキ	細砂 } 少 スコリア }	普	外一淡褐色 内一黒色	1/2	内黒 墨書「大 倉□□」	
3	土師杯	覆土	— — 8.0	外一ナデ、底面：ケズリ 内一細かいミガキ	細砂多	良	外一灰褐色 内一黒色	1/2	内黒 外面燻	
4	土師杯	覆土	— — 6.8	ミズビキ成形、回転糸切りの ち静止ヘラズリ	細砂 } 少 スコリア }	普	外 } 明褐色 内 }	1/2	底面燻	
5	土師杯	覆土	13.6 4.9 6.8	ミズビキ成形、体部下端：手 持ちヘラズリ 底面：回転糸切りのち不定位 の全面ヘラズリ	細砂少	良	外 } 肌色 内 }	1/2	口縁外面 燻	
6	土師杯	床直	12.2 3.7 6.0	体部下端：手持ちヘラズリ 底面：不定方向のケズリ	細砂多	普	外 } 黒褐色 内 }	完存	ヘラ記号 ?	
7	土師杯	覆土	— — 7.0	ミズビキ成形、体部下端：回 転ヘラズリ 底面：回転糸切りのち回転ヘ ラズリ	細砂粒 } 少 スコリア }	普	外 } 褐色 内 }	1/2	底部の み	二次加熱
8	土師杯	床直	12.8 3.8 6.6	ミズビキ成形、体部下端：ヘ ラズリ 底面：回転糸切りのち外周部 静止ヘラズリ	細砂粒少	普	外 } 明褐色 内 }	1/2		
9	土師壺	覆土	16.0 — —	外一口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のヘラズリ 内一頸部：ケズリのちナデ 体部：ナデ	細砂粒多	良	外一灰褐色 内一暗褐色	1/2	口縁部 のみ	体部に黒 斑 体部上位 に燻
10	土師壺	覆土	(13.5) — —	外一口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のヘラズリ 内一頸部：横位のヘラナデ 体部：ナデ	細砂粒多	良	外 } 暗褐色 内 }	1/2	口縁部 のみ	体部上位 に燻
11	土師壺	かまど	17.2 — —	外一口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のケズリ 内一体部：ナデ	細砂粒多	普	外一褐色 内一赤褐色	1/2		体部上位 に燻
12	土師壺	かまど	(10) — —	外一口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のヘラズリ 内一体部：ナデ	細砂粒少	普	外 } 暗褐色 内 }	1/2	口縁部 のみ	内・外面 燻
13	土師壺	床直	— — 7.0	外一体部：ヘラズリ、底面 ：一定方向のヘラズリ 内一体部：ナデ、指頭圧痕	細砂粒多 スコリア少	良	外一灰褐色 内一黒色	1/2	底部の み完存	体部下位 に燻

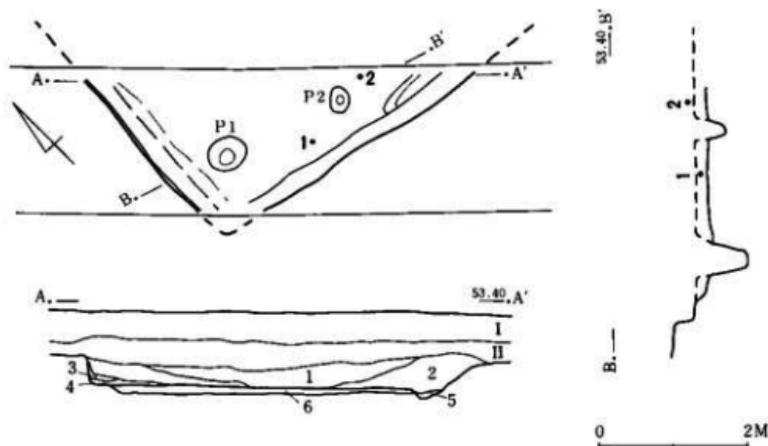
検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	現存度	備考
14	土師甕	床直	— — 6.8	外一側部：ヘラケズリ、底面 ：ヘラナデ 内一側部：浅いハケ目、ヘラ ナデ	細砂粒多	良	外 内} 赤褐色	底部の み%	
15	須恵甕 ?	覆土	(33) — —	外一側目状のタタキ 内一側部ナデ	砂粒少	普	外 内} 釉青色	口縁部 破片	甕の可能 性あり
16	須恵 広口壺	覆土	— — —	自然釉	細砂少	良	外 内} 黒灰色	口縁部 破片	
17	須恵壺 ?	覆土	— — —	(16)と同一個体か?	細砂少	良	外 内} 黒灰色	体部破 片	
18	鉄製弁	覆土		いわゆるソケット状の折り返 えし着装部をもつ。	—	—	—	完存	鍛造品
19	鉄製刀 子	覆土		—	—	—	—	破片	

が可能なものは、坏8点、甕6点、須恵器甕(?)1点、広口壺(?)2点、鉄弁1点、刀子1点の合計19点である(第119,120図,第41表,図版61)。墨書土器が2点出土しており、「大倉□□」と読めるもの(2)と判読が困難なもの(1)がある。なおこれらの文字は赤外線写真によっても判読できなかった。(6)、(8)の坏と(13~14)の甕、(18)の鉄弁は床面上の出土資料である。

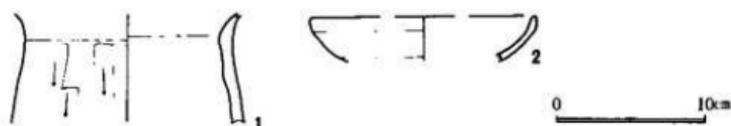
8 (017)号跡(第121図, 図版57)

40~41区に位置する。プランはII層で確認された。調査区内では西壁と南壁が検出され、それぞれ約2.4mと約3.5mの長さをもつ。南西コーナーは調査区外に存在するが、ボーリング・ステッキによってその位置を確認することが可能で、図のように復原される。推定される主軸方向はN-8°-E前後であるが、確証はない。

壁高は平均約35cmであるが、西壁と調査区南壁との交点付近で最も深く約40cmである。壁下部はハードロームを掘り込み、約85°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認されないが、南壁東端に壁に沿って幅約20cm、深さ約10cmの溝状の掘り込みがあり、これが壁溝の可能性がある。ピットは2ヶ所所で確認された(P1, P2)。P1は直径約45cm×50cm、底径約20cm、深さ約70cmを測り、断面は棒状を呈す。P2は直径約25cm×35cm、底径約12cm、深さ約45cmを測り、断面は棒状である。いずれも柱穴の可能性が高い。床面はハードロームと暗褐色土の混合土で貼床とし、これをはがすと約10cm下に堅緻な床面が出現した。この床面は貼床面と南壁を共有する。西壁は約25cm幅のズレを生じるが両者は平行である。貼床下から出現した西壁の比高は約10cmで、約50°の傾斜角でゆるく立ち上がる。以上のように、本号跡は拡張もしくは重複住居の可能



第121図 8 (017)号跡実測図



第122図 8 (017)号跡出土遺物

第42表 8号跡出土遺物観察表

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師壺	覆土	— — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：縦位のへラケズリ 内—体部：斜位のナデ	砂粒多	良	外—黄灰色 内—黄土色	破片	
2	土師杯	覆土	(15.5) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：横位のへラケズリ のちナデ 内—体部：ナデ	細砂粒多 スコリア少	普通	外} 茶褐色 内}	口縁部 破片	口縁に煤

性がある。かまどは未確認である。覆土は暗褐色土、ローム粒、焼土粒などが堆積し、全体に軟質である。A—A'における土層断面は以下の6層に区分された。1. 暗褐色土層。暗褐色土を主体とし、ローム粒はほとんどみとめられない。2. 暗褐色土層。ソフトローム粒、ハードロームブロックを多く含む。3. 黒褐色土層。ローム土を少量混える。4. 黄褐色土層。ローム粒を多く混える。5. 褐色土層。他の層よりも軟質で、ソフトローム粒を多く混える。6.

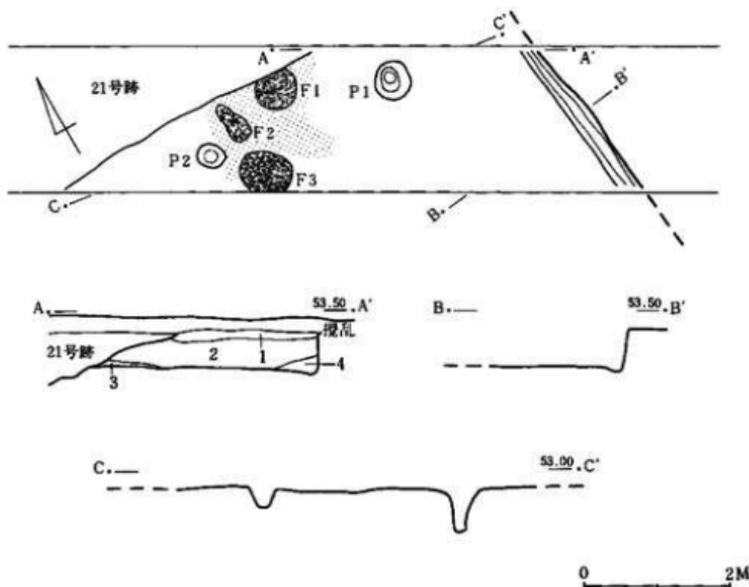
黄褐色土層。ハードロームブロックを主体とし、これらの間隙を粒子の細かい暗褐色土が充填する。堅固でよくしまり貼り床と思われる。

遺物は少量の土器が発見された。そのうち復原実測が可能なものは壺1点、坏1点の合計2点である。そのうち壺は貼り床下から出土したものである(策122回, 第42表, 図版62)。

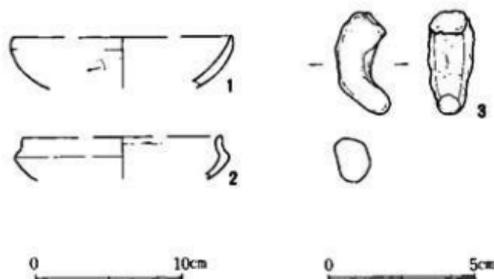
9 (019)号跡(第123回, 図版58)

65～67区に位置する住居跡である。21号跡に切られ、プランの確認はやや難航した。調査区内で検出したのは、プラン全体の北東部分で東壁は約2.3mが確認された。推定される主軸方向はN-10°-W前後である。

壁高は平均約52cmで深い。壁下部はハードロームを掘り込んでおり、約82°～84°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は東壁下にあり、溝幅は平均約15cm、深さ約10cmを測る。溝底は凹凸があるが全体に明瞭である。ピットは2ヶ所で確認された(P1, P2)。P1は直径約50cm、底径約14cm、深さ約58cm、断面は上部の広がった棒状をなす。P2は直径約35cm、底径約18cm、深さ約25cm、断面は逆台形であるが、P2の開口部周縁は若干隆起する。P1は柱穴と考えられるが、P2は性格不明である。床面は堅緻で、貼床状に整えられるが、21号跡との境界には山砂が厚く堆積する。この直下の床面からは被熱によってレンガ化した箇所が3ヶ所認められた(F1, F2, F3)。このうちF1は貼り床除去後に発見されたものである。山砂はかまど構築材の一



第123回 9 (019)号跡実測図



第124図 9(019)号跡出土遺物

第43表 9号跡出土遺物観察表

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師環	覆土	(15) — —	外—口縁：横位のミガキ。体部：横位のヘラケズリのちナデ 内—横位のミガキ	細砂少 スコリア少	善	外 内} 褐色	片	
2	土師環	覆土	(13.5) — —	外—口縁：ヨコナデ。体部：ナデ 内—不明	スコリア少	良	外 内} 赤褐色	破片	
3	土製勾玉	覆土		厚さ1.5cm、重量7g、表面凹凸が著しい	砂粒多	不良	外 内} 茶褐色	一部欠損	

部と推定されることから、レンガ化した部分はかまど火床の可能性が考えられるが、複数箇所から確認されており、性格は明らかでない。なお、かまどは確認されなかったが、北壁とともに21号跡によって破壊されたものと思われる。覆土は暗褐色土、ローム粒、ハードロームブロック、山砂、焼土粒が含まれており、全体に軟質である。A-A'における土層断面では、以下の4層に区分される。1. 暗褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックが混じる。2. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが混入する。山砂、焼土粒が散在する。3. 黄褐色土層。ソフトローム粒が多く混じる。直径約2cmのハードロームブロックが存在する。4. 黒褐色土層。黒色土が多く混じる。

遺物は土器片と土製勾玉が出土した。復原実測の可能なものは、坏2点と土製勾玉1点の合計3点で、いずれも覆土の中層部から発見された(第124図、第43表、図版61)。

10(020B)号跡(第125図、図版58)

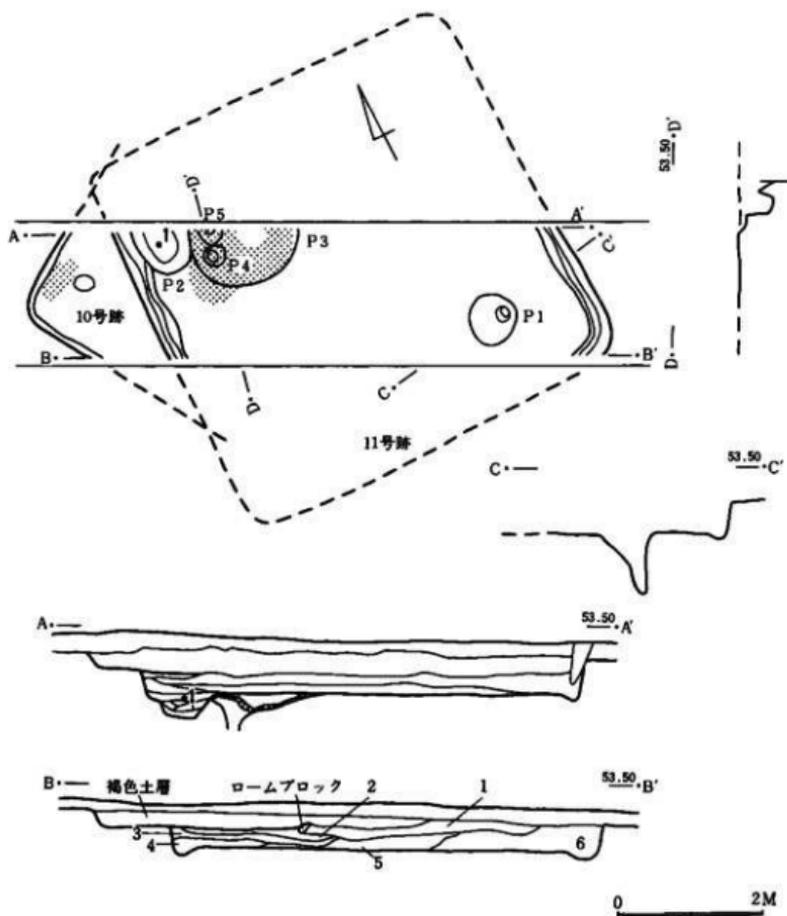
69区に位置する住居跡で、11号跡と重複し、貼り床を施す。調査区内で検出したコーナーはプラン全体の北西コーナーと推定され、図上復原された主軸方向はN-30°-W前後を指す。確認された西壁と北壁の長さはいずれも約1.1mである。プランはII層で確認されたが、11号跡と

の切り合い関係を誤認して本号跡の貼り床を見落したため、上述の北西コーナー以外を検出できなかった。土層断面には本号跡床面と同じ標高に厚さ約2cm程度の硬質な層を確認することができるが、東側に向かうほど不明瞭である。B-B'では、本号跡の西壁立ち上がりから約2.5m東側にハードロームを主体とする長径約20cmの褐色土が約40°の傾斜角で堆積しており、これが本号跡の南壁立ち上がりに対応する可能性がある。壁高は約20cmでほぼ垂直に立ち上がる。壁溝とピットは確認できなかった。床面はやや軟質な貼り床状で、北西コーナーの床面には約60cm×約20cmの範囲で山砂が堆積する。B-B'における断面観察では、覆土はソフトローム粒を少量混える褐色土の単層である。

11(020A)号跡(第125図、図版58)

調査区の東端近くの69～71区に位置する。プランはII層で確認された。10号住居跡と切り合っており、プラン確認がやや手間どった、調査区内ではプランのほぼ中央部分が検出された。調査区内で検出した西壁長は約1.6mで、コーナーはいくぶん丸味を帯びる。確認された東西壁と南東コーナーの位置にもとづいて図上復原したプランは一辺約5.5mの隅丸正方形である。主軸方向はN-2'-Eで、ほぼ真北を指す。

壁高は平均約40cmであるが、東壁で約45cmと最も深い。壁下部はハードロームを掘り込み、約82°～84°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認したすべての壁下に存在し、溝幅は平均15cm、深さは約10cmを測る。ピットは3ヶ所確認された(P1～P3)。P1は直径約70cm、底径約12cm、深さ約88cmで、断面は上方の広がった棒状を呈し、内傾する。P2とP3は完掘されていない。P3は黒色土と直径約1cmのハードロームブロックが多量に堆積しており、断面は逆台形を呈す。P3は床面上で確認されたドーナツ状の山砂堆積物を除去後に検出されたものである。住居跡床面におけるドーナツ状山砂堆積物の平均幅は約40cmで、南西部は幅約90cmに達する。P3は東側が約18°の傾斜角でゆるく立ち上がり、西側は約30°の傾斜角をなす。底面には山砂が約8cmの厚さで住居跡床面からもぐり込むように堆積している。この山砂層を除去すると、P3西壁ぎわに直径約30cm、底径約15cm、深さ約30cmの小ピット(P4)と未完掘のピット(P5)がある。P4とP5には直径約1～3cmのハードロームブロックと黒色土が堆積するがしまりが悪い。P1は主柱穴と考えられる。その北縁は約80m×1mの範囲にわたって床面との比高差が約8cm程度に隆起する。P2は貯蔵穴の可能性はあるが、P3は性格不明である。床面はハードロームを掘り込み、ローム土と暗褐色土を埋め戻して平坦堅固に整える。かまどは検出されなかった。覆土は全体に細かく、よくしまる。B-B'における断面観察では以下の6層に分けられた。1. 黒褐色土層。ローム粒、炭化粒を含む。2. 褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックを含む。炭化粒、焼土粒を多く含み、やや硬質である。3. 黒褐色土層。4. 褐色土層。5. 褐色土層。炭化粒、ローム土を多く含む。6. 褐色土層。直径約3～5cmのハードロームブロックを多量に混える。炭化粒が含まれる。



第125図 10(020 B), 11(020 A)号跡実測図



第126図 10(020 B), 11(020 A)号跡出土遺物

第44表 10号跡, 11号跡出土遺物観察表

採回 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	床直	16.6 11.2 6.5	外—口縁内外面:ヨコナテ, 体 部上位:横位ナテ, 下位: 浅いヘラケズリのちナテ, 底面:ケズリのちナテ 内—体部:横位のケズリのちナテ	細砂多 スコリア多	曹	外 } 褐色 内 }	残	体部下 半に煤 赤熱化
2	土師甕	覆土	— — (7.5)	外—体部:棒状工具による斜 位のケズリ 内—不明	砂粒多	曹	外—褐色 内—黄褐色	底部の みみ	底面に煤
3	土師甕	覆土	— — —	外—体部:タタキのち縦位の ヘラケズリ 内—体部:ヘラケズリ, ナテ	細砂少 スコリア少	良	外 } 褐色 内 }	破片	体部外面 に煤

遺物は土器が発見されたが, 量は少ない。そのうち, 甕2点と甕1点が実測可能だが, (1)を除くと本号跡と10号跡のいずれかに属するものか明らかでない。なお(1)はP2の覆土内から出土したものである(第126図, 第44表, 図版62)。

2 溝

12(003)号跡(第127図, 図版59)

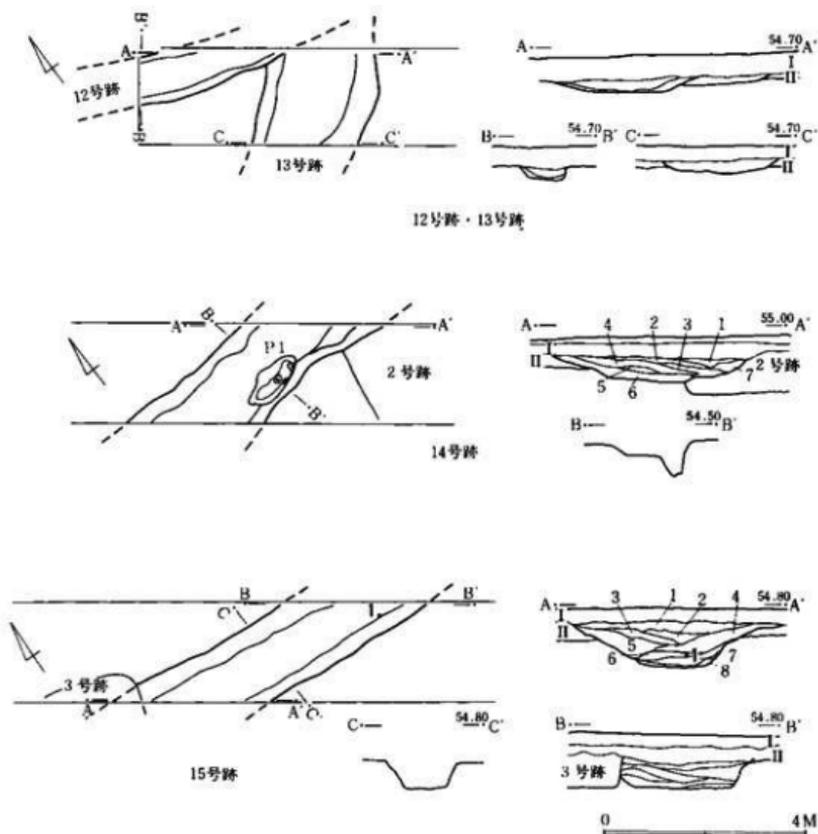
調査区の西端に位置する3区のII層で検出した溝である。確認面における上端幅は約1m, 溝底幅は約0.6m, 深さは約30cmである。調査区内で検出した部分の全長は約2.6mで, 走行方向はN-70°-W前後を指す。調査区北壁付近で13号跡を切る。壁面は明瞭で, 壁下部は約65°の傾斜角で立ち上がる。断面は逆台形を呈す。底面はハードロームを掘り込み, 堅固である。底面中央部の標高は, 西側から東側へ漸時低下する。覆土は暗褐色土にローム粒が混入し, 全体によくしまる。遺物は発見されなかった。

13(001)号跡(第127図, 図版59)

3~4区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は平均約2.2mであるが, 調査区内中央部で東壁が外側にふくらむ, 溝底幅は平均約1.2m, 深さは約10cmである。調査区内で検出した部分の全長は約2mで, 走行方向はN-46°-E前後を指す。調査区北壁付近で12号跡と交叉し, これに切られる。壁面および底面の掘り込みはソフトローム内にとどまり, 凹凸が著しい。覆土は暗褐色土の単層で, 遺物は発見されなかった。

14(008)号跡(第127図, 図版59)

13~14区のII層で確認された溝である。2号跡を切る。確認面における上端幅は平均約1.7m, 溝底幅は約1.1m, 深さは約60cmである。調査区内で検出した部分の全長は約5.3mで, 走行方向はN-80°-Eを指す。壁面は明瞭である。壁下部はハードロームを掘り込み, 北壁は約



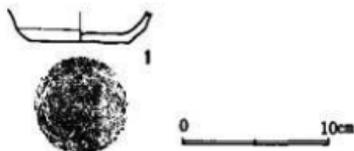
第127図 12(003), 13(001), 14(008), 15(010)号跡実測図

60°, 南壁は約80°の傾斜角で立ち上がる。断面は逆台形を呈す。底面は平坦で堅固である。東壁寄りの底面に直径約1.3m×0.6mの歪みのある長楕円形のピットがある(P1)。P1の深さは平均約30cmで、P1底には直径約10cm、深さ約15cmの3本のピットがある。覆土は、A-A'では以下の7層に区分された。各層は硬くよくしまり、右手指で強く押ししても圧痕を生じない。これは軟質な2号跡覆土とは明らかに異質で、切り合った両遺構の覆土を容易に区別することができる。1. 暗褐色土層。ローム土が混入する。2. 褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックが混じる。3. 褐色土と暗褐色土の互層。4. 褐色土層。ハードロームブロックの混入量が多い。5. 黄褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックを多量に含む。6. 暗褐色土層。底部付近にはソフトローム粒が多い。7. 黒褐色土層。

15(010)号跡(第127図, 図版59)

15～17区のII層で確認された溝で、3号跡に切られる。確認面における上端幅は平均約1.6m、溝底幅は平均約0.8m、深さは平均75cmである。調査区内で検出した部分の全長は約6mを測る。走行方向は約N-88°-Wで、ほぼ東西を指す。壁下部はハードロームを掘り込み、北壁が約55°、南壁が約70°の傾斜角で立ち上がる。断面は逆台形を呈す。底面は平坦である。覆土の粒子は全体に細かく、よくしまるが軟質で、指頭圧で容易に圧痕がつく。A-A'における断面観察では8層に分層される。1. 褐色土層。ローム土を多く含む。2. 褐色土層。3. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む。4. 褐色土層。5. 暗褐色土層。溝底に近い部分は、ソフトロームのブロックが多い。6. 暗褐色土層。ロームの混入量は少ない。7. 暗褐色土層。直径約5mmのロームブロックがみられる。8. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多く含む。

遺物は、第128図に示す坏と思われる底部破片が覆土中から1点出土した(第45表)。



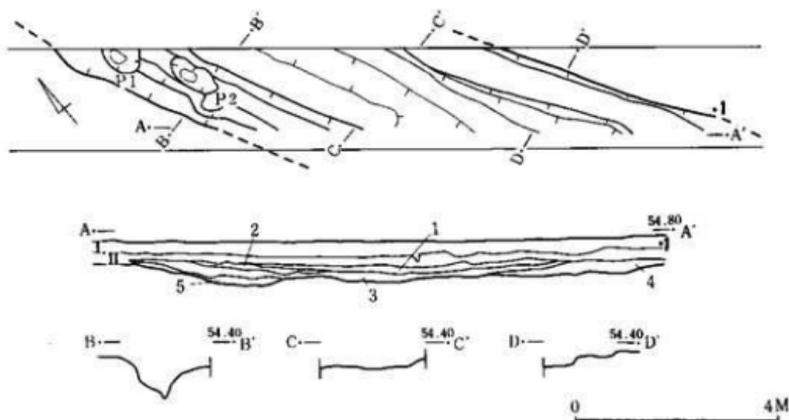
第128図 15(010)号跡出土遺物

第45表 15号跡出土遺物観察表

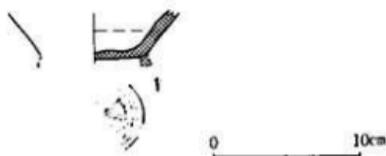
検出 番号	器種	層位	法量 □径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師坏	覆土	— — 6.8	ミズビキ成形のち回転糸切り	細砂粒少	良	外—褐色 内—黄褐色	底部のみ完存	

16(011)号跡(第129図, 図版59)

22～25区のII層で確認された溝である。溝幅が広く、全容を把握しにくい。確認面における上端幅は約3.7m、溝底幅は約0.3m、深さは約45cmである。調査区内で検出した部分の全長は約12mを測り、走行方向はN-25°-Wを指す。壁下部はハードロームを掘り込み、西壁は約50°の傾斜角で立ち上がるが、東壁下部は約35°の傾斜角で立ち上がり、上部はかなり緩やかな傾斜となる。傾斜のゆるやかな東壁面は階段状の弱い起伏が溝の走行と同方向に走る。底面に2本のピットがあるが(P1, P2)、他はおおむね平坦である。P1は完掘されていないが、底径約35cm×20cm、深さは約17cmである。P2は、直径約1m×0.5m、底径は約35cm×20cmの楕円形を呈し、深さは約40cmである。覆土は全体に軟質で、A-A'における断面観察では以下の



第129図 16(011)号跡実測図



第130図 16(011)号跡出土遺物

第46表 16号跡出土遺物観察表

挿図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	須恵 台付長 頸壺	覆土	— — 7.4	ミズビキ成形のち回転へら切 り? 高台貼付	砂粒少	良	釉青色	1/6程度	

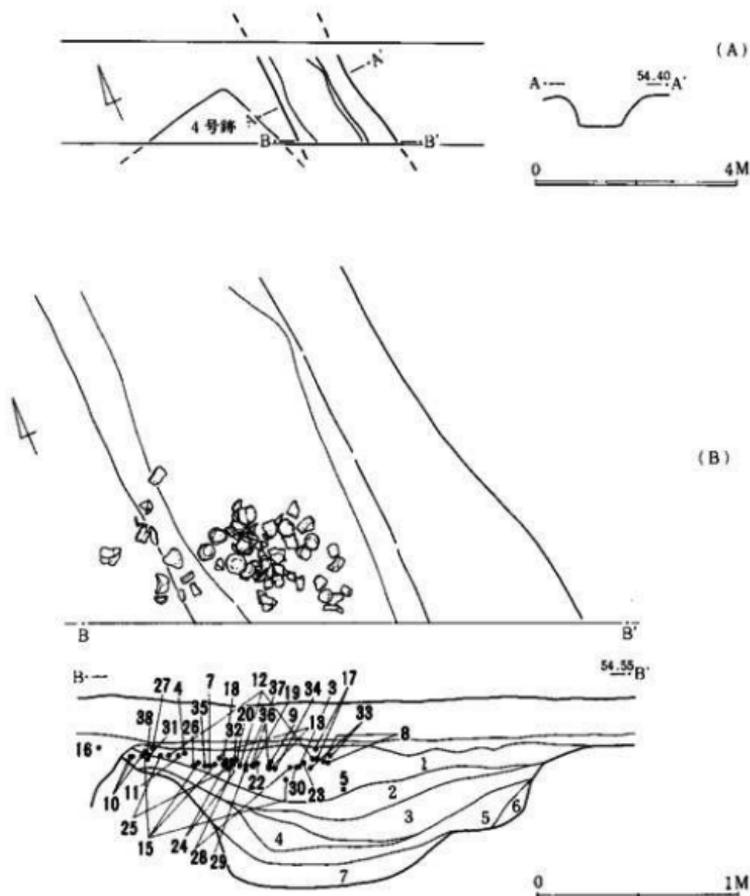
5層に分けられる。1. 褐色土層。2. 暗褐色土層。3. 暗褐色土層。2層よりもローム粒の混入が多い。4. 暗褐色土層。3層よりも軟質である。5. 褐色土層。3層に比べて軟質である。

遺物は数点の土器片が発見されたが、実測可能なものは須恵器台付長頸壺1点にとどまった(第130図、第46表)。

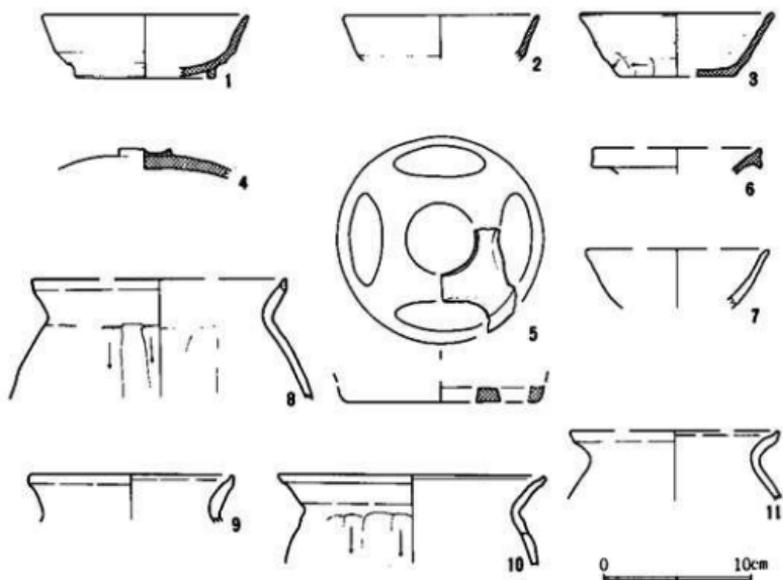
17(012A)号跡(第131図、図版55)

28～29区のII層で確認された溝である。調査区南壁で4号跡と隣接する。確認面における上端幅は約1.4m、溝底幅は約0.7mである。調査区内で検出した全長は約2.7mを測り、走行方向

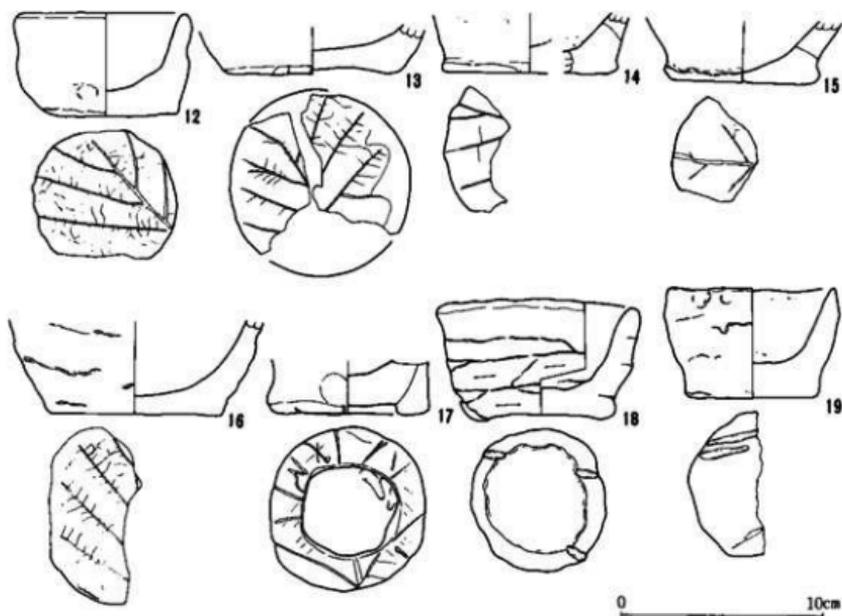
はN-5°-Wを指す。壁下部はハードロームを掘り込み、明瞭堅固である。約60°の傾斜角で立ち上がるが、ソフトロームとの境界付近から上方は約30°の傾斜でゆるやかになる。東壁には溝底から25cm上方に溝の走行方向と一致する弱い段がある。床面は平坦で堅固である。覆土には褐色土、ソフトローム粒、直径約5mm~1cmのハードロームブロックなどが堆積し、7層に分層された。1. 褐色土層。暗褐色土を主体とし、ソフトローム粒、直径1cm前後のハードロームブロック、スコリア、炭化粒を多く含む。2. 褐色土層。1層に比して赤味がある。ソフトローム粒を混える。3. 褐色土層。直径5mm~1cmのハードロームブロックをかなり多く含む。よくしまる。4. 暗褐色土層。直径約2~3mmの細かいハードロームを多く含む。5. 黄褐色



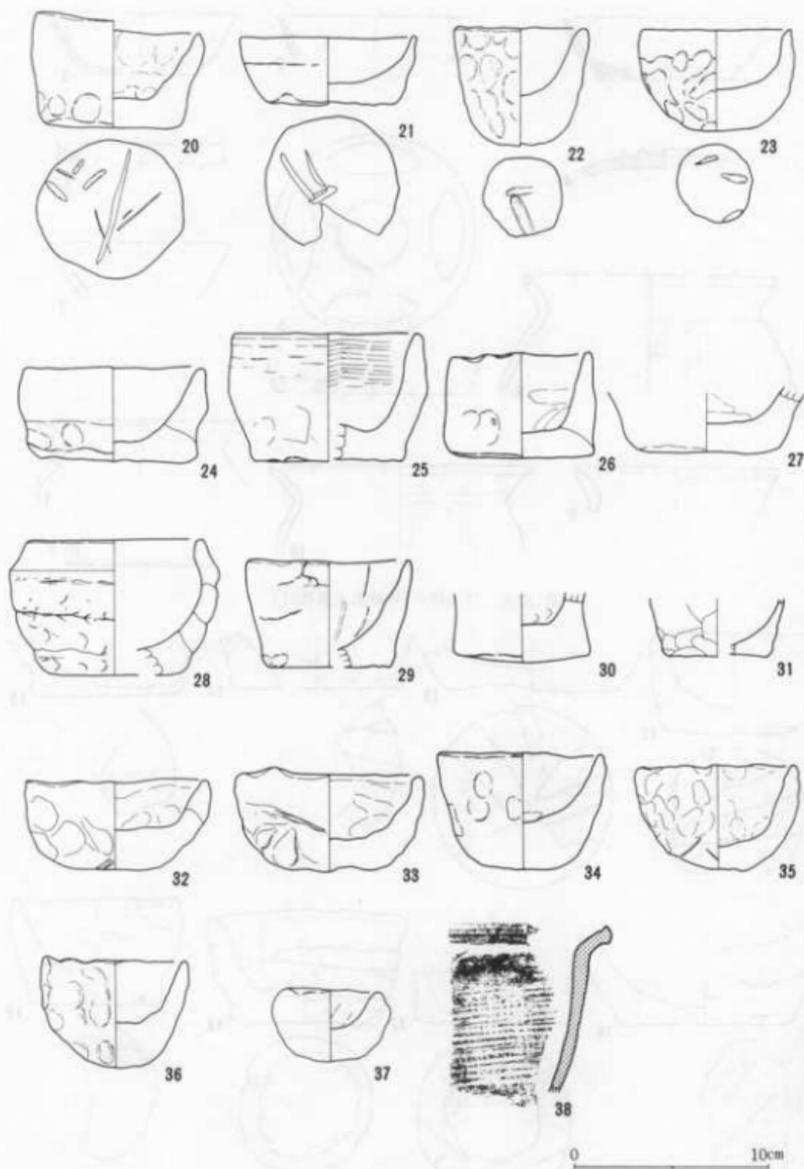
第131図 17(012A)号跡実測図(A)、遺物分布図(B)



第132図 17(012A)号跡出土遺物(1)



第133図 17(012A)号跡出土遺物(2)



第134图 17(012A)号砖出土遗物(3)

第47表 17号跡出土遺物観察表

押図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	須恵 高台付杯	覆土	14.0 4.3 9.6	ミズビキ成形のち高台貼付	細砂粒少	不良	外内} 灰白色	1/2	
2	須恵 高台付杯	覆土	13.0 — —	ミズビキ成形	細砂粒少	良	外内} 釉青色	1/2	
3	須恵杯	覆土	13.0 4.3 7.8	ミズビキ成形、成縁・底面へ ラケズリ	細砂粒 雲母} 多	普通	外内} 灰色	1/2	
4	須恵杯蓋	覆土	— — —	擬宝珠付	砂粒多	良	外内} 淡灰色	1/2	
5	須恵瓶	覆土	— — 12.8	孔は焼成前切り取り	砂粒 雲母} 多	良	外内} 淡灰色	底部の み1/2	5孔
6	須恵 長頸壺	覆土	(11) — —	—	細砂粒少	良	外内} 灰色	口縁部 のみ1/2	自然軸
7	土師環 (扁)	覆土	(12) — —	ロクロ整形	細砂粒少	良	外一暗褐色 内一灰褐色	1/2程度	内外面煤
8	土師甕	覆土	(17) — —	外一口縁内外面:ヨコナテ 体部:縦位のケズリ 内一体部:ナテ	細砂粒多 スコリア少	良	外内} 赤褐色	口縁部 のみ1/2	体部外面 煤
9	土師甕	覆土	(14) — —	口縁内外面:ヨコナテ	砂粒多	普通	外一明褐色 内一暗褐色	口縁部 のみ1/2	体部内面 に煤
10	土師甕	覆土	(18) — —	外一口縁内外面:ヨコナテ 体部:縦位のケズリのちナテ 内一体部:横位のナテ	細砂粒少	良	外一赤褐色 内一明褐色	口縁部 のみ1/2	
11	土師甕	覆土	(14) — —	外一口縁内外面:ヨコナテ 体部:斜位のナテ 内一体部:横位のナテ	砂粒少	普通	外内} 褐色	口縁部 のみ1/2	肩部、口 縁部に煤
12	土師埴	覆土	(8) (5) 6.0	内外面:横位のナテ	砂粒多 スコリア少	普通	外内} 淡茶褐色	1/2	木炭底
13	土師埴	覆土	— — 8.4	内外面:ナテ	細砂粒多	普通	外一赤褐色 内一黒色	1/2	内黒状 木炭底
14	土師埴	覆土	— (9)	外一ナテ 内一ヘラナテ	砂粒多	普通	外内} 黒褐色	底部の み1/2	木炭底
15	土師埴	覆土	— (8)	外一ナテ 内一ヘラナテ	砂粒多	普通	外一茶褐色 内一黒色	底部の み1/2	底部器厚 うすい、 木炭底

神田 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
16	土師埴	覆土	— — (8.5)	巻き上げ痕明瞭、内へラナテ	砂粒多 スコリア少	不良	外 } 淡褐色 内 }	1/2	底部に黒 斑、木葉 底
17	土師 高台作埴	覆土	— — 8.0	外一ナテ、指頭圧痕あり 内一ナテ	砂粒多	普	外一赤褐色 内一黄褐色	1/2	木葉底
18	土師埴	覆土	10.0 5.9 8.5	外一口縁内外面：ヨコナテ 体部：横位ナテ、底面：圧痕 内一体部：横位ナテ	小礫多	普	外一褐色 内一橙褐色	充存	口縁外面 黒
19	土師埴	覆土	(8) — (6.5)	巻き上げのち指ナテ、底面棒 状工具痕あり	砂粒多	不良	外 } 淡茶褐色 内 }	1/2	
20	土師埴	覆土	8.2 6.0 6.9	巻き上げのち指頭圧のち外面 ナテ、底面へラ記号?	細砂粒多	普	外 } 赤褐色 内 }	1/2	体部に黒 斑
21	土師埴	覆土	8.8 3.5 6.4	外一ナテ、底面にへラ記号(?) 内一ナテ、底部：あらいツズリ	砂粒多	普	外 } 黄褐色 内 }	1/2	内外面小 黒斑 輪づみ
22	土師埴	覆土	(7) 6.0 (3)	外一指頭圧痕、底面：棒状工 具痕 内一ナテ	砂粒多	不良	外一茶褐色 内一淡褐色	1/2	底面に黒 斑
23	土師埴	覆土	7.6 5.9 —	外一口縁内外面：ヨコナテ、 体部：指頭圧痕、底面：圧痕 内一体部：ナテ	砂粒多	普	外 } 橙褐色 内 }	充存	
24	土師埴	覆土	9.0 4.8 7.2	外一横位ナテ、体部下位：指 頭圧痕、底面：ナテ 内一横位ナテ	細砂粒多	良	外 } 赤褐色 内 }	充存	輪づみ
25	土師埴	覆土	9.4 6.5 7.8	外一口縁内外面：ハケ、体部 ：指頭圧痕、底面：ナテ 内一体部：横位ナテ	細砂粒多	普	外一赤褐色 内一黒褐色	1/2	内黒状
26	土師埴	覆土	6.5 5.4 7.0	内外面：寬いナテ 底面一ナテ	細砂粒多	普	外 } 褐色 内 }	1/2	底面に黒 斑、輪づ み
27	土師埴	覆土	— — —	内外面：ナテ、底面：ナテ	砂粒多	不良	外 } 黒褐色 内 }	1/2	
28	土師埴	覆土	(9) 7.0 (7)	外一口縁内外面：ヨコナテ 体部：ナテ 内一体部：ナテ	砂粒多	普	外 } 暗褐色 内 }	1/2	底面に黒 斑、木葉 底
29	土師埴	覆土	(8.5) 5.5 (6.5)	外一体部：ナテ、底面：ナテ 内一体部：へラナテ	砂粒多	普	外一淡茶褐色 内一暗褐色	1/2	底面に黒 斑
30	土師埴	覆土	— — 7.0	内外面：ナテ	砂粒多	良	外一赤褐色 内一淡褐色	1/2	

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	地紋	色調	残存度	備考
31	土師埴	覆土	— — (5.5)	外—横位のナデ 内—寬いケズリ	細砂粒少	普	外—暗褐色 内—黒褐色	3/4	内黒沈、 底面外面 黒斑
32	土師埴	覆土	9.0 4.5 —	外—指頭圧のち指によるケズ リ 内—指頭圧のちナデ	砂粒多	普	外 } 明褐色 内 }	3/4	底面、外 面黒斑
33	土師埴	覆土	(9.5) 5.0 —	外—指頭圧痕、ナデ 内—指頭圧痕	砂粒多	不良	外 } 赤橙色 内 }	3/4	外面黒斑
34	土師埴	覆土	— — —	外—指頭圧+ナデ 内—寬い横ナデ	砂粒多	普	外 } 赤橙色 内 }	完存	底面外面 黒斑、巻 き上げ?
35	土師埴	覆土	9.0 5.3 —	内外面：指頭圧痕	砂粒多	普	外 } 赤橙色 内 }	3/4	
36	土師埴	覆土	(7.5) 5.5 2.0	内外面：指頭圧痕	砂粒多	不良	外 } 明茶褐色 内 }	3/4	底面に黒 斑
37	土師埴	覆土	4.5 3.7 —	内外面：寬いナデ	細砂粒多	普	外 } 赤橙色 内 }	3/4	外面黒斑
38	須恵器?	覆土	— — —	外—タタキ 内—横位のナデ	砂粒 } 少 雲母 }	良	外 } 青灰色 内 }		口縁部 破片

土層。多量のソフトロームがブロック状に含まれる。6. 黄褐色土層。5層と酷似する。ソフトロームを多量に含む。7. 褐色土層。直径約1cm前後のハードロームブロックを多く含む。砂質で全体にザラつきがある。

遺物は覆土から多量に発見されたが、その大部分は復元および実測が困難である。実測可能な資料は38点で、その内訳は坏1点、壺4点、埴26点、須恵器高台付坏2点、須恵器坏1点、須恵器長頸壺1点、須恵器壺(?)1点である(第132~134図、第47表、図版63)。復元個体数が最も多い埴は、いずれも小形で粒子の粗い砂粒や小礫を胎土に含み、成形や整形が相対的に雑であるなど他の土器と比較して特異な性質をもつ。これらの埴は内外面に指頭圧痕が顕著なものがあり(20, 22~23, 32~37)、手捏のミニチュアの印象をうけるが、(16, 18~19, 24, 26, 28, 32)のように輪づみ、もしくは巻き上げ痕の明瞭なもののみられる。底面は木葉痕のあるもの(12~17)、棒状圧痕のあるもの(18~20, 22~23)、ヘラ状工具による削り痕があるもの(20~21)、ナデによって調整されるもの(24~27, 29~31)、指頭圧痕がみられるもの(33~37)などがある。なお本号跡覆土内における遺物分布は、第131図(B)に示した。この図から明らかに遺物の垂直分布は1層に集中している。ただし本号跡はB-B'に対して斜め方向に走行するので、一部の資料は本号跡2層と4号跡覆土から出土したようにみえる。一方、平面分

布は、調査区南壁に寄った約1m×0.7mの範囲に集中する傾向がある。

18(013B)号跡(第135図, 図版56)

32区のII層で確認された溝であるが、西壁は5号跡に切られ消滅しているの、確認面における上端幅、溝底幅は不明である。確認面から溝底までの深さは約20cmである。調査区内で検出した全長は約3mで、走行方向はN-25°-Wを指す。壁下部はハードロームを掘り込み、約40°の傾斜角で立ち上がる。底面は平坦で堅固である。覆土はソフトローム粒の混入する褐色土層で、最下層に層厚約5cmの暗褐色土が堆積する。堆積物は全体によくしまり、強い指頭圧を加えたとかろうじて圧痕が生じる。遺物は発見されなかった。

19(014)号跡(第135図)

35~36区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は平均約2.1m、溝底幅は平均約0.3m、深さは約30cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3.8mを測り、走行方向はN-68°-Eを指す。溝壁の傾斜は南北で異なり、北壁が約40°、南壁が約20°の傾斜角で立ち上がる。断面は非対称なU字形を呈すが、北壁はソフトロームとの境界付近から上部が約30°の傾斜にゆるむ。底面はハードロームを掘り込み、南西から北東方向に向かって徐々に標高が下がる傾向がある。覆土は、粒子の細かい褐色土を主体とし、A-A'における断面観察では以下の5層に分けられる。最下部の5層を除くといずれも軟質で粘性がある。1. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが混じる。2. 褐色土層。ローム粒が少量混じる。3. 暗褐色土層。4. 暗褐色土層。特に軟質で3層と区別される。5. 褐色土層。ローム粒に暗褐色土が混じる。非常に硬質でよくしまり、薄手の移植ゴテは用をたさなかった。なお遺物は発見されなかった。

20(016B)号跡(第135図, 図版57)

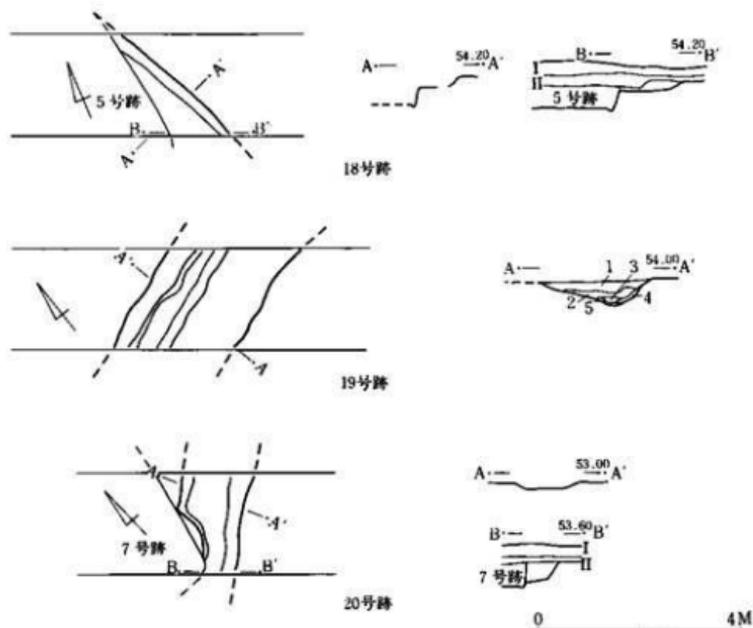
42区のII層で確認された溝である。7号跡に切られる。確認面における上端幅は約1.2m、溝底幅は約0.7m、深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約2mである。壁下部はハードロームを掘り込み、約40°の傾斜角で立ち上がるが、壁面は凹凸があり不明瞭である。東壁の走行方向はN-49°-Eで、ほぼ北東-南西方向を指すが、西壁は7号跡と切り合う部分で内側に大きく張り出し、調査区南壁寄りでは、7号跡に切られ消滅する。張り出し部の土壌はロームを主体とする黄褐色土でよくしまる。これは本号跡の広い範囲にわたって堆積する覆土(黒褐色土)とは明らかに区別されるが、7号跡の項で述べたように同住居の構築にともなう盛り土と推定される。

21(018)号跡(第136図, 図版59)

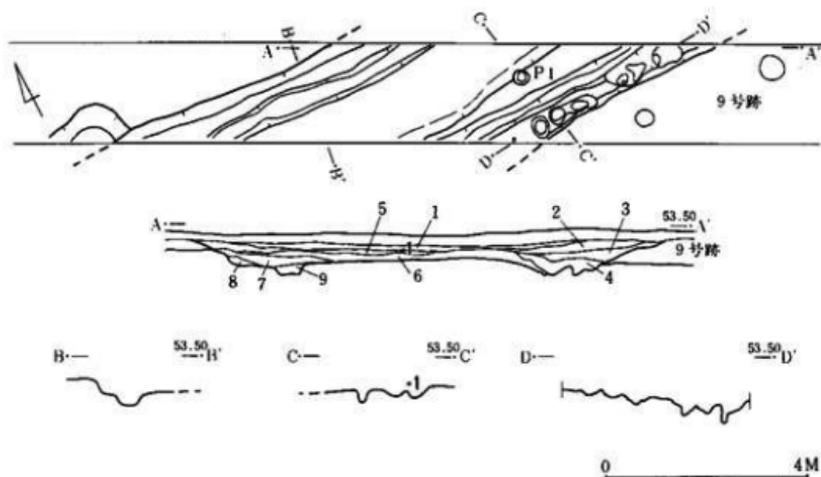
63~66区のII層で確認された溝である。9号跡を切る。確認面における上端幅は約3.7m、溝底幅は約3.3m、深さは約55cmで、今回確認された溝のなかでは最も上端幅の広いものである。調査区内で検出した部分の全長は約21mを測り、走行方向はN-87°-Wで、ほぼ東西方向を指す。

壁はハードロームを掘り込み、壁下部は北壁が約 50° 、南壁が約 40° の傾斜角で立ち上がる。壁面は凹凸が少なく明瞭である。底面はハードロームを堅緻に整え、とくに中央部は竪穴住居の床面とよく似た状態になる。北壁の立ち上がりから約30cm内側には、溝の走行と平行する小溝が存在する。この小溝の上端幅は狭いところで約30cm、平均は約55cm、溝底幅は約30cmを測る。溝底と小溝底との比高差は約25cmである。小溝の壁下部の立ち上がりは約 50° の傾斜角で立ち上がり、溝底は平坦、断面は逆台形を呈す。小溝の覆土は、後述のように非常に硬質で移植ゴテやスコップの作業が困難であった。ところで本号跡南壁側にも南壁と平行して走行する小溝が存在する。しかし、この小溝は、南側の壁の立ち上がりが本号跡南壁の立ち上がりを共有していること、底面に不定形のビット列や段差があって平坦でないこと、覆土は軟質であること、北側に幅約70cm、比高差約2cmの堤状の微隆帯があることなど、北壁寄りの小溝とは、性格が異なる。なお、本号跡底から発見されたビット(P1)の計測値は直径約30cm、底径約20cm、深さ約25cmで、断面は直立した棒状になる。

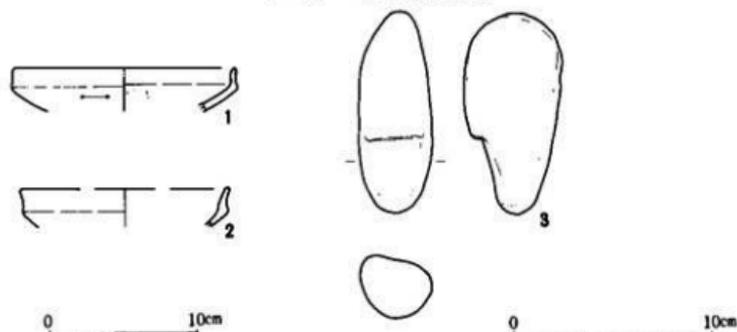
覆土は、暗褐色土、ソフトローム粒、ハードロームブロック、焼土粒、などが堆積し、全体に粒子は細かくよくしまる。A-A'では9層に細分された。1. 黒褐色土層。粒子の細かい黒褐色土を主体とする。緻密でよくしまる。2. 暗褐色土層。暗褐色土を主体として少量のソフ



第135図 18(013B)・19(014)・20(016B)号跡実測図



第136図 21(018)号跡実測図



第137図 21(018)号跡出土遺物(3 : $\times \frac{1}{3}$)

第48表 21号跡出土遺物観察表

挿図番号	群種	層位	測量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師環	覆土	15.0 — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ケズリのちナデ 内—体部：ミガキ	細砂粒多	普	外 内 } 暗褐色	口縁部 のみ	内黒状
2	土師環	覆土	(14) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ケズリのちナデ 内—体部：ナデ、ミガキ	細砂粒少 スコリア少	普	外 内 } 暗褐色	口縁部 破片	
3	砥石	覆土		自然円礫の一面を使用した砥石、最大長10.2cm、最大幅3.7cm、厚さ5.0cm、重量260g					石質：砂岩

トローム粒を混入する。焼土粒がある。固くよくしまる。3. 暗褐色土層。色調は2層と似るが、ソフトローム粒の混入量が多く、軟質である。4. 褐色土層。直径約2cm程度のハードロームブロックが混入する。軟質である。5. 暗褐色土層。暗褐色土を主体とし、ソフトローム粒を混入する層で、よくしまる。6. 暗褐色土層。5層と似るが、5層よりも固くよくしまる。7. 黒褐色土層。暗褐色土、黒色土を主体とするが、直径約1mmのハードローム粒と焼土粒が散在する。8. 褐色土層。黒褐色土とソフトローム粒とを主体とする層で軟質である。9. 黄褐色土層。直径約2cm前後のハードロームブロックが密に堆積する。ブロックの間隙を黒褐色土が充填する。非常に硬質である。

なお本号跡は9号跡を切り、そのかまどを破壊していると推定されるが、調査区内の覆土中には、それに由来すると考えられる山砂等の構築材は存在しなかった。

遺物は少量の土器片と石器が出土した。そのうち復原実測の可能なものは、坏2点、砥石1点の合計3点である(第137図、第48表)。

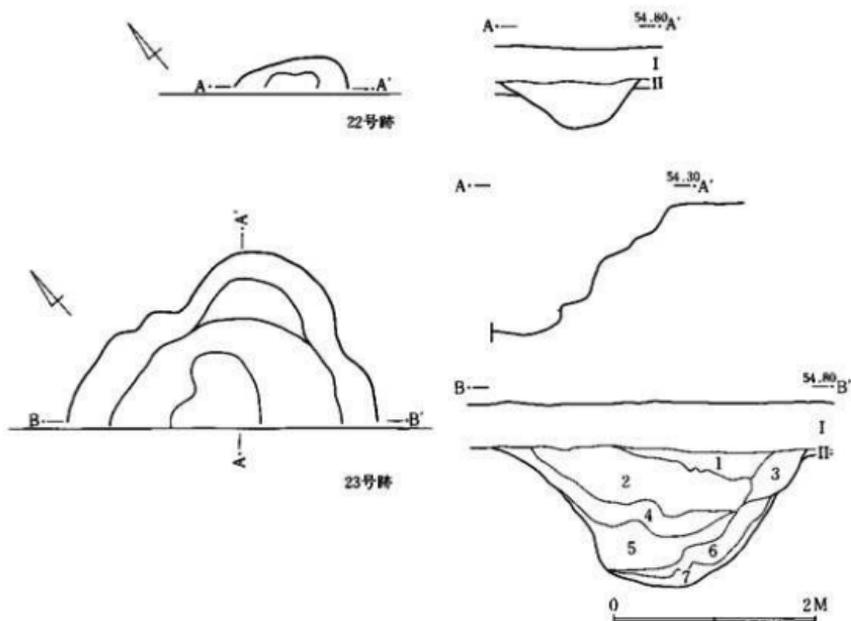
3 土 塚

22(002)号跡(第138図)

5区に位置する土塚で、プランの多くの部分が調査区外に存在するものと推定されるが、その全容は不明である。II層で確認された。確認面における開口部は、約1.1m×0.3mで、確認面から最深部までの深さは約25cmである。掘り込み面はII層上面で、調査区内で検出した最深部はソフトローム層内にとどまる。壁面は凹凸がある。壁下部は約30°~40°の傾斜角で立ち上がる。覆土は、粒子の細かい暗褐色土にソフトローム粒を主体とする褐色土が鹿の子斑状に混入する。土粒はよくしまるが、遺物は発見されなかった。

23(006)号跡(第138図)

8~9区に位置する土塚で、II層で確認されたが、調査区外にも多くの部分が存在すると考えられ、その全容は明らかでない。確認面における開口部の大きさは、約1.8m×3.1mである。確認面から底面までの深さは、約1.4mですり鉢状を呈す。壁面と底面は凹凸にとみ、壁面は約40°の傾斜角で立ち上がる。覆土は7層に分層される。1. 褐色土層。黒色土とローム粒が混在する。2. 褐色土層。直径約2~5cmのハードロームブロックと褐色土が主体をなす。しまりはわるい。3. 黒色土粒を主体とする層。4. 褐色土層。2層と酷似するが黒色土を多く含む。5. 黄褐色土層。直径約20cmのハードロームブロックを主体とし、ブロックの間隙を黒土色が充填する。6. 暗褐色土層。ローム粒主体の黄褐色土と黒色土主体の暗褐色土が数cmの厚さで互層状に堆積する。7. 黄褐色土層。直径約15cmの大形ハードロームブロックを主体とする層。黒色土が混じる。



第138図 22(002)・23(006)号跡実測図

第4節 包含層出土の遺物

1 石器

石器は、28区から出土した石鏃が1点ある(第139図9, 第49表, 図版62)。石質は玄武岩に近いが、表中には安山岩とした。

第49表 包含層出土石鏃観察表

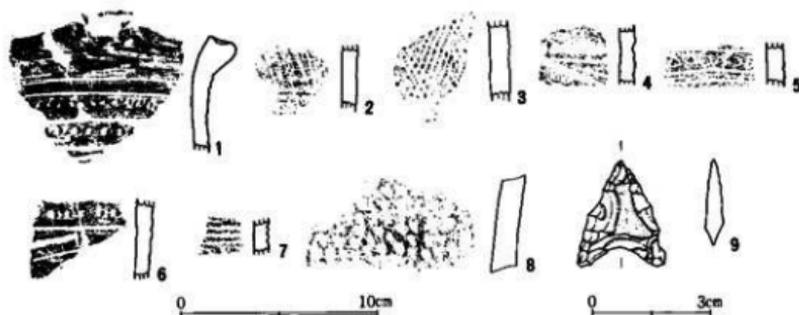
挿図 番号	種 類	出土地点	石 質	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	厚 さ (mm)	重 量 (g)	先端角 度(°)	備 考
9	石 鏃	28 区	安 山 岩	27.8	22.1	4.6	2.0	52	完 存

2 土 器

〔1〕縄文時代の土器(第139図1~8, 図版62)

包含層から得た縄文土器片は8点である。いずれも56区のII層中から出土した。

(1)と(6)は同一個体由来と考えられ、(1)は口縁部破片である。口縁は外反し、ゆるい波



第139図 包含層出土遺物(1) (9:×子)

状を呈す。口唇は外側に傾き、上端が肥厚する。胎土は緻密で、直径約0.2mmの白色不透明砂を多く含む。器面は内外面とも横位のナデが施されるが、内面よりも外面及び口唇部の調整が良好である。焼成は良く、外面は弱い光沢がみられるが、内面は若干粉っぽい。色調は、外面が暗褐色、内面が赤味を帯びた淡褐色を呈す。厚さは、口唇部が約12.5mm、胴部が約7mmである。口唇上面はナデによって整えられ平滑だが、口縁波状頂部に約12.5mm×9mmの楕円形陰刻文がある。文様は、口縁から約1cm下に重ねられた浅い横位沈線と沈線間に施された浅い刺突文列である。沈線は棒状工具によって施文されたものと考えられるが、刺突文の施文具は明らかでない。

(2)は胎土に直径約0.2mm前後の白色不透明砂を多量に含む。器面は内外面ともていねいに調整され、平滑である。焼成は良好で、硬質である。色調は内外面とも暗褐色を呈す。厚さは約8mmである。文様は幅約0.8mmの横位沈線を約5～6mm間隔で重ねる。各沈線は浅く不明瞭で、走行にフラつきがある。

(3)は胎土に細砂粒を多量に含み、少量のスコリアが混入する。器面は内外面ともていねいなナデで調整される。焼成はあまく、表面は粉っぽい。色調は明るい淡褐色で、内面は外面より暗い。厚さは約9.5mmである。文様は斜位の条痕文を組み合わせた格子目文が描かれる。条痕線幅は約1mm、条痕線間隔は約1.8mmである。条痕文の施文具は明らかでない。

(4)は胎土に細砂粒を多く含み、直径0.3mm前後の白色不透明砂を混える。器面は内外面ともナデによって調整される。焼成はややあまく、粉っぽい。色調は内外面とも淡褐色を呈し、厚さは約7.5mmである。文様は幅約3.5mmの幅広い沈線を横位と斜位に描く。

(5)は胎土に直径約0.6mmの白色不透明砂粒を多量に含む。器面は内外面ともていねいなナデで調整される。焼成は良く、硬質である。色調は内外面とも焦げ茶色を呈し、厚さは約8.5mmである。文様は幅約1.5mmの横位沈線を重ね、沈線によって区画された幅約9mmの文様帯に爪形の浅

い刺突文が約7mm間隔で横位に並ぶ。

(6)は(1)と同一個体に由来すると考えられ、胎土、器面調整、焼成等は(1)とよく似るが、色調は内外面とも淡い暗褐色を呈し、厚さは約8mmである。文様は約7mm間隔で横位に並ぶ刺突文列と幅広の沈線で、沈線は横位と斜位に描かれる。横位沈線は刺突文の文様帯の上下を区画するもので、沈線幅は約2mmで浅く、棒状工具を用いて描いたものと推定される。

(7)は胎土に砂粒を多量に混える。器面は内外面ともナデによって調整され、焼成は良い。色調は暗茶褐色を呈し、厚さは約7.5mmである。文様は幅約1mmの横位沈線が約3.5mm間隔で重ねられる。

(8)は胎土に細砂粒を多量に含み、内外面ともていねいなナデで調整される。焼成はややまわく、表面は粉っぽい。色調は内外面とも暗色を帯びた淡褐色を呈す。厚さは約13mmと厚い。文様は、幅の狭いへら状工具を粘土面に対して斜めに浅く押し出した刺突文を全面に施す。

(2) 歴史時代の土器

64区の表土から数点の土器片が得られたが、そのうち復原実測が可能なものは、壺1点、須恵器大壺1点である(第140図、第50表)。



第140図 包含層出土遺物(2)

第50表 包含層出土遺物観察表

押図 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	須恵 大壺	64区	(31) — —	内外面：ナデ	砂粒多	普	外 内 } 暗褐色	口縁破 片	
2	土師壺	64区	— — —	外—口縁内外面：ココナデ 体部：へらケズリ、刺突あり 内—体部：ナデ	細砂粒多 スコリア少	普	外 内 } 暗褐色	口縁破 片	

第5節 小 結

今回の主な調査結果を時代別に述べると以下のようになる。

<先土器時代>

2 m×2 mの試掘用グリッドを7地点に設け、ローム層内を調査したが、先土器時代の遺物等を確認することはできなかった。しかし、ATが存在すること、今回のグリッド内ではⅧ層の細分が困難であることなどが明らかである。

<縄文時代>

住居跡等の遺構は発見できなかったが、土器片がわずかに採集された。その大部分は、外面に太めの強い平行沈線文を施すもので、田戸下層式に比定される。これ以外に、外面全体にヘラ状工具による刺突文を施すものが得られたが、時期等は明らかでない。

<古墳時代以降>

古墳時代後期の土師器、奈良、平安時代の土師器、須恵器、鉄製品などをともなう住居跡と溝が検出された。遺構の検出状況から判断すると、遺跡の存在する台地上には、古墳時代後期から奈良、平安時代にかけての集落が展開していたものと推定されるが、今回の調査ではその詳細を明らかにできるまでに至っていない。

第5章 青馬前畑遺跡

第1節 遺跡の概要と調査方法

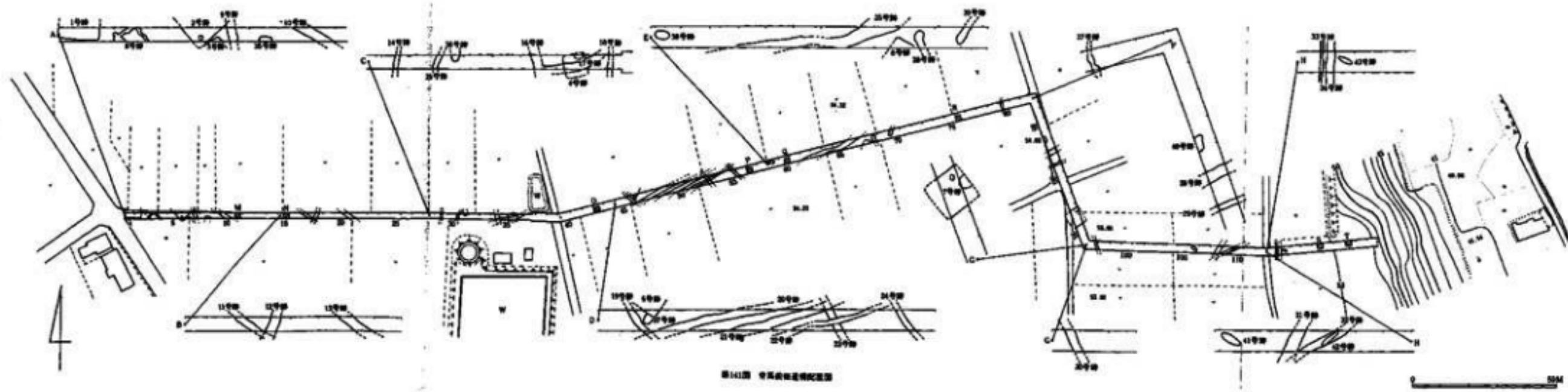
1 遺跡の概要

青馬前畑遺跡は、小座ふちき遺跡から東南東へ約600mの位置にあり、千葉県香取郡東庄町大字青馬字前畑2,460他に所在する。遺跡のある台地は、標高約53.5mの平坦な地形で、畑地、果樹園等に利用されている。台地の東側には、利根川の支流である小平川に開析された比高差約15mの谷が入り、遺跡の東側から北側を巡る。遺跡の西は小座の集落に隣接し、南は小南の集落まで平坦な畑地が約1.2kmほど続く(第105図)。

2 調査方法

調査は、東総用水の水路が敷設される農道部分と畑地部分の面積1,350㎡を対象に行った。農道の表土は、山砂を主体とする盛土をてん圧した硬質な土層であるので、表土除去は、専用バケットを取り付けたバックホウを用いて調査予定地の西側から東へ向かって行ない、遺構の調査は、この作業を追うかたちで進行した。遺構番号は、遺構プランの確認順に調査区の西から東へ付した。調査の開始にあたっては、用水建設用の図根点(I P杭)を利用して調査区域を区分し、遺物の採集と遺構の記録等はこれに従って行った。各区の設定はI P26杭を起点として東方へ各I P杭間を結び、各杭間を4mごとに区切って設定した。区名は起点から順次1, 2, 3…のアラビア数字を付した(第141図)。なお、今回の調査区域は起点から東へ約147mまでの区間が幅2m、それ以东は幅3mに広がっている。したがって、各区の面積は原則として2m×4mと3m×4mの2種類である。また、I P杭の位置については座標が与えられており、第141図に示したポイント名とI P杭との関係は以下の通りである。

ポイント名	測点	座	標
A	I P26	X = -21761.125	Y = 76530.578
C	I P25	X = -21732.040	Y = 76636.720
F	I P23	X = -21634.202	Y = 76831.426
G	I P22	X = -21678.636	Y = 76863.856
H	I P21	X = -21663.183	Y = 76926.452



第141圖 青島鐵路遺構配置圖

第2節 層 序

青馬前畑遺跡の層序はM～T地点で観察した(第141図)。第142図にはO地点の土層断面を示した。

第I層は表土層である。山砂を主体とする盛土をてん圧した硬質な農道の盛土と畑地の耕作土である。

第II層は暗褐色土を主体とし、ローム土が混入する。粘性があり、土粒は細かくよくしめます。地点によって、第II層上面に暗茶褐色の土層をみとめる。層厚は平均約6～7cmを測るが、これがいわゆる新期テフラかどうかは明らかでない。

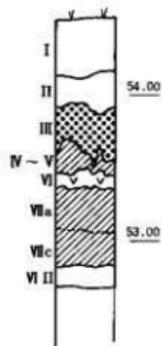
第III層は立川ローム層軟質部で、粒子の細かい黄褐色土である。

第IV～VIII層はいわゆるハードローム層で、粘性がある。色調のちがいによって以下のように分層される。第IV～V層は暗色帯である。第VI層は明色帯で、乾燥によって灰白色に変化する。ガラス質の堆積物を含む。第VII層は暗色帯で、立川ローム層の第2黒色帯に相当するものと思われる。下位にある第VIII層との境界はほぼ平坦であるが、地点によっては、第VIII層の上位に黒色味が相対的に強いVIIc層が存在し、第VII層はVIIa層とVIIc層に細分される。第VIII層は立川ローム層の最下層に相当すると考えられる明色帯で、粘性が強い。

第3節 遺構と遺物

今回の調査で確認された遺構は、竪穴住居跡7軒(1号跡～7号跡)、溝27条(8号跡～34号跡)、土壇9基(35号跡～43号跡)で、溝が多く発見された。その分布は第141図に示すとおりである。遺構はほぼ全区間をつうじて検出したが、土壇3基をのぞくすべての遺構は、調査区の内外にまたがって存在するため完掘できなかつた。溝は調査区域のほぼ全域から検出されたが、住居跡は調査区域の西端の1～7区に集中しており、8区以東では4軒の住居跡が散散的に検出された。また、9基の土壇のうち3基が陥し穴状遺構で、調査区の東部で検出した。

遺物は整理箱にして6箱が得られた。その主体は奈良、平安時代の土器破片である。それ以外には、若干量の時期不明の土師片と磁器等が混じる。



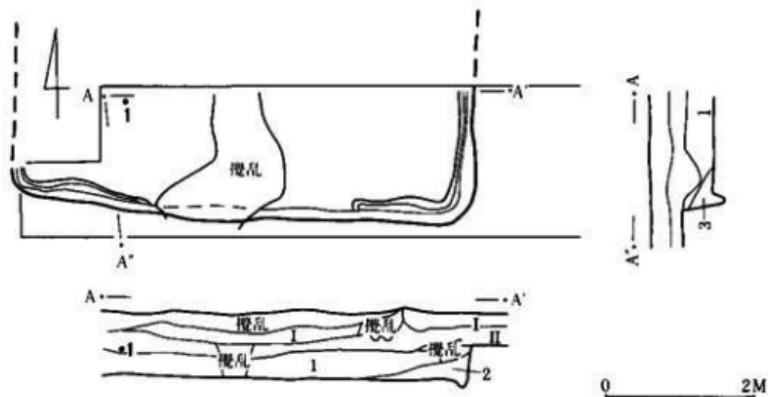
第142図 青馬前畑遺跡層序

1 竪穴住居跡

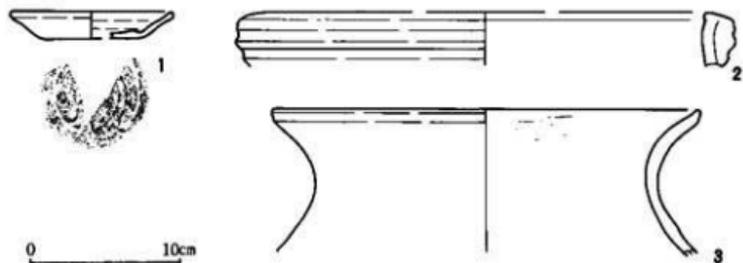
1 (001 A)号跡(第143図, 図版65)

調査区の西端にある1~2区に位置する住居跡で、プランはII層で確認された。プランの大部分は調査区外にあり、調査区内では、南壁と推定される部分が発出された。プランの中央部を攪乱が縦走る。南壁長は約6.2m、確認された東壁は約1.8mであるが、西壁の位置はボーリング・ステッキによって図上復元されたものである。東西壁を図上延長して推定した主軸方向はN-2°-E前後で、ほとんど真北を指す。

壁高は平均約50cmを測り、壁下部はハードロームを掘り込み、約80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は南壁中央部で約2.7mとぎれるが、その他の壁下を全周する。溝幅は平均約12cmを測り、東壁下と溝端で狭くなる。壁溝の深さは約8~10cmであるが、南壁中央部の溝端では浅く不明瞭になる。ピットは確認できなかった。床面はハードロームを平坦堅緻に整えている。覆



第143図 1 (001 A)号跡実測図



第144図 1 (001 A)号跡出土遺物

第51表 1号跡出土遺物観察表

標図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	新土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師皿	覆土	10.8 1.8 6.5	ミズビキ成形のち回転車切り	細砂粒少	良	外 } 赤褐色 内 }	%	
2	土師甕 器種不明	覆土	— — —	ナデ、内面ケズリ	細砂粒少 雲母少	普	外 } 黒褐色 内 }	口縁部 ごく一 部	外全面煤
3	土師甕	覆土	39.0 — —	外—ナデ 内—口縁部：ハケのちナデ 体部：ナデ	砂粒多	普	外 } 黄褐色 内 }	%程度	

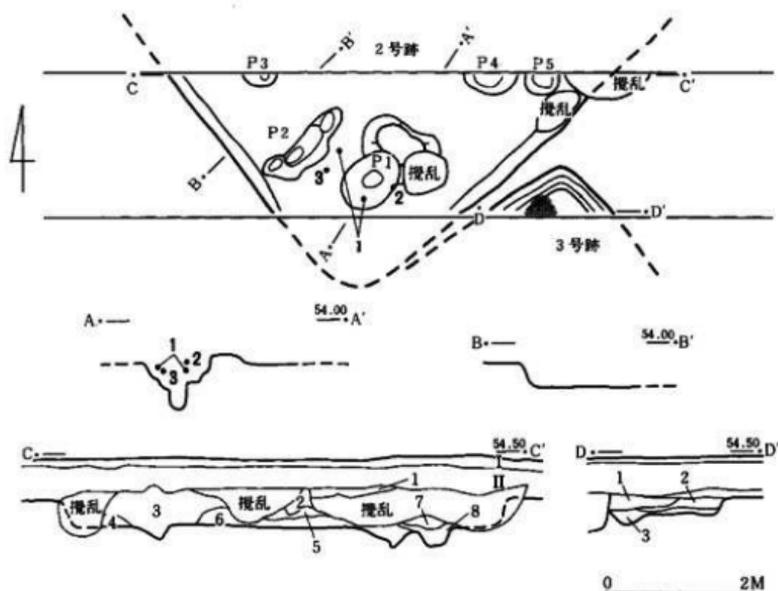
土は粒子の細かい暗褐色土で、指頭圧で容易に圧痕が生じる。A-A'-A"における断面観察では以下の3層に分けられる。1. 褐色土層。直径約5mmのハードロームブロックが混じる。炭化粒が混じる。2. 黄褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックが多量に混じる。直径約4mmの炭化粒が多い。3. 黄褐色土層。ローム土が多量に混じる。

遺物は覆土中に散在していたが、いずれも土器片で、実測可能な資料は、皿1点、甕1点、性格不明なもの1点にとどまった(第144図、第51表、図版70)。出土地点が明らかなのは覆土上層から発見された(1)だけだが、流れこみの可能性が高い。

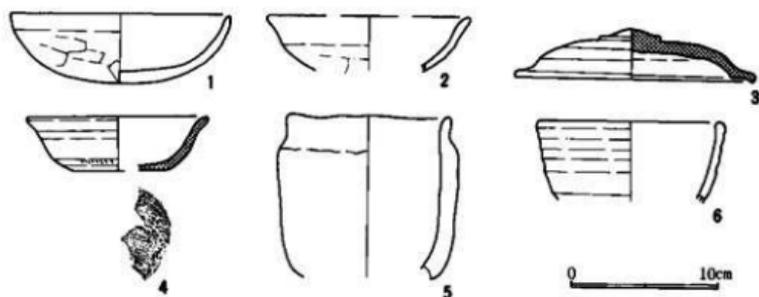
2 (002A)号跡(第145図、図版65)

5～6区に位置する住居跡である。プランはII層で確認したが、その大部分は調査区外に存在する。調査区内ではプランの南西部と推定される部分が検出された。確認された壁長は西壁が約2.3m、南壁が約2.4mで、南壁と調査区北壁の交点付近は攪乱が著しい。確認された西壁を図上延長すると、その走行方向はN-40°-W前後になるが、住居跡の主軸方向と一致するかどうか明らかでない。

壁高は平均約32cmで、明瞭堅固である。壁下部はハードロームを掘り込み、約50°の傾斜角でややゆるやかに立ちあがる。確認した壁下には、壁溝は認められない。ピットは5ヶ所で確認された(P1～P5)。P1は直径約90cm×65cm、底径約20cm、深さ約60cmで、断面は呼び鈴形を呈す。P1の北東縁は、約1.1m×50cmの範囲にわたってハードロームが堆積し、床面との比高差約12cmの隆起部をつくる。P2は、約1.5m×40cmの不規則な長楕円形を呈し、底部に底径約15cm前後の小ピットが3本ある。P3、P4、P5は、調査区壁にかかっていて全容は明らかでないが、確認された深さはいずれも約25cmである。P5の断面は逆台形を呈し、覆土に炭化粒、焼土粒を多く含むが、他のピット内覆土は住居跡覆土と区別することが困難である。P1は、支柱穴の1つと考えられる。P2～P5は性格不明である。床面は、攪乱による影響が大きく、残存状態は良好とはいえない。確認された部分は、きわめて堅固で、ハードローム



第145図 2(002A), 3(002C)号跡実測図



第146図 2(002A)号跡出土遺物

を平坦に整えている。かまどは確認出来なかった。覆土は暗褐色土、ローム粒、山砂などが堆積するが、全般に軟質である。C-C'における断面観察では以下の8層に分層される。1. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを多く含む。2. 褐色土層。ローム粒が混入する。3. 褐色土層。ローム粒を多く混える。4. 黄褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックが多い。5. 褐色土層。ローム粒を混じえる。6. 黄褐色土層。直径約1.5cmのハードロームブ

第52表 2号跡出土遺物観察表

標記 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師環	覆土	16.8 — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：横位のヘラケズリ のちナデ 内—ナデ	細砂粒少	良	外 } 赤褐色 内 }	1/2	外全面煤
2	土師環	覆土	(14) — —	外—体部上位：横位ナデ 体部下位：横位のケズリ 内—横位ナデ	細砂粒多	普	外 } 赤褐色 内 }	1/2	
3	須恵環蓋	覆土	16.4 3.5 —	ミズビキ成形、外面一部ヘラ ケズリ	砂粒多	普	外 } 灰白色 内 }	完存	
4	須恵環	覆土	12.4 3.6 6.8	ミズビキ成形、底面：回転糸 切り	細砂粒少	普	外 } 赤褐色 内 }	1/2	内面煤
5	土師環	覆土	11.4 — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：あらいナデ 内—体部：あらいナデ	細砂粒多	不良	外—褐色 内—暗褐色	1/2	
6	磁器碗	覆土	16.8 4.8 —	ミズビキ成形	細砂粒少	普	外 } 淡緑色 内 }	口縁部 のみ1/2	

ロックを多く混える。7. 暗褐色土層。ローム粒、炭化粒、焼土粒を多く含む。8. 褐色土層。焼土粒、炭化粒を多量に混える。7層よりも軟質である。

遺物は土器片が多く発見された。そのうち環2点、壺1点、須恵器環1点、須恵器環蓋1点、磁器碗1点が実測可能である(第146図、第52表、図版70)。このうち(6)は明らかに攪乱による混入であるが、土器片はP1周辺およびその覆土内から出土し、(1)と(3)は床に密着した状態で発見された。

3(002C)号跡(第145図)

2号跡の南側に位置する住居跡である。プランはII層で確認された。プランの大部分は調査区外に存在すると考えられ、調査区内ではその北東コーナーが検出された。確認された北壁は約1.2m、東壁は0.9mである。確認された東壁を図上延長して走行方向を求めるとN-40°-WからN-45°-Wの範囲にあるが、住居跡の主軸方向と一致するかどうか明らかでない。

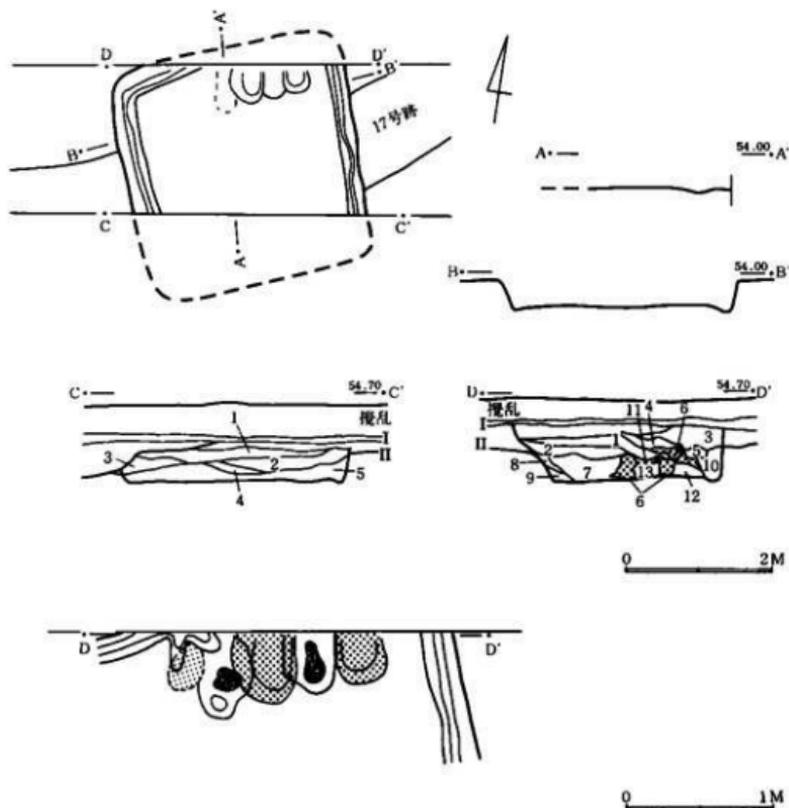
壁高は約10cmで、壁下部はハードロームを掘り込む。発掘は技術的に困難で、壁面状態の調査は十分に行えなかったが、約60°の前後の傾斜角で立ち上がるものと推定される。壁溝は確認した壁下を全周する。溝幅は約15cm、深さは約7cmである。床面は軟質であるが、コーナーで観察された状態が住居跡の床面全体の状態をどの程度代表しているか明らかでない。ピットとかまどは確認できなかった。覆土にはローム粒、黒色土、焼土粒、ハードロームブロックなどが堆積しており、よくしまる。D-D'における断面観察によると以下の3層に分けられる。

1. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを多く含む。2. 褐色土層。1層よりもローム土の含量は少ない。焼土粒を多く含む。3. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多く含む。覆土内における焼土粒の混入割合は高く、北壁下では床面に密着した状態で発見された。焼失住居跡の可能性が高いが、炭化粒、炭化材は未発見である。

遺物は覆土中から数点の土器片が得られたが、実測にたえるものはない。

4 (012A)号跡(第147図, 図版66)

35~36区に位置する住居跡である。プランは第II層で確認されたもので、17号跡が本号跡中央部を横断し、覆土と東西壁が攪乱をうける。調査区内で検出したのはプランの中央部分で、プラン南部は調査区外に存在する。確認された壁長は西壁が約1.8m, 東壁が約2mで、北西コーナーは丸味を帯びる。東西壁間の最短距離は約3.2mである。調査区南壁を東西両壁と平行方



第147図 4 (012A)号跡出土遺物



第148図 4(012A)号跡実測図

第53表 4号跡出土遺物観察表

検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師環	覆土	13.5 — —	口縁内外面：ヨコナデ 体部外面：ケズリのちナデ 体部内面：ナデ	砂粒多 スコリア少	普	外 内} 肌色	1/2	口縁内外 面に埋

向にボーリング調査したところ、第147図に示す位置で硬質なハードロームが確認された。これらは壁状をなし、本号住居跡の南壁に相当するものと考えられる。もし、これが正しいとすると図上復原される本号跡プランは隅丸方形で、主軸方向はN-16°-Wである。

壁高は平均約40cmで、壁下部はハードロームを掘り込み、約80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認したすべての壁下を全周するが、東壁中央部で浅くやや不明瞭になる。壁溝幅は平均約14cmであるが、北壁中央部付近で幅広くなる。深さは平均5～6cmで底面は起伏にとむ。床面は堅緻でハードロームを平坦に整えるが、ピットは確認できなかった。かまどは北壁東寄りに設けられている。床への掘り込みは約40cm×45cm以上の楕円形で、わずかに4cm程床面を掘り込み、暗褐色土とローム粒をうめ戻して火床とする。火床はよく焼け、床掘り込み底のハードローム面が広い範囲にわたってレンガ化する。焚口から、煙道部にかけては、山砂、炭化材の小破片、焼土粒が堆積し、やや軟質である。かまど左袖脇の床面には、暗褐色土とローム土が貼り床状にうすく堆積する。これを除去すると、赤褐色にレンガ化した約60cm×40cmのごく浅い掘り込みが検出された。この掘り込みは推定される北壁の中央部に位置する。この西側につづく床面は堅固で平坦だが、約30cm×20cmの範囲にわたって山砂が密着する。また、北壁下をめぐる壁溝はこの付近でアメーバ状に溝幅を広げる。北壁の全容が検出できなかったので、詳細は明らかにできないが、本号住居のかまどは建築当初、北壁中央に設けられ、しばらくの間使用されたが、何らかの都合で左袖を撤去して右袖を補強したのちに、東側に移設した可能性が考えられる。北壁の壁掘り込みの状態が明らかになれば、この可能性の成否を詳しく検討することができるものと思われる。

覆土には黒色土、ローム粒、山砂、焼土粒、炭化粒などが堆積する。堆積物の粒子は細かく、全体によくしまる。C-C'における断面観察では、以下の5層に分層される。1. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックを混える。焼土粒、炭化粒が混じる。2. 黄褐色土層。ソ

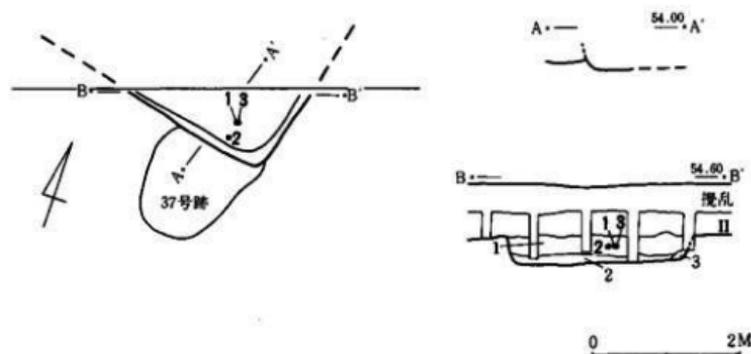
フトローム粒が多量に混入する。直径約1～3cmのハードロームブロックが存在する。3. 暗褐色土層。2層に似るがソフトローム粒の混入度が低く暗色味が強い。4. 黒褐色土層。黒色土が多く混じる。5. 褐色土層。1層に酷似する層、焼土粒、炭化粒を含む。なお、かまどを横断するD-D'における観察では、覆土は以下の13層に細分され、かまど天井部に相応する部分の保存も良好である。1. 褐色土層。ソフトローム粒が混入する。2. 暗褐色土層。直径約1cmの山砂ブロックと直径約3mmの焼土粒が混じる。3. 明褐色土層。ローム土、山砂が含まれる。4. 灰暗褐色土層。暗褐色土を主体としローム粒、山砂が鹿の子斑状に散在する。5. 黒褐色土層。ローム粒が混在する。6. 灰緑色砂層。山砂を主体とし、若干量の黒色土、炭化粒、焼土粒を混える。7. 暗褐色土層。粒子はやや粗く、ソフトローム粒、炭化粒が混じる。8. 褐色土層。ソフトロームが多く含まれる。9. 灰褐色土層。山砂、ローム土が混在する。10. 暗褐色土層。7層と酷似する。11. 灰緑色土層。6層に類似するが山砂の混入度は少ない。12. 暗褐色土層。ハードロームブロックが混入する。13. 灰暗褐色土層。山砂、炭化粒、炭化材破片、焼土粒を多く含む。

発見された遺物はいずれも土器片で、その大部分はプラン中央部の覆土中に散在していた。これらは接合が悪く、復原実測の可能な資料は坏1点にとどまった(第148図、第53表)。

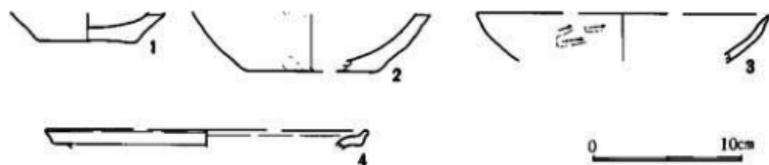
5 (011C)号跡(第149図、図版65)

46～47区に位置する住居跡で、II層で確認されたが、37号跡と切合っており、プランの確認がおくれた。プランの大部分は調査区外にあって、調査区内では南東コーナーと推定される部分のみが検出された。37号跡との新旧関係は不明である。確認された南壁は約2m、東壁は約1.2mである。両壁を図上延長して求めた東壁の走行方向は、N-15°-E前後であるが、これがプラン全体の主軸方向と一致するかどうか明らかでない。

壁高は約40cmで、壁下部はハードロームを掘り込み、約80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝およ



第149図 5 (011C)号跡実測図



第150図 5(011C)号跡出土遺物

第54表 5号跡出土遺物観察表

挿図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	現存度	備考
1	土師甕	覆土	— — 6.8	外一広いナデ 内一ナデ	細砂粒少	昔	外 } 黄褐色 内 }	底部の み	体部下半 に黒斑
2	土師甕	覆土	— — (9)	外一体部：棒状工具のケズリ 底面：不明 内一ナデ	砂粒多 雲母少	昔	外一暗褐色 内一明褐色	底部の み	—
3	土師環	覆土	— — —	外一口縁内外面：ヨコナデ 体部：ヘラケズリのちナデ 内一体部：横位ナデ	細砂粒少 雲母含	良	外一赤褐色 内一黄褐色	—	—
4	土師甕	覆土	(22) — —	横位ナデ	砂粒多 雲母含	良	外一明褐色 内一赤褐色	—	内面煤

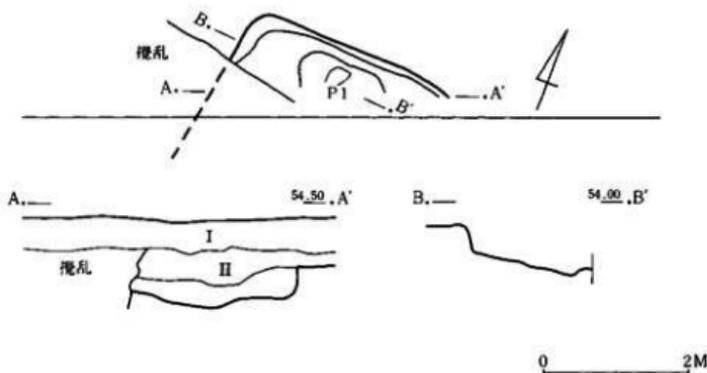
びットは確認されなかった。床面は攪乱が著しいが、ハードロームを掘り込み、ハードロームブロックを主体とする暗褐色土を埋め戻して貼り床状に整えたものと考えられる。かまどは確認されない。B-B'における断面観察では覆土は以下の3層に分けられる。1. 暗褐色土層。ソフトロームを含む。2. 暗褐色土層。ローム粒を多量に含む。粘性が強い。3. 黄褐色土層。ローム粒を多量に含む。

遺物は覆土中から土器片が発見された。発掘面積の大ききの割りには遺物量は多いが、いずれも床面から浮いている。実測可能な資料は坏1点、甕3点である(第150図、第54表)。

6(023)号跡(第151図、図版66)

67区に位置する。II層で確認されたが、攪乱の影響が大きく、住居跡かどうか若干検討の余地を残す遺構である。プランの大部分は調査区外にあって、調査区内では北壁の一部と北西コーナーと推定される部分が検出された。確認された北壁長は約2.9mで、西壁と北壁を図上延長して推定した西壁の走行方向はN-3°-Eで、ほぼ真北を指すが、プラン全体の主軸方向と一致するかどうか明らかでない。西壁は攪乱をうける。

壁高は約40cmで、壁下部はハードロームを掘り込み、ゆるく立ち上がる。壁溝は確認されな



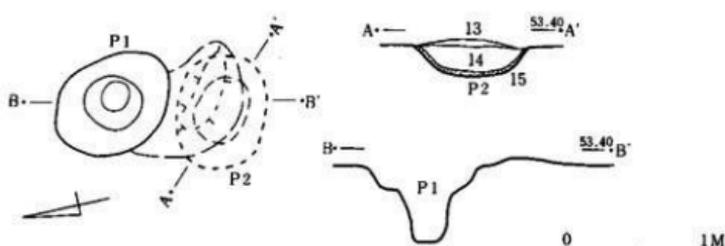
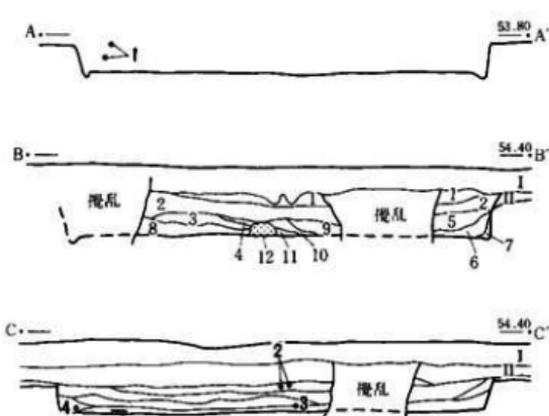
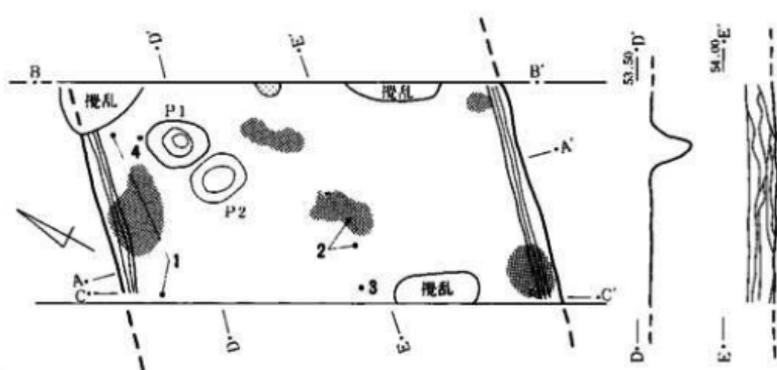
第151図 6(023)号跡実測図

かった。ピットは北壁まぎわで1ヶ所確認されたが(P1)、全容は不明である。床面はハードロームを掘り込むが、軟質で起伏がある。覆土は暗褐色土とローム粒などから構成され、比較的よくしまる。覆土の最下部はハードロームを主とする黄褐色土が堆積する。なお、遺物は発見できなかった。

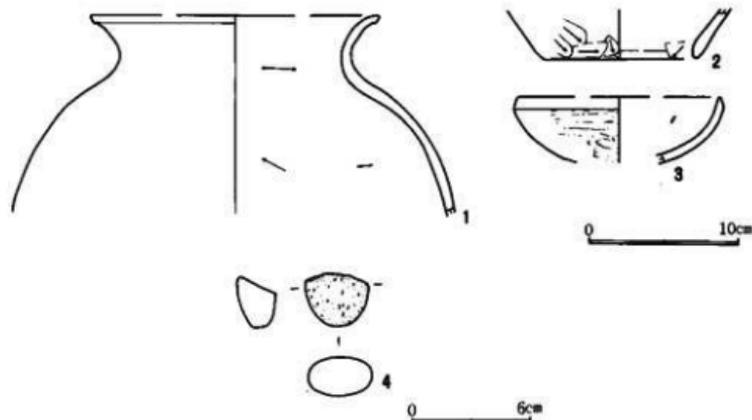
7(026)号跡(第152図、図版66)

93~94区に位置する住居跡で、II層で確認された。幅3mの調査区内で検出したのはプランの中央部で、そのほかの部分は調査区外に存在する。確認された壁長は、東壁が約3m、西壁が約2.2m、東西両壁間距離は約5.7mである。西壁と調査区北壁との交点付近に攪乱がある。東西両壁の走行方向はN-47-Eで、ほぼ北東-南西を指すが、これは本号跡の主軸方向とほぼ一致するものと思われる。南北両壁の位置を推定する目的で、ボーリング・ステッキによる調査を行なったが、これらを確認することはできなかった。なお、ボーリング・ステッキ棒の全長は1mである。

壁高は平均約45cmであるが、東壁と調査区北壁の交点付近が最大で約60cmに達する。壁下部はハードロームを掘り込み、約80°の傾斜角で立ち上がる。壁溝は確認された壁下を全周し、全体に明瞭である。溝幅は平均約12cm、深さ約8cmで、底面はゆるく起伏する。ピットは2ヶ所で確認された(P1~P2)。P1は、直径約85cm×65cm、底径約20cm、深さ約55cmで、断面は呼び鈴形を呈す。P1の南縁は、約45cm×80cmの範囲にわたって隆起する。隆起部と床面との比高差は約5cmで、ハードロームによって固められ全体によくしまる。この隆起部を除去したところ、床面と同じレベルでリング状に分布する純度の高い山砂が発見された。リングの大きさは、外径約60cm×75cm、内径は約55cm×70cmを測り、リングの幅は約2cmである。リングの中心部分はハードロームを主体とする黄褐色土が存在し、山砂、黒色土を含み、しまりは悪い



第152圖 7(026)号跡実測図

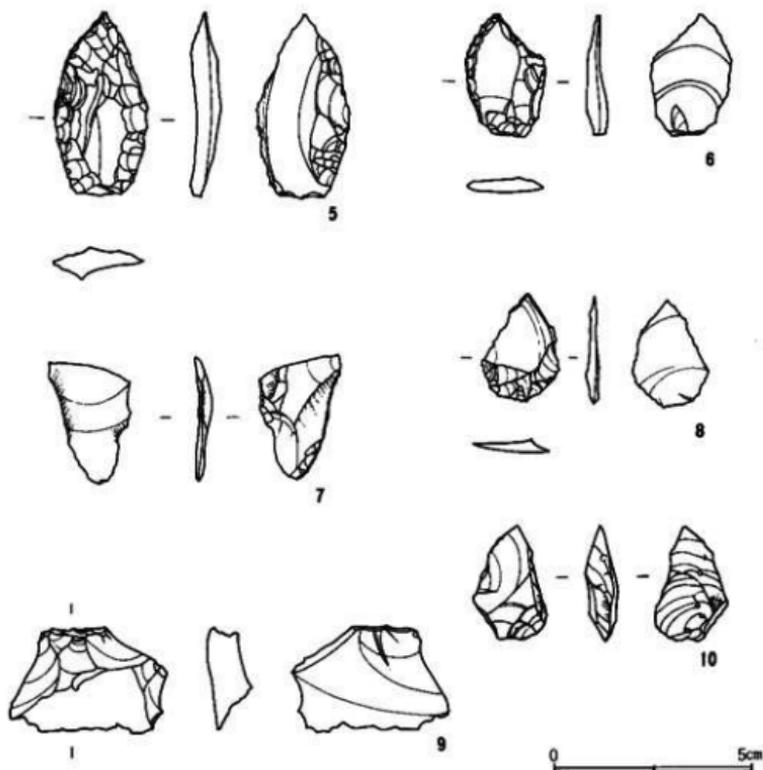


第153図 7(026)号跡出土遺物(1)

第55表 7号跡出土遺物観察表

標図 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	覆土	(40) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ナデ 内—体部：ヘラナデ	砂粒多 雲母多	普	外 } 暗褐色 内 }	体上部 のみ $\frac{1}{2}$	体部上位 に埋
2	土師甌	覆土	— — (10.5)	外—体部：ヘラケズリ、底縁 部：ケズリのちナデ 内—体部：ていねいなナデ	砂粒多 雲母を含む	良	外—淡褐色 内—茶褐色	底部の み	
3	土師杯	覆土	(14) — —	外—口縁内外面：ヨコナデ 体部：ヘラミガキ 内—体部：ミガキ	細砂粒 スコリア 雲母を含む	良	外—淡褐色 内—暗褐色	$\frac{1}{2}$	体部内面 にモミ状 圧痕あり
4	軽石	覆土		本文参照					

(第152図, 14層)。P 2 は, この黄褐色土と山砂を除いたのちに検出したものである。底径は約 45cm×40cm, 深さ約 40cm を測り, 底面には純度の高い山砂が約 2cm の厚さで堆積している(第 152図, 15層)。なお, 13層はハードローム主体の硬質な土層である。以上のように P 2 はきわめて特殊な状態で検出されたものだが, 性格は明らかでない。P 1 は, 主柱穴の 1 つと推定される。床面はハードロームを平坦に整え, 壁溝沿いの部分を除くと全体に堅緻である。床面には大小の焼土ブロックが存在しており, 主なものを図示すると, 第152図のようになる。これらは厚さが約 5~6cm であるが, いずれも多量の炭化粒を含み, 床面に密着する。焼土ブロック直下の床面は赤化して粘性を失い, 移植ゴテで叩くと高い金属音を発する。建材を思わせるよ



第154図 7(026)号跡出土遺物(2)

第56表 7号跡出土遺物観察表

挿 番 図 号	種 類	石 質	計 測 値			備 考
			最大長(mm)	最大幅(mm)	最大厚(mm)	
5	ポイント	頁岩	47	23	7.5	
6	ナイフ	頁岩	30.5	20	5.5	
7	ナイフ	頁岩	31	20	3.5	
8	リタッチドフレイク	頁岩	26.5	19.5	2.5	使用痕(?)
9	剥片石核	粘板岩	25.5	39.5	11.5	
10	石 錘	黒曜石	29	18.5	8.5	

うな大形の炭化材は発見できなかったが、本号跡は焼失住居である可能性が高い。覆土は緻密で全体に軟らかく、指頭圧で容易に圧痕がつく。B-B'断面における覆土は以下に示す12層に細分された。1. 暗褐色土層。暗褐色土に細かいロームブロックが少量混じる。2. 褐色土層。直径約1cmのハードロームブロックが混在する。焼土粒が混じる。3. 黒褐色土層。黒褐色土に焼土粒が混じる。4. 灰褐色土層。3層に山砂が若干量混入する。5. 暗褐色土層。直径約1cm前後のハードロームが少量混じる。6. 黒褐色土層。粒子の細かい黒褐色土に直径約2mmの焼土粒が少量混じる。7. 黄褐色土層。ソフトローム粒が多量に混じる。8. 暗褐色土層。ローム粒、直径約1cmのハードロームブロックが少量混じる。焼土粒がある。9. 灰褐色土層。山砂と直径約2cmのハードロームブロックが混じる。直径約2mmの焼土粒を含む。10. 灰暗褐色土層。山砂と直径約2cmのハードロームブロックが混じる。粘性のある黒色土ブロックがある。11. 灰暗褐色土層。山砂、炭化粒、焼土粒を含む。12. 山砂層。純度の高い山砂層。以上のように、かまどは検出できなかったが、上記の12層がかまど袖部に相当し、11層が焚口部に相当するものと思われる。

遺物は、土器片、軽石、石器、フレイクが覆土全体に分散する状態で出土した。実測可能な資料は坏1点、甕1点、甔1点、軽石1点と石器6点である(第153～154図、第55～56表)。軽石は床面に近いレベルで発見されたもので、全面が平滑である。先端は平坦で、他端は截断状になる。截断面は平坦である。石器は先土器時代に属するものと思われる。

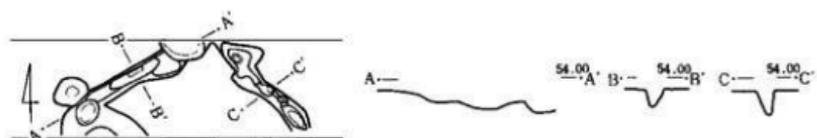
2 溝

8 (001B)号跡(第155図、図版67)

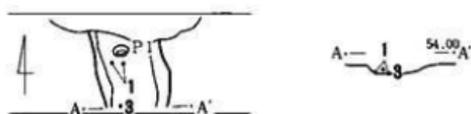
調査区の西端に近い3～4区に位置する溝で、III層上面で確認された。プランの多くが調査区外に存在するものと推定される。確認面における上端幅は約30cmで、溝底幅は約10cm、確認面からの深さは約40cmである。底面には大小のピットが溝の走行にそって列状にならぶ。壁下部の掘り込みはハードロームに達し、約85°の急傾斜で立ち上がる。断面はV字状で、覆土は平均約3cmのハードロームブロックを混える褐色土で、よくしまる。土層断面実測は行なわなかった。調査区内で検出したプランは北東-南西方向に走行する溝と、北西-南東方向に走行する2条の溝で、北壁付近で両者は交わる。西側の溝は調査区南壁付近で土壇状の掘り込みと切り合い、それより先は、南西方向に延びない。なお遺物は発見できなかった。

9 (002B)号跡(第155図、図版167)

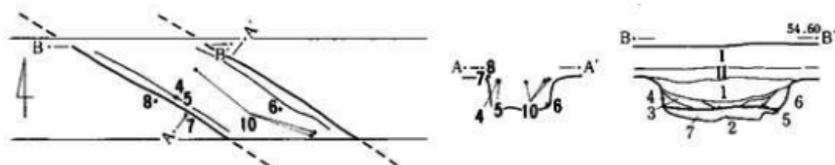
N-9'-W方向に走行する溝で、II層で確認されたが、擾乱が著しく確認に手間どった。確認面における上端幅は、平均約1.3m、溝底幅は約1m、確認面からの深さは約15cmである。底面はほぼ平坦で、断面は非対称な逆台形を呈す。ピットは1本発見された(P1)。P1の開口部における直径は、約30cm×20cm、深さ約50cm、断面は棒状を呈す。壁下部の掘り込みはハー



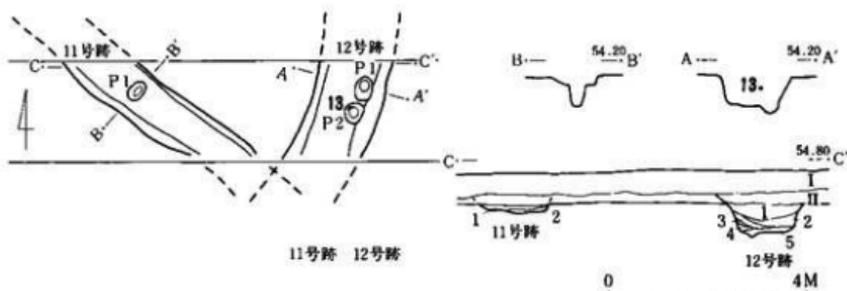
8号跡



9号跡



10号跡



11号跡 12号跡

第155図 8(001B), 9(002B), 10(004), 11(005), 12(006)号跡実測図

ドーム上面に達し、西壁下部は約40°、東壁下部は約15°の傾斜角で立ち上がる。覆土には、よくしまった暗褐色土が堆積している。

遺物は土器片が出土した。そのうち壺1点、須恵器坏1点、須恵器壺(?)1点が実測可能である(第156図1~3, 第57表)。(1)は溝底に密着した状態で発見され、その他は覆土中から発見された。

10(004)号跡(第155図, 図版67)

9~10区を斜行する溝である。II層で確認された。確認面における上端幅は平均約1.3m、溝

底幅は約1.1m、確認面からの深さは約65cmで、断面は逆台形を呈す。調査区内で検出した部分から推定される全長は約6m、走行方向はN-58'-Wであるが、調査区外にも北西-南東方向に延びるものと推定される。壁下部は約80°の急傾斜で立ち上がる。底面はハードロームを掘り込み、直径約5~10cmのハードロームブロックを主体とし、黒色土、褐色土、ローム粒などの混合土を埋め戻し、貼り床状に仕上げる。底面はほぼ平坦で、ピットなどはみられない。覆土の密度は高いが、軟質で、指頭圧で容易に圧痕がつく。B-B'における断面観察では、以下の7層に分けられる。1. 褐色土層。直径約2cmのハードロームブロックを多く含む。2. 褐色土層。3. 黒色土層。直径約5mmのハードロームブロックが混じる。4. 黒褐色土層。ソフトローム粒が含まれる。5. 黒褐色土層。6. 黄褐色土層。直径約2~10cmのハードロームブロックを多く含む。7. 黄褐色土層。直径約5~10cmのハードロームブロックを多く含む、貼り床状を呈す。

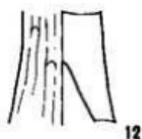
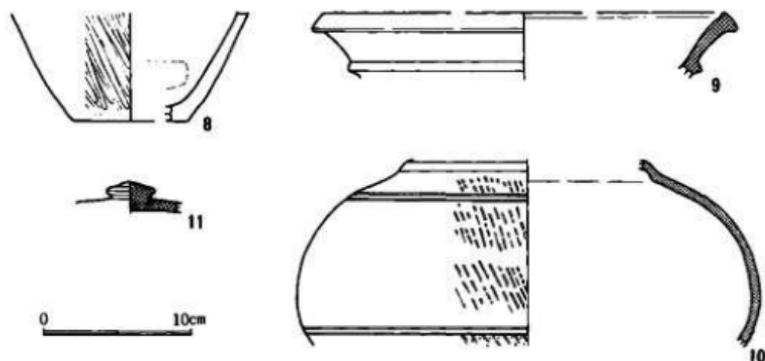
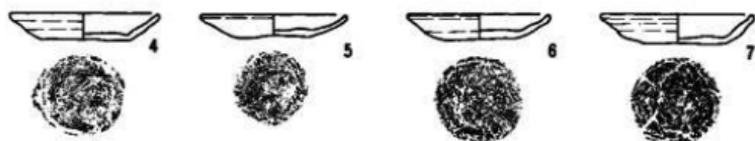
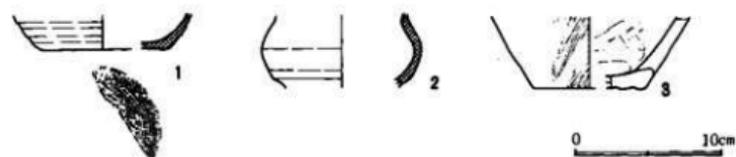
遺物は土器片が比較的多く発見されたが、その多くは覆土から出土した。実測可能な資料は、皿4点、壺1点、土師質須恵器広口壺1点、須恵器大甕1点、須恵器坏蓋1点である(第156図4~11, 第57表, 図版70)。このうち、(4, 5, 7)の皿と(8)の壺は溝外から出土したようにみえるが、II層を掘り込んだ壁面に密着する状態で発見されたものである。また、(6)の皿は溝底にほぼ密着した状態で出土したものである。

11(005)号跡(第155図, 図版67)

17区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約90cm、溝底幅は平均約70cm、確認面からの深さは約12cmである。断面は浅皿形を呈す。調査区内で検出した部分から推定される全長は約4m以上で、走行方向はN-53'-Wを指す。これは10号跡とほぼ同方向である。壁下部は西壁が約20°、東壁が約75°の傾斜角で立ち上がる。底面はハードロームの上面でとどまり、起伏にとむが、中央部にピットが1本存在する。ピットの開口部直径は、約40cm×30cm、底径約20cm×10cm、深さ約43cmで、断面は直立した棒状を呈す。覆土は粒子の細かい土壌でC-C'における断面観察では、2層に分けられる。1. 暗褐色土層。2. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む。

12(006)号跡(第155図, 図版67)

18区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約1.3m、溝底幅は平均約90cm、確認面からの深さは約60cmで、断面は逆台形を呈す。調査区内で検出した部分から推定される全長は約3m以上、走行方向はN-22'-Wを指すが、弱く西側へ湾曲し、調査区南壁付近で11号跡に近接する。壁下部はハードロームを掘り込み、約65°~70°の傾斜角で立ち上がる。C-C'における断面観察によると、本号跡の掘り込み面はII層上面であるが、II層中の壁傾斜角はローム層中よりもゆるくなる。また、確認された掘り込み面から溝底までの深さは約80cmとなる。底面はほぼ平坦であるが、東壁寄りに2本のピットが並ぶ(P1~P2)。両者と



第156図 9(002B), 10(004), 12(006)号跡出土遺物

もほぼ同規模で開口部の直径は約40cm、底径約20cm、深さ約15cmである。C-C'における断面観察では覆土は、以下の5層に分けられる。1. 褐色土層。直径約1~3cmのハードロームブロックが多く含まれる。2. 黒褐色土層。部分的にソフトローム粒を多量に含む。3. 褐色土層。粒子が粗い。4. 暗褐色土層。粘質で粒子が細かい。5. 黄褐色土層。ハードローム土を

第57表 9号跡, 10号跡, 12号跡出土遺物観察表

採回 番号	器種	層位	注記 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	須恵環	溝底	— — 8.8	ミズビキ成形, 底面: 回転糸 切り(?)	細砂粒少	香	外 } 赤褐色 内 }	1/6	
2	須恵(壺)	覆土	— — —	外一腕位のナデ 内一腕位のナデ	細砂粒少	良	外 } 灰色 内 }	体部の み1/6	自然軸
3	土師壺	覆土	— — (7.5)	外一腰部: 棒状工具によるケ ズリ, 底面: 不明 内一腰部: ケズリのちナデ	砂粒多 雲母少	香	外一黒褐色 内一褐色	底部の み1/6	外面全体 に煤
4	土師皿	覆土	10.2 1.8 6.0	ミズビキ成形, 回転糸切り	細砂粒少	不良	外 } 黄褐色 内 }	1/6	
5	土師皿	覆土	10.0 1.5 5.5	ミズビキ成形, 回転糸切り	黒色粒子少	良	外 } 赤褐色 内 }	1/6	
6	土師皿	覆土下 壁面	10.0 1.7 6.0	ミズビキ成形, 回転糸切り	黒色粒子少 スコリア少	香	外 } 赤褐色 内 }	完存	
7	土師皿	覆土	10.5 2.0 (5.5)	ミズビキ成形, 回転糸切り	細砂粒多	香	外 } 黄褐色 内 }	ほぼ完 存	
8	土師壺	覆土	— — 6.8	外一棒状工具によるケズリ 底面: 不明 内一ナデ	砂粒多	香	外 } 褐色 内 }	底部の み1/6	底面に煤
9	須恵大 壺	覆土	(27.5) — —	—	細砂粒含	良	外 } 灰色 内 }	口縁部 のみ1/6	
10	土師質 須恵? 広口壺	覆土	— — —	外一タタキのちナデ, 浅い腕 位沈線	細砂粒少	不良	外 } 黄褐色 内 }	体部の み1/6	
11	須恵環 蓋	覆土	— — —	—	細砂粒少	良	外 } 灰色 内 }	靱宝珠 のみ	
12	土師高 杯	覆土	— — —	外一腕位の浅いケズリ 内一ナデ	細砂粒少	良	外一朱色 内一暗褐色	胴部の み1/6	
13	土師壺	覆土	— — (6.5)	外一ケズリのちナズ, 底面: ケズリ 内一ナデ	細砂粒多	良	外一暗褐色 内一赤褐色	底部の み1/6	底面に黒 斑(?)

主体とし、粘性があるが、しまりは悪い。

遺物は土器片が少量発見された。そのうち、復原実測が可能な資料は、高坏脚部1点、壺と思われる底部1点である(第156図12,13,第57表)。いずれも覆土中から発見されたものである。

13(007)号跡(第157図, 図版67)

20~21区を斜行する溝である。II層で確認された。西壁の一部が攪乱をうける。確認面における上端幅は平均約1.4m, 溝底幅は平均約30cm, 確認面からの深さは約55cmである。断面は一段刻みの入った逆台形を呈す。調査区内で検出した部分から推定される全長は約5m以上, 走行方向はN-54°-Wを指し, 調査区外では北西-南東方向に延びるものと推定される。これは10号跡, 11号跡の走行方向とほぼ同方向である。底面は狭く, 起伏にとみ, 弱く蛇行する。底面からはピットが4本確認された(P1~P4)。P1は直径約60cm, 底径約30cm, 深さ約16cmで, 断面は逆台形である。P2~P4は, いずれも底面からの比高差約10cmの段丘状の面に位置する楕円形のピットで, 深さは約30~40cmを測る。壁面は明瞭で, 下部はハードロームを掘り込み, 約45°の傾斜角で立ち上がる。なお, 段丘状面から上の東壁の立ち上がり傾斜角は約30°である。覆土は, 粒子が細かく密度も高いが, 軟質で指頭圧による圧痕が容易につく。A-A'における断面観察では以下の3層に分けられる。1. 黒褐色土層。2. 褐色土層。ローム粒を多く含む。3. 褐色土層。2層よりもローム粒の混入が少ない。なお, 遺物は発見されなかった。

14(008)号跡(第157図)

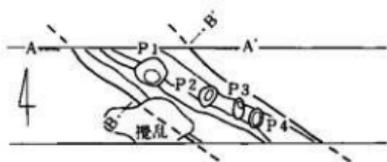
29区を南北に縦走する溝で, II層で確認された。確認面における上端幅は平均約70cm, 溝底幅は平均約40cm, 確認面からの深さは約75cmである。断面は矩形を呈す。調査区内で検出した全長は約2mで, 走行方向はN-3°-Eのほぼ南北方向を指す。調査区外にもこの方向でのびるものと推定される。壁下部はハードロームを掘り込み, 約80°の傾斜でほぼ垂直に立ち上がる。壁面は明瞭で, II層中では傾斜角が約50°にゆるむ。底面は平坦で, ピットなどは確認されない。覆土は上層がローム粒と暗褐色土の互層で, 下層は褐色土とローム粒を主体とする土壌が堆積する。全体に軟質である。遺物は発見されなかった。

15(009)号跡(第157図)

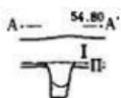
30~31区を縦走する溝で, II層で確認された。確認面における上端幅は平均約70cm, 溝底幅は約40cm, 確認面からの深さは約7cmである。断面は浅い皿状を呈す。調査区内で検出した部分の全長は約2.5mで, 弱く弯曲する。壁下部の掘り込みはソフトローム層中にとどまり, 壁面は軟質で不明瞭である。底面は起伏にとみ, ピットが2本確認された(P1~P2)。いずれも直径約35cm, 底径約15~20cm, 深さ約40cmで, 断面は棒状を呈す。覆土はローム粒を混じえる褐色土が堆積し, 軟質である。土層断面は実測しなかった。

16(012C)号跡(第157図, 図版68)

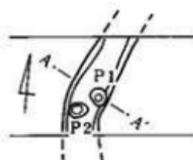
34区を縦走する溝で, II層で確認された。確認面における上端幅は約1.3m, 溝底幅は約80cm, 確認面からの深さは約35cmである。断面は逆台形を呈す。調査区内で検出した部分の全長は約1.8mで, 走行方向はN-23°-Wを指す。調査区南壁付近で17号跡と切り合う。A-A'に



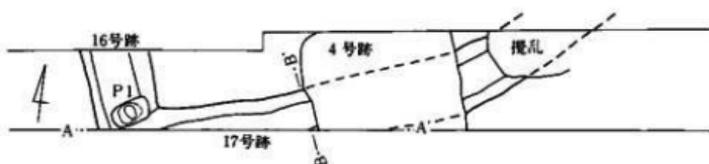
13号跡



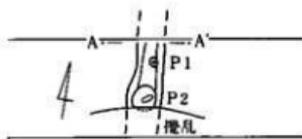
14号跡



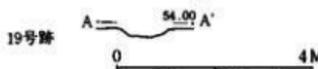
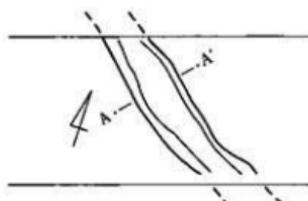
15号跡



16号跡・17号跡



18号跡



19号跡

第157图 13(007), 14(008), 15(009), 16(012C), 17(012B), 18(013), 19(011A)号跡実測図

における断面観察では双方の溝の覆土は区別がほとんど困難であるため、新旧関係は不明である。壁下部はハードローム上面にとどまっているが、壁面は明瞭である。底面は平坦だが、17号跡との交点付近にピットが1本確認された(P1)。P1は隅丸に近い方形で、開口部は約80cm×約50cm、底部は直径約25cmの円形で、深さは約40cmである。覆土は粒子の細かい黒褐色土に直径約8mm前後の暗褐色土のブロックが混在する。全体によくしまる。遺物は発見されなかった。

17(012B)号跡(第157図、図版68)

34～36区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約1.2m、溝底幅は平均約70cm、確認面からの深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約8mで、走行方向はN-53°-EからN-57°-Eの範囲を指す。調査区北壁との交点付近は擾乱によって消滅する。壁下部はハードロームを掘り込み、約30°の傾斜角で立ち上がる。底面は、ほぼ平坦で堅固であるが、4号跡を切る部分では溝底を堅固につくっていない。16号跡と調査区南壁付近で切り合うが前述のように、新旧関係は不明である。覆土は粒子の細かい黒色土と暗褐色土が堆積し、下層は上層に比して黒色土の混入度が高い。遺物は発見されなかった。

18(013)号跡(第157図)

37区を縦走する溝で、II層で確認された。調査区南壁付近は擾乱によって失われる。確認面における上端幅は平均約60cm、溝底幅は平均約30cm、確認面からの深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約1.3mで、走行方向はN-3°-Wのほぼ南北を指す。壁下部は約50°の傾斜角で立ち上がるが、II層中では約40°にゆるむ。断面はU字形である。底面はハードローム上面でとどまるが、起伏にとみ、ピットが2本発見された(P1、P2)。P1の開口部における直径は約15cm、底径約5cm、深さは約5cm、また、P2はそれぞれ約50cm、約20cm×10cm、約20cmである。覆土は、粒子の細かい暗褐色土にソフトロームを主体とする褐色土が鹿の子斑状に散在する。遺物は発見されなかった。

19(011A)号跡(第157図)

46区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約90cm、底面幅は約50cm、確認面からの深さは約15cmである。調査区内で検出した部分の全長は約4.1m以上である。走行方向はN-53°-Wを指し、調査区外にも北西-南東方向に延びるものと思われる。壁下部の掘り込みはハードローム上面でとどまり、約30°の傾斜角で立ち上がる。断面は上下につぶれた逆台形である。底面は中央がやや盛り上がるが、ほぼ平坦である。覆土はローム粒を混じえる暗褐色土である。断面実測は行なわなかった。

20(014)号跡(第158図、図版68)

47～51区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約1.2m、溝底幅は平均約30cm、確認面からの深さは約50cmである。調査区内で検出した全長は約16mで、走行方向はN-60°-E前後を指し、隣接する21号跡とほぼ平行である。壁面は明瞭で、壁下部

はハードローンを掘り込む。北壁下部は約35°の傾斜角で立ち上がる。南壁下部は約65°の傾斜角で立ち上がり、上部は約30°のゆるやかな傾斜に変わる。底面はほぼ平坦である。覆土は全体に軟質で、F-F'における断面観察では以下の3層に分けられる。1. 黒褐色土層。2. 褐色土層。ローム粒を混える。3. 明褐色土層。ローム粒を多く含む。

21(015)号跡(第158図, 図版68)

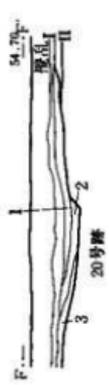
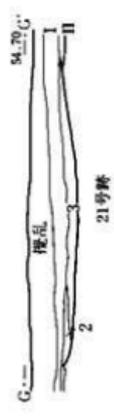
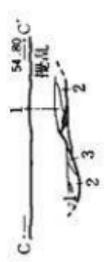
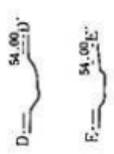
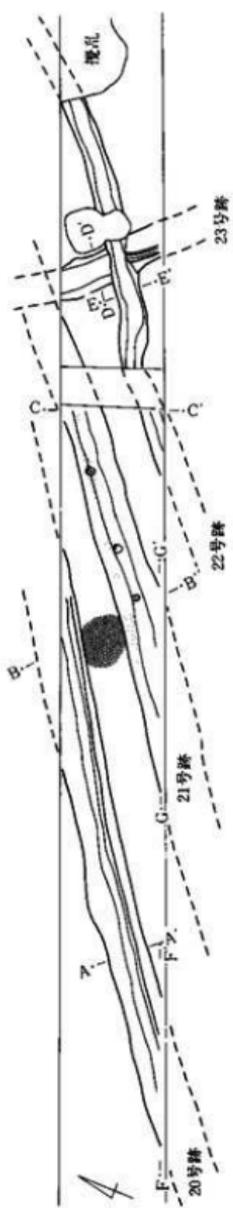
49~52区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は平均約1.2m、溝底幅は約30cm、確認面からの深さは約45cmである。調査区内で検出した部分の全長は約12mである。走行方向はN-60°-E前後を指し、隣接する20号跡、22号跡とはほぼ平行して走行する。壁面は明瞭である。南壁下部は約30°の傾斜角で立ち上がるが、北壁下部は約20°のゆるい傾斜角で立ち上がる。この南北壁の傾斜のちがいは20号跡と対称的である(B-B')。底面はハードローン上面でとどまっており、ピットが3本ある(P1~P3)。これらのピットの規模は互いによく似ており、開口部の直径は約25cm、底径約10cm、深さ約30cm前後を測り、断面は棒状になる。C-C'における断面観察では、覆土は以下の3層に分けられる。1. 砂層。純粋な山砂に黒褐色土が混じる。軟質である。2. 暗褐色土層。ローム粒が混じる。軟質。3. 黄褐色土層。ソフトローム粒が多い。なお、砂層は幅約25cm~50cm、厚さ約5~8cmで本号跡の走行方向に沿って細長く堆積するが、調査区南壁付近で消える。なお、本号跡と20号跡の間のII層上面は直径約1.4mの範囲が赤化している。赤化部分の厚さは約4cmに及ぶが、土壌はレンガ化していない。遺物は発見できなかった。

22(016A)号跡(第158図, 図版68)

52~54区を斜行する溝で、II層で確認された。確認面における上端幅は、平均約65cm、溝底幅は約30cm、深さは約10cmである。調査区内で検出した部分は全長11mである。若干蛇行するが、走行方向は平均N-60°-E前後を指し、20号跡、21号跡とはほぼ等間隔、平行に並ぶ。壁はやや不明瞭であるが、壁下部は平均約50°の傾斜角で立ち上がる。23号跡と十文字に交わり、これを切る。底面の掘り込みはハードローン上面でとどまっており、ほぼ平坦である。覆土はC-C'における断面で以下の2層に分けられる。1. 暗褐色土層。溝壁に接する部分では、焼土粒がみられる。2. 黒褐色土層。なお、壁面の一部に赤化部分のみみられる。

23(016B)号跡(第158図, 図版68)

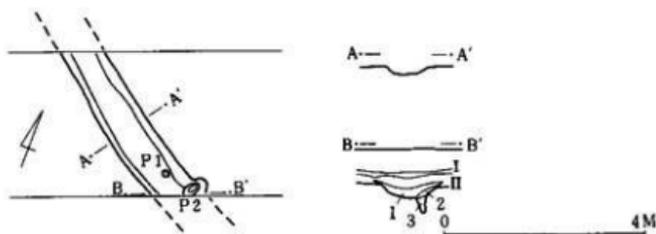
53区のII層で確認された溝で、22号跡と交叉する。全体に擾乱の影響が強い。確認面における上端幅は平均約1mであるが、22号跡との交叉部を境として、その南北では溝底幅が異なり、北側では約60cm、南側では約10cmである。深さは平均約15~20cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向は平均N-45°-W前後を指す。壁面、底面とも不明瞭で、起伏にとみ、掘り込みはいずれもソフトローム層内にとどまる。覆土は粒子の細かい暗褐色土でローム粒を混える。22号跡に切られる。



第158図 20(014), 21(015), 22(016A), 23(016B)号跡実測図(断面は平面の1.4倍)

24(017)号跡(第159図, 図版68)

55~56区を斜行する溝である。II層で確認された。確認面における上端幅は約80cm, 溝底幅は平均約50cm, 深さは約35cmである。調査区内で検出した部分の全長は約4mで, 弱い曲線をえがくが, 走行方向はN-55'-W前後を指す。壁面は明瞭堅固で, 壁下部は約40°の傾斜角で立ち上がる。断面は逆台形を呈す。底面はほぼ平坦であるが, 調査区南壁との交点付近に2本のピットがある(P1, P2)。P1は開口部直径約15cm, 底径約10cmの円形で, 深さは約28cm, 断面は棒状を呈す。P2は壁の立ち上がり部に存在し, 開口部は直径約35cm×20cm, 底径約20cm×10cmの楕円形で, 深さは約35cmである。B-B'における断面観察では以下の3層に分けられる。1. 暗褐色土層。2. 黄褐色土層。ソフトローム粒を多量に含む。3. 暗褐色土層。粒子が粗く, しまりが無い。



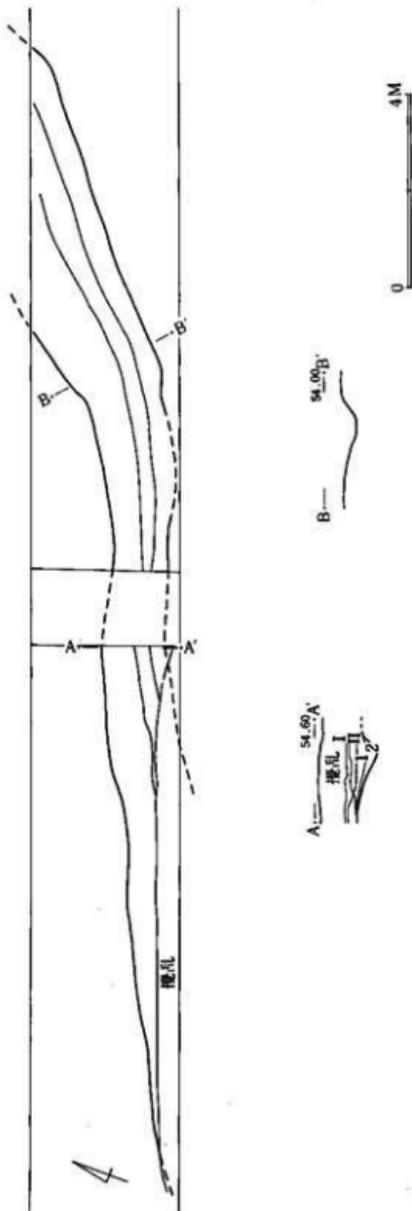
第159図 24(017)号跡実測図

25(019)号跡(第160図)

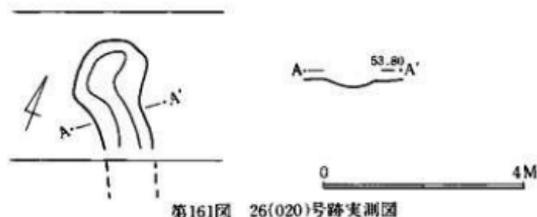
62~67区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は約1.8~2m, 溝底幅は平均約35cm, 深さは約25cmである。調査区内で検出した部分は全長23mで, 走行方向はおよそN-55'-EからN-65'-Eの範囲をゆるやかに蛇行する。壁面はやや不明瞭で, 起伏がある。壁下部は北壁が約20°, 南壁が約55°の傾斜角で立ち上がり, 断面は線対称にならない。A-A'における断面観察では, 覆土は次の2層に分けられる。1. 黒褐色土層。少量のソフトローム粒と, 焼土粒を含む。2. 褐色土層。ソフトローム粒が多い。

26(020)号跡(第161図)

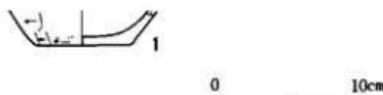
68区のII層で確認された。確認面における上端幅は約1m, 底面幅は約30cm, 深さは約15cmである。調査区内で検出した部分の全長は約2mであるが, 溝の先端部もしくは末端部と思われる, グリッドの中央部で上端幅が約1.6m程度に広がったのち, 調査区北壁の手前で立ち上がる。壁下部は東壁が約30°, 西壁が約20°の傾斜角でゆるく立ち上がり, 断面は浅いU字形である。底面はハードローム上面でとどまる。覆土はローム粒を少量混じえる暗褐色土であるが, 土層断面の実測は行なわなかった。なお, 遺物は覆土中から壘と思われる底部破片が1点発見された(第162図, 第58表)。



第160图 25(019)号群实测图



第161図 26(020)号跡実測図



第162図 26(020)号跡出土遺物

第58表 26号跡出土遺物観察表

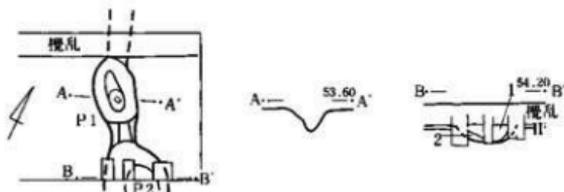
検出 番号	器種	層位	法量 口径(cm) 跡高(cm) 底径(cm)	主な特徴	胎土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師甕	覆土	— — 0.8	外—ケズリ、底面：一定方向 へのケズリ 内—不明	細砂粒少	良	外—赤褐色 内—褐色	底部のみ	底面体部 下に埋

27(022)号跡(第163図)

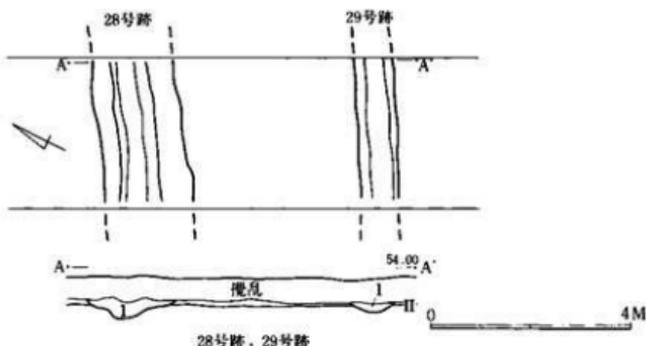
80区のII層で確認された溝である。南北の調査区壁付近は擾乱の影響を強くうける。確認面における上端幅は約40cm、溝底幅は約30cm、深さは約35cmである。調査区内で検出した部分の全長は約2.5mで、走行方向はN-35°-W前後を指す。壁面は起伏があり、底面には、2つのピットが縦列する。P1は、直径約1.4m×0.8mの楕円形で、深さは約40cmを測り、P2は、直径約1.3m×0.8m以上、深さ約30cm以上である。なおP2は完掘されていない。確認面におけるP1、P2の掘り込み径は、いずれも溝の上端幅よりも広い。覆土はB-B'における断面観察では以下の2層に分けられる。1. 暗褐色土層。2. 褐色土層。

28(025A)号跡(第163図、図版68)

87~88区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は、平均約1.6mである。溝底幅は約40cm、深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向はN-60°-E前後を指す。壁下部は北壁が約60°、南壁が約30°の傾斜角で立ち上がる。両壁面には、幅約40cm程度の段が1段刻まれ、この面からの壁下部の立ち上がり角は約10°である。底面は平坦である。覆土は暗褐色土の単層で、粒子は細かく、よくしまる。遺物は発見できなかった。



27号跡



28号跡、29号跡

第163図 27(022)、28(025A)、29(025B)号跡実測図

29(025B)号跡(第163図)

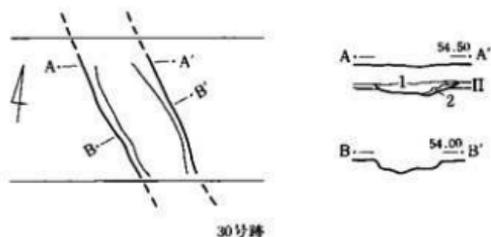
89区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は平均約80cm、溝底幅は約50cm、深さは約15cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向はN-60°-E前後を指す。28号跡とは約5mの距離をおいて、ほとんど平行して並ぶ。壁面は明瞭で、壁下部は約20°の傾斜角で立ち上がる。断面は浅いU字形を呈す。底面はハードローム上面でとどまり、ほぼ平坦である。覆土は、暗褐色土の単層である。遺物は発見出来なかった。

30(027)号跡(第164図、図版68)

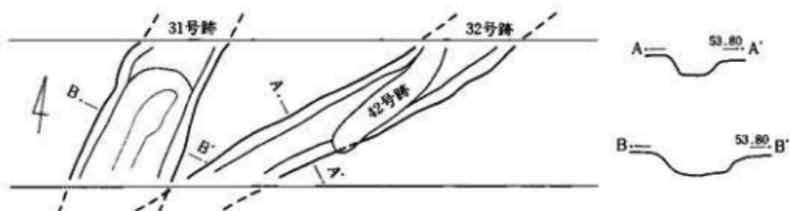
97区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は約1.2m、溝底幅は約80cm、深さは約30cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向はN-35°-W前後を指す。壁面は不明瞭で、壁下部は約55°~60°の傾斜角で立ち上がる。底面の掘り込みはソフトローム内にとどまり、起伏にとむが、ピットはない。覆土は以下の2層に分けられる。1. 黒褐色土層。粘性がある。2. 褐色土層。ローム粒を多く含む。遺物は発見されなかった。

31(030)号跡(第164図、図版69)

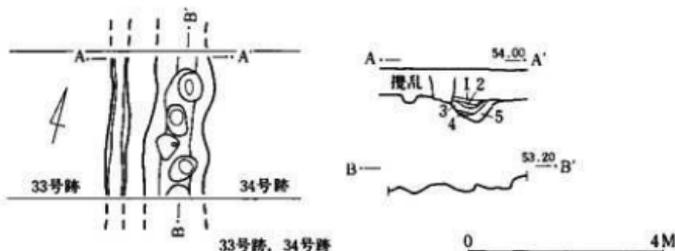
108~109区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は平均約1.8m、溝底幅は約



30号跡



31号跡, 32号跡



33号跡, 34号跡

0 4M

第164図 30(027), 31(030), 32(031), 33(032B), 34(032A)号跡実測図

40cm, 深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3.8mで, 走行方向はN-20°-E前後を指す。壁下部は西壁が約25°, 東壁は約40°の傾斜角で立ち上がり, ハードロームを掘り込む。底面は, ほぼ平坦だが, 調査区北壁近くに比高差約34cmの立ち上がりがあり, それより北側では溝の深さが約6~7cmに浅くなる。覆土はローム粒を混じえる暗褐色土の単層で, 粒子は細かくよくしまる。遺物は発見されなかった。

32(031)号跡(第164図, 図版69)

109~110区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は約1m, 溝底幅は約60cm, 深さは約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約7mで, 走行方向はN-60°-E前後を指す。調査区南壁近くで31号跡と接近する。壁下部の傾斜角は東壁が約60°, 西壁が約45°で立ち

上がり、断面は非対称形であるが、おおむね逆台形を呈す。底面はハードロームを掘り込み、堅固で平坦である。42号跡を切る。覆土には、黒褐色土とローム粒を混じえる褐色土が堆積する。遺物は発見されなかった。

33(032B)号跡(第164図, 図版69)

113区のII層で確認された溝で、約1m東側に34号跡が平行して走行する。確認面における本号跡の上端幅は約40cm、溝底幅は約20cm、深さは約15cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向は約N-10°-W前後を指す。壁下部は約60°の傾斜角で立ち上がり、断面は逆台形を呈す。底面は平坦で、ソフトローム内にとどまる。覆土はローム粒を混じえる褐色土で、分層は困難である。粒子は細かく、よくしまる。遺物は発見できなかった。

34(032A)号跡(第164図, 図版69)

114区のII層で確認された溝である。確認面における上端幅は約1.3m、溝底幅は平均約60cm、深さは平均約40cmである。調査区内で検出した部分の全長は約3mで、走行方向はN-10°-W前後を指し、隣接する33号跡と平行する。壁面は明瞭で、東壁は約50°、西壁は約15°の傾斜角で立ち上がり、断面は非対称形の逆台形を呈す。底面はハードロームを掘り込むが、そのほぼ中央にピットが縦列する(B-B')。ピットはいずれも最大径約50~60cm程度の楕円形を呈すが、開口部の大きさのわりには、溝底からの比高差は小さく、20cmに達しない。覆土には暗褐色土、黒色砂粒、ローム粒、ハードロームブロックなどが堆積し、全体によくしまる。A-A'における断面観察では5層に分層される。1. 褐色土層。暗褐色土とローム粒を主体とする。2. 黒褐色土層。黒色の砂粒を主体とし、暗褐色土粒を混じえる。粒子は細かく、粘性はない。3. 褐色土層。暗褐色土を主体とするローム粒、直径約0.5cmのハードロームブロックを多く含む。粘性はなく、砂っぽい。4. 黄褐色土層。直径1cmのハードロームブロックを主体とし、褐色土が混入する。5. 褐色土層。3層に似るが、ローム粒を多く含む。

3 土 坑

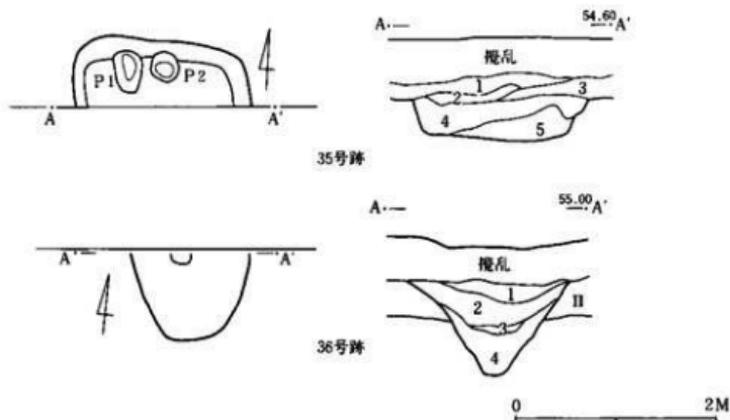
35(003)号跡(第165図)

8区に位置する土坑で、II層で確認された。調査区内で検出されたプランは北壁が約1.8m、東西の両壁が約50cmでコーナーはいずれも丸味を帯びる。調査区外にプラン全体の大部分が存在するものと推定され、その全容や主軸方向は明らかにされない。壁は明瞭で、底面の掘り込みはハードロームに達する。調査区内における底面の大きさは約1.7m×0.5m、また、確認面からの深さは約60cmである。底面は固いが起伏がある。壁は明瞭で、壁下部は約60°の傾斜角で立ち上がる。壁下には2つのピットが隣接して検出された(P1~P2)。開口部におけるピットの直径、底径および深さは、P1がそれぞれ約40cm×30cm、約25cm×10cm、約30cm、また、P2がそれぞれ約30cm、約15cm、約40cmである。断面はいずれも棒状を呈し、垂直に掘ら

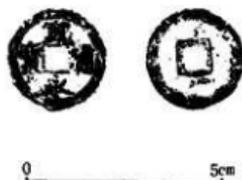
れている。A-A'断面における覆土は以下の5層に分けられる。1. 黒褐色土層。焼土粒とローム粒を含む。2. 褐色土層。直径約1cmハードロームブロックを混じえる。3. 褐色土層。4. 暗褐色土層。ロームブロックを含む。5. 黄褐色土層。ローム粒を多く含む。5層下部は直径約3cmのハードロームブロックが多い。なお、遺物は発見されなかった。

36(010)号跡(第165図, 図版69)

31区に位置する土塚で、II層で確認された。調査区内で検出した開口部の大きさは南北約90cm, 東西約1mの半楕円形である。調査区外にかかる部分が大きく、その全容は明らかでないが、主軸方向はN-5°-W前後になるものと思われる。底部はハードロームを掘り込み、すり鉢状になる。壁は明瞭で、壁下部は約50°~55°の傾斜角で立ち上がる。A-A'における断面観察では覆土は4層に分層されるが、いずれも軟質である。1. 黄褐色土層。ローム粒が密につきまり、軟質で崩れやすい。2. 褐色土層。ローム粒が少量混じる。3. 黒色土層。黒色土と褐色土が互層に堆積する。4. 暗褐色土層。3層に似るが黒色土の混入度が高い。なお覆土中から古銭が1点発見されており、近世以降の土塚と考えられる。古銭は寛永通宝の銅銭で直径約25mm, 厚さ1mm, 重さ約2.3gで背文はない(第166図, 図版70)。



第165図 35(003), 36(010)号跡実測図



第166図 36(010)号跡出土遺物

37(011B)号跡(第167図)

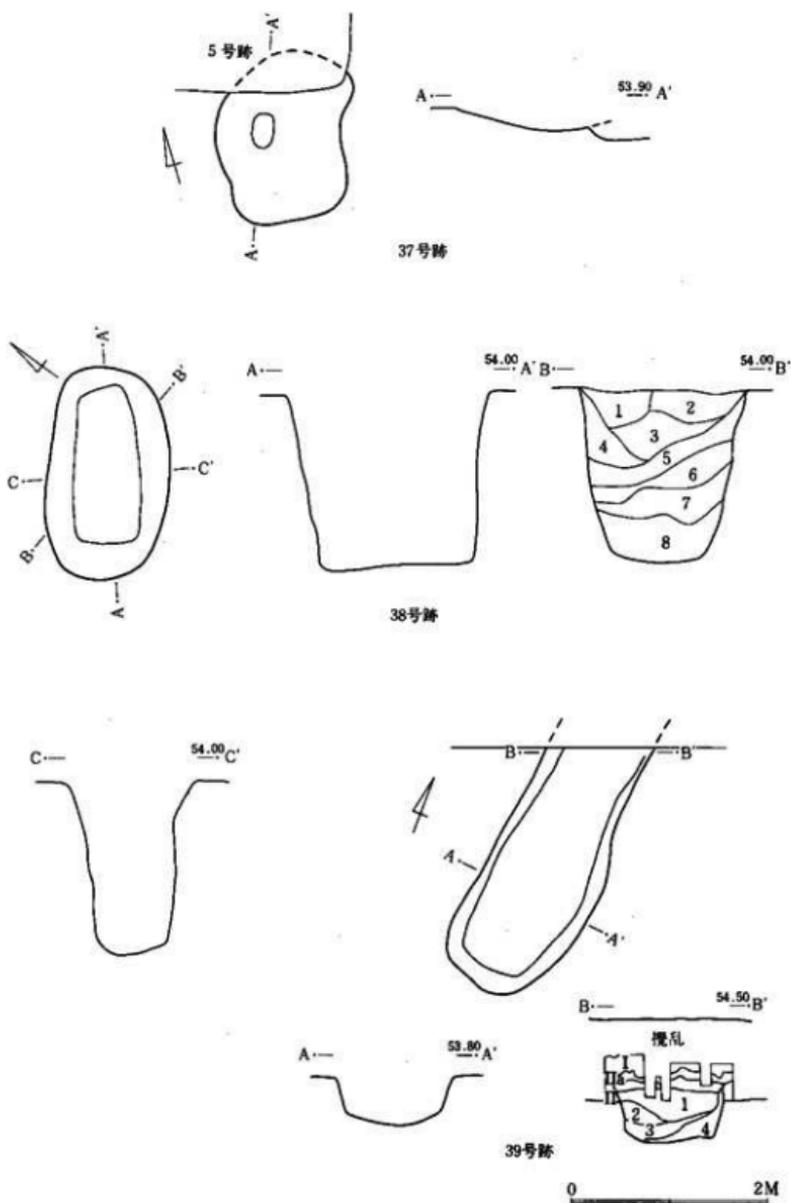
46～47区に位置する土坑でII層で確認された。5号跡と切り合う。平面観は不定形で、確認面における開口部の大きさは、約1.3m×1.4mである。掘り込みはハードローム上面に達する。壁は凹凸があり、壁下部は約8°～10°の傾斜角でゆるく立ち上がる。確認面からの深さは約20cmで、全体に不定形の蒸発皿状を呈す。覆土は暗褐色土の単層で、断面は実測しなかった。遺物は発見されなかった。

38(018)号跡(第167図、図版69)

59区に位置する土坑で、III層上面で確認された。確認面におけるプランは、長軸約2.4m、短軸約1.4mの隅丸方形に近い草履形を呈し、底面は長軸約1.6m、短軸約0.7mの隅丸長方形を呈す。主軸方向はN-55°-Eを指す。確認面からの深さは約1.8mで、掘り込み底は立川ローム層下部まで達する。壁面は凹凸が著しい。壁下部は、約80°の傾斜角で立ち上がり、ハードロームとソフトロームの境界付近より上部では約60°の傾斜角にゆるむ。底面は弱い起伏があるが、ピット等は認められない。覆土にはローム粒、ハードロームブロックなどが多く堆積しており、B-B'における断面観察では8層に分層された。1. 褐色土層。ローム粒と黒色土が混在する。2. 黄褐色土層。直径約1～3cmのハードロームブロックをきわめて多く含む。3. 黒褐色土層。黒色土を多く含む、直径約1～5cmのハードロームブロックが混在する。4. 黄褐色土層。ローム粒と黒色土が混在する。5. 褐色土層。直径約2～3cmのハードロームブロックを混じえる。6. 褐色土層。ローム粒、ハードロームブロックを多く含む。土壌のしまりは悪く、ややポロポロとなる。7. 黄褐色土層。直径約5～10cmのハードロームブロックを主体とする層で、ブロックの間隙をローム粒、黒色土粒などが埋める。しまりは悪く、堆積物は移植ゴテで、ポロポロに崩れおちる。8. 黄褐色土層。直径約5～6cmのハードロームブロックが密に堆積する。ブロックの間隙を粒子の細かい黒色土が埋め、全体に固くよくしまる。なお時期決定の手がかりとなる遺物は発見できなかった。

39(021)号跡(第167図)

69～70区に位置する土坑で、II層で確認された。本号址は調査区外にも存在するのでその全容は明らかでないが、調査区内で検出したプランは隅丸長方形に近く、南東壁はいくぶん外側にふくらむ。確認面における開口部の大きさは長軸約3m、短軸約1mで、底面はそれぞれ約2.6mと約0.8mである。主軸方向はN-9°-Eで、ほぼ直北を指す。壁は明瞭でハードロームを掘り込み、壁下部は約70°の傾斜角で立ち上がる。底面はほぼ平坦で、ゆるい起伏がある。B-B'断面における覆土は以下の4層に分けられる。1. 黒褐色土層。ローム粒、直径約1cmのハードロームブロックを含み、よくしまる。2. 黄褐色土層。ローム粒と黒色土が混合する。粘性はなく、サラサラの状態である。3. 黒褐色土層。ローム粒の混入度が低く、よくしまる。4. 褐色土層。ローム粒とハードロームブロックを多く含む。



第167图 37(011 B), 38(018), 39(021)号跡实测图

40(024)号跡(第168図)

86～87区に位置する土塚で、II層で確認された。本号跡は、調査区外にも存在すると推定されるが、その全容は明らかでない。確認面におけるプランの大きさは、約2.3m×1mで、底面は2つの土塚に分れる。底面の掘り込みはハードローム層上面に達する。なお、確認面からの深さは約20cmであるが、掘り込み面はII層を切っているので(A-A'),掘り込み面からの深さは約40cm～50cmに達する。壁面は不明瞭で、ゆるやかな起伏がある。壁下部は約40°の傾斜角で立ち上がる。覆土は道路のてん圧の影響を受け、全体に非常に硬質であるが、以下の4層に分層される。1. 暗褐色土層。直径約2～3mmのハードロームブロックと、ほぼ同大の焼土粒が散在する。2. 黄褐色土層。ローム粒が褐色土中にブロック状に散在する。3. 黒褐色土層。黒色土が大量に堆積し、ローム粒が混入する。

41(028)号跡(第168図)

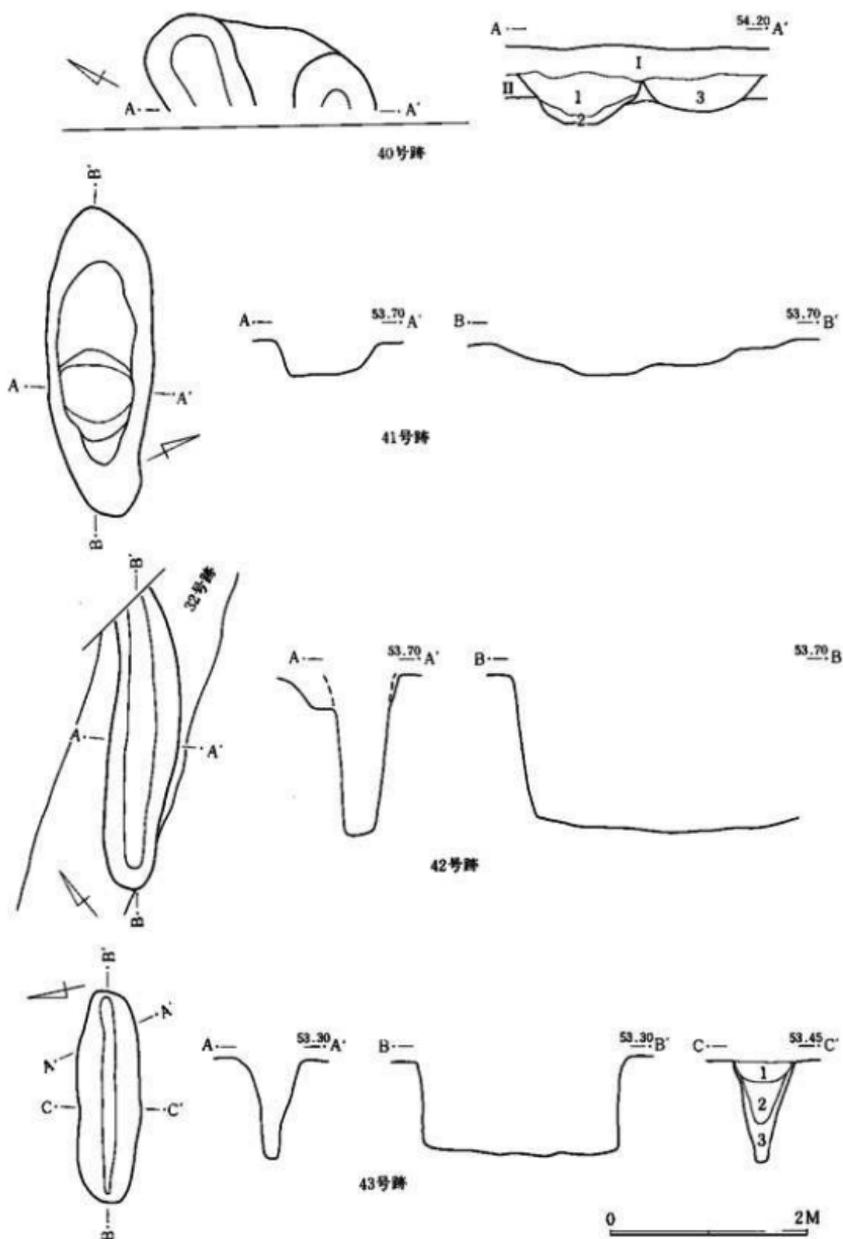
106区に位置する土塚で、II層で確認された。確認面における開口部の大きさは長軸は約3.1m、短軸は約1m、底面における長軸は約2m、短軸は約70cmで、平面観は不整形な長楕円形を呈す。主軸方向はN-65°-Wを指す。底面に弱い起伏がある。中央やや東寄りに直径約80cm、底面との比高差約10cmの浅い掘り込みがあり、この部分を除くと底面の掘り込みはハードロームに達しない。確認面から底面までの深さは約30cmで、開口部の大きさに比して深度は浅い。壁下部は約40°～80°の傾斜角で立ち上がる。覆土は、黒色土とローム粒を主体とする褐色土であるが、断面実測は行わなかった。

42(029)号跡(第168図)

109～110区に位置する土塚で、32号跡底面で確認された。32号跡に切られ、また一部が調査区外に存在する。確認面における開口部の大きさは長軸約3.2m、短軸約70cm、底面は長軸約2.8m、短軸約30cmで、平面観は長楕円形を呈す。なお開口部の長軸長は図上復原による推定長である。主軸方向はN-39°-Eを指す。底面は弱い起伏があるが、ほぼ平坦で確認面からの深さは約1.3mである。壁は明瞭で、底面の掘り込みは立川ローム層を抜く。壁下部は約80°の傾斜角で立ち上がり、壁中部より上ではほぼ垂直となる。覆土は、粘性のあるハードロームブロックを主体とする暗黄褐色土が堆積するが、密度は粗く、しまりは悪い。遺物は発見されなかった。

43(033)号跡(第168図、図版69)

調査区の東端に近い114区に位置する土塚で、III層上面で確認された。確認面における開口部の大きさは長軸約2.2m、短軸約60cm、底面は長軸約2.1m、短軸約20cmである。平面観は長楕円形を呈す。主軸方向はN-81°-Wを指す。底面はほぼ平坦で、確認面からの深さは約1mを測り、立川ローム層を深く掘り込む。壁面は明瞭である。壁下部は約86°～90°の傾斜角でほぼ垂直に立ち上がるが、ハードロームとソフトロームの境界付近から上部では、約70°の傾斜角にゆるむ。覆土にはローム粒が主体的に堆積するが、ハードロームを掘り込む壁面とは硬度のちが



第168图 40(024), 41(028), 42(029), 43(033)号跨实测图

いなどから明らかに区別され、C-C'断面では以下の3層に分層される。1. 暗褐色土層。粒子の細かいローム粒と黒色土を主体とする土層で、粘性が強く、よくしまる。2. 褐色土層。ローム粒を主体とする土層で、粘性がありよくしまる。3. 黄褐色土層。粒子の細かいローム粒が高密度に堆積する。炭化粒が混入する。なお、遺物は発見されていない。

第4節 包含層出土の遺物

遺構ともなわない包含層から少量の土器片が得られたが、そのうち坏1点と古銭1点が実測が可能である(第169図, 第59表, 図版70)。(1)が出土した96区には遺構が発見されなかったが, 94区には7号跡が存在する。(2)は, 寛永通宝の銅銭で, 直径22.6mm, 厚さ1.1mm, 重量2.05gを計る。採集地点は明らかでない。「元」の背文がある。



第169図 包含層出土遺物

第59表 包含層出土遺物観察表

検出 番号	器種	出土区	法量 口径(cm) 器高(cm) 底径(cm)	主な特徴	粘土	焼成	色調	残存度	備考
1	土師坏	96区	(14) — —	口縁内外面: ヨコナデ	細砂粒少	青	外 内 } 赤褐色	口縁部のみ1/6	

第5節 小 結

今回の調査成果を時代別に概観すると以下のとおりである。

<先土器時代>

2m×2mの試掘用グリッドを8地点に設けてローム層内を調査した。グリッド内からは遺物等が発見できなかったが, 7号跡覆土内からはナイフ形石器などが出土しており, 7号跡に近い台地縁辺部に包含層が存在する可能性がある。なお, 当遺跡に設けた試掘用グリッド内では隣接する小座ふちき遺跡では困難だった第VII層の分層が可能である。

<縄文時代>

陥し穴状土坑が検出された。いずれも形態を異にしている。遺物等は発見できなかったが、覆土の性状やその堆積状態などから、一応縄文時代の遺構と考えておく。

<古墳時代>

古墳時代後期の土師器、奈良、平安時代以降の土師器、須恵器をともなう住居跡と溝が検出された。しかし、今回の調査区域は面的なひろがりをもたないので、検出した遺構の実態や性格等は把握しにくい。なお、次章第4節に住居跡と溝の構築時期についてのまとめを行なった。

第6章 まとめ

第1節 高部宮ノ前遺跡の遺構について

1 住居跡

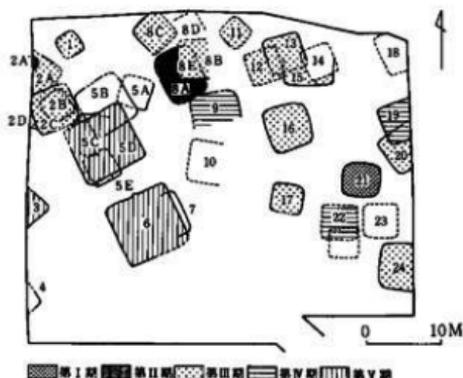
今回の調査で発見された住居跡もしくはその可能性のある遺構は合計36軒で、いずれも竪穴住居跡である。これらは、弥生時代後期から古墳時代後期に至る時期に構築されたものと考えられ、出土した遺物の構成内容によって以下に示す5つの時期に分けることができる。

第Ⅰ期 弥生時代後期、第Ⅱ期 弥生時代末～古墳時代初頭、第Ⅲ期 古墳時代前期、第Ⅳ期 古墳時代中期、第Ⅴ期 古墳時代後期

第Ⅰ期の住居跡は21号跡が確認された。21号跡の平面形態は長軸約5.2m、短軸約4.6mの隅丸方形を呈し、床面積は約20㎡の規模をもつ。出土した遺物量は豊富で、紡錘車、土玉を伴出する。壘、坏は久ヶ原式の範疇でとらえられる。付加物を有する土器も伴出するが、いずれも小形の破片資料で、本号跡の主体的土器とはならない。調査区内で検出した本期の住居跡は1軒のみにとどまっている。これは当時の集落を構成する住居の絶対数が少ないためか、当時の集落の中心と調査区域が位置的にずれたためか、後世の構築物によって本期の住居跡が破壊されたためなどが原因として考えられる。たとえば、柱穴のみを残した住居跡と推定される8E号跡は、第Ⅱ期の8A号跡に切られているところから、第Ⅱ期以前の住居跡の可能性がある。

第Ⅱ期の住居跡は、2A号跡の下位に想定される住居跡(以下では2A'号跡)と8A号跡の2軒であるが、いずれも調査区域の北側に出現し、第Ⅲ期以降の住居に切られる。2A'号跡の平面形態は明らかでないが、8A号跡の平面形態は長軸約7.7m、短軸約6.4m、床面積約45㎡の小判形を呈す。4本の主柱穴をもち、プラン中央西寄りに炉を1基設ける。全体の形態は久ヶ原式、弥生町式土器を出土する南関東地方の住居跡とよく似るが、臼井南式あるいは印手式とされる壘と五領式土器が主体的に出土しており、久ヶ原式、弥生町式土器をともなわない。土玉が出土している。なお、2A'号跡は五領式の範疇でとらえうる土器をともなわないが、本号跡が完掘されないこと、臼井南式あるいは印手式とされる壘をともなうことなどから一応第Ⅱ期に編入した。

第Ⅲ期の住居跡は、1、2A、2B、2C、8B、8C、11、12、13、15、16、17、20、24号跡の14軒で、五領式の範疇に入る土器と土玉、土製紡錘車をともなう。本期の住居跡は調査区北側の台地縁辺部に沿うように東西に広がっており、今回の調査で確認された住居跡のなかでは本期に属するものが最も多い。住居跡の軒数に関していえば、この時期に本格的な集落が形成され、一挙に集落規模が最大に達したものと思われる。しかし、上記の14軒の住居跡のう



■ 第Ⅰ期 ■ 第Ⅱ期 ▨ 第Ⅲ期 ▮ 第Ⅳ期 ▩ 第Ⅴ期
 数字は遺構番号を表わし、住居跡以外の遺構は省略してある。
 また空白は時期不明の住居跡を示す。

第170図 高部宮ノ前遺跡における住居跡の時期別分布

ち2A～2C, 12, 13, 15号跡の6軒には本期の住居跡と下記のような切り合いの関係がみとめられるので、14軒の住居が同時に存在した可能性はない。

2A号跡→2C号跡→2B号跡

15号跡→13号跡

12号跡→13号跡

これらの住居の構築時期に、どれくらいの時間差があるかについては今のところ明らかでないが、①出土する土器組成は一律でなく、15号跡、24号跡のようにS字状口縁台付甕や弥生後期の土器を伴出するものと、16号跡、20号跡のように、和泉式と共通する要素を多く持つ土器をとまなるものがあること。②本期の住居跡の主軸は一定の方向に収束することなく、ほぼ真西から北に至る広い範囲を指すが、相対的に古い時代の土器を伴うものほど、西方寄りを指す傾向がみられること(第60表)などから、本期は少なくとも2つの時期に細分して考えるべきかもしれない。第Ⅲ期の住居跡の平面形態は基本的には隅丸方形で、4～5本の支柱穴と1基の炉を設けるが、1, 2B号跡のように柱穴が検出できないものもある。床面積は最小が1号跡の約9㎡, 最大が16号跡の約32.5㎡であるが、約20㎡前後のものが最も多い。24号跡はその東半分が調査区域外に存在するが、調査区内で確認した2本の支柱穴は巨大で、直径約70cm, 深さ約1mを測る。これと今回発見した住居跡のなかで最大の床面積をもつ6号跡の柱穴と比較すると、直径がひとまわり小形になるものの深度はほぼ等しい。もし、柱穴の大きさが住居やその上部構造の規模をある程度反映しているとすれば、24号跡は、この時期の一般の住居とは性質の異なる住居だった可能性がある。

第Ⅳ期の住居跡は5E, 9, 19, 22号跡の4軒で、和泉式の範疇に入る土器を出土する。19

第60表 高部宮ノ前遺跡の住居跡主軸方向別一覧

主軸方向	遺構番号	時期	概算床面積(m ²)	主軸方向	遺構番号	時期	概算床面積(m ²)
N-93°-W	8A号跡	第Ⅱ期	28.5	N-13°-W	1号跡	第Ⅲ期	9
N-93°-W	2C号跡	第Ⅲ期	26	N-10°-W	5B号跡	—	(39)
N-78°-W	5A号跡	—	(25)	N-10±°-W	18号跡	—	—
N-75±°-W	2A'号跡	第Ⅱ期	—	N-9°-W	16号跡	第Ⅲ期	32.5?
N-71°-W	24号跡	第Ⅲ期	—	N-9°-W	5D号跡	第Ⅴ期	70
N-69°-W	21号跡	第Ⅰ期	19	N-7°-W	6号跡	第Ⅴ期	72
N-62°-W	17号跡	第Ⅲ期	13	N-5°-W	13号跡	第Ⅲ期	22
N-60±°-W?	2D号跡	—	—	N-2°-W	19号跡	第Ⅳ期	(29)
N-45±°-W	2A号跡	第Ⅲ期	—	N-2±°-W	12号跡	第Ⅲ期	—
N-38°-W	8C号跡	第Ⅲ期	21	N-2±°-E?	8D号跡	—	—
N-30±°-W	3号跡	第Ⅴ期	—	N-5±°-E	9号跡	第Ⅳ期	—
N-30±°-W	11号跡	第Ⅲ期	(12)	N-5±°-E	23号跡	—	—
N-28°-W	20号跡	第Ⅲ期	(25)	N-10±°-E	22号跡	第Ⅳ期	—
N-24°-W	5E号跡	第Ⅲ期	(16.5)	N-11°-E	8B号跡	第Ⅲ期	—
N-20±°-W	2B号跡	第Ⅲ期	(19.5)	N-17±°-E?	5C号跡	—	(35)

■ プランの復原が不完全で主軸方向に誤差を伴うものについては±の符号を付した。
 プラン床面が重複等によって十分に復原できないものの床面積は()内に示した。
 主軸方向の定まらない4号跡、7号跡、10号跡、15号跡については表から外した。

号跡を例外にすると、土製紡錘車、土玉、石鍬は本期以降の住居跡にはともなわない。住居軒数は第Ⅲ期に比べると急減し、調査区の東側に出現する傾向がある。19号跡はプランの東側が調査区外に存在するが、平面形態は一辺約5.5mの隅丸方形になるものと推定される。22号跡は調査区内に存在したが、壁面と床面の大部分が破壊されており、規模等は明らかでない。9号跡はプランの南半分が破壊されるが、この時期の一般的な住居跡にはみられない以下のような特徴がある。①ルームへの掘り込みは浅く、ソフトルーム上面からの壁高は低い。②床面を掘り込むピット状のくぼみが4ヶ所で発見されたが、いずれも浅く、この時期の住居跡の柱穴とは性格が異なる。③上記のピットのうち、プラン中央東寄りのピット内には焼土粒が密に堆積し、ピット底の一部は赤化し、敷石状の金床石が出土した。④床面上からは鉄滓が出土し、上記のピット周辺部に多く分布する。以上のような特徴は、本県で従来知られている鍛冶址の特徴(千葉県文化財センター 1982)と多くの点で共通しており、本号跡が鍛冶址である可能性が高い。なお、鍛冶薄片の存在の有無については、確認できなかった。

第Ⅴ期の住居跡は3、5D、6号跡の3軒である。鬼高式の範疇に入る土器を出土し、かまどを設ける。確認した住居は、調査区域の西側に出現しており、第Ⅳ期に比べると集落の中心が台地西側に移動したようにみえる。5D号跡は、平面形態が一辺約8.5mの正方形を呈し、床

面積は約70㎡である。6号跡の平面形態も方形を呈し、床面積は約72㎡に達する。両号跡ともこれまでの時期ではみられない最大規模の床面積をもち、北壁中央部にかまどを1基設け、5本の支柱穴をもつこと、プラン北東隅に貯蔵穴を1基有すること、壁高が高いこと、主軸方向がほぼ一致することなど多くの共通点をもつ。これらは両者の構築時期がかなり接近していた可能性を示唆するものである。しかし、5D号跡南壁とかまどのある6号跡北壁との間隔は、約4mとかなり狭いこと、両号跡出土の土器構成に若干の时期的なずれがみとめられることなどから、この2軒の大形住居が同時に存在していたかどうかは検討の余地がある。

以上に記した以外の2D、4、5A、5B、5C、7、8D、10、14、18、23号跡の11軒の住居跡は所属時期が明らかでない。このうち5A～5C、8D、10、14、18、23号跡には1基ずつの炉址が設けられている。また、上記の住居跡のうち時期の明らかな住居跡と切り合い関係をみとめるのは、2D、5A～5C、7号跡の5軒で、その新旧関係は以下のとおりである。

2D号跡→2C号跡(第Ⅲ期)

5A号跡→5B号跡→5C号跡→5D号跡(第Ⅴ期)

7号跡→6号跡(第Ⅴ期)

このことから2D号跡は第Ⅲ期以前に、また5A～5C号跡と7号跡は第Ⅴ期以前に所属することが明らかである。なお、7号跡床面上からは付加条を施した甕もしくは壺の胴部破片が出土している。また、5B号跡からは2号跡出土の資料と類似した土製紡錘車が出土しているので、これらは第Ⅲ期以前までさかのぼる可能性がある。

2 溝

今回の調査で25、26、27、28、29号跡の5条の溝が確認された。このうち調査区内を東西に横断する29号跡は、重複するすべての住居跡を切ることで、復原実測の可能な遺物をともなわないこと、堆積土の安定性が十分でないことなどから近世以降の構築と思われる。

28号跡は、調査区南部を東西に走行するもので、5条の溝のうち唯一その両端が確認された。平面形態は逆L字形で、溝の東側が南へ屈曲し、総延長は約45mである。この溝には他にみられない以下のような特徴がある。①上端幅、深度、壁面の傾斜角などが一定しない。②鉤形の屈曲部付近の底面は平坦で、竪穴住居跡床面に匹敵する硬度を持ち、ピットが集中する。③覆土には性質の異なる土壌が層をなして堆積するが、各層の境界は明瞭である。④覆土中には先土器時代以降の各時代の土器、石器と搬入時期が不明な自然石等が多量に存在する。ところで、28号跡覆土下部からは、常滑を主体とする陶器類や天目釉などが発見されることから、その構築時期は中世以降まで下るものと考えられるが、主体となる常滑は、赤羽(1977)の示す14世紀～16世紀ごろのものに似るので、この時期まで構築時期を絞れるかもしれない。また、本号跡覆土は上述のように分層が容易であるため、覆土の堆積状況が比較的把握しやすい。3地点の

断面観察を総合すると、溝の埋没は風雨等の浸食をうけることなく、主として溝南部からの多量の土砂によって短時間のうちに終了した可能性が強い。また、出土した遺物等もていねいに置かれた状態のものはないこと、接合状況が不良であることなどから、この間、土砂と一緒に流れ込んだものと思われる。

25、26、27号跡は、いずれも調査区域の北西～西側の境界線と重複するように走行する。27号跡の底面には約1.2m間隔で並ぶピット列があること、両者は隣接し、走行方向が一致することなどから連続する1条の溝である可能性がある。なお、25号跡からは常滑と思われる小破片が1点出土しており、中世の溝の可能性はあるが、28号跡との関係は明らかでない。26、27号跡は遺物をともなっておらず、構築時期は不明である。

第2節 高部宮ノ前遺跡出土の土器について

縄文時代以降、中世までの土器が出土しているが、本節では調査区域の広い範囲から出土した弥生後期から古墳時代前期の土器についてまとめてみる。これらの土器の器種構成は、甕、小形甕、壺、鉢、埴、高坏、器台であるが、各器種はその形態的な特徴から以下のように大別される(第171図)。

甕

甕A1：口縁部と体部の境界は不明瞭である。文様がある。

甕A2：口縁部と体部の境界は不明瞭である。文様はない。

甕B1：口縁部と体部の境界は明瞭である。ハケ目調整が施される。

甕B2：甕B1とよく似るが、容積が、相対的に小形である。

甕C1：いわゆるS字状口縁台付甕で、口縁がS字状に屈曲して立ち上がり、体部にクシ目状の鋭いハケ目が施される。器厚は薄く、胎土は黒褐色を呈し、白濁色の砂粒を多く含む。台端部を内側に折り返す。口縁部と体部最大径に近い部分にススが多く付着する。

甕C2：甕Bに台部がついたものと考えられる。台端部は折り返しをもたない。

甕D：口径の大きい大形甕で、頸部のくびれは強くない。

甕E：広口の極小甕。

甕F：長胴の小形甕。

壺

壺A1：口縁に外方への折り返しがある。

壺A2：口縁幅が広く二重口縁状の大形壺。

壺A3：頸部に突帯をもつ。

壺B：頸部が強くくびれ、体部は球形を呈す。

壺C：巨大な壺。当遺跡では復原実測の可能なものはない。

鉢および埴

鉢：口縁直径が器高よりも大きく、かつ胴部最大径よりも大きい。

鉢A：底部が丸味を帯び、いわゆる小形丸底土器とよばれるもの。

鉢B：皿状の形態をもつもの。

鉢C：碗状の形態をもつもの。

埴：口縁直径が器高とほぼ等しいか、それよりも小さい。丸底もしくはそれに近い形状の底部をもつ。

高坏

高坏A1：碗状の坏部に短い脚がつく。文様をもたない。

高坏A2：碗状の坏部に短い脚がつく。文様をもつ。

高坏B1：坏部に弱い稜がある。脚はひらく。大形のもの和小形のものがある。

高坏B2：坏部に1本の稜がある。脚は筒形を呈し、下部がくびれる。

高坏B3：坏部底部に円盤状の張り出し部をもち、口縁が外反する。脚はひらく。

高坏B4：坏部下部が2回屈曲する。脚部は明らかでない。

高坏B5：坏部下部が直角にくびれる。脚は筒形を呈す。

高坏B6：碗状の小さな坏部にひらいた脚がつく。

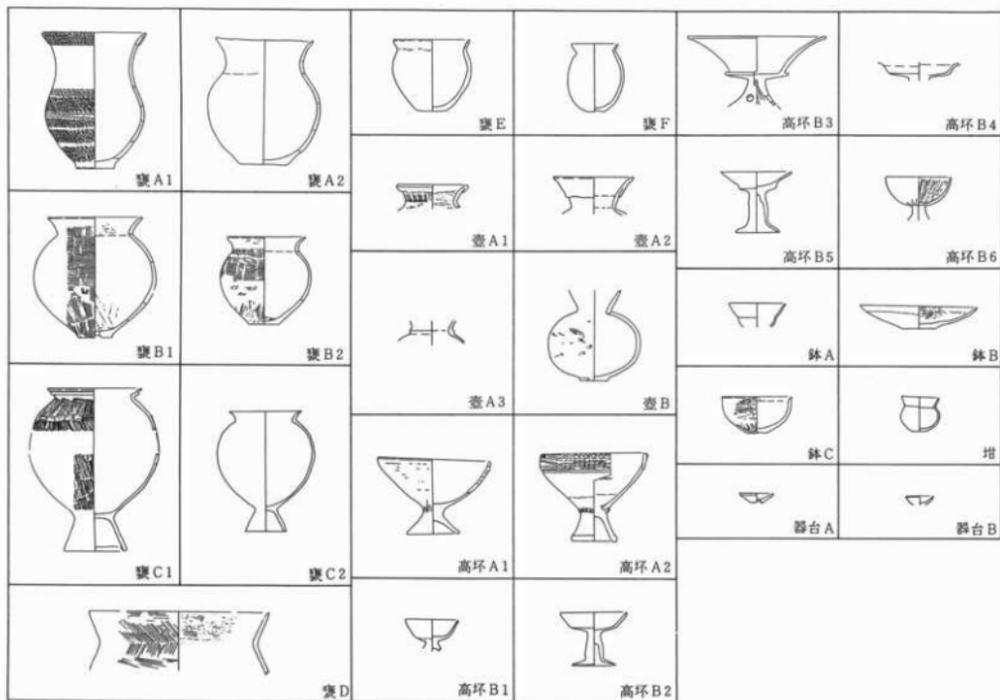
器台

器台A1：穴が貫通し、受部下部に稜を持つ。

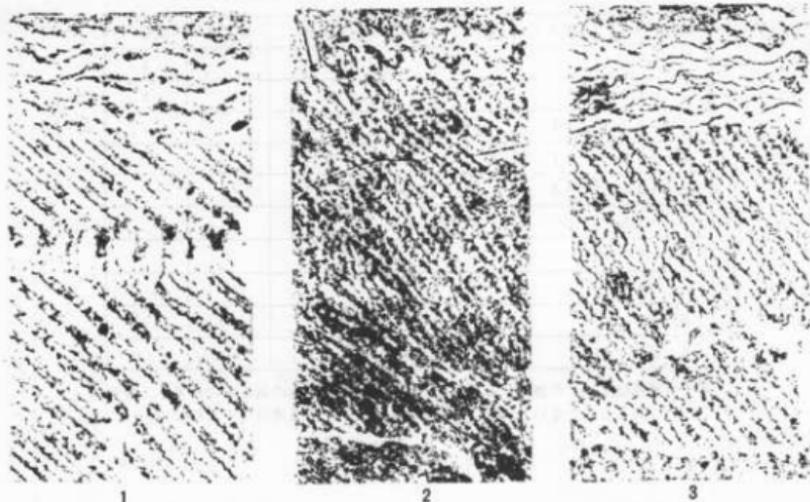
器台A2：穴が貫通し、受部下部に稜を持たない。

器台B：穴が貫通しない。高坏B6と似る。

壺A1は、器形的には壺との区別がつきにくく、口縁は折り返しもしくは貼付けによる複合口縁をなす。口唇部に棒状工具を用いて押捺文を施すもの、口縁に斜縄文を施すものなどがある。頸部は無文で、体部に斜縄文を施し、底面に木葉痕を残すなど、熊野(1978a)、田村(1979)の記載する白井南式、あるいは印手式(齊木、深沢 1978)の壺とよく一致した特徴を持つ。2A、8、19、21、24号跡の第I期～第III期住居跡から出土するが、第I期の21号跡と第III期の19、24号跡出土の資料はいずれも破片であるので、第II期に主体的に用いられたものと思われる。2A号跡の出土資料(第8図1)は体中央部に押捺文が施され、久ヶ原式壺によく用いられる分割形成法をとるものと思われる。8A号跡の壺A1は膨らみがやや強いが、茨城県長峯遺跡出土(大洗町長峯遺跡調査団 1973)の長岡式壺(佐藤 1973)とよく似た文様構成をとる(第26図2)。なお同号跡からは五領式の範疇に属す壺B1が伴出する。本遺跡出土の弥生時代後期土器に付された縄文原体は、付加条、撚り戻し、単節および、無節縄文の4種が確認されているが、壺A1には、久ヶ原式、弥生町式には存在しないとされる(田村 1979)付加条と撚り戻し



第171图 高部宮ノ前遺跡出土土器種分類图



第172図 高部宮ノ前遺跡出土弥生土器縄文拓影図(原寸)

1：第8図1， 2：第26図2 3：第26図1

し縄文が施される(第172図)。甕A2は久々原式系の甕で、第1期を代表するものだが、器形の美しさや全体の調和は劣り、ローカルな印象をまねがれない。甕B1は、1, 2A~2C, 8A, 8C, 13, 15, 19, 20, 22号跡から出土するもので、第III期~第IV期に主体的となる甕である。これと器形が相似的な関係にある甕B2は、2A, 13, 15, 16, 17, 19, 22号跡から出土し、甕B1と似た頻度で出土する。甕C1は、第III期の15号跡と16号跡から出土するが、個体数は少なく主体的な存在とはならない。ところで、関東地方に分布するS字状口縁台付甕は、東海系のものとして田川系のもので知られているが(大参 1967, 熊野 1978b)、今回得た資料は、いずれも器厚が非常に薄いこと、胎土に多量の白濁色砂粒を含むこと、焼成は良好であることなどの特徴から東海系のもので考えられる。なお、15号跡出土の資料(第39図1)について胎土分析を試みたところ、本遺跡付近の地質からは産出しないう組成を示すことが明らかである(千葉県文化財センター 1984)。甕C2は、南関東の久々原期以降、五領期に至る期間に存在した在地系の台付甕と思われる、本遺跡では、2C, 8A, 8B, 24号跡から出土した。第II期~第III期の住居跡にともなうものと考えられるが、出土する頻度は相対的に低く、この地方の一般的な傾向(熊野 1978a)とよく一致する。甕Eは、1, 20, 21号跡から出土し、第I期~第II期の住居にともなうが、これも出土する頻度はそう高くない。甕Fは19号跡から出土したもので、第IV期になって登場する。

第61表 高部宮ノ前遺跡出土土器の容積別個体分布

容積(ℓ)	甕A 1	甕A 2	甕B 1	甕B 2	甕C 1	甕E
1 >						4
1 ~1.5						1
1.5~2	1			4		
2 ~2.5	1	2				
2.5~3	1					
3 ~3.5		1				
3.5~4			1			
4 ~4.5			5			
4.5~5						
5 ≦			1		1	

※ 煮沸痕はすべての甕Aにみられる。甕B 1では煮沸痕のあるものが多く、甕B 2ではあるものとないものがほぼ折半する。甕Eには煮沸痕はみられない。

本遺跡出土の当該期の甕は以上のように時代が下がるにつれて、壺形に近いものから球形のものに変化する傾向がみられるが、第Ⅱ期の甕Aから第Ⅲ期の甕Bへの形態変化には著しい飛躍がある。甕Bの出現理由は、本地域における弥生時代中期以来の伝統の中からは説明しきれないが、もし、甕Aから甕Bへの変化を系統的な変化として理解するとすれば、甕Bはまず、久々原系の甕A 2が東海方面からの影響によって変化したあとをうけて、本地域に波及した可能性を考えるのが妥当と思われる。第61表は、高部宮ノ前遺跡出土の甕A～Eの容積分布を示すものである。この表から知れるように、甕Aの消滅によって2～3ℓ前後の容積をもつ甕が失われるが、これと相同的な機能を果たしたと思われる甕Bが、その欠落部分を補っていないことは注意しておく必要があろう。なお、本遺跡の第Ⅱ期は、関西でいう庄内式の時期もしくはその直前に相当すると考えられるが、その理由としては①本遺跡出土の甕C 1は安達、木下(1974)分類のⅡ類に相当し、それが庄内式をとまうこと。②本遺跡では甕C 1が、第Ⅲ期に出現することなどが挙げられる。なお、本遺跡の包含層からは、底部を内面から押し出し、削り丸底を作出する甕が出土している(第74図1)。口唇部の外反が弱いもののハケ目の使い方などに庄内式の影響がうかがわれ、第Ⅲ期に搬入された可能性がある。

壺は本遺跡では非常に出土頻度が低く、14、16号跡など第Ⅲ期の住居跡からわずかに出土する。煮沸痕のあるものが多く、貯蔵具としての壺本来の機能を果たしたものは少ないと思われる。

埴は本遺跡では第Ⅲ期以降の住居跡から出土し、特に第Ⅳ期の住居跡から出土する頻度が高い。

高坏は高坏Aが、久々原式系の高坏に普通にみられるもので、本遺跡では第Ⅰ期の住居跡にもなう。高坏Bは、B2、B4、B5を除くと第Ⅲ期の住居跡から出土し、とくにB1の頻度が高い。坏部と脚の接合法には、①坏底中央部に短い突起を作出し、脚上端の開口部にうめ込む充填法(仮称、以下同じ)、②坏底部と脚上端面の間に突起をはさまず、密着する接着法、③坏底中央部に穴をあけ、脚上端部を挿入するさし込み法の3通りがあるが、その時期差や量差等についてはまだ検討を加えていない。

なお、器台は2A、17号跡の第Ⅲ期住居跡から出土する。

以上のように、本遺跡出土の当該期における土器構成とその変遷を概観すると、従来の南関東における弥生時代～古墳時代に至る編年体系とは矛盾する事実が多くみられるが、このような傾向は、利根川下流域に存在する遺跡の調査がすすむにつれてこの地域に一般的な事実として明らかになりつつある。これを久々原、弥生町式の大文化圏の外周部に存在する小文化圏として理解する試みがあるが、その内容は、いま一つ明らかでない。当時の利根川下流域には、縄文時代の古鬼怒湾のなごりである浅く、波静かな海湾が存在していたものと推定されるが、この海湾は陸路交通を遮る地理的障害となっても、水上交通には好適な環境を提供したはずである。そうだとすれば、その沿岸一帯にはそのような条件に支えられた南北間の広い範囲にわたる物的、人的な交流によって、北、東関東、南関東地方においてそれぞれ伝統的な文化要素が混在する下地がつくられやすかったことは想像に難くない。なお、千葉県におけるアメリカ式石鏃の出土例は、臼井南遺跡についていまのところ2例目である。本地域における調査例は、現在までのところ量的に少なく、研究の立ちおくれが目立つので、今後とも基礎的なデータの蓄積が必要といえよう。

第3節 今郡カチ内遺跡出土の縄文土器について

今郡カチ内遺跡から出土した縄文土器は、3群16類に大別されたが、本節ではこれらについて若干の説明を行う。

1 第Ⅰ群沈線文系土器

本群は、土器外面に棒状工具の先端を用いた平行沈線文を施す。口縁はいずれも平縁で、口唇断面は丸形を呈するものと口唇上端が平坦な角形のもののが大部分を占めるが、内ソギのものを少量含む。文様は、沈線文以外にヘラ状工具による刺突文もしくは押圧文を施すものがあるが、瘤状突起をともなうものはない。底部は乳房状を呈す。

以上のような特徴は、赤星(1929)が記載した三戸式の特徴と類似するが、アカガイ、ハイガイなどの殻を用いた貝殻文はみられないこと、口縁にスリットが刻まれないこと、器厚はやや

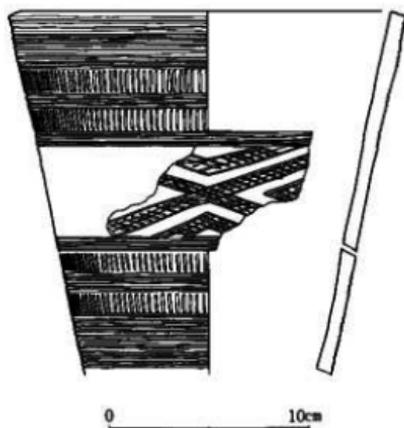
厚く9～10mm前後のものが多数を占めること、また山形押型文土器、楕円形押型文土器、格子目形押型文土器をとまわらないことなどから、狭義の三戸式(赤星 1929)とは区別して考えるのが妥当である。

第1類土器

本類は、横位平行沈線に区画された文様帯に方向の異なる斜行沈線を充填するが、文様帯内に刺突文をとまわらないもの(1B種)と、刺突文をとまなうもの(1C, 1D種)の2種類がある。前者は、福島県竹之内遺跡出土の竹之内式(馬目 1982)と似るが、かかる文様帯は1段しか確認されていないこと、横位平行沈線帯の帯幅が広いこと、斜格子文を充填する文様帯がないことなど、いくつかの相違点がある。これに対して後者は刺突文をとまなうこと、斜格子文がみられないことなどを除くと、上記の文様帯を2段以上もつこと、文様帯間にある平行沈線帯幅が狭いことなどむしろ竹之内式に近い特徴をもつ。しかし、横位平行線文が盛行すること、刺突文をとまなうことなどの特徴は、当遺跡の沈線文系土器の主体である第2類と共通しており、これらは竹之内式土器よりも時代的に下るものかもしれない。

第2類土器

本類は今回採集した第1群土器全体の約半数を占める。2A種は、同一個体に由来する大形破片が多く得られている(第95図1～4, 6～10)。これらの資料は、口縁部から体下部の破片で直接接合するものはないが、焼成、器厚、器面の弯曲度などを手がかりにして器形と文様を推定復原すると第173図のようになる。器形は口縁がゆるくひろく尖底で、横位平行沈線を口縁から体下部にかけて重ね、体中央部に幅広の文様帯とそれをはさんで上下2段ずつ幅の狭い文様帯を区画するものと考えられる。体中央の文様帯には、ナデ調整による無地の地文を多く残



第173図 今郡カチ内遺跡出土第1群第2類土器推定復原実測図

して、斜行沈線を交錯させた菱形文を描く。また、その上下の文様帯には、ヘラ状工具を用いて簾状の押圧文を施す。これらの文様はいずれも横位平行沈線を切ることから、文様の施文順は、横位平行沈線による文様帯区画が先行するものと考えられる。ところで、図示した6段の平行沈線帯を形成する沈線条数は、口縁部から底部に向かって9、4、4、4、4、11条で、また各平行沈線帯幅はおなじく約2.8、0.85、0.85、0.8、0.85、2.8cmを計り、規則的な条数と帯幅をもつ。また、これらの平行沈線によって区画された横位文様帯幅も口縁に近いものから順に約1.25、1.25、4.4、1.25、1.2cmを計る。以上のように、この土器の文様施文には、計画的な割り付けがなされていた可能性が高く、そうだとすると、最も先行して土器面に描かれる横位平行沈線による文様帯区画が重要な意味をもっていたものと考えられる。なお、2A'種は2A種の簾状押圧文の代わりに2段の刺突文をもつものである。同じく2段の刺突文をもつ2B種と2A種との関係は明らかでないが、2A'種は2A種よりも時期的に若干後出するか、精製、粗製の関係にあった可能性がある。また、簾状押圧文の間隔が広い2A'種、加工した施文具を用いて2段の押圧文を施す2C種、簾状押圧文を縦位の短線に置換する2D種などは、かかる文様帯施文のバリエーションとして興味おかい。

ところで、2A種に類似した施文例は、神奈川県三戸遺跡、鳶尾遺跡などで出土しており、これらはいずれも三戸式に比定されている(赤星 1929、鈴木 1975、岡本編 1982)が、横位平行沈線に区画された幅の狭い文様帯には2段もしくは3段の刺突文が施されており、本例のような簾状押圧文はみられない。千葉県神田台遺跡出土の第1群第2類土器(池田 1978)はヘラ状施文具の切り込みで、2A種の簾状押圧文と類似した文様効果を作出しており、これは三戸式に比定されている。なお、岩手県大新遺跡出土の第5類土器(武田、吉田 1970)には、無文地の文様帯に斜行平行沈線を交錯させて2A、2A'種によく似た菱形文を描くものがあり、また福島県大平遺跡出土の第1類土器(竹島 1958)にも横位平行沈線間の幅の狭い文様帯に3段の刺突文を施す例がある。これらはそれぞれ三戸・大平式と三戸式相当に比定されている。

平行沈線文と刺突文の組み合わせは、田戸下層式にもみることができるが、本類とは文様の繊細さを異にするので、一応これとは区別し、三戸式に前後する時期のものと考えておく。

第3類土器

横位平行沈線と斜行平行沈線を組み合わせた文様を描き、口唇断面は内ソギになる口縁資料(第95図34)は、赤星(1929)が図示した三戸式とよく符合する。

第6類土器

口唇上端面に山形スリットを刻むもので、類例は岩手県風林遺跡出土の日計式押型文土器(武田 1982)に少数みられるが、口唇断面は丸形ないし稜線の弱い角形である。山形スリットを刻む押型文土器は日計式後葉に属するものであるが、三戸式などの沈線貝殻文や口縁部の内ソギは、日計式後葉の土器を踏襲したものと考えられている(武田 1982)。

第7類、第8類土器

太く浅い横位沈線を重ねるもので、沈線が明瞭なもの(第7類土器)と沈線が浅く一見無文土器に似るもの(第8類土器)とに分けられる。これらは、茨城県伏見遺跡出土の第2群2類土器(小野 1980)、竹之内遺跡出土の貝殻・沈線紋系土器II h(馬目 1982)、神奈川県鴨居上の台遺跡出土の第IV群第1類a種(山田 1981)と類似する。小野は伏見遺跡における遺物堆積層の層序的な観察結果から、これらを三戸式に先行するものと考えたが、馬目はこれを田戸下層式に近い土器群としており、両者の考えにはへだたりがある。

なお、第7類、第8類土器に施された各横位沈線は、それぞれ口縁部から体部を輪条にめぐらる。しかし、7A'種に施された横位沈線は、途中で明らかなくいちがいがみられ、厳密な意味では輪条に体部を全周しない(第96図6, 7)。これらの沈線文は強く明瞭であり、田戸下層式に近いものとして扱うべきかもしれない。

2 第II群無文土器

内外面に文様をもたない無文の土器で、器面調整の状態や口唇断面などのちがいがら6類11種に分けられた。無文土器は、関東地方では縄文時代早期前葉に出現するもので、摺糸文土器から漸次的に移行したものと理解されている(岡本 1982)。本群には、竹之内遺跡、千葉県袖崎貝塚(西村、金子 1960)、鴨居上の台遺跡出土の無文土器と共通した特徴をもつものがあるが、今回はこれらの資料との比較検討を行っていない。なお、神奈川県平坂貝塚出土の平坂式(岡本 1953)とは、焼成が一般的に良好で、器質は脆弱でないこと、器面調整にともなう擦痕方向がほぼ一定であることなどの相違点があるので、これとは区別して考えるべきであろう。

ところで、今郡カチ内遺跡出土の無文土器には大きな特徴が2つある。その1つは出土量の豊富さである。今回明らかになった無文土器片の資料数は約220点であるが、これは今回出土した縄文土器片全体の約55%に相当する。この中には、無文土器以外の土器の無文部分に由来する破片資料を多少含んでいるとしても、無文土器が当遺跡の縄文土器の中で主体的な位置を占めていた可能性がある。第2の特徴は、沈線文土器と日計式押型文土器をとまなうことで、関東地方の無文土器が、しばしば中部地方に分布の中心をもつ押型文土器をとまなうて発見されることとは性格を異にする。今回の調査では、これらの共伴関係はかならずしも明確にされていないが、このことは、東西の押型文土器分布圏の接点に位置する遺跡の地理的な条件などを考慮すると興味ぶかい事実である。

3 第III群押型文土器

本群は、外面に平行線状文(武田 1969)とV字状文を押圧した日計式押型文で、胎土、焼成、施文原体の類似性などから、すべて同一個体由来のものと考えられる。全体の器形や文様構

成は明らかでないが、第100図(1)から知れるように口唇断面は内ソギを呈すこと、口唇は刻まれないこと、口縁部と体上部に平行線状文を押圧し、その間にV字状文を施すことなどが明らかである。なお、第100図(4)にもV字状文と平行線状文がみられる。したがって、もし、(1)と(4)が同一個体に由来するものだとすると、V字状文を施した器面の湾曲度が、両者で異なることからV字状文を施す横位の施文帯は少なくとも2段以上と考えられる。また、(4)のV字状文の上下には平行線状文があることから、平行線状文の施文帯は少なくとも3段以上と推定される。

ところで、日計式押型文土器は縄文時代早期前葉の東北地方で発達したものと考えられているが(岡本 1982)、最近では、その文様構成のちがいがなどにもとづく編年研究がさかんである。既述のように当遺跡出土の日計式押型文土器には、平行線状文が多用されており、相原(1982)の編年に従えば、日計式後葉に属す。この時期の日計式土器は、東北地方北半ではV字状文やX字状文が強い規制下におかれており、山形基線、菱形基線(相原 1978)内には平行線が充填されるが、東北地方南部では山形基線や菱形基線の枠組みをこえた押型文が存在し、基線内の充填文様にも多様化がみられる(相原 1982)。いっぽう、本資料に押圧されたV字状文は、3本の平行線を山形に重ねた基線内を左上りの斜行平行線文で充填するものである。武田(1969)が記載した「V字状文」とは、3本の平行線のうち2本がV字形に折り返るなど若干の相違をみとめるが、最も大きなちがいは山形基線内の充填文様のちがいである。その意味では、東北地方南部の日計式後葉の押型文と同じ範疇で考えてさしつかえない。しかし、相原(1982)の示す図をみるかぎりでは、本資料のような基線内充填文は東北地方には類例がなく、わずかに茨城県黒袴遺跡に類似例をみる。そうだとすれば、本資料の押型文は東北地方南部から派生したものと考えるのがもっとも自然であるとしても、南下の過程で新しい充填文が展開し、基線を構成する平行線自体にも微妙な変化が生じたものと思われる。

ところで、白石地域文化研究会(1982)が明らかにしたように日計式押型文土器では、平行線状文と他の押型文が重複する場合、平行線状文の施文は、後者の施文後に行なわれ、その逆の手順はみられない。本資料の平行線状文とV字状文は直接に切り合った痕跡がなく、施文順を明瞭に把握しにくい。口縁部の平行線状文には、V字状文を回避しながら施文した痕跡がわずかにみとめられることから、本資料においても日計式の施文順に関する強い規制はひきつづき遵守されているものと考えられる。

東北地方に分布の中心をもつ日計式押型文土器が利根川以南で出土した例は今回が初見である。今回の発見はその分布の南限である関東地方で、日計式が本来もっていた規制力をどのように変質させていくかを探るうえで貴重な手がかりの一つとなるものと思われる。今後の資料の追加が期待される。

第4節 小座ふちき遺跡および青馬前畑遺跡の遺構について

今回の調査の結果、小座ふちき遺跡からは11軒の住居跡と10条の溝、2基の土竈と遺物が発見された。また、青馬前畑遺跡からは7軒の住居跡と27条の溝、9基の土竈と遺物が発見された。両遺跡とも調査対象となった地域は2mないし3m幅の長大なトレンチ状の範囲で、ほとんど面的な広がりをもたない。したがって、調査区域内で検出した遺構の大部分は調査区域外にまたがって存在する場合が多く、完掘できたものはごく少ない。この傾向は遺物についても同様で、遺構内における遺物の分布状態や遺物構成などを把握するのに十分な調査とはいえない。

ところで、今回出土した遺物のうち、最も量的に多いのは、奈良、平安時代の土師器、須恵器である。千葉県下で出土した奈良、平安時代の土器については、最近になって編年研究が積極的に進められており、東総地区では、越川、長内(1983)が印旛沼周辺を中心とする地域から出土した豊富なデータを用いて詳細な検討を加えている。

以下では、地理的に至近な距離にある小座ふちき遺跡と青馬前畑遺跡から出土した奈良、平安時代の土器を越川、長内(1983)の編年案に従って分類し、検出した住居跡と溝の構築年代を中心にまとめてみる。

1 小座ふちき遺跡の住居跡

今回確認した11軒の住居跡のうち4軒に切り合い関係がみとめられることから、11軒すべての住居が同時に存在し、一つの集落を構成していた可能性はない。

ところで、住居跡から出土した土器の構成等を検討すると、以下に示す4つの時期(第I期～第IV期)に分けることができる。

第I期の住居跡は9号跡1軒だけで、古墳時代後期後半ごろのものと考えられる。

9号跡は、土師器坏と土製勾玉をともなう。坏は立ち上がり口縁をもつものと、弧状の体部をもつものがあり、鬼高式中葉から後半に比定される。北壁にかまどを1基設け、床面も硬質堅固である。壁高は高く、壁溝をそなえ、比較的規模の大きい住居跡と考えられるが、東壁以外の壁面を確認できなかったので、床面積等は明らかでない。

第II期の住居跡は4号跡と11号跡の2軒で、奈良時代初頭から同前半ごろに比定される。

4号跡は土師器壺を出土するが、口縁は外反し、口唇部がわずかに折れて段状を呈す(第114図)。これは、越川ほかの編年による第I a期の壺のもつ特徴とよく一致しており、7世紀末から8世紀初頭に比定されよう。本号跡はプランの北東隅がわずかに調査区内で検出できたもので、床面積やプランの平面形態など、その全容は明らかでない。北壁にかまどを設ける。

11号跡は小型壺をともなうもので、越川ほかの編年による第I b期に比定される可能性が高

い。床面積は約25㎡前後と推定される。

第III期の住居跡は2号跡と3号跡の2軒で、奈良時代後半頃の時期に比定される。

2号跡は、土師器甕、坏、須恵器甕、坏を出土する。土師器甕は体部中央部以下を欠損するが、口縁部は強く外反し、口唇部がわずかに直立して折り返される。土師器坏は、ロクロが用いられ、内外面に赤彩が施される。須恵器坏は体部が外反気味によくのびる。体部下端は、手持ちヘラケズリによって調整され、体部と底部との境は若干丸味を帯びるが、おおむね明瞭である(第111図1, 2, 5)。

3号跡は、土師器甕と須恵器坏を出土する。甕は底部を欠くが、体部はやや丸味を帯び、体部下半に縦位のヘラケズリを施す。須恵器坏は、体部が直線状によくのびて外反する。体部下端は手持ちヘラケズリで調整され、底面にはヘラケズリ痕がある。体部と底部の境は明瞭である(第112図1, 2)。

以上のように2号跡、3号跡とも出土した土器の特徴は、2号跡に須恵器甕をとまなうことを除くと、越川ほかが記載する第III期(8世紀中葉)の土器と符合する点が多い。このことから、両号跡は、この時期を前後する頃に位置づけるのが妥当と思われる。

なお、2号跡と3号跡は壁高が高く、壁溝をとまなわないこと、床面はあまり硬質でないことなど共通点が多い。2号跡の床面積は約17㎡前後と推定される。3号跡もほぼこれと同程度の規模をもつと考えられる。しかし、3号跡北壁に設けられたかまどが、2号跡南壁を破壊しているため、双方が同時に存在した可能性はないであろう。

第IV期の住居跡は5号跡と7号跡の2軒で、平安時代前半に比定される。

5号跡は土師器甕、坏、須恵器甕(?)を出土する。土師器甕はやや小形で、口縁がゆるく外反し、口唇部は直立気味に外傾する。土師器坏は口縁部が復原できないが、底面に「石神」の墨書を付すものがある。須恵器甕(?)は甕の可能性はある(第116図1, 4, 5)。

7号跡は土師器甕、坏、須恵器甕(?)と広口壺、鉄弁などを出土する。土師器甕は口縁部が大きく外反し、口唇部がわずかに直立する。最大径を口縁部にもつものも多く、体部上半に縦位のヘラケズリを施す。下野型の甕は確認されていない。土師器坏は、体部が直線状にのびるものと、口縁部が弱く外反するものの2種類がある。前者は底面を回転糸切りののち、周縁部に静止ヘラケズリを施すもの、もしくは、回転糸切りののち底面ヘラケズリを施すものなどがある。後者は、ロクロ整形を施すものや、体部下端に手持ちヘラケズリを施すものがある(第119図2, 5, 6, 9~12)。同図2, 3は内黒の坏で、内面にヘラミがきを施す。この残存度は全体の約1/3であるが、体部外面に「大倉□□」の墨書がみられる。おそらく体部外面に墨書が全周するものと思われる。

以上のように、5号跡と7号跡出土の土器は、越川ほかが記載した第VI期もしくは第VII期の土器の特徴とよく一致している。この時期の実年代については、9世紀第2四半期から10世紀

第1四半期とされており、両号跡の実年代もこの範囲内になるものと推定される。推定床面積は5号跡が約12㎡、7号跡が約10㎡といずれも小形であるが、壁高は比較的高く、床面も堅緻にかためられている。

1、6、8、10号跡の4軒の住居跡が時期不明である。

1号跡はプランの南西隅のごく一部を検出したもので、須恵器長頸壺と思われる頸部破片と砥石が発見された。少なくとも奈良時代以降と推定されるが、詳細は明らかでない。6号跡はプランの南西隅が調査区内で検出されたが、遺物は全く発見できなかった。壁溝は確認されない。8号跡は土師器壺と坏が出土した。壺は長胴壺になるものと思われる。古墳時代後期後半から奈良時代にかけての住居跡の可能性はあるが、時期を明確にしにくい。10号跡は11号跡と重複し、11号跡上に貼り床をするので、構築時期は少なくとも第II期より下るものと思うが、詳細は明らかでない。壁高は低く、床面はやや軟質である。

2 小座ふちき遺跡の溝

今回確認した10条の溝は、出土土器と住居跡との重複関係にもとづいて分類すると以下の4種類に分けられる。

- ①住居跡と重複し、住居跡との新旧関係を明らかにしうるが、土器を伴わないもの。
 - ②土器を出土するが、住居跡と重複しないもの。
 - ③住居跡と重複し、かつ土器を伴うもの。
 - ④上記のいずれにも相当しないもの。
- ①に属す溝は、14、18、20号跡の3条である。

14号跡は2号跡と重複し、これを切ることが明らかである。2号跡は既述のように第III期に属す住居跡で、奈良時代後半に比定される。したがって、14号跡が掘られた時期は少なくともこれよりさかのぼることはない。溝の断面は幅広の逆台形を呈す。

18号跡は5号跡と重複し、これに切られる。5号跡は第IV期に属す住居跡で、平安時代前半に比定されている。したがって、18号跡が掘られた時期はこれよりも古いことが明らかである。溝断面は、幅広の逆台形になるものと推定される。奈良時代に掘られ、平安時代までには埋没していた可能性が高い。

20号跡も第IV期に属す7号跡と重複し、これに切られる。溝断面は18号跡とよく似た形態をとり、両壁の立ち上がりはやや不明瞭である。本号跡は8号跡と同じような理由により、奈良時代に掘られ、平安時代までに埋没していた可能性が高い。

②は16号跡と17号跡の2条の溝が相当する。16号跡は幅の広い非対象型の断面をもつ溝であるが、覆土内からは奈良時代頃に比定される須恵器台付長頸壺が出土した。

17号跡は、土師器壺、坏、埴、高台付坏、須恵器壺(?)、坏、坏蓋、高台付坏、甗、長頸壺

などを出土する。溝断面は逆台形を呈し、壁面は明瞭である。出土土器は種類、量とも多く、時期も多岐にわたるものが混在する。須恵器高台付坏の形態は、越川ほかの編年による第Ⅰ期のものと近似しており、本号跡に近接する4号跡出土の壺と比較的近い時期のものと思われる。しかし、須恵器坏は、平底で、体部と底部との境は明瞭であること、体高が高いことなど、越川の編年による第Ⅲ期から第Ⅳ期以降の坏に類似しており、8世紀後半以降に比定される。土師器壺は、口唇部がやや立ち上がり、体上部外面に縦位のヘラけずりが施されるもの、口縁が素縁で体上部に縦位のヘラけずりのあるもの、口縁が外反し体部がナデ整形されるものなどがあるが、上記の年代とほぼ同じ頃に比定されよう。そうだとすると、本号跡は、奈良時代後半以降に掘られた可能性が高い。ところで、この溝内出土の土器で注目されるのは、多量に出土した小形の土師器碗である。いずれも焼成は悪く、整形も粗雑である。しかし、内面はナデ等によって比較的ていねいな整形が行われ、木葉底をもつものが多い。用途は不明であるが、本号跡覆土層から集中して出土しており、溝が大方埋没したある時期に集中的にすてられたものと思われ、時期的には平安時代まで下る可能性がある。そうだとすると、木葉底は、この頃まで用いられていたことになり興味ぶかい。

③には、15号跡と21号跡の2条の溝が属す。

15号跡は2号跡と重複し、これに切られる。土師器坏を出土する。2号跡は第Ⅲ期に属す住居跡で、その構築時期は奈良時代後半に比定されるので、本号跡はこれよりも古い時期に構築されたものでなければならない。本号跡から出土した坏は底部に回転糸切りがみとめられるので、本号跡も奈良時代に掘られ、平安時代に埋没した可能性が高い。溝断面は逆台形を呈す。

21号跡は9号跡と重複し、これを切る。9号跡は、古墳時代後期末期の住居跡と考えられるので、本号跡は9号跡が埋没したのちに掘られたことが明らかである。本号跡出土の土師器坏は鬼高末期のものであるが、9号跡からの流れ込みの可能性はある。なお、本号跡の底面は住居跡床面と同様に硬質で壁ぎわに硬質な覆土が堆積する小溝が走行するなど、他の溝にはみられない特徴がある。

④は、12、13、19号跡の3条の溝が属す。12号跡と13号跡はロームへの掘り込みがきわめて浅く、壁の立ち上がりも不明瞭で、今回確認した他の溝とは形状が異なる。

19号跡は、非対象形の断面をもち、壁面は明瞭だが、覆土下部から底面に接する覆土は、非常に硬質で固くよくしまる。このような、硬質な覆土をもつ溝は本号跡以外に14号跡と21号跡で確認されているが、これらがすべて自然に形成されたものとは考えにくい。しかし、今回の調査区域が狭く、各溝ともそのごく一部分を調査したのみにとどまっているため、今回の調査によって溝を埋める堆積土全体の性格をどの程度把握できたか疑問であるので、今回はこれ以上の論議は進めない。

3 青馬前畑遺跡の住居跡

今回確認した7軒の住居跡のうち、5軒の住居跡から復原実測の可能な土器が出土したが、他の2軒からは遺物を発見することが出来なかった。5軒の住居跡から出土した土器は古墳時代後期と奈良、平安時代の土器であるが、後者は越川、長内(1983)の編年に従うといくつかの時期に分類することが出来る。これらの住居跡には切り合い関係はみとめられないが、すべての住居が同時に存在した可能性はないと思われる。

第Ⅰ期に属す住居跡は7号跡1軒で、古墳時代後期に比定される。土師器甕、甔、坏が出土し、これらは鬼高式の範疇でとらえられる。壁高は高く、壁溝がめぐる。検出した支柱穴の南側に貼り床状のおおいで開口部を塞いだピットがある。床面は堅固で、かまどは東壁に存在する。確認した壁の位置から推定した床面積は約28㎡前後に達する。

第Ⅱ期の住居跡は2号跡と5号跡で、奈良時代前半に比定される。2号跡からは、土師器甕、坏、須恵器坏、坏蓋、磁器碗が出土した。土師器坏は、口縁部と体部の境界が不明瞭なものと、明瞭で稜線がみられるものがある。前者は、底部が丸底で弧状をなし、後者は口縁が外反するが、底部の形態は不明である(第146図1, 2)。同図3の須恵器坏蓋は、かえりを有し、上下につぶれた宝珠形のつまみをもつ。これらは、越川ほかの編年による第Ⅰb期の土器の記載とよく一致しており、そうだとすると、本号跡の時期は8世紀初頭ごろに比定される。なお、本号跡出土の磁器碗は混入である。

5号跡は、土師器甕と坏を出土する。坏は直径が大きく、口縁部をヨコナデ、体部外面をヘラケズリののちナデで整形する。口縁と体部外面との境界は不明瞭である。甕は口縁部が大きく外反するが、口唇部が直立し段状を呈す(第150図3, 4)。これらは越川ほかの編年による第Ⅰb期ないし第Ⅱ期の土器についての記載と符合する点が多く、5号跡の実年代は8世紀前半ごろに比定される。2号跡、5号跡とも壁高は比較的高いが、壁溝はもたないものと考えられる。5号跡の規模はうかがえないが、2号跡は比較的大形の住居と思われる。

1, 3, 4, 6号跡の4軒の住居跡は時期が明らかでない。

1号跡は土師器甕、皿と器形のうかがえない土師質土器を出土する。甕は奈良、平安時代のもと考えられるが、特定の時期にあてることができなかった。なお、皿は中近世の燈明皿で、混入と考えられる。壁高は高く、南壁中央部をのぞいて壁溝が巡る。壁一辺の長さは約5.8mに達するので、床面積は比較的大きくなるものと考えられるが、全容は明らかでない。

4号跡は比較的多くの土器片が出土したが、器形が復原可能なものは土師器坏1点のみにとどまった。坏は口縁と体外部の境界が不明瞭なもので、奈良時代前半ごろのものに似るが、破片はかなり小形で時期決定の資料としての適性に欠ける。壁高は高く、壁溝が巡る。北壁東寄りにかまどを1基設けるが、移築された可能性がある。床面は堅固であるが、床面積は約6㎡前後で小形である。

3号跡と6号跡は、プランの大半が調査区外に存在し、遺物も発見されなかった。規模等も明らかでない。

4 青馬前畑遺跡の溝

調査区域内に出現した27条の溝のうち、16号跡のみが住居跡と重複している。また9、10、12、26号跡の4条の溝が土器をともなうが、他の22条の溝からは遺物や住居跡との切り合いは確認できなかった。22条の溝のうち14号跡の堆積土は安定性を欠いており、相対的に新しい時期に掘られた可能性が高く、溝断面も他の溝に比べて特異な形態をもつ。

以下では、9、10、12、16、26号跡について、構築時期を中心にまとめてみる。

9号跡は、土師器甕、須恵器坏、壺(?)を出土するが、全体の器形をうかがえるものは出土しなかった。これは、土師器甕を出土した26号跡についても同様で、いずれも時期決定の資料としては用いられない。

10号跡は、土師器皿、甕、須恵器大甕、坏蓋、土師質須恵器壺を出土する。皿は壁面に密着した状態で出土したもので、いずれも澄明皿である。これらは中近世のものと考えられ、本号跡もそのころの構築になるものと思われる。

12号跡は、土師器甕、高坏を出土する。土器は鬼高式の範囲に入るので、古墳時代後期以降に掘られたものと考えられる。なお、本号跡を検出した周辺の調査区域内には、この時期の住居跡は存在していない。

16号跡は、4号跡と重複し、これを切ることで、この住居跡が埋没したのちに掘られたことが知られるが、4号跡の構築時期は明らかでない。なお、小座ふちき遺跡からは、硬質な覆土をもつ溝が、しばしば確認されたが、本遺跡からはこのような覆土をもつ溝は確認されなかった。

隣接する小座ふちき遺跡と青馬前畑遺跡で検出した住居跡と溝の構築時期は、以上のように推定することができる。住居の構築は、岡遺跡とも古墳時代後期以降、奈良、平安時代にかけて行われたものと考えられるが、集落の規模や性格等については明らかにできなかった。住居跡が検出される頻度は、小座ふちき遺跡が青馬前畑遺跡よりもかなり高く、また青馬前畑遺跡では小座ふちき遺跡寄りの東部で検出頻度が高いので、双方の遺跡をのせる台地上では小座ふちき遺跡寄りに住居の分布の中心があった可能性が高い。もしそうだとすると、その分布傾向は現在の集落分布と似ており興味深い。青馬前畑遺跡では溝の検出頻度が相対的に高いが、そのほとんどが構築時期を明らかにできなかった。しかし、小座ふちき遺跡から検出した溝の大部分は、奈良時代に掘られ、平安時代までには埋没していたものと考えられるので、その構築時期は住居に比べて相対的に短期間に集中するものと思われる。

なお、第62表に双方の遺跡から検出した住居跡を主軸方向別にして、その推定構築時期、推

定床面積を一括して示した。例数は少ないが、住居跡の主軸方向と構築時期の相関性はやや低いこと、住居跡床面積は、奈良時代後半以降に減少する傾向があることなどがわかる。

第62表 小塚ふちき遺跡および青馬前畑遺跡の住居跡主軸方向別一覧

主軸方向	遺構番号	所属時期	推定床面積(m ²)	主軸方向	遺構番号	所属時期	推定床面積(m ²)
N-40±°-W?	青馬2号跡	第Ib期*	—	N-6°-E	小塚5号跡	第VI~VII期*	12
N-20°~25°-W	小塚4号跡	第Ia~Ib期*	—	N-11°-E	小塚7号跡	第VI~VII期*	10
N-16°-W	青馬4号跡	?	6	N-11±°-E	小塚2号跡	第III期*	17
N-10°-W	小塚9号跡	古墳時代後期	—	N-15°~20°-E	小塚3号跡	第III期*	—
N-2°-E	小塚11号跡	第Ib期*	25	N-47°-E	青馬7号跡	古墳時代後期	28
N-2°-E	青馬1号跡	奈良、平安時代	—				

*は越川、長内(1983)による奈良、平安時代編年。

主軸方向の定まらない小塚ふちき遺跡の1, 6, 8, 10号跡と、青馬前畑遺跡の3, 5, 6号跡の合計7軒については表から外した。

文 献

- 相原淳一 1978 宮城県南部発見の菱形格子目押型文土器。山麗文化 1 : P12-17, 白石地方文化研究所
- 相原淳一 1982 日計式土器群の成立と解体。赤い本 1 : P 1-15, 赤い本同人会
- 赤澤威, 小田静夫, 山中一郎 1980 『日本の旧石器』240pp, 立風書房
- 赤羽一郎 1977 常滑。後藤茂樹編『世界陶磁全集 3 日本中古』: P208-214, 小学館
- 赤星直忠 1929 古式土器の一形式としての三戸式土器に就いて。考古学 7 (9) : P385-397
- 赤星直忠 1935 横須賀市田戸先史時代遺蹟調査。史前学雑誌 7 (6) : P267-296
- 安達厚三, 木下正史 1974 飛鳥地方出土の古式土器。考古学雑誌 60 (2)
- 池田大助 1978 縄文土器。千葉県文化財センター編『佐原市神田台遺跡』: P31-35
- 江坂輝弥 1954 海岸線の進退から見た日本の新石器時代。科学朝日 14 (3) : P75-80
- 江本義理, 馬淵久夫, 平尾良光, 中山清隆, 八重樫信治 1983 国見山廃寺跡出土の「和布刈宮」銭とその化学分析報告。北上市立博物館研究報告 4 : P87-96
- 遠藤邦彦 1979 遺跡の分布——縄文海進との関連で——。自然科学と博物館 46 : P151-156
- 遠藤邦彦, 関本勝久, 高野司, 鈴木正章, 平井幸弘 1983 関東平野の沖積層。アーバンクボタ 21 : P26-43
- 大洗町長峰遺跡調査団 1973 『茨城県大洗町長峰遺跡』148pp, 45pls, 大洗町教育委員会
- 大木衛, 中山吉秀, 杉山普作編 1972 『千葉県香取郡東庄町羽計古墳群』45 pp, 11pls. 東庄町教育委員会
- 大原正義 1978 先土器時代に関して。千葉県文化財センター編『佐倉市星谷津遺跡』: P119-123
- 大参義一 1967 S字状口縁土器考。いちのみや考古 13 : P 1-7
- 大山柏, 杉山寿榮男, 宮坂光次, 甲野勇 1929 千葉県良文村貝塚調査概報。史前学雑誌 1 (5) : P 1-23
- 岡崎文喜, 新津健編 1978 『八相遺跡』64pp, 18pls. 八相遺跡調査団
- 岡本勇 1953 相模平坂貝塚。駿台史学 3 : P58-76
- 岡本勇 1982 a 関東, 中部地方。岡本勇編『縄文土器大成 1 早前期』: P132-136 講談社
- 岡本勇 1982 b 縄文土器の生成から発展へ。岡本勇編『縄文土器大成 1 早前期』: P114-124, 講談社
- 小野真一 1980 縄文時代の遺物についての考察。伏見遺跡調査団編『常陸伏見』: P325-343, 伏見遺跡調査会
- 織笠昭 1977 石器。中津由紀子, 千浦美知子, 小田静夫, J. E. キダー編『新橋遺跡』: P18-74. 国際基督教大学考古学研究センター Occasional Papers 4

- 金子浩昌 1956 千葉県香取郡東庄町の石棺調査 古代 19,20 : P21-24
- 熊野正也 1974 南関東地方における弥生文化の研究(1)佐倉市臼井南遺跡出土の土器。史館 4 : P38-53
- 熊野正也 1978a 佐倉市臼井南遺跡出土の後期弥生式土器の意味するもの。MUSEUM千葉 9 : P30-34
- 熊野正也 1978b 石田川式土器文化成立に関する一考察(前)いわゆるS字状口縁壺形土器を中心として。史館 10 : P34-43
- 国学院大学考古学第1研究室編 1975「千葉県銚子市佐野原遺跡発掘調査概報」35pp, 千葉県教育委員会, 銚子市教育委員会
- 越川敏夫, 長内美知枝 1983 下総東部における奈良・平安時代の土器編年試案。市立市川考古博物館編「シンポジウム資料, 房総における奈良・平安時代の土器」: P50-70
- 斉木勝, 深沢克友 1978 房総における弥生文化の摂取とその波及について。千葉県文化財センター編, 研究紀要 3, 159pp,
- 佐藤次男 1973 弥生土器——関東, 東関東 2——, 考古学ジャーナル 147: P11-18
- 篠原正 1977「東内野遺跡第2次発掘調査概報」: P10-13, 東内野遺跡調査団
- 白石地域文化研究会 1982 宮城県白石市下川原子A遺跡第1次調査報告。赤い本 1 : P37-81, pl 1, 赤い本同人会
- 鈴木定明 1978 先土器時代。「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 VI」: P12-70, 千葉県文化財センター
- 鈴木道之助 1975 木苧峠遺跡。「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 III」: P47-124, 千葉県文化財センター
- 鈴木保彦 1975 縄文式土器。神奈川県教育委員会社会教育部文化財保護課編, 神奈川県埋蔵文化財調査報告書7「鳶尾遺跡」: P22-26
- 竹島国基 1958 福島県双葉郡大平遺跡略報。石器時代 5 : P15-18
- 武田良夫 1969 盛岡市上堤頭・小屋塚遺跡の押型文土器。考古学ジャーナル 36 : P23-25
- 武田良夫 1982 岩手県における押型文土器文化の様相。赤い本 1 : P16-36, 赤い本同人会
- 武田良夫, 吉田義昭 1970 盛岡市大新遺跡。奥羽史談 69(2) : P8-12
- 田村言行 1979 弥生時代後期の江原台。江原台第1遺跡発掘調査団編「江原台」: P452-498
- 田村言行 1979 弥生時代後期における南関東の動向。どるめん23 : P65-77
- 田村隆 1982 先土器時代。「千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 VII」: P7-81, 千葉県文化財センター
- 田村隆 1983 剥片剝離技法に関する補足説明。神奈川考古 16 : P34
- 千葉県都市公社 1975「阿玉台北遺跡」424pp, 239pls.

- 千葉県文化財センター 1982 自然科学の手法による遺跡、遺物の研究 2——千葉県における製鉄遺跡の研究——, 研究紀要 7: P 7-146
- 千葉県文化財センター 1984 自然科学の手法による遺跡、遺物の研究 3——土器胎土分析の基礎的研究——, 研究紀要 8, 289pp, 20pls.
- 東庄町教育委員会 1982 『千葉県香取郡東庄町今郡東ノ台遺跡・宮本刑部遺跡発掘調査報告』 23pp, 8 pls.
- 東庄町史編纂委員会編 1982 『東庄町史(上)』 739pp, 8pls. 東庄町
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1976 『橿向』 596pp, 240pls. 奈良県教育委員会
- 奈良県立橿原考古学研究所編 1980 『奈良市六条山遺跡』 奈良県文化財調査報告書(第34集), 196pp, 52pls. 奈良県教育委員会
- 西村正衛 1951 千葉県香取郡神里村白井雷貝塚発掘調査概報。古代 3: P 26-31
- 西村正衛 1954 千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚第2, 3次調査。早稲田大学教育学部学術研究 3: P 135-161
- 西村正衛 1965 千葉県香取郡神崎町西ノ城遺跡。古代 45, 46: P 1-40
- 西村正衛 1969 千葉県小見川町木之内貝塚。早稲田大学教育学部学術研究 18: P 233-264
- 西村正衛 1970 千葉県小見川町阿玉台貝塚。早稲田大学教育学部学術研究 19: P 33-66
- 西村正衛, 芥沢長介, 江坂輝弥, 金子浩昌 1955 千葉県西之域貝塚。石器時代 2: P 1-20
- 日本銀行調査局編 1972 『図録・日本の貨幣 1』 xxx+336pp, 東洋経済新報社
- 古内茂 1976 草深六角遺跡。白石竹雄編 『千葉ニュータウン埋蔵文化財調査報告 IV』: P 197-201, 千葉県文化財センター
- 松戸市教育委員会編 1974 『諏訪原遺跡』 119pp, 39pls.
- 馬目順一 1982 竹之内遺跡の縄文土器をめぐる諸問題。いわき市教育文化事業団編 『竹之内遺跡』: P 52-60
- 丸子亘 1967 千葉県東庄町前山土師遺跡の調査。立正大学博物館学講座研究報告 3, 27pp
- 山田昌久 1981 縄文時代早期の遺物包含層。上の台遺跡調査団編 『鴨居上の台遺跡』: P 13-36
- 吉田格 1955 千葉県城之台貝塚。石器時代 1: P 1-14
- 和島誠一, 松井健, 長谷川康雄, 岡本勇, 塚田光, 田中義昭, 中村嘉男, 小宮恒雄, 黒部隆, 高橋健一, 佐藤孜 1968 関東平野における縄文海進の最高水準について。資源科学研究所彙報 70: P 108-129

写 真 图 版



遺跡遠景（北から）



調査前近景

図版 2

高部宮ノ前遺跡



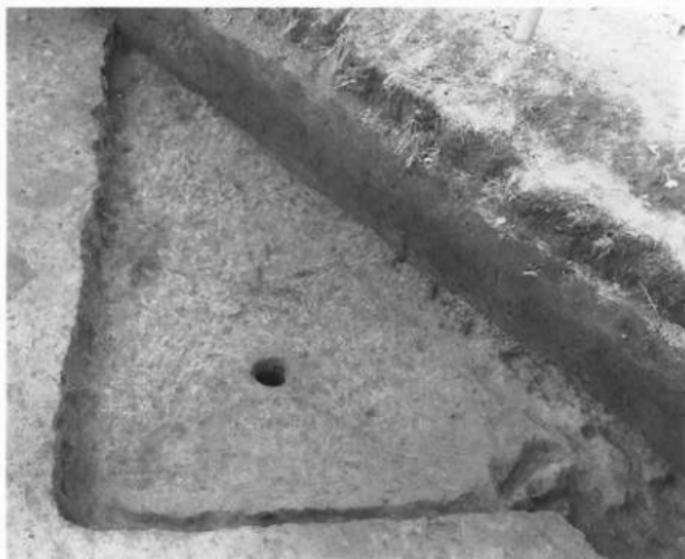
2 (002) 号跡



2 (002) 号跡遺物出土状態



2 (002) 号跡遺物出土状態



3 (004) 号跡



3 (004) 号跡遺物出土状態

図版 4

高部宮ノ前遺跡



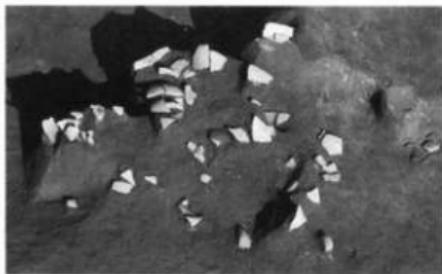
1 (006) 号跡



4 (007), 27(008) 号跡



5 (009) 号跡



5 (009) 号跡遺物出土状態



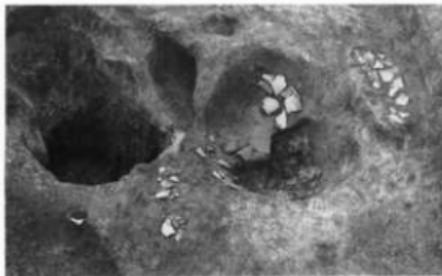
5 (009) 号跡遺物出土状態



6 (010) 号跡



6 (010) 号跡かまど近景



6 (010) 号跡遺物出土状態



16 (014) 号跡



9 (016) 号跡

図版 8

高部宮ノ前遺跡



8 (018) 号跡



8 (018) 号跡遺物出土状態



13 (019) 号跡



15 (020) 号跡遺物出土状態



18 (021) 号跡



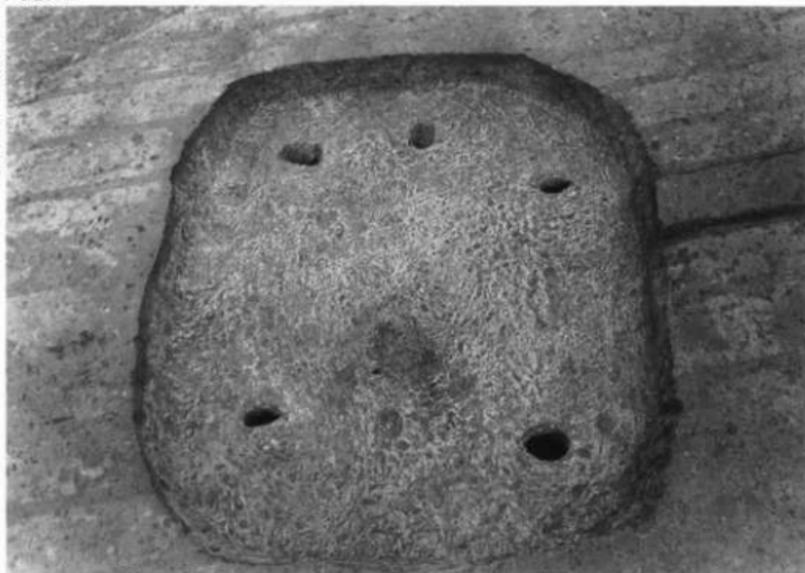
17 (023) 号跡



20 (024) 号跡



19 (025) 号跡



21 (027) 号跡



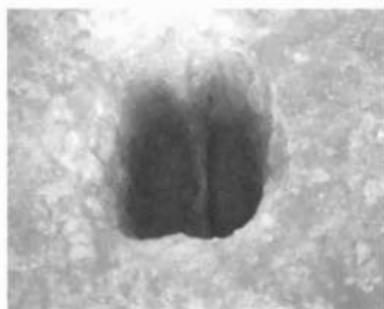
21 (027) 号跡遺物出土状態



24 (028) 号跡



24 (028) 号跡遺物出土状態



24 (028) 号跡主柱穴



28 (011) 号跡 (東から)



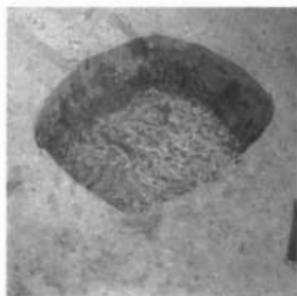
28 (011) 号跡 (西端部付近)



25 (001) 号跡



26 (003) 号跡



31 (013) 号跡

図版16

高部宮ノ前遺跡





3-1



3-6



3-8



3-7



3-4



3-3



3-5



1-3



1-4



1-1



1-5

3(004), 1(006)号跡出土土器

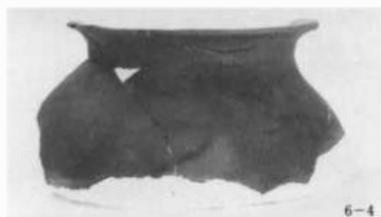




6-9



6-5



6-4



6-11



6-23



6-28



6-29



6-21



6-18



6-13



6-24

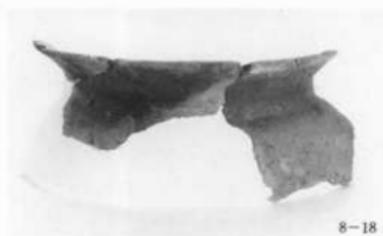
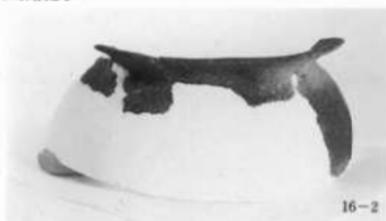


6-22

6 (010) 号跡出土土器

図版20

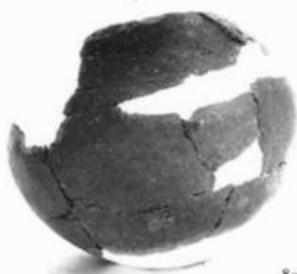
高部宮ノ前遺跡



16(014), 9(016), 8(018) 号跡出土土器



8-9



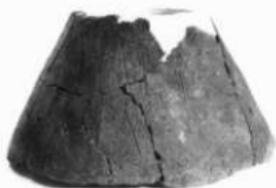
8-8



8-21



8-11



8-10



8-15



8-14



13-1



15-1



15-7



15-8



12-1



17-10



17-7



17-8

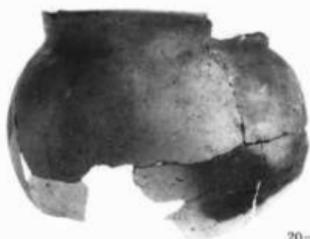
15(020), 12(022), 17(023) 号跡出土土器



17-1



17-5



20-1



20-2



20-5



20-6



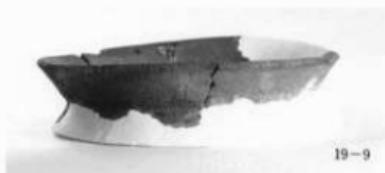
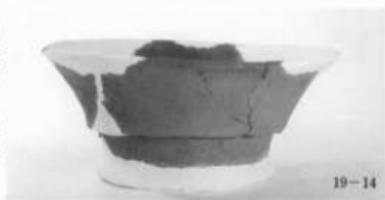
20-3



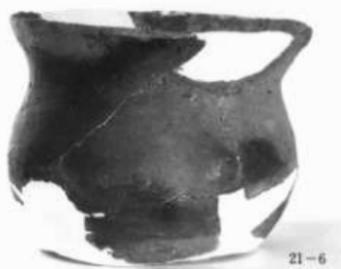
20-4

図版24

高部宮ノ前遺跡



19(025)号跡出土土器



19(025), 21(027) 号跡出土土器





22-1



22-19



22-12



22-9



22-4



22-8



22-10



22-13

図版28

高部宮ノ前遺跡



28-7



28-1



28-3



28-12



28-10

28-8



1



4



7



8

28 (011) 号跡，包含層出土の土器（1）



11



10



15



16



28



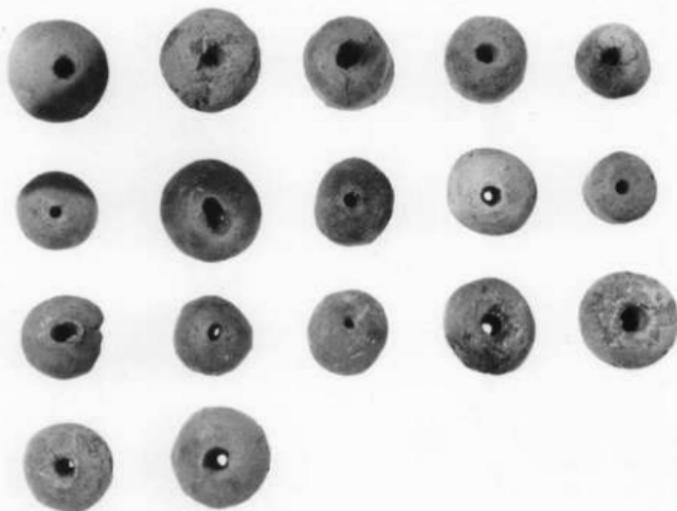
33



39-43



紡錘車，瓶底部



土玉



1-8



9-7



9-7a



9-7b



28-15

石器, 炉壁?

図版32

高部宮ノ前遺跡



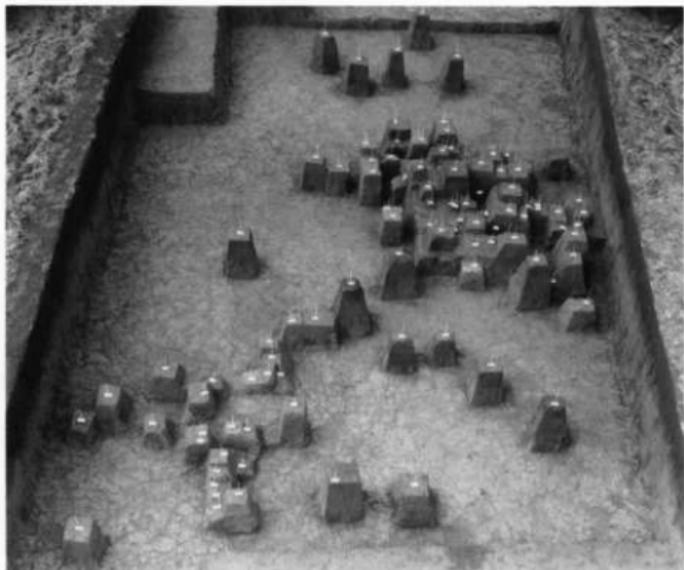
石器、鉄製品、勾玉、古銭



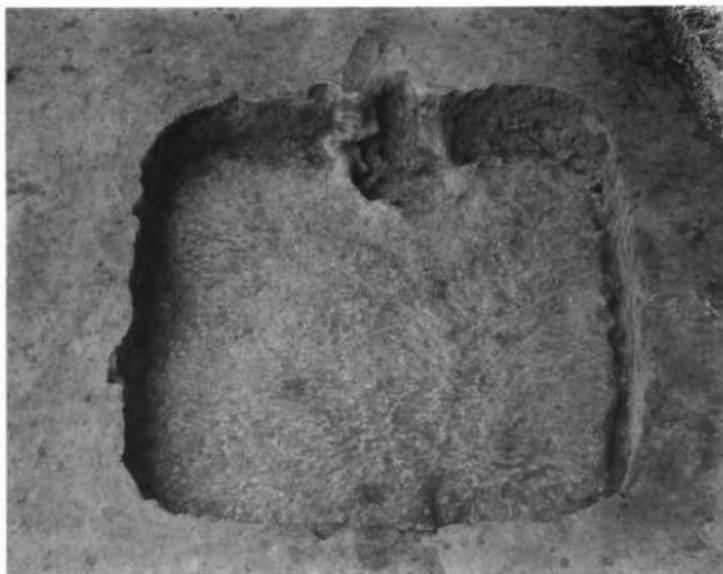
遺跡遠景



土層断面



先土器時代石器出土状態



1 (005) 号跡



1 (005) 号跡遺物出土状態



2 (004) 号跡



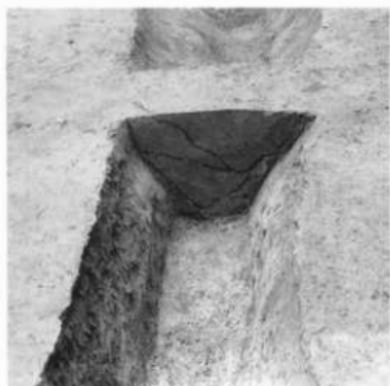
2 (004) 号跡近景



5 (009), 6 (010) 号跡



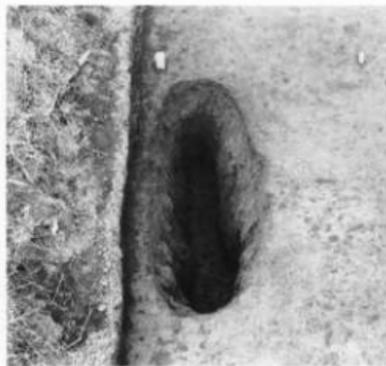
4 (001) 号跡



5 (009) 号跡



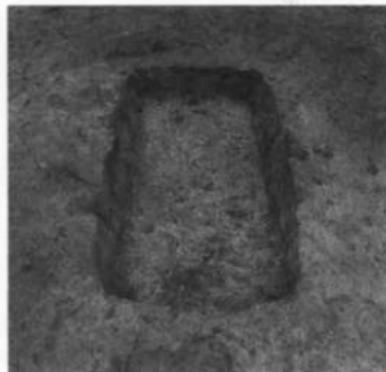
7 (003) 号跡



7 (003) 号跡



10 (007) 号跡



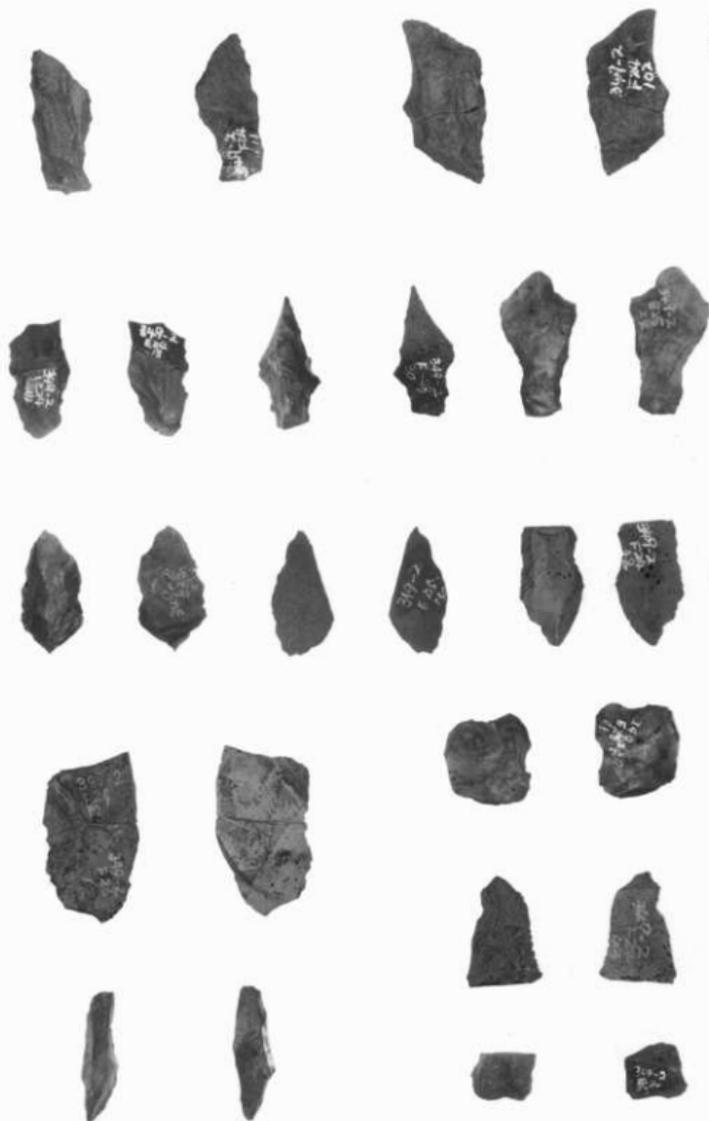
9 (011) 号跡



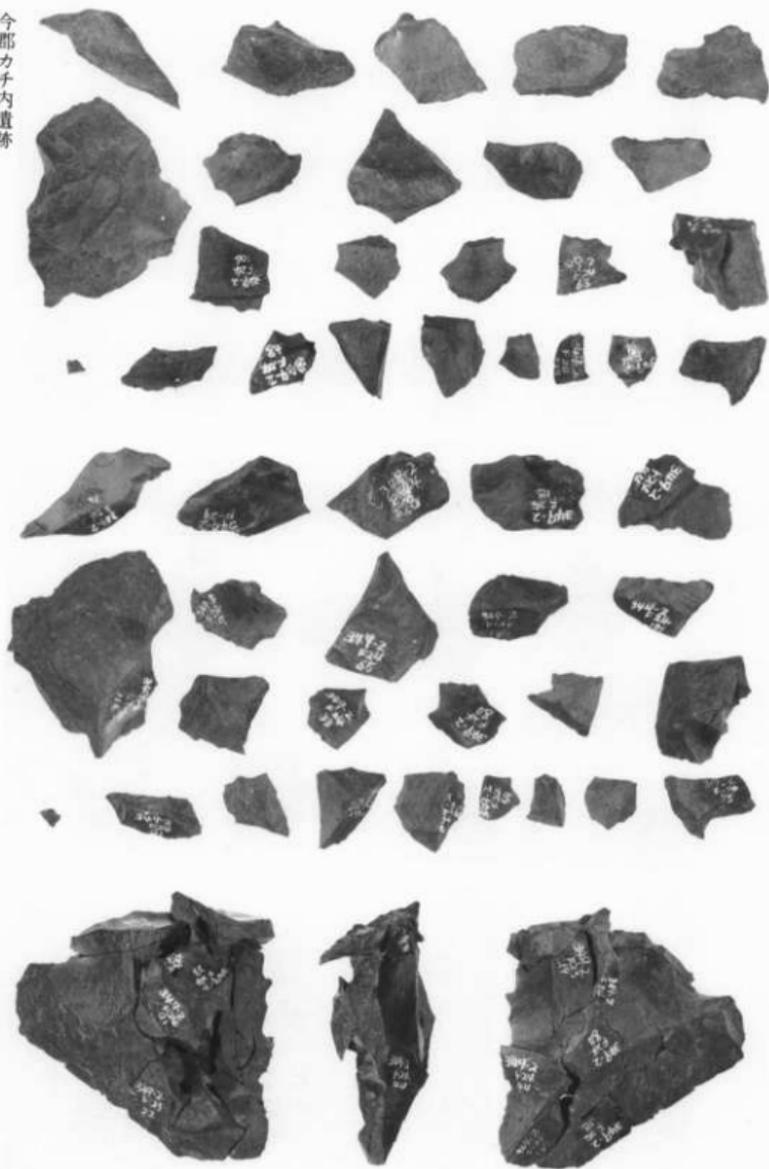
8 (006) 号跡



8 (006) 号跡



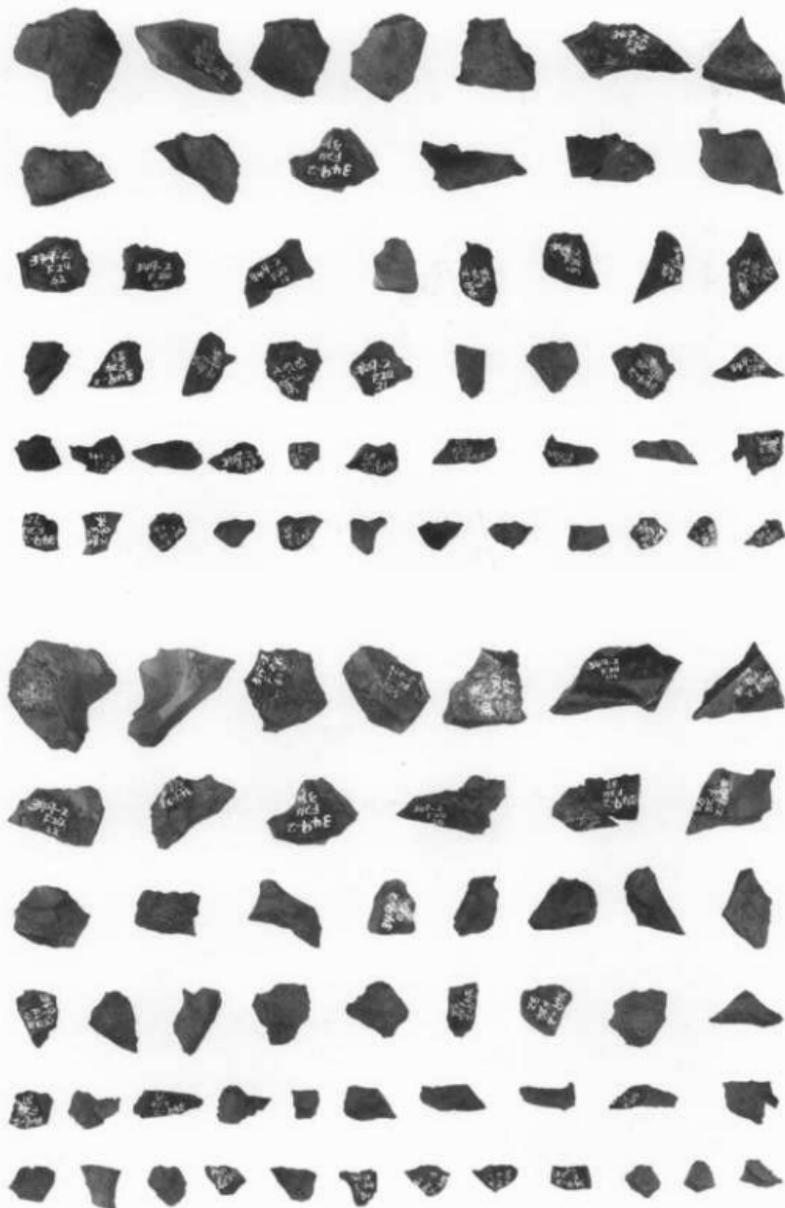
先土器時代石器(1)



先土器時代石器(2)



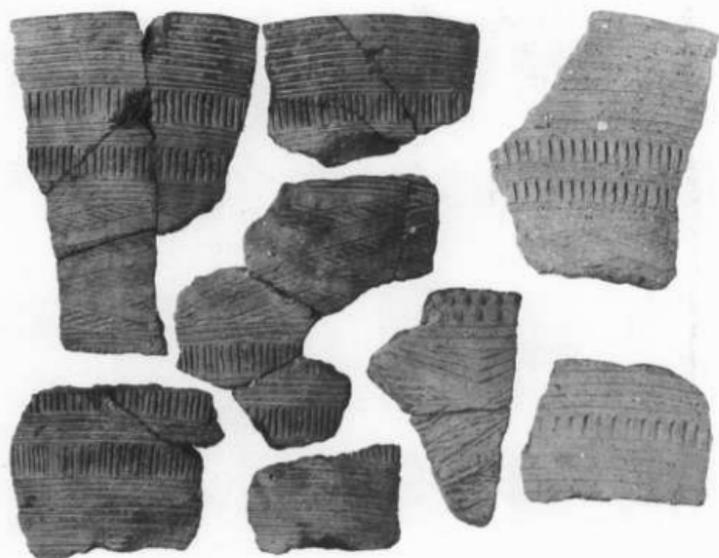
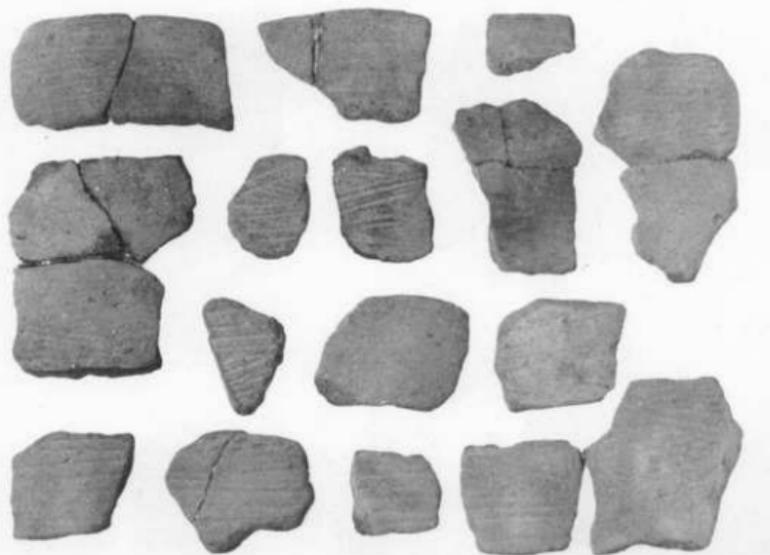
先土器時代石器（3）



先土器時代石器(4)



先土器時代石器(5)



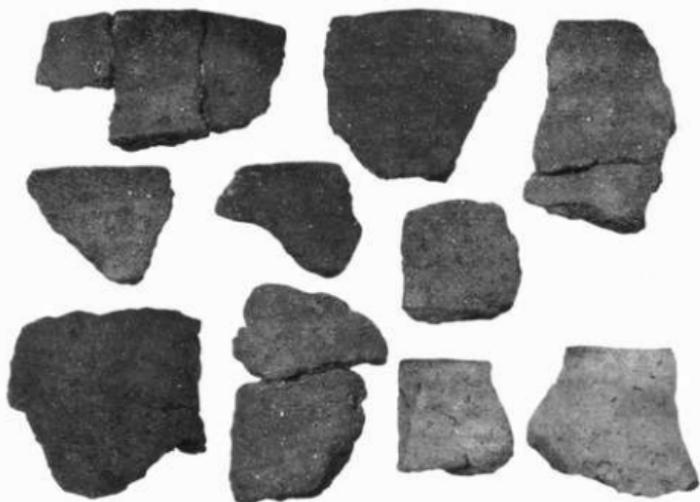
縄文時代土器(1)



縄文時代土器(2)



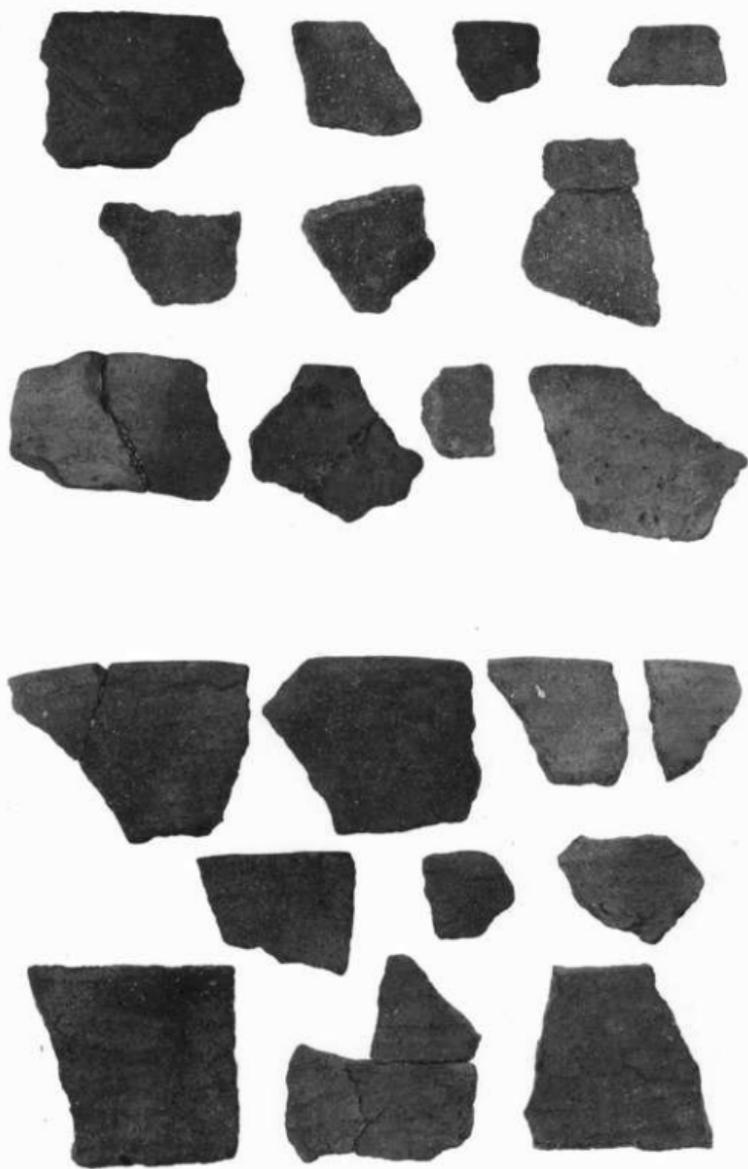
縄文時代土器(3)



縄文時代土器(4)



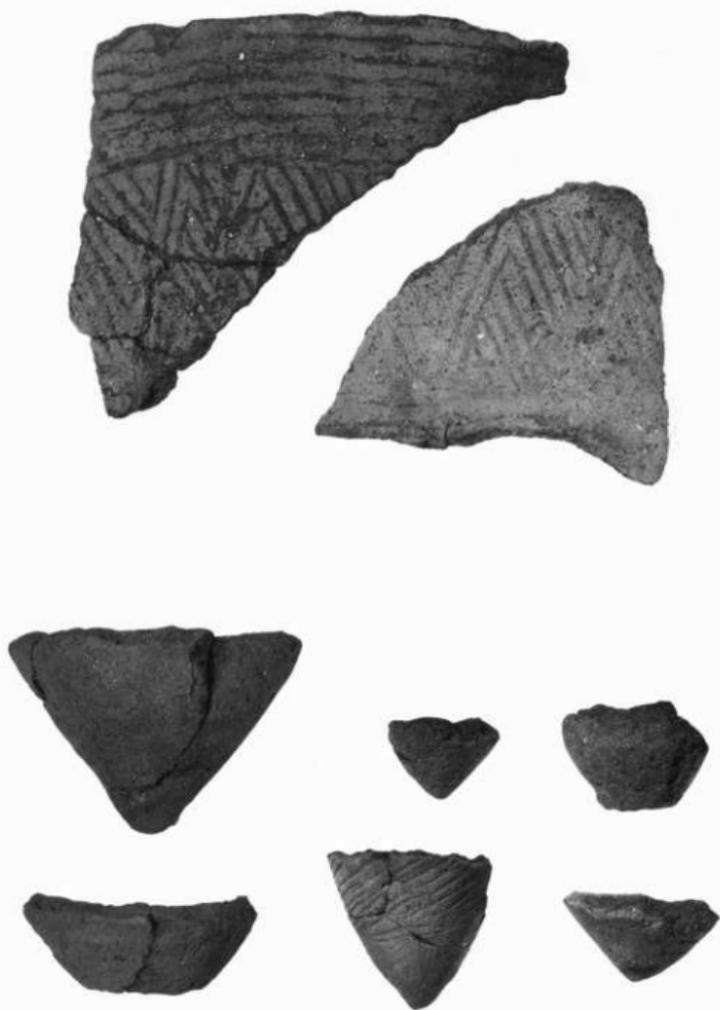
縄文時代土器（5）



縄文時代土器(6)



縄文時代土器(7)



縄文時代土器(8)

今郡方千内遺跡



縄文時代礫



縄文時代礫



縄文時代礫



石 鏃



1 (005) 号跡出土土器



砥 石



鉄 滓



調査前近景



3 (004) 号跡



3 (004) 号跡断面土器出土状態



2 (009) 号跡



2 (009) 号跡遺物出土状態



4 (012B) 号跡



4(012B), 17(012A) 号跡



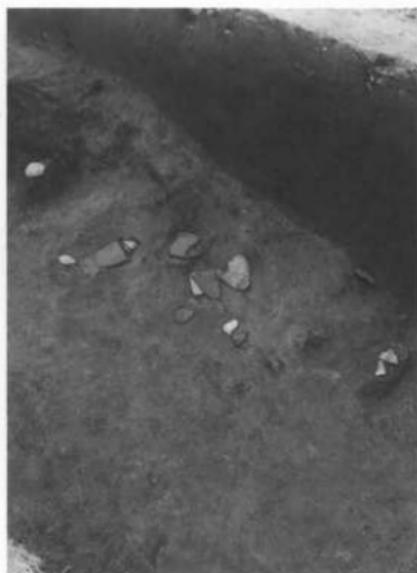
17 (012A) 号跡遺物出土状態

図版56

小座ふちき遺跡



5(013A), 18(013B)号跡



5(013A)号跡遺物出土状態



6(015)号跡



7(016A), 20(016B) 号跡



7(016A) 号跡遺物出土状態



7(016A) 号跡かまど袖除去後の壁部



8(017) 号跡



9 (019) 号跡



10(020B), 11(020A) 号跡



11(020A) 号跡 P 3 検出状態



同上完掘状態



12(003), 13(001) 号跡



14 (008) 号跡



15 (010) 号跡



16 (011) 号跡



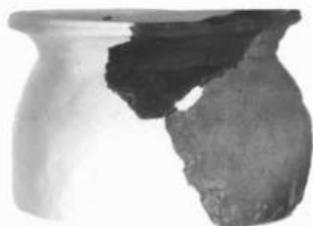
21 (018) 号跡

図版60

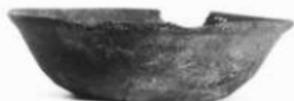
小座ふちき遺跡



3(004), 1(005), 2(009), 5(013A) 号跡出土遺物



7-11



7-6



7-2



7-8



7-1



7-3



7-9・10・15・16・17



7-18・19



9-3



8-1



11-1



11-3

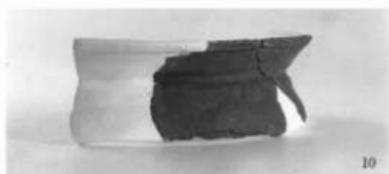


石鏃

8(017), 11(020 A) 号跡出土遺物, 包含層出土石鏃



包含層出土縄文土器



17 (012A) 号跡出土土器

2・5・8・9・11・38



調査前近景（道路部，畑地部）



1 (001A) 号跡



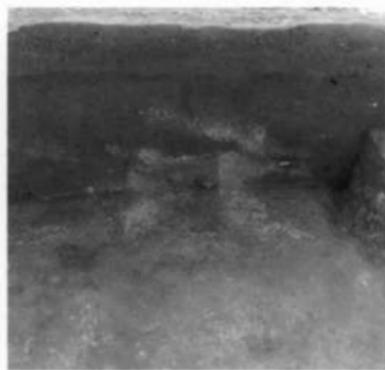
2 (002A) 号跡遺物出土状態



5 (011C) 号跡



4 (012A) 号跡



同かまど袖除去後



6 (023) 号跡



7 (026) 号跡



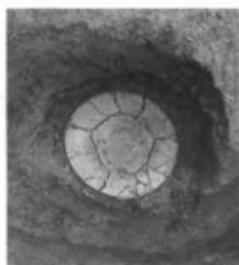
8 (001B) 号跡



9 (002B) 号跡



10 (004) 号跡



10 (004) 号跡土器出土状態



11(005), 12(006) 号跡



13 (007) 号跡

图版68

青
馬
前
畑
遺
跡



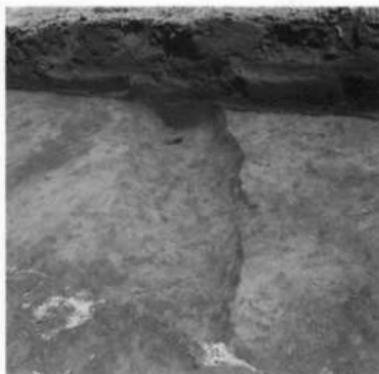
16(012C), 17(012B) 号跡



20(014), 21(015) 号跡



22(016A), 23(016B) 号跡



24 (017) 号跡



28 (025A) 号跡



30 (027) 号跡



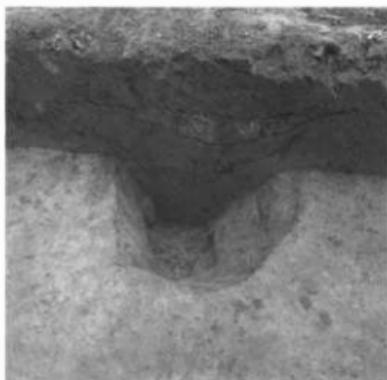
31 (030) 号跡



32(031), 42(029) 号跡



33(032B), 34(032A) 号跡



36 (010) 号跡



38 (018) 号跡



43 (033) 号跡

図版70

青馬前畑遺跡



1-1



1-2



2-4



2-3



2-1



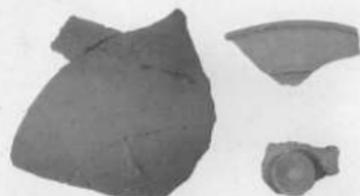
10-4



10-5



10-6



10-9・10-11

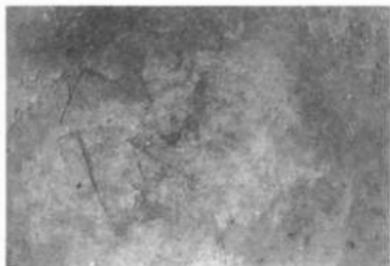


10-7



古銭

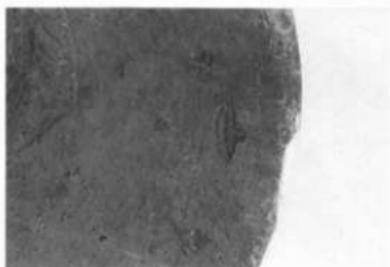
1(001A), 2(002A), 10(004), 36(010) 号跡および包含層出土遺物



高部宮ノ前 17-7 底部内面



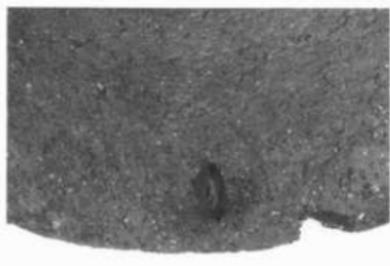
高部宮ノ前22-16底部内面



高部宮ノ前 22-8 高环裾部内面



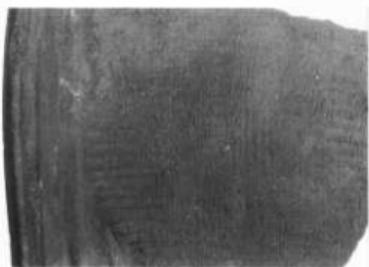
高部宮ノ前24号跡覆土出土かご目土器



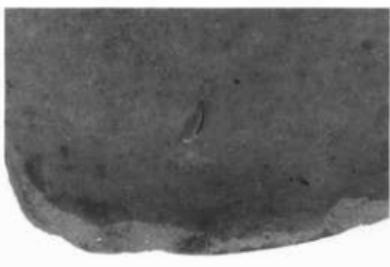
高部宮ノ前包含層-4 口縁部内面



高部宮ノ前包含層-1 底面



小塚ふちき 7-15 タタキ目



青馬前畑 7-3 内面

土器近接写真(高部宮ノ前遺跡、小塚ふちき遺跡、青馬前畑遺跡出土土器)

東 総 用 水

高部宮ノ前遺跡・今部カチ内遺跡

小座ふちき遺跡・青馬前畑遺跡

昭和59年12月20日 印刷

昭和59年12月25日 発行

発行 水資源開発公団東総用水建設所
千葉県香取郡東庄町笹川い4713番の11
電話 0478 (6) 1311(代)

財団法人 千葉県文化財センター
千葉県千葉市亥鼻1丁目3番13号
電話 0472 (25) 6478

印刷 有限会社 正文社
千葉県千葉市都町2丁目5番5号
電話 0472 (33) 2235
